流星のロックマン　プレアデスの絆

宮原悠馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流星のロックマン　プレアデスの絆

【Ｎコード】
Ｎ８７１９Ｌ

【作者名】
宮原悠馬

【あらすじ】
メテオＧでの激闘から４か月。スバルたちは６年生になり、平和な時を過ごしていた。しかし、そんな平和を打ち破るかの如く、スバルたちの前に新たな敵が迫る。その敵たちは、自分たちと同じ姿をしていて……？　ＦＭ星、ムー大陸、ディーラー。様々な者の様々な過去が複雑に絡み合い、一つの物語が動き出す。そして、
――そこに残るのは、破滅か、創生か。

0、孤独の始まり（前書き）

Start of solitude

0、孤独の始まり

現在から、４年前――
コダマタウンを駆ける1人の少年がいた。
その少年は自分の玄関のドアを開け、中に入った。

「お母さん、ただいま！ねぇ、今日学校でさ……」

しかし、少年は口を閉ざした。自分の母親がソファに座って顔を手で覆って泣いていたからだ。

「どうしたの？お母さん。ころんでけがしたの？」

「う……うぅ……」

「ねぇ、お母さん……」

「……あのね、今、お父さんの友達から電話があって……お父さんが乗った宇宙ステーションが見つからなくなちゃったんだって……」

……え？

「でも、お父さん、帰ってくるんでしょ？」

「・・・・・・」

母親は泣いて震えながら首を横に振った。

「え？帰ってこないの？帰ってくるって言ったじゃん！」

「ごめんね……でも、分からないの……帰ってこれるのか、こないのか……」

「うそだ！帰ってくるって言ったんだよ！？帰ってきたら、宇宙の話をしてくれるって言ったんだよ！？か……えって……う……くっ！！」

少年は泣きながらリビングから去り、自分の部屋に入ると、ベッドに顔をうずめた。

「うそだ……帰ってくるって言ったじゃないか！話聞かせてくれるっていったじゃないか！こ……こんなの……信じられないよ……！！」

それから3年後――

病院を飛ぶように走る少女がいた。

その少女は目指す病室の前に立つと、扉を開け、中に入った。

「ママ！」

そこには、病院の医師と、ベッドに横たわる女性がいた。

少女はベッドに駆け寄ると、女性の手を握りしめた。

「ママ、だいじょうぶ！？聞こえる！？」

「だいじょうぶ……聞こえてるわよ……。それより……ごめんね……」

言いながら女性は力なく笑った。

「なに謝ってるの!?謝らないでよ!」

「もっと……あなたの歌を……聞きたかった……」

消え入りそうな女性の声に、娘の目には涙が浮かぶ。

「何言ってるの!?まだまだ聞いてよ!わたし、もっといっぱい歌作るから!聞いてよ!」

「わたしは……いつでも空から見守ってるから……いつでも聞いてるから……」

「空からなんかじゃなくて、ここでわたしを見守ってよ!ここでわたしの歌を聞いてよ!お願い!」

「ごめんね……でも、あなたは1人じゃないから……。どこまでいっても1人じゃないから……」

「そんな……ママがいなかったらわたし1人ぼっちだよ!ママ、わたしを、1人に……しないで……!!」

「だいじょうぶ……きっと、また会えるから……」

「そんな、お別れみたいなこと、言わないで!行かないで――――

ピ――――――……

無機質な音が鳴り、ベッドの隣の機械の画面に表示されたギザギザした横線が一直線になった。その上には『0』の文字。

女性の手から力が抜けた。

「……ママ？どうしたの？なんで目を閉じてるの？起きてよ！もう一度しゃべってよ！ママ！」

しかし、その眼が、口が、開かれることは二度と無かった。

大勢の人がいた。全員が黒い服を着ている。そして、その少女もまた黒い服に身を包み、ただ一点を見つめている。その視線の先には、ベッドの上にいた、女性の写真……。周りには花が添えられている。

「・・・・・・」

少女はただ、その写真を見つめている。

それから数時間後、大勢の人は、それぞれの帰路についていた。少女は、そこからすぐ近くの公園のブランコに腰かけて、ぼんやり空を見上げている。

「……どうして……？」

「……ミソラ……」

声のした方を見ると、少女と同じ黒い服を着た、同じくらいの歳（とし）の女の子がいた。

「……スズカ……」

「……だいじょうぶ……？」

「・・・・・・」

「ごめんね、でも、あまり思い詰めちゃだめだよ？」

「……うん……」

「わたしも力になるから……」

「スズカ……ごめんね、今は1人にさせて……」

「……分かった。じゃあね……」

「うん……」

そのころ、コダマタウンの展望台。

「・・・・・・」

空を見上げる少年がいた。あのころから、身長は伸びたが、その心はまったく癒えていなかった。

「……父さん……」

少女も再び空を見上げた。

「……ママ……」

――この空の向こうにいるんだろうか？だとしたら、なんで、そんなところにいるの？戻って来てよ。自分をどうして1人にするの？なんでこんなに寂しい思いをしないといけないの？なぜ、自分は大切なものを失ったのだろう？こんな、誰かを失う悲しみはたくさんだ。それなら、最初から孤独の方がましだ。

――そう、孤独の方が。

2人の頬を、一筋の雫が伝う。それは、顎から垂れ落ちて、首から下げたペンダントに、膝に置いたギターに、当たってパチンとはじけた。

出会いは偶然、別れは必然。しかし、早すぎた別れは二人の出会いを必然にした。それを人は運命と呼ぶ。この、人々には語り継がれることのない運命の物語はすでにこのときに始まっていたのである。運命が、伝説が、物語が、静かに動き出す。

0、孤独の始まり（後書き）

前半の発言がだいぶおかしなことになってますが、これは小学2年生だから幼い物言いを心がけたのですが……やはり、変でしたね…

…

キャラクターファイル（前書き）

収録キャラクター
・星河スバル＆ウォーロック
・響ミソラ＆ハープ
・暁シドウ＆アシッド
・牛島ゴン太＆オックス
・ソロ＆ラプラス

キャラクターファイル

星河スバル
「キミに比べたら、ボクは弱いのかもしれない。みんなに支えられて、なんとかやっていけるだけの、１人じゃなんにもできない弱虫だ。だからこそ、何よりも大切にしたいその気持ちこそ、ボクの力だ！！」

身長：１４５？
体重：３９？
ウィザード：ウォーロック（ＡＭ星人）
趣味：天体観測・機械いじり
トレードマーク：赤い服、ビジライザー、流星ペンダント
尊敬する人：星河大吾
苦手なもの：ホラー系、高いところ、ニンジン
性格：優しい、控えめ、友情深い、鈍感、マニア（ウォーロック曰く）
出身地：コダマタウン
所属：コダマ小学校、サテラポリス遊撃隊、ルナルナ団
ブラザー：響ミソラ
　白金ルナ
　牛島ゴン太
　ケフェウス　（ブラザーバンドなし）
　最小院キザマロ
　木野マナブ
　浦方マモロウ
　ヨイリー
　暁シドウ
　光熱斗　（ブラザーバンドなし）

※結んだ順

ゲーム、および本作品の主人公。宇宙系、工学系のことが好き。４年前に父親が行方不明になり、心を閉ざしていたが、ウォーロックや響ミソラ、白金ルナなどの出会いと、身の回りに起こる事件を経験して明るい心を取り戻した。宇宙系が好きなため、自分に付きまとうルナを「衛星女」と形容したり、人ごみを見て「銀河みたいに人が集まってる」と発言したりなど、セリフにも宇宙にまつわる単語を使うことがある。いつも身につけているビジライザーは電波が見える代物（しろもの）。元々は機能がダウンしていたが、ウォーロックが接触したことにより本来の機能を取り戻した。同じくいつも身につけているペンダントは、ブラザーバンドなどの絆の力を感知すると、光る。ビジライザー、ペンダントは共に星河大吾のもので、大吾とＡＭ三賢者がコンタクトをとるために使われていた。ニンジンが嫌い。大吾はニンジンが好きだったらしいが、大吾のお気に入りメニューの「ニンジンのグラタン」を今晩のおかずにするとあかねに言われた時も嫌そうにしていた。電波変換でロックマンになる。

シューティングスターロックマン
コード：００３
技・能力：ロックバスター
　　ウォーロックアタック
　　シールド
　　変身、各変身による必殺技

これまで3度に渡って地球を救ったヒーローである。ただ、本人はあまり自覚していない。絆を力にすることにより、幾多の敵を倒してきた。ＦＭ星人侵略の際にはＡＭ三賢者からの星の試練を受け、スターフォースを、ドクター・オリヒメの地球支配計画の際にはオーパーツを呑み込んでトライブオンを、ディーラーのメテオＧによる地球支配計画の際にはノイズ制御プログラムを暁シドウからもらい、ノイズチェンジ・ファイナライズを、という具合に、さまざま

な変身を身につけてきている。左腕には端末がトランサー、スターキャリアーの時はウォーロックが宿っていたが、ハンターに変わると同時に無くなっている。ちなみに、ロックマンのバイザーはビジライザーが、胸のシューティングスターエンブレムはペンダントが、それぞれ電波変換したもの。

ウォーロック
オペレーター：星河スバル
ボディカラー：ブルー
性格：乱暴、ガサツ、好戦的
元ＡＭ星人。ＦＭ星育ち。携帯端末のフォーマットにより星河スバルのウィザードになる。星河大吾と宇宙ステーション「きずな」で出会い、彼を助けるために彼を電波化した。その後、地球に降り立ち、スバルと出会う。スバルと出会いたてのころは「まぁ、オレには関係ねぇがな」など、無責任な発言が目立ったが、彼もまた成長し、他人を気遣うような発言も増えてきた。「ウォーロック」と呼ばれる他にスバルには「ロック」、ミソラには「ロックくん」と呼ばれている。しかし、ヨイリーには「ロックちゃん」と呼ばれてお気に召さない様子である。また、熱斗には「腕ナビ」と呼ばれ、その度に怒っていた。固有の技はビーストスイング、ビーストブレス。

響ミソラ
「わたしの歌を聴いてくれる、みんなのために……わたしに歌を歌わせてくれている、この世界のために戦いたい……！」

身長：１４３？

体重：ヒミツ（本人談）
ウィザード：ハープ（こと座のＦＭ星人）
誕生日：８月２日（ハープの日。本人談）
趣味：歌うこと、料理（本人曰く味は微妙）
トレードマーク：ピンクのパーカー付きの服、緑の短パン、形見のギター
苦手なもの：足がいっぱいある虫
好きな食べ物：とろけるクレープ、パフェ
好きなＴＶ：ＴＫミュージック
性格：活発、元気、優しい、一途
出身地：ベイサイドシティ
所属：小学校（名前不明）、サテラポリス遊撃隊
ブラザー：星河スバル
　ヨイリー
　暁シドウ
（スズカ？）
（母親？）

ゲーム、および本作のヒロイン。１年と３カ月前に母親を亡くし、スバルと同じく心を閉ざし、歌うことを拒んでいたが、スバルと出会い、改心。スバルのブラザー第一号。逆にミソラも、スバルがミソラのブラザー第一号であると思われる。過去に二回、「買い物」という建前の上でスバルをデートに誘っている。国民的アイドルであり、歌手活動だけでなく、グラビア活動、ドラマ出演など、活躍の場も多岐に渡る。いつも持ち歩いている黄色いギターは母親に歌手のオーディションに出る際に買ってもらった、形見とも言えるもの。実はこのギターにはトランサーの機能があり、操作は弦を弾いて行う。ドクター・オリヒメの側近、エンプティーによってロックマンの敵にされたときもあったが、その事件によって、スバルとさらなる強い絆で結ばれている。電波変換でハープ・ノートになる。

ハープ・ノート
コード：００４
技・能力：音波を扱う
　ショックノート
　マシンガンストリング
　パルスソング
ロックマンと共に闘ってきた、彼を支える存在。体の至るところに音楽を操る機能がちりばめられている。電波変換すると、体重が０ｋｇになる。これは自身のスキルが音楽によるもので、重さによる攻撃を必要としないため、回避能力を優先させた結果である他、ハープのミソラに対する気遣いとも考えられる。ちなみに、ハープ・ノートの持つ先端にハープが宿ったギター、正式名称「フィーチャリングハープギター」はロックマンのバイザーやエンブレム同様にギターが電波変換したものである。

ハープ
オペレーター：響ミソラ
ボディカラー：水色
性格：しっかり者、小悪魔
元こと座のＦＭ星人。ウォーロックと同じように携帯端末のフォーマットにより響ミソラのウィザードになる。かつてはＦＭ王の命令でスバル、ウォーロックらと敵対し、ミソラを利用しようとしたこともあったが、彼らに負けてからは改心。ウォーロックをからかうような発言が多く、ケンカもたまにする。ウォーロックには苦手意識を向けられている。改心後はミソラの良き理解者、親友としてやっている。「ポロロン」が口癖。

暁シドウ
「生きるってことは、闘うってことだ。いろんな困難に負けないようにくじけないように、がむしゃらに闘っていく……。その戦いの中で、無力な人間は、優しさを知り、強さを知り、チカラを手に入れて行くんだ」

身長：１８６ｃｍ
体重：７３ｋｇ
ウィザード：アシッド（人工電波生命体）
トレードマーク：白いジャケット
好きな食べ物：うまい棒
性格：陽気、気さく、明るい
所属：サテラポリス、及び遊撃隊（元ディーラー）
ブラザー：ヨイリー
　星河スバル
　響ミソラ
　牛島ゴン太
サテラポリスのエース。元ディーラー。また、遊撃隊の隊長でもある。普段は陽気な性格であるが、変な発言も多い。そのせいかスバル、ミソラからの第一印象は「変わった人」。しかし、緊急時になると頼れる立ち振る舞いになる。いつもうまい棒を食べていて、サテラポリスのシドウの机の上もうまい棒がいっぱいである。ディーラーのアジトに乗り込んだ際、追い詰められたジョーカーが自爆しようとし、それを阻止すべく爆発エネルギーを吸い取り、ジョーカーと共に爆発して消息を絶っていた。電波変換でアシッド・エースになる。

アシッド・エース
コード：００１
技・能力：ロックオンソード

ウィングブレード
オメガレーザー
ブラスター（バトルカードによる攻撃）
自称、ヒーロー。Ｐｒｏｊｅｃｔ－ＴＣにおける人工的な電波変換における初の成功例である。ただ、人工的な電波変換のため不完全で肉体への負荷が大きい。人間の時との体型の変化を少なくすることで電波変換時の負担を軽減しているものの、それでも肉体への負担は大きく、シドウの強じんさでなんとか電波変換している。頭部にあるアシッドウェーブアナライザーによって敵の情報収集・解析ができ、それを用いた情報戦を得意とする。暴走すると、体が黒くなって破壊衝動に支配される。

アシッド
オペレーター：暁シドウ
ボディカラー：白
性格：真面目、冷静
人工電波生命体で、高い演算能力と素早さを誇る。人間と電波変換するためにつくられた。ウォーロックとはケンカが絶えない。（主にウォーロックが勝手にケンカ腰になっているだけであるが）スピカモールで行われた大会で参加したウィザードを一気に相手をして一瞬で倒してしまうほどの実力がある。固有の技はギルティ・スラッシュ、サテラサーチング。

ソロ
「絆は、オレが最も憎むべき敵だ。絆を否定することが、オレの存在を証明することになる！！」

身長：１５０ｃｍ
体重：４０ｋｇ
ウィザード：ラプラス
トレードマーク：ムーの紋章
嫌いなもの：絆
性格：冷静、冷酷
ムー大陸の人間の唯一の生き残りで、ムーの末裔。そのムーの血のお陰で物心がついたときから電波が裸眼で見る事ができ、電波体に頼らずに１人で電波変換できる。絆を嫌い、否定している。そのため、絆のために戦うスバル、そしてロックマンと幾度となく戦ってきた。ムー大陸を独占しようとするオリヒメと敵対したり、ムーの技術を悪用するディーラーに単身で挑んだり、ムーメタルを持つシリウスを狙ったりと、ソロの起こす行動には常にムーが関係している。電波変換せずとも、ラプラスを刀に変える事により、サテラポリスのバトルウィザード数体を一瞬にして倒してしまうほどの戦闘能力がある。電波変換でブライになる。

ブライ
コード：００２
技・能力：ブライアーツ
　ブライバースト
　ブライナックル
　ブライソード
　ブライスラッシュ
　ブライブレイク
　ラプラスソード
　グラウンドブレイクソード
　クロスロードブライブレイク
　電波障壁

ロックマンのライバル。剣の扱いに長けるが、闘気を使った打撃なども得意。かつてはブライソードという自身で召喚したソードを使っていたが、ウィザードのラプラスを所有してからはラプラスが変形したラプラスソードを使っている。また、エンプティーに薦められて受け入れた『孤高の証』で、『電波障壁』という孤高の力を具現化したともいえる力を手に入れている。

ラプラス
オペレーター：ソロ
ボディカラー：グレー
性格：無口（知能があるのかどうかも判別不能）
謎のウィザード。どこから来たのか、知能があるのかなど、一切不明である。ソロやブライが戦闘に入ると、変形して流線型の刀、ラプラスソードになる。ほとんどしゃべらないが、ごく稀に声というより音に近いものを発することはある。

牛島ゴン太
ウィザード：オックス（おうし座のＦＭ星人）
趣味：ゲーム（牛丼クエスト）、食べること
トレードマーク：オレンジのヘッドギア、フォークとナイフのマーク
好きな食べ物：牛丼、その他肉全般
好きなＴＶ：グルメタウンＴＶ
夢：世界中の牛肉を食いつくすこと
性格：食いしん坊、乱暴、実は繊細
出身地：コダマタウン
所属：コダマ小学校、サテラポリス遊撃隊、ルナルナ団
ブラザー：白金ルナ
　最小院キザマロ

星河スバル
滑田アイ

スバルの同級生であり、ルナの腰巾着。遊撃隊の一員。いつも食べることを考えていて、起こす行動も食べ物が絡んでいることも多い。いつも威張っているが、ルナとのブラザーを切られたら昔の嫌われ者のころに戻ってしまうのではないかと思い、恐れている。まだスバルとウォーロックが出会いたてのころ、ＦＭ星人のオックスにその心の隙間をつけいれられ、オックス・ファイアとなり暴れてしまっていた。さらにグルメタウンで行われた大食い大会の最中や、ミソラ主演のドラマの撮影にエキストラとして出演中に、それぞれハイド、ジャックの細工でオックス・ファイアとなって暴れてしまっている。後者の騒動の後、オックスが謝罪の意味も込めてウィザードとなる。カミカクシの穴に呑まれた時はナンスカ村に落とされた際に頭を打って記憶を失い、「空から落ちてきたムー大陸の使者ゴンターガ様」とあがめられていた。ミソラのファンであるが、ヤエバリゾートに行った際には滑田アイと出会い、吹雪の中で倒れたアイを助けに行くほどアイを想っており、その後のパーソナルページを見るとブラザーバンドを結んでいることが確認できる。ちなみに、おねしょをしてしまうらしい。電波変換でオックス・ファイアになる。

オックス・ファイア
コード：００５
身長：３１０ｃｍ
体重：２８８ｋｇ
技・能力：アンガーパンチ
　ファイアブレス
　オックスタックル
　バーニングパンチ
　アンガーラッシュ

前述しているように、かつては事あるごとに、ゴン太がオックスに取りつかれたり、残留電波が暴走して本人の意思に関係なく電波変換していたが、オックスがゴン太のウィザードになった後は本人の意思で電波変換できるようになった。しかし、ゴン太とオックス・ファイアの体格が大きく異なるため、電波変換が安定せず、本人の意思で電波変換すること、また電波変換の状態を維持することは難しい。腹にはファイアタンクと呼ばれる、炎を出すためのエネルギーを蓄えるタンクがあるが、この中にはゴン太の状態で食べたものが主なエネルギーとなっている可能性が高い。

オックス
オペレーター：牛島ゴン太
ボディカラー：オレンジ
性格：好戦的
元おうし座のＦＭ星人。ウォーロックの持つアンドロメダの鍵を取り返せ、というＦＭ王の命を受け、地球でゴン太に取り憑き、ロックマンを襲った。その後、ゴン太の中に残留電波として残り、２回オックス・ファイアとして復活した。２回目の、ノイズドカードを使った電波変換の際に再構成され、今までの謝罪の意味でゴン太のウィザードになった。「ブロロロ・・・」が口癖。また、オペレーターの影響で牛丼好きになった。

キャラクターファイル（後書き）

ウォーロックのところで固有の技にビーストブレスが入っているのは、コピーができるんだから本物もできるだろ、と思って入れました。

1、招かれざる訪問者（前書き）

？、

Ｖｉｓｉｔｏｒ　ｎｏｔ　ｉｎｖｉｔｅｄ

1、招かれざる訪問者

ジリリリリ！

目覚まし時計がやかましく鳴った。しばらくはそのまま音をさみしそうに出し続けていたが、突然手が飛んできて、バン！と大きな音を立てて平手打ちをくらい、沈黙した。目覚まし時計に平手打ちをした腕をたどっていくと、そこには枕に顔をうずめた少年が横たわっていた。

『オイ、スバル。毎朝そんな強く叩いてたらそれ、壊れちまうぜ？』

「う～ん……」

『オイ！聞いてんのか、スバル！』

「ふぁあああ……」

スバルはあくびをしながら体を起こした。

「あ、おはよ、ロック」

眠そうに挨拶をするスバル。

『「あ、おはよ」じゃねえ！質問に答えろ！』

「『聞いてんのか』って質問のことなら、その答えは、『聞いてなかったよ』」

『素直に自分の質問に答えられて、腹が立ったのは初めてだぜ……。まあ、いい。で、目覚まし時計、毎朝そんなことしてたら、壊れちまうぜ？』

「そんなこと言うならハンターＶＧのアラーム機能使わせてよ」

『るせえ！このハンターのアラーム、どれほど中の電脳世界に響くのか、分かってんのか！』

「はいはい……」

『スバル、てめえ！』

スバルはハンターＶＧの中で喚いているウォーロックをよそに、ベッドの階段を下り、顔を洗うため部屋を出ようとドアに向かった。

「あ、おはよ、スバルくん」

「おはよ、ミソラちゃん」

スバルはミソラにあいさつをして、ドアノブに手をかけた。

「……ん？」

後ろを振り向く。ミソラがうれしそうに笑いかけていた。

「えええええええ！？」

スバルは腕を広げながら背中からドアにぶつかった。

「ミ、ミ、ミソラちゃん!?なんでいるの!?」

当のミソラは面白そうにクスクス笑っている。正式には今のミソラはハープ・ノートだが。

「スバルくん、ノリ突っ込みうまくなったねー」

《厳密にはノリ突っ込みではなかったな……》とウィザード・オンをしてベットの柵によりかかりながら、ウォーロックは思った。

「ミソラちゃん!質問に答えて!」

スバルは、さっきウォーロックに言われたことと全く同じことを言ったことには気づかなかった。

「いやー、スバルくんを驚かすついでに起こしてあげようと思ったんだけど目覚まし鳴っちゃってさー」

『まあ、スバル君を驚かす目的は達成されたわよ』

ハープ・ノートの隣にハープがウィザード・オンをして楽しそうに話しかけた。

「そうだね!ハープ!」

「もー、ミソラちゃんったら……。でも、ミソラちゃんに会うのもひさしぶりだね!」

スバルは寝起きドッキリを受けた緊張が解けたのか、親しげに話しかけた。

「ホントだね！……えっと、クロックマンとの一件が解決してこの時代に戻ってきて以来だから……」

『1か月ぶりよ。ミソラ』

いつもハンターの中にいてミソラのスケジュールを熟知しているハープが答えた。それを聞くと、ハープ・ノートは目を見開いた。

「もうそんなに経つの！？最近忙しかったから時間の感覚ないよ……」

「やっぱり忙しいんだねー、ミソラちゃんは。・・・ってあれ？いまは？」

「ああ、今はほら、電波変換してきたから。」

『人を驚かすために電波変換使うなよ……』

『ギロリ！』

『うっ！』

ハープの鋭い眼光に、ウォーロックは畏縮した。

《ハープはハープで凄みが増してきてないか・・・？》

ウォーロックはその疑問は飲み込むことにしたようだ。余計なことは言うまいとしたようである。

それから、スバルとハープノートはいろいろな話をした。ミソラの仕事の話、スバルの学校での出来事などなど。

スバルは久しぶりに会ったミソラとの会話を楽しんでいた。・・・が。

「……あ！」

「どうしたの、ミソラちゃん？」

「あ～、えっと……、その～……」

ハープノートはバツが悪そうに、急にもじもじし始めた。

「えっと、ごめんね？急におしかけて、勝手にお話して盛り上がって、」

「え？いいよ、そんなの、気にしてないから」

「……こんな時間になっちゃって。」

一瞬の沈黙。

「ロック、今何時？」

『７時５０分』

・・・

「マジ？」

『マジ』

・・・

「やばいっ！！！！」

スバルは高速で顔を洗い、歯を磨いた。そして部屋に戻ってくると着替えようとした。

「スバルくんっ、ストップッ！！」

スバルは腕を交差させながらパジャマの腰のところに手をかけたままの姿勢で止まり、ハープノートの方に顔を向けた。ハープノートは恥ずかしそうに顔を後ろに向け、手で顔を覆っていた。少しだけ見える頬が赤かった。

「ごめん、ミソラちゃん……」

「いいの、ずっとここに居るわたしも悪いから……。もう帰るね……。」

「……分かった。またいつか会おうね！」

ハープノートはスバルの予想を裏切り、首を横に振った。

「……ううん、『いつか』じゃなくて、またすぐ会えると思うよ。」

「えっ、それってどういう……」

スバルが言い切るまえに、ハープノートの輪郭が揺らぎ、除々に色が薄くなって消えた。

「『またすぐ会える』ってどういうことだろう、ロック？」

しかし、ウォーロックは答えなかった。

「ロック？」

スバルはハンターＶＧを手に取り、画面を見た。画面の向こうでウォーロックがにやにやしながらハンターＶＧ内の時計を両手で持ってこちらに向けていた。

８時。

・
・
・

「○：@＃＆＄％，＊○◎▽？！！！！！！」

スバルは、もはや人間の言葉ではない言語を叫んだ。

1、招かれざる訪問者（後書き）

それにしても、他の方の小説を見てると、異様にスバルが遅刻魔になっているのですが、なんででしょうか。前作の熱斗くんの影響でしょうか。ゲームでは予定のギリギリというのはありましたが、遅刻したことは一回もなかったのに・・・。

まぁ、それはそれで面白いんですけどね。そういう僕の小説でも遅刻寸前ですしね・・・。

2、相棒の予感（前書き）

？、

The mate's presentiment

2、相棒の予感

スバルの学校は、８時半以降の登校が遅刻となる。普段は７時１５分に起き、朝の準備（歯磨き、着替え等）を済ませ、７時半から朝食、３０分で食べて８時に出発し１５分歩いて８時１５分着、１５分の余裕があるはずだった。しかし、今朝はミソラとの会話のせいで朝の準備しか済ませずに８時を迎えていた。

「つまり、朝食に３０分かけられないわけで、歩く暇もないわけで、それはつまり……」

スバルは着替えながらなんとか学校に間に合う算段を付けていた。しかし、パニックでさっきから計算が同じ所でぐるぐる回っている。

「３０分で食べるわけにはいかなくて、」

『おちつけ、スバル！何週目だ、その思考！？』

「３０分遅れておちついてられるかー！！」

『まあ、今頃いつもなら「行ってきます」を言ってる時間だからな……』

のんきにしゃべっているウォーロックをよそに、スバルはドアを壊れそうなくらい強く開け、（『今日のスバルはえらく物に攻撃的だな……』とウォーロックは思った）階段を二段飛ばしで駆け下り、最後の五段は飛び降りて、リビングのドアを体当たりのように開けて入った。

「おはよう、スバル」

「おはよう、父さん、母さん！！」

『オハヨウ、大吾、オフクロ！』

「ロックくんも、おはよう！」

「おはよう、ウォーロック！」

ウォーロックとスバルの両親があいさつを交わしているときに、スバルはもうすでに朝食を掻き込んでいた。

「スバル、もっとゆっくり食べなさい」

「かあはん、ほんあひあないよ！（そんな暇ないよ！）」

スバルは物が口の中に入ったまましゃべったのでまともな発音ができなかった。

「昨日夜遅くまで展望台に上がってたからでしょ！」

「ひがうよ、ほうひゃなふて……！」

ここでスバルは言葉を切った。

（い、言えない……。ミソラちゃんのこと……。）

国民的トップアイドルがいたから遅れました、なんて言えるわけがない。

「……？」

幸い、あかねには「ほうひゃなふて（そうじゃなくて）」をうまく翻訳することはできなかったらしい。

「とにかく、早く食べなさい」

「は～い」

スバルはもくもくと朝食を食べた。

「そういえば、さっきルナちゃん達がきたわよ」

スバルの手が止まった。

「なんでも、遅いから先に行く、ですって。かなりご立腹だったわよ～」

スバルの手が震え始めた。

『ほう、そりゃ、学校にいったら、なんて言われるかな』

スバルの顔が青白くなった。

「……」

学校に行く→委員長に会う→委員長に睨まれる→委員長に・・・

バクバクバク！！

スバルの朝食を食べる手が急加速した。

『……そんなに怒られたくないのかよ……』

ウォーロックが若干呆れ気味に言った。

ガタッ！！

スバルは最後のパンの一かけらを飲み込んで勢いよく立ちあがった。

「ごちそうさまってきます！！」

二つの挨拶が混ざった謎の発言を残して、スバルはものすごいスピードで玄関に向かって走り出した。

「行ってらっしゃ～い！」

「気をつけて行ってこいよ～」

あかねと大吾の言葉を背に、スバルは学校に向かって走り出した。

スバルは自分が今まで出したこともないようなスピードで走っていた。

「委員長に怒られる委員長に怒られる委員長に怒られるぅっ！」

『……速え～（汗）』

ウォーロックはスバルの走る速さに唖然とした。

『人間、やろうと思えば何でもできるもんだな……。でも、いい

のかこいつ？注目の的になってるぜ……』

確かに、道行く人はスバルの大声に振り向き、白い目で見ていた。
だが、スバルは気づかない。
ちなみに、「星河スバル」の名は大吾の、世界中のハンターＶＧへの通信によって、知らない人はいないほどになっていた。しかし、星河スバルの顔は知らない人がほとんどで、「星河スバル」＝ロックマンということを知っていても顔と名前が一致している人は相変わらず世界でほんの一握りで、周りのスバルに対する対応は今までと大して変わっていなかった。知っているのは、学校のクラスメイト、家族、ＷＡＸＡのメンバーくらいか。

『まあ、間に合いそうだからいいか……。それより』

ウォーロックは振り返り空を見上げた。

『この周波数は……。何故だ……。あいつが近くに居やがる……！何故あいつが……！？』

しかし、空は晴れ渡り、平和そのものだった。

『嫌な……予感がする……！』

そうつぶやくと、ウォーロックはスバルを追った。

2、相棒の予感（後書き）

み、短い・・・プロローグに当たる0話目をぬかしても、2話でまだ登校すらしてません。展開遅いな・・・。が・・・がんばります

3、日常と転入（前書き）

?、

Daily life and moving in

3、日常と転入

スバルは学校に着くと廊下を駆け抜け、急いでエレベーターに飛び込み、ドアが開くと競馬の馬のように飛び出し、教室へ飛び込んだ。教室のドアが壊れそうなくらい強い音で開かれたので、教室にいた全生徒の視線が集まった。

「すみません、遅れました！」

「……スバル君」

スバルの名を呼んだのはクインティアだ。クインティアとジャックはあの事件の終焉以来、再びコダマ小学校の教育実習生と生徒として帰ってきていた。

「本当にすみません！」

「……スバル君、今まだ１５分よ」

一瞬、空気が固まった。

「……え？」

「だから、まだ１５分前なの……」

スバルは時計を見た。アナログ時計は、確かにまだ１５分を指していた。

スバルは時計を見る精神的余裕もなかったため、気づいていなかったのだが、朝食をいつもの１／３の１０分で平らげ、５分で登校す

るという、奇跡を打ち立てていた。
スバルはその場にへたれこんだ。

「な、なんだ……。でも、よかった～」

「よ・く・な・い・わ・よ」

その言葉とともに、背後から殺気立ったオーラが感じられた。このオーラの持ち主は一人しかいない。
スバルはものすごい冷や汗をかきながら、ギギギときしむ首をゆっくり動かして背後を振り返った。
そこにはどす黒いオーラをまとい、怒りで目を紅く光らせた委員長がいた。

「スバル君」

その声の冷たさにスバルは背筋が凍りついた。

「はいいいい……」

あと一歩で「ひいいいい……」になりそうなのをやっとのことで修正して返事をした。

「8時の時点で、朝食も済ませていないってどういうことよ！」

「いや、それはミ……」

「ミ……？」

危ない。もう少しで公開処刑になるところだった。どう考えても、

「朝起きたら響ミソラが部屋にいた」なんて言ったら委員長だけでなくクラス中の男子に命を狙われる。母さんに言う数十倍問題だ。

「『ミ』ってなに！？」

「ミ……ミ……」

えっと……なんてこじつけよう……。

「ミ、ミんなと違って、僕は昨日夜ふかししちゃったから……」

我ながら、即興で思いついた割にはうまく文章が作れた、と思った。

「ゴン太みたいな理由ね……。まあ、いいわ。結局、いつもと同じ１５分に学校に着いたんだから。それよりも、問題なのはゴン太のほうよ。また、遅刻するのかしら。ルナルナ団の一員として、もっとしっかりしてほしいものだわね……」

委員長は、ゴン太の文句を言いながら行ってしまった。スバルは、安心するとともに、なにやら責任をゴン太に転嫁してしまったみたいで後ろめたさもあったが、ゴン太の無事を祈って、クラスの会話に加わった。

「やあ、おはよう、キザマロ！」

「おはようです、スバル君！……なるべく委員長を怒らせないように行動してくださいよ！」

「わかってるよ、今日は特別だったんだ」

「おはよう、スバル君」

「あ、おはよう、ツカサ君！」

ツカサは、今まで学校を休んでヒカルの封印の旅に出かけていたが、一週間前に帰ってきて、学校にも再び登校するようになっていた。（転校したことになっていたので、コダマ小学校にまた転校という形で戻ってきた）ただ、ヒカルは封印せず、和解という形で事なきを得たらしい。ヒカルはかつてよりだいぶおとなしくマシな性格になっていた。

「あいさつなんていいから俺らと勝負しろ、スバル！」

……好戦的なのは相変わらずだが。

「……えっと、今のはヒカル君？」

「そうだよ。……ヒカル、勝手に出てこないでよ、ややこしいことになるじゃないか！」

「いいじゃねえか、俺はとにかくバトりたいんだ！」

同じ口が違うことを言う。（和解したとはいえ、大変だな……）とスバルは思った。

『俺はジェミニ・スパークと戦うっていうのは全然ウェルカムだけどな！』

いつの間にかハンターＶＧに戻っていたウォーロックが言うと、

『お前じゃ相手にならん……！』

とジェミニが切り返した。

ちなみに、ジェミニ、コーヴァス、ヴァルゴはオックス、キグナスと同じ要領、つまりはかつて電波変換したことのある人間のハンターＶＧの中でウィザードとして再構成されていた。メテオＧが消滅した時にその中にあったノイズが彼らのハンターＶＧに作用したらしい。

『んだと、ジェミニ！やんのか、コラ！』

『相手にならんといっている。』

『俺らに三連敗してるお前に言われたくねーよ！』

三連敗、とは一回目はゴミ処理場の電脳で戦った時、二回目は復活後に人口衛星「きずな」の一部分を見つけたスバルの前に現れた時、三回目はナンスカ遺跡でヒカルの封印を手伝うためにスバルと戦った時、である。ジェミニが反論しようと口を開いたとき、始業のチャイムが鳴った。

『ちい……』と言い残してジェミニはハンターに入った。

「喧嘩しちゃだめだよ、ジェミニ！」と言いながらツカサは自分の席に着いた。

『ははは、言われてやんの！』

「ロック、君もだよ！」

スバルもそう言いながら席に着いた。

『なんだよ、スバル！喧嘩売ってきたのは向こうだぜ！？』

「じゃあ、買っちゃだめ」

『ちっ、わかったよ』

ウォーロックがそう言うと同時に育田先生が教室に入ってきた。

「起立！」と言うルナの言葉に合わせて、生徒たちはガタガタと音を立てて立ちあがり、「おはようございまーす！」と言いながら礼をして再び着席した。

「えーっと、それじゃ、まず出席を取る前に転校生を紹介する！」

一斉に教室ががやがやとにぎわった。しばらくみんながうるさくしゃべっていたが、

「それじゃ、はいって！」

という先生の言葉が聞こえると一気に静まりかえった。

『やっぱり妙だ……』

とたんにスバルはハンターＶＧを取り出し、ひそひそ声でしゃべった。

「ちょっと、ロック！？こんな時にしゃべらないでよ！……てゆーか、何が妙なの？」

『いつまでたってもあいつの気配が遠ざからないと思っていたら、また近づいてきやがった』

「あいつって？」

教室のドアが開いた。

『ハープだ』

「……へ？」

ピンクの服を着た少女が入ってきた。生徒は驚きのあまり、誰も声が出なかった。

「まあ、みんなもう知っていると思うが、一応自己紹介して」

『嫌な予感、的中しちまったみてえだな……』

ウォーロックは転校生の少女が背中に背負ったギターの先端についている小さな丸いディスプレイをにらみつけながら言った。

少女は背中で腕を組んでにっこりと笑いながらいった。

「響ミソラです！よろしくおねがいします！」

「ミ、ミ、ミソラちゃんんんん！？」

スバルの驚きの声にミソラは嬉しそうに手を振って応えた。

3、日常と転入（後書き）

ベタだ・・・ベタすぎる・・・あんまりだ・・・。いやね、やっぱりこうしたほうが書いてて楽しいし、話も作りやすいんですよ。許して。

4、言葉の裏の心（前書き）

？、

Mind of back of word

4、言葉の裏の心

「よろしくおねがいします」といった後も、ミソラの自己紹介は続いた。今更誰もが知るアイドルの自己紹介をしてもしょうがないが、一応1人の転校生としてそこはやっておくべきなのだろう。

「じゃあ、響の席は……星河の隣が空いてるな、そこに座ってくれ。」

主人公のクラスに転校生が来て、席が主人公の隣になる。ベタな展開である。

いや、転校そのものがベタな展開か。

ミソラが席に着くとさっそく一時限目の授業があり、休み時間になった。

「スバルくん、改めてよろしくね！」

「！！！」

ルナ達はミソラがスバルを「スバルくん」と呼ぶのを聞きなれているが、仮にも日本のトップアイドルが「星河スバル」が誰なのかを知っているだけでも驚きなのに、下の名前で、それも親しげに話しかけたのだから、その反響はすごい。

すぐにスバルとミソラの関係についてざわざわと騒がしくなった。

が、スバルはそれにも気付かずにあいさつを返した。

「こちらこそ、よろしく。朝言ってた、『またすぐ会える』ってこのことだったんだね」

『朝』ってなに!??
クラスのざわめきが大きくなった。

「そう、ほんとはそれがメインの要件だったんだけど、驚かそうと思って伏せたの」

「1日に2回も驚かそうとしないでよ……」

「まだあと2回あるよ。おたのしみに☆」

「……」

自分は次はどんなことされるのだろう、と思うスバルであった。

「……でも、本当に朝はごめんね?遅れちゃった?」

「いいよ。ボクも久しぶりに2人で話せて楽しかったし、結局間に合ったし」

「あ、間に合ったんだ?よかった~、遅刻したらわたしのせいだもんね」

ミソラは安堵の息をもらした。

『そう思うなら最初っから来なきゃいいじゃねぇか』

ウォーロックが何気に酷い事を言った。

「うぅ……コダマ小学校に転校するってなったらクラスに紹介される前にスバルくんに会っておきたくなって、つい……」

ミソラはうつむいてしまった。

『ロック、あやまりなさい！』

『……チッ、分かったよ、悪かった』

「そ、そういえばミソラちゃん、家はどこなの？」

スバルはこの暗いムードを脱するために話題を変えた。

「……え？ああ、ハートレスさんの家に泊めてもらうことになったの」

ミソラは顔を上げ、気持ちを切り替えて言った。

「そっか、ハートレスさんの……」

「……」

「……」

「……ってそれ、うちの隣じゃん！」

「そうなの！明日からは毎日起こしてあげるね？……あ、ロックくん、冗談だよ。そんな目をしないで！」

ハートレスはメテオGの事件の終息以来、あかねの推薦で、スバル家の隣に一軒家を建てて住んでいた。ちなみに、ジャックとクインティアも、そこに住んでいる。

ハートレスさん、ジャック、クインティア先生、ミソラちゃん。
元ディーラーの幹部達と、日本のトップアイドル。
スバルは、どうみてもミソラちゃんだけ浮いている気がする、と思った。
まあ、人なつっこい性格のミソラちゃんのことだ。なんとかやっていくだろう。

「……スバルくん？どうしたの？わたしが隣の家に住むの、嫌だった？」

「そんなことないよ！いつでも会えて、すごくうれしい！」

「そう？よかった！」

「ところで、これって3回目？」

「なにが？……あ、そのこと！うん、そうだよ！」

「あと一回か……。本当に、何されるんだろ」

「でも、残念だな～」

「何が？」

「わたしが隣に住むって話、もうちょっと引っ張ろうと思ったのに、スバルくんの質問であっさりばらすことになっちゃったから。うーん、まあいいや。最後のひとつはとっておきだから。たのしみにしててね」

聞けば聞くほど、最後の一つへの期待と不安は膨らむばかりだった。

『ところで、なんでこっちに来たんだ?』

「だって、こっちにはスバルくん達がいるし、わたしだけベイサイドシティっていうのもさみしいし……」

『そんなこったとおもったぜ』

「ねえ、ロック、さっきからなんか不満そうだけど、ミソラちゃんのこと嫌いだっけ?」

『ミソラは別にいいけど、何度もいうが、女（と書いてハープと読む）が苦手なんだよ!朝だって、ミソラがこいつを連れてきたせいで、肩身狭い思いだったぜ……』

『ひどい言われようね……。いいじゃないの、仲良くしましょうよ』

『毎日会うんじゃ、そうするしかねぇみてーだな……』

ウォーロックが悔しそうに言う。

ピピピピピピピ!

メールの着信音が会話を妨げて鳴り響いた。スバルのハンターＶＧだった。

『オイ、スバル。誰からなんだ?』

「ヨイリー博士からだ!『伝えたいことがいくつかあるの。放課後、

遊撃隊のメンバーとクラスメイトで電波変換ができる子をつれて、ＷＡＸＡまできてちょうだい。』だって！」

『遊撃隊っていうと、スバルとミソラとゴン太のことだよな……。って、ゴン太は？』

「ゴン太なら遅刻よ」

背筋も凍るほどの冷たい声がした。振り返ると、言わずもがな。ルナだった。

気が付くとさっきのメールの着信音に反応したのか、ルナたちが集まっていた。

『お……おう、そうか……』

（ウォーロック、今は委員長の前でゴン太くんのことはしゃべっちゃだめですよ）

（わ、悪い、キザマロ）

委員長に聞こえないよう、ひそひそとキザマロとウォーロックはしゃべった。

「あ、あと、クラスメイトで電波変換できる人って、ツカサくんとジャックのことかな？」

スバルがあわてて議題を戻す。

「クラスメイト……ではないが、姉ちゃんも入るんじゃねえか？」

と、ジャック。

「そうだね、じゃ、その6人か。……って、ジャック!?いたの!?」

「ひでーな……おまえが登校する前からいたぜ?」

「いや、そうじゃなくて、会話の輪の中にいたの、っていうこと」

「だから、この話が始まった時からいたじゃねぇか!」

「あー、ごめん、気付かなかった。」

「ったく……」

「ええと、話を戻して……わたしたちもいってもいい?」

ルナが遠慮気味に聞く。

「まあ、ルナちゃんとキザマロ君なら、いいんじゃない?」

ミソラが元気に言った。

「でも、委員長って生徒会長として忙しいんじゃないの?」

「おあいにくさま、大丈夫よ。それに、いくら生徒会長とはいえ、毎日仕事があるわけじゃないわ」

「分かったよ。じゃあ、その8人か……。でも、ちょうどよかった。ヨイリー博士にはお礼をいわなきゃって思ってたから」

「何のお礼なの？」

ミソラが興味津々で聞いた。

『大吾のことだろ？』

「うん。ボクの父さんが生き残るために、ロックが父さんを電波体にしたことはみんな知ってるよね？」

みんながうなずく。

『生き残るためには便利だった電波の体も、大吾が地球に戻って来て普通の人間として生活するのには不便でな。』

「だから、ヨイリー博士がリアルウェーブ技術を応用して、父さんの体を限りなく人間の肉体に近い状態にしてくれたんだ」

「へぇ～、よかったじゃない、スバルくん！」

ミソラが歓心したように言う。

「うん、ホントにうれしいよ！」

「いいなぁ～……」

「……！」

ミソラは、「いいなぁ～」としか言わなかった。が、スバルにはその言葉に隠された気持ちが伝わってきた。

ミソラには、現在、両親はいなかった。スバルとの出会いでようやく立ち直ったのだが、やはりまだ、さみしさは残るのだろう。いつも元気なミソラを見ていると、ついついその事実を忘れてしまう。スバルは自分のしてしまったその軽はずみな言動に、怒りと悔しさを覚えた。

そのとき、廊下をバタバタと走る音が鳴り響き、ドアから巨体が飛び込んできた。

「うわわわわ、遅刻しちまったぜ！」

『ブロロロロ、おまえが寝坊するからだ！』

ゴン太だった。膝に手をつき、ゼイゼイと息を漏らしている。が、急に顔から血の気が引いた。後ろから怒りのオーラを感じたからだ。

「ゴ・ン・太ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「はひぃぃぃぃ……！」

ゴン太は「ひぃぃぃぃ」がすこし混ざってしまったようだ。

「オックスゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！」

『な、なんでオレさままで！？』

「な　に　か　も　ん　く　あ　る　？」

『ひぃぃぃぃ・・・！』

オックスに至っては完全に言ってしまった。その後もルナの罵声はしばらく轟いていた。
スバルはそのやり取りを尻目に、ヨイリー博士に返事のメールを送っていた。

「これでよしっと」

スバルはハンターＶＧをしまったが思い直したように再びハンターを取り出した。

「……」

スバルは、少し考えて何かを打ち込んでいた。

5、「ありがとう」（前書き）

?、

“Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ.”

5、「ありがとう」

そうしているうちに休み時間は終わり、また授業は始まった。
3時限目の授業中。

《ミソラ》

急に聞こえた声に驚き、ミソラは肩をビクッと上げた。ハンターVGを先生にばれないように取り出す。

（ハープ～、急に話しかけないでよ、びっくりしちゃったじゃない！）

《メールが来たから呼んだのよ》

（メール！？）

今まで、ハープは授業中に来たメールは授業が終わってから来たことを知らせてくれていた。
そのハープが授業中に知らせるということは。

（緊急なの？）

《タイトルに「できたら今読んで」って書いてあるから、たぶん……》

ミソラはそれを聞いて、ハンターVGのメール着信のポップアップをタッチする。ミソラはそのメールの内容を見て、だんだんと真剣な表情になっていった。

そして、放課後。

「う～ん、やっとおわった～」

「それじゃ、さっそくいきますか？ＷＡＸＡ！」

ゴン太とキザマロが言った。

「あ、わたし先生に用があるから、先行ってて！」

「ミソラちゃん？」

「ごめ～ん！すぐ追いつくから！」

ミソラは合わせた両手を顔の前にかざし、片目をつむりながらいった。

「わかったわ。じゃ、待ってるからね」

ルナはそういって６人を引き連れて玄関へと向かった。

ミソラはみんなと別れたあと、階段で屋上へと向かった。扉をゆっくりと開けて、屋上をきょろきょろしながら進んでいく。そして、目的の人物を見つけた。その子は屋上の淵に立ち、校庭を眺めている。

すぐに、声を出して呼ぼうと思ったが、ある考えが浮かび、口を閉じた。そして、足音を立てずにそろり、そろりと忍び寄り、両手で相手の両目をふさいだ。

「わっ！？」

「ふっふっふっ……動くな、スバルくん。動けば命はないぞー」

（ま……またこのパターン！？）

「さぁ、わたしが誰か当ててみたまえ！」

（え～っと……）

スバルは以前に同じことをやられた時を思い出していた。

「だ……誰だ！？全然わかんないなー」

「……」

ミソラは無言で手を離した。

「……今度はわざとらしいよ？スバルくん」

「そ、そう？」

（難しい……）とスバルは思った。

「まぁ、前に言ったこと覚えててくれたし、上出来かな」

「え、演技って疲れる……」

オクダマスタジオでロックマンの姿でドラマに出たときのことも含めて。

「そうかな？」

そりゃ、ミソラちゃんは慣れてるでしょうけど……というのは無しにした。

そのころ、ルナのグループでは。

「……あれ、そういえばスバルくんは？」

「トイレだそうです」

「トイレごときで遅れないようにしてもらいたいわね……」

そう言ったルナの口調は穏やかだったが、すでに体からは少し怒りのオーラが滲みでていた。

（スバルくん、早く来ないとやばいですよ……！）

というキザマロの心の呟きもスバルには届くわけもなかった。

「……で、スバルくん、大事な話ってなに？」

「……」

「授業中にメール来たからびっくりしちゃった！」

「ごめんね、あんまり人に内容見られたくなくて」

「いいよ、いいよ～」

「……本当にごめん、ミソラちゃん」

スバルは深々と頭を下げた。

「え、いや、スバルくん、だいじょうぶだよ？そんな、授業中にメールくらい……」

「ミソラちゃん、違うんだ。そのことじゃない」

「……その大事な話のこと？」

スバルがうなずく。ミソラはちょっと上を向いて考えたが、スバルが謝るようなことが思いあたらなかった。

「ボクの父さんのこと、キミの前で話してごめん」

その言葉でミソラはようやく理解した。

「なんていうか、もっとボクが気をきかせていたら……」

「いいよ、スバルくん。気にしてないから」

「でも……！」

「確かにママがいなくて寂しいとは思うけど、それはスバルくんのせいじゃないよ。それに、スバルくんのお父さんが体を取り戻せてわたしもうれしかったから……」

「……ほんとにいいの？」

「うん。ほら、湿っぽい話はもうなしにしよ？お互い、らしくないよ？」

「ミソラちゃん……。わかった。ありがとう！　……でもさ、ミソラちゃん、これだけは言わせて」

「うん？何？」

『キミの気持ちが分かるし、キミの助けになりたいと思うんだ……。』

「……！」

それは、ミソラとスバルがロッポンドーヒルズに遊びにいった時の事……

「見て見て、スバルくん！すごい人だね～」

「いっつも混雑してるね、ここって……」

「あ……親子連れもいるね。　……

「ミソラちゃん……」

「やっぱり思い出しちゃう……。天国にいるママの事。」

「……」

「でもね、スバルくん。わたし、そういう時は必ずスバルくんの言葉を思い出すんだ。」

「ボクの言葉……？」

「『キミの気持ちが分かるし、キミの助けになりたいと思うんだ……。』スバルくんが言った言葉だよ。この言葉を思い出すと自然と前向きになれるんだ。」

「……」

「……そう、この言葉はわたしにとって大事な『宝物』なの。こんな言い方変かもしれないけど……。スバルくん、こんなかけがえのないものをくれてありがとう！」

「い、いいよ。お礼なんて」

「だってホント感謝してるんだもん」

「ミソラちゃんの役に立てたのなら光栄だよ。」

「だから、これからもがんばろう！力になるから！」

「……グス」

ミソラは顔を手で覆った

「わわっ、ミソラちゃん、ごめん！」

「ありがと、スバルくん……」

「え？」

ミソラは顔から手を離し、指で涙を拭いながらスバルと向き合った。

「スバルくんの口からそれ聞くと、やっぱり安心するな……」

ミソラの礼に、スバルは照れ臭そうに笑った。

『《……へっ》話終わったんなら、早いとこ行かねーと、また委員長に怒られるぜ？』

「うわわわ、そうだった！今度こそ、公開処刑になっちゃう・・・！」

「ふふっ……じゃ、急ごっ、スバルくん！ほらほら、急がないと、置いてっちゃうぞ～」

「うわ、待ってよ、ミソラちゃん！」

ミソラは笑顔で走り、スバルはそれについていく。
廊下を駆ける二人は、不思議と幸せな気持ちになっていた。

5、「ありがとう」（後書き）

・・・そうそう、この小説のタイトルの「プレアデスの絆」の意味、わかりますか？ヒントは流星３のスバルの部屋です！まぁ、わかったところで、大したタイトルは浮かんでこないんですけどね～。

6、忍び寄る影（前書き）

？、

Ａｐｐｒｏａｃｈｉｎｇ　ｓｈａｄｏｗ

6、忍び寄る影

二人は走ってウェーブライナー乗り場にたどり着いた。そこには処刑執行人、いや、ルナが立っていた。

「……い、委員長、ただいま着きましたー……」

「『ただいま着きましたー』じゃなーい！何分待ったと思ってんのよ！」

「ご、ごめんなさい！」

「ル、ルナちゃん、わたしが悪いの！」

「ミソラちゃんが……？」

「うん、わたしの悩みを聞いてもらってたの！」

（ミ、ミソラちゃん……！）

そんなことを言ったらボクが殺される。

「……それで、スバルくんはちゃんと返事を返したの？」

「うん！おかげですっごく安心した！」

「よかったじゃない！」

……へ？

「いいなー、オレもミソラちゃんに相談されたいぜ！」

「ゴン太くんに相談したら何でも食べ物で解決しようとするからだめですよ」

《どうやら、スバルとミソラの仲はすでにある程度はおなじみになってるようだな……》

（そのおかげで助かったけど、なんか勘違いされてそうだな……）

《向こうはその勘違いとやらを否定しないかもしれないぜ？》

（え、どういうこと、ロック？）

そのスバルの発言にため息をつくウォーロック。

《クスクスクス……相変わらずね、スバルくん》

《あぁ、まったくだ。スバルの鈍感っぷりは、ミソラとの明らかなデート中に『今日は何を買いにきたの？』だの、『買い物は何か買いたいものがあってくるものだ』だの言うくらいだからな……》

《ロックにそれを分からせるなんて、スバルくんは相当のツワモノね……》

《あぁ……ってハープてめぇ、どっちの味方だ！っていうか、スバルが鈍感だって分かったのそこか！》

《クスクス……まぁ、でもしょうがないわよ。スバルくんは人と

関われるようになって間もないんだから》

《まぁ、そうだが……それはミソラも同じだろ？》

《ミ、ミソラはホラ、女の子だからそういうのには多少なりとも敏感なわけで……》

《……女ってぇのはよく分からん》

「あ、ウェーブライナーが来ましたよ！」

橋のリアルウェーブが一時的に消え去り、ウェーブライナーが川の上を走って来て、スバル達の前で止まった。

「さ、乗り込むわよ！」

「なんでお前が仕切ってんだ？そもそも呼ばれてねぇじゃねーか」

「同感だな」

「おだまり、ジャック、ウォーロック！」

（こういうときは委員長のペースに合わせた方がいいんだって……二人とも……）

スバルは心の中で言った。

こうして騒がしい一団はウェーブライナーに乗ってＷＡＸＡに向かった。

その上空のウェーブロードでは

「気楽だねぇ、ボク達がいるってのに」

「まあ、あの子達にわたし達の存在を気付けるわけがないもの。気付けって言う方が無理な話だよ」

「だけどよ、あいつらオレらより弱そうだぜ！？」

「『弱そう』じゃなくて、『弱い』の間違いでしょ。」

「当たり前だ、そういう風に作られたんだから」

「……オレは早く戦いてぇ」

「……待ちなさい、リーダーはグレイよ。グレイの言うことをきかなきゃ」

「安心して、もう何時間と待たずに戦いのときは来るよ。……言っとくけど、各自、『自分』を相手にしてよ？」

「「了解」」

声をそろえてその電波体たちは言った。

「それにしても、ＷＡＸＡに来るのはひさしぶりだねぇ」

と、スバル。

今、スバルたちはＷＡＸＡの前の広場を歩いている。

「まぁ、ミソラちゃんがクロックマンにさらわれた一件以来、ＷＡＸＡに行く用事がなかったもんな」

「ＷＡＸＡの人たち、元気かな？」

「そりゃ、元気だろ？あ、でも仕事疲れはしてるかも？」

「みんな元気だったよ」

ミソラの声にみんな振り返る。ミソラ本人はというと、「やばい、言っちゃった！」とさも言いたげな顔をしている。

「ミソラちゃん、最近ＷＡＸＡ来たんですか？」

「う、うん……」

「どんな用事で来たんだ？」

「えっとねー、ないしょ！」

さっきの焦った顔を即座に切り替えて言う。さすがは女優と言ったところか。

「えー、内緒にされると余計に気になるよ！」

「まぁ、その気になったら教えるよ。」

スバルの発言にミソラが言った。

《なによ、ミソラ！言っちゃえばいいじゃない！》

（だって、わたしがＷＡＸＡに行った要件のうちの一つはどうせもうすぐ言われちゃうし、もう１つは……言わなくていいよ、わたしはスバルくんの役に立てればそれでいいから……）

《もー、そーゆーとこ控えめねぇ……》

ミソラとハープが話を打ち切ると、みんなは今回の招集が何の用件か話をしていた。

「どっか、うまいもん食える所に連れて行ってくれるのかな」

「ゴン太くん、もはや神がかってますよ、そこまで食べ物の方向に持っていけるなんて……」

「えへへ、そうか？」

「褒めてませんよ……」

「ゴン太が神がかったら、ゴンターガ様の再来だね！」

「カルビをもっと持ってくるでおじゃるー！！ってスバル、てめぇ！」

「あはははは！」

「笑ってんな！！」

……完全に話題がずれていたが。

「……平和な奴らだな」

「まぁ、いいことだよ」

ツカサ、ジャック、クインティアはその盛り上がっている一団に一歩距離をおいて歩いていた。

「あぁ、スバルちゃん達！」

「ヨイリー博士！」

見ると、ＷＡＸＡの入口の前に、ヨイリー博士が立っていた。

「博士、おひさしぶりです！」

「ほんと、ひさしぶりねー、スバルちゃん。それに、みんなも、おひさしぶり！」

「おひさしぶりです！！」

みんながそれぞれにあいさつをした。

「……さて！こんな外で立ち話もなんだから、さっそく中へ入りましょうか？」

「そうですね」

スバル達はヨイリー博士に先導されてＷＡＸＡへと入った。

そして、サテラポリス指令室。

ヨイリー博士はスクリーンに背を向けて立ち、コダマ小学校の一行は指令用のデスクを挟んでヨイリー博士とは反対側に並んでいた。

「ヨイリー博士、まずはボクの父のこと、ありがとうございました」

「あぁ、いいの、いいの。あれは案外簡単にできたから」

「そうなんですか？」

「そうよ、リアルウェーブってのはね……」

「ヨ、ヨイリー博士……」

スバルは話が長くなりそうなので制した。

「……またその細かい話は今度ってことね……。それじゃ、みんなをここに呼んだ要件を言うわ」

「おねがいします」

「要件は主に３つ」

ヨイリー博士はそう言って指を三本立てた。

「まぁ、そのうちの1つはスバルちゃん限定の要件なんだけど……」

「ボク限定の要件……ってなんですか？」

「話には順序ってものがあるの。だからそれも後で話すわ」

「分かりました」

「じゃ、まず1つ目」

そう言って指を人差し指のみを立てた。

「みんなに紹介したい人がいるの」

「誰ですか？」

スバルがのりだして聞いた。

「それは……ね、ミソラちゃん？」

「ねー！」

ヨイリー博士はミソラにウィンクを送り、ミソラはうれしそうに首をかしげながらにっこり笑って応えた。

「何？ミソラちゃんはもうその人知ってるのか？」

「うん！そりゃぁもうね！」

ミソラはそう言ってからスバルの方を向いた。

「スバルくん、おまたせ！これが四つ目のサプライズだよ！」

「四つ目……とっておきのやつ？」

「うん、それ！」

「この……ヨイリー博士が紹介したい人が？」

「そう！」

「とっておきって……どんな人なんだろ？」

「そうね、見た方が早いわ」

ヨイリー博士はそう言うと、指令室に通じている階段の上を見上げた。それにならってスバル達も同じ方を見上げた。

「それじゃ、もういいわよ、入って！」

みんなは緊張した面持ちで見上げている。

そしてその人物が階段の上に現れ、スバル達を見下ろした。

「いや～、ひさしぶりだな～、お前たち！元気してたか？」

その人の発言を無視して、みんなあんぐりと口をあけている。ミソ

ラとヨイリー博士以外は。

「あ……あ……」

「マジかよ……？」

スバルは言葉にならず、ウォーロックも驚いた表情だ。

「あ……暁さんっ！？」

スバルのその声に、暁は手をあげて応えた。

6、忍び寄る影（後書き）

暁さんが生きていて、スバルたちは驚いていますが、他の方の小説だと普通にいるので読者の皆さんにはあまり驚きはなかったかもしれません。暁復活の僕なりの解釈は次回で。

7、エースの復活（前書き）

？、

Ｒｅｖｉｖａｌ　ｏｆ　ｔｈｅ　ａｃｅ

7、エースの復活

「あ……暁……さん……？どうして……」

「『どうして……』とか言うなよ。生きてて欲しくなかったみたいで悲しくなるだろ」

シドウはそう言うと、上から飛び降り、ヨイリー博士の隣に降り立った。

「シドウちゃん！まだそんな無茶しちゃだめよ！」

「博士、いいじゃないですか。もう戦闘できるまでに感覚が戻ったんですから」

『シドウ、そういう問題じゃありません』

シドウの隣にアシッドが現れて言った。

『ア……アシッドまでいるのか？』

ウォーロックが反応した。

『おや、ウォーロック、ひさしぶりですね。私もいるに決まってるじゃないですか』

『だぁ～～～もう！その、なんつーかヒョウヒョウとしたしゃべり方も変わってねぇな！』

『ウォーロックこそ、その常にケンカ腰な態度は変わりませんね』

『うるせぇ！やっぱお前と話してるとムカつくなぁ！』

アシッドはため息をついた。

『少しは大人しくなってくださいよ……』

「はいはい、ロックちゃんもアシッドちゃんもそこまでー！」

「ったく、お前らひさしぶりに会ってそれかよ……」

シドウは食べていたうまい棒を口から離して言った。

「暁さんも、変わってないですね……」

「うるせ！」

「……そろそろいいかしら？」

ヨイリー博士の声にみんなが黙った。

「みんな気になってると思うから、シドウちゃんがどうやって復活したのかについて話していくわね。……ディーラーを私たちがアジトから追い出して以来、ＷＡＸＡとサテラポリスはディーラーのアジトに潜入して、いろいろな調査をしていたわ」

「いろいろな調査……って例えばどんなのですか？」

ルナが質問した。

「サテラポリスも把握できていなかったディーラーの犯罪事件の履歴や、キングの研究などのデータが残ってないか、についてよ。普段は職員にまかせていたのだけれど、私も何度か足を運んでいたの。そこで、今からだいたい2ヶ月前くらいに偶然あるものを見つけたの……」

「それは？」

キザマロが急かした。

「それは……アシッド・エースがバラバラになった、その一部のパーツデータよ」

「……！！」

ミソラを除くみんなの目が見開かれる。

「まぁ、そのデータがアシッド・エースのものだって気付いたのはＷＡＸＡに帰って解析してからで、見つけた時はなんのデータかは全く分かっていなかったんだけどね」

「バラバラ……って、まさか……」

スバルはそこで言葉を切った。ヨイリー博士がその続きをくみとった。

「そう、かつてルナちゃんがおちいったのと同じ現象よ」

ヨイリー博士はルナに目を合わせながら言った。それに合わせて、

ルナに目線が集まる。

「わ……わたし!?」

「そう……聞いてるでしょ?」

「はい……その時のこと全く覚えてないけど……」

「アシッド・エースのかけらはおそらくディーラーのアジトの、現実世界、ウェーブロード、電脳世界に関係なくいたるところに散らばっていると予測できたわ」

「……なんでだ?」

ジャックが聞いた。

「……スバルちゃん、ジャックちゃん、クインティアちゃん、あなたたちはアシッド・エースとジョーカーが組み合って爆発したときにそこにいたわよね?」

「はい、ジョーカーが自爆しようとして、それを止めるためにアシッド・エース……いや、暁さんが爆発のエネルギーを吸い取って、被害を食い止めようとしてくれたんです」

「……」

サクサクサク……

シドウは押し黙ってうまい棒を食べている。

「そう、あなたたち4人のために、ね」

ヨイリー博士はスバル、ミソラ、ジャック、クインティアを順に目配せをした。

「その抑えられた爆発のおかげで、アシッド・エースのかけらはそれほど遠くには飛んでいない、と予想したの。今のと同じ話をミソラちゃんに聞いてね」

「……？なんで、ミソラちゃんだけに聞いたんですか？」

「……話が前後するけど、アシッド・エースがバラバラの状態にあると分かった時に、私は1人だけにそのかけらを探させることに決めたわ。……というより、それしかなかったの」

「……どういうことですか？」

ツカサが聞いた。

「ディーラーのアジトは、現実世界はともかく、ウェーブロードや電脳世界には、大量のノイズが充満していて、普通のウィザードや電波人間では歩く事も出来なかった。だけど、ちょうどスバルちゃんが持ってるノイズ制御プログラムと同等の耐久力を持ち、かつ誰にも適応できるプログラムを開発中でね、それをその時はまだ量産できるまでにはいってなくて、1つしかなかったの」

「だから1人……」

「それは分かりましたけど、そのプログラムを持った人とボクの2人ならもっと早く見つけられたんじゃないですか？」

「スバルちゃん、あなたはあの時と違ってアシッドちゃんがいないから誘ってもがむしゃらに探すことしかできなかったはずよ」

「ぐっ……そうですけど……。って、ヨイリー博士、今『あなたは』って……」

「言ったわよ」

「ということはがむしゃらになることなく探せる、アシッドの代わりになる探索能力があるウィザードがいるってことですか？」

「そう。ウィザードじゃなくて電波人間だし、アシッドちゃんほどじゃないけどね」

「誰ですか、それ」

「ハープ・ノートよ」

「……ええええ!?ミソラちゃん!?」

「うん、そうだよ」

ミソラは笑って応えた。

「そんな能力あったの！？」

「うん。音波を物に当てて、跳ね返ってきた音波でそこになにかがあることを感じ取る。コウモリの超音波とか、ソナーとかと同じ原理ね」

「そういえば、バミューダラビリンスの最深部に向けて進んでいたときに使ってた能力も……」

「そう、その能力の一種だよ」

「……そう、そのハープ・ノートの能力さえあれば見つかると思って、私はミソラちゃんにアシッド・エースの今の状態を伝えたわ。そしたら『わたしにやらせてください！』って、はりきっちゃって……」

「わたし、暁さんにはお世話になりっきりで、なんとか恩返しがしたかったの」

「そういうこと本人の前で言うかぁ～？」

「あ～！もしかして暁さん照れてる～？」

「そ、そんなわけあるかぁっ！」

そういって少し赤くなりながら再びうまい棒にかぶりつく。ちなみにこれで三本目である。スバルはミソラとシドウのやり取りが終わったのを見計らってしゃべった。

「……でも、たとえハープ・ノートしかパーツの収集ができなくても、せめてボクたちにも教えてくれたらよかったじゃないですか！」

「そうだ！心配したんだぞ！」

スバルとゴン太が叫んだ。

「ごめんなさいね、話そうとも思ったんだけど、シドウちゃんの性格上、誰にもしゃべるな、って絶対言うって分かってたから……」

「……」

「でも、誰にも話さないとパーツが集まらないからミソラちゃんだけには話したの」

「ごめんね、みんな。ヨイリー博士にも、蘇生した後の暁さんにも口止めされちゃって……」

「分かったよ、暁さんが生きててくれたんだ、それでいいよ」

「そうだな……」

「……話を戻すけど、私はミソラちゃんにアシッド・エースの事を伝えてから、ミソラちゃんに爆発の時の状況を聞いて、ディーラーのアジトの中、もしくはそれにあまり離れてない所にアシッド・エースのかけらはあると確信した。そしてミソラちゃんにノイズ制御プログラムを渡して、現場に向かってもらったの」

「結構早くパーツは見つかったわ。だけど、見てわかるくらいノイ

ズに侵されてて、わたしでもこれは早くしないと危険だなって思ったくらいだったの」

「バラバラになって時間が立ちすぎていたからしょうがなかったんだけどね……」

「それで、そのパーツを侵していたノイズはどうしたんですか？」

「案外簡単に取り除けたわ」

「あ、あっさり……」

「あっさり取り除けたのは、アシッド・エースの中に新たなノイズ耐性が生まれてたからよ」

「え？なんで？」

『ジョーカーの力を吸い取ったからです』

アシッドがしゃべり出したのでみんなその方向に振り返った。

『爆発を防ぐために、シドウは爆発のエネルギーを吸収していました。そのときに、偶然ではありますが、ジョーカーのアビリティなどのデータも一緒に吸収されていたのです。その中の１つにノイズ耐性があった』

「へぇ～」

みんなが歓心したように言う。

「ついでだが、その吸い取ったアビリティの影響で、もう電波変換しても体が蝕まれることはなくなり、お前らと同じくらい長く電波変換できるようになったんだ」

「へぇ、すごい！よかったですね」

「あぁ、死にかけた甲斐があったってもんだ」

シドウは冗談をとばした。

「でも、人間はウィザードと違ってバラバラになったものを復元するのは難しいんじゃ……」

『それも、アシッド・エースの状態でバラバラになったのが不幸中の幸いでした』

「電波人間の状態なら、ある程度はデータの替えも効くからな。そうしてアシッド・エースが蘇生したら、あとは電波変換を解けば、暁シドウとアシッドの復活ってわけだ」

「分かりました、でも本当に生きててくれてうれしいです！」

『お前なんか、暁が死んだ時泣いてたもんな』

「ロック！このタイミングでそれ言わないで！恥ずかしいから！」

「ははは、心配してくれてありがとよ」

「でも、蘇生してからはどうしてたんですか？」

「一か月前までは病院で療養生活さ。ヨイリー博士とかクインティアとかミソラはお見舞いに来てくれたけどな。まぁ、主にヨイリー博士とクインティアの2人組が来ることが多かったけどな」

「え？クインティア先生も知ってたの？」

スバルがクインティアの方を向いて聞いた。

「……知ってたわよ」

「クインティアちゃんはシドウちゃんとワケアリだったから、特別に……ね？」

「りんごとかむいてくれたよな～」

「……」

クインティアは恥ずかしそうにうつむいた。

「……今のどこに恥ずかしがる要素があったよ？」

「一か月前まで病院生活なら、それ以降から今日までは？」

「あぁ、それなら――」

「暁さんっ！！それ以上はダメぇっ！」

「え？なんで？」

「いいから！」

ミソラは顔をなぜか赤らめて言った。

「分かったよ。じゃ、ようやくお前らが今日ここに来た要件の１つ目終わりってことで、２つ目、いくぜ」

「なんですか？」

「これは、さっきスバルちゃんに言った、スバルちゃん限定の要件よ」

「だから、なんですか？」

「ノイズ制御プログラムを返してもらおうか？」

8、キングの遺産（前書き）

？、

Ｋｉｎｇ’ｓ　ｉｎｈｅｒｉｔａｎｃｅ

8、キングの遺産

「……え？」

スバルは驚いた。そんなことを言われると思わなかった。

「どうしてですか？」

「ちょっと、シドウちゃん！？言い方が悪いわよ！」

「ごめんごめん、こう言ったらスバルがなんて顔するか見てみたかったんだ」

「からかわないでくださいよ……」

「からかってない、おもしろがってただけだ」

「……」

同じじゃねぇか。

「ま、まぁそんな顔するなよ……」

『結局、どういう要件なんだよ？』

「もう、私が言うわ。ただ、ノイズ制御プログラムを新しいのにするだけよ」

「新しい……？」

「そう。これは、アシッド・エースのかけらを見つける前に、ディーラーのアジトから見つけたプログラムなんだけどね……」

「さっき言ってた『キングの研究』ですか？」

「そう、キングが作ったから、『キングＰＧＭ』ってところね」

「キングＰＧＭ……。でも、これって今までのプログラムと何が違うんですか？」

スバルが聞いた。

「はいはい、それも順に説明するわね」

「だが、そのキングＰＧＭの説明の前に、従来のプログラムがそもそもどういう仕組みでできているか、の説明からだな」

「仕組み？」

「そう、仕組みだ。今まで、ロックマンはノイズチェンジは一度に一種類しか使えず、ファイナライズは流星サーバーにいちいちアクセスしなきゃできなかったよな？それはなぜだか分かるか？」

「そんなこと、考えたこともないです」

「まぁ、そうだろうな。それは、低容量すぎるからだ」

「低容量って……どういうことですか！？」

「『ノイズ制御プログラム』っていうのは、厳密にいえば、中に入っているプログラムなんだよ。『他のプログラムをインストールして自分の中に取り込み、取り込んだプログラムをすべて同時に実行するプログラム』。それが外側にあり、その中にノイズ制御プログラムがあるんだ」

「へぇ～、そんな仕組みになっていたなんて……。でも、なんでそんなことするんですか？」

『そうだ！「中にあるすべてのプログラムを同時に実行するプログラム」なのに、それ一個しか中にないんじゃ、むき出しのままでいいじゃねぇか！』

「ノイズ制御プログラムにはノイズチェンジを保存しておく場所がないんだよ。だから、ノイズ制御プログラム　とノイズチェンジ、二つのプログラムが入ってる。こうしておかなかったら、戦闘に入るたびに、ノイズチェンジのために流星サーバーにアクセスしなきゃならなくなるんだよ」

「な、なるほど……」

「そういう理由から、外側のプログラムはプログラムなのに自身の容量だけでなく、自分の中にも容量を持ってるんだ。そして、その容量が従来ではノイズ制御プログラムとノイズチェンジの１つ分の容量、これでもう一杯なんだ。だからノイズは一個しか持てず、ファイナライズはそれをするたびに流星サーバーにアクセスして、そこに保存してあるのを引き出して使うしかなかったんだ」

「ということはこのキングＰＧＭは……」

「そう、それに比べて圧倒的に大容量になって、今までなったことがあるすべてのノイズチェンジと2つのファイナライズ、これを入れてもまだ余るくらいだ」

「それはつまり、すべてのノイズとファイナライズを使えるってことですか!?」

「そういうことになるな」

「す……すごい……」

「それだけじゃなく、たくさん同時にノイズが持てるようになったことで、新たに使えるようになった力があるはずなんだ」

「それは？」

「マージノイズだ。」

「マージノイズぅ？」

「これは、二つのノイズチェンジ同時にやることで、二つのノイズを組み合わせた能力を持った新しいノイズが作れるんだ」

『ダブルトライブみたいなもんか……』

ウォーロックが呟いた。

「そうだ」

「……って、なんで暁さんがトライブオンのこと知ってるんです

か！？」

「お前、ＷＡＸＡの情報網なめるなよ～？知ってるぜ、美術館で展示品のオーパーツ呑み込んでトライブオンができるようになったことも、オーパーツ取られてもその体にトライブオンが染みついていて残ったことも、ノイズが世界に増えてきた影響でトライブオン能力が消えたことも」

「そこまで知られてると、怖い……」

「まぁ、そう言うな。」

「でも、このプログラムはうれしいですね！」

「待て、まだやるとは言ってないぞ」

「え？」

「そのプログラムにはまだ不安定要素があるんだ」

「不安定要素……？」

「はい、そこからは私が話すわね」

ここでヨイリー博士が出てきた。

「博士、お願いします」

「ディーラーのアジトで発見して、帰って解析してみると、これはコピーされたことが分かったわ」

「じゃあ、これのバックアップが存在するってことですか？」

「いや、こっちがバックアップみたいね」

「それなら、オリジナルはどこに？」

「それはおそらく、キングと共に消えたわ」

「……ってことはキングはこのプログラムをメテオGに持って行ったってことですか？」

「それどころか常に自分の電波体としての体に取り込んでいたみたいよ」

「……なぜ？」

「ディーラーのアジトには、大量のノイズがあり、人間なら平気でも、電波体なら少なからず影響を受けるはず。元々電波体だったんなら、なぜノイズにやられないのかと思っていたのだけど、これを見つけて、一気に解決したわ」

「なるほど・・・でも、そもそもなんでキングは自分の体を電波体にしたんでしょう？そんなノイズ制御プログラムなんて作るくらいなら、人間のままの方がいいんじゃ……」

「キングはかなり頭が切れる男よ。万が一、自分の計画が失敗した時のことも考えていたんでしょうね……。そして、失敗したときに起こそうとしていた行動が……」

「メテオG……ひいてはクリムゾン・ドラゴンと一体になること……ですか？あれって、どたんばで思いついたんじゃないんですか！？」

「私もそう思っていたんだけど、このプログラムの容量を見る限り、それも計画の内みたい。この大容量があったから、メテオGのコアやクリムゾン・ドラゴンを取り込めたのよ。これが無かったら、逆にコアにキングが取り込まれ、クリムゾン・ドラゴンをコントロールするなんてことできなかったでしょうね……」

「つまり、キングは、失敗したときにクリムゾン・ドラゴンを取り込むために電波体になって大容量のプログラムを作り、自分のアジトやメテオG内のノイズに侵されないようにそこにノイズ制御プログラムの機能を持たせたってことですか？」

「まぁ、だいたいそんな感じね。そして今のスバルちゃんの持つノイズ制御プログラムにキングＰＧＭをバージョンアップとして送信すれば、自動的に履歴からすべてのノイズとファイナライズの情報を抜き出して、保存してくれるはずよ。その、本来はクリムゾン・ドラゴンを取り込むために作られた枠にね」

「ヨイリー博士、ボクまだ不安定要素が見えてこないんですけど……」

「キングはその、クリムゾン・ドラゴンを取り込み、世界を破壊した後、つまりは私たちに勝った後のことも考えて、キングＰＧＭ内に、自分の研究の最高傑作のプログラムを入れて持って行ったわ」

「最高傑作のプログラム？何をするプログラムなんですか？」

スバルは聞いたが、ヨイリー博士は首を横に振った。

「それが、分からないの。何を引き起こすプログラムなのか。同じプログラムがこのバックアップのキングＰＧＭにもインストールされているのだけど、どれだけやっても解析不可能になってしまう。おまけにロックされてて、消去も移動も受け付けないの。つまり、キングＰＧＭをあなたに渡すことは、このなんだかよく分からないプログラムも一緒に渡すことになるわ」

「……」

「このプログラムは、キングＰＧＭの容量の半分を埋め尽くすほど、容量がでかいの」

「半分……！！」

スバルが息を飲んだ。

「その分、危険なプログラムであったときの影響も大きいと考えられるわ」

「それが、渡せない理由ですか？」

「渡さない、とも言ってないわ」

「？？？」

「つまりね、渡すかどうかは、あなた自身に任せよう、って話なの。この一連の話すべてを聞かせてね」

「ボクに選べ、ってことですか……。ヨイリー博士、あなたはこのよく分からないプログラムが危険だと思いますか？」

「私はそうは思わないわ。これとキングが同じものを持って行って使おうとしてたなら、危険なはずはないから。でも、それは推測にすぎない。だから、あなたに任せよう、ってことなの」

「……」

スバルは考えこんでいる。

『スバル、どうすんだ？』

ウォーロックはスバルに聞いた。

他のみんなも、今までの話を黙って聞いていて、スバルの次の言葉を待っていた。

「ボク、これもらいます！またいつ新たな敵が攻めてくるか分からないから、来たときに守りたいものを守れるように、力を手にできるときに手にしておきたい！」

『さすがスバル！トライブオンが呪いっぽくてやだ、とか言ってたときとは大違いだぜ！』

「それを言わないでよ、ロック……」

スバルはガクッと肩を落として言った。

（なんか、もらう理由がスバルくんらしくていいな……）

ミソラは思った。

「その、謎のプログラムについてはヨイリー博士の推測が当たってると信じます」

「よっしゃ、それじゃ、さっそく送るぜ！」

シドウはキーボードを叩き、スバルのハンターにキングＰＧＭを送った。

ピローン！

「よし、完了だ！」

『なんか、今までのプログラムと見かけはたいして変わらないな……』

ウォーロックが送られてきたプログラムを指でつまみあげて呟いた。

「ウォーロック、もう装備しておけよ」

『わかったよ……ＯＫ！装備完了したぜ！』

「どう？ロック」

『やっぱりつけた感じもたいして変わんねーな……』

「まぁ、戦闘になったらいろいろ試してみるこった」

『そうだな……』

「さてと！いよいよ最後の要件だ！これは電波変換できる奴……ＷＡＸＡでは新たにトランスメンバーって呼んでるんだが……そいつら全員に関係することだ！これがお前らを呼んだ一番の目的だぞ」

「なんだろ……？」

ミソラが言った。

「っと、その前に……
星河スバル！」

「は、はいっ！」

スバルはいきなりかしこまって呼ばれたので、面喰いながらも応えた。

「響ミソラ！」

「はいっ！」

「牛島ゴン太！」

「お……はいっ！」

《ゴン太のやつ、また「おう！」って言いかけたな……》

ウォーロックは思った。

「我々遊撃隊は――

――本日をもって解散とする！」

8、キングの遺産（後書き）

マージノイズについてですが、流星3の途中で暁さんから説明のメールが届くので、本来はスバルたちはマージノイズを知ってるはずですが、ここでは知らなかったことにしました。

っていうか、ノイズチェンジを使う小説があんまりありませんよねー。なんででしょうか。ファイナライズはけっこう使われてるんですけど。

9、勢力拡大（前書き）

？、

Ｐｏｗｅｒ　ｅｘｐａｎｓｉｏｎ

9、勢力拡大

「「……えええ！？」」

スバル、ミソラ、ゴン太は驚いた。そんなことを言われると思わなかった。

「どうしてですか？」

「ちょっと、シドウちゃん！？言い方が悪いわよ！」

「ごめんごめん、こう言ったらスバル達がなんて顔するか見てみたかったんだ」

「おもしろがらないでくださいよ……」

「おもしろがってない、からかっていただけだ」

「……」

今度はそっちか。

「早くちゃんとした内容を言ってくださいよ！」

「分かった分かった。……まぁでも、解散もあながち間違いではないんだぜ？」

「知ってます。あながち間違ってないこと言って嘘は言わずにボクらの反応を楽しもうとしてたんでしょ？さっきと同じ手口じゃない

ですか」

スバルがそっけなく言った。

「ったく、かわいげがねぇなぁ……。解散じゃなくて、ランクアップ、といったところだ」

「ランクアップ？規模の拡大ですか？」

「そういうこと。遊撃隊はサテラポリスで働いていたとはいえ、一般市民から選ばれた特別戦闘員で、簡単に言うと、ディーラーの討伐のためにだけ作られたものだ。つまりはお前らはサテラポリスで働いていても、身分はただの小学生ってわけだ」

「そう言われるとなんかくやしいですね。ボクらだってがんばって働いたじゃないですか」

「おい、勘違いするな。今のは身分を言ったまでであって、実際俺らの、遊撃隊の評価はかなりのもんだぜ？『遊撃隊は世界の救世主だ』『あいつらのお陰で地球は守られた』ってな」

「え？地球を守ったのはスバルくんであって、わたしたちは守ってないじゃないですか」

ミソラが驚いたように言った。

「そりゃ、メテオGから地球を守ったのはスバルだけど、俺らはディーラーに立ち向かい、倒したじゃないか。それは何もロックマンの力だけではなかったはずだぜ？ハープ・ノートよ」

シドウはミソラに向かってにかっと笑って言った。ミソラは少し嬉しそうな顔をした。

（わたしも少しはスバルくんの役に立てたのかな……？）

「あーもう！また話がそれた！それで、遊撃隊は身分はただの小学生のままだが、今回からは違う。ちゃんとサテラポリスの一員として働く事になる」

「ホントですか！？」

スバルとキザマロは声を上げた。

（そういえばこの2人、スピカモールでサテラポリスに会った時、かなり興奮してたわね……）

ルナは少し2人の態度にひきながら思い出した。

「スバルくん！これはすごいですよ！」

「うん！あのサテラポリスとして働けるなんて……すごすぎるっ！！」

スバルとキザマロは感動してテンションが上がっている。盛り上がる2人に周りはルナ同様、少しひいていた。

「わ、我が遊撃隊は、サテラポリスの新たな部署として発足されたわけだ。ディーラー討伐と、メテオGの脅威から地球を救った功績がたたえられて、な。その部署の名は、『オフィシャル』。」

「オフィシャルって、どっかで……」

「わたし、知ってるわ。２００年前にあった組織で、ネット犯罪の取り締まりが主な仕事だったって……」

ルナは言った。

「その通りよ」

ヨイリー博士が応えた。

「オフィシャルはルナちゃんの言うとおり、２００年前にあった組織で、ネット犯罪の取り締まりが主な仕事。でも、ネットワークプログラム、『アイリス』と『カーネル』の開発により、ネット犯罪は激減し、オフィシャルの仕事は減っていったの」

「アイリス……？」

「カーネル……って？」

ミソラとスバルが聞いた。

「アイリスは、ネットワークやプログラム、ナビの破損個所を自動で見つけ出し、回復させるネットワーク修復プログラム。カーネルはネットワーク上のウィルスやネット犯罪者を自動で見つけ出し、消去や捕獲を行うネットワーク保護プログラム。これらの開発により、２００年前のネット社会は飛躍的に進化を遂げたのだけど……」

「代わりにオフィシャルの仕事を減らしてしまったわけですね」

「そう。そして約１００年前に解体されたのだけど……ここにきて、最近はウィザードやウィルスを使った電波犯罪が増えてきている。そのために、またオフィシャルを復活させることになったの。遊撃隊の新たな形としてね」

「そして、２００年前のオフィシャルのメンバーを『オフィシャルネットバトラー』と呼んでいたのだが、新しいオフィシャルはウェーブバトルのスペシャリストだから、『オフィシャルウェーブバトラー』と呼ぶことになった」

「じゃあ、わたしたちはそのオフィシャルウェーブバトラーになって、電波犯罪を取り締まっていくってことですか？」

「まぁ、簡単に言えばそうだが、あまり遊撃隊のころと変わらないと思うぞ？任務の難易度も頻度も……」

「何か遊撃隊との違いはあるんですか？」

「まず、依頼が受けられる。サテラポリスに寄せられた一般市民の依頼から、国家機密の絡む依頼まで、様々だな」

「こ、国家機密……」

規模の大きさに、スバルとミソラは畏縮した。

「そして、依頼や任務の後にはちゃんと報酬ももらるぞ」

「報酬ってどんなのですか？」

「まぁ、ほとんど現金だな」

「ということは牛丼いっぱい食えるのか！？」

「……」

おい、ここにゴンターガ様が降臨してるぞ。

「……まぁ、金もらった後はもちろん好き自由に使っていいぞ」

「やったー！」

（ゴンターガ様は牛丼食べまくってすっからかんになりそうだな）

スバルは思った。

「まぁ、オフィシャルの説明としてはこんなところだな。でも、オフィシャルに入るかどうかは自分の意思で決めるんだ。ここにいるトランスメンバーの親にはもう全員話はつけてあるが、強要はしない。最後は自分でよく考えて決めるんだ」

それを聞いて、みんな考えだした。

「……ボク、入ります！」

スバルは手を上げた。

「サテラポリスで働けるなんて願ってもないことだし、ボクがオフィシャルに入ることで助かる人がいるのなら、断る理由はありませ

ん」

「よし、コード００３、シューティングスターロックマン、決定」

「わたしも入ります。わたしが歌手活動をしてるのも、歌でみんなを勇気づけ、みんなの役に立つためだし、オフィシャルとしても少しでも世の役に立ちたいです」

「コード００４、ハープ・ノート、ＯＫだ」

「オレも。牛丼いっぱい食べたい！」

「……」

おい、早く誰かこのゴンターガ様を天に送り返してくれ。

「それに――」

ゴン太の突然付け加えられた言葉に、その場にいた全員が耳を傾けた。

「オレは、今まで、何もできなかった。いつもスバルに助けられるばっかりで、宇宙ステーションに、ムー大陸に、メテオＧに１人向かうスバルをただ見送るしかなかった。やっと、戦う力が手に入っても、結局最後はロックマンに頼るしかなかった！そのままのうのうと生きる自分が許せないんだよ！何の恩も返せずに生きていきたくない！だから、オフィシャルに入る！入って、ロックマンに今までの返せなかったもの全部返してやるんだ！」

「ゴン太……」

「……男に二言はねぇぞ？」

「……上等だ！！」

「コード００５、オックス・ファイア　入団決定！」

「うっし！」

その後も順々にオフィシャル入りが決まり、その場のトランスメンバー全員が入団した。

「入った奴を確認するぞ。
コード００３、シューティングスターロックマン。
コード００４、ハープ・ノート。
コード００５、オックス・ファイア。
コード００６、ジェミニ・スパーク。
コード０１０、ジャック・コーヴァス。
コード０１２、クイーン・ヴァルゴ。
以上の者のオフィシャルへの入団を許可する！」

「はい！」

全員が言った。

「……でも、ツカサくん、ジャックくん、クインティアさんもトランスコード持ってたんだねぇ」

ミソラが言う。

「まあね」

ツカサが返事をした。

「ツカサくんはいいとして、ジャックとクインティア先生はなんで今までトランスコードを持ってなかったの？」

「そりゃ、ディーラーにいたから、ＷＡＸＡやサテラポリスに管理されるわけにはいかねぇだろ」

「そうだけど、ボクやミソラちゃんの時は初めてハンターＶＧで電波変換したときに自動的にトランスコードに登録されたから……。なんでジャックたちはそうならなかったの？」

「ディーラー専用のハンターを使ってたからな。ＷＡＸＡ側がそういう通信をしてきても、遮断するようにできていたんだ」

「へぇ～、じゃあ、今は普通のハンターを使ってるんだ？」

「そうだ」

「……でも、やっぱりおかしいよ」

スバルはまだ腑に落ちないらしい。

「なにがだよ？」

しつこいスバルに若干キレ気味のジャックが切り返した。

「もうすでに０１１のウルフ・フォレストとか０２０のキグナス・ウィングとかがいて、明らかにジャックたちの方が後の方に入ってきたのに、なんで０１０と０１２なの？」

「そんなのオレが知るか！」

「トランスコードはそれに登録された順じゃないのよ、スバルちゃん」

ヨイリー博士が言った。

「え？そうなんですか？」

「そう、トランスコードは入る人の年齢で割り振られるの」

「年齢……ですか？」

「００２から０１０までのコードには１８歳までの子が、０１１から０２０までは１９歳から３０歳の人が、０２１から０３０まではそれ以上の歳の人が、って感じね。例外として００１はサテラポリスのエースが入ってるけど」

「へぇ～」

「なんか……用意されてるコードが少ない気がしますが……」

「電波変換できる人間がそれほど少ないってことよ」

「あ、なるほど……」

「ちなみに、該当する年齢域のなかでどのコードになるか、についてはアトランダムよ。でも、そこに関しては確かに入るのが早い方が登録されるコードも前の方のコードになる傾向があるみたいだけど」

「……さて、実はまだもうひとつ、要件がある」

シドウが声をかけた。

「え、なんですか？」

「お前らのハンター……いったん借りるぜ？」

9、勢力拡大（後書き）

ツカサ、ジャック、クインティアのトランスコード、トランスコードの法則性など、いろいろ勝手に設定してしまいました。でも、トランスコードの法則性はあながち間違ってないと思います。
あと、クインティアのコードが０１２なのはクイーンだからです。
ジャックも同じ理由で０１１にしたかったのですが、もういたのでそれに近い０１０で我慢しました。

10、How to use（前書き）

X、使い方

10、How to use

「え、ハンターで何をするんですか？」

「オフィシャルに入るにあたって、お前らに渡さなきゃいけないデータがある。で、これが重すぎて電波で送信できないんだ。だから、少しお前らのハンターを借りなきゃならない。協力してくれ」

そうシドウが言い終わると同時に、ヨイリー博士がトレイを持って現れた。
スバルがそこにハンターを置こうとした。

「あ、ウィザード・オンしといた方がいいぜ。これは半分、端末のフォーマットに近いからな。中のウィザードを入れたまんまだと、そいつらが気持ち悪い思いをすることになるぜ？」

『！！　あ、あんな思いは二度とごめんだ！』

ウォーロックはそう言うと、ものすごい勢いでハンターから勝手にウィザード・オンをして飛び出した。

（そ、そんなに嫌なんだ、あれ……）

スバルは電波端末がハンターＶＧに変わったばかりのころ、授業でハンターＶＧのフォーマットの作業をしたあと、ウォーロックに怒られたことを思い出した。
その後も続々とウィザードがハンターから出現し、それぞれのオペレーターの後ろに並んだ。

「それじゃ、ちょっと待っててね」

そう言うとヨイリー博士は階段を上ってどこかへ行ってしまった。

『う……思い出しただけでオエップ……』

ウォーロックが気分の悪い表情を浮かべて言う。

「えっと……なんていうか……大丈夫？ロック」

『あぁ……まぁなんとか……』

「どうしたの、ロックくん？」

ミソラが話しかけた。

『あぁ、ハンターのフォーマットの時にいろんなプログラム呑み込んだことを思い出して、気分が悪くなった　みたいだよ』

『え？ロックも？』

ハープが声を上げた。

『「も」って……ハープもか……？』

『ええ……ミソラったら、いきなりフォーマット始めるもんだから……』

「う……あのときはごめん……」

『あ、今は責めてるわけじゃないのよ、気にしないで』

「ロック、ボクもごめん……」

『いや、もういいんだよ』

スバルはハープのリアクションを見て改めてフォーマットの気持ち悪さを思い知った気がした。

『お？ウォーロックどうした？そんな青い顔して？……ってもともとかぁ？ギャッハッハ！』

声の主はコーヴァスだった。

『あ？コーヴァス、てめえ、ケンカ売ってんのか？』

『てめえじゃねぇんだから、そんなやたらめったら売るわけねーだろ！』

『コノヤロウ……！』

『キャハハハハ！何？ケンカ？わたしも混ぜてよ！』

『ヴァルゴ……相変わらずうるせぇ奴だな……』

『なにそれ～、ひっど～い！』

『お前もお前で相変わらずだな……ウォーロック……』

『今度はジェミニかよ！次から次へとうるせぇ奴らだな！』

『まったく血の気の多いやつだ。まぁ、好戦的なＦＭ星人らしいがな……』

『オレはＡＭ星人だ！お前らみたいな悪人どもと一緒にすんな！』

《1人はＦＭ王をそそのかし……残りの2人はＦＭ星始まって以来の犯罪者……。たしかに悪人たちね……》

ハープは思った。

『その悪人と今のオレ達は別ものなんだよ！昔の事をいつまでも蒸し返すんじゃねぇ！』

『そうよそうよ！今は善良なウィザードなんだから～！ね！ティア！』

「……そうね」

『ちょっと！今の間は何？』

「……騒がしいのが慣れないだけよ」

『あんたも相変わらずねぇ……』

「それはお互い様でしょ……？」

『まあね……って、あれ？オックスは？』

言われてみれば、さっきからオックスの姿が見えない。

「……あ！」

ゴン太が声を上げた。

『おい、まさか、ゴン太お前……』

『オックス……出してないの……？』

ウォーロックとハープの問いに、小さくうなずくゴン太。

『そりゃ……オックス……、ご愁傷さまだな……』

『オックス……あんたのことは忘れないわ……たぶん……』

《……死んだ！こいつらの中でオックス死んだ！》

突っ込むコーヴァス。対してヴァルゴは……

『キャハハハハ！それ、帰って来てから楽しみぃ！』

……笑っていた。

そこへ、ヨイリー博士が階段を下りて戻ってきた。

「終わったわよ！自分のハンターを取ってちょうだい！」

そう言ってデスクにハンターの置かれたトレイを置いた。真っ先にゴン太がハンターを取り上げ、ウィザード・オンをした。すると、そこに肩で息をするオックスが現れた。

『ゲロロロロ、し、死ぬかと思った……』

「オ、オックス……？鳴き声変わってるぞ……？」

ゴン太が言った。

『ゲロロロロ、そ、そうか……？』

「お、お前、リバースすんなよ？」

『保障はできん』

「いや、しろよ！」

『バケツ持ってきてくれればする』

「出す気満々じゃねぇか！」

そのコントのような会話に笑う者、ひいている者など、それぞれがそれぞれのリアクションをしている。中でも……

『キャハハハハ！「ゲロロロロ」、だって～！カエルかよ、あんた！ウケル～！キャハハハハ！』

笑いまくっているヴァルゴの声は一段と響いていた。

「……そ、それで、なにを送ったんですか？」

スバルがシドウとヨイリー博士に聞いた。

『あんま、変わったとこねぇけど……』

ハンターに戻ったウォーロックが言った。

「おし、これから今回送ったやつの説明をするぞ！」

その声があってもしばらくは、うるさくさまざまな声が飛び交っていたが、オペレーターがウィザード・オフをすると、打って変わって静かになった。

「……今回お前らに送ったのは、オフィシャルのライセンスだ。」

「……オフィシャルであることの証明書ですか！？」

「ま、そんなとこだが……。なんでそんなに驚くんだ？」

「だって、ただの証明書を送るのがなんで電波で送れないほど重いんですか？」

「ただのライセンスじゃないんだよ。それに、ただのライセンスだったらこんな『説明するぞ！』なんて意気込んでいわないだろ？」

「あ……そうですね……」

『早とちりすんな』

「ロックにそれを言われるとは……」

『あぁ！？それ、どういう意味だ！？スバル！！』

「……こういうことだよ」

『てめぇ！！』

「……続き、いいか？」

「あ、すみません、どうぞ」

「このライセンスにはいろいろ機能が入ってるんだ。まずは、ＷＡＸＡの入場証」

「……もう、入れるじゃないですか」

「お前らは今は指紋認証による身分証明によって入れるだけだ。これからはちゃんと職員として入れるぞ。まぁ、結局今までと変わらないけどな」

（変わらないんだ……）

「つ、次にパスポートの機能もある」

「……」

「そ、それはすごい！」

感動したのはスバルだけであった。

「あと、ある程度のレベルのロックやプロテクト、アクセス制限のかかってる物を開けたり、そういうのがかかってる電脳の場所に入

っていけるぞ」

「そ、そんなことして大丈夫なんですか？」

「任務の中には、犯罪者がハッキングしてファイヤーウォールの向こうに侵入したのを追撃しろ、なんてものもある。それでいて、こちらがファイヤーウォールにひっかかって任務遂行できませんでした、なんてことになったらバカみたいだろ？そのためだよ、それをいれるのは」

「なるほど……」

「そして、こっからが重要な機能だ。」

「い、今までのは重要じゃないんですか？」

「いや、そういうわけじゃないけど、こっちのほうが重要度は高い。まず、『ウェーブステーションシステム』」

「なんですか、それ？」

「名前のまんま、常にハンターの中にウェーブステーションの機能を持たせるシステムだ。」

『そんなことしてどうすんだ？』

『んもー、鈍いわね、ロック！』

『なんだと、ハープ！』

『ウェーブステーションがハンターの中にあるってことは、今まではウェーブステーションがないとできなかったことがハンターを使ってどこでもできるってことなのよ？』

『だから？』

『……やっぱり鈍いわよ。もう、単刀直入にいうわ。ウェーブステーションなしでウェーブロードに上がれるってことよ！きっと』

『……マ、マジかよ！』

「そ、ハープ、正解！」

「さらに、これは本来ウェーブステーションの機能じゃないんだけど、現実世界から直接、電脳世界に入ったり、なんてこともできるわね」

「へぇ、便利ですね！」

ミソラが言った。

「まぁな。これらは任務を迅速に処理できるように開発されたものだ。うまく使えよ。」

「はい」

「そんじゃ、二つ目。ノイズ制御プログラム」

「それって……」

「そう、ミソラちゃんにアシッド・エースのかけら収集に向かってもらうときに渡したものと同じものよ。あのあと、ようやく量産できるようになったの」

「犯罪者はノイズウェーブなんかに潜んでることも多いからな、必要だろう」

「ちなみに、二個持ってても無駄に容量を食うだけだから、ミソラちゃんに元々渡してあったノイズ制御プログラムは回収させてもらったわよ」

「わかりました！」

「次は特にいろいろと便利だぜ！『トレース機能（ファンク）』だ。」

「トレース？追跡？」

「そう、これを使うと画面に地図が表示される。……実際にやってみろよ。」

スバルたちは、ハンターの画面に表示されるようになった、「ＬＩＣＥＮＣＥ」のポップアップをタッチすると、メニューが表示された。

「この、『ＴＲＡＣＥ』ってやつですか？」

スバルは縦の二列に表示されたメニューの中の、右列の上から二番目にある項目を見て言った。

「そう。そこをタッチだ。」

タッチすると、画面に地図が表示された。それは今いる指令室を上から見たもので、中央に青い点が1つと、7つの赤い点、2つの黒い点がそれぞれ点滅している。

「この点はなんですか？」

「それは、青い点は自分、赤い点はサテラポリスの人間を指す点だ。それぞれの点をタッチすると、詳細が見れるぜ。」

スバルは青い点の隣にある赤い点に触れた。すると、右上にミソラの写真が表示され、その左に氏名、トランスコード、電波人間名などが表示された。それを横からミソラが覗き込み、目を見開いた。

「スバルくん、見ちゃダメっ！！」

ミソラは手でスバルのハンターの画面を隠した。

「ど、どうしたの、ミソラちゃん……？」

ミソラはそれには答えず、目を合わせてきた。頬がほんのりと赤かった。

「分かったよ」

スバルはそういうと、ミソラの詳細画面を閉じた。

「この先も、ホントに、見ないでね？」

「分かってる。ミソラちゃんにそこまで言われて、見ようとは思わ

ないよ」

《なんで見られたくねぇんだろうな？》

（さぁ……）

ウォーロックとスバルはミソラに聞こえないようにひそひそとしゃべった。

『……おい、スバル、メールだぜ』

「誰だろ？……って、ハープから！？」

『読んでみろよ』

「うん……」

《なんで見られたくないか分かってないみたいだからこのメール送るけど、女の子には見られたくない秘密があるのよ。・・・なんてこと書いてもピンと来ないと思うからはっきり言うわ。やっぱりミソラは女の子だから体重とかは人に見られたくないものなのよ。分かった？》

「……なんだ、そういうことか」

『どういうことだ？重さなんかどうでもいいだろ？』

「女の子は体重が重いと思われたくないんだよ、ロック」

『え？さっきの見たらそんなに重くなかったぜ？』

「いや、それでも……」

「おい、使い方分かったのか？」

「あ、はい、ＯＫです」

スバルはシドウに声をかけられて会話を打ち切った。

「ちなみに黒い点はサテラポリス外の人間で、……アシッド、ちょっと出てきてくれ」

『分かりました』

アシッドがシドウの隣に出現した。すると、ハンターの画面の赤い点のうちの１つの隣にオレンジの点が点灯した。

「……こんな感じで、サテラポリス所属のウィザードはオレンジ、そして今ここにはないがサテラポリス所属じゃないウィザードは紫だ。」

「うーん、どれがどの色か分かんなくなってきちゃった……」

ミソラが嘆いた。

「まぁ、いろいろ試して慣れていってくれ。そして、この地図上の点をタッチしておくと、その点の人間、またはウィザードが今どこにいるのか、現在地からどの方角にどのぐらいの距離のところにいるのかが瞬時に分かるようになる。」

「なるほど、だからトレースなんですね」

「そういうこと。これは使い道がいろいろあるから、どんどん使ってくれ。……じゃ、次がライセンス最後の機能だ。リレーション機能（ファンク）、だ。これは、サテラポリスメンバー同士、通信ができる。」

「通信……電話みたいな？」

「どっちかというと、無線に近いな。電話だと電波妨害を受けると交信できなくなるが、これはそんなことはない。緊急指令なんかは全部これでお前らに伝えられる。そして、逆にお前らがサテラポリス全員に通信することもできるぞ。」

「そんな機会あるかなぁ……」

「任務で増援要請とか、負傷者なんかを報告し、救助隊を要請したりとかな」

スバルもミソラも、シドウとの会話を重ねるごとに、オフィシャルという組織の責任の重大さや過酷さが伝わってくる気がした。

「もちろん、誰か個人にとか、少数の人間のみを選んで交信することもできるぞ。そして、戦闘の時にも使える。」

「戦闘の最中に交信なんてするんですか？」

「するさ。敵の分析なんかは、相談してやっていくのが一番だ。それに、戦闘時は攻撃の轟音で味方同士の声が聞こえないし、声を張り上げれば、こちらの作戦が相手にも伝わってしまうが、交信でき、声が味方だけに聞こえればコンビネーションも取りやすくなる。」

「な、なるほど……」

「さ、これで大体ライセンスの性能の説明は終わりだ。……いや、まだあったな。今まで言ってきたライセンスの機能だが、これらは電波変換時には頭の中で念じるだけで操作できる。」

「な、なんか難しそう……」

「大丈夫さ。コツさえつかめば簡単さ。そのコツをつかむのだって、1、2分あればできる。」

「そんなもんですか？」

「そんなもんだ。なんなら、これから電波変換して、操作の練習を……」

ビィーッ！ビィーッ！ビィーッ！

警告音が鳴り響いた。

１０、Ｈｏｗ　ｔｏ　ｕｓｅ（後書き）

・・・今回話が部分的に汚くてすみません

11、鏡からの使者（前書き）

X？、

Messenger from mirror

11、鏡からの使者

「な、なんだ！？」

「ＷＡＸＡ、サテラポリス全職員につぐ！ＷＡＸＡ内の電脳に侵入者あり！ＷＡＸＡ内の電脳に侵入者あり！繰り返す……」

「し、侵入者！？」

「このＷＡＸＡのセキリュティーを突破したっていうの……！？」

ヨイリー博士は息を飲む。

その場にいたトランスメンバー……もとい、オフィシャルウェーブバトラーたちのハンターに通信が入る。

「ＷＡＸＡ内にいるオフィシャルウェーブバトラーたちにつぐ！侵入者たちをデリートせよ！侵入者たちは移動経路から推測するに、メインコンピュータの電脳に集結するものと思われる！以上だ！」

「急ぐぞ！ＷＡＸＡの指令室に向かえ！ここから電波変換して向かったほうが早い！」

「了解！」

トランスメンバーは声をあげ、ハンターを腕に装着し、天に掲げて叫ぶ。

「トランスコード！！」

それぞれが自分の持つコードを唱えると、7人の人間は電波人間に電波変換した。

「いくぞ！」

そう言うと、アシッド・エースは彗星のような高速で移動する白い光となり、上に向かって飛んだかと思うと、上空のウェーブロードに沿って移動を始めた。

「ほ、本当にウェーブステーションなしでウェーブロードに……」

「ロックマン！わたしたちも！」

ハープ・ノートが話しかけた。

「うん！」

ロックマンもうなずく。

「……」

「……」

「……で、どうするの？」

『だから、頭に念じるんだろ！？』

「え、え～っと……」

（ウェーブロードに乗る、ウェーブロードに乗る、ウェーブロード

に乗る……）

ロックマンはいきなりグイッとひっぱりあげられるような感覚にとらわれた。

「うわぁぁぁぁぁ！！」

そして、足が地面につく、タン、という音がした。

「……び、びっくりしたぁ……。いきなりきたよ……」

『うろたえんな、みっともねぇ』

「う、うろたえてなんかないよ！」

そのロックマンの周りに次々と電波人間が上がってきた。

「な、慣れないなぁ……」

ハープ・ノートが少し困惑した表情で言った。

「そうだね……この頭に念じる操作（マインドコントロール）に慣れないと……」

「おい、早くいくぞ！」

ジャック・コーヴァスが言った。

「そうだ、こんなことしてる場合じゃない！」

7体の電波人間はアシッド・エースが去った方向に同じく彗星にな

って駆けた。

『……絶対おかしいぜ、スバル』

「なにが、ロック？侵入者のこと？そういえば、どう入ってきたんだろうね」

『そうじゃねぇよ！……でもまぁ、そっちも問題だな。指令で言ってたよな？『侵入者たちは移動経路から推測するに、メインコンピュータの電脳に集結するものと思われる！』って。ということはつまり、ＷＡＸＡがやつらを発見したときにはもうすでに侵入はされた後だったってことだ。侵入と同時に発見できたわけじゃねぇ』

「あのＷＡＸＡが侵入から時間を置かないと発見できないなんて、どうやったんだろ？」

『あぁ、それも分からねぇが、もっと分からねぇのが……』

『周波数ね』

声の方を振り向くと、深刻な顔をしたハープだった。

『おう、相手がウィザードか電波人間かはしらねぇが、同じ電波体のオレたちなら、少しはそいつらの周波数に気付けたはずだ』

『あの指令が侵入と同時に気付いてされたものなら、まだ納得できる。しかし、指令の数分前にすでに侵入されていたというのなら、おかしすぎる。気付かないわけはない。』

『あのアシッドまで気付かなかったとなると、なおさらだぜ……』

ウォーロック、ジェミニ、コーヴァスのやり取りを聞いてその場の全員に緊張が走る。

『キャハハハハ！面白いじゃない！ＷＡＸＡのセキリュティを突破して、私たちも気付けないほどの敵！久しぶりにあばれられるわよ！』

『あぁ、面白くなってきたぜ！』

「はぁ・・・平和ってないもんかなぁ……」

ロックマンはため息をついた。

その後、ロックマンたちは指令室にウェーブアウトして降り立った。

「遅いぞ！」

アシッド・エースが言った。

「すみません、ライセンスの操作に慣れなくて……」

「残念ながら操作の練習の暇はないからぶっつけ本番で使いこなせ」

「やってみます……」

「そんなことより！敵はどんなやつなんですか！？」

ハープ・ノートが言った。

「今、解析してる。」

アシッド・エースが親指で指した先でＷＡＸＡの職員が一生懸命キーボードを叩いている。エレベーターが着いた音がして、扉からヨイリー博士、ルナ、キザマロが出てきた。

「状況は!?」

「今、解析中です!」

「貸して!」

ヨイリー博士は職員が座っている横からキーボードに手をのばし、キーボードを目にもとまらない速さで打ち込んでいく。

「は……はやい……」

ロックマンは感心した。

『ばあさん……やるなぁ……』

「今更だな、２人とも……」

アシッド・エースが言った。

「いや、でもやっぱりすごいですよ!」

「……え!?」

「ど、どうしました?ヨイリー博士?」

「あ、ありえないわ……」

「……？」

「今、電脳の中にいる敵の映像をメインモニターに映すわ。」

その場にいる全員が一番大きいディスプレイに顔を向ける。そのディスプレイに映像が映った。

「……な！？」

「そ……そんな……」

「これは……」

そこには、アシッドエース、ハープ・ノート、オックス・ファイア、ジェミニ・スパーク、ジャック・コーヴァス、クイーン・ヴァルゴ、そしてロックマンが映し出された。

「こ……これはどういうこと！？」

ハープ・ノートがおびえた表情を浮かべ、両手を口にかざして言った。

「わ、分からない……でも……」

「でも……なんです？」

「でも、同じだわ。電波構造が……。相似率９９％・・・残りの１％は中身、心。それだけが、違う……」

『でも、これではっきりしたぜ、なぜオレたちが気付けなかったか、が』

「どういうこと？」

『周波数が自分たちと同じだからだ。』

「同じだと、分からないものなの？」

『人間だって臭いとこにずっといると、その匂いが気にならなくなるだろ？それと同じだ。自分の匂いは嗅ぎ慣れてるから、判別できねぇ。周波数も感じるのに慣れてるから分からねぇ。自分以外の奴にも同様のことが言える』

『自分以外の電波体の周波数は、あいつらの周波数をわたしらの周波数と誤認してたみたいね』

「……でも……電波構造も周波数も同じなら・・・強さは？」

「同じ、でしょうね」

クインティアの問いにヨイリー博士が応えた。

「それって……勝てるのか？」

オックス・ファイアが言った。

「勝てる、勝てないじゃなくて、勝つの。」

ハープ・ノートの声に、視線が集まる。

「あいつらのいるとこはメインコンピュータの電脳……。あんなとこで暴れられたら、ディーラーのロックくんのコピーにやられたときみたいに、壊滅的なダメージがＷＡＸＡにかかちゃう……。それは避けなきゃ」

「ハープ・ノートの言うとおりだ」

今度はアシッド・エースに視線が集まった。

「行くぞ、これがオフィシャル初任務だ！侵入者をデリートせよ！」

「了解！」

7人は叫んだ。

「直（ちょく）でサイバーインするぞ！ついてこい！」

アシッド・エースは再び彗星になり、メインコンピュータに直接ぶつかって消えた。

7つの、6色の彗星がそれに続く。

電脳の中に入ると、アシッド・エースが立っているのを見てみんなもその周りに降り立った。

「……なるほど、確かにすぐ慣れたな」

ロックマンが満足そうにつぶやいた。

「どうしたんですか？アシッド・エース」

「ここで、回線をつないでおくぞ」

「回線……リレーション機能（ファンク）、ですか？」

「そう、例のように頭で操作して自分以外の6人とつなぐんだ。全員が繋がれば、どれほど離れてもいまこうして話しているように全員に伝わる」

「……」

ロックマンは目を閉じて心に念じる。

「……あー（あー）、聞こえますか？（聞こえますか？）」

「ロ、ロックマンの声が二重に聞こえる……」

「よし、成功だ。本体の声と通信で聞こえる声、二つが聞こえてるんだ。ロックマン、もうちょい調整してみ？声のダブりがなくせるはすだ」

「あー（あー）、あー（あー）、あー……あ、できた」

「よし。ほら、お前らも！」

「……」

「きこえますかー！！！？」

キーン……

急に大きな声が聞こえ、みんなは耳を押さえたが、押さえていない者が1人……

「み、みんなどうしたんだ！！！？」

キーン……

「オ、オックス・ファイア……マイクの感度上げすぎ……」

ハープ・ノートがぐったりして言った。

「そ、そうか！！！？ごめん！！！」

キーン……

「だ、黙って下げろ！」

「……。……どう？」

「お、ＯＫ……。大丈夫だ……」

「まさか、敵と戦う準備でこんなダメージをくらうなんてな……」

「耳おかしくなったら今後の歌手活動に差し支えるよー！」

ハープ・ノートが半分泣きながら言った。

「ご、ごめん……」

オックス・ファイアがしゅんとなって謝った。

「よ、よし、全員繋いだな。それじゃ、いくぜ！」

「はい！」

再び7色の彗星となって電脳の奥を目指した。
そして、電脳の最奥。

「この辺りのはず……」

「だれもいないね……。って……！？」

「これは……！！」

「……ロックバスター！！」

ロックマンがいきなり振り返り、斜め上の何もない場所に向かって黄緑色の銃弾を放った。だが、見えない何かがにぶつかり、光球は霧散した。

「よく分かったね……」

スゥー……と何もない空間に色が着き始め、ロックマンそっくりな電波人間が現れた。それに合わせて他の7体も、偽ロックマンの両隣に現れた。

「インビジブル……じゃないみたいだね……」

「まあね。……でもどうして分かったの？」

「さぁ？でも、みんなも分かったんじゃない？」

ロックマンはバスターを偽者に向けたまま、不敵な笑みを浮かべて言った。

「まあな。ヨイリー博士のお陰だぜ！」

「ついさっき、ライセンスのトレース機能（ファンク）にやつらの情報が送られてきたからね！」

「頭の中にやつらの位置が浮かんできた……。なるほど、使えるね、トレース機能（ファンク）」

「さっきから何言ってやがる！？」

向こうのオックス・ファイアが叫んだ。ロックマンの問いかけにみんなは回線で会話していたので、偽者側には聞こえていなかった。

「それより……お前ら、なんなんだ？」

「見りゃ分かんだろ？」

そう言いながら、偽ジャック・コーヴァスの腕に紫色の炎が宿った。

「オレらは、おまえらだ！ペインヘルフレイム！」

11、鏡からの使者（後書き）

サブタイトルが「鏡からの使者」ですが、これはただ単に本物と偽者が向かい合うと鏡みたいだね、っていうだけです。ただ、物語が完結してからこのタイトルを見るとそれだけではなくなりますが。

リレーション機能（ファンク）は、いわゆるテレパシーみたいなものです。精神制御（マインドコントロール）でやると、テレパシーのような通話が可能になります。

・・・あ、マインドコントロールの意味が違うだろ、とか言わないで～！（汗）

12、I VS I（前書き）

X？、

自分　対　自分

12、I VS I

紫の炎が無数に飛来する。

「散れ！！」

アシッド・エースの掛け声で8人は7方向に避けた。

「……！！」

避けた先には、自分が待っていた。

「やっぱり、自分と戦わないとダメ？」

アシッド・エースが言った。

「当たり前だろ？」

偽ジェミニ・スパークBが言う。

「自分と戦うと面白くないんだよ、スキルが同じで！」

ジャック・コーヴァスが叫んだ。

「……そ。でも、そのスキルの高さは違いがあるのよ」

偽クイーン・ヴァルゴが呟いた。

「どういうこと？」

ハープ・ノートが問う。

「ぐだぐだ言ってねぇで、闘るぞ。」

偽オックス・ファイアがしゃべる。

「それしかないみたいだね……」

ロックマンは唇を噛んだ。

7組の電波人間が同じ内容の会話を交わし、構えた。

そして、8つの口から同じ言葉が発せられた。

「ウェーブバトル！ライド・オン！」

「バトルカード！ブレイクサーベル！」

左腕にサーベルを出して切りかかった。

「……ロングソード」

ギィィィン！

「……やっぱりバトルカードは使うか……」

キリキリという鍔迫り合いの音をかき消すように言った。

「当たり前だろ、お前が使うなら」

「ショックノート！」

「パルスソング！」

音符と音波がぶつかって相殺した。

「技も同じか……」

顔をゆがめて言う。

「言ったでしょ、わたしはあなただって」

「ファイアブレス！」

「アンガーパンチ！」

炎が殴られ、消えた。

「な、殴った……だと……！？」

目を見開いて叫んだ。

「驚くなよ、お前の技だろ」

「ロケットナックル！」

「エレキソード！」

本物組のナックルが偽者側のソードにぶつかって押し合っていたが、押し返された。

「こちらの手の内全部知っててやりづらいな……」

ナックルを左腕に戻しながらホワイトは言った。

「それはお互い様だろ？」

「グレイブクロー！」

「フェザーシックル！」

紫の炎の塊が羽根の刃（やいば）に切り裂かれた。裂けた炎の奥にこちらをにらむ顔が見えた。

「めんどくせぇな……」

「同感だ」

「アクアウェーブ！」

「ハイドロドラゴン！」

「！！」

アクアウェーブを突き抜けて水の竜が迫ってきた。

「くっ！」

それを間一髪で避ける。

「……なに？もうピンチなの？拍子抜けね……」

「オメガレーザー！」

「ロックオンソード」

レーザーに向かって何のためらいもなくソードを振り下ろす。切られたレーザーは二つに分かれてどこかへ飛んで行った。

「オメガレーザーを切るか……」

ギリッと歯ぎしりをして言った。

「スカスカなんだよ、お前の攻撃は」

「……パルスソング！」

フィーチャリングハープギターからハート型の音波が放たれた。それは相手の腹に命中した。

「よし！」

グッと拳を握る。……が。

「えぇ！？」

着弾の際の爆煙が晴れると、何事もなかったように偽ハープ・ノートが立っていた。

「……まぁ、避ける必要なんてないんだけどね」

「そ、そんな……」

「ほら、どんどん来なよ。一発くらい効くかもよ？」

「くっ！」

自身の軽量な体を利用して、素早く動き、ショックノートを放つ。それは足、背中、胸、腕、首筋と命中していくがどれも傷一つつかない。

「マシンガンストリング！！」

ギターを銃のように構え、先端から五本の弦を放つ。偽物は腕を頭

の前にかざしてそれを素手で掴んだ。

「!?」

「……フン」

偽者は不敵な笑みを浮かべた。

ブチッ!

何かがちぎれる音がこだまする。偽者はもう片方の手も使って弦を引きちぎっていた。

「……!!」

「……だから、無駄なんだって。あなたの攻撃全部。」

ハープ・ノートの前にちぎられた弦がタンポポの綿毛のようにふわふわと飛んできた。
それを見て顔をゆがめる。

「そんなこと……ない!!」

ハープ・ノートはギターを構えた。

ギィン、ギィン、ギィン!

刃と刃がぶつかる音が次々に聞こえてくる。

「……ヘビーキャノン！」

右手をピンク色の銃に変えて撃った。

相手はそれを軽くロングソードで切り裂き、一気に距離を詰めてきた。

「く！」

ロックマンは素早くブレイクサーベルを構えてロングソードを受けた。

「よく反応したね！」

「ウォ……ウォーロックアタックまで……」

「今のがそれだって分かっただけでも大したもんだよ」

「なんでそこまでこちらの技を持ってるんだ！？最初のロックバスターを防いだのも、シールドだろう！？」

「正解！見えてなかったのによくわかったね」

「なんなんだ、お前ら一体……！」

「ヒントあげようか？あいつらが生まれたのは４カ月くらい前だ」

「４か月……？それってメテオＧと戦ってる時……？」

「そう、それと入れ替わるようにして生まれたんだ、やつらは」

偽ロックマンは辺りを見回し、闘っている偽者たちに目をやりながら言った。

「『やつらは』……？お前は……？」

「ボク？ボクはキミと同じくらいの長さを生きてきたよ」

「お前だけ違うっていうのか！？」

「そ。名前もあいつらには本物と同じ名前しかないけど、ボクにはある。」

偽ロックマンはそう言いながら力を強めた。

「こ、こいつ……！！」

「ボクの名前は、グレイだ！！」

ギィィィィン！

そう言いながら押し合っていた刀をロックマンの体ごと押し返した。

「ぐっ……！！」

ロックマンは電脳の地面に激突し、大きな轟音と土煙が起きた。

12、I VS I（後書き）

……え？途中、BLEACHっぽかったって？・・・・・・な、なんのことだろう、ボクにはよく分からないなぁ……

13、それぞれの戦い（前書き）

X？、

Each fight

13、それぞれの戦い

「スバルくん！！」

ハープ・ノートは煙に向かって叫びを上げた。

「人の心配してる暇、ないんじゃないの？」

「！！」

背後から声がし、背中に何か固いものが突きつけられる。ハープ・ノートはバク宙で、すれすれで五本の弦を避けた。

「へぇ、ほぼゼロ距離なのに、よく避けたね！」

「このっ……！パルスソング！」

逆さまで宙を舞いながら、音波を放つ。それは相手の肩に当たったが、やはり傷はつかない。

「どうなってるの！？」

隣にハープが現れて言った。

「こいつら……ただ同じじゃないね……」

「ワイドウェーブ！」

相手の放った水の衝撃波をロックオンソードで切り裂き、ロックオンサイトを相手に合わせる。そして距離をつめ、ソードをふるった。

ギャァァァン！

火花が散り、二つの刃がぶつかりあった。

「……ワイドウェーブを切ってから切りかかるまでが遅いぞ」

「偽者に戦い方の忠告なんて食らいたくないね」

「そうか？偽者だろうとなんだろうと、強い方には忠告する権利があるとは思わないか？」

――強い方、か。確かに押されている。

「アシッド、何か分からないか？」

ソードをふるって押し返し、距離をとって言った。隣にアシッドが現れる。

「ヨイリー博士のおっしゃるとおり、電波構造は酷似しています」

「電波構造も周波数も同じなら、なんで向こうの方があんなに強いんだよ！？」

「組み込まれたプログラムが違うか……精神的なものの作用か……はたまたシンクロ率か……」

「シンクロ率!?あいつら、電波変換してるのか!?」

「そう」

偽のアシッド・エースが呟くように言った。

「やはり気付いたか……さすがはアシッドということはある」

「どういうことだ!?アシッド!?」

「やつらは最初から電波人間なのではなく、ちゃんと電波変換をともなって電波人間になっています。人間体のＤＮＡや電波体の周波数も本物と酷似していることから、おそらくクローン人間のような形で作った人間のコピーと、かつてのウォーロックコピーのような電波体のコピーが電波変換しているものと思われます。」

「人間までコピーした……!?じゃ、あのアシッド・エースも暁シドウとアシッドが電波変換してるのか!?」

「そうです、暁シドウ」

声がした方を見ると、偽アシッド・エースの隣にアシッドが現れた。

「……!!」

「さすが、本物ですね。わたしと同じぐらい解析が早い」

「アシッドだと……!?Ｐｒｏｊｅｃｔ－ＴＣでさえ、次なるアシッドのような存在を作るのに苦悩してるというのに……。それに、人間のコピー……。これじゃ、裏にＷＡＸＡと同等の組織と

施設があってもおかしくはないな……」

「そんなものありませんよ……」

偽アシッドが言い放った。

「人間と電波体のコピーだと……！？」

「そんなことが……」

「ロケットナックル！！」

「！！」

2人は飛んでくるナックルを避けた。

「じゃあ、お前らも双葉ツカサとヒカルだっていうのか！？」

ジェミニ・スパークBが言った。

「そうだよ！似た者どうし、よろしく！」

「『似た者』どころか同じじゃねぇか……」

偽のホワイトの発言にブラックが突っ込んだ。

「ヒカル……」

「あぁ……」

ジェミニ・スパークはホワイトが左腕、ブラックが右腕を突き出し、その二本の腕を組み合わせる。

「へへへ……」

「じゃ、こっちも！」

そう言うと、偽者も同じ動作で腕を組み合わせた。

「……！！」

「本物と偽者、どっちの技が堅いか、勝負といこうじゃねえか！」

「くっ……！！」

「ジェミニサンダー！！」

四人が同時に叫び、電流の衝撃波が発射されぶつかり、轟音と爆風を産んだ。

「キャハハハハ！自分たちのコピーかぁ！おもしろ～い！」

「こっちはあんた達が弱すぎて面白くとも何ともないって～の！キャハハハハ！」

ヴァルゴが2人集まると、一段とうるさかった。

「面白くないんならなんで笑ったのよ」

「弱いくせに戦いを面白がって、もう笑うしかないのよ！キャハハハ！」

「はぁ……」

騒がしいのに慣れないクインティアは相手が強いのともう一つ別の、頭を悩ませることがあった。

「何アレ～、感じ悪～い！ティア、やっちゃうわよ！」

「あなた、テンションが下がることはないの……？」

「今がダダっ下がりよぉ！まったく調子がくるうわ！」

「下がってそれって……はぁ……」

「ため息ついてる場合じゃないわよ」

「……」

いつの間にが偽者がすぐ目の前に来ていた。

「ライトオブ……」

「ハイドロドラゴン！」

クイーン・ヴァルゴは素早く杖から竜を出した。

偽者はモロに食らい、後ろに吹っ飛んだ。

「ゴッドレイン！！」

さらにそこへ雨を降らせて攻撃した。

「アクアヴェール！！」

しかし、それは水のバリアに阻まれた。そして、バリアの雨が当たった部分からクイーン・ヴァルゴに向けてアクアウェーブが迫ってきた。それを跳んで避ける。

「やるじゃない、今のコンボ。」

「わざわざ、受けたわね」

「まあね、どうするのか見てみたかったの」

「余裕ね……」

「戦いに関してはね。でも、うるさいのがいるから精神的には余裕ないのよ」

「それは同感だわ。そこだけはね」

「なら、うるさいのが嫌いなもの同士、仲良くしましょうよ」

「それは共感できないわね」

「つれないわねぇ……」

「うるさいの、って誰のことよ～！？」

2人のヴァルゴが叫んだ。

「うるさいのは無視して、さっさと終わらせましょ」

「えぇ、私の勝利でね」

2人のクイーン・ヴァルゴは杖をふるった。

「うるさいの、っていうな～！！」

「アンガーラッシュ！！」

赤い闘牛たちは、次々に炎のパンチを打ち込んでいく。しばらくは一進一退の攻防が続いていたが、その後偽者のパンチが腹に食い込んだ。

「ぐはっ！！」

オックス・ファイアが後ろに吹っ飛んだ。

「な……なんてパワーだ……」

「パワー対パワーなら、力の大きい者が勝つ。そういうもんだ」

「この……オックス・タックル！！」

角を相手に向けて駆けだした。

「無駄だってわかってんだろ？……オックス・タックル！」

赤い巨体がぶつかりあい、本物が吹き飛んだ。

「ぐ……」

「あきらめな」

しかし、オックス・ファイアは立ちあがった。

「まだやるのかよ。もうあきたぜ」

「やるさ。こっちは頑丈だけが売りなんでね！」

「はぁ……」

「それに……」

オックス・ファイアはちらりとロックマンを呑み込んだ煙に目を向けた。

「……約束は、誓いは守らねぇとな。男には二言はねぇ！」

「ふ～ん……じゃ、やってみろよ」

「言われずとも、やるさ！ファイアブレス！」

「ペインヘルフレイム！」

紫の炎が偽者に迫る。

「フェザーシックル！！」

無数の炎の塊を翼の刃で切り刻んでいく。

「無駄だと何度言わせれば……」

ドン！！

偽者に何かがぶつかり、偽者は後ろに飛ばされた。

偽者が元いた場所には、降下姿勢をしたジャック・コーヴァスが浮いていた。

「……エアロダイブか。無数の炎を放つことで一時的に自分から注意をそらし、攻撃を当てた、ってとこか……」

「ご名答……」

「でも、効かねぇな」

「！！」

確かに傷はついていない。

「……やっぱりやりづれえな……」

「やりづらいと感じるのは当然だ。そういうふうに生まれたんだから」

「コピーの方が強いなんてな……。そんなのアリかよ……？」

「現実を認めろよ」

「認めてるさ。ただ、その現実がめんどくさいと思ってるだけだ」

「めんどくさがりだな、てめぇ！それなら、めんどくさいと思えなくしてやろうか？」

「おう、たのむわ。お前が負けるって意味だろ？」

「お前が死ぬって意味だよ！」

2人の腕に再び炎が宿った。

「こんなもんか？」

グレイが煙に向かって言い放った。

「はやく出てきなよ！」

「ショッククロー！」

グレイが姿勢を低くすると、その上を緑の衝撃波が走った。

「なるほど、ノイズチェンジか？」

グレイが後ろを見ると、鈍い緑のボディに両肩から二本ずつ爪のような刃が突き出した姿のロックマンが立っていた。ロックマンは右腕を顔の前にかざした。右目がグレイを鋭い目つきでにらんでいる。

「……マージノイズ！」

「……」

右腕を振り払うように振り下ろす。

「……ジェミニ！」

体が黄色に変色した。

「へぇ？」

グレイは不敵に笑った。

「ロケットナックル！」

左腕を飛ばした。それはグレイに迫ったがそれは横に動いて避けられた。

「エドギリブレード！」

そこへ銀色の閃光が走る。それをグレイはロングソードで受けた。

「なるほど、ウルフノイズでソードを強化したわけだ。」

「……そうだよ」

「そしてジェミニでマヒを狙う。そうだろう？」

「……」

「じゃ、ボクもやろっかな」

「……？」

グレイはそう言うとエドギリブレードとロングソードの鍔迫り合いのまま右手を顔のまえにかざした。

「まさか！」

「……マージノイズ！オヒュカス×ウルフ！」

腕を振り下ろすと、ロックマンと同じ形ではあったが、色がエメラルドグリーンの姿になった。

「バトルカード！ウッドスラッシュ！」

ロングソードが緑色の剣に変わった。

「くっ！！」

ロックマンはエドギリブレードに力をこめてグレイを振り払い、距離をとった。

「そんな……ノイズチェンジまで！」

「しかも……マージノイズをしたってことは、こいつ、キングＰＧＭを・・・？」

ウォーロックが言った。そう、マージノイズは先ほどキングＰＧＭをもらって出来るようになった代物（しろもの）だ。

「あ、ありえない……！」

「こいつだけ別格っていうのは本当みたいだな……」

「一応言うけど、僕はそのキングＰＧＭってのは使ってないよ」

「そうだろうな。使ってる方が不自然だ」

「でも、それならどうして……？」

「自分で考えな！」

そう言うと、再びウォーロックアタックで距離を詰め、切りかかった。

「ぐ……っ」

ウルフノイズのソード強化と木属性強化、そしてオヒュカスノイズの木属性強化の能力で大幅に強化されたウッドスラッシュはかなりのパワーだった。切り合いながらロックマンは言った。

「お前……ほんとになんなんだ！」

「お前より強い、お前さ！」

ハープ・ノートは肩で息をしていた。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

「どーしたの？もう終わり？」

「……まだまだぁ！」

再びさまざまな方向から攻撃をする。

「またそれぇ？」

「……パルスソング！」

音波は偽ハープ・ノートの頭めがけて突き進んだが、偽者は首だけを動かして避けた。

「意味ないって……」

ドゴォォォン！

背後から音がして振り返ると、偽オックス・ファイアの頭が煙に包

まれていた。

「……へ～、なるほど、うまく誘導して、わたしとオックス・ファイアと自分を一直線上に結び、仮に避けられても不意打ちできるようにしたわけね……」

煙が晴れていく。

「……でも、ダメ」

煙が晴れると、傷が1つも付いていないオックス・ファイアの首があった。目がハープ・ノートを睨んでいる。

「……！！無傷！？」

「当たり前だろ？お前の攻撃など効くわけねぇだろ！？」

「……じゃあ、なんで……」

あのとき……あんなことをしたのだろう？

「何を考えてるの？」

「……」

「応える気はなしか……。じゃ、お前から死ね！ファイアブレス！」

偽オックス・ファイアは口に炎をためた。

「ちょっと、オックス・ファイア!?この娘はわたしの相手よ!」

「うるせぇ!なめたことしてきやがって……腹の虫が収まらねぇんだよ!」

「アンガーパンチ!」

偽オックス・ファイアの胸に拳が叩きつけられた。

「ぐあっ!!」

「お前の相手はオレだろ!ミソラちゃんに手を出すな!!」

「ゴ、ゴン太くん……!?」

「だ、大丈夫か!?ミソラちゃ……いや、ハープ・ノート!」

オックス・ファイアはハープ・ノートに目を合わせた。しかしハープ・ノートの目はこちらではなく、その向こうを見て目を見開いていた。

「ゴ、ゴン太くん……そ、そいつ……」

「ん?そいつ?」

オックス・ファイアが視線を戻すと偽物がぐったりしていた。

「……?いきなり、効いた、のか……!?」

すると、オックス・ファイアの拳が触れている部分から崩壊が始ま

り、それが全身におよび、偽者のオックス・ファイアは消滅した。

「消えた……？勝ったのか！？やった！なんか知らんが、勝ったぜ！」

すると、ハープ・ノートが近寄ってきた。

「ハープ・ノート、やったぜ！オレ、アイツを倒したぜ！……ってどうした、ハープ・ノート？」

ハープ・ノートはオックス・ファイアの言葉には見向きもせず、興奮した面持ちでオックス・ファイアの体を見回している。

「……もしかして！」

ハープ・ノートは振り返り、自分の偽者をまじまじと見た。そして、口角を上げた。

「……ありがとね、オックス・ファイア……いや、ゴン太くん」

「どうしたんだ？ハープ・ノート？」

普段ならミソラにお礼を言われたら跳んで喜ぶところだが、ミソラの様子がおかしいのを見て、ゴン太は聞いた。

「お陰で分かったよ！」

ハープ・ノートは振り返り、オックス・ファイアに笑顔を送った。

「……何が？」

オックス・ファイアは少し照れながらも聞いた。

「……あなたたち、偶然オックス・ファイアを倒したからって、いい気にならないでよね？」

偽ハープ・ノートはいらいらと言った。

「あ、ゴメンゴメン、取り込んじゃって！それじゃ、

あなたの脳天ぶち抜いてあげようか？」

ハープ・ノートは急に不敵な笑みを浮かべて言った。

「！！！」

偽ハープ・ノートだけじゃなく、それを通信で聞いていた味方も驚いた。

「……ミソラちゃん……？」

ロックマンはぞくっとした。まさか、ミソラの口から「脳天ぶち抜く」なんて言葉が出ると思わなかった。

「……言うじゃねーか、ミソラも」

ジャック・コーヴァスが言った。その他、味方は全員驚いた……アシッド・エース以外。

「『脳天ぶち抜く』……!?」

アシッド・エースはハープ・ノートとオックス・ファイアを交互に見た。そして、

「……フッ」

鼻で笑った。

「何がおかしい?」

偽アシッド・エースが言った。それを無視して通信で話した。

「よく気付いた! ハープ・ノート!!!」

「え? 気付いた? 何を?」

ツカサはわけが分からないという顔をした。

「だから、何を言ってる、と聞いてるんだ!!」

偽アシッド・エースがそう言って切りかかった。

「つまり――――

アシッド・エースはいきなりロックオンソードを偽者の頭に振り下ろした。

切りつけられた偽アシッド・エースは、切り口からみるみる崩壊して消えた。

「こういうことだろ？」

アシッド・エースはハープ・ノートを見ていった。ハープ・ノートはそんなアシッド・エースに笑顔を送る。

「あの偽者を一撃で……」

クインティアが感嘆の声を漏らした。

「……さて、そろそろいいかな？ね、ハープ？」

『そうね、もうここまで来たらいいんじゃない？』

「何の話？」

偽ハープ・ノートは本物を睨みながら言った。

「とぼけなくてもいいよ、もうばれてるから。あなたもさっきので

わたしが気づいてるってわかったはず」

「だ……だから、なにがだ！」

「ほら、図星だから口ごもった」

「く……」

「じゃ、いくよ！バトルカード！ムラマサブレード！」

１４、成長した自分（前書き）

Ｘ？、

Ｍｙｓｅｌｆ　ｗｈｏ　ｇｒｏｗｓ　ｕｐ

１４、成長した自分

ギターが消えるのと同時に、ハープ・ノートの胸ほどの高さに日本刀が出現する。それを彼女が握ると、刀身に禍々(まがまが)しいオーラがまとわれた。それを彼女は空を切って斜めに振る。その眼は闘志に燃えていた。

「あなたがバトルカードを使うなんてね……。それに、ムラマサブレードってことは今までの受けたダメージを攻撃力に反映させるつもりだろうけど、あなたがバトルカードを使ったって、たいして――――

ギィィィン！

音が鳴り響く。見ると、ハープ・ノートがムラマサブレードを振り下ろし、それを偽者がギターで受け止めていた。

――――速いな

偽ハープ・ノートは悔しげに眼を細めた。

「……やっぱり。まぁ、もう１００％なんだけど、そうやってハープ・ノート(わたしたち)の全ての攻撃の要であるギターを使って、しかも両手で防ぐなんて、どう考えても要領が悪すぎるよ。そこまでして防いだ理由は――――

剣で相手を突き飛ばしながら言った。

「１つ！！」

ドゴォォォン！！
偽ハープ・ノートが地面に激突し、轟音が鳴り響き、煙が上る。それをハープ・ノートは見下ろして言った。

「……マークが弱点なんだよね？あなたたち」

「え？マーク？」

ロックマンが見開いた。

「……どの電波人間にも、電波変換した電波体のマークがある。そこがあなたたちの弱点。そうでしょ？」

煙が晴れ、偽のハープ・ノートが尻もちをついたような体勢で地面にはりついているのが見えた。

「くっ……」

偽ハープ・ノートは顔をゆがめた。

「……あなたはわたしが最初にいろんな方向からやった攻撃をその身に受けていたのに、頭狙いのマシンガンストリングだけは手で握って引きちぎった。それは目の前に攻撃が飛んできた視覚的な恐怖でその頭に受けるのを恐れただけかと思ったけど、攻撃は首筋に当たったのもあった。視覚的な恐怖がある人なら、首筋への攻撃にも恐れるはず。でも、それをしなかった。だから、最初は頭が弱点だと思ったの。」

「そ……そっか……それをあの直線に並べた攻撃で確かめたん

だね……」

「そう、わたし、あなた、そしてオックス・ファイアの偽者を直線上に並べた攻撃であなたかオックス・ファイアの頭を打ち抜けばどっちかは消えると思ったのだけど……あなたはやっぱり避けて、当たったオックス・ファイアは消えなかった。だから弱点は頭じゃない、じゃあハープ・ノートの頭にあってオックス・ファイアの頭にないものは何？って考えているところに、本物のオックス・ファイアのパンチが胸に当たり、偽者は消えた。そして、オックス・ファイアの胸にあるものは……」

「オックスのマーク……ってわけね……」

「そう！１人だけじゃ少し不安だったけど、アシッド・エースもわたしの考えに気がついてくれて実行してくれた。そして、アシッド・エースの偽者も消えた……。これで、もう９０％が１００％になったの」

偽ハープ・ノートはよろよろと立ちあがった。

「よく……気がついたね……」

「うん……ホントは今のあなたみたいな弱った人に止めを刺すのは嫌なんだけど、わたしもオフィシャルに入っちゃったからね、生かすわけにはいかないの。分かってね」

「負けてそのまま生きようなんて思わない。来るなら来て！」

「分かった……！！」

ギュン！！

風を切る音がし、その勢いを殺さずに偽者に切りかかった。

「ハープ・ノート……なんであんな速いの？」

ロックマンが疑問を口にした。そこへ通信が入る。

「もともとハープ・ノートは、体重がないんだ。」

「体重が……ない！？」

「そう、体重０ｋｇ。そうすることで、回避能力を上げてるんだ。体の動かし方さえ分かれば、あのくらいのスピードは造作もないさ」

「でも、あんな、ソードを使うところとか、見たことないですよ？それになんであんなに洞察力が……？」

「そりゃ、そうだ。俺がそう鍛えたんだから」

「え？鍛えた？」

「そう、ほら、あいつ、クロックマンにさらわれたことがあったろ？それから戻ってきたら、オレに泣きついてきやがったんだ」

「な……なんで……」

「『わたしの弱さが、とうとう２００年前という帰れるかも分からない世界にスバルくんを連れ込んでしまった。もうスバルくんには迷惑はかけたくない。だから、強くなりたい』ってな。あいつ、そ

うとう責任を感じてたみたいだぜ？」

「……！！そんなこと、ボクには全然……」

「……あっ、スバルくん！？そっか、助けに来てくれたんだ！ありがとう、いつも迷惑かけちゃってごめんね……」

「そんなこと……それよりも、ミソラちゃんが無事で本当によかった……」

「スバルくん……」

「それも、そうとう悔しいのを我慢して言ったんだろうな。あいつは女優でもあるだろ？そのくらいの演技はできたんだろ」

「そんな……ミソラちゃん……」

「そのときは俺も生活レベルはできるようになってたが、戦闘をするにはリハビリが必要でな。ハープ・ノートとの修行ってのはいいリハビリになった」

「そ……そうだったんですか……」

「さっき、お前ら俺が病院生活以降は何をやってたか聞いたろ？それをミソラが制したよな？あれは修行の話をしたらそれの理由も言わなきゃいけなくなるのを恐れたんだろう。さっきは分からなかったが、今思えばそれを本人の前で言うのは恥ずかしいし、スバルがそれで余計に心配してしまうのもあいつは望んでなかったんだな。」

「……」

「今、こうしてお前らにしゃべってるのも、あいつは望んでない事かもしれない。でも、あいつは自分から成長した自分を見せた。つまり、こうして話されるのも承知の上だろう。だから、スバル、お前はあいつの戦いを見守ってやってくれ」

「……はい」

それを聞いていた本物側だけでなく、偽者側も、戦いをやめてハープ・ノート同士の戦いを観戦していた。

「わたしの弱点はわたしが一番わかってる。わたしの弱点は近距離戦に弱いこと、一撃の威力が小さいこと！」

偽者のギターから飛んでくる音波をよけながら言った。

「だから――」

ザシュッ……

「こうやって一気に距離を詰められたら何もできない」

偽ハープ・ノートのヘルメットのハートマークに深々とムラマサブレードが突き刺さった。

「ごめんね……」

ハープ・ノートは偽者に憐れみの目を向ける。

「あ……あ……」

「……」

ハープ・ノートが刀を引き抜くと、その刀傷から崩壊が広がり、そして消えた。

「やっぱり、偽者とはいえ自分が消える姿は見ていていいものじゃないね……」

ムラマサブレードを消してギターを戻しながら言った。

15、We VS I（前書き）

X？、
自分たち　対　自分

15、We VS I

「た……倒した……」

「よし！オレ達も！」

ジャック・コーヴァスの声を聞き、ジェミニ・スパーク、クイーン・ヴァルゴ、そしてロックマンが構えた。

「何が『オレ達も』、だ」

「……！！」

「弱点を見つけても、これで終わらせれば何の意味も持たねぇ！」

「エアロダイブ！！」

「ジェミニサンダー！！」

「ライトオブセイント！！」

偽者側がそれまで観戦していたその隙をついて攻撃した。

「く……っ」

「やべぇ……！」

「この……！」

「な……！」

本物側全員が敗北を覚悟した。

「アンガーパンチ！！」

「ロックオンソード！！」
「パルスソング！！」
「……！！」
偽者の攻撃はすでに偽者を倒した3人の攻撃に阻まれた。
「大丈夫ですか、クインティアさん！」
「ミソラちゃん……！」
「油断すんじゃねぇよ！」
「へ、さっきまでボコボコにされてたやつが偉そうに！」
「すみません、アシッド・エース……」
「オフィシャルならもっと注意力を働かせないとな！」
味方同士の話を終え、偽者と向き合った。
「……ご苦労なこったな、連戦だろう？お前ら」
「まだ闘う力が残ってるってのに観戦してるわけにもいかないんでね！」
「それで死んだらどうするの？」
「大丈夫、もう迷惑はかけないって誓ったから！」

「めんどくせぇ……」

「さっき人に『めんどくさがり』とか言っといて、自分もじゃねーか！」

「ア、アシッドエース……助けてくれてありがとな……。でも、もう大丈夫だ。ロックマンのほうに向かってくれ……！」

「何言ってんだ、ブラック。俺らはあいつに頼まれて助けたんだぜ？」

「ロックマンが！？」

「スバルく……ロックマンはみんなを巻き込みたくないって言ってたの。」

「だからって、こっちに来たってのかよ！？」

「そうだ。大丈夫、あいつは本番に強い、勝つさ」

そう言いながら、アシッド・エースが悔しそうに目を細め、ハープ・ノートが唇を噛み、オックス・ファイアが震える拳を握ったのをそれぞれが見逃さなかった。

「……だったら、ちゃっちゃとこいつら倒してロックマンを安心させないとな」

「おー、話がわかるねー、ヒカルくん！」

「さ、行くぜ！」

「はい！」

そして戦闘の火ぶたは再び切って落とされた。

「ファイアブレス！！」

「グレイブクロー！！」

赤と紫の炎が偽ジャック・コーヴァスに迫る。

「ペインヘルフレイム！！」

無数の紫の炎が二つの炎を相殺した。

「……アンガーラッシュ！！」

オックス・ファイアが地面にどんどん拳を振り下ろし、その度に空いた穴から火柱が昇る。

「フェザーシックル！！」

ジャック・コーヴァスが偽者を連続で切りつけていく。

「はっ！オックス・ファイアの攻撃で逃げ場をふさぎ、お前が攻撃を与えようとしているみたいだが、無駄なことだ！」

刃を偽物はひらりひらりと華麗に避けていく。

「バトルカード、スカルアロー！」

声がした方を見たときには遅かった。３本の矢が偽ジャック・コーヴァスの羽根に刺さった。

「こんなもの……」

なんでもない、と言おうとしたが、自分の体に異常を感じて言えなかった。

「な……なんだ、こりゃあ……」

偽ジャック・コーヴァスが落下を始めた。

「知らねーのか!?スカルアローは当たった相手を移動不能にするんだぜ?ジャック・コーヴァス、いいぞ！」

「おう！ペインヘルフレイム！」

無数の炎が偽ジャック・コーヴァスに向かって飛んで・・・いかなかった。炎たちは偽ジャック・コーヴァスを通り越し、キレイに先ほどオックス・ファイアが空けた穴の中に落ちていく。

「離れろ！」

ジャック・コーヴァスの声に合わせて２人が離れた。完全に炎たちが穴に入るのと入れ替わるように、次々に穴が大爆発した。

ドゴォォォォォン！！

今までと比べても比にならないくらいの大きな爆音が響き、爆風が偽ジャック・コーヴァスのマークを体ごと焼いた。

「ぐわぁぁぁぁぁ！」

「す、すげぇな……」

「ボボボンボム、ちと仕掛けすぎたな」

「まぁ、いいんじゃねぇの？倒したんだしよ。」

「そうだな……」

2人は妙に息が合っていた。炎属性繋がりだからだろうか。

「パルスソング！」

「ハイドロドラゴン！」

「アクアヴェール！！」

水のバリアに攻撃が当たり、衝撃波がそれぞれの攻撃を発した主（あるじ）に向かって放たれた。

「くっ！！」

ハープ・ノートはそれをジャンプして避け、クイーン・ヴァルゴは

杖で打ち消した。

「厄介だね……あのバリア……」

クイーン・ヴァルゴの隣にスタッと着地しながらハープ・ノートが言った。

「ええ……我ながら、相手にすると邪魔くさい能力だと思うわ……」

「どうする？」

「任せるわ」

「そう？じゃ、合わせてね？」

「了解」

「バトルカード！」

ハープ・ノートはそう叫ぶと、腕を天に掲げ、そのまま地面にダンッと叩きつけた。

しかし、なにも起こらない。

「……」

「……？」

偽クイーン・ヴァルゴはわけが分からない、という顔をしている。

「ライトオブセイント！」

「！！　ハイドロ――――

「離れて！」

ハープ・ノートが突然叫んだ。

「分かってるわ！」

クイーン・ヴァルゴはライトオブセイントを途中で中断して素早く後退した。

「ドラゴン！！……っ！？」

急に偽クイーン・ヴァルゴが凍りついた。

「『セイレイノイカリ』、成功……！！」

ハープ・ノートは地面についた手を離して立ちあがりながら言った。

「バトルカード、ヘビードーン……」

クイーン・ヴァルゴが腕を上げると、凍りついた偽者の上にストンゴが現れた。

「……さよなら」

腕を突き落とすように下げると、ストンゴも落下した。ハープ・ノートは目をぎゅっとつむった。

ガシャーン！！

硬いものが砕ける音がして氷が粉々に砕けた。後には氷の破片しかなかった。

「終わったわね……」

「……」

「……？どうしたの？」

「さっきからわたし、敵をグロい倒し方しかしてないのは気のせい？」

「……」

「バトルカード、コガラシ！！」

緑色の風が偽ジェミニ・スパークたちに迫った。

「くっ！」

2人は左右に避けた。

「エレキソード！！」

ギィィィィン！

本物たちのソードを偽者は腕の金色のナックルで防いだ。

「ロックオンソード！！」

アシッド・エースが偽者のホワイトに切りかかった。

「なめるな！」

偽ホワイトはアシッド・エースの腹に蹴りを入れた。

「ぐっ！！」

「アシッド・エース！！」

偽者のブラックと押し合っていたホワイトは偽ブラックを押し返して吹き飛んでくるアシッド・エースを受け止めた。

「わ、悪い、ホワイト」

「いえ……」

アシッド・エースが体勢を立て直しているところにブラックも近づいてきた。

「ったく……せっかく3人でやってるんだから、ちゃんと決めろよ」

「いや～、押し合ったまま、あんな動きができるなんて思わなかったからさ～」

「確かに……あれは体の重心のかかる場所をうまく変えないとできない……」

「にしても、3対2ってやりづらいな。数が半端だ」

「なら、数を減らせばいいだけだ」

ブラックはその言葉の意味を理解した。

「それはオレも最初っから考えてるさ！でも、どう誘導するかが問題だ。」

「お前が言ってるのは、向こうの数を減らすことだろう？オレが言ってるのはこちらの数のことさ」

「こっちを減らしてどうするんだ！？やられ放題だろ！？」

ホワイトが口を開いた。

「……さっきから数を減らす、って言ってるけど、なんのこと？倒すことじゃないよね？」

「当たり前だ。それができればやってる。」

「『ジェミニサンダー』のことさ。ブラックが考えたのはその技を誘発させ、敵がまとまったところを倒そう、ってことさ」

「だから、さっきのアシッド・エースの意見に反対したのは、こっちがまとまってどうする、ってことさ」

「なんだ、ならこっちを減らす、っていうのは賛成だな」

「なに!?」

「頭を使え、ブラック。その方が相手を減らすよりもよっぽど大きいダメージを相手に与える方法がある」

「ロケットナックル!!」

「!!　ウィングブレード!!」

アシッド・エースは飛んでくる金色の拳を強引にはねのけて突進した。

「エレキソード!!」

ギィィィィン!!

「……まさか、ウィングブレードとロックオンソードを組み合わせてくるとはな」

アシッド・エースはエレキソード2本をロックオンソード1本で受け止めていた。

「こんな捨て身をしてくるなんて……お前、おとりってバレバレだぜ！」

その声が合図であったかのように偽者の2人はアシッド・エースの両脇をすり抜けた。その2人の前には、手を合わせて一本にしてこちらに向ける本物のジェミニ・スパークたちがいた。

「あいつをおとりに、ジェミニサンダーを当てようったって、そうは――――

「終わりだよ」

後ろから声がした。その声に偽ジェミニ・スパークたちは振り返った。それが、最悪の選択だとも気付かずに。

目の前には、両肩に眩(まばゆ)いばかりの赤い光をまとったアシッド・エースがいた。だが、それが見えたのも一瞬だった。

「オメガレーザー！！」

「ジェミニサンダー！！」

二つのエネルギー波が偽ジェミニ・スパークがいる地点でぶつかり合い、大爆発が生まれた。

ドゴォォォン！！

爆風が晴れると、黒こげの2人の人影がうつ伏せで倒れていた。かろうじて生きている2人の視界に、3組の足が見えた。

「……なるほど、こういうことか」

ブラックが納得したように言った。

「まさか、一番やってほしかった行動を起こすとは思わなかったな。」

「しかも、ボクたちに接近してる途中で立ち止まって振り返ってくれたおかげで、一番威力が出るポイントで当てられたよ。まぁ、キミたちがそのポイントに着くタイミングで声を出して立ち止まるように仕組んだのはアシッド・エースだけど」

「……へ……完全に……はめられたな……」

偽ブラックが力なく笑った。今の2人はどちらがホワイトでどちらがブラックかは分からなかったが。

「でもさ……ボクたち2人じゃなくて……どっちか1人だけ……本物さんの方に行った場合は……どうしたの？」

「その場合は、残った方をあのままゼロ距離でオメガレーザーを撃ってたさ。オメガレーザーは肩から出るから、腕を使っていようが関係ない」

「こっちに来たもう1人には、そのままロケットナックルを手を組んだまま撃てば済む話だしね。ジェミニサンダーを強引に撃つとアシッド・エースに当たるかもしれないし」

「く……完敗……か……」

「戦いってのは二つ策を用意して、その二つを順に使い、最初の方をおとりにするっていうのが基本だ。

……じゃ、悪いが、その首、もらうぜ」

そう言うと、アシッド・エースとブラックは、胸のジェミニのマークを背中から貫通させて破壊した。そして、偽者は消えた。

16、漆黒と紅蓮の激突（前書き）

X？、

Ｃｌａｓｈ　ｏｆ　ｂｌａｃｋ　ａｎｄ　ｒｅｄ

16、漆黒と紅蓮の激突

「やったか！？」

偽者たちを倒したトランスメンバーは一か所に集まっていた。

「おう！」
「はい！」

アシッド・エースの問いにオックス・ファイアとハープ・ノートが応えた。

ガキィン！！

「！！！」

突如聞こえた金属音。その方向を見ると、何もないように見えたが、ありとあらゆる箇所で火花が散っていた。

「な……何アレ……！？」

「ロックマンと……グレイと名乗るロックマンのコピーの戦いだ」

「はぁ！？あいつらまだ闘(や)ってるのか！？」

「いや……そんなことより……」

クイーン・ヴァルゴの言葉をハープ・ノートが継いだ。

「は……速すぎる……。それに、この2人の波動……」

火花が散るたびに、風にも似た波動が放たれていた。

ゴォッ！

「くっ……！！」

その場のトランスメンバーを一段と大きな波動が襲い、みな身をかがめた。

「なんだよ、この戦い……！」

ハープ・ノートは駆けだした。しかし、肩を掴まれ、それ以上は進めなかった。

「アシッド・エース!?止めないで!!」

「本人が言ったのを忘れたのか!?あいつは自分ひとりに任せろ、と言ったんだぞ!?」

「でも……」

あんなのを見せられたら心が揺らいでしまう。

「気持ちは分かるが、いくらお前が速くなったとはいえ、アレにはついていけないだろう?」

「……」

「見守るんだ、お前が闘っていた時はあいつがお前を見守っていた。今度はお前の番だ」

「……はい」

ハープ・ノートは手に持つギターをギュッと握りしめた。

2人は動きを止めた。

「速いね……さすがに」

「キミもだろ？お互いフォームアウトがウルフだからな、こうなるのは目に見えてる」

『スバル、コピーは残るはこいつだけみてぇだ』

「じゃあ、みんな勝ったの！？」

『らしいな』

「そ……そっか……ふう……」

「戦いの最中（さなか）に安堵の息を漏らすなよ」

「いや、これでやっと本気でいけるな、と思ってさ。みんなが闘ってちゃ、自分の戦いに集中して、本人は気付かずに巻き込まれちゃうかもしれないからね」

「そうかい？」

「そうだよ。ここからが本当の勝負さ」

そう言うと、ロックマンは腰の高さに腕を持ち上げ、拳を握った。

「……」

「……どうしたの？早くやりなよ」

「それは僕のセリフさ。キミさ、……グレイ、とか言ったっけ？僕を驚かせたいのかもしれないけど無駄だよ？ノイズチェンジまでできる時点でバレバレだよ。ファイナライズもできるってね。」

「……なぁ～んだ！ばれてたのかぁ～。つまんないの」

そう言うと、グレイもロックマンと同じポーズをとった。

「じゃ、やりますか」

「ファイナライズ！！」

同時に叫び、２人は赤黒い光に包まれた。その光は渦を巻くように動いていたが、内側からはじけた。

「……ブラックエース！！」

「……レッドジョーカー！！」

ロックマンは漆黒の、グレイは紅蓮の姿になった。

「……まさか、レッドジョーカーと戦う日が来るとはね……」

「僕もブラック・エースと戦うなんて思ってなかったよ」

「そうかい、それじゃ、いくよ！」

「来い！」

ロックマンが消えるのと同時にあらゆる方向から黄緑の弾丸が飛んだ。グレイはそれをすべて腕で打ち消していく。

「せっかくファイナライズしたんだから、こんなちまちました闘い方、やめたら？」

「……エレメンタルサイクロン！」

グレイの後ろから突如緑の竜巻が発生した。

「シールド！！」

竜巻を緑の盾で防ぐ。竜巻と盾はせめぎ合っていたが、盾が押され始めた。

「くっ！」

グレイは後ろに跳び、着地と同時にバスターを突き出した。しかし、そこから出てきたのは、燃え盛る炎だった。

「アトミックブレイザー！！」

「やばっ！」

ロックマンは回転を止めて、間一髪で炎を避けた。そして、着地と同時に再び回転を始め、空を蹴ると、その度にロックマンの足元から荒波が生まれた。

「ダイナミックウェーブ！！」

巨大な津波がグレイに迫る。

「サンダーボルトブレイド！！」

しかし、津波は突然裂けた。ロックマンは裂けた津波の向こうに黄色いギザギザした剣を持つグレイを見た。グレイは剣を消し、それを見たロックマンは消えた。グレイは辺りを警戒する。

「ブレイクサーベル！！」

「！！　ジャイアントアックス！！」

ギィィィン！！

「……よくジャイアントアックスで、しかもこのスピードに反応するもんだね」

「さっきのブレイクサーベルとは威力がけた違いだな。ファイナライズで使ったから、っていうのもあるだろうけど、これは……」

「そう。ウォーロックアタックでの威力増大の能力を使わせてもらったよ」

ビキビキビキ・・・

ジャイアントアックスにヒビが入り始めた。

「……このまま鍔迫り合いを続けるのは不利だな～」

その声を合図に、ロックマンの頭上にスドンゴが現れた。

「ヘビードーン!?し、しまった!」

「この鍔迫り合いはただお前の手をふさぐためのものさ」

「くっ……!」

ロックマンは顔をゆがめた。

「ヘビードーンは下にいる者を移動不能にする、もう終わりだよ」

「じゃあ、攻撃を止めさせればいいだけだろ!?」

「!!!」

グレイは目を見開いた。自分の腹に向けてロックマンの腕が伸びていた。ロックマンの手には黒い球があった。

「直(じか)にブラックホールに沈めてあげるよ!」

ロックマンの手にある黒い球が瞬時に巨大化し、グレイを呑み込んだ。

「ＮＦＢ（ノイズォビヌグバン）！ブラックエンド――」

言いながら腕に紅いソードを宿らせる。

「――ギャラクシー！！！」

ブラックホールを紅いソードで一刀両断した。切られたブラックホールは七色に光って消えた。ロックマンはブラックホールが消えた方向を振りかえる。そこには誰もいなかった。

「……」

「ＮＦＢ（ノイズォビヌグバン）！」

「！！！」

背後を振りかえったが、視界にはすでに赤い色しか見えなかった。

「レッドガイアイレイザー！！！」

「ぐわぁぁぁぁぁッ！！！」

グレイの腕とメテオノイズジェネレーターから赤いレーザーが放たれ、ロックマンを焼いた。

そして、ロックマンを中心として大爆発が起こった。

「スバルくん！！！」

ハープ・ノートが青い顔をしている。

「おい、あれ大丈夫かよ……！？」

「ダメでしょうね……」

「そんな……！！」

爆発の跡地には、ボロボロのロックマンが倒れていた。

「勝負、あったね」

「なんで……ブラックエンドギャラクシーを食らって……ケロッとしてるんだよ……！？」

「そりゃそうだ、そもそも食らってないし」

『はぁ！？お前、ブラックホールに呑み込まれたじゃねぇか！！』

ウォーロックがくってかかった。

「……キミら、僕がなんで無事なのか、気づいてないの？」

『だから聞いてんだろうが！！』

「……はぁ、まだ力を使えるようになっていないとは……。あれからこれほど時間が経つっていうのに……」

『「力」！？「あれから」！？何のことだよ！？あれからって何からだ！？』

「自分で考えな。僕はもう帰るから」

『は！？そっちから攻めてきといて、帰るだと！？何しに来たんだ、てめぇ！！』

「ここに来た目的はすでに達成した。それに、キミらと戦ったのは、ただの遊びさ」

『遊び・・・だと！？』

「そ。じゃ、もう帰るわ」

そう言うと同時にグレイの背後の空間に黒い穴が空いた。

『！！』

「・・・あ、そうだ」

グレイは振り返り、ウォーロックに向かって言った。

「僕は、そこに転がってるやつに必ず復讐してやる。すぐには殺さない。さんざん苦しめてから殺してやるんだ。そのことだけは覚えておけ」

『てめぇ・・・スバルに何の恨みがあんだよ！』

「言う気ないね」

そう言うと、グレイは穴の中に入った。グレイが完全に穴に入ると穴は素早く閉じた。

そして、静寂が訪れた。

１６、漆黒と紅蓮の激突（後書き）

ファイナライズでなぜノイズチェンジのＮＦＢが使えたのかは、実際にゲームでファイナライズで戦ったことのある人は分かりますよね？

17、偽者たちの謎（前書き）

X？、

Pretender's mysteries

17、偽者たちの謎

「遅いなぁ……」

ミソラが言った。

今、トランスメンバーとルナ、キザマロは再びサテラポリスの指令室に来ていた。スバルは、ヨイリー博士に診てもらっていた。

「まさか……なんてこと、ないよね？」

「さすがにない、だろ？なんたってロックマンなんだから」

「でも、そのロックマンにやられたんだよ？」

「ぐっ……ってミソラ、お前、スバルがヤバくなる方向に持っていくな！」

「ごめん……でも、不安なの……。スバルくんが食らったあの技、とんでもない威力だった……」

「……」

「今はあれこれ言ってもしょうがないだろ？スバルを信じて待とうぜ」

「はい……」

「おまたせー！」

声の方を見ると、スバルが階段の上に立っていた。その後ろにはヨイリー博士もいた。

「ス……スバルくん、もういいの？」

「うん、もう大丈夫だよ、心配かけたね」

ミソラには分かった、なぜ、スバルがこんなに軽い物言いをしているのかを。みんなを心配させないためだ。

「あきれるくらいの回復力と生命力ね。さすが、３回も地球を救っただけあるわ」

ヨイリー博士が言った。

「スバル、念のため、私生活でもあんまり無理すんなよ？」

「分かってますよ、暁さん。それより、暁さんに聞いておきたいことがあるんです」

「なんだよ？」

「Ｐｒｏｊｅｃｔ－ＴＣってなんですか？さっき言ってましたよね？」

「あれ、まだ言ってなかったか？」

「はい」

「Ｐｒｏｊｅｃｔ－ＴＣってのは、人工的な電波変換を実現するための技術研究とか実験をやってるプロジェクトだ。その初の成功作がアシッドと、アシッド・エースだ。オレらはノイズコントロールシステムの実験体でもあるんだよ。ヨイリー博士がリーダーのプロジェクトで、ジョーカーはこれの一号機だ。……こんな感じでどうだ？」

「なるほど。何か、バラバラだったものが１つに繋がった感じがします。」

「……って、今はＰｒｏｊｅｃｔ－ＴＣなんてどうでもいいんだよ！それよりもあいつらだ。分からないことが多すぎる」

「分からないのは、誰が、いつ、どこで、なぜ、どうやって、やつらを作ったのか？……ですかね？」

『おい、「いつ」は分かってるぜ？メテオＧが消えた時らしいぜ？』

「そうなのか？」

『おう、あのグレイってやつが言ってた』

「それは分かったが、謎が謎を呼んだな。なんでそんなタイミングで生まれるんだ？」

『知らん』

シドウとウォーロックの話のあとにスバルが言った。

「それと、あのグレイって奴もよく分かりません。あいつだけは他

のコピーと違って、名前があるし、ボクと同じぐらいの年に生まれたらしいし、なぜノイズチェンジやファイナライズが使えたのか、どうやってブラックエンドギャラクシーを食らって無事だったのか、あいつの言う『力』や『あれから』がなんなのか、あいつがここでした目的のこととは何か、そして……なんで、僕を恨んでいるのか」

「分からないことだらけじゃないか、特にそのグレイに関することが」

「そうですね……」

「わたしも、あなたたちが闘っているときに解析をしてみたんだけど……解析不能、ですって」

「じゃ、どうするんだよ？」

「さぁ……でも、グレイの去り際の言葉から察するに、あいつまだ仕掛けてくるぜ」

「それも、スバルを集中的に、ね」

「……」

「あー、もう考えてても分からないことが多すぎて無駄だ、やめやめ！ほら、もう今日はお開きでいいから」

「分かりました。じゃあ、また今度」

「あぁ、じゃあな」

「またね」

そして8人はＷＡＸＡの外へと出た。外はすでに日も落ちて暗かった。

「うわぁ……まっくら……」

「まぁ、親には話はつけてあるらしいから連絡もいらねぇだろ」

……という話はスバルとゴン太にしか通用しないことを、ゴン太は気付かなかった。８人はウェーブライナー乗り場を目指して歩いた。

「それにしても、カッコよかったよ、ミソラちゃん」

「え？」

「おう！すごかったぜ！」

「あ、やっぱり、話されちゃった……？」

「うん……」

「……ごめんね、みんな。隠してて」

「そんな、謝ることないよ！」

「そうそう、ミソラちゃんのスバルに対するひたむきな想いが――――

ゴッ！！

「ゴフッ！！」

ゴン太はノックアウトした。ルナのデストロイアッパー……ではないが、普通のアッパーが炸裂していた。ミソラは顔を赤くした。

「ひたむきな想い」、に。

「それで……スバルくん、改めて、いつも迷惑かけてごめんね……」

「大丈夫だよ。迷惑なんてかかってないよ。それに、偉いね、ミソラちゃんは。」

「そんな……修行だって、暁さんについていくのに精いっぱいで……」

「でも、ついていけてたんでしょ？ゴン太も隠れて修行してたけど、ついていけなくてカッコ悪くなちゃってたけど、ミソラちゃんはちゃんとカッコよかったよ」

「ひ……ひどいぜ……スバル……」

足元から声がした。

「……ふふふ！そうだったね！これも実力ってやつ～！？」

「ミ……ミソラちゃんまで……」

ゴン太はみじめになった。すると、ミソラは突然後ろに手を組んで、

腰を前に折ってゴン太に目線を合わせた。

「……でも、今回はかっこよかったよ、ゴン太くん。それから、ありがとうね。あのとき助けてくれて」

ミソラはやさしく笑いかけた。

「へへへ……フォロー、ありがとな、ミソラちゃん……」

ゴン太は立ち上がって言った。

「あの～、お取り込み中に悪いですけど、終電がもう付いてますよ」

「え？うそぉ！？」

しかし、見ると確かにウェーブライナーが着いていた。

「は、走るわよ！」

「らじゃー！！」

「はぁ、はぁ、はぁ……」

「ぜぇ、ぜぇ、ぜぇ……」

「つ、疲れた……」

ポールにもたれたり、座席についたり、各々の休み方をしていたが、全員共通して疲れていた。

「でも、これで、コダマタウンに、着けるね……はぁ、はぁ……」

スバルがあえぎあえぎ言った。

「帰ったらすぐ寝たいな……」

ツカサが言った。ミソラはそんなツカサをじ～っと見ていた。ツカサは見られていることに気付いた。

「……どうしたの、ミソラちゃん？」

「ツカサくんって、どこに住んでるの？」

「コダマタウンのアパートで1人暮らしだけど……」

「ある意味2人暮らしだけどな！」

ヒカルが口をはさんだ。ツカサの口を使って。

「それじゃ、ツカサくんもハートレスさんの家で一緒に住もうよ！」

「えええ？」

「ダメ？」

「ダメじゃないけど、その……ハートレスさんはいいの？」

「いいわよ」

みんなが振り返った。クインティアのハンターから出たエア・ディスプレイにハートレスが映っている。

「ハートレスさんに確認の連絡を入れたの」

「……わたしはほとんどＷＡＸＡにいるから、ウチにいることはないの。たとえウチにいたって、まだ部屋はあまってるから、遠慮することはないわ」

「ツカサ、オレからも頼む」

ジャックが言った。

「あの家、男がオレしかいないから居心地悪いんだよ。頼む。」

「え～、ジャックくん、そんなこと言わずに仲良くしようよ～」

「いやそういうことじゃねぇよ！性別的にもう１人男がいた方が落ち着くってだけの話だよ！」

「……分かった。じゃ、おじゃまします」

「やったーーーー！！」

「おっしゃーーーー！！」

ミソラとジャックが同時に叫んだ。

「うん、あの家にツカサくんがいればバランスとれるかも」

「おい、スバル、それどういうことだよ？」

「いや、その、テンションの問題？というか……」

冷めた性格のクインティアとジャック、物静かなハートレスの中に1人ハイテンションのミソラ。そこにツカサが入れば……ということだ。

「スバル、この――――！！」

「スバルくん、ジャックくん！ケンカしちゃダメ！！」

「いや、ミソラちゃん、これ、ケンカじゃなくて、一方的な暴力だから！ゴフッ！」

「……あんなことがあったのに、元気だね」

ツカサがルナに話しかけた。

「……あきれた」

そして、ウェーブライナーは騒がしい一団をコダマタウンに下ろした。

「それじゃ、また明日」
「またねー！」
「今週中には引っ越しが済ませられるようにするから」
「分かった。それじゃね！ツカサくん！」
ルナ、ゴン太、キザマロ、ツカサと別れて、スバル、ミソラ、ジャック、クインティアはぞろぞろと歩いた。
そして、家の前でお別れを言った。
「じゃ、みんなまた明日」
「おう！」
「うん！」
「また明日」
スバルは家に入った。
「オフィシャルさん、おかえり～！！」
「か、母さん……ただいま」
「ほら、もう遅いんだから、夕飯食べてお風呂入って寝なさい」
「そうするよ。母さん」
「暇があったら、オフィシャルがどんなだったのか教えてね」

「うん、でもまたあとでね。……父さんは？」

「まだＷＡＸＡよ。せっかく地球に帰ってきたばかりなんだから、すこしは休んだら？って言ってるのに、がんばり屋なんだから」

「そっか……」

その後、スバルは黙々と夕食をとり、風呂に入った。そして、部屋でパジャマに着替え、ベッドに横になった。窓から見える横の家の部屋が明るいので、何気なくその方を見ると、赤い髪の女の子が……

「って、えええ！？」

スバルは跳ね起きた。

「どうした、スバル？」

ウォーロックがハンターの中から声を出した。それには応えず、見つめていると、その女の子も窓の外を見て、スバルと目があった。女の子は一瞬驚くと、窓に駆け寄って空けた。そして、「スバルくんも空けてよ」と言いたげなサインを送ってきた。スバルも窓を開けた。

「……えへへ、また会ったね。」

「ミソラちゃん、こっちに面した部屋だったの！？」

「うん、ハートレスさんが、この部屋がいい、って言ってくれたん

だけど、その意味が今分かったよ。」

ミソラはそう言いながらガラスのドアを開けてベランダに出てきた。
ミソラも今風呂に入っていたのか、照れてもいないのに頬がほんのり赤かった。そしてパジャマ姿であった。スバルもミソラに合わせてベランダに出た。
ベランダに出ると、その距離は1メートルほどしかなかった。

「……うわ、寒っ」

ミソラはぶるっと震えた。

「まだ4月だからね、夜は冷えるよ」

「そうだね、今日は疲れたからもう寝ようかな」

「そうだね、じゃあ、お休み」

「おやすみ～」

スバルとミソラは部屋に戻り、部屋の明かりを消して目を閉じた。

1章　崩れる日常　終

?、運命の出会い（前書き）

本編が一段落したこのタイミングに、外伝を挟みました。

正直、この外伝、ＣＡＰＣＯＭ様に怒られそうで怖いんですが、勇気を出して発表します！！

この外伝は０話の続きともいえるかもしれません。

流星１を持っていない人は、これで出会いを知っていただき、持ってる人は思い出してほしいです。

セリフはそのままですが、オリジナルカットもあり、逆にカットしたシーンもありますが、大本の内容は変わっていません。

１、Ｍｅｅｔｉｎｇ　ｏｆ　ｆａｔｅ

?、運命の出会い

――居場所を、探していた。

繋がりを、探していた。

絆を、探していた。

光を、求めていた。

暖かい光を。

けれど、同時に、見つけてしまうことを恐れていた。

なぜなら、その居場所が、繋がりが、絆が、消えてしまったらどうしよう、

そんな思いがあふれていた。

そう、あのころのわたしたちはただ、恐れていたんだ。

怖かったんだ。

怯(おび)えていたんだ。

どうしようもなく。

でも、そんなわたしに光をくれた。

自分を、見つけてくれた。

暗闇から抜け出すことができた。

――キミのおかげで。

そんなキミに、この言葉を、送ります。

それは――――

「ウガァァァァァッッ！！！全然思いつかないよ――――――！！」

違う。これではない、もちろんのこと。そうじゃなくて、キミにどんな言葉を送ったらいいか、思いつかないのだ。

『うわっ！びっくりしたぁ！ミソラ、急に叫ばないでよ！！』

「そんなこと言ったって～」

今、ミソラは自宅で自分の机に向かっていた。そして、机には譜面が置いてある。

『それに、女の子が「ウガァァァァッッ！！！」とか言わない！大体、曲はできたんでしょ？なんで作詞になるとできなくなっちゃうのよ？』

「それが分かったら苦労しないよ～」

ミソラは、頭を抱えて椅子の背もたれごとそり返りながら言った。

ムー大陸が消え去り、平和が訪れて一カ月。ミソラは再び歌手活動を再開していた。と、言ってもミソラは歌手活動を止めていたのではない。できなかったのだ。ブライがカミカクシ、というムーの技術を使い、ミソラ、ゴン太、キザマロをそれぞれ別の場所に飛ばし、帰ろうとしたところをミソラはスバルたちと敵対するドクターオリヒメの右腕、エンプティーと取引をして仲間になって働き、スバルとも敵対していたが和解、スバルと共にドクターオリヒメの野望を食い止めようとしたところに再びブライと遭遇、スバルをかばって攻撃を受け、生死をさまよっていたのだ。

こうして思い返し、第3者の目で見ると、自分は相当　壮絶な夏を過ごしたものだ。しかし、敵対して仲直りして、ミソラは改めてスバルという大切な存在に感謝していた。その気持ちを歌にできそうだと思い、その作業に取り掛かっていた。だが、ハープの言うとおり、曲は完成したのに、詞ができていなかった。

「あんなにインスピレーションが働いていたのに、何もこんなときに切れなくてもいいのに……」

反り返っていた体を折って今度は机に腕を置き、その上に頭を置いた。ちょうど授業中の居眠りのような体勢だ。

『う〜ん、ミソラ、思うんだけど、あなたちょっと大層なこと言おうと思いすぎてない？』

「大層なこと？」

ミソラは腕の上に首を乗せたまま、首を横にまわしてハープを見た。

『そう。いい言葉を使おうと思いすぎてるから、それに叶う言葉が見つからなくて浮かぶ言葉が落選していく。違う？』

「……そう、かもね……」

『この曲を作るにあたって伝えたい思いとかがあったはずでしょ？それを言葉にすればいいだけなんじゃない？』

「思い、かぁ……」

ミソラは再び顔を腕にうずめ、考えた。

「感謝をどう言葉にできるかだなぁ〜」

『……そういえば、なんで突然新曲を作ろうなんて言いだしたの？新曲なら、まだ復帰してすぐに出した「ＨＡＰＰＹ」があるじゃない。そんなすぐに次を出さなくても……って聞いてるの？』

ハープはミソラを見た。しかし、さっきと変わらない体勢だった。

『ミソラー、聞いてるー？』

しかし、返事はない。ハープがミソラの頭をグイッと押すと、ミソ

ラの顔が見えた。目を閉じて、寝息を立てている。

『寝ちゃった……しょうがないなぁ……わたしも歌詞を考えてみようかな……』

ハープはそのまま考えに没頭していた。

その日、スバルは朝起きるとウォーロックがトランサーの中にいないことに気付き、外を探していた。

「ロック、どこ行ったんだろ?」

スバルはコダマタウンの展望台まで来ていた。しかし、ウォーロックの姿はない。スバルはもう一回叫んだ。

「ロックー!」

すると、突然　音楽が聞こえてきた。

「なんだろ、この音色……誰かいるのかな……」

スバルは展望台の奥に進んだ。

「……」

見ると、ピンクの服を着た女の子が、黄色いギターで曲を奏でている。

「この場所に用事？すぐに終わるからこっちに来て待ってなよ」

スバルは女の子に歩み寄る。見ると、女の子は赤みのかかったピンクの髪、緑の目をしている。

「……」

「フーッ、終わり！どうだった？」

「……う、うん、いい曲だったよ」

「そう？よかった……新しく作った曲なんだけど、この曲だったらママも喜んでくれるかな」

「……今の曲は、お母さんに聞かせてあげるの？」

「うん、わたしが歌を作るのはママのため。ママ、わたしが新しい曲を聞かせてあげるたびに、とっても喜んでくれるんだ」

女の子は悲しそうな顔で空を見上げる。

「ママ、きいてくれた？とってもいい曲ができたよ……」

女の子はスバルに向き直った。

「お待ちどうさま、待たせちゃってごめんね。それじゃ、わたし行くから。じゃあね……」

女の子はそう言い残して去って行った。

「……」

『クックック……一目ぼれってやつか？』

トランサーから声がした。

「あっ、ロック！！いつの間に！？どこ行ってたんだよ？」

『気になる音楽が聞こえたから、様子を見に来たんだ。あの娘（むすめ）の奏でるメロディから、オレ達ＦＭ星人をひきつける孤独の波長を感じたんでな』

「孤独の波長……？」

『あぁ、心に孤独をかかえる者が持つ、独特の周波数だ』

「で、ＦＭ星人は……！？」

『安心しな、この辺りにＦＭ星人は来ちゃいねえよ』

「そうか……」

『……そういや、さっきの女はお前の知り合いか？』

「ううん……今日初めて会った」

『そうか、ならいいか……』

「どうかしたの？」

『なんでもねえよ、さ、ウチに帰ろうぜ』

「う、うん……」

――そう、これがスバルくんとのファースト・コンタクト。ここから始まってたんだ、今のわたしは。

この出会いが無ければ、

今のわたしは、いない。

?、「歌いたくない」（前書き）

2、

“I do not want to sing.”

?、「歌いたくない」

スバルは翌日、パートに出かけていないあかねの代わりに客を出迎えていた。その客は人を探していた。その探している人の名は「響ミソラ」。客は、その人のマネージャーだという。客を追い返した後、トランサーにヘルプシグナルが鳴ったので、その発信源である展望台に再び来ていた。

「ヘルプシグナルはここから出ていたと思うんだけど……」

すると物陰から昨日の女の子が顔を出した。

「あっ、キミは！」

女の子は物陰から出てきてスバルと向き合った。

「お願い！わたしをどこかにかくまって！」

「も、もしかしてキミ、響ミソラ……？」

「……うん」

「さっき、マネージャーだっていう人がキミを探しに来てたけど……。ライブがどうのって……」

それを聞くと、ミソラはぷいっとそっぽを向いてしまった。

「ライブなんて中止になればいいんだ……。あの人の頭の中にはお金の事しかないんだわ。」

ミソラは振り返った。

「……お願い、わたし帰りたくないの。どこか人目のつかない所につれていって」

「ミソラー！！どこだー！！」

「ヤバッ！こっちに来て！！」

そういうとミソラはスバルを連れて物陰に隠れた。数秒遅れてマネージャーがそこへ来た。マネージャーは辺りを見回したがミソラの姿は見当たらなかった。

「くそ、どこに行ったんだ……。ライブが中止になれば、オレの首が飛んじゃうよ……。なにがなんでも見つけ出してやる……」

そう言い残してマネージャーは踵を返すと去って行った。スバルが物陰から出てきてそれを確認する。

「……行ったみたいだよ」

「お願い……どこかに連れて行って……。……わたし……歌いたくない……」

「……ボクの知り合いの天地さんなら、しばらくかくまってくれるかも……」

《やけに親切じゃねえか。お前らしくもない。やっぱりホの字か？》

（違うって……ボクにはこの子の気持ちがよく分かるんだ……だから、ちょっとだけ手助けしたいんだ。けど、これ以上深く関わるつもりはないから……）

「……誰と話してるの？」

「な、なんでもないよ、ただの独り言だから！そ、それじゃ行こっか？」

「うん……」

スバルとミソラが展望台の階段を下りるのと同時に、キザマロが上がってきた。

「……今、すれ違ったのってスバルくんですよね？一緒にいた人はどこかで見たことがあるような。まぁ、いいか……。今日はミソラちゃんのライブの日です！今からウォーミングアップしてライブ開始から全力でノリまくりますよ！！」

―天地研究所―

「あの……この子を一晩預かってもらいたいんだけど……」

「スバルくんからそんなお願いをされるとはちょっと驚きだな。……家出でもしたのかい？」

「……みたいなものです。ダ、ダメですか？」

「……フム、何か悩みがあるみたいだね？」

「は、はい……」

「いや、言わなくてもいいよ。人間生きていれば、何かしらの悩みはいだくものさ。それに、ボクもキミぐらいのときに何度か家出をしたことがある。今日はゆっくりしていったらいい」

「……ホントですか？ありがとうございます！」

ミソラは目をぱっと輝かせた。

「だけど、明日になったらちゃんとウチに帰るんだぞ。キミが思ってる以上に親御さんはキミを心配しているんだからね」

「……ハイ」

ミソラはそのセリフに、一層瞳を暗くした。まるで、心の影をその瞳に浮かべるように。

「スバルくん、どうだい、キミも泊っていくか？」

「い、いや、ボクは帰るんで……」

ミソラはスバルの方を向く。

「スバルっていうんだ……。こんなに助けてもらって名前も聞いてないなんて……ゴメンね。それと、アリガト……」

「ど、どういたしまして」

「そうだ、いい機会だから2人でブラザーバンドを結んだらどうだい！？スバルくん、キミのお父さんいつも言ってたよ。1人じゃ、解決できない問題も誰かとつながれば乗り越えられる。誰かが自分を強くしてくれるし、自分も誰かの力になれる。この星のすべての人がブラザーバンドで繋がって、お互いを力づけあいながら生きている世界になれば最高だってね」

「そ、そんな突然……ボ、ボクには無理だよ……」

スバルがあわてて言う。

「フフフ、まぁいいじゃないか。ちょっとだけ考えてごらんよ」

「……じ、じゃあ、ちょっとだけ考えてみる……」

「あぁ、待ってるぞ！」

そしてスバルは立ち去った。そんなスバルを目で追うミソラ。それに気付いた天地はミソラに話かけた。

「あんまり気を悪くしないでほしい。あの子はある理由で他人と深い関わりを持つことに少しだけ臆病になっているんだ……」

「……」

ミソラは、スバルが消えた曲がり角を見つめていた。

「ブラザーバンドなんて……」

スバルは天地研究所の館内を歩きながら呟いた。

『へへッ！ホントはブラザーになりたいんじゃねえのか？』

「な、なに言ってるんだよ。ボクには無理だって……。だいだいね、ブラザーバンドを結ぶには、お互いの秘密を交換しなきゃなんないんだよ？おかしな宇宙人にとりつかれているのがばれたら、ブラザーどころじゃないよ！」

『なにを！！誰がおかしな宇宙人だってんだよ！？』

「そんなの1人しかいないだ……」

フッと、急に辺りが暗くなった。思わずスバルは天井を見上げて険しい顔をする。

「停電！？」

『スバル、ビジライザーだ』

「うん」

スバルがビジライザーをかけると、ウェーブロードに妙な球体が見えた。

「なにあれ・・・！？」

『あれは、電磁波ボールだ。あれがこの停電の原因みたいだな。まぁ、でも、オレ達には関係な……』

「いや、電波変換してつぶそう」

『そうか？ご苦労なこったな』

「電波変換！星河スバル、オン・エア！」

「やぁ！」

スバルはその原因の電磁波ボールを破壊した。すると、研究所がぱっと明るくなった。

「やった、停電直ったみたいだよ」

『さて、どうする？帰るのか？』

「いや、2人の所に戻るよ。ブラザーについての返事もしないといけないし……」

『そりゃ、律儀なこったな。……そういやな、あのミソラって女だけどよ。ありゃなんか危険な匂いがするぜ・・・。せいぜい気をつけることだな』

トランサーの中で神妙な顔をして言うウォーロックに、スバルは眉

をひそめる。

「危険って、なにが？」

『さぁな……そんな匂いがするだけさ』

「……とりあえず天地さんの所に戻ろう。ブラザーの返事をしなきゃ……。やっぱり、まだボクにはブラザーを受け入れることはできないって……」

スバルは天地のところへ戻り、その旨を伝えた。

「……そうか、今は無理か……。けど、いつか気持ちが落ち着いたときにブラザーになればいいさ」

「……はい……。それじゃ、失礼します……」

スバルは再び踵（きびす）を返して歩きはじめた。

「あの、スバル、くん？」

声に振り向くと、ミソラがこちらを見ていた。少しさみしそうな顔をしている。もっとも、この響ミソラという女の子も常にさみしそうな顔をしているのだが。

「あ、あの……よかったら、ちょっとお話しない？」

「か、かまわないけど……」

「それじゃ、屋上で待っててくれる？」

「う、うん……」

?、音楽を守る力（前書き）

3、

Force that defends music

?、音楽を守る力

―天地研究所　屋上―

「ひきとめちゃって、ゴメンね」

「う、ううん……」

ミソラはスバルに背を向け、背後に広がる空を見上げた。

「綺麗な空ね……」

スバルもミソラの後ろから空に目をやった。

「……うん」

空は青く澄み渡り、日差しが暖かかった。でも、そんな空をミソラは悲しげに見つめている。……ミソラの後ろに立つスバルには見えないのだが。

「この空の向こうに天国があるのかな……」

「……」

「空を見上げてるとね、ママの声が聞こえてくる気がするんだ……」

「……」

「わたし、ママとずっと2人暮らしだったんだ……。……ママはね、元々病弱で寝込みがちだった……。一年中なにも変わらない部屋の中で過ごす生活……。……わたし、ママを楽しませてあげようっていろいろ考えたの。それで思いついたのが歌を歌うことだったの。春に咲くサクラの花や、夏の海、秋のもみじ、冬に降る雪……。わたしが外で見てきた綺麗なもの、楽しいこと、全部歌にしてママに聴かせてあげたの。ママ、ホントに喜んでくれて。それから、一緒に歌を作って歌ったり……。歌はね、ママとわたしを繋ぐ絆なの……」

「……」

――それは、スバルにも通じるものがあった。スバルも、大吾と宇宙の話をすることで、時を共有した。それは、きっとこの子にとっての歌と同じく、親と自分を繋ぐ絆。

「そんなある日、あるテレビで歌手のオーディションをしてたんだ……。ママがわたしには音楽の才能があるから、チャレンジしてみたらどうかって言ってくれたの。わたしが本物の歌手になれば、ママ、きっと喜んでくれるだろうって、オーディションを受けたの。このギターはその時にママが買ってくれたの……。必死で練習してオーディションを受けて……。練習の甲斐あって、オーディションに合格してデビューすることができたわ。ママも鼻が高いって喜んでくれた。わたし、もっともっとママに喜んでほしくて、必死に歌ってきたわ。……だけど、もうママに歌をきかせてあげられなくなっちゃった……」

「……じゃあ……キミのお母さんは……」

ミソラは見上げていた首を下げて俯き、うなずいた。少し肩が震え

ている。

「3ヶ月前にね、あの空の向こうに行っちゃった……。わたし、ずっとママのために歌い続けてきたわ。ママを喜ばせたいから。……だけど、ママはもう……。マネージャーはファンのために歌えって言うけど、結局はお金儲けのためなのよ……。……わたし、もう歌いたくない……」

「……あ、あの……。な、なんて言ったらいいか分かんないけど、キミが歌いたくないなんて言ってたら、天国のお母さんが悲し……」

――ませてるのは、「お前」も同じじゃないか？
スバルの心に、言葉が響く。お前にそれを言う権利はあるのか、と。

「……いや、なんでもないよ」

言えなかった。どうしようもなく、自分が無力に思えた。

「――ちょっと待ってください、困りますよ！ね、ちょっと待って！」

唐突に天地の声が聞こえる。それから間髪を入れず、ミソラのマネージャーが勢いよく屋上に飛び出してきた。マネージャーはスバルを無視してミソラの目の前で罵声を飛ばす。

「ミソラ！！大変な事をしてくれたな！！お前が逃げ出したお陰でライブは中止だ！一体どれだけの損害が出たと思うんだ！さぁ、帰るぞ！！」

「いやっ！これ以上わたしとママの歌を汚したくないの！」

ミソラは自分の身を守るかの如く、その腕を顔の前にかざして叫ぶ。

とっさにスバルは、ミソラを守るように、その2人の間に割って入り、両手を広げた。

「……」

「お前がミソラを隠していたのか！そこをどけ！！」

「い、いやだ！！」

マネージャーに噛みつくように叫ぶ。

――何も言えなかった。何も言えなかったけど。せめてもの事はしたかった。自分と同じような少女を、護りたかった。

「スバルくん……」

そんなスバルの背中をミソラは目を細めて見つめる。

「どけと言ってるだろうが！」

ドカッ！！

マネージャーはスバルを殴って横に突き飛ばした。スバルは背中から地面にたたきつけられ、数メートルの距離を引きずられるように滑って止まった。小学生と大の大人じゃ、体重差がありすぎた。

「大丈夫かい、スバルくん？」

天地はスバルに駆け寄り、助け起こしながら、マネージャーを睨みつけた。

「あんた、子供になにをするんだ！それに、その子も嫌がっているじゃないか！」

「うるさい！その坊主がミソラをかくまったおかげで、こっちは大損したんだ！今回出た数千万ゼニー、あんたが肩代わりしてくれるのか？それにオレはこの子の保護者だ！他人は口出ししないでくれ！ミソラ、行くぞ！」

「……」

マネージャーはさっさと行ってしまった。

ミソラは天地に助け起こされて地に伏すスバルの前に進み出た。

「……スバルくん、ゴメンね……。それと……ありがとう」

その緑の眼には、生きているのが不思議なくらい、光がなかった。

そしてミソラも行ってしまった。

ミソラが屋上の扉に消える直前、ミソラの頬に光るものを、スバルは見た気がした。

「スバルくん、力になれなくてすまなかったね……」

「ううん……こっちこそ……。……それじゃあ」

そういうと、スバルもその場を立ち去った。

ボクは彼女に何も声をかけることができなかった……。
もし、ブラザーになることができたら、彼女を守ることができたんだろうか……。
……無理だ。
ボクに人を力づけることなんてできない……。
最初　彼女がお母さんの話をしたとき、ボクが言葉を呑みこんだのは彼女にかけてやる言葉はすべてボクにも言えることだってわかったから……。
自分にできないことを他人にやれなんてボクにはいえない……。
ボクは……無力だ……。

スバルはそのまま家の前に着いたが、家に入る前に誰かに呼びとめられた。

「ちょっと待ってください！」

スバルが振り返ると、ゴン太とキザマロがこちらに向かって歩いてきていた。

「スバルくん、キミは今日の朝　展望台にいましたね？」

キザマロが疑念の目でこちらを見て問う。

「……」

「一緒にいたのは誰ですか？」

「……」

「響ミソラと一緒だったんじゃないんですか！？ミソラちゃんのライブが中止になったのは、キミが関係してるんじゃないんですか？」

「オイ、なんとかいったらどうなんだよ！？コイツは重大な問題だぞ！！」

――「僕は、響ミソラと知り合って、彼女がかわいそうだからかくまってました。」そんなこと、言えるわけがなかった。自分はもちろんのこと、彼女にも迷惑がかかる。これ以上、スバルはミソラの思い悩む種を増やしたくなかった。

「し、知らないよ……」

「……まぁ、確かにキミがミソラちゃんと知り合いだなんてありえませんけどね」

アイドルが学校にも来ないモヤシくんと一緒にいるわけがない、とキザマロも納得したようであった。

「そりゃそうだよな、本物のミソラちゃんがこの辺りをうろつくはずないだろ？それにしても今日はついてないぜ。ライブは中止になるわ、委員長にはこっぴどく説教されるわ。もう、踏んだり蹴ったりだぜ」

「確かに……。けど、けっこう似てたんですけどねぇ……。ミソラちゃんを探してたマネージャーさんには悪いことをしたかもし

れませんね。バスに乗り込むミソラちゃんを見たなんて言ってしまって……」

「……」

――道理で、マネージャーがミソラの居場所が早く分かったと思った。でなければ、発信器でもついてない限り発見が早すぎる。

「しかし、なんでまたミソラちゃん急にいなくなっちゃったんだろうな？」

「彼女は今や大スター、コダマタウンなんて小さな会場じゃやる気が起きなかったんじゃないですか？」

「……違うよ！何も知らないのに適当なこと言うなよ！」

さすがに、ミソラの境遇を考えると、その言い分はあんまりだ。２人はそんなこと知るよしもないのだが。

「それじゃ、お前はミソラちゃんの何を知ってるって言うんだよ！？昨日まで名前すら知らなかったくせよ！」

「そ、それは……」

「いるんですよね、やたらと物知り顔のナイト気取りのにわかファンが。まぁ、我々もミソラちゃんのファンですから、ミソラちゃんを信じていますし今回のことも、きっと何か事情があるに違いないと思ってますけどね。キミもミソラちゃんのファンになっちゃったんでしょ？恥ずかしがらずにそういえばいいのに……」

「そんなんじゃ……ないよ」

「だったら、ミソラちゃんについてガタガタ言うんじゃねえよ！」

「……」

そのころ、天地研究所の前に止めた車の中では――

「ミソラ！！本当にえらいことをしでかしてくれたな！この損害はキッチリお前の歌で稼いでもらうからな！」

「も、もう嫌なの！わたし、お金のためなんかに歌えないわ！わたしの歌はママを喜ばせるためにあるの！」

「いつまで夢みたいなことを言ってるんだ？お前の歌は商品なんだ！俺がお前を育てたのも、お前の歌で金を稼ぐためだ！お前が歌わないと俺はオマンマが食えなくなるんだよ！歌え！歌え！歌え！」

「い、いやぁぁぁぁっ！！」

ミソラはそう叫ぶと車を飛び出し、走りだした。

正直、彼の言うことが分からない。確かに、お金は生きていくのに必要だろう。でも、そのために自分を育てたというのか。だとしたら、愛情もなにもない、ただの「生産」じゃないか。自分の歌を商

品として作っただけ。自分ですら、あの男には商品でしかない。ただ作られただけ。自分は物として産まれてきたわけではない。それよりなにより、自分の歌は、母親を喜ばせるためのもののはずだ。アーティストとしてデビューしたのも、それでママが喜んでくれたから。テレビに出るミソラを見て喜んでくれる、自分の母親を、もっと喜ばせたかったから。

――3カ月前だ。3カ月前から、それは突然できなくなった。突然、彼女は行ってしまった。それで何度泣いたかはもう分からない。もう、歌を歌っても、自分の母は笑ってくれない。笑顔も見ることができない。笑い声も聞こえない。まるで、母の消失と同時に自分も消えてしまったようだった。……いや、そっちの方がいいのかもしれない。それなら、また聞いてくれる。自分の歌を。それなら、また見ていてくれる。自分の姿を。

ミソラは研究所前の広場でようやく止まり、ガクッと膝と手をついた。

「ハァハァ、いや……ママ……助けて……」

――去り際に彼女は言った。空から見守ってくれる、と。でも、自分と同じ世界で見守っていて欲しかった。

――去り際に彼女は言った。あなたは一人じゃない、と。でも、自分は一人だった。世界と自分。自分以外の人間全員が歌という母との絆を汚し、断ち切ろうとするようにすら見える、孤独。

「……歌いたくないよぅ……」

ミソラは泣いてかすれる声で、呟いた。ぱたぱたと、乾いた地面に雫が落ちて斑点を打つ。

『ポロロン……お金儲けのために歌を歌わせようとするなんて酷い大人よね……』

不意に聞こえた声に、ミソラは顔を上げた。

「だ、だれ！？」

『ポロロン……わたしはここよ……』

声のする方を見ると、天地研究所の屋外に設置された巨大な望遠鏡の上から、人間ではない何かがこちらを見下ろしていた。

『わたしはハープ……。音楽を愛する者よ。ミソラ、あなたは音楽を力に変えることができる選ばれた人間……。あなたの音楽はあなただけのもの……。あなたに歌うことを強要し、あなたの歌をお金で汚す奴らをみんな始末すれば、あなたの歌はあなただけのもの。ママとの思い出も美しいままよ……。ミソラ、あなたの音楽はあなた自身の手で守るのよ』

「わたしの音楽を……守る……」

それは、それまで母親がどんどん遠くなる恐怖を感じていたミソラにとって、待ち望んでいたもののようにも感じられた。

「けど……そんなこと、どうやって」

その問いに答えるかのようにハープは望遠鏡の上から消え、ミソラの前に現れた。

『わたしを受け入れなさい。そうすれば、わたしが力を貸してあげるわ……。あなたの音楽を守る力をね……』

「……」

そこへ、マネージャーがやってきた。

「ミソラ！！」

ミソラは立ち上がり、振り返った。

「もう逃げられないぞ……。お前にはまだまだ稼いでもらわないといけないからな」

「……」

ミソラは頭を垂れてうつむく。そのせいで目が前髪に隠れた。

――なんだ、またその話か。

『クスクスクス……わたしを受け入れなさい。音楽の力を思い知らせてやるのよ』

「ミソラ！帰るぞ！次のライブの準備をするんだ！！」

「……いや……」

心に、何かが湧きあがる。じわじわと、少女の心を染め上げて行く。

「黙れ！おまえは俺の言うとおりに歌っていればいいんだ！！わかったか！歌うんだ！！」

ミソラは叫んだ。拳を握り、腕を下に突っ張って。

「……いやぁぁあああッ！！！！」

その叫び声と同時に、ミソラは光に包まれた。

光がはじけるように消えると、そこには全身をピンク色に包み、目には青緑色のバイザー、首から背中に純白のマフラーを垂れ下げて、腕には青いギターをもった少女が立っていた。

「な、なんだ、その姿は！？」

『うれしいわ、ミソラ……わたしを受け入れてくれて。その愚かな男に音楽の力を見せてやるといいわ』

電波変換したミソラ俯いた頭を上げる。その目は、怒りに燃え、背筋を凍りつかせるほどの殺気にみちていた。少女は青いギターを構えた。

「何のつもりかは知らんが、帰るぞ！！」

「思い知れ！！」

心からの声が、響く。

辺りにギターの音が響く。

ギュィ――――――ン！！

「ギャ――――ッ！！」

気がつくとマネージャーは倒れていた。

『クスクス……。あなたの音楽を汚すファンたちを始末するのよ！クスクスクス……』

ミソラは光に包まれ、その光は空へ舞い上がり、消えた。まるで空に消えた、想い続けた人を迎えに行くかの如く。

?、届かないココロ（前書き）

4、Mind that doesn't reach

?、届かないココロ

スバルは、ゴン太とキザマロとまだ家の前にいた。

《オイ、なんかくるぞ　気を付けろ……》

車が走って来て止まり中から五陽田が出てきた。

「キミら、この辺りで何か変わったことが起こっとらんか?高いゼット波を感知したから来てみたのだが、特に何も起こっとらんようでな……」

「いや、別に何も起こってないぜ」

「あっ!そんなことよりあなたが委員長のご機嫌を損ねたせいで、ボクたちえらい目にあったんですよ!」

「本官は職務を忠実に遂行したまでだ。……ムッ!?」

五陽田はトランサーを見る。

「ゼット波の数値が急激に上がっておる!あっちだ!!」

その方向をその場の全員が見る。途端にギターの音がし、五陽田が倒れた。

「だ、大丈夫ですか!?」

さらにギターの音がし、ゴン太、キザマロと倒れていく。

『来やがった！！スバル、ビジライザーをかけろ！！』

「う、うん！！」

スバルがビジライザーをかけると、そこにはピンク色の電波体が見えた。

「あっ！！」

スバルが歩み寄る。

『あら、あの坊やこっちが見えるみたいね』

「ミソラちゃん！？」

そこにいるのはミソラかと言われれば違うが、ヘルメットからのぞかせた髪は色は違うものの外側に広がった髪型だったり身長が目測でほとんど同じであったりと似通う部分もある。

『やっぱり憑かれちまったか。まぁ、こうなることは予想してたけどな。見たところ、取り憑いてるのはハープだな……。女か……やりにくいな』

「ミソラちゃん！目を覚まして！！キミは宇宙人に体を乗っ取られてるんだ！」

すると、ミソラの隣にハープが現れた。

『クスクスクス……。カワイイ坊や、わたしたちの邪魔をしない

でちょうだい。ハープ・ノート、あの子はわたしたちを邪魔する悪い子よ。少しの間、眠ってもらいなさい。』

「わたしの邪魔をしないで！」

ハープ・ノートがギターを構えると、弦を弾く。すると、巨大な音符がスバルに向けて飛んできた。

スバルは横に跳び、なんとかよけた。

『ボヤボヤしてんじゃねえ！さっきの奴らはこれにやられたんだ。ハープは音波を操るＦＭ星人だ、油断するんじゃねえ！』

「おねがい、スバルくん。キミは傷つけたくないの。だから邪魔しないで……」

そう言うとハープは消え、ハープ・ノートは身軽な身のこなしで飛びのいてその場を離れた。

間髪入れず、ギターの音が鳴り響く。

「うわーっ！！」

『どうするよ？無差別に襲い始めたぜ、後を追わなくていいのか？』

「追うに決まってるだろ！すぐにウェーブインして追いかけよう！！電波変換！！」

スバルはロックマンとなり、ウェーブロードに上がった。

『ッ！　スバル　伏せろ！』

ウェーブロードに上がった途端に、ウォーロックが叫んだ。

「!?」

ロックマンは姿勢を低くする。すると、さっきまでロックマンの頭があった所を音符が横切った。

「今のは……?」

ロックマンは今しがた避けた音符を目で追いながら言った。

『電波変換したミソラって女の攻撃だな』

「でも、ミソラちゃんはここにはいないよ?」

『! スバル、次だ!』

「また!?」

ロックマンは素早く走って避けた。音符はロックマンが元いたウェーブロードに当たって消えた。

『どうやらテリトリーに入ったやつを襲うトラップの類(たぐい)みてぇだな……』

音符が次々ロックマンに襲う。彼は音符を避け続けた。しかし、音符攻撃がやむ様子は一向に見えない。

「数が多い……!!」

『とにかく走れ！！』

「う、うん！」

ロックマンは音符を避け、ロックバスターで打ち消しながら進んでいく。目の前の音符をバスターで消すと、奥にミソラの姿が見えた。

「ミソラちゃん……もうこんなこと、やめようよ」

左腕のバスターをウォーロックに戻しながら言った。

「……スバルくん？」

「そうだよ……。人を傷つけるのはいけないよ……。……さぁ、帰ろうミソラちゃん」

ロックマンはミソラに手を差し伸べる。でもミソラはそれを振り払うように睨んでから言った。

「……わたしはハープ・ノート。わたしの邪魔をしないで……。これ以上わたしを邪魔するなら……キミでも容赦しないからね」

そう言い残すとハープ・ノートは奥へ行ってしまった。

「ミソラちゃん……」

『オイ……もしこの先あの女を追うのなら、甘さは捨てるんだな。でないとこっちがやられるぜ』

「……」

ロックマンは再び走りだした。バスターで音符を打ち消しながら。

「……甘さ、か。」

『ちゃんと割り切ったのか？』

「分からない……割り切れたのかどうか。でも、ミソラちゃんをほっとくわけにはいかない……！」

『おい、どうしたんだよ、お前らしくもない！いつもなら他人なんか関係ないとか言うとこだろ？』

「……ぐっ！」

音符がロックマンに命中した。会話に夢中であったこと、そしてミソラを案ずる気持が感を鈍らせていたのだ。

『気を抜くんじゃねぇ！』

「……くっそお！」

悔しそうに顔をゆがめると、再び走り出した。

ハープ・ノートの背後で銃声が鳴り、振り返ると肩で息をするロックマンがいた。

「はぁ、はぁ、はぁ……」

「お願い、もうわたしにかまわないで！！」

「ボクも……ボクもキミと同じなんだ……！」

「なにが同じなのよ！キミにわたしの気持ちなんて分からないよ！」

そういうと、ミソラは後ろを向いた。

「ハッ！！」

ギターを鳴らすと、ウェーブロードの外に音符型の足場が現れ、それにハープ・ノートが飛び乗ると、飛んで行ってしまった。

「ロック、ボクらも飛べないの？」

『オレだけだったら飛んでいけるが、ロックマンの状態では無理だな』

「えーっと、あっちの方向は……天地さんの研究所だ！急がなきゃ！」

スバルはバスに飛び乗り、天地研究所で再び電波変換して音符を避けながら奥を目指した。

「……ちぃッ！！」

ここに来て、音符の数が増大していた。まるで雨のような音符の嵐がロックマンに降り注ぐ。

「こ……こんのぉ！！」

ロックマンは空中で高速回転すると、バスターを周りに連射した。
バスターの銃弾は正確に音符に向かっていく。ロックマンが着地すると、その背後で無数の音符が爆発した。

『スバル、お前……』

「……急ごう！！」

『なんでそんなに頑張るんだよ！』

「……見てられないんだよ！」

『……は？』

ウォーロックは怪訝そうな顔でロックマンを見上げる。

「あの子が自分みたいで！こんなボクが言うのも変かもしれないけど……でも、こんなボクだからこそ、分かってあげられることもあるはず！だから……」

ロックマンはキッと前を見る。そこにはハープ・ノートがいた。

「こんなことだめだ！ミソラちゃん……」

「なんでそんなにわたしの邪魔をするの……？」

ハープ・ノートはここまで一生懸命についてきたロックマンを驚いたように見つめて聞いた。

「ボクも、キミの気持ち……分かるから」

『ミソラ……いえ、ハープ・ノート、そんな戯言（たわごと）にココロ惑わされてはいけないわ。他人の心が本当に分かる人間なんていやしないわ。あの子はあなたを惑わす悪い子……。今ここでやっつけてしまわないとあとで後悔することになるわ』

「……わたしの邪魔は……させない……」

《ケッ、相変わらず取り入るのが上手いじゃねえか。なぁ、ハープ……》

「な、なにしゃべってるんだよ、ロック！？」

ハープがハープ・ノートの隣に現れる。

《おひさしぶりね、ロック……。悪いけど、わたしの邪魔はしないでもらえる？ここからが楽しい所なんだから。ミソラを使って音楽の力で地球を制圧するのよ。あなたこそ、その子を使って何をするつもり？》

《オレの目的は１つ、ＦＭ王への復讐だけだ》

《なるほど、上の人たちが目くじらを立ててあなたを探しているわけね……》

《オレは女相手に本気で戦う趣味はねえ。奴らの情報をオレに教えてこの場から消えるんなら、命だけは助けてやるぜ》

《クスクス……やさしいのね。だけど、今回はわたしの趣味でやってることだから、あなたには邪魔させないわ》

『ケッ、ならやるしかないな……。オレの居場所を知られちまった以上、しかたねえ……』

『わたしを女と思って甘く見たら、火傷するわよ。いくわよ、ハープ・ノート!!』

と言うと、ハープは消えた。

「な、何を話してたんだ!?」

『うるせぇ、お前にゃ関係ない話だ!油断するな、くるぜ!!』

「ショックノート!」

「!!」

ハープ・ノートの両隣にアンプが現れ、音符を発射した。ロックマンは音符を避けた。

「……くっ!」

避けた後、ロックマンは立ち膝をついた。苦しそうに顔をゆがめる。

『スバル、お前やっぱりさっきまでの音符の攻撃でダメージが……』

「……ロックバスター!」

ウォーロックの声を無視してバスターを放つが、ハープ・ノートは

バスターを身軽な動きでひらりと避けてからギターの先をロックマンに向けた。

「マシンガンストリング！！」

五本の弦がロックマンに迫った。

（――速い！）

「シールド！」

しかし、弦はシールドを突き破り、ロックマンに巻き付いた。

『ちぃ……ブレイク付きかよ……』

ウォーロックが悔しそうに呟く。身動きの取れないロックマンに向かって、弦に沿って音符が飛んできた。

「ぐはっ！！」

ロックマンは後ろに吹っ飛び、大の字に倒れた。

「……ミソラちゃん！こんなことするなんて間違ってる！」

ロックマンは脚を上に持ち上げ、それを下す反動を使って起き上った。

「間違ってるかどうかなんて、どうでもいい！それを言うなら、お金で歌を汚すのは間違ってないの！？」

「……」

「わたしとママの絆を利用してお金が欲しいだけのやつがいるのが許せないの！それでわたしが間違ってたって構わない！わたしの気もしらないで……！！」

スバルは心が痛かった。音符の攻撃のせいではない。言葉を交わすほど、シンパシー（共感）は増すばかりだった。

「キミ自身もじゃないか！歌を汚してるのは！！」

「……え？」

「『わたしとママの絆』なんだろう！？キミにとっての歌は！その歌で人を傷つけて！キミのしていることも、やつらとおんなじじゃないか！そんなことしても、キミのお母さんとの繋がりを守ることなんてできない！」

「う……うるさい！パルスソング！」

ハート型の音波がロックマンに飛んでいく。

「ウォーロックアタック！！」

ロックマンがハープ・ノートの前に瞬時に移動した。

「きゃ！？」

「バトルカード！ワイドソードッ！」

?、光とどく場所（前書き）

5、

Ｐｌａｃｅ　ｗｈｅｒｅ　ｌｉｇｈｔ　ｒｅａｃｈｅｓ

?、光とどく場所

ロックマンはハープ・ノートのわき腹を切りつけた。

「っ！……つっ……」

痛みにハープ・ノートは顔をゆがめた。わき腹を押さえて絞り出すように声を出す。

「ウ、ウゥ……。いや……わたしの音楽はわたしが守るの……」

「いつまでそんなこと言ってるんだよ！音楽で人を傷つけて、キミのお母さんが喜ぶわけないだろ！？」

「キミにわたしの気持ちなんか分かるわけ……」

「わかるよ！」

スバルの張り上げられた声に、ミソラは目を見張った。

「……ボクは、父さんがいないんだ……。だから、大好きな人がいなくなる辛さもよくわかるし、　嫌なことを無理やりやらされる辛さも知っている……。ボクの場合は学校に行くことだったけど……。ボクは人と仲良くなるのが怖いんだ……。もし、大事な人ができたら……また父さんみたいに……急にいなくなっちゃうかもしれないって思っただけで……怖くなって……。だから学校にも行きたくないし、他人と関わりたくなかった。そんなボクを、先生たちはむりやり学校に連れ出そうとして　ホントに学校

に行きたくなくて、死んでしまいたいとおもったこともあった……」

「……」

ミソラの目が変わっていく。ここまで同じ人間が今までいただろうか？と思ってしまう。

歌を汚されるのが怖くて人との関わりを怖がっていた自分。そんな自分を周りは無理やり歌わせた。それが嫌で、いなくなりたいと思ったこともあった。そんな自分と似た事を感じ、思ってきた人が目の前にいるのだ。

「そんなボクを助けてくれたのは母さんの一言だったんだ。『学校なんて行かなくていいんだよ』って。いつか、自分から行きたいと思えるようになったときに行けばいいって……。母さんにそう言ってもらえなかったら、ボクはもしかしたら自分を傷つけていたかもしれない……。そんなボクだから……キミの気持ちが分かるし、キミの助けになりたいと思うんだ……」

「キミも……そうだったんだ……」

細めた眼でハープ・ノートはロックマンを見る。ロックマンはワイドソードを消して言った。

「キミの歌を待っている人はたくさんいるよ……。今は歌えなくても、いつか歌いたくなった時がきたら、キミの歌を待っている誰かのために歌えばいいと思うよ……」

ハープ・ノートはその言葉に膝をつき、その隣には再びハープが現れた。

『なぜ、止めを刺さないの？』

『言っただろうがよ、オレに女相手に本気で戦う趣味はねぇってよ。』

『クスクス……分かったわ、完全にわたしたちの負けだわ……。かと言ってこのままオメオメ帰っても、厳しいバツが待っているだけ。……そうだわ』

ハープは何かをひらめいたように目を見開いた。

『オ、オイ……まさか……』

ウォーロックはロックマンの左腕で冷や汗を掻きながら言った。

『そのまさかよ、しばらくこの星でお世話になることにするわ。このミソラって子も気にいってるし。安心して、もうＦＭ星人側にはつく気はないわ。一度しかない人生だもの。楽しく刺激的に生きていきたいじゃない。この星には女心と秋の空って、言葉があるの知らないかしら？』

『……だから怖いんだよ。けどよ、こっちにいる以上、お前も狙われるぜ？』

『クスクスクス……その時にはあなたに助けてもらうわ』

『ケッ！勝手にしやがれ！これだから女ってやつは苦手なんだ！！』

「ちょっと、ロック！そんなこと勝手に決めないでよ！」

相手は仮にもＦＭ星人。親を失った悲しみを背負った少女の気持ちを利用しようとしたほどだ。それが地球に居座るのは、いくら反省したとはいえ、さすがに抵抗がある。

「そいつがまた変な気を起したらぶっ飛ばしてやりゃいいだろ！」

「その心配はいらないわ」

ハープ・ノートは立ちあがった。彼女の眼には何かを振り切ったような光が芽生え始めていた。

「ハープが変な気を起さないように、しっかり見張っておくから。それに音楽を愛する者に根っからの悪人はいないわ。……スバルくん」

「な、なに……？」

ミソラは考えを口にした。

「わたし……歌手を引退するわ」

「えっ！？」

「わたし、ずっと独学で音楽をやってきたから、一から勉強をし直して、……いつか、もう一度歌を聴いてもらうんだ。天国のママと、わたしの歌を待ってくれてすべての人のために……。その前に、ちゃんとケジメをつけないとね……」

「……ケジメ？」

「最高の席を用意しておくね。」

事件から3日後……。

響ミソラの引退ライブがコダマタウンの展望台で行われた……。

「みんな、今日は来てくれてありがとう！！次が、最後の曲です！！

『グッナイ　ママ』

「ラララララ　ラララララ　ララ　ララララ　ララ　ララララ　ララ　ララ　ララララ」

「みんな……グス……、……今まで応援してくれて……ありがとう……。勝手にライブを……中止したりして……本当にごめんなさい。わたしの心が弱かったせいでみんなに迷惑をかけちゃったね……。……今日……わたしは引退します……。けど、この引退は昨日までの弱いわたしからの卒業……。いつの日か、もっと強いわたしになれた時に、また、みんなの前に立ちたいと思います……」

「ミソラちゃんやめないでー！！」

「ウオォーッ！！ミ・ゾ・ラァァァッ！！やめちゃ嫌だーーー！！」

「ボクらがついてますよー！！だからやめないでくださいー！！」

「Ｌ・Ｏ・Ｖ・Ｅ　アイ　ラヴ　ミソラーー！！」

「ミソラちゃーん！！」

（わたし、こんなにたくさんの人に支えられてたんだ……。なのに、わたしってば自分のことばっかり……）

潤んだ瞳のまま笑って言った。

「みんな！！わたし、絶対戻ってくるからね！！ありがとう！！」

「……」

ステージが終わっても、拍手はしばらく鳴りやむことはなかった……

そして……

「今日は来てくれてアリガト。キミのお陰で前に歩きだせそうだよ……」

「きっと、キミのお母さんも空から見ててくれるよ……」

「……うん。それじゃ……そろそろ行かなきゃ……。これからはわたし、1人でがんばっていくから。」

――1人で、かぁ……

……ポロ……

「ア、アレ……どうしたのかな。な、なんで涙が……わ、わたし、もっとしっかりしなくちゃ……いけないのに……。ひ、ひぇーん……」

「……ど、どうしたの……!?」

『あーぁ、泣かしちまったな!この間テレビで言ってたけど、地球じゃ女を泣かすってのは罪になるんだろ?早くなんとかしねえと、逮捕されちまうぜ!』

「なんとかしろったって……。彼女は1人で生きていこうと決めたんだ……僕なんかにできることなんて……」

その時、ある人の言葉が思い浮かんだ。

「1人じゃ、解決できない問題も誰かとつながれば乗り越えられる。誰かが自分を強くしてくれるし、自分も誰かの力になれる。この星のすべての人がブラザーバンドで繋がって、お互いを力づけあいな

がら生きている世界になれば最高だ」

（もし……ブラザーになれたらこの子の涙を止めることができるのかな……）

「誰かが自分を強くしてくれるし、自分も誰かの力になれる。」

「……け、けど……ボクなんかに……
……」

「勇気を出せ、スバル」

（……父さん……）

大吾の言葉がスバルに勇気を与えた。一歩前へ進む勇気を。

「ヒック、ヒック……グス……」

目の前で両目に指の甲をこすりつけてすすり泣く少女をまっすぐ見つめて、そして――

「あ、あの……その……えっと……その……
ボ、ボクのブラザーになってください！！」

それだけのことを言うのに、どれほどの勇気が必要だったことか。
でも、確かに言った。

「ヒック……グスッ……
……」

――考えてみたこともなかった。ブラザー・・・。それを作る必要性も感じていなかったし、作ろうと考えたことすらなかった。ほぼ唯一心を許した母親が向こうに行ってしまったあとは特に。でも、今は――

「……ウン」

――本当は欲しかったのかもしれない。大切な人を失ってできたその隙間を埋めてくれる人が。そして、それは、長い年月をかけて――

――埋まった。

スバルは響ミソラとブラザーを結んだ！

「そろそろ行くね……」

ブラザーを結び終わり、涙も収まったミソラはスバルに言った。

「もう、大丈夫？」

「ウン、大丈夫だよ。これから先も、きっと、大丈夫。だって、わたしたち繋がってるから。広い世界でわたしは1人じゃないって確信が持てるから……。クヨクヨしたわたしとは今日でお別れ！！これからは新しいわたしになるためにがんばっていけると思う。き

っと、スバルくんも、新しいスバルくんになれるはずだよ！一緒にがんばろ！」

「う、うん……あ、それと交換した秘密は絶対に言っちゃダメだからね」

「トランサーの中に宇宙人が居候してるってことでしょ？たとえ誰かに教えても、信じてもらえないだろうけどね！！」

「オォーッ！！なんだこのゼット波は！？」

見ると、五陽田がいた。ゼット波の発生源を探すようにきょろきょろしている。

「あの人なら信じてくれるよ。けど、まずいな……ここじゃ、逃げ場所がないよ」

五陽田は意図してか意図せずしてか、今2人がいる展望台の唯一の出入り口である階段をふさぐように立ち止っている。それを見たミソラは前に進み出た。

「ハープ、行くよ！」

ミソラはギターを構えた。

「それっ！」

と、かわいげに叫んでから、弦を弾く。

ギュイ――ン！

バタッ

音符が五陽田に当たり、彼は戦闘不能になった。

「それじゃ、わたし、行くね！また、連絡するからね……アリガト！それから、これからもヨロシクね」

ミソラはスバルの前に進み出て幸せそうににっこりとほほ笑んだ。

「ポ、ポカーン……」

『それじゃね、ロック。長いお付き合いになりそうね、ウフフ……』

そしてミソラは立ち去った。立ち位置上、ミソラがスバルに背を向けていなかったら、そして今のスバルが陥った「ポカーン」が直っていれば、スバルにも確かに見えたはずだ。ミソラの、本当にうれしそうな笑顔が。

「ブラザーバンドって、あんなに効き目があるの……？」

ミソラの姿が見えなくなってから、スバルは呟いた。

『オレに聞くんじゃねぇよ！まったく、えらいのとブラザーになっちまったんじゃねえのか？』

（ブラザーバンドか……これで少しはボクも強くなれたのかな……ねぇ、父さん？）

――あのとき、あの展望台で出会わなかったら、
あのとき、自分から話さなかったら、
あのとき、分かり合えなかったら、
あのとき、キミがブラザーバンドを結んでほしいと言わなかったら、

――今のわたしはいない。

こんなかけがえのない存在、他にいない。

星河スバル、くん。

わたしを、わたしの人生を、変えてくれたひと。

暗い世界に光をくれたひと。

スバルくん……

ガバッ！！

『やっと起きた？』

「……あれ？ハープ？」

『おはよ。って言ってもまだ夜だけど』

「……変な気、起こさないよね？」

『？？？』

「……ごめん、今、完全に寝ぼけちゃった」

『そ、そう……？』

「……？どうしたの？」

ミソラは、ハープの様子がおかしいことに気付いた。

『ミソラ、あなた何の夢見てたの？寝言で『思い知れ！！』なんて叫んでたけど……』

「あ……わたし、そんなこと言ったの？」

『言った、言った』

「……」

寝言は寝言でも、よくもまぁここまで状況がややこしくなる寝言をチョイスしてしまったものだ。もっとも、自分の意思ではないが。

「スバルくんや、ハープと初めて会った時の夢を見てたの」

『……ぷっ！クスクスクス……』

「？　なんで笑うの？」

『あぁ、ごめん、ごめん。納得しちゃったもんだから……。あなたがなんで寝起きなのにそんな嬉しそうな顔をしてるのか、がね』

「そ、そう？」

ミソラは自分の頬に両手をあてながら聞いた。

『鏡、見たら？』

ミソラは手鏡を取り出した。確かに、目がいつも以上に生き生きし、うれしさそのものを映していた。それは、あのときと同じ、すがすがしい笑顔。……なんてこと、本人が分かるわけもないのだが。

「……」

『ね？嬉しそうな顔してるでしょ？』

ミソラは手鏡を机の傍（かたわ）らに置き、ちょっと下を向いて顎に手を当て、考えるしぐさをとった。

『ミソラ？どうしたの？』

ミソラは、ばっと素早く譜面に覆いかぶさったかと思うと、シャー

プペンを取り上げて何かを書き込み始めた。

『……お？』

ハープはミソラに近寄り、そこに書き込まれていく文字を眺めた。
しばらく、静かなカリカリという音のみが鳴っていたが、ペンを置いて、譜面を取り上げて歓喜の声を上げた。

「できた！！」

『ちょっとみせて』

ハープは譜面を受け取り、頭の中で完成した曲を再生した。

『……』

「ど、どう？」

ミソラが心配そうに声をかけた。

『「ふるえて　ないていた　わたしを　見つけてくれたね」って……まさか、ミソラ、これって……』

「えへへ……」

ミソラは頬をかきながら照れ臭そうに笑った。

『……うん、いい曲。ミソラの想いが伝わってくる、とってもいい曲に仕上がってるわ』

「そう？よかった～！」

『やったわね、ミソラ！』

「うん！後はタイトルだけだね！」

『え？タイトル、決まってなかったの？もうこれしかないって思ってたけど・・・』

「・・・あ、ばれちゃった？うん、これしかないよね。」

ハープから譜面を受け取り、一番上に文字を書き込む。そして、両手で持って掲げた。

「完成っ！！」

『うん、これで寝れるわね！』

うん、とミソラは返事をしようとして、そういえばと、あることに気がつき、目を丸くした。

「……って、わたしが寝てる間、ずっと起きてたの？」

『寝てる間に少しでも考えてあげようと思って……』

うわ、なんか悪いことした、とミソラは思った。

「……ごめんね、無駄になちゃって。」

『いいのよ。よりよい曲ができたんだから』

「そう言ってくれる？」

軽い罪悪感に、申し訳なさそうにミソラは言った。

『ええ、……ふぁぁぁぁぁ……。』

ハープは口に手を当て、あくびをした。

『……でも、やっぱり眠いかも』

「うん、ありがとね、付き合ってくれて」

『どういたしまして。でも、あなたもまだ寝たほうがいいわよ。夜更かしは体に毒よ？』

「うん、もう寝るよ。」

ミソラはパジャマに着替え、ベッドに潜り込んだ。

「おやすみ、ハープ」

『おやすみ、ミソラ』

そして、2人は就寝した。

――わたしに光をくれた。

自分を、見つけてくれた。

暗闇から抜け出すことができた。

――キミのおかげで。

そんなキミに、この言葉を、歌を、送ります。

この――――

――「シューティング・スター」を。

?、光とどく場所（後書き）

途中、オリジナルのセリフを入れていますが、今のスバルやミソラと性格が全く違うので、かつての彼らの物言いに戻って作るのが意外に大変でした。

?、2度目のデート（前書き）

1、

The second date

?、2度目のデート

――なんでだろう。

なんで、今、自分はこんなにも寂しいのだろう。

なんで、今、自分はこんなにも苦しいのだろう。

わからない。

さっきまで、大切な人たちと話を交わし、一緒に戦った。

今の自分にはこんな気持ちになるようなことは起きていない。

だけど、頭の中にどんどん浮かんでくる。

今までで、1、2を争うくらい苦しくて、嫌だった記憶が。

しかし、そんな嫌な記憶も、最初っから嫌な記憶、というわけではない。

最初は、むしろ人生でこれ以上は無いってくらい輝かしく、楽しかった記憶なのだ。

その日、スバルはＢＩＧＷＡＶＥに誤って実体化したウィルスを退治し、家に帰るところだった。
スバルがウチに入ろうとする。すると、

「スバルく～ん！」

スバルが声のする方を見る。

「あっ！キミは……。な、なんでここに……！」

「人の顔を見て、そんなに驚かないでよ～」

声の主が手を振りながら笑顔で走ってきた。ピンクのパーカー付きの服に、緑の短パン、赤紫の髪に緑の瞳。背中には黄色いギター。
アイドルでスバルの最初のブラザー、響ミソラであった。

「ミソラちゃん！」

「やっ！ひさしぶり～！」

「……ジーッ」

スバルが珍しいものを見るような目で彼女を見つめる。

「？　どうしたの？」

「本物……だよね？」

「当たり前じゃない！正真正銘の響ミソラだよ」

「い、いやさ……。あの有名人が目の前にいるっていうのが信じられなくって」

テレビをつければ画面の向こうに映るその人が、生で目の前にいる。復帰してからというもの、その人気は以前よりもすごい。それはミソラ自身が今の仕事に絶望していたところをスバルと出会って変わり、自分から人前に出るようになったからであろうが、ともかくその人気はテレビで見ない日はないほどであった。その有名人が目の前にいる、というのは初めて彼女を見知ったのが生であったスバルにとっても刺激的であった。

「え～～、そういうのは気にしないでよ～。それともスバルくんはわたしと距離を置きたかったりするのかな？」

対してミソラはそんなスバルにむくれ気味になる。

「ち、ちがうよ！そういう意味じゃない。ご、ごめんなさい……」

「……フフ。いいよ！許してあげる。」

楽しそうに言うミソラ。会話が楽しくて仕方ないらしい。

「それにしてもホントしばらくぶりだね！今日はどうしたの？」

「どうした……っていうか、スバルくんの顔が急に見たくなったんだよね。ダメかな？」

それを聞いたスバルは顔を赤くした。

「……へ？ぜ、ぜ、ぜんぜんダメじゃないよ。ハ、ハハ……。

……あっ、そうそう。聞いたよ、ミソラちゃんまた歌手として復帰したんだってね。」

「うん！歌手を一度辞めて、逆に気づいたんだよね。わたし、やっぱり歌が大好きだって」

ちょっと遠い目をして言う。かつての、母親以外のために歌を歌うのを恐れていた彼女は、もうそこにはいなかった。

「うん、ミソラちゃんには歌を歌う姿が一番だよ」

『オ、オイ　スバル、ビジライザーをかけてくれよ』

「え？いいけど……」

ウォーロックに従って、スバルはビジライザーをかけた。途端にウォーロックや電波くん、上空のウェーブロードが見えるようになる。

「どうしたの？ロック」

『この女がいるってことは「あいつ」もこの近くにいるってことだろ』

『ポロロン……その通りよ』

ミソラの隣にハープが現れた。若干ウォーロックの反応を楽しんでいるようにも見える。

『お久しぶりね、ロック。クスクスクス……』

『ゲッ！ハープ！！』

ひきつった顔でウォーロックがうめくように言った。

『アラ……つれない反応ねぇ。わたしたち、同じＦＭ星人同士じゃない。仲良くしましょうよ、クスクスクス……』

『オレはＦＭ星育ちのＡＭ星人だ。同じにするんじゃない』

『違うといっても、お隣の星じゃないの。それにＡＭ星人もＦＭ星人も体が電波というのは共通してる。だというのに、なんでそんなによそよそしいのかしら？クスクスクス……』

『……前にも言っただろ。オレは、女って生き物がいまいち得意じゃないんだよ』

『うぶねぇ……クスクス』

『チッ！』

ウォーロックが悔しそうに舌を鳴らした。……得意じゃないなら、なぜわざわざ彼女を呼びだすような言葉を言ったのだろうか、とスバルは思う。

「ハープ、あんまりロックくんをからかっちゃダメだよ。……あ、そうそう。スバルくん、今日はこれから用事とかあったりする？」

ミソラが上目づかいで聞く。

「ううん、特に無いよ」

「じゃ、今からロッポンドーヒルズへ遊びに行かない？」

「かまわないけど……でも、どうしたの？突然」

ちょっと怪訝そうな顔でスバルが聞いた。

「曲作りに忙しくて最近外の空気をあんまり吸ってなかったの。久しぶりに、お買いものしたり、おいしいものを食べたりしたいなぁ～って。その……なんていうかさ、こういう風に誘える男の子ってスバルくんしかいなくって。」

「そ、そ、そ、そうなんだ。ハ、ハハハ……」

スバルは再び赤くなりながら言った。

《今のやり取りを委員長が聞いたらどうなるだろうな》

まず、確実に原子爆弾がスバルの目の前で爆発するだろう。

「ん？」

空襲警報を聴き逃したスバルがウォーロックに聞き返す。

『いや、なんでもねーよ』

「じゃ、さっそく行こうよ！」

スバルとミソラはバスを利用してロッポンドーヒルズに着いた。

「見て見て、スバルくん！すごい人だね～」

「いっつも混雑してるね、ここって……」

先日、スバル、ルナ、ゴン太、キザマロのいつもの４人で映画を見に来たのだが、途中で幽霊がロッポンドーヒルズ中に現れ、上へ下への大混乱に陥った。その首謀者のファントム・ブラックと名乗る男を、ロックマンが撃退したのだが、そんなことが何もなかったかのようにロッポンドーヒルズにあふれ返る人、人、人。のど元過ぎれば熱さ忘れる、とはこのことだろうか。

「あ……親子連れもいるね。　……」

「ミソラちゃん……」

母親と父親に手を繋がれて目の前を歩いていく子供を見て目を悲しげに細めるミソラ。

「やっぱり思い出しちゃう……。天国にいるママの事。」

「……」

やはり、傷はそんなに簡単にふさがることはない。完全にふさがることもないだろう。いつも空を見上げては泣いていた自分、両親と過ごした楽しい日々を嫌でも思い出す。

「でもね、スバルくん。わたし、そういう時は必ずスバルくんの言葉を思い出すんだ。」

ミソラはスバルに健気に笑いかけながら言った。

「ボクの言葉……？」

「『キミの気持ちが分かるし、キミの助けになりたいと思うんだ……。』スバルくんが言った言葉だよ。この言葉を思い出すと自然と前向きになれるんだ。」

「……」

「……そう、この言葉はわたしにとって大事な『宝物』なの。こんな言い方変かもしれないけど……。スバルくん、こんなかけがえのないものをくれてありがとう！」

「い、いいよ。お礼なんて」

「だってホント感謝してるんだもん」

自分の言った言葉が、そこまで彼女の心の支えになっていることが誇らしくもあり、気恥しくもあり。……でも、

「ミソラちゃんの役に立てたのなら光栄だよ。」

「さっ、行こう！今日は楽しんじゃうんだから！」

バス停を降りた場所にあるのは「ヒルズ前通り」と呼ばれる場所。ロッポンドーヒルズに行くためにはバス停のすぐそばにあるエレベ

ーターを上がる必要がある。と、いうわけでエレベーターに乗り込んだ2人はロッポンドーヒルズへと登った。ここも相変わらずのにぎわいっぷりである。高層ビルの間に渡してある通路にそれこそ老若男女、様々な人がいる。

「さて、どこ行こっか?」

と、期待に膨らませた目でミソラがきょろきょろと視線を巡らせる。

「あっ……」

ミソラの視線の先には、赤いワゴンの店があった。

「ねぇ、スバルくん。あそこのカフェに行こ!有名なお店なんだよ。パフェがおいしくて、テレビとかで紹介されてるの」

「へぇ〜」

スバル達は店のカウンターの前へ行った。

「いらっしゃいませ!こちらがメニューになります」

店員がパンフレットのような紙を差し出す。それをめくれば様々なパフェの名前と写真、料金のリストが載っていた。

「ねぇ、スバルくん見て見て!どれもおいしそう!スバルくんは、何たのむ?」

「う〜ん……どれがいいかな?ボク、それほど甘いものには、詳しくないんだよね……」

「それじゃ、わたしが選んであげる！……これとかは？」

「あ、ボク　チョコよりクリームの方が……」

「それじゃ、こっちとか？フフフ！なんか楽しいね～」

ミソラが楽しそうに笑い、スバルもつられて笑う。

数分後、2人は店のテラスにあったパラソル付きの白いテーブルの椅子に座っていた。テーブルに空になったプラスチックのパフェの容器を置いている。

「……ゲフッ」

「おいしかったぁ！」

ミソラは満足そうに言い、スバルは椅子の背もたれに背中を預けていた。

「た、たしかにおいしかった。でも、それ以上に凄まじい量だったよ。……ゲフッ」

最初、その白い怪物が出てきたときはイジメかと思った。

「名前が『フジヤマクリームパフェ』だもんね～」

「クリームがまさに『山盛り』だったね。名前に偽りはなかったよ

……。にしても……よく、全部食べられたね」

「アラ、わたしまだいけるよ！甘いもの大好きだもん！」

「……」

（ミソラちゃんの胃袋ってブラックホール……？）

一応、同じもの注文したはずなのですが。一応、同じ怪物を受け取ったはずなのですが。

「歌を歌うってきっとそれだけパワーを使うことなんだよ。量はともかくさ、味はおいしかったでしょ？」

「うん、そうだね。テレビで紹介されるのも納得だよ」

「……あっ、そうだ、思い出した！テレビで紹介っていえばさ、ニュースで報道されてる青いヒーローって、スバルくんのことでしょ？」

「ギクッ！！」

そう、ロックマンは朝のニュースで『青いヒーロー』として紹介されていた。ウォーロックはそれを見て誇らしげにしていたが、正直スバル自身は恥ずかしくて目も当てられなかった。

「な、な、なんのことだろう？」

あわててとぼけるスバル。

「隠したって無駄だよ。わたし、スバルくんのことだったら、なん

だって分かっちゃうんだから！ね、スバルくんでしょ？白状して！」

何か、このパラソル付きのプラスチックテーブルと椅子が、牢獄の取り調べ室の無骨な鉄の机とパイプ椅子のように感じられる。そのうちカツ丼でも出てきそうだ。

「さ、さぁ……ど、どうだろ？」

「スバルくん！！」

響ミソラ取調員が白状を急かした。

「……は、はい、そうです。正体はボクです」

スバルはカツ丼が出てくる前に白状した。

「やっぱり！すごいね～！ニュースで紹介されるなんてさ」

「そ、そう？」

「だって世間じゃ『ヒーロー』って言われてるんだよ。カッコいいじゃん！！」

「カッコいい？て、照れちゃうな、へへへ……」

スバルが赤くなりながら言った。

『……』

《話題にされるのをあれほど、嫌がってたくせによ》

照れながら言うスバルを見ながらウォーロックは思う。

「……アレ？」

パフェの容器とトレイを返却したスバルとミソラ。そんな2人の目の前に、急に遠くから青い板状のものが飛んできた。

「CM用のエア・ディスプレイだね」

エア・ディスプレイの中で飾り文字が踊りながら、声が聞こえてくる。

『ただいま、美術館では、「滅びの文明展」を開催しております！ぜひお越しになってください』

「『滅びの文明展』だって……。ふ～ん、おもしろそう」

スバルは興味深そうに言った。

「スバルくん、こういうの好きなの？」

ミソラはどちらかと言うとそんなスバルに興味をもったように聞いた。

「……そうだね。美術館とか博物館とか、昔父さんによく連れて行ってもらったから……」

「そうなんだ……」

「……」

ミソラはちょっと悪いことしちゃったかな、と思いつつも提案する。

「ねぇ、せっかくだから行ってみようよ。場所は、えっと……」

ミソラはエア・ディスプレイを再びのぞきこむ。そして、目的の情報を見つけた。

「美術館だって。美術館ならたしかＴＫタワーの中にあったと思うよ。……じゃ、さっそくＴＫタワーに行こ！」

ＴＫタワーに向かって途中、２人は聞き覚えのある声を聞いてその方を向いた。聞き覚えがあるのも当たり前。そこにはミソラが出ているＣＭを放映しているエア・ディスプレイがあった。どうやら栄養ドリンクのＣＭらしい。やっぱりミソラちゃんがＣＭに出ると売れるのかな、と考えていたスバルの耳に隣から声が聞こえた。

「やっぱり恥ずかしいな……。自分が出てるＣＭって」

そう言いながら恥ずかしそうに顔を赤らめて自身を見上げるミソラ。そんなミソラをじっと見つめながらスバルは口を開いた。

「……ねぇミソラちゃん、ちょっと聞きたいんだけど」

「うん、何かな？」

エア・ディスプレイから目を離してスバルの方を向いてミソラは聞き返した。

「なんで歌手活動を急に再開したの？何か理由はあるの？」

ミソラはかつて言っていた。お金のためには歌えない、自分の歌は母親のためにあると。しかし、アイドル活動は、それらの目的を果たすものとは思えない。かつてのトラウマもあるだろうから、ただ歌が好きだからといって人前で急に歌えるようになるとも思えなかった。だったら、なにか理由があるのではないか。

「……うん。歌手を引退してしばらく考えたの。自分がやりたいことを」

「自分のやりたいこと？」

「そう……。自分のやりたいこと、自分にできること。時間は少し掛かったけど、ようやくそれを見つけたの。それはね……」

と、そこまで言ってミソラは一呼吸おいた。そして再び話し始める。

「世界中にはわたしやスバルくんのように親をなくした人ってたくさんいる。そういう人たちのために歌を作りたいの。親を失った気持ちを知ってるわたしなら、その悲しみを和らげるやさしい曲が作れるんじゃないか……って」

――そう、かつて自分の悲しみを和らげてくれた人がいたから。救われるそのありがたさを知ったから。それを、分けてあげたかった。自分なら、それができる。そう思ったから。

「……ミソラちゃん。そんなこと考えてるなんてすごいね……。ボクなんかとはスケールがちがうや」

「何を言ってるの。わたし、スバルくんには全然かなわないよ」

「え？ど、どういうこと？」

スバルは少し驚いたように聞いた。

「ロックマンのニュースを見て思ったもん。わたしも、もっと人の役に立ちたいって」

「そ、そんなたいしたことしてないよ」

そんな（自覚があるのかないのかは分からないが）謙遜するスバルを見て、ミソラはふっと笑う。キミは、十分すごいんだよ。

「スバルくんはヒーローとして、わたしは歌手として……。一緒に前に進めるといいね！！」

「うん！そうだね！」

「……あっ、なんか話しこんじゃったね。美術館に行く途中だったのに。……さっ、行こ！」

そして、２人はＴＫタワーの前に立った。見上げるほど高い巨塔がそびえ立っている。ニホン中の電波が行きかう電波塔、ＴＫタワー。先日の事件でファントム・ブラックと戦った場所でもある。その戦場は塔の頂であった。見上げても見えないその頂上。その時は委員

長を助けるのに必死で気付かなかったが、今思えばよくその高さで戦えたものだ、とスバルは思う。

「美術館は、ＴＫタワーの最上階だって聞いたことあるよ」

「最上階かぁ。またすごい場所に美術館を造ったもんだね」

都合も悪くまたその頂上。屋内だから大丈夫だとは思いながらも若干身震いをした。

「なんかわくわくしてくるね！さっ、スバルくん、早く、中に入ろーよ！」

楽しそうに笑いかけながら、スバルの手を引くミソラ。まぁ、いいか。ミソラちゃんも楽しそうだし。そう思いながらミソラに連れられてスバルはエレベーターに乗り込んだ。

そう、ここまでは最高だった。でも、ここから記憶は少しずつ、辛く、悲しく、寂しい記憶へと変わっていく。

?、2度目のデート（後書き）

前から思ってたんですけど、よく考えればミソラってウォーロックやハープが携帯端末から出たら見えてないですよね？
あと、このシーンですよね？いろんな小説でミソラが大食いという設定がされているゆえんのシーンは。

５話に載せたミソラの宝物の話もそのまま載せました。かぶっちゃってますが、まあ、いいや。

?、滅んだ種族（前書き）

2、

tribe who ruins

?、滅んだ種族

スバルたちはエレベーターで最上階に着くと、受付に行った。受付のお姉さんが丁寧な口調で説明する。

「『滅びの文明展』へようこそ！この地球の歴史を紐解くと……過去に滅んでしまい、今はもう見ることのできない文明や生物が、数多く存在します。ここではそうした文明や生物が残した遺産を展示しています」

「へぇ～……面白そう！」

スバルが関心したような声を挙げた。ミソラはスバルの子供のようなリアクションにクスッと笑った。

「展示をご覧になる前にこちらをお受け取りください！」

スバルはマテリアルウェーブ「ガイド」をスターキャリアー内のデータとして受け取った。

「ガイドの誘導に従ってお進みください。では、ごゆっくりお楽しみくださいませ！」

『まず最初の展示は「ムー大陸」についてですわ』

この美術館のガイドマテリアルウェーブ、シャベクリンが説明を始

めた。

「ムー大陸？」

『かつてこの地上には、現代をはるかに上回る科学力を持った……、ある文明が、存在したらしいですわ。それをムーと呼ぶのですわ』

「現代をはるかに上回る科学力？聞いたことないよ、社会の授業でも教わってないし……」

スバルが怪訝そうに聞き返す。

「ムーが本当に存在したかどうかは、まだ分かっていないのですわ。仮説では……、ムーはある時を境に突然姿を消したとされていますわ」

「へ～……不思議な話だね」

『ムーのものと思われる遺産が各地で発掘されているのですわ。それがここに展示されているのですわ。ゆっくり、ご覧くださいですわ！』

「ムー大陸だって……ホントにあったのかな？」

ミソラが言った。今、２人は展示物をいろいろ見て回っている。シャベクリンは次のコーナーに行くまでご自由にご覧ください、と一

時的にスターキャリアーに戻ってしまった。

「う〜ん、どうだろうね？でも、本当にあったんならちょっと見てみたいかも」

「そう？」

「だって、現代をはるかに上回る科学力なんだよ？見てみたいと思わない？」

「あ、そうだね。どんなことができたんだろ？」

「こういうことを考えるのも面白いかもね」

「そうだね！……。あ……ごめん、スバルくん」

そう言うと、ミソラはどこかへ行こうとした。

「どこ行くの？」

「えっと、その、なんていうか……」

ミソラは少し顔を赤らめて言う。若干もじもじしているように見える。

「だ……大丈夫？ほら、言ってみてよ」

「……お……」

「……お……？」

「お、おトイレ！！」

そう叫ぶと、後ろを向いて行ってしまった。

『なんだ、あいつ？』

ウォーロックがスターキャリアーの中から聞いた。

「さぁ、トイレに行くって言うのが恥ずかしかったんじゃない？」

『それが本当なら、最終的にあんな大声で言ったら逆効果じゃないか？』

「……」

ミソラが戻ってくるのを待つスバルはいろいろな展示品を見て回った。

そのうちの一つに目が止まる。

「この展示品……スターキャリアーにそっくりだ。これも『ムーの遺産』なのかな」

確かに、見た目はスターキャリアーに酷似している。色は紫だが、カラーを除けばそのものである。

『オイ、スバル。ハイドの事を思い出してみろ。奴が電波変換に使

ってた代物……。あれもスターキャリアーにそっくりだったよな』

スバルの脳裏にハイドが電波変換をしたときのことが思い浮かぶ。

そこはＴＫタワーの頂上で、うわ、高くて怖い……。っと、問題はそこじゃなくて、電波変換の直前にハイドが掲げたもの。アレをたしか、ハイドは……

「そ、そうだ！確かハイドは『古代のスターキャリアー』とか言ってた。もしかして、何か関係があるんじゃ……」

『その展示品を詳しく調べてみろよ』

「そ、それはダメだよ、怒られちゃうって」

スバルがあわてて言う。ウォーロックは呆れたように鼻を鳴らす。

『フン！情けないヤツだ。お前がやらないならオレがやるぜ』

「オレがやるって……まさか！」

スバルはビジライザーをかけた。ウォーロックが「古代のスターキャリアー」の近くに浮いていた。

『ハイドたちの正体に近づいてやる！』

「待って、ロック！！」

スバルの制止を無視して、ウォーロックは「古代のスターキャリアー」に近づいた……

ビー！ビー！ビー！

警報が美術館中に鳴り響く。

「や、やっぱり！！」

ビー！ビー！ビー！

「防犯システムを作動します」

館内放送が聞こえるのと同時に、スバルの周りに警官のマテリアルウェーブが現れた。

「わわ！！こ、これは……マテリアルウェーブ！？」

スバルは後ずさりをした。

『私ハ、コノ美術館ノ警備員……ミスター・プロテクトデス。アナタ、展示品ヲ盗モウトシマシタネ』

「ご、誤解です！」

『言イ訳ハ、許シマセン！』

警備員は聞く耳をもたない。

「スバルくん！？」

ミソラがトイレから戻ってきた。警備員の弾幕の向こうから声をかける。

「ど、どうしたの!?」

「そ、それが……」

「なんだ?なんだ?」

今度は美術館のプロデューサーがやってきた。かつてスバルに助けられたことがあり、その恩からスバルたちを無償で美術館に入れてくれた人である。

「あらら?こいつはどういうことだ?」

「プロデューサーのおじさん!ごめんなさい、間違って展示品を触っちゃったんです」

「おお、そうか、そうか。警備員、もう下がっていいぞ」

『……ハイ』

警備員のマテリアルウェーブはスバルに疑いの目を向けたまま、それでも命令とあらばと、消えた。

「ごめんなさい」

スバルは警備員が消えた後、プロデューサーに頭を下げた。

「これから、気をつけてくれればいいさ。それよりもどうだい?この防犯システムは。展示品を盗むには手品でも使わないと無理だろうね。ハッハッハッハ!」

誇らしげに笑うおじさん。ウォーロックはスターキャリアーの中から憎々しげに呟いた。

《……チッ！せっかくハイドたちの秘密を探ってやろうと思ったのによ》

（気をつけてよ、ロック！）

『次は「滅びの種族」についてですわ』

再び出てきたシャベクリンが次のコーナーの説明をした。

「滅びの種族？」

スバルが確かめるように聞き返した。

『今までは滅んでしまった3つの種族のことですわ。その種族たちは強力な力を持ち、長く繁栄を築いていたと言われていますわ。この展示では、その種族を紹介しているのですわ』

「滅びの種族か……。なんで滅びちゃったんだろうね？」

ミソラが聞いた。強力な力をもっていたのなら、相当な理由がなければ滅びないだろう。一体なにがあったのか？

「分かんない……」

スバルは考えた末に言った。ガイドはそれに答えるように話を進めた。

『シノビ、ベルセルク、ダイナソー……。この3つの滅びの種族には共通することがありますわ。それは、滅び去る直前に「絆が弱くなった」ことですわ』

「絆が弱くなった？」

『種族が繁栄するにつれて……、仲間同士のつながりがなくなっていったらしいのですわ。その結果、争いや戦争が起き、これらの種族は滅んでしまったのですわ』

「仲間同士が傷つけ合っちゃったんだね」

『滅ぶ直前に絆が弱くなる……。このことを専門家は「滅びの前兆」と呼ぶのですわ』

「滅びの前兆……。なんか怖いフレーズだね。」

ミソラが若干ひきつった顔で言った。

『……さて。では、次の展示に行きますですわ。次の展示はこの美術館の目玉、「オーパーツ」ですわ』

そこには化石のようなものが置いてあった。

『こちらに展示されていますのが、滅びの文明展の目玉、オーパーツですわ！』

「オーパーツ？」

『発掘された年代ではありえない材料や方法で造られた遺産、それが「オーパーツ」ですわ』

「それって、どういうこと？」

言葉の意味が理解できなかったミソラがきょとんとして聞いた。

「例えば、大昔って車とか無かったでしょ？それなのに、車の化石が出てきたら変だよね？そんな感じで、歴史的に考えれば絶対、あり得ないんだけど……それにもかかわらず、発掘されてしまった遺産がオーパーツなんだよ」

「へぇ～……スバルくん、物知り～」

ミソラが関心したように言った。

「でもこのオーパーツ……他の展示品とそれほど変わらないように見えるけど……」

『このオーパーツには大きな秘密があるのですわ。材質を詳しく調べてみたところ……現代でも解明できない……未知の物質で構成されていると分かったのですわ』

「現代でも解明できないって……そんな物質あるの？」

『最新の研究で「あるもの」に似ていることが分かったらしいのですわ。そのあるものというのが……マテリアルウェーブですわ』

「……え？じゃあ大昔にマテリアルウェーブが存在してたってこと？」

スバルが目を見開いて言う。マテリアルウェーブなんて、最近できた代物だ。それが、大昔の文明に既に存在していたというのか？

『そんなことは、歴史的に絶対あり得ないですわ。でも、実際遺産として発掘されてしまったのですわ。科学者たちは、頭を抱えているのですわ』

「こんな不思議なことってあるのね」

ミソラも驚いたように呆然と呟いた。

『オ、オイ、スバルこいつはとんでもねぇぞ』

「どうしたの、ロック？」

『ビジライザーをかけてあのオーパーツとやらを覗いてみるんだ』

「うん、わかった」

いつものようにスバルはビジライザーをかけた。

「わっ！！」

見ると、オーパーツからオーラのようなものが噴き出している。そ

の圧倒的な威圧感に、スバルは飛びあがった。

『電波があふれ出してやがるんだ。しかも相当強力なやつだぞ。こうしてそばに立つだけで圧倒されちまいそうだぜ』

「一体なんなんだ……これ？」

『……「武器」だ。電波を使った「武器」に間違いねぇ』

「大昔にどうやってこんなものを……」

ヴィィィ―ン

スバルの疑問をさえぎるように音が響いた。

「あら？何の音かな？」

ミソラが音に反応して振り返る。

「な、なんだこりゃ！」

声のする方を見ると、先ほどの『古代のスターキャリアー』が黒い円に囲まれていた。

「この黒い穴はなんだ？いつのまに？」

美術館のプロデューサーが不思議そうに見ている。

ズズズズズ……

黒い穴は『古代のスターキャリアー』を呑みこんだ。

「ゲゲゲ！！て、展示品が消えた！！」

ヴィィィーン

その隣の展示品にも黒い穴が現れた。

「こ、こっちにも……！」

ズズズズズ……

その展示品もまるで流砂にでも飲みこまれたかのように黒い穴に沈んで消えた。

「ヒィィィー！！展示品がぁ！！」

ヴィィィーン

ズズズズズ……

そこら中の展示品が消えていく。

「や、やめてくれぇー！け、警備員は何をやってるんだ！！」

見ると、警備員も穴に沈みかけていた。

「ウウウウ……！」

「こ、ここの展示品は貴重なんだぞ。費用が……！費用がぁ……！！ひぃぃよぉうぉ――――！！」

「な、何が起きてるんだ!?展示品がどんどん吸い込まれてる!!」

スバルがあちこちで沈んでいく展示品を見回しながら言った。

「スバルくん。さっきのプロデューサーの人、かなり困ってる。これって、ヒーローの出番じゃない？」

「べ、別にボクはヒーローなんかじゃないって」

「もっと自信持ちなよ。きっと、ここにいる人みんなが待ってると思う。ロックマンの登場をね」

ミソラが期待と信頼の目をスバルに送っていた。

「……！」

「それにわたしも見たいもの！ロックマンが活躍してるところ！」

「……分かったよ、ミソラちゃん。ボクがなんとかしてみる」

自分を奮い立たせるように言い放った。

「さすが、スバルくん。わたしとハープも手伝うからね！」

スターキャリアーを取り出してミソラは言った。

「まずは電波変換しておこう。この姿のままじゃ、力が出ないからね」

《……お前が進んで動くとはな。この女に良い所でも見せようってのか？》

（べ、別に……そういうわけじゃないよ）

《フン、どうだかな。ま、別にオレは、暴れられればどっちでもいいんだけどよ》

「電波変換！星河スバル、オン・エア！」

「電波変換！響ミソラ、オン・エア！」

――この穴。展示品を呑み込んだあの、黒い穴がすべての元凶だった。この時はまだ、この穴がのちに、僕らを絶望に突き落とすなんてこと、思ってもみなかったんだ。

?、黒い穴とカミカクシ（前書き）

3、

Black hole and spirited away

?、黒い穴とカミカクシ

2人のスターキャリアーがそれぞれ青とピンクに輝き、持ち主を包む。そしてその光ははじけ、中からロックマンとハープ・ノートが現れた。

「スバルくん、おまたせ！」

響ミソラ改めハープ・ノートが言った。

『ポロロ～ン、仲良くやりましょ、ロック』

『フン、足を引っ張んじゃねーぞ』

『あら、心外ね。ミソラとわたしが合体した姿である、この「ハープ・ノート」の力……忘れたわけじゃないでしょ？』

『……チッ』

ウォーロックが舌を鳴らした。

「じゃ、さっそくこの騒動の原因を解明しよう。……ん？」

『……キキキッ！』

見ると、紫の球体に赤い目をつけたようなものがウェーブロードに浮いていた。

「な、なにかしら？アレ？気持ち悪い……」

うえぇ、と何かを吐きだすかのように舌を出しながらミソラが呟いた。

「もしかして、あれがこの騒動の原因？よし、そばに近づいて調べてみよう！！」

え、アレに近づくの？と、一瞬引きながらも、ハープ・ノートはロックマンに従った。ウェーブロードに乗り、その球体に近づいた。

「近くで見るとかなり不気味だな……」

「スバルくん、気をつけてね」

『キキキッ！』

ヴィィィーン

紫の球体が金属をすり合わせたような声を出すと、ロックマンの足元に黒い穴が現れた。

「え？」

「スバルくん、下がって！！」

スバルは素早く後退した。……危なかった。あと少しで飲みこまれるところだった。ドクドクと高鳴る胸を押さえてスバルはたちあがった。

「やっぱり、これが原因か！」

「……キキキ！オーパーツ……キキキ！」

紫の球体は消えた。

「き、消えた？」

ヴィィィーン

「スバルくん、あっち！」

ハープ・ノートの指差す方を見ると、紫の球体がオーパーツの背後に移動し、オーパーツの下には穴があった。

「あっ！オ、オーパーツが！！」

「このままじゃ呑み込まれちゃう！」

「プロデューサーのおじさんがまた困っちゃうよ。阻止しなきゃ！」

『……オイ、スバル』

突然ウォーロックが呼んだ。

「どうしたの？ロック？」

『白状するが……オレは、あの「オーパーツ」が気に入った！手に入れたくなったぜ！』

まさかのカミングアウト。スバルは焦って言い返す。

「な、なに言いだすんだよ、急に！」

『あのオーパーツとやらはとんでもない武器に違いねぇ。あれがオレ達のものになれば……！』

「そ、そんな……あれが武器だっていうのはロックの推測でしょ？」

『オレの勘は当たるんだよ。そうとうな力が手に入るはずだ、断言するぜ』

「べ、別にこれ以上力なんていらないって。」

『……ホントにそう思うか？ここらでオレたちはパワーアップしておく必要があるとは思わねぇか？ハイドみたいなのがいつ襲ってきてもすぐ帰り打ちにできるくらいにな』

「そ、そんなこと言って……ただ単に、ロックがあれを使って暴れてみたいだけじゃないの！？」

『……それもないことはない』

……やっぱりか。

「やっぱりダメだよ！あれは展示品なんだよ！」

『フン！相変わらず臆病な奴だ。なんにしても、このままじゃオーパーツはなくなっちまう。そいつだけは阻止しておかないとな』

「言っとくけど、絶対ダメだからね！大事な展示品に手を出そうなんて！」

『そいつは後だ、後。とにかく急いでオーパーツの所に行くぞ』

ロックマンとハープ・ノートはオーパーツと球体の元へと向かった。

『急げ、スバル！オーパーツが、呑み込まれちまうぞ！』

「うん！分かってる！」

ズズズズズ……

そうしているうちに、オーパーツは半分ほど沈んだ。

「ヤ、ヤバッ！」

スバルは沈みこんだオーパーツの所へ駆け寄った。

『よし、オレにまかせろ！！』

「え？」

『ガブッッ！！』

左腕のウォーロックがオーパーツに噛みついた。

「か、噛みつくなんて……！そんな無茶な！」

『スバル！お前も全力で引っ張れ！！』

「うん！……うおおおお！！」

ズズズズズ……

オーパーツは少し浮き出てきた。

「……！！」

しかし、引き戻されてしまう。すさまじい引力だった。

「ダ、ダメだ！！引き離せない！！」

「スバルくん！！わたしが、あっちの気味悪い物体を攻撃してみる。あれを倒せば、その黒い穴も消えるかも！」

「お、お願い、ミソラちゃん！！」

ミソラはギターを構えた。

「いくよ、ハープ！！パルスソング！！！」

ギィィィイン！！

ハート型の音波が紫の物体に当たった。

「……キ、キキィィィ！！！」

その物体はまるで黒板を引っ掻いたような聞くに堪えない声をあげながら破裂した。

「わっ！」
「きゃっ！」
破裂した衝撃で二人は後ろに吹っ飛んだ。
「……イタタタ」
2人は尻もちをついていた。台座を見れば、黒い穴も例の物体も消えていた。
「黒い穴が消えた……。これで解決かな？」
『……そうでもねぇぞ。
……呑み込んじまった』
「は？」
『だから、呑み込んじまったんだよ、オーパーツを……』
「え――――――――――！！」
『い、言っておくが、わざとじゃねぇからな！後ろに吹っ飛んだせいで、そうなっちまったんだ』
「吐き出してよ！」
『む、無茶言うんじゃねぇ！もう腹の中だ！』
「スバルくん、どうかした？」

何か騒いでいるスバルに、ミソラが聞いた。

「そ、それがさ……」

「……え？」

「……ドクン！！」

急に、ロックマンの周りに凄まじいオーラが出た。

「！！！！！！」

「それがさ……ロックがオーパーツを呑みこんじゃったんだよ」

気がつくと、オーラは消えていた。

「……」

「……どうかしたの？」

ハープ・ノートは青い顔をしている。

「う、うん　ちょっと」

（……目の錯覚かしら？）

「おや！！」

見るとプロデューサーのおじさんがこちらに歩いてきた。

「あなたは、もしやニュースで噂の青いヒーロー？」

「え？そ、それは……」

「そう！この人が青いヒーロー！さっきの騒動を納めてくれたのも、この人よ！」

まるで息子を自慢する親のようにミソラは誇らしげに言った。

（ミ、ミソラちゃん！！）

焦ってミソラに食ってかかるスバル。

（いいじゃない、ホントのことなんだし）

「ありがとうございます！あなたは本物のヒーローだ！」

「ヒ、ヒーローだなんて……そんなこと言われたら、恥ずかしいです」

そう言うとロックマンは顔を赤らめて走って逃げた。

「あ、待ってよ」

ハープ・ノートもそれに倣った。

「ありがとー！……ん？」

後ろを振り向く。

「あっ！オ、オーパーツがない。そんなぁ……費用が……費用がぁ……！」

ヴィィィーン
ズズズズ……

黒い穴から、銀髪の少年が出てくる。

「……」

走り去るその青い少年の背中を睨みつけていた。

……TKタワー前。

「大変な目に合ったね。せっかく、遊びに来たのに……」

「ううん、スバルくんと一緒に居られて、楽しかった。ロックマンの活躍、カッコよかったよ！」

「カ、カッコいいなんて……ほ、褒めすぎだよ」

再び赤くなって言うスバル。今日1日で何回赤くなったことやら。

「……あっ、気付いたら、もうこんな時間……」

そう言いながら辺りを見回すミソラ。スバルも空を見上げると、もう夕暮れ時で、空は紅く染まっていた。カラスの鳴き声でも聞こえてきそうなキレイな空である。

「そろそろ帰らなきゃね」

「楽しい時間ってすぐに終わっちゃう。わたし、スバルくんに会うのすごく楽しみにしてたし……」

相当さみしそうな顔でそう言うミソラ。スバルはそんなミソラに聞いた。

「……ミソラちゃん。なんで、ミソラちゃんはボクなんかをそんな大事に思ってくれるの？ボク……大した人間じゃないよ」

「だって……さっきも言ったけど、スバルくんからもらった言葉は、わたしの心の支えになってる。ううん、言葉だけじゃない。スバルくんの存在がわたしの心の支えなの！宝物なんだよ！だから・・・」

「……そう言ってもらえるとボクもうれしいよ、すごく！」

2人で微笑み合ってから、ミソラが言った。

「……あっ、そうだ！ねぇ、スバルくん。わたし、久しぶりに委員長たちに会いたいな」

思い出したようにミソラが言った。

「いいんじゃない？委員長たちも喜ぶと思うよ」

「じゃ、明日とかみんなで集まれるかな？」

「分かった、みんなに連絡しておくよ」

「うん、明日楽しみにしてるね！」

――運命とは、時に残酷だ。もし、あの時、オーパーツを呑み込まなければ、みんなで集まるなんてことしなければ、あんなことにはならなかったんだ。でも、僕らは、たくさんある分かれ道のうち、最悪の道をたどってしまった。

？、みんなが消えた日（前書き）

ＰＶ１０，０００アクセス突破

４、

Ｄａｙ ｗｈｅｎ ｅｖｅｒｙｏｎｅ ｄｉｓａｐｐｅａｒｅｄ

?、みんなが消えた日

翌日――――

「久しぶりだね～」

ミソラとスバルが並び、その前にルナ、ゴン太、キザマロがいた。

「ミソラちゃーん！会いたかったぜー！歌手を引退してた間もキミを忘れたことは一度もないぜ！！」

「ゴン太くん、キミにはアイちゃんがいるでしょう？ミソラちゃんの一番のファンはボクです。歌手活動に復帰してくれて、どれだけうれしかったことか！思わず、目頭が熱くなりなしたよ」

「そんな大げさだよ」

ミソラは謙遜したように言う。

「大げさじゃありません」

「オレ達、ずっとファンだぜ！」

「なんか照れちゃうなぁ～、ありがと！！」

ミソラは照れたように少し頬を赤く染めて言った。

「……へへ！ミソラちゃんはやっぱサイコーだぜ！」

「……」

（な、なんでしょう……？背中に殺気を感じます）

殺気（ルナ）の根源が前に進み出る。

「ところであなた……最近ずっと顔を見せなかったけど、やっぱり歌手活動を再開して、忙しくなったのが原因なの？」

ルナが怪訝そうに言う。

「うん……。でも、たまにはこうやって誰かとおしゃべりしたり、どこかへ遊びに行ったりするのも大事だと思ってるんだ！外の空気を吸った方が、いいフレーズが浮かぶこともあるし……。昨日なんかはロッポンドーヒルズに行ったんだよ」

「へ～～……ロッポンドーヒルズかぁ。誰と行ったの？ひとり？」

「え、えっと……スバルくんと2人だけど……」

ミソラは何気なく言ったつもりだったが、周りには衝撃的だった。

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、ふたりですって！ホ、ホントなの！？スバルくん！」

「ま、まぁ……」

「ズ、ズルイです！！」

「きたねぇぞ！オレ達も誘えよ！」

「……」

（な、なんで私がこんなに動揺しなきゃいけないの！）

ヴィィィーン

聞き覚えのある音が鳴った。

「え、なに？」

「うわぁぁぁ！！」

「きゃぁぁ！！」

「す、吸い込まれる！！」

コダマタウンのあちこちで人が黒い穴に引き込まれていた。

「あ、あれは……！」

「ひぃぃぃ！！」

「おたすけーー！！」

見渡すばかり、どこにも助かっている人はいない。

「美術館を襲った黒い穴！なんでコダマタウンに！？」

「な、なんなのよ……アレ！」

「あんな、現象『マロ辞典』にも載ってません！まさか、またＵＭＡ騒動ですか！？」

「ここにいたら、オレ達もあぶないんじゃないか！？」

「大丈夫！わたしたちには強い味方がいるわ！」

「え？」

ルナの声に、一気にスバルに目が集まる。

「お、そうだった！オレ達には、ロックマンがいた！」

「そうです！ロックマンならきっと解決できます！」

「そ、そんなふうに期待されても……。」

スバルが困ったように言う。そんなスバルを見て、ミソラはふぅ、とため息を漏らして言った。

「もう　認めなよ、スバルくん。ロックマンはみんなの中では立派なヒーローなんだよ」

「……。わ、分かった。ボクがなんとかしてみせる」

キッと目の色を変えてスバルは言った。

「お～、さすがです～！」

《強気じゃね～か》

（だって、みんなの期待をひしひしと感じるし……。その期待を裏切るのは悪いような気がする……）

《ヘッ、ヒーローは辛いな》

「スバルくん、わたしは……」

「ミソラちゃんはここにいて！ボクだけで大丈夫だよ」

「あの黒い穴が発生してるってことは、発生源である例の不気味な物体がどこかにいるはずだよね」

『見ろ！今度は3体もいやがるぜ』

ウォーロックに言われて見回すと、確かに屋根の上やウェーブロードの上に3体の例の物体が浮いていた。

「行こう！！」

スバルは駆けだした。

ロックマンは2体の不気味な物体を片付け、最後の物体に取り掛かっていた。

「エイ！！」

……キィィィ！！

「よし！！」

『オシ、これで全部だろ』

「黒い穴は無くなったかな？」

見ると、先ほど穴に引きずりこまれそうだった人々は全員無事だった。

「みんな無事みたいだね！よかった～」

『それにしても……あの黒い穴は一体なんだったんだ？』

「分かんない……。五陽田さんは、神隠しとか言ってたけど……」

「……見つけたぞ」

「え？」

ゴゴゴゴッ……

地鳴りのような音が響く。

「……？」

『な、なんだ……？空気がピリピリしやがる』

ゴゴゴゴッ！！！

『や、やべぇぞ！スバル！』

「分かってる……これはただごとじゃない！」

ヴィィィーン

『上だ！！』

ロックマンが空を見上げると……

「また、黒い穴……」

「……くらえ！」

「……来る！！」

空に空いた穴からレーザーのようなものが打ち出される。

「うわぁぁぁ！！」

レーザーの着弾によって煙がたっていた。

シュゥウゥウ！

その煙が晴れるとそこには1人の人間が立ち、レーザーの衝撃によって尻もちをついたロックマンを見下ろしていた。

「……」

「……ひ、人？」

「……なるほど、困っている人間がいると、姿を現すというのは本当だったみたいだな。そこまで他人を気に掛けるとはな……。オレには理解できない。……」

「ううっ……な、なんなんだ、この人の雰囲気は……。こうしてるだけで圧倒されそうだ……。見た目は、ボクと同じくらいの子供なのに……」

「……」

「……うっ、な、なんて冷たい目……寒気がする……」

「さぁ、大人しくお前の持つオーパーツをこちらに渡せ」

「……！」

ロックマンはよろよろと立ちあがった。

「な、なんで知ってるの？ボクがオーパーツを持ってるって……」

「アレは元々オレが狙っていた代物……。お前が邪魔さえしなければ、オレが手にいれていたはずだ」

「じゃあ、あの黒い穴を発生させていたのは……」

「今頃気づくとは……ハイドはこの程度の男に苦戦していたのか」

「ハイドだと！？」

『ハイドの仲間なのか！』

ウォーロックの言葉に、男は眉をピクッと釣り上げた。

「仲間……だと？ふざけるな……言葉には気をつけろ。仲間などというつまらない言葉をオレに向けて発するな」

「……」

「……」

「くっ！」

スバルは威圧されたように顔をゆがめた。

『スバル、どうしたんだ？』

「な、なんか息苦しいんだ。この人の目……すべてを拒絶するみたいで」

「オーパーツはお前では到底扱えるものではない。自滅するのが関の山だ。さぁこちらに渡せ」

『そいつはおあいにくさまだったな！オーパーツは渡せねぇよ』

「……」

男はピクリ、と反応してウォーロックを見つめた。

『オーパーツはオレが呑みこんじまったんだよ。なかなか旨かったぜ、クックックッ！』

わざと意地悪く笑って言うウォーロック。

「……そのくらいでオレが手を引くとでも思ったのか？呑み込んだというのなら……、お前らの体ごと持ち帰るまでだ！」

そう言うと、その男は何かを掲げた。

「アレは……見覚えがある」

『ハイドが持ってたものと同じ……「古代のスターキャリアー」だ！ハイドはあそこからお化けの電波体を出しやがった』

「……言っておくが、オレは電波体の力など借りない。誰かに頼って戦うなどという、そんな無様な真似はオレには耐えられない。何より……オレの体に流れる血がそれを許さない！」

男は『古代のスターキャリアー』で空間に何かを描いた。

「……！」

『どうした？』

「美術館に展示されてた文字にそっくりだ」

「ハッ！」

男の左右と背後に同じ文字が出現した。

「覚悟しろ、青い男よ」

男が両手を広げると、４つの文字が男の周りを回転し始めた。

「電波変換！ソロ、オン・エア！」

辺りが光に包まれ、光が消えると、その男の代わりに１人の電波人間が立っていた。

「……」

『バ、馬鹿な！１人で電波変換しやがった！電波体なしで、どうやって……！？』

「オレは、お前らとは違う。自分の意思のみで電波変換ができる。これはオレの生まれ持った能力だ」

『ど、どうなってるんだ』

「ロックマンさま～」

見れば、ルナたちが近づいてきていた。

「み、みんな来ちゃダメだ！」

そのスバルの言葉に背いて、４人は近寄ってきた。

「ここは危ないんだ、どこか安全な所に……！」

「ロックマンさまの活躍をそばで見たいのよ！」

「この目に刻みますから！」

「そんな奴いつものようにふんじばってくれよ」

「がんばって！スバルくん！」

「でも……」

「わたしたちなら大丈夫！だってロックマンさまがそばにいるじゃない！」

『スバルよ、ずいぶんと期待されてるようだな』

「……分かった。その代わり、そこから動かないでね」

そう言うと、ロックマンはその電波人間に向き直った。

「いくよ、ロック！」

「……あれはお前の仲間か？」

「そ、そうだけど……」

「……くだらないな」

「なんだって？」

「血が酷くうずくんだよ。『慣れ合いは排除しろ』……とな」

その言葉に呼ばれたように例の不気味な物体が電波人間の隣に現れ

た。

「あれは……黒い穴を発生させていた装置！」

「……やれ」

ヴィィィーン

４人の足元に黒い穴が発生する。

「し、しまっ……！」

ズズズズ……

「キャ――！」

「みんな！！……くっ！」

ロックマンは電波人間に向き直った。

「やめるんだ！みんなは関係ない！！」

「なぜオレがお前の指図を聞かねばならない」

「止めてやる！力ずくでも！！」

「……いいだろう」

電波人間は構えた。

「身の程を思い知るといい」

「うわぁぁぁ！！」

電波人間から衝撃波が放たれ、ロックマンに当たった。

「つ、強い……！」

「ロックマンさま！！」

「……くっ、ま、待ってて……い、今……助ける……」

「聞こえていなかったのか？慣れ合いは目ざわりだと言ったはずだ。……フン。いいだろう……今すぐ断ち切ってやる！お前らの美しい『友情』ってやつを！」

「！！！」

ズズズズ……

4人は完全に呑み込まれた。

「！！！そ、そんな……！」

「心配するな。お前も、今楽にしてやる」

「……くっ！み、みんなを……元に……戻せ」

「……仲間が気になるのか？……ハッ！」

「うあぁぁぁ！」

相手から放たれた衝撃波が腹に命中し、ロックマンは倒れた。

「……ハァ、ハァ！」

「そんなに慣れ合いが大事か？オレから見ればそれは、『弱い』証拠だ。強ければ他人など必要としない。違うか？」

「……み、みんなを……もとに……」

「まだ言うのか……虫の息の分際で」

「うぅっ……！」

ロックマンは体を起こした。

「……許さない」

「……？」

ドクン！！

「立ち上がっただと……？どこにそんな力が……」

「絶対に許さない！！」

「！！」

見ると、ロックマンは凄まじいオーラを発している。

「……ハァ！ハァ！」

「これは……まさかオーパーツの力？なぜ、突然……？」

「みんなを……もとに戻すんだ！！」

「……。仲間を想う気持ちがそうさせた……とでも？……なるほど。どうやら、お前はオレの一番気に入らないタイプのようだな！！」

『スバル、気をつけろ！』

「絶対……絶対負けない！みんなを救い出すんだ！！ウェーブバトル！ライド・オン！！」

叫んだ後、ロックマンは空中に跳んだ。

「ロックバスター！！」

電波人間はバスターを避け、ロックマンに接近した。

「ブライアーツ！！」

電波人間は腕と脚を使った連続攻撃をした。

「ぐわぁぁぁっ！！」

最後のサンマーソルトキックでさらに上空に飛ばされた。

「ブライナックル！」

浮かせたロックマンに向かって拳を突き出すと、そこから次々に拳が飛び出し、ロックマンに向かって飛んだ。

「……シ、シールド！！」

ロックマンは体勢を立て直し、拳を緑の盾で防いだ。

「……？」

攻撃が終わったのを見計らってシールドを消すと、電波人間がいたはずの場所には誰もいなかった。

「ブライバースト！！」

後ろから声がした。それを見るより早く、紫の衝撃波がロックマンに命中し、ロックマンは地面に叩きつけられた。

「く……っ」

ズドン！

電波人間がロックマンに覆いかぶさるように着地した。

「無様だな……『絶対に許さない』、とか言ったのは誰だ？」

電波人間はロックマンの首を掴んで体ごと上に持ち上げた。

「く……かっ……」

「『絶対に負けない』、とか言ったのは誰だ!?」

「ぐ……あぁぁぁぁ……」

「スバ……ル……くん……」

「!!!」

ロックマンは薄眼を開けた。電波人間の背後の穴から声がした。

「ロ……ロックマン……さ……ま……」

「ス……バル……」

「ロック……マン……」

「み……みんな……」

そうだ。ここで負けるわけにはいかない。負けたら、みんなを救うなんてことできない!

「う……うぉぉぉぉぉっ!!」

「!!!」

首を持つ電波人間の腕をつかんでいたロックマンの手に力が入った。電波人間はとっさに手を離し、距離をとる。解放されたロックマンはゆらりと立ち上がった。

「バトルカード……ホタルゲリ！」

瞬間的に移動して、電波人間に蹴りをいれた。

「ぐっ！」

電波人間がのけぞった。

「バトルカード！プラスキャノン！」

黄色い銃から銃弾が発射され、電波人間に当たった。

「がぁっ！！」

当たった電波人間は後ろに吹っ飛び、倒れた。

「……ハァハァ」

電波人間は立ちあがった。

「……チッ、まさか、オレが手傷を負うとはな。……だが、勝つのはオレだ。オレの中の血にかけて、お前のようなやつは完膚無きまでに叩きのめす！」

『チッ……まだ力が残ってるって言うのか！？こいつ、底なしか！？』

「……そこまでだ」

突然、声が聞こえた。まるで、スピーカーで大きさを拡大したに空

に響く声。電波人間は目を見開いて空を仰いだ。

「……！この声は、オリヒメか？」

「な、なんだ……？人の声？」

「今は、まだ事を荒立(あらだ)てるな……。その辺にしておくがよい」

「オレに引き返せと言うのか？」

「まだ本気ではないといっても、そなたも傷を負っているではないか……。今は無理をするな」

「……。運がいいな……青い男よ」

『逃げるつもりか！』

「そうはさせない……みんなをもとに戻せ！！」

「いずれ、決着はつけてやる……。覚悟しておけ」

「待て！！」

「オレの名はソロ……つぎに戦うその時まで覚えておけ」

気がつくとソロも装置もすでに消えていた。

「くっ！逃げられた！！」

ズォォォォ……

音を聞いて振り向くと、黒い穴がどんどん小さくなっていくところだった。

ズォォォォ……

「……！！このままじゃみんなが……！」

ロックマンは穴に近寄った。

「くそ！！」

ロックマンは穴に手を突っ込んだ。

「……ううっ！！……捕まえた！！」

思いっきり引っ張ると、ルナが出てきた。

「委員長！！」

ズォォォォ……

穴が、完全に消えた。

「！！！」

ロックマンは気絶したルナをその場に横たえ、穴の消えた辺りに近寄った。

「み、みんな……くそ……ボクのせいだ……。ボクが……

ボクがみんなを早く避難させておけば……！ううっ……！！」

後悔、自責。それだけが、ボクの心を満たしていた。

?、みんなが消えた日（後書き）

ちなみに、この外伝は本編のこの先の展開に関係してくる内容のみをやっていますが、キレの関係で、この外伝を読めば流星2の大体の話の流れがわかるようになっていることに気がつきました。

?、大切な人との決別（前書き）

5、

Parting with beloved person

?、大切な人との決別

みんなが消えてから、スバルと、唯一助かったルナは、ミソラ、ゴン太、キザマロを探した。キザマロ、ゴン太は共に外国で見つかり、なんとか戻ってきて、残るはミソラだけであった。そして、スバルはミソラがバミューダラビリンスにいるという情報を受け、現地へと赴いた。

――そこには、見覚えのあるピンクの後ろ姿。

「……！！ミ、ミソラちゃん！？」

ロックマンは近寄った。

「ミソラちゃん！！無事で良かった……ずっと探してたんだよ。一緒に日本へ帰ろう！！」

「……」

しかし、ハープ・ノートは応えない。

「ミソラちゃん？」

『なんか様子がおかしいぜ』

「……。スバルくん……」

ハープ・ノートは振り返った。

「もう、わたしのことは放っておいて」

そう、言い放った。スバルはただならぬものを感じた。

「な、何言ってるの？ミソラちゃん……」

「これ以上、わたしを探さないでほしいの。日本にも、帰るつもりないから……」

ロックマンは近寄った。そんなことができるわけがない、と言わんばかりに。

「ミソラちゃん！！」

「こないで！！」

「！！」

ミソラは目をそむけて言う。

「帰って……」

「一体、何があったの？みんな、心配してるんだよ？委員長も、キザマロも、ゴン太も……。ボクだって、ずっと……」

「そんなの知らない！！早く帰ってってば！！」

ぎゅっと目をつむって絞り出すように声を張り上げるハープ・ノートに、ロックマンも切り返した。

「帰らない！！ようやく見つけたのに、ここでさよならなんてでき

るわけないじゃないか！！」

ハープ・ノートは、その言葉に反応したのかピクリと顔をあげる。
振り返り、ギターを構えた。

「じゃあ……力ずくで追い払うから」

ロックマンは後ずさりをする。ミソラの目が、冗談か何かでないことを知らせている。

「ど、どうして……。ボクたち、友達でしょ！？ミソラちゃん！！」

「……。友達じゃなければ、もうわたしにはかまわないでくれるの？……じゃあ、これでいいよね？」

ブツッ！！

無情に、何かが切れる音が響いた。

「あっ……！！ブ、ブラザーバンドを……」

『切りやがった……』

「……」

スバルはつらそうに顔をゆがめながらキッと前を睨んだ。

「ミソラちゃん！！なんで……なんでこんな事するんだよ！！ボクが、なにかミソラちゃんを怒らせるようなことをしたの！？分か

らないよ！！ミソラちゃん……！！」

「……」

『くるぞ、スバル！！』

ギュイ――ン！！

ギターの音が、無情にも響く。

「うわあああああ！！」

ロックマンは後ろに数メートル飛ばされて倒れた。

「ごめんなさい……」

ハープ・ノートはバミューダラビリンスの奥へと行ってしまった。
ロックマンは去っていくハープ・ノートを地面に伏して見送ることしかできなかった。

スバルはコダマタウンに戻っていた。自分の部屋の窓から空を見上げている。

「ミソラちゃん……どうして……」

メールの着信音が鳴った。

「委員長からメールだ……」

『いつまでも、電話に出ないから、メールを送ることにしたわ！！なんだか、ずいぶん落ち込んで帰ってきたっていうから、みんなでお見舞いに伺うわよ。別に、あなたを心配してるわけじゃなくて、ミソラちゃんが見つかったのかどうか、話を聞きたいだけ！！そういうわけで、お部屋、綺麗に片付けときなさいよ！！』

「……」

それを見たスバルは何も言わずにベッドの階段を下り始めた。

『おいおいおい、どこに行く気だよ？』

ウォーロックの問いかけに、部屋の真ん中辺りで立ち止まった。

「……誰とも会いたくないんだ。ミソラちゃんのこと……どう説明したらいいか分からないし……」

『やれやれ……またしょんぼりモードか』

ウォーロックが呆れ気味に言った。

ロッポンドーヒルズ――

スバルはミソラのＣＭのエア・ディスプレイの前にいた。かつて、２人でここに来たことが何十年も昔のことのように感じた。

「エア・ディスプレイだ」

『疲れた体に元気注入!!ミソラミンD!!わたしのエール、送ります!!みなぎれ、ファイトー!!』

「……ミソラちゃん」

「これから先も、きっと、大丈夫。だって、わたしたち繋がってるから。広い世界でわたしは1人じゃないって確信が持てるから……。」

そうだ、ミソラちゃんはそう言った。そう、言ってくれた。繋がっていると。でも、いまは……

「……」

『おい、スバル　何考えてんだ?』

「思い出してたんだ……ミソラちゃんと初めてブラザーバンドを結んだ時のことを……。ミソラちゃんは言ってくれたんだ、わたしたちは繋がってるからって……。なのに……」

その繋がりは、突然断ち切られた。大切にしていたはずだったのに、

突然消えた。それが、受け入れられない。まるで心にぽっかりと穴が空いたような虚無が、スバルの心を満たしていた。

『チッ……いつまでクヨクヨしてんだよ』

「ミソラちゃんは、ボクの初めての絆だったんだ。一人ぼっちの世界に閉じこもっていたボクを、外に連れ出してくれたのはミソラちゃんだった。それなのに……」

突然、地面が揺れ始めた。周りの高層ビルを壊しかねないほどの、大きな揺れがロッッポンドーヒルズごとスバルを揺らしていた。

「な、何……!?地震!?」

『そうじゃねぇ……敵のおでましみたいだぜ!!』

天に向けて張り出すように建てられたポールの上に雷が落ちたかと思うと、そこに水色の魔術師のような姿の電波体が立っていた。

「……」

「なんだ?あいつは……」

「いつの間にあんなところに……」

ザワザワ……

その場にいた客が口々にその水色の電波体の事をささやく。当の本人はそれを無視した。

「いでよ、我が下部たち」

客の1人の背後に剣と盾を持った剣士のような電波体が現れた。

「ひえええええ!!バ、バ、バ、化け物〜!!」

他の客の背後にも剣士の電波体が……

「だ、誰か〜!!」

「ロックマンよ……人々は苦しんでいるぞ」

魔術師の電波体が一言発するたび、剣士の電波体が現れる。

「いつものように現れるがいい……。」

また一匹……。

「その時が、お前の最期だ……」

また一匹……。

そして、周囲は大混乱に陥った。

『あれは、ハイドやソロの仲間だぜ!!相変わらず、むちゃくちゃしやがる!!おい、さっさとやるぜ、スバル!!』

「今は……戦える気がしないよ……」

『お前がそうやっていじけてんのは勝手だけどよ、ここで誰かがやられちまおうもんなら、オレ達の責任だぜ。アイツの狙いは、間違いなくオレ達なんだからな』

『……』

「おい、スバル！」

『分かったよ……電波変換、星河スバル、オン・エア』

スバルはロックマンに電波変換した。ひとまず、目の前のことを片付けよう。そう考え、剣士の電波体から人々を救出するため、駆けだした。

電波体のデリートに奔走するロックマンの前に、魔術師の電波体が現れた。

『出やがったな』

「私はエンプティー。オリヒメさまの忠実なる下部……」

あくまで冷静に、まるで感情が欠落しているかのように淡々とした声で言う。

「オリヒメ……？」

『それが、お前らのボスってわけか』

「ロックマン……オーパーツを渡すのだ。あれは、我らにこそ相応しいもの……」

「みんなを苦しめるような奴らに、渡せるもんか！！」

『どうせ、ろくなことには使わねぇだろうしな』

「大人しく言うことを聞け……。手荒な真似はしないと、一応の約束があるのでな」

「約束……？」

スバルはピクリと眉をひそめる。誰と、そんな約束をするのだろう。今まで何度もオーパーツを力づくで奪いに来たくせに、なぜここに来て手荒な事をしない、などという約束を誰かと交わすのだろう？

唐突に辺りに禍々しい気配が広がった。

「……！！な、なんだ、この感じ……」

『……スバル、気をつけろ。急に、空気が変わった！』

「奴の覚醒が間に合ったようだな……」

ロックマンとエンプティーの隣に白髪の少年が現れた。

「ソロ！！」

「……決着をつけにきた」

決意に満ちた目でエンプティーを見つめて言う。それを見てエンプティーは言った。

「……よかろう、ソロ……。ここは、お前に任せるとしよう」

そう言うと、エンプティーはソロの後ろに回った。
ソロは『古代のスターキャリアー』を取り出すと、文字を描き、両手を広げる例の動作をして電波変換した。

「……」

「な、なんだ……？前と雰囲気が違う……」

前とは違い、なにか禍々(まがまが)しいものを、目の前の男から感じる。

『何ビビってんだ！！この前はオレ達が勝ったんだぜ！！さっさとやっちまうぞ！！』

「う、うん！！」

ロックマンは構えた。

「やあーっ！！」

ロックマンはブライと距離をつめたが、青く丸い壁に阻まれ、尻もちをついた。

「……え？」

『なにやってんだ、スバル！！』

「くっ！！」

ロックマンはロックバスターを連射するも、これも謎の壁に阻まれた。

「こ、この壁は……？」

「『孤高の証』を受け入れることで、この男が手にした新たな力……。それが、この『電波障壁』だ」

「電波障壁……？」

「その電波障壁は、本人の意思とは関係なく近づくものを、すべて遮る。そこには、敵、味方、人間、電波……。一切区別はない……。すべての絆を断ち切り、人との触れ合いを捨て去ることで目覚めた、いわば、『心の壁』を形にしたもの……。この男だからこそ手にできた、絶対的な強さだ……」

これを受け入れた者は、嫌でも周りの全てのものの接触を拒絶してしまう。受け入れたその瞬間から、誰も彼に触れることすらできなくなってしまう。物理的にも心理的にもあらゆるものの接触を拒絶する壁。それが目の前にそびえたっていた。

「誰も……近づけない！？人とのつながりを嫌っているのは分かっていたけど……」

『まさか、そこまでやるとはな……』

「……」

『気をつけろ、スバル！！』

「わ、分かってる！！」

「前に言ったな……。仲間……絆……そんなくだらないものはこのオレが否定してやる、と。この電波障壁こそ、それを証明するものだ。貴様の信じる力がどれだけ弱いものか……どれだけ愚かなものか……。このオレがすべての存在をかけて思い知らせてやる！！」

「ウェーブバトル！ライド・オン！！」

?、揺らぐ気持ち（前書き）

6、

Ｓｗｉｎｇｉｎｇ　ｆｅｅｌｉｎｇｓ

?、揺らぐ気持ち

「ロックバスター！！」

左腕のウォーロックの口から黄緑の銃弾が放たれる。それは、やはり電波障壁によって防がれた。

「……くっ！！ウォーロックアタック、ハンマーウェポン！！」

ガァン！

鈍い音がした。ハンマーが電波障壁に阻まれていた。

「そんな……ブレイクが効かないなんて……！！」

「そんな攻撃、効くわけがない……！！」

ブライは不敵な笑みを浮かべて言った。

「……バトルカード！タイフーンダンス！！」

ロックマンが回転して、風が巻き起こった。しかし、電波障壁は微動だにしない。

「……壊せないなら、吹き飛ばそうとでも？くだらん……！！ブライナックル！！」

「ぐわぁぁぁ！！」

ロックマンは後ろに吹き飛んだ。

「……全然攻撃が通じない！！」

ロックマンは体勢を立て直しながら言った。

『こいつ、マジで強いぞ！！』

「クックックック！！」

ブライはまるで、新しい力を喜ぶように歓喜の笑いを洩らす。

「だ、だめだ……。まさか、これほどだなんて……」

「止(とど)めだ！！」

ブライが紫の気をまとった右手を軽く引いて構える。その時、辺りは光に包まれ、光が消えるとロックマンも消えていた。

「！！」

「……」

「う、うぅ……。……はっ！！」

ロックマンはうなされたように声をあげてから目を覚まし、体を起

して辺りを見回す。辺りには見覚えのあるどころか毎日見ている景色が広がっていた。

「ここは……コダマタウン！？」

「やっと気が付いたね」

声の方を向くと、暗い瞳でこちらを見つめるハープ・ノートがいた。

「ミソラちゃん！！ミソラちゃんが助けてくれたの？」

「……うん」

戸惑い気味にハープ・ノートは返事をする。言って目を細め、唇を噛む。まるで、言いたいことを飲み込むように。

「ありがとう、うれしいよ！！みんなの所に戻ってくれる気になったの！？」

スバルのうれしそうな顔を見てハッと息を飲み、ハープ・ノートはつらそうに目をそむけた。

「今回はあの人たちに見られなかったから良かったけど……。次はないと思って」

「そんな……」

ロックマンはハープ・ノートに歩み寄る。

「ミソラちゃん、一体何があったの？それだけは聞かせてよ！！」

「わたし……」

ハープ・ノートはロックマンの目を見て次の言葉を口にした。

「わたし、彼らの仲間になったの」

「『彼ら』って、まさか……」

「オリヒメたちよ……」

「う、嘘だ！！」

認めないとでも言うように叫んだ。

「嘘じゃないよ……。今は、エンプティーの部下として働いてる」

「どうしてそんな……。もしかして、あいつらに操られてるの？それとも、なにか脅迫とか……」

「そんなんじゃない……。自分の意思で決めたこと」

ハープ・ノートは後ろを向く。

「ミソラちゃん……」

『オイオイ……さっきから聞いてりゃあ、ずいぶん勝手な話だな。要するにお前、オレ達の敵になったってことか？今度会った時は、敵として戦うって……そう考えていいのか！？』

「いいよ、それで……」

暗い声で、言った。

「！！」

ロックマンは目を見張る。自分は、本当にミソラを敵と見なさなければいけないのだろうか？

『おい、ハープ！テメエ、聞こえてんだろう！？お前も、そう思ってのか！？』

『悪いわね、ロック……。女には、人には言えない秘密がいっぱいあるのよ』

ハープ・ノートは目をこするしぐさをしながら数歩前に進んだ。

「ミソラちゃん！！」

「……さよなら」

まるで、それが今生の別れであるかのように告げ、そしてハープ・ノートは消えた。１つのしずくがウェーブロードに落ちてはじけた。

「……どうして、こんな事に」

ロックマンは呆然と呟く。ウォーロックもやりきれない思いで言った。

『……とりあえず、ここにいてもしょうがねぇ。一旦、家に戻ろうぜ』

バミューダラビリンス――――――

「約束が違うわ！！」

ハープ・ノートが声を張り上げる。目の前の男を殴りだしかねない剣幕で。

「何を興奮しているのだ、ハープ・ノート……」

「わたしがあなたたちに協力する条件は、ロックマンに手を出さないことだったはず！！」

「お前こそ間違えるな。あくまでその約束は、やつがオーパーツを我々に渡したら、という前提があってのものだ」

「くっ……」

ハープ・ノートは悔しそうに顔をゆがめて食い下がった。

「早く、バミューダラビリンスの道を切り開くのだ……。お前の能力でなければ、目的の場所へはたどり着けない。我々がお前を迎え入れたのは、その能力を認めたからこそなのだぞ……」

「……」

「それと……ロッポンドーヒルズで、お前がロックマンを助けたこと、オリヒメさまは大変お怒りだ……」

「！！　そ、それは……」

急にしどろもどろになった。目をそらして泳がせている。

「あの程度の目くらましで、我々を欺けるとでも思っていたのか？今度勝手な真似をすれば、お前もロックマンも、共に葬ることになる。よく覚えておくことだ……」

そしてエンプティーは消えた。

『ミソラ……』

ハープが心配したように声をかける。

「大丈夫だよ、ハープ……。大丈夫だから……」

ハープ・ノートはうつむいて暗示をかけるように言い、唇を噛んで悔しそうに手を握り締めた。

スバルとミソラは向き合っていた。

「ミソラちゃん……」

「……気安く呼ばないで」

「！！」

スバルはミソラに目を合わせた。ミソラの目は酷く冷たかった。

「わたしは、オリヒメ様の忠実な部下……」

そう言いながらミソラはスバルに詰め寄り、一瞬光があふれると、ハープ・ノートなっていた。

「だからキミとは、敵同士……。戦う運命にあるんだよ」

一言一言がスバルの心に突き刺さる。

ハープ・ノートはギターを構えた。

「や、やめてよ、ミソラちゃん！！」

「さよなら……」

ギュイ――ン！！

スバルは目を覚ました。

「また、こんな夢……」

スバルは服を着替えながら呟く。

「ここにいると、また委員長たちが話を聞きに来ちゃうな……。今のうちにどこかに行こう……」

スバルが外を走っていると

「見つけましたよ～！！」

キザマロが前からこちらに走ってきた。

「キ、キザマロ！！」

マズイ、とでも言いたげにスバルが声をあげる。

「はっはっは～！！」

ゴン太は後ろから迫ってきた。

「ゴ、ゴン太！！」

「委員長！！」

「スバル、確保したぜ！！」

見ると、ルナがＢＩＧ　ＷＡＶＥの前にあるブランコに腰かけていた。

「ご苦労さま……。すぐに連行しなさい」

スバルはキザマロとゴン太にがっちりとつかまれてルナの前に連れてこられた。

「このわたしを避け続けるとは、スバルくんもずいぶん根性あるじゃない……ねぇ？」

「い、いや……あの……」

（こここここ、怖い！！ものすごく怖い！！）

怒りのオーラが目に見えそうなほどである。

「さ、さすがは委員長……」

「この、突き刺すような視線……。足の震えが止まりません！！」

「スバルくん！！」

スバルは恐怖と驚きで跳び上がった。心なしか、呼ばれてもいないゴン太とキザマロまで跳び上がった気がする。

「ハ、ハイ！！」

「全部話してくれるまで、逃がさないわよ！！一体、何があったの！？ミソラちゃんはどうなったのよ！！」

「……」

《この女……本当に逃がす気ねぇな。おい、もう観念して、全部話しちまえよ》

（……うん、分かった）

「実は……」

「ミソラちゃんが……」

「あいつらの仲間に……？」

ゴン太とキザマロが落胆したように呟く。ルナはブランコから立ち上がり、瞳を閉じて腕組みをしながら切り出した。

「なるほど……話は分かったわ。それであなたは、トボトボ帰って来て、ウジウジいじけてたわけね？」

「……」

腕組みを解いて目を見開いてルナは言った。

「もう、ホントに……。あなたって、どうしようもない馬鹿だわ！！」

「ど、どういうこと？」

突然の大声に、スバルは再び驚いた。

「分からないの！？それは演技よ！！あなたを危険なことに巻き込みたくないから、わざとそんな態度をとってるの！！」

「！！」

スバルは目を見開く。

「あなた、ミソラちゃんの何を見てきたの！？ミソラちゃんがスバルくんの敵になって、私たちを裏切った？……あの子がそんなことするって本気で思ってるの！？あなたの中のミソラちゃんって、

その程度の存在だったの!?その程度……の……う……ぐすっ……」

ルナの目に光るものが見えた。

「委員長……」

ルナは隠すようにそっぽを向く。

「なによ!?泣いてるわよ!!文句ある!?ミソラちゃんの気持ちを考えたら涙も出るわよ!!……本当は辛くてしょうがないのに、それでも、あなたを護りたいから、必死で苦しいのを隠して、悪者演じて……。スバルくんとのブラザーバンドを切った時も、それがどんなに辛かったか……。同じ女の子だもの……分かっちゃうわよ……」

「……」

ブラザーバンドを切った時のミソラの目、ロックマンに攻撃した時のミソラの目、敵になったと告げたときのミソラの目。どの目も、悲しみや寂しさ、辛さしか映し出してはいなかった。なぜ、今まで気付かなかったのだろう、初めてのブラザーなのに。なぜ、分かってあげられなかったのだろう、こんなに大切な人のことを。

「委員長、ゴメン……。ボク、委員長の言う通り、馬鹿だったよ。ミソラちゃんの本当の気持ち……考えてなかった。これ以上、ミソラちゃんから冷たいことをいわれるのが怖くて、逃げ回ってただけだ。」

「ミソラちゃんを信じてあげて。あの子は、スバルくんを裏切った

りしないわ。」

さっきまでとは裏腹にうるませた瞳でスバルを見つめて、ルナは言った。

「うん！！今度こそ、ミソラちゃんを連れ戻してくるよ。ロック、行こう！！ミソラちゃんがいた、バミューダラビリンスへ！！」

「へっ！！やっと元気になりやがったな。……いくぜ！！」

「電波変換！星河スバル、オン・エア！」

スバルが光に包まれ、その光はそのまま空へと飛んで行った。ルナは心配そうな顔で、その光を見えなくなるまで目で追っていた。

「スバルくん……」

?、再び繋がる絆（前書き）

7、

Ｂｏｎｄｓ　ｃｏｎｎｅｃｔｅｄ　ａｇａｉｎ

?、再び繋がる絆

ロックマンは再びバミューダラビリンスへと降り立った。

「！！　ミソラちゃん！！」

スバルの視線の先にはハープ・ノートがたたずんでいた。

「……なんで……？あれだけ警告したのに、どうして来たの？」

泣きだしそうな声でそう言って、ハープ・ノートはロックマンに向き直った。

「ボクが間違ってたって気が付いたからだよ。ミソラちゃんとの距離がこれ以上離れてしまうのが怖くて、ボクは逃げてたんだ。でも傷つくことを怖がって、一番大事なことを忘れてた……。ボクがミソラちゃんを信じるっていうこと……。友達を、何があっても信じぬくっていうこと……。みんながそれを教えてくれた。」

「……」

ハープ・ノートは小さく唇を噛んだ。

「キミは嘘をついてる……。ミソラちゃんが、僕たちの敵になったりするわけないんだ。どうして、裏切ったふりなんかしてたの？」

「嘘なんかついてない……わたしは裏切ったの！！みんなの敵になったんだってば！！言ったでしょ！？次はない、って！！もうこ

うなった以上、わたしたちは戦うしかない！！」

すべてを振り払うように、ミソラは声を張り上げる。

ハープ・ノートとロックマンが同時に構えた。

「ボクはミソラちゃんを信じる！！キミが、何を言ったって、絶対に信じぬく！！」

「ショックノー――――

「キャノン！！」

ハープ・ノートの両脇に現れたアンプをキャノンで破壊した。

「くっ、パルスソング！」

「バトルカード、ソード！」

ロックマンはパルスソングを切り裂いた。

ロックマンは次の攻撃に備えたが、ハープ・ノートがいたはずの場所に彼女はいなかった。

「……マシンガンストリング！！」

後ろから声がした。ロックマンが振り向くと同時に、五本の弦が当たった。

ボン！！

ロックマンは弦が当たると煙になって消えた。

「!?」

ハープ・ノートが気がつくと、目の前でロックマンが刀をこちらに突きつけていた。

「……バトルカード、ヘンゲノジュツ。僕が本気なら、今頃死んでるよ、ミソラちゃん」

「……なんで!?なんで、本気で戦わないの!?使う武器だってキャノンにソード、しかもそれを全部防御やこちらが攻撃できなくなる使い方しかしてない!なめてるとしか思えない!なんで、攻撃してこないの!?」

ロックマンは瞳を閉じ、再び見開いた。

「当たり前じゃないか。僕がミソラちゃんを傷つけるとでも?」

「……なんで分からないの!?わたし、裏切ったんだよ!?憎らしくないの!?恨まないの!?」

「そんなこと、涙を流しながら言うことじゃないよ、ミソラちゃん」

ロックマンはヘンゲノジュツの刀を下ろして消しながら言った。

「……え?」

ミソラは自分でも気付かないうちに目から涙が出ていた。

「う……くっ……パ、パルスソング！！」

ほぼゼロ距離でハート型の音波を放った。ロックマンはそれを素手でクモの巣でも振り払うように弾いた。

「！！」

「……今のは何も僕が強かったわけじゃない。ミソラちゃんの心に迷いがあったんだ。」

「そんなこと……。マシンガン――――

「ロックバスター！！」

ミソラが攻撃するより早く、ロックバスターを放った。ハープ・ノートはとっさに腕を胸の前でクロスさせて守ったが、後ろに吹き飛んだ。

「キャア！！」

吹き飛んだ経路のウェーブロードの上に無数の雫がぱたぱたと垂れ落ちた。

「今のミソラちゃんを見てると辛いんだ……。つきたくない嘘をついて、自分をどんどん傷つけている……。キミだけ苦しい思いをするなんて、そんなのいやだよ。それだったら、一緒に傷ついたほうが、ずっとマシだ……」

「……！！」

「『広い世界でも1人じゃない』……。『僕たちは繋がってる』……。ミソラちゃんが言ってくれた言葉だよ」

「……スバルくんにはかなわないね……。ごめんなさい……。それと……ありがとう」

ミソラは涙を拭いながら、立ち上がった。

「何があったか、教えてくれる？」

ハープ・ノートは戸惑い気味に切り出した。

「……あの、黒い穴に呑み込まれた後……。わたしは、見たこともない土地に飛ばされてたの……。電波変換して、どうにか日本に戻らなきゃって思ってたところに……。あいつが現れたの……。オリヒメの部下、エンプティー……。エンプティーは、わたしに協力しろ、って言ってきた。もちろん、わたしは断ったよ。スバルくんの敵に、手を貸すなんてできない、って。すると、エンプティーは言ったの。『取引をしよう』って……」

「取引？」

ハープ・ノートはこくんとうなずいた。

「わたしが協力するなら、ロックマンへの攻撃を中止する……。そういう取引……」

「！！　じゃあ、ミソラちゃんはボクのために……！！」

「あのエンプティーの力は、向かい合っただけで分かった。もし、この人がロックマンを本気で攻撃したら……。そう思ったら、断れなかったの」

「でも、どうしてそこまでして、あいつらはミソラちゃんに協力しろって言ったの？」

ミソラは後ろに広がるバミューダラビリンスの不気味な光景に目をやった。

「この先のバミューダラビリンスの道を切り開くためよ。バミューダラビリンスは特殊な場所でね……。電波状態が酷く乱れていて、そのせいで機械が壊れちゃったり……」

「そうか……それで飛行機事故が起こったりしてたんだね」

ハープ・ノートは目線をロックマンの方へ戻した。

「オリヒメたちは、バミューダラビリンスの地下に封印されてある、『何か』を欲しがっていたの。詳しい話までは聞けなかったけど、その『何か』がある場所に行くには、わたしの能力が必要だったんだって……」

『あいつらが欲しがってんのが何かは分からねぇが、ヤバいものであることは間違いなさそうだな……』

『その通りよ、ロック。あいつらの手に渡れば、おそらく大変なことになるわ』

「行こう、ミソラちゃん！！僕たちが先にその『何か』にたどり着

けば、オリヒメたちの野望を止められるかもしれない！！」

「わかった！！バミューダラビリンスは、わたしの能力があれば突破できるから、まかせて！！」

ロックマンとハープ・ノートは立ち並んだ。……それだけのことが、随分と懐かしく感じる。戻ってきたんだ、という実感が湧いてくる。

「スバルくん……」

「どうしたの？」

ハープ・ノートは両手の人差し指の先を合わせてもじもじと動かし、上目づかいでロックマンを見ている。

「あ、あのね……もし……もし、怒ってないのなら、わたしと、もう一度ブラザーバンドを結んで欲しいな、って……。さんざん酷い事して、こんなこと言うの、図々しいかもしれないけど……」

「そんなの、もちろんいいに決まってるじゃないか！！」

ミソラは顔をぱっと輝かせてほほ笑んだ。

スバルは、響ミソラとブラザーバンドを結んだ！

「あ……ブラザーバンドを切る前よりキズナリョクが上がってる」

「まえより、わたしたちの絆が深まったってことだね。改めてよろしくね！！スバルくん！！」

笑顔を、スバルに送るミソラ。やっと。やっと氷は溶けそうだ。

「なんだろ、これ……」

ロックマンが怪訝そうに眉をひそめている。2人はハープ・ノートの能力を駆使して、なんとかバミューダラビリンスの奥地にたどりついていた。ロックマンとハープ・ノートの前には広場があり、その中央に魔方陣のようなものが描かれていた。

「きっと、このずっと下の海の中に、オリヒメたちが探しているものがあるんだよ」

『奇妙な力をビンビン感じるわね……』

『……、……おい、スバル』

ロックマンの左腕でウォーロックがピクッと反応した。

「どうしたの？ロック」

『感じねぇのかよ、この気配……。どうやらオレ達、あの野郎にはめられたみたいだぜ』

「気付くのが少し遅かったな」

声が聞こえるのと同時に2人の前、魔法陣の中央にエンプティーが現れた。

「エンプティー!!」

ハープ・ノートが警戒心むき出しで叫ぶ。

「まさか、あとをつけられてた!?」

「よくやったぞ、ハープ・ノート……。お前の能力のお陰で、やっと、この場所までたどり着くことができた……」

「ここは、一体……」

ロックマンが聞く。

「この下に……我らの探し求めていたものが封印されているのだ……。それこそ……ムー大陸!!」

その回答に2人は目を見開いた。

「……!!ム、ムー大陸だって!?まさか、本当にあったなんて……!!」

確かに美術館でガイドにムー大陸の話は聞いた。でも、その時はムー大陸があったかどうかは謎に包まれている、と言われた。

「そして、ムー大陸の封印を解くカギこそ、ロックマン……。お前が持っているオーパーツなのだ……」

『へッ、なるほどな……。ようやくこいつらの考えが見えた気がするぜ』

「そう、すべては私の計画通り……。ハープ・ノートよ……お前を我々の仲間に引き込んだのは、この場所を突き止めるためだけではない。お前がこちら側にいれば、ロックマンは、必ずお前を助けに現れる。そう考えたのだ……。そして、結果、その通りになった……。あとはここでお前たち2人を始末し、オーパーツを使ってムー大陸の封印を解くだけだ！！」

聞くほどに、ロックマンは顔を険しくした。エンプティーの、ハープ・ノートへの非道な使い方に、むしずが走る。

「ミソラちゃん、下がって……」

ハープ・ノートは素直にそれに従った。バイザーの奥から、ロックマンの怒りに満ちた瞳がエンプティーを睨む。

「ミソラちゃんを利用して、心を傷つけた……。僕たちの絆を、道具みたいに使った……。エンプティー……お前だけは、絶対に許せない！！」

「良かろう……全力で来るがいい、ロックマン！！」

「バトルカード、ニドラッシュ！」

「……」

エンプティーは避けるそぶりを見せずに、電流を体にまとった。

「!?」

電流は無数の針をすべて跳ね返した。

「電流がバリアの役目を……？」

「……サモンウィルス！」

いつの間にか足元に出現していた、元々このウェーブロードにあったのとは別の魔法陣からステルスが現れた。

「ウィルスを召喚するなんて！」

ステルスはステルスレーザーを発射した。ロックマンはそれを横に転がるように避けた。

「マジックサンダー！！」

避けたその先にエンプティーの攻撃が炸裂した。

「くっ……！」

「パルスソング！！」

「……！！」

マジックサンダーがロックマンに当たる前に、ハート型の音波が打ち消した。

「ミソラちゃん！！」

「スバルくん！一緒にやろう！」

「危険だよ！」

「もしスバルくんが負けたらアイツはわたしを次に狙う！どの道、危険なの！それに、ただ見てるなんてできない！１人でできないことも、２人ならできるかもしれないじゃない！だから、一緒に戦う！」

確かに、そうだ。ハープ・ノートが手を出そうと出すまいと、ロックマンが負ければ次に狙われるのは彼女。どの道結果は同じなら、やることは一つ。

「……わかった！やろう！」

「何人一緒でもお前たちが負けることに変わりはない！サンダーバズーカ！」

エンプティーから電撃が放たれた。スバルとミソラは左右に避けた。

「ロックバスター！！」

バスターから出た弾がエンプティー飛んだが、例の電気のバリアに阻まれた。

「マシンガンストリング！！」

五本の弦は電気のバリアを突き破り、エンプティーに巻き付いた。

「ぐっ……」

「バトルカード！サウザンドキック！！」

「サモンウィルス！！」

エンプティーの前にコガラシマルが現れた。キックはすべて緑の風のバリアに防がれた。

『こいつ、ウィルスを盾にしやがった！』

ブチッ！！

そのうちにエンプティーは弦を引きちぎって自由になった。

コガラシマルが緑の風をこちらに飛ばしてくる。

「くっ！！」

スバルはそれを避けた。

「パルスソング！！」

ミソラはコガラシマルをデリートした。

「……戦いが一からに戻された……」

「……残念だったな、さっき、サウザンドキックを使ったということはあれで決めるつもりだったのだろう？」

そう、今のはロックマンとハープ・ノートの連携。ロックバスターを打ってわざと電流をまとわせ、そこにハープ・ノートがマシンガンストリングを打ち込むことで確実に相手の動きを拘束し、そこへ止めの一撃を加える。ウィルスというイレギュラーがいなければそれでエンプティーを落とせていたはずだった。

「この……！」

ロックマンは悔しそうに顔をゆがめる。対してハープ・ノートは、

「……スバルくん、カーペット系のバトルカード、持ってる？」

と、冷静に言った。

「突然どうしたの、ミソラちゃん？持ってるけど……」

「そう。じゃ、よろしく！」

そう言って駆けだすハープ・ノートを見つめる。ロックマンはわけが分からない、と言いたげに辺りを見回す。そして、気付いた。

「……なるほど、そういうことか！」

『？？？』

ウォーロックは何の話をしているのか分からなかった。

「バトルカード！パープルカーペット！」

ごろごろとカーペットがエンプティーに向かって転がっていった。

「……フン」

エンプティーは横にひょいっと避けた。カーペットはそのまま転がっていってしまった。

「ショックノート！！」

ミソラの両隣に現れたアンプから音符が現れた。

「……」

エンプティーは三度（みたび）電流のバリアで防いだ。

「バトルカード、モアイフォール！！」

「サモン……！？」

エンプティーは気付いた。足元の魔方陣が毒沼になっていることに。

「ぐはっ！！」

そのままモアイはエンプティーのバリアを突き抜けて本体に当たった。

「これで終わりっ！パルスソング！」

「バスターマックス、チャージショット！」

音波とチャージショットがエンプティーに迫った。

「ぐあぁぁぁっ！！」

エンプティーが苦痛の声をあげる。

「……やっぱり、カーペットで魔法陣を消すっていうのは正解だったね！」

「うん、でもよく気がついたね、ミソラちゃん！」

「えへへ……」

ミソラは頭を掻きながら言った。エンプティーは消滅寸前だった。

「……ま、まだ私は使命を果たしてはいない……。今、ここで力尽きるわけにはいかん！！」

そう言うと、消えた。

「逃げられた……」

スバルは悔しそうに言った。

「スバルくん！！怪我はない！？」

「うん、大丈夫だよ」

「良かったぁ……。……今回のこと、全部わたしのせいだもん。もし、キミに何かあったら、わたし……。ぐすっ……」

ふっと息をもらし、目からは涙があふれる。さっきとは違う、安堵の涙。もう、これ以上スバルには傷ついて欲しくないという、ミソラの想いが涙となってあふれる。

「ミソラちゃん……」

その時、辺りに禍々しい空気が漂った。

「「……！！」」

2人は目を見開いた。

「こ、この感じはまさか……！！」

『ああ……もう、体が覚えてやがる。あいつだ！！』

2人の目の前に、白髪で赤い目の少年が現れた。

?、絆と孤高（前書き）

8、

Bonds and apart from others

?、絆と孤高

「ソロ……！！」

「……」

ソロは例の動作で電波変換した。紫のバイザーの奥から瞳が睨みつける。

「スバルくん、せめて、キミだけでも逃げて！！」

ハープ・ノートがロックマンとブライの間に割って入り、ロックマンに言った。

「な、なに言ってるの！？そんなこと、できるわけないじゃないか！！」

「今のアイツの強さは異常だもの……。２人がかりでもかないっこない！！だから……！！」

ミソラはギターをロックマンに向けて構えながら目を細めてほほ笑んだ。

「スバルくん、キミとはケンカもしちゃったけど、その後に一緒に冒険できて、すっごく楽しかったよ。ありがと……そして……さよなら……」

ギュイ――――ン！！

「ミソラちゃ――――ん！！」

ロックマンは音符に運ばれて遠くに飛んでいった。

「……かばい合い、か。つくづく、むしずがはしる奴らだ」

ブライは構え、ハープ・ノートは後ずさりをした。

――――やっと、元通りになれたと思ったにな。せっかく、また繋がったのにな……。

ハープ・ノートの心に、そんな想いが溢れる。ブライはそんな彼女に、無情にも――――

「消えろ……」

「……スバルくん……」

――――さよなら。

ロックマンは戦いの場所からそう遠く離れていない所で立ち膝をついていた。

「ミソラちゃん……！！なんて無茶するんだ！！急いで戻らないと！！」

ロックマンはすぐさま立ちあがり、出せる限りのスピードを出して駆けだした。そして、元の場所にたどりつくと、そこには……倒れているハープ・ノートとそれを冷めた目で見下ろすブライがいた。

「ミ、ミソラちゃん！！返事をしてよ、ミソラちゃん！！」

「……」

しかし、ミソラは口を開かない。体のあちこちに刀傷や殴られた跡がある。ロックマンは後ずさりをした。

「そ、そんな……」

ロックマンが青ざめて呟く。

「絆についてゴチャゴチャ言う奴らは、1人じゃなにもできないクズばかり……。見ろ……そこに転がってる女こそ、その良い例えだ」

ブライはロックマンに向き直った。

「弱い者同士が集まって、強くなったと勘違いする。それが、お前らのいう絆の正体だ……」

「くっ……！！」

ロックマンは顔をゆがめる。ブライはそれを見つめて言った。

「……その顔……その表情……。……そんなに悔しいか？……そんなに悲しいか？他人が傷ついただけだ！なぜ、お前が悲しむ！？」

「そんなの……当たり前じゃないか！ミソラちゃんは、ボクの友達だ！友達が傷ついたら悲しいに決まってる！」

「……」

「他人が傷ついただけ……？何言ってるんだ！！自分の体よりも大切にしたい人が、ボクにはいる……！ミソラちゃんもその1人だ！！そのミソラちゃんが傷ついて倒れてる……。こんな悲しいことはない！！」

言葉を、浴びせる。心からの、言葉を。

「……そういえば……、初めて出会った時からそうだったな」

「な、なんのこと……？」

「仲間だの、絆だのキレイ事ばかり言って、オレの視界に入ってくる。何度倒しても、懲りずに立ち上がり……。そして、その度にまたキレイ事を……。お前の言葉が……いや、お前の存在自体がいちいち、オレの勘にさわる！どうしても、オレの血が騒ぎ出す

んだ！オレは……お前の存在そのものをどうしても許せない！！」

「……ど、どうしてそんなにボクを……、いや、どうしてそんなに、絆を否定するんだ！！」

その問いにブライはピクリと反応を示し、後ろを向いた。

「いいだろう……教えてやる。それは……オレが、たった1人だからだ」

「……え？」

「オレがたった1人残された……ムーの生き残りだからだ！」

「ムーの……」

『生き残り、だと……？』

「……オレは、ムー大陸で生きていた人間の血を引く、最後の1人だ……。いつも化け物扱いだった。周りの人間にとって、オレはただの『恐怖』でしかなかったというわけだ……」

そう言ったブライの顔は、始めてみたかもしれない、彼の悲しそうな顔であった。

「そしていつの間にか、オレは攻撃の対象になっていた……。相手は、いつも複数だった。必ず大勢で一緒になって、オレを襲った……」

その時のまるでおびえたような表情。それも、彼からは見たことのない感情だった。

「そうやって集団でオレを襲う奴らは決まって、1人だと何もできない臆病者だった……。こいつらは弱い……。だから『群れ』を作る……。1人じゃなにもできないくせに、数が増えると、急に偉そうになるんだ……」

ブライは瞳を閉じて、キッと目の前の青い電波人間を睨んだ。

「……オレは誰も必要としない。それはオレが強いからだ」

「……」

「絆は、オレが最も憎むべき敵だ。絆を否定することが、オレの存在を証明することになる!!」

ロックマンはその話を、驚いたように聞いていた。

「……、……ボクには、ボクには父さんがいないんだ。」

ブライは眉をひそめる。

「……？何の話をしている？」

「父さんがいなくなって、思ったんだ……。こんな悲しみを味わうくらいなら、もう、二度と絆なんて作らない……って」

「……」

「今のキミと同じで絆を否定してた。でも……そんなボクにも、絆ができた。それが、ミソラちゃんだった」

ロックマンは傍らで倒れて動かないハープ・ノートに視線を送る。

そんな、傷だらけになるのもいとわず、自分をかばってくれた、彼女、響ミソラ。

「ミソラちゃんのお陰で、ボクは、絆の大切さに気づけたんだ！！だから・・・だから、この絆だけは、絶対に失いたくない！絶対に守ってみせる！！うおおおおおおお！！」

ロックマンは凄まじいまでのオーラを発した。それは、絆の崩壊によって滅びた、太古の種族の力。

「キミは、確かに強い。でも……誰も必要としないなんて……そんなことで手に入れた力なんて……ボクは認めたくない！！」

「……」

「ボクは、ミソラちゃんのお陰で気付いたんだ。絆を否定するなんて間違ってるって！だから、今度はボクが証明しなくちゃいけないんだ！絆を否定するキミは……絶対に、間違っていると！！」

「……いいだろう。絆の力……貴様の存在……この戦いに勝利し、オレはそのすべてを否定する！！」

「いくぞ！トライブオン！！」

ロックマンの足元にギザギザした黄色い大剣が現れた。ロックマンはそれを天に掲げて叫ぶ。

「サンダーベルセルク！！」

叫びと同時に体が銀色になった。

「ふ……オーパーツの力か！」

「……サンダースラッシュ！」

ロックマンが剣を振ると、電撃が放たれた。

ギィイン！！

「！！」

「……お前がそう来るなら、オレもこれで行かないとな」

見ると、ブライは剣を持っていた。その剣でサンダースラッシュを止めていた。

「目には目を、だ。ブライスラッシュ！！」

ブライが剣を振ると、斬撃が飛んできた。

「くっ！！」

ロックマンは剣で受けた。しかし、そのすきにブライはロックマンの上空に跳んでいた。

「ブライブレイク！！」

「ぐあっ！！」

落下とともに剣が振り下ろされ、ロックマンに直撃した。

「く……う……」

苦痛にロックマンは顔をゆがめる。

「オーパーツの力を使ってその程度か？」

「……Ｋ（キズナ）　Ｆ（フォース）　Ｂ（ビッグバン）！サンダーボルトブレイドォ！！」

ロックマンが左右に剣を振って切りつけ、最後に振り下ろすと、電気の柱がほとばしった。

「……どうだ！？」

電気の柱が消えていく。

「……！！」

そこには電波障壁をまとったブライがいた。

「そんな……！！」

「所詮、絆の力など、その程度だ。ブライソード！！」

ブライが切りつけてきた。

「うわぁぁぁぁ！！」

ロックマンは倒れた。そのロックマンの背中をブライは踏みつけた。

「ぐぁぁぁ……」

「ふん、これでも、オレは間違ってるとでも？」

「……」

ロックマンは倒れているハープ・ノートを見つめていた。ハープ・ノートは死んでしまったかのように瞼を閉じている。

「ミソラちゃん……」

『もう　認めなよ、スバルくん。ロックマンはみんなの中では立派なヒーローなんだよ』

ミソラの言葉を思い出す。どんな時も自分を信じてくれていた、一人の少女の言葉を。

『スバルくんからもらった言葉は、私の心の支えになってる。ううん、言葉だけじゃない。スバルくんの存在が私の心の支えなの！宝物なんだよ！』

――ミソラちゃん……僕を、そんな風に想ってくれて、ありが

とう……。まだ、その想いに応えきれてないや……

ドクン！！

「……ッ！！何！？」

急にチカラの増大を感じとったブライは足をどけて立ち退いた。ロックマンはゆっくり立ち上がった。

――もう、絆も孤独も、何もかも関係ない！ただ、大切な人を守る、それだけだ！！！

「……うおおおおおっ！！！」

ロックマンを、電流の柱が包んだ。そしてそれは火柱になり、緑の竜巻になり、最後にはじけ飛んだ。

「……トライブキング！！」

柱の中から出てきたのは、白い姿のロックマン。右腕には黄色いひと振りの大きな剣、左腕には恐竜を思わせる赤い猛獣の首。肩には緑色の手裏剣。まるで、古の3種族が一同に会したような姿。

「なんだと……！？」

ブライはロックマンの姿の変化に目を見開いた。

――「種族」とは、人間が集まってできるもの。一人では決してできないもの。ならば、「種族のチカラ」は人が集まってできるチ

カラ、そう、「絆のチカラ」。種族の人間同士争い合えば、種族が滅びるのは自明の理。なにせ、種族の人間同士争った時点で、そんなものは種族などとはいえないのだから。種族同士でさえ争うのだから、異なる種族同士で争うのは当たり前だ。種族が違えば、思想も違う。それが、争いを産む。では、その思想の違う種族を一つにまとめることができれば、それはどういう存在なのか？バラバラだった種族の力を一つにまとめた存在……種族の王（トライブキング）。絆の力を一つにまとめた、究極の絆のチカラ。それが、トライブキング。

ロックマンは瞬時にブライの後ろに回った。

「ちぃ……」

「オーバースラッシャー！！」

「電波障壁！！」

オーバースラッシャーと電波障壁がせめぎ合った。

「……く……くそ……ッ」

ブライは攻撃の重さに顔をゆがめた。

ピシピシ……

電波障壁にヒビが入る。

「な……！？」

バキン！！

電波障壁が音を立てて砕け、オーバースラッシャーが突き抜けた。

「ぐっ！！」

ブライは後ろへ吹き飛んだ。

ロックマンは空(くう)に腕に備えた剣で三角形を描いた。

「……K(キズナ)　F(フォースビッグバン)　B！！カイザーデルタブレイザー！！！」

最後に剣で空間に浮かぶ三角形を切ると、描いた三角形から三角(デルタ)の光が放出され、ブライに迫った。

「ぐあああああっ！！」

それはブライに大きなダメージを与えて消えた。

「……ぐ……ば、馬鹿な……！！電波障壁が……絆の力ごときに！？」

ブライは電波変換が解け、ソロに戻った。ソロは膝をついた。

「こんな……ことが……！！」

ロックマンもトライブキングを解いて膝をつく。トライブキングになる前のダメージは大きかった。

「ハァ……！！ハァ……！！キミは……キミは確かに強いよ。それに比べたら……ボクは弱いのかもしれない。委員長、ゴン太、

キザマロ、ミソラちゃん……。みんなに支えられて、なんとかやっていけるだけの、1人じゃなんにもできない弱虫だ……。だからこそ……何よりも大切にしたい……、その気持ちこそ、ボクの力だ……！！」

「……誰が……認めるもの……か……」

ソロは倒れた。

「ミ……ミ……ソラ……ちゃん……」

ロックマンも倒れる。

「ンフフ……素晴らしい脚本だった」

そこにハイドが現れた。

「ハイ……ド……。貴様……見ていたのか……」

「ええ、見ていたとも。そして、待っていたのだ。ロックマン……貴様が、弱って動けなくなるのを、な！！」

「う、うう……」

『こいつは……ヤバいぜ……』

ロックマンの左腕に宿るウォーロックがうめくように言った。

「弱りに弱った貴様からオーパーツを奪うなど、赤子の手をひねるのも同然！ここで、私の脚本はまさにクライマックス！！さあ、ロ

ックマン!!オーパーツはいただくぞ!!」

「うわあああああ!!」

ハイドの攻撃にスバルは悲鳴をあげた。

気がつくと、ハイドの手にはオーパーツがあった。ハイドはオーパーツを掲げて言った。

「ンフフフ……ンファーッハッハ!!やった、やったぞ!!エンプティーもソロも失敗したオーパーツの奪還を、この私が成し遂げた!!これでオリヒメさまの信頼は、一気にこのハイドに傾くであろう!!素晴らしい!!実にマ～～～ベラスな脚本だ!!ンファーッハッハ!!」

そして、ハイドは消えた。

「オ……オーパーツが……」

『なんてこった……』

「クッ……」

ソロも含めたその場の全員が敗北感を味わっていた。

?、最後の希望（前書き）

9、

The last hope

?、最後の希望

それから数日後……

「う……うぅ……はっ！？」

ガバッ！！

スバルは跳び起きるように目を覚ました。

「あ、あれ……ボクは……？」

「よ、よかった……気が付いたのね……」

見ると、枕元にルナがいた。それまで思いつめていたのか、安堵の息を漏らす。

「委員長……ボク、どうしてここに……」

寝込む前の出来事を思い出そうと頭を抱えながら聞く。

「覚えてないの？あなた、酷くボロボロになってコダマタウンまで戻ってきたのよ。そのまま気を失っちゃって、ずっと寝込んでいたの」

それを聞いてスバルはハッと息を飲み、バッとルナを見上げて叫ぶように問いかけた。

「……そ、そうだ！！ミソラちゃん！！ミソラちゃんはどうなっ

たの！？」

「あの子なら、あなたが担いで運んできたわ……。今は病院に入院してる。あなたよりずっと酷い怪我だったから」

「入院って……大丈夫なの！？」

「……」

ルナは唇を噛んで押し黙る。応えるかどうか迷うように。

「委員長！！」

スバルが急かすように叫んだ。ルナは迷ったように瞳を泳がせ、ギュッと目をつむって応えた。

「……危険な状態だって」

「そ、そんな……！！」

失望したように、スバルは呟いた。

「今、ゴン太とキザマロが病院に向かってるわ。多分、もうすぐ連絡が……」

そのとき、着信音がした。

「電話だわ……ブラウズ！！」

ルナのスターキャリアーからエア・ディスプレイが表示され、そこにゴン太が映し出された。

「ゴン太！！ミソラちゃんは！？」

スバルがせき込むように問い詰める。そんなスバルを見てゴン太は少し安心したような顔をした。

『スバル、気が付いたか……良かったぜ。ミソラちゃんには、これから会いに行くところだ』

「そう……」

エア・ディスプレイの表示がキザマロに入れ替わる。

『それよりも、２人ともテレビを見てください！！大変なことになってますよ！！』

「テレビ……？」

「何かあったのかしら？」

『おい、スバル　とにかく、テレビを見てみようぜ』

そして、星河家のリビングのテレビの前に2人は並び、スイッチを入れた。

ピッ……

色白の女性が映し出される。

「だ、誰よ……この女の人は？」

『愚かなる人間どもよ……。わらわの名はオリヒメ。この星の支配者となるものである』

「！！　この人が、ハイドたちのボス……オリヒメ！！」

初めてみた黒幕に、スバルは目を見開く。

ピッ、ピッ、ピッ……

チャンネルを変えて見ても、オリヒメが映る。

「どこも、同じ映像だわ……。電波がジャックされてるみたいね」

「もちろん、このように突然『支配』と言われて、素直に従うなどとは、最初から思っておらぬ。そこでだ……。愚かなお主らにも

分かるよう、わらわの力を示してやろう……。これから、封じられた伝説の遺産を復活させる。それを目にすれば、だれしも認めるであろう。わらわこそ、支配者に相応しいとな！！」

そして、通信は途絶えた。

『やっぱり、ムーを復活させるつもりだな』

「……」

ピピピピピ！

また、着信音が響いた。今度はスバルのスターキャリアーだ。

「電話だ……ブラウズ！！」

再びゴン太が映し出される。

「スバル！！」

「ゴン太！！ミソラちゃんは！？」

「それが……危険な状態なのに、どうしてもお前と話がしたいって……」

ゴン太が消え、代わりにミソラが映る。ミソラは今、病院で着るようなパジャマ姿で、点滴の台のようなものにすがっている。

「ス……スバル……くん……」

ミソラはかなり弱々しい声をだした。

「ミソラちゃん!!大丈夫なの!?」

「わたしのことは……気にしないで……。それよりも聞いて……。オリヒメがムーを復活させたら……この星はおしまいになっちゃう……。スバルくん……キミだけが……キミだけが最後の希望……。止められるのは……スバルくんしか……」

「分かってる!!大丈夫だから!!もう、それ以上しゃべっちゃダメだ!!」

今のミソラは、しゃべることすら命取りになるほど、弱っているはずなのに。でも、それでもミソラはスバルを想い、話すのをやめない。せめて伝えられる事を伝えたいから。

「おそらく、オリヒメたちは……オーパーツを持って、バミューダラビリンスの奥に来るはず……。地球を……救って……。ロックマン……わたしのヒーロー……」

ドサッ……

ミソラがエア・ディスプレイから消え、唐突に床に何かが落ちる音が響く。

「ミソラちゃん……?ミソラちゃん!!ミソラちゃん!!」

スバルはまさか、と青ざめて名を呼ぶ。ルナも顔面蒼白で叫んだ。

「ちょっと……ゴン太!!キザマロ!!何があったの!!」

「うわあああ！！ミ、ミソラちゃんが倒れちまった！！」

「！！」

２人の目が見開かれる。

「しっかり！！しっかりしてください、ミソラちゃん！！お医者さん！！看護師さん！！誰か！！誰かー！！」

ブツッ！！

そして、通信は途絶えた。

「わ……わたし、病院へ行くわ！！」

ルナがせききった声でまくしたてる。しかし、スバルは、

「うん……ボクは行けないから、委員長、ついててあげて」

あくまで冷静に、そう言った。

「スバルくん……」

「……」

「分かったわ。絶対、無事に戻ってきなさいよ！！」

ルナは駆け足で出て行った。

「……バミューダラビリンス……。急ごう、ロック」

「ああ……久しぶりに大暴れしたい気分だぜ。とっとと、バミューダラビリンスに向かうぞ！」

ウォーロックは怒りに燃える目でスバルを見つめ返した。スバルもウォーロックも、ミソラがあんなになってまでくれた情報をムダにしまいと、使命感に燃えていた。

バミューダラビリンス――

「ンフフ……やはり来たな、ロックマン」

目の前にファントム・ブラックが現れた。

「！！！！」

「ムーの復活までは今少し時間が必要だ。我々の脚本の邪魔はさせない」

『スバル！！よけろ！！』

ロックマンは足元に発生した黒い穴をよけた。

「ンフフ、甘い！！」

よけた先にも、穴が発生し、ロックマンを呑み込んだ。

「う、うわあああああ！！」

「罠ってものは、たくさん仕掛けておいてこそ効果を発揮するのだ」

ファントム・ブラックが満足気味に言った。

異次元――

「……ここは？」

目の前に突然、大量のウィルスが現れた。

「……ッ！！」

『チィッ！！行くぞ、スバルッ！！』

「うんッ！！」

ロックマンはウィルスバスティングのために駆けだした。

「バトルカード！グレートアックス！！」

巨大な斧を横なぎに振るう。一度に大量のウィルスがデリーとし、全滅した。

「……これで全部かな？」

『チッ！！あの脚本野郎……やってくれるぜ』

「こんな所で時間を食ってるわけにはいかない！出口を探さなきゃ！」

ロックマンはやっとのことで出口の、空間が白く光っている場所を見つけて入った。すると、ロックマンは都会的な場所に降り立った。

「ここは……ロッポンドーヒルズ？」

「戻されちまったか……まんまとアイツの罠にはめられたみたいだな」

急に地面が揺れ始めた。

「な、なんだ……？」

世界中に地鳴りを轟かせながら、海から巨大な何かが飛び出し、空に浮かんだ。その絶対的な大きさ不気味さと威圧感で見るものを圧倒する、ムー大陸が浮かんでいた。

『これは挨拶代わりだ！！ムーの力、とくと見るがいい！！』

ムー大陸からレーザーが発射された。

ドゴォォォン！！

レーザーが着弾した後には、海に穴が開いていた。その衝撃はたちまち世界中に響き渡った。

『これこそ、伝説のムー大陸である。言っておくが、今の攻撃など、ムーの力のほんの一部にすぎん。できることならば、秘められた力のすべてを披露したい所ではあるが、まだ、少しの時間が必要なのだ……。明日の正午まで待つが良い。ムーの力をとくとお見せしよう』

そう言い残して、ムー大陸は姿を消した。

「ど、どうしよう……」

スバルが呆然と呟いた。

『こうなったら、もうしょうがねぇ……残るチャンスは明日だ。明日、ムーがもう一度姿を現した時をねらって、なんとかするんだ。それしかねぇ……』

ウォーロックが悔しそうに呟く。スバルはこくっとうなずいた。何としてでも、明日止めないと。

翌日――

「正午だ……」

「そろそろ、ムーが姿を現すはずだぜ」

その時、着信音が鳴った。

「電話だ……ブラウズ！！」

エア・ディスプレイにはキザマロが映っている。

「キザマロ、どうしたの？」

『「マロ辞典」で、オリヒメについて調べていたら、いくつか情報がありましたよ！！どうやらあのオリヒメ……いろいろと、わけありの人物のようです……』

「どういうこと？」

スバルが怪訝そうな顔で聞き返す。

『オリヒメは、数年前に世間を騒がせた若き天才科学者です。マテリアルウェーブの基礎を作ったのは、彼女だそうですよ。つまり……マテリアルウェーブの生みの親、というわけですね』

「マテリアルウェーブの、生みの親……」

『しかし、ある日、突然失踪した、とのことです。それも、ただの失踪ではないようで、行方不明になる直前、とある貴重な遺跡に侵入して、そこにあった大量の遺産を盗み出しています。今も、遺跡あらしの犯人として、世界中に「指名手配」されてますね』

「どうして、そんなことを……」

『ヘッ……筋金入りの悪党ってわけだな』

『ボクは、もう少し情報を集めてみます！！』

「分かった！！ありがとう、キザマロ！！」

通信が切れると同時に、家が揺れ始めた。……いや、地面全体が揺れていると言った方が正確であろう。

「この揺れは……！！」

『皆のもの……待たせたな』

スバルは外へ跳び出した。

『……聞こえるか！？地上の人たちよ』

ザワザワ……

『……来やがった！』

『準備は整った。約束通りムーの真の力を見せようではないか』

「……ゴクッ」

『ただ、その前に……1つ宣言しておこう。これからこの地球は「新・ムー帝国」が支配する！！わらわを頂点とする新しい国家である。この先、そなたたち地上の人間に自由はないと思え！！』

「し、新・ムー帝国!?新しい国家!!?」

『ただし……新・ムー帝国の国民になれば、話は別だ。新・ムー帝国の国民にはムー大陸に住む権利と、あらゆる自由を約束しよう!』

『フン……こいつは予想以上の悪党じゃねーか。本気で世界を征服する気でいやがる』

ウォーロックが憎らしげに空に浮かぶ大陸を見つめながら言った。

『では……これより、そなたたちに試験を与える!新・ムー帝国の国民になりたくばこの試験を突破してみせよ!』

その言葉と共に、辺りが光に包まれた。

「な、何が起きたんだ……?」

『オイ、スバル!!やべぇぞ!あっちを見るんだ!』

ウォーロックが言う方向に、大量の電波体が現れた。

「あ、あれは……!!」

コダマタウンの広場になっているところに、若干見覚えのある電波体がごまんといる。

『よく見ろ……あの中に、ハイドが使ってたお化けの電波体がいるぞ。残りの奴らもどことなく見たことのあるツラしてやがる!!』

「雪男にドッシー、それに地上絵……！」

『世界中にムーの電波体を送り込んだ。言っておくが、生半可な抵抗は身を滅ぼすだけであるぞ。ムーの電波体は「無限」であるからな！』

『……無限だと？そんな馬鹿な話があるか、ハッタリに決まってる！！』

「電波体」といえど、所詮は魂の宿る、生き物。プログラムで手を加えることができても、生き物なのだ。それを「大量に」生産できるというなら。まだ分かる。でも、「無限」などあるはずがない。命をそんなホイホイ生み出せるほど、世の中簡単にはできていないはずだ。

「こんなのが世界中に何匹も……！」

『これこそがムーの真の力なのだ！！とくと堪能するがよい！この状況で最後まで立っていられた者を、新・ムー帝国の国民と認めよう！！さぁ行け！ムーの電波体たちよ！』

その言葉を合図に、電波体たちが霧散した。

「キャー！！」

見ると、公園にいた、若い女性と男性、老女が電波体に襲われている。

『キャッキャッキャッ！』

『覚悟しろ……地上の人間たち』

電波体が敵意むき出しで人間に迫る。

「ば、化け物だ――――！！は、早く助けを……！」

男性が叫ぶ。隣にいた女性が既に助けを呼ぼうとスターキャリアーを操作していたが、やがて顔をあげて言った。

「……！！　ダ、ダメ……どこも連絡が通じない！！他の場所も同じようなことが起きてるみたい……。助けなんてとても……！！」

「ヤ、ヤバい！！みんなを助けなきゃ！！」

スバルはスターキャリアーを取り出すと、宙に投げ出した。すると、それは宙に浮いて乱回転しながら光り輝き、スバルを包み込んだ。

?、滅びの前兆（前書き）

10、

Sign of ruin

?、滅びの前兆

ロックマンに電波変換したスバルは駆け出した。

「く、来るなぁ――――！！」

「もうダメ……」

「万事休すじゃ！！」

「今助ける！！……えい！！」

ロックマンは腕にソードを宿して電波体を斬り付けた。

『グギャ――――！！』

『ウガガッ！！』

うめき声をあげて消えた電波体を見つめながら、ロックマンはソードを普通の腕に戻した。

「……よし！！……ん？」

ロックマンは助けた皆のようすがおかしいことに気がついた。

「い、いったいなんなんだよ、あのの怪物たちは……。もう、地球はおしまいだ！」

「い、いえ、わたしは……助かるわ。だ、だって、わたしは優秀だもの……。顔だってかわいいし。わたしはムーの国民になってみせる……」

「……待て。わしだって、優秀じゃ。若いもんには負けんぞ」

「イヤ……優秀なのはボクだ！！」

「わたしよ！！」

「わしじゃ！！」

「ちょ、ちょっと、みんな落ち着きなよ！」

急に始まった乱闘をなだめようとロックマンが声をかける。

『……！！な、なんだこりゃ！？』

急にウォーロックが叫んだ。

「ど、どうしたの？ロック？」

怪訝そうな顔でウォーロックに聞くスバル。

『そいつらのスターキャリアーを見てみろ……おかしなことになってんぞ。』

ロックマンは騒いでいるその1人のスターキャリアーを覗いた。ロックマンの状態なら、かってにパーソナルページを覗くことも可能だ。

『見てみろ……こいつらのキズナリョクを……』

「……あっ！」

見ると、0になっていた。

『……急激に下がってやがるぜ……』

「ど、どういうことだ……」

『自分だけ助かりゃいい、……そう思ってんだろ。あまりの恐怖にパニックになってやがる……』

「そ、そんな……」

『地上の人間たちよ！』

再びオリヒメの声が聞こえた。

「・・・・・・」

『どうだ？ムーの力は？さらに、絶望的なことを教えてやろう！！ムーの電波体は決して尽きることはない！！』

「……え！？あっ！！」

先ほど電波体の大群が出現した広場に、また大群が出てきた。

「……ま、また増えた！！」

『き、きりがねぇ！あの大陸、まるで電波体の生産工場じゃねぇか！』

「ど、どうしよう……！」

『方法は決まってる！あのムー大陸を止めるんだよ！』

「……」

……確かに、それしかない。オリヒメの言うことが本当なら、無限に産まれる電波体をいくら叩いても無駄だ。いや、たとえそれで目の前の人が助かったとしても、世界中にばらまかれた電波体を消さない限り、本当に解決したことにはならない。それはもちろん無理。ならば、「元（オリジナル）」を叩くしかない。

その時、着信音が鳴った。

「ブラウズ！！」

ルナがエア・ディスプレイに表示された。

「委員長！そっちは大丈夫！？大変な事になってるけど、怪我はない？」

『わたしなら大丈夫。それより……ロックマンさま……やっぱり行っちゃうの？戦いに……』

「……」

『やっぱりそうなのね……。……行く前にもう一度だけ話がしたい……。ウチで待ってるから来てくれない……？』

「……分かった」

ルナ宅――――

そこには、ルナだけでなく、ゴン太やキザマロもいた。

「みんな無事だったんだね、よかった……」

「外は危険なのでここに避難していたんです。それにみんなでいたほうが安全ですし……」

「クッソ――――！！なんなんだよ、ムーって！偉そうに……ギタギタにしてやりてぇ！」

ゴン太は悔しそうに腕をぶんぶん回して言う。

「ゴン太の気持ちは分かるけど、みんなはここにいて。外は危険だよ」

スバルはなだめるように言った。

「……ねぇスバルくん。あの不気味な化け物たちは一体なんなの？」

「……たぶんムーの電波体だ。今まで起きてた怪奇現象は全部あいつらが原因だと思う」

「……やっぱり」

「みんな、あの電波体たちにはくれぐれも近づいちゃダメだよ。見かけたらすぐに逃げるんだ」

「それがね、スバルくん……。事態は、もっと複雑になってるみたいなのよ」

「え？」

スバルは目を見開いた。

「危険なのは、あの化け物たちだけじゃない。町の人たちの様子もちょっとおかしいのよ」

「そ、そういえば、さっき助けた人たちもちょっと変だった」

「どうやらコダマタウンだけの現象じゃないようです。各地でみんなが険悪な感じになっているらしいんですよ」

「みんな恐怖のせいでパニックになってるのよ」

声のした方を見ると、ピンクの服の少女が歩いてきた。少女は怪我のせいか、若干歩みがよろよろで遅い。彼女は４人の前で立ち止まった。

「ミ、ミソラちゃん……」

「ダ、ダメじゃないか！ミソラちゃん！！」

ゴン太がせききったように言う。

「まだ病院でじっとしてないと……！」

「それが病院に居る人たちもみんな険悪な感じなの。自分こそムーの国民にふさわしいって……」

「そ、そんな……」

「ねぇ、スバルくん、わたし気になることがあるの。思い出して……美術館でガイドさんが言ってたこと」

「え？美術館？」

「ホラ……『滅びの前兆』って話があったでしょう？」

『シノビ、ベルセルク、ダイナソー……。この3つの滅びの種族には共通することがありますわ。それは、滅び去る直前に「絆が弱くなった」ことですわ。このことを専門家は「滅びの前兆」と呼ぶのですわ』

スバルは目を見開く。そうだ、確かにあのガイドはそう言った。

「ま、まさか……！！」

「わたしも信じたくないよ。でも、間違いなくみんなの絆は弱まってる……」

ミソラは悲しげに俯いて呟いた。

「う、ウソ……人類が滅んじゃうの？」

ルナは顔を青くして呟くように言った。

「……止めなきゃ。ボクがムーを止めれば、きっと、みんなも元にもどるよ！ボク、やってみる！」

「……くっ！結局最後は全部おまえに託すしかないのか。すまねぇ、オレにも戦う力があれば……」

悔しそうにうつむいてゴン太が言う。

「ゴン太……」

「ホントです……。なんの助けもできないなんて……僕ら、ブラザーなのに……！なんて無力なんでしょう」

「キザマロ……」

「……あんた達！何をしょげているの！！今更、力がないのを嘆いてもしょうがないでしょう？わたしたちにできることをするしかないじゃない」

「オレ達にできる事？」

「力になれないのならせめて……精一杯、祈りましょう。スバルくんが無事に帰ってくることを！！誰よりも、強く祈るの！わたし

たちはブラザーなんだから……グスッ」

そう言っている彼女が一番、無力が悔しかったのだ。でも、そんなことをおくびにも出さずに、ただスバルの無事を祈る。

「委員長……」

「スバルくん……ひとつ約束して」

「うん……なに？」

「言っておくけど、この約束を破ったらただじゃおかないからね！ブラザーも切るからね！！」

「……分かった」

決意したようにスバルが言う。

「ぜったい……絶対帰って来て……」

「……約束する」

「グスグスッ……」

「う、う、うぉぉぉ！！スバル！！地球をたのんだぜ！戻ってきたら、たくさん牛丼をおごってやるからな！！」

「う、うう……！ボクは信じてます。『マロ辞典』には載ってませんけどボクは信じてます！ロックマンに不可能はないって……。う、うう……！や、約束は守ってくださいよ……！」

「ゴン太……キザマロ……」

「スバルくん」

スバルはミソラの方を向いた。

「行く前に1つだけ知らせておきたいことがあるの……。わたしがオリヒメの一味にいた時の話なんだけど」

「……うん」

正直、ミソラのあの時のことを聞くのは今でもきつい。でも、それを話すミソラはもっとつらいだろう。そう思って、逃げずに聞いた。

「オリヒメには1人だけブラザーがいるの。それがエンプティー……。あの2人はどういうわけか強い信頼で結ばれてる」

「オリヒメにブラザーが……」

「エンプティーは謎の多い男……。オリヒメだけじゃなく、エンプティーにも気をつけて」

「分かった！ありがとう」

「……スバルくん……わたし嫌だからね。これが最期になったりするの絶対嫌だから」

「ミソラちゃん……」

「わたし、泣かないよ。だって……これは最期じゃないから！また、絶対会えるから……。……グスッ……」

今まで、これが最後だと思って泣いて別れたこともあった。でも、最終的にはまた一緒になれた。だから、今度も――――　そう信じて、ミソラは、いや、彼らスバルの親友（ブラザー）は待つ。彼を信じて。

「……ありがとう……みんなの気持ち、とてもうれしいよ。じゃあ行ってくる！！絶対に帰ってくるから！」

スバルがムー大陸に向かった数時間後。ムー大陸は崩れ去った。こうして、またひとつ、青きヒーローの物語に、新たな伝説が加わったのである。

?、滅びの前兆（後書き）

よ・・・ようやく終わった・・・。なんかキレが悪いところで終わりましたが、これ以上はきりがないので、続きが知りたい人はラ・ムーを倒しましょう。最後まで読んでくれた人、ご愛読、ありがとうございました！

・・・なんて言うと、連載終了みたいですね・・・

このような外伝はあと一回予定がありますが、それは相当先なので、つまらなかったと思う人は安心してください。面白いと思ってくれた人は楽しみにしていてください。

次回からは本編に戻ります！まだ、物語は始まったばかりです！これからも「プレアデスの絆」をよろしくおねがいします！

18、月下の歌姫（前書き）

X？、

songstress in the moonlight

18、月下の歌姫

スバルは、ベッドに横になり、腕を首の後ろにまわして天井を見ていた。

「……」

――今のは何だったんだろう。思い出すのも嫌なのに、頭に浮かんできた。

「はぁ……」

『……スバル？』

体を起して声のした方を見ると、ウォーロックがウィザード・オンをした。スバル同様、深夜であるにも関わらず眠そうな顔は一切していない。

『なんだ、まだ起きてたのか』

「うん……」

『……眠れねぇのか？』

「まぁね。ロックも？」

『あぁ……』

「あんなことがあった夜だから、ぐっすり眠れると思ってたのに、

まさか逆になるなんて……」

スバルはちょっと沈んだ顔をしている。

『たぶん、さっきの戦いで興奮しちまってるんだろうよ』

「そういうことにしておくか。……ねぇ、ロック。今さ、あの時のこと思い出してたんだ」

『あの時？』

「ミソラちゃんがオリヒメたちの仲間になった時さ」

『ふぅん……』

「なんでだろうね？」

『オレに聞かないでくれ』

ウォーロックは知るか、とばかりに肩をすくめた。

「そうだけどさ……」

スバルは再び腕を首の後ろにまわし、枕にもたれかかり、首を少し横に回して窓の外に広がる空をみた。満月が出ていて、星がよく見える空だった。

「……」

――考えてもしょうがないか。分からないものは、分からない。

考えるのをやめた時に分かることだってある。

「……？」

スバルの視界に何か動くものが見えて、スバルはその方に目を向けた。見ると、ハープ・ノートが隣の家の部屋の窓からするりと出るところだった。

「……ミソラちゃん？」

ハープ・ノートはそのまま身軽な身のこなしでジャンプして屋根に上った。そしてスバルには背を向けて屋根に座り込み、ギターを構えた。スバルは窓を開けて、窓枠に腕を置き、その上に頭を乗せた。ウォーロックもスバルの隣にやって来てハープ・ノートの方に目を向けた。ハープ・ノートはギターを弾いて歌いだした。彼女の歌声は、春の夜に響いた。スバルとウォーロックはじっとミソラの歌を聞いていた。月に照らされて歌うハープ・ノートは、画になるものがあった。

「……ねぇ、ロック？」

「なんだ？」

「もう……あんなことないよね？」

ウォーロックは目を閉じて、ハープ・ノートに目を戻してから再び開けて言った。

「……当たり前だろ。あんなこともう二度とねぇよ。いや、起こさせねぇ。」

「……」

「オレらが、やつらを守るからよ。ああいうことから、守ってやるんだ。そうだろ？」

「そうだね……。うん、ロックの言うとおりだ」

――そう、あんなこと、もう起こさせない。僕がそれを許さない。絶対、守るから。

「……ふう」

ハープ・ノートは歌い終わってから深く息を吐いた。

パチパチパチ……

背後から急に拍手が聞こえ、ハープ・ノートはビクッと肩を動かし、上体をひねって後ろを向いた。

「ス……スバルくん！？」

見ると、スバルが開いた窓の向こうから拍手をしていた。ハープ・ノートは屋根から跳んでスバルのベランダに着地した。そして、窓の向こうのスバルを見上げた。

「聴いてたの！？」

「うん、いい歌だったよ」

「……って言うか、なんでスバルくん起きてるの？」

「眠れなくてさ……」

その返事に、ハープ・ノートはピクリと反応した。

「そうなの？わたしとハープもなの……」

「今、ロックと話してて、さっきの戦いのせいで興奮してるって結論に達したところ。」

「そう……」

ハープ・ノートは目線を落とし気味にして言った。

「そういえば、なんで歌を歌ったの？」

「歌を歌えば、少しは気分が落ち着くかと思って……」

「……？」

（ミソラちゃん、元気がないな……）

声のトーンは低く、表情は暗い。目線も落としがちである。いつものミソラの、活発さがまるでなかった。

「スバルくん……」

「なに？」

「これから展望台行かない？」

それだけのことを頼むだけなのに、ミソラはまるで切羽詰まっているかのように泣きそうな顔をしている。

「いいよ。今夜は星がよく見えるし」

『展望台!?あんな暇なとこ行くのか!?』

ウォーロックがギクリ、という擬音が聞こえてきそうなリアクションをした。スバルと初めて会ったころから空を見上げるしかやることのない展望台がウォーロックは苦手なのだ。まぁ、宇宙人であるウォーロックに夜空を楽しめという方が無理かもしれないが。

「ロック、今だって暇じゃないか」

『まぁ、そうだけどよ……』

「じゃ、いいね？」

『分かったよ！するんならさっさとしやがれ！』

ウォーロックが観念したように叫ぶ。スバルは嬉しそうにうなずき、窓からベランダに出ながらハンターを腕に装着し、天に掲げて叫んだ。

「トランスコード！シューティングスターロックマン！！」

スバルが光に包まれ、その光はそのまま空に舞い上がり、ウェーブロードに乗った。ハープ・ノートもそれに続いた。そして、展望台

の上のウェーブロードに着くと飛び降りて、ベンチに2人で腰をかけ、空を見上げた。

「……」

「……きれいだね」

ハープ・ノートが言った。

「うん……。……ねぇ、ミソラちゃん、聞いてもいい？」

「いいよ。なに？」

ハープ・ノートはロックマンの顔を覗き込むようにして彼の方を向いた。ベンチで2人で座ってこれをやると、顔が結構近くなる。ゆえにロックマンは顔を赤くした。

「さ、差し支えなければ答えてほしいんだけどさ……なんでそんなに元気ないの？」

それを聞くと、ミソラは再び背をベンチの背もたれに預け、頭を垂れた。そして瞳だけでスバルを見つめた。

「……やっぱりばれちゃった？」

「うん……」

ロックマンが少々気まずそうに頷いた。

「あのね、さっきまでわたしがオリヒメのところにいた事を思い出

してたの」

「ミソラちゃんも？」

「ってことはスバルくんも？」

ハープ・ノートがハッと頭を上げてロックマンの方を向いて言った。

「うん、なんだか、こう……勝手に頭に思い浮かんでくるっていうか」

「うん……スバルくん、いい機会だから聞いて」

ハープ・ノートが遠慮がちに言った。

「うん？」

「改めて……ごめんね……。わたし、あの時スバルくんを傷つけちゃって……」

目を細めてロックマンを見つめて言った。

「いいよ。大丈夫。」

「……うん。たぶん、スバルくんならそういうとは思ってたけど……でも、言わないとわたし、どうしたらいいか分からなくて……っく……」

ハープ・ノートは急に嗚咽を漏らし、ロックマンは彼女の方を見た。今まではバイザーに隠れて気付かなかったが、よく見るとミソラの

目は泣いたのか、赤く腫れていた。そして、そんなハープ・ノートの目にじわり、と再び雫が溜まり始めた。彼女をまっすぐ見つめながら、ロックマンは口を開いた。

「安心して、ミソラちゃん。僕、さっき誓ったから。もう、ミソラちゃんをあんな目には合わせないって。絶対守るって、誓ったから……」

それを聞いてハッと顔を上げてスバルの方を見る。そして、優しく笑いかけるスバルを見て、思わず口元をほころばせた。

「スバルくん……ありがと……」

ハープ・ノートはバイザーの下から指を入れて、涙を拭った。そして笑顔を取り戻して言う。

「じゃ、わたしも迷惑にならないようにがんばらなきゃね！」

「……うん！がんばろう！」

「うん！」

「……」

2人はその後、無言で月を見上げていた。

（……そういえば……）

ミソラは何かを思い出し、口を不意に開いた。

「……ママ、久しぶり。」

ミソラは満月を見上げて呟いた。

「……ミソラちゃん？」

見れば、ハープ・ノートがニッコリと笑顔で天を仰いで語っていた。

「わたしは元気だよ。ごめんね、最近こうして話す時間取れなくて。わたし、ちゃんと歌ってるよ。空にまで、ママのところまで届いてるかは分からないけど、聴いててくれたらうれしいな……。それと、ホントだったね。わたしは、1人じゃないよ。みんな、わたしを支えてくれる。今、わたしすっごく幸せだから、ママ、もう心配しないで！」

「……」

スバルは黙って聞いていた。

「……ごめんね、待たせちゃった？」

まるでスバルの顔色を窺うように上目づかいで聞く。

「ううん、大丈夫。」

「わたし、歌手に復帰してからぜんぜんこういうのやってなくて……。ママ、寂しがってるかなって……。届いたかな？わたしの言葉。」

「届いたよ。きっと。言葉も、歌も、きっと全部届いてる。」

ハープ・ノートは口をわずかに開いて聞いていたが、やがて目を輝かせて口角を上げ、言った。

「そうだね……そうだよね！ありがと！スバルくん！！」

「どういたしまして。」

「ふ……ふぁぁあああ……」

ミソラは口に手を当ててあくびをした。

「眠くなってきちゃった……」

あくびで出てきた涙を、目をこすってふき取りながら眠そうな声を出す。

「そうだね。僕もだよ。……それじゃ、そろそろ帰ろうか？」

「うん……」

ロックマンとハープ・ノートは飛び上がってウェーブロードに乗って2人の自宅の上にまで行った。

「じゃ、また明日ね。」

「うん！今度こそおやすみ！」

「おやすみ、ミソラちゃん」

2人はそれぞれの部屋に戻って行った。

『……クスクスクス……』

「？　どうしたの？ハープ？」

ミソラがベッドに乗りながら聞いた。

『眠れなかったのに、スバルくんと話したらお互い安心して眠くなった……。なかなか熱いわね、お二人さん♪』

「ちょっと～からかわないでよ、ハープ！」

ミソラは頬をぷ～っ！と膨らませた。

『クスクスクス……』

「もういい！寝る！」

『クスクス、おやすみ、ミソラ！』

「おやすみっ！」

そう叫ぶと、ミソラは掛け布団を引っ張って体の上にかけて、窓側を向いて目を閉じた。

数分後、ハープはミソラの幸せそうな寝顔を見て、ほほ笑んでいた。

『ホントに幸せそうな顔して寝るもんだわね、ミソラ……』

静かに寝息を立てて眠るミソラ。ハープもハンターに戻って本格的に寝ようとしたとき、声が聞こえた。

「……スバルくん……」

何の夢を見てるんだろう?と、ハープは思う。でも、聞かなくてもこれだけは分かった。

きっと、これ以上にないくらい、楽しい夢だ。

18、月下の歌姫（後書き）

今回ミソラが歌った歌は本来は「Ｂｅ　Ｓｏｍｅｗｈｅｒｅ」を載せていたのですが、やっぱり問題あるかなと思いまして、消しました。ＪＡＳＲＡＣに文句は言われたくないっす。

１９、顔面強打（前書き）

相変わらず地の文がｏｒｚ

19、顔面強打

「う～ん……」

ミソラは腕を上に突っ張って大きくのびをした。

「……」

ミソラは窓の外に広がる空を見つめた。雲ひとつない、晴れ渡った空だった。

「いい天気～……」

ミソラはベッドから起き上がると、ちょっとスバルの部屋の方を見てからドアを開けて洗面所へ向かった。

X？、

Ｆａｃｅ　ｈｉｔｔｉｎｇ　ｈａｒｄ

『ほら、急げよ、スバル！』

「わかってる！急いでるよ！」

今、スバルは昨日疲れて帰ってきたせいで忘れていた教科書などの準備をしている。昨日と違い、ちゃんと起きて、ちゃんと5分前に朝食を食べ終わったが、すっかり学校へ行く準備を忘れていたことに気が付き、今その準備をしていたのだ。

「……よし！これでＯＫ！」

『おい、5分オーバーだぜ！』

「うん、分かってる！」

スバルは、ふいに窓からミソラの部屋を見た。部屋には誰もいなかった。

「さすがにもう出ちゃってるか……」

スバルは急いでドアに向かった。

『もう、委員長たちが待ってるんじゃねぇか？』

「それはやばい！」

スバルは勢いよくドアを開けた――

ゴチ――ン！！！

「……？」

ドアが数ｃｍだけ開いて、何かにぶつかった。

『なんだぁ？』

ウォーロックが扉の隙間から廊下に出た。

『……やっちまったな、スバル』

ドアの向こうからウォーロックの声が聞こえてくる。

「え？何があるの？」

スバルはドアに顔を近づけて向こうを見ようとしている。

『自分で見ろよ。もうドアは開くはずだからよ』

スバルがドアを押すと、確かに普通に開いた。スバルは顔だけをドアから出して、何かがある方を覗いた。

「……えええ！？

ミソラちゃん！？」

見ると、ミソラがうずくまって手で顔を押さえ、痛みに耐えていた。

「～～～～～～～～！！」

ミソラは悲痛の声を上げている。

「な、なんでミソラちゃんがここに……！？」

数分前――

「「こんにちは――――！！」」

「は――――い！！」

玄関に来た客をあかねが出迎えると、それはルナ、ゴン太、キザマ

ロ、ミソラ、ツカサ、ジャック、クインティアの集団だった。

「あぁ、みんな！」

「おはようございます、おばさま！」

ルナが挨拶をした。

「「おはようございます！」」

その他の面々もそれぞれに挨拶をした。

「ええ、みんなおはよう！」

「……で、スバルくんは？」

「さっき朝食済ませたから、そろそろ降りて来るんじゃないかしら。こんな玄関で待つのもなんだから、あがって待ってたらどう？」

「……そうですね、じゃ、おじゃまします！」

7人はぞろぞろとリビングへあがった。ちなみに大吾はすでにＷＡＸＡに向かっている。

……数分後。

「遅いわね……」

ルナの目がつりあがっていく。

（う……やばい……）

ゴン太、キザマロ、ツカサ、ジャックが思った。

「スバルくんのお母さん！」

台所で皿洗いをしていたあかねは、首だけを後ろに向けた。

「ミソラちゃん……『スバルくんのお母さん』っていうのはちょっと……『あかね』でいいわよ」

「あ、すみません。それじゃ、あかねさん、わたし、スバルくんを見て来ましょうか？」

「……そう？じゃ、お願いできるかしら？」

「はい！行ってきます！」

ミソラは、スバルの家の構造は、かつてスバルがツカサに裏切られて落ち込んだ際に励ますために入ったことがあったので、知っていた。

あかねは階段を上っていくミソラを目で追い、見えなくなると「フフッ」と笑った。

「これはスバルも脈アリね……」

ミソラはスキップのような歩調で階段を上がり、スバルの部屋の前にやってきた。

ミソラはドアノブに手をかけたがそこで手が止まった。

「……」

『……？入るんなら早く入りなさいよ』

ハープが怪訝そうな顔をして言った。

「……恥ずかしい……」

『……は？』

見れば、ミソラは顔を赤く染めている。口は絵に描いたら波線で描き表されそうな、困ったような唇の噛み方をしている。

「よく考えたら、ここ、男の子の部屋だよね……？」

『いやいや！あなた昨日も来たじゃない！』

「あの時はハープ・ノートだったし……」

『電波人間だったらいいってどんな思考してんのよ、あんた……。それに！人間の状態でも一回入ったじゃない！』

「あのときはスバルくんが落ち込んでて、励ますのに頭がいっぱいで……」

『もう！何よ、それ？そんなんなら最初っからひきうけなきゃよかったじゃない！』

「さっきは気付かなかったの！」

ミソラは少しムキになって言った。

『じゃ、ノックして呼んだら？』

「あ、それだ！」

ミソラはポン、と拳で手のひらを叩くような動作を取った。

《……恥ずかしい、とかなくてもノックぐらいしなさいよ……》

心の中で突っ込むハープをよそに、ミソラは腕をあげて人差し指の甲を使ってノックをしようとした。

その時、ガチャッ、という音が聞こえて目の前のドアが視界いっぱいに迫ってきた。

「……！」

ゴチ――――ン！！！

そして、この顛末（てんまつ）である。

「～～～～～～！！」

「と、とりあえず、大丈夫!?」

『……スバルくん、今回は謝らなくていいわよ』

ミソラの隣にハープが現れた。

「ハープ?なんで?」

『自業自得だからよ。わけの分からないことを言った。』

「???」

スバルは状況が理解できていない。

「～～～～……はぁ、痛かった……」

ミソラはやっと悲痛の声を押さえて立ち上がった。

「だ、大丈夫……?」

「う、うん……みんな、下で待ってるよ……」

ミソラは涙目で、一番強く打ったらしい額(ひたい)をさすりながら言った。

「……母さんに頼んで薬もらおうか?」

「いいの。ハープの言うとおり、わたしが悪いから」

「……なんで、ドアの前にいたの?僕を呼びに来てくれたのは分かったけど」

「……聞かないで。自分でもアホらしいから」

ミソラは情けなさそうに言った。

「……まぁ、いいんなら下に行こうか？みんな待ってるんでしょ？」

「うん……」

スバルとミソラは階段を降りて下へ向かった。

「あ、スバルくん！おはよ！」

「おはよう、委員長！それにみんな！」

「おはよ！」

「……でも、ちょっと時間オーバーよ！」

ルナは軽く怒りながら言った。

「ゴメン、今日の分の準備してなくてさ……」

「まぁ、昨日はいろいろあったからね……今日は大目に見といてあげるわ。……なんでミソラちゃん、頭さすってるの？」

「気にしないで……」

「……？」

みんな、スバルと同様にわけが分からない、という表情だ。

「ほら、全員そろったんだから、行こっ！」

ミソラがごまかすように言った。

「わ、わかったわ……じゃ、行ってきます、おばさま！」

「行ってきます、母さん！」

ルナの声に重ねるように、スバルが言った。

「はい、みんないってらっしゃい！」

あかねはスバルが他の7人と親しげに話しながら歩いて行くのを玄関先で見送っていた。

「スバル……あんなにたくさんのお友達に囲まれて……。一年前とは大違いね……。うれしいよ、母さんは」

あかねは微笑(ほほえ)みながらそう呟くと、家へと戻って行った。

時はあっという間に進み、昼休みになった。

昼休みは屋上でスバル、ミソラ、ルナ、ゴン太、キザマロ、ツカサが円になってそれぞれ持ち寄った弁当類を食べていた。

「あ、ロック！それ、僕のウインナーだぞ！」

『いいじゃねぇかよ！一個ぐらい！』

「ハープ、サンドイッチ一個いる？」

『ええ、もらおうかしら？』

「モード、おいしい？」

『おいしーですっ！これ、ルナちゃんが作ったんですか？』

「うん、ママが料理の練習してて、それの手伝いとかしてたからね」

『上達してたんですね～！！』

「バグバグバグ・・・」

『バグバグバグ・・・』

ゴン太とオックスの組は牛丼をかなりの勢いで食べている。

「……ペディア、ゴン太くんの体脂肪率は？」

『今、急上昇中だよ！』

「ゴン太くん、少しは押さえたらどうですか？」

「なんでだよ？キザマロ！こんなにうまいのに！？」

「はぁ～……」

「そんなことよりよ、最近ルナルナ団活動してなくねぇか？」

「「ル……『ルナルナ団』！？なにそれ！？」」

ミソラとツカサが同時に言った。

「あぁ、ボク達４人で『委員長を生徒会長にする』ってレゾンでやってたときのチーム名だよ」

「あぁ、あれレゾン組んでやってたんだ？」

ミソラは生徒会長選挙の発表会に参加していたので、スバル達がそのための活動をしていたこともその時に聞いていた。

（スバルくん！）

ツカサがスバルに小声で話しかけた。

（なに？ツカサくん？）

（あ、あの……『ルナルナ団』っていうネーミングは誰が……？）

（あ、あぁ……やっぱり、そこ気になるよね――……（汗）
……委員長だよ）

（へ、へぇ……（汗）　委員長ってやっぱり……）

（ネーミングセンスのかけらもねぇよな……）

ヒカルが言った。

（う、うん……。でも、２人とも、委員長の前でそこに触れないようにね）

（分かってるよ……）

（オレらまだ死にたくねぇよ……）

ツカサ、ヒカルの順に言った。

「じゃあ、わたしもその『ルナルナ団』に混ぜてよ！」

ミソラが言った。

（ネ……ネーミングに関してノータッチ！！？）

スバル、ツカサ、ヒカルはそこに驚いた。

あとの人々はミソラが『ルナルナ団』に入ることに驚いた。

「え……えぇ！？」

「ダメ？」

「ダメとかじゃなくて……な……なんかすごい……」

「なにが？」

「だ、だって……国民的歌手が我らのチームに入るなんて……」

「え～～～……そういうのは気にしないでよ～～～。なら、その国民的歌手がこの学校にいるのは？」

「そうよ！もうミソラちゃんは立派なコダマ小学校の一員なのよ！ゴン太もキザマロも、そういう感性は捨てなさい！」

「そ、そうだな……ごめん、ミソラちゃん」

「いいよ、謝らなくて。じゃあ、入ってもいいのね？」

「もちろん！むしろ、入ってくださいとお願いしたいくらいです！」

「やったー！！ありがとね、みんな！」

「ボクも入っていい？」

ツカサが言った。

「もちろん！断る理由なんてないわ！」

ルナが言った。

「じゃ、みんな、ミソラちゃんとブラザーを結ばないとね！」

スバルは、ごく当たり前のことを言った。でも、その発言はゴン太とキザマロには衝撃を、ミソラとルナには驚きを与えた。

「そ……そういえば、わたし、みんなと未だにブラザー結んでなかったね！」

「そ……そうね、今更だけど……」

「ミ……ミソラちゃんとブラザー……」

ゴン太とキザマロは上の空である。

ゴッ！

昨日と同じ、ルナのデストロイアッパー並みのアッパーが今度はゴン太とキザマロ2人を突き飛ばした。2人はそのまま1ラウンドノックダウンした。ルナの前ではラウンドもクソもないが。

「だから、あなたたち、そういうのはやめなさい、って言ったばかりでしょ！」

「わ、悪かったよ……。でもよ、ついこの前まで、ミソラちゃんって言ったらテレビの向こうの存在だったしよ……」

「ルナちゃん、大丈夫だよ。ゴン太くんもキザマロくんも、最初のころに比べればだいぶ慣れてきてくれてるし……」

「でも、いいんですか？ブラザーバンド結んで」

「いいに決まってるじゃない！もう、ルナちゃんもゴン太くんもキザマロくんもツカサくんも、わたしの親友なんだから！」

「へへへ、ありがとな、ミソラちゃん！」

「うん、みんなこれからもよろしくね！」

ミソラと、ルナルナ団の面々はブラザーを結んだ。

「じゃあ、次はツカサくんだね！」

ミソラが言った。

「そ……そういえば、なんだかんだ言って、ボクとツカサくんもまだだったね、ブラザーバンド……」

「そうだね……やっと結べると思ったら緊張してきたよ……」

「それじゃ、これからもよろしくね、ツカサくん！」

「うん！」

ツカサと他の5人はブラザーバンドを結んだ。

「これでOKだね！」

「そういえば、今更だけどジャックは？」

「クインティアさんとどっか行ったよ」

「あの2人ともブラザーバンド結びたいな――……」

「そうだね！また今度誘ってみようよ！」

スバルとミソラが言った。

「なんにせよ、これで新生ルナルナ団の誕生ね！」

「うん！がんばろう！」

「……がんばるって、なにを？レゾンは？」

「……あ。」

１９、顔面強打（後書き）

サブタイトル、完全にふざけました。
普通ならブラザーバンド結んだこと取り上げるのですが、サブタイトル候補にこれが浮かんだら、もうこれしかない！！と思い決まりました。

あと、小学校って本来昼食は給食ですよね・・・。ま、まぁ２００年後はこうなってるということで！
何気にモードとペディア初登場・・・。

前回と今回、進展性がなくてすみません。次回は進展します。ちゃんと。

・・・あ、今思えばミソラってルナルナ団知ってるはずなのに・・・。まぁ、いいや。

20、破壊任務開始！（前書き）

「プレアデスの絆」時間軸整理
２２０６年　宇宙ステーション「きずな」行方不明に（星河大吾も同時に行方不明）
２２０９年１月　響ミソラの母親、他界
２２０９年４～６月　ＦＭ星人の侵略（流星１）
２２０９年７～９月　ドクター・オリヒメの地球支配計画（流星２）
２２１０年１～２月上旬　ディーラーのメテオＧによる地球支配計画（流星３）　事件終息と同時に偽者誕生
２２１０年２月下旬　アシッド・エースのかけら発見・収集　暁シドウとアシッド、蘇生
２２１０年３月上旬　クロックマンにハープ・ノートがさらわれる（エグゼＯＳＳ）響ミソラ、修行　及び　暁シドウ、戦闘リハビリ
２２１０年４月　現在（１～１８話時点）

特に１～３月の辺りはおかしな部分があるかも知れないですが、あまり気にしないようにｗ

今回、後から追加した部分があるので、かなり長いです。

ＸＸ、
ｓｔａｒｔｉｎｇ　ｔｈｅ　ｄｕｔｙ　ｏｆ　ｄｅｓｔｒｕｃｔｉｏｎ！

20、破壊任務開始！

「おーい、スバル、早く行くぞー」

「ごめーん、今日、ボク日直だから遅れてくー！」

「分かったー。じゃー、先行ってるぞー」

「また後でねー！　ふう……」

――放課後。今、スバルは日直の仕事の作業をしていた。

「それにしても、またＷＡＸＡに召集なんて、なんなんだろう？」

『会議とか言ってたよな？　昨日の偽者のことについてじゃないか？』

「可能性は高いね……」

そう、午後の休み時間中にメールでオフィシャルメンバーは再び召集を受けていた。ただ、それほど急な用事ではないそうなので、スバルはちゃんと日直の仕事をこなしてから行くことにしたのだ。他の５人は先に行ってしまった。

『スバル、オレ昨日眠れなかったときに考えたんだけどよ……』

「何を？」

『あの、グレイの移動方法だよ。……引っかからねぇか？』

「う～ん……」

スバルが頭をかかえるようにして考えた。

『思い出してもみろよ。アイツ、去り方が周波数変換の移動じゃなくて、背後に変な穴を開けて、その中に入っていったろ？』

それを聞いて、スバルはハッと目を見開いた。バッと顔を上げてウォーロックの方を見る。

「あ、確かに！　あの向こうはどこに繋がってるんだろう？」

『穴の中はただ黒い世界が広がってるようにしか見えなかったが……』

「でも、あの向こう、どこかで見た気がする……」

眉をひそめてスバルは言う。

『マジでか！？』

「うん……でも、分からないや」

『そうか……』

「そういえば、僕も１つ気になってたんだ……」

『なんだ？』

ウォーロックが眉をひそめる。

「最初、あいつら姿を隠してたでしょ？あれはインビジブルじゃなかった……。じゃあ、アレは何？」

『確かにな……インビジブルならロックバスターくらい受け流せたはずだ』

「それに、やっぱり気になるよ。どうやって偽者を作ったのか」

『人間体と電波体のそれぞれのコピーが電波変換していたらしいが……。妙だな、普通の電波体なら、ある程度はコピーができても、アシッドや人間のコピーはあそこまで本物に近くするのは至難の業だぜ』

「う～ん……」

『おい、スバル、今気付いたんだが、オレらこうやって考えてる暇あったら早いとこ作業終わらせて会議に参加した方が早くねぇか？』

「……そうでした……」

スバルは急いで日直の仕事をやり始めた。

「やっ！お疲れ、スバルくん！」

「うえええ！？」

振り向くと、教室のドアのところで、先に行ったはずのミソラが手を振っていた。

「ミソラちゃん!?　なんでまだいるの!?」

「スバルくんを待ってようと思ったんだけど、どうせなら日直のお仕事手伝ってあげようと思って!」

ミソラはそう言って胸の前で両腕でガッツポーズをした。

「ええ?いいよ!　1人でできるし!」

「ほらほら、遠慮しない!」

『スバル、手伝わせないと、ミソラが残った意味なくなるぞ?』

「……それもそうだね、じゃあ……黒板キレイにするの、よろしく!」

「まかせて!」

それから、2人は日直の仕事をこなし、最後に教室のゴミ箱の中身を捨てに行って教室に戻るところだった。

「えっと、机は並べたし、黒板きれいにしたし、花に水やったし、窓の戸締りしたし、ゴミ捨てたし、日誌書いて出したし、……こんなところかな」

スバル達は教室に空になったゴミ箱を置いた。

「それじゃ、行こっか!」

「うん！」

「うわ、ミソラちゃんだ！」

「……え？」

2人は自分の荷物を取りながら振り返ると、別の組の生徒が3人、こちらを見ていた。

「本物だ～！！」

「昨日、転校してきたんだよね～！」

「うん！　そうだよ！よろしくね！」

ミソラが笑って返事をした。誰にでも笑顔を振りまくミソラ。その人受けのよい性格が、彼女を人気にしているのだろう。しかし、これが間違いだった。

「ミソラちゃん、そんなやつと一緒にいないで、一緒に遊ぼうよ！」

「……へ？」

ミソラの顔がピクッとひきつる。

「そうだよ、いいだろ～？」

「いや、これから用事があるから……」

ミソラは不安な顔をして一歩後ずさりしながら言った。

「そんなこと言わないでさ～……」

「さ……さよならっ！！」

ミソラは何か危険なものを感じて走り出した。

「ミソラちゃん！」

スバルもそれを追った。

「待て～！！ミソラちゃん！」

ファンの生徒たちが追いかけてきた。

「ちょっと！わたし、急いでるんだって！」

ミソラは走りながら叫んだ。

「そんなことより、遊んでよ～！」

「キミら、やめろよ！いやがってるじゃないか！」

スバルは走りながら後ろを睨んで言った。

「うるせえ！お前になんか用事はねえよ！」

『あいつら、スバルがロックマンって知らないようだな……』

スバルがロックマンと知るものは、世界を救ったヒーローということ

とで、一目を置くはずである。

「来ないで来ないで来ないで～！！」

ミソラが半泣きで叫んだ。そろそろ辛そうだ。走り回ったことによる息切れと、精神的な追いつめで。

「はぁはぁ、ミソラちゃん、しかたない、電波変換だ！」

「はぁ、はぁ、……う、うん！」

スバルとミソラはそれぞれのハンターを左腕に装着して叫ぶ。

「トランスコード！シューティングスターロックマン！！」

「トランスコード００４！ハープ・ノート！！」

二つの光が飛び上がりウェーブロードでそれぞれロックマンとハープ・ノートになった。２人はその場にぐったりと座り込んだ。

「はぁはぁ、も、もう大丈夫、だね……」

「う、うん……そう、だね……はぁ、はぁ」

『……人気っていうのも大変だな……』

『そうね……同情するわ……』

ウォーロックとハープが出てきて言った。

「普通に話しかけてくれれば、ちゃんと接するのに～！」

ハープ・ノートが嘆いた。

「大丈夫？ミソラちゃん……」

「うん……あんなの初めてだったからびっくりしちゃって……」

「そうなの？前の学校じゃ、こんなことなかったの？」

「前の学校は、みんな無名のころのわたしを知ってるから、歌手デビューしても『すごいね』って言う感じの反応だったから……」

「つまり、この学校と前の学校の生徒の違いは『ただのファン』か、『アイドルになった友達』かって言うことか……」

「そう……そんな感じ……」

ハープ・ノートはぐったりしながら言った。

『ミソラも災難ね、朝は自分が悪いとはいえ顔面強打するし、怖いファンには追っかけられるし……」

「みんなにはもうちょっと慣れてもらわないとね……」

「そうだね……早くそうならないかな……」

その時、ライセンスに通信が入った。

「スバル！ミソラ！今どこだ！？」

「あ、暁さん！すみません！ちょっと日直の用事で遅れて……」

「そんなことは分かってる！今どこだと聞いている！」

（暁さん、怒ってる……？）

口調が荒々しいので、２人はそう思った。

「い、今学校です！これから急いで向かいます」

「そうしてくれ！緊急事態だ！」

「「え！？」」

「本来は偽者についての会議だったんだが、それどころじゃなくなった！とにかく走れ！急いで来い！いいな！」

どうやら、シドウは怒っていたのではなく、焦っていたようだ。シドウはそれで通信を切ろうとしたが、別の人の通信が入った。

「シドウ、今はとにかく時間がないから、２人は移動しながら状況説明を聞かせたほうがいいわ」

「……そうだな、クインティア！それじゃ、お前らも繋げ！」

シドウの隣に先に行った４人がいるようで、次々に回線に繋がってきた。

「ＯＫだぜ！」

「こっちも！」

「よし、全員つないだな！時間がとにかくないから、急いでしゃべる！がんばって聞きとれ！」

「はい！」

「それと、スバ……ロックマンとハープ・ノートは話を聞きながら最大スピードで走れ！！聞くのに集中して速度を落とすな！」

「はい！」

ロックマンとハープ・ノートは例の彗星のような光になって移動した。

――――そのころ、現実世界では――――

「はぁはぁ、くそ、どこへ行った？」

先ほどのミソラのファンの少年たちが立ち膝をつきながら言った。

「と、突然消えたぞ！？」

電波変換を知らない彼らはスバルとミソラが消えたようにしか見えなかった。

「……あなたたち、目の前からミソラちゃんが消えてもまだ諦めてないんだ……」

急に声が聞こえ、声がしてきた背後を3人が振り返ると、そこには青い短い髪に水色のワンピースを着た女の子が立っていた。この子はこの子でかわいらしい顔立ちをしているのだが、ミソラ一筋の彼らの目には入らない。

「スバル君も言ってたけど、あんな風に追っかけまわしちゃ、あの子がかわいそうだよ……」

「誰だよ、お前？」

3人の中で一番図体のでかい子が聞いた。

「それ聞いて、どうするの？」

「何様だ、って聞きたいんだよ！」

それを聞いた少女はふぅ、とため息をついた。

「少なくともあなたたちよりはミソラちゃんのこと、分かってあげられると思うよ？」

「……決定だ。ちょうど逃げられてイライラしてたところだ、お前を殴らせてもらうぜ」

男の子の内の一人が走って少女に近づいて、殴りかかる。

「歯を食いしばりな！」

ブンッ、と男の子が少女に拳を振るう。しかし、少女はそれをするりとムダのない動きで避け、そのまま男の子の腹に裏拳を突っ込んだ。

「ぐふぅ！」

男の子がその場にうずくまる。

「……それで？あなたたちはどうするの？」

少女は残りの２人を見据えて言う。

「う……うぉおおお！！」

２人の内の一人が叫びながら殴りかかってきた。少女はまたもひょいっと飛んできた拳を避けると呟いた。

「……うん、ＯＫ。これで武力行使できるね」

「……はぁ？何を言って――――

「ドルフィン」

殴ってきた男の子の問いを無視して少女が呟く。

『了解です』

彼女の左腕に装着されたハンターから声がするのと同時に、少女の胸の前になにか青く透き通った塊が現れたかと思うと、それは粘土

をこねるようにぐにゃぐにゃと形を変形させていき、一振りの刀に姿を変えた。

「な……！？」

男の子たちが驚いたように目を見開く。少女に殴りかかった少年はあわてて元いた位置に戻った。少女の前に浮かぶ刀は、よく見れば刃がなかった。見た目は青い色をした竹刀そのものである。少女はそれの柄を左手で握ると、両手で持って切っ先を相手2人に向け瞼を閉じ、ふぅー、と鼻から息を漏らした。そしてゆっくりと目を開いてキッと2人を紫の瞳で見据えて言った。

「あなたたちが攻撃してきたんだから、これはもう正当防衛だよ。……痛いのは我慢してね」

小学生とは思えない物言いだ。自分が勝てる前提で話をする少女に、男の子たちは再び怒りがこみ上げてきたようだ。

「痛みに耐えるのはお前の方だ！」

一人が駆けだしてくる。そして、拳を繰り出そうとした。

「かはッ！」

しかし、少女はその前に手にした青い竹刀を相手の腹に打ち込んでいた。腹の空気をすべて押し出された少年はその場にうずくまった。

「く、くそぉぉお！」

最後の一人が殴りかかるが、やはり少女の方が早かった。彼の顔面

めがけて竹刀を振りおろす。

「ぐっ！」

竹刀が額にクリーンヒットして、その子も額をおさえてうずくまる。

「手加減はしといたから、そのうち痛みもなくなるよ。安心して」

竹刀をヒュッと風を斬る音を立たせて振り下ろして少女は言った。

一番最初に彼女に殴られて、今は痛みが引いてきた少年はおびえたような顔で少女の後姿を見つめた。

目の前の少女は、強かった。どこでそんな戦い方を身につけたのかは知らないが、男3人を女の腕で一人で倒した。それでいて、自分たちを案じるような言葉と視線を送ってくる。わけが分からなかった。

彼女は竹刀を手から消してから言った。

「……わたしだって、ミソラちゃんのなんだって聞かれたらただの他人だとしか言えないけど……でも、分かってあげてよ。ミソラちゃんだって、わたしたちと同じ小学生なんだよ？きっと、学校のみんながそんな風にミソラちゃんを見てたら、ミソラちゃん寂しいだろうし悲しむよ。ミソラちゃんを好きになるなとは言わないからさ、もっと普通に接してあげて。お願い」

「……分かったよ」

呟くようにそう答える。すると、彼女はそれで自分の環境がどう変わるわけでもないのに、ぱっと顔をほころばせた。

「ありがと！それと、ごめんね、傷つけたりして」

ニッコリと笑う少女を見つめて、少年は若干赤くなりながら気付いた。もう、完全に彼女のペースに持っていかれている。

殴りかかってこられたらアレくらいしか話聞いてもらう方法なくてさー、と言い訳を言うように呟く少女を、３人ともぼんやり見つめていた。

「じゃ、わたし行くね。ミソラちゃんと仲良くしてあげてね！」

少女はそういうと、廊下を歩いて角を曲がり、見えなくなった。

時は少しさかのぼり、コダマタウン上のウェーブロード。その上を高速で駆け抜けていく青とピンクの電波体がいる。……もちろん、ロックマンとハープ・ノートだ。リレーション機能（ファンク）を使って先にＷＡＸＡに集合しているトランスメンバーと会話をしている。

「それで、暁さん、何があったんですか？」

ロックマンが聞く。あぁ、とアシッドエースは相槌を打った。

「これは先に来た４人にはもう話したんだが、２人のためにもう一度言うぜ。２人は落ち着いて聞いてくれ！」

「なんですか！？」

「ＷＡＸＡに爆弾が仕掛けられた！」

「ばっ……！！」

「爆弾！？」

「そうだ！仕掛けたやつは偽者！そいつら以外にできたやつはいない！おそらく昨日、メインコンピュータの電脳に集合する前に仕掛けたんだ！」

「くそ！やつら一体何が目的なんだ！」

ロックマンが悔しそうに呟く。

「それで、ついさっき、アシッドがそのうちの一つを見つけて、それをヨイリー博士が解析した！今、ハンターにデータを送る！」

……ピローン！！

ハンターがデータを受信した。ロックマンとハープ・ノートは目の前にエア・ディスプレイを表示した。

「これは……！」

ロックマンは息を飲んだ。

「そう！　見かけは黒いクリムゾンってとこだ！　これが電脳に入っている電子機器が、時間がくると爆発する仕組みになってる！」

「そんな！　その電子機器に爆破の機能がなくてもですか！？」

「そうだ！　これは本物のクリムゾンを改造した代物（しろもの）だ！アシッドが見つけたサンプルから、これが大量生産されたその数が分かった！　これがＷＡＸＡ内の電子機器の電脳に１２８個ある！」

「「ひゃ……１２８個ぉ！！？」」

あまりの数に、ロックマンもハープノートも、声を上げた。

『いくらなんでも多すぎだろ！』

「そうだな、でも事実だ！　そして爆発する時間はあと１時間と５８分！」

「それじゃ、１分に１個じゃ間に合わないじゃないですか！」

「それは１人で全部ぶっ壊したときの計算だ！　のべ計算ならまだ何とかなる！問題は仕掛けられた位置だ！」

「……もしかして、分からない、とかいうんじゃ……」

ロックマンが嫌な予感を口にする。

「それはさすがにないが……これは改造クリムゾンの特性上、機械では位置が特定できず、電波体がさがすしかない！　今、アシッドが探して、トレース機能（ファンク）の地図に書き込んでる最中だが……。なにぶん数が多くてな、難航しているんだ！」

「！　だから、わたしたちに早く来てほしかったんですね！」

ハープ・ノートが言った。

ちなみに、今2人はコスモウェーブを移動している。

「そうだ！　お前ら2人なら探索能力を使って探せるはず！」

「ちょっ、ちょっと待って！　僕には探索能力ないですよ！？」

ロックマンが喚（わめ）いた。

「あるさ！　ブラック・エースはアシッド・エースを超える探索能力がある！」

そう、ブラック・エースはアシッド・エースを元にしたファイナライズであるため、解析能力がある。……しかし…

「でも、あの能力はメテオGにアクセスして、そのサーバーの力を借りてやってたものですよ！？」

「キングＰＧＭがその代わりになるはずだ！　それを使った探索は慣れないだろうが、なんとかやってくれ！　今は慣れない、とか言ってる暇はない！」

「わ……わかりました！　やってみます！」

難しい注文だ、と思いながらもなんとかやって見せよう、とロックマンは決意を固めた。

「それで、作戦はこうだ！　まず、この探索能力がある３人をリーダーとする３チームに分かれ、ＷＡＸＡを３つのゾーンに分け、担当区域を割り振る！　リーダーは自分の担当区域の爆弾を探索し、トレースに位置を書き込み、それをチームメンバーがつぶしていく！　リーダーもその区域の爆弾をすべて探し終えたら処理に回るんだ！」

「わかりました！」

他の６人が同時に行った。

「それで、チームと担当区域だが――」

「おまたせしました！」

アシッド・エースが声のした方を見上げると、ロックマンとハープ・ノートがウェーブロードから飛び降りてきた。２人はアシッド・エースの両脇に着地した。ちなみに今７人がいるところはＷＡＸＡの外の広場である。

「お、来たか！　じゃあ、チームを言うぜ！

まずは、ハープ・ノート　チーム！メンバー、クイーン・ヴァルゴ！　担当区域、ＷＡＸＡの外側！」

「よろしく！」

「よろしくね！」

「次！アシッド・エース　チーム！メンバー、ジェミニ・スパーク！　担当区域、サテラポリス本部！」

「よろしく！」

「お前らはいつもは一緒に行動してるだろうが、今回は別行動してもらうぜ。今は少しでも時間が欲しい！」

「分かってるぜ！　そのくらい！」

「最後！　ロックマン　チーム！メンバー、オックス・ファイア、ジャック・コーヴァス！　担当区域、ＷＡＸＡ本部！」

「暁さん、この布陣には何か意図が……？」

「あるぜ！　まず、それぞれのチームリーダーがなぜこの担当区域なのかといえば、ＷＡＸＡ、サテラポリス、外側の順に守る重要性が高い！　だから、それに応じて探索能力の大きい順に重要度の高い所に割り振った！」

「なるほど！」

「それとこのチーム分けは昨日、途中からチーム戦になっただろ！

？　その時の組み合わせが今のところ一番チームワークが取りやすい、という判断だ！」

「わかりました、納得です！」

「っと、時間がないんだった！　急ぐぜ！」

アシッド・エースが思い出したように言った。

『皆さんのハンターに爆弾のカウントダウンのデータを送っておきました。それを見て行動してください！』

アシッドが言った。

「分かった！」

「それじゃ、爆弾破壊任務開始！　各員、担当区域に着き次第、任務を開始しろ！」

「了解！！！」

7人はそれぞれ彗星になり、自分の担当区域に向かった。

――――――爆発まで、あと1時間45分――――――

20、破壊任務開始！（後書き）

この爆弾事件は、日常→バトル→日常の繰り返しでは単調すぎるかな、と思い企画しました。と言うと、後からつけ加えただけのなくてもいい話みたいに聞こえるかもしれませんが、ちゃんと意味があって入れています。まぁ、なくても話としては成立しますが、なくても成立する話をすべて排除した話は面白いとは思えませんね。これだけは言えます。

21、黒き穴の向こう（前書き）

前回を読み直して思いました。ミソラのファンの生徒、気持ち悪っ！！キモイを通り越して気持ち悪っ！！！こいつら所詮その辺を歩いてるわき役だから言うこと適当でいいや、みたいな心構えで行ったら大変なことになってました。ごめんね、ミソラ。半泣きにもなるわ。あれじゃ。

ＸＸ？、

Ｔｈｅ　ｏｔｈｅｒ　ｓｉｄｅ　ｏｆ　ｂｌａｃｋ　ｈｏｌｅ

21、黒き穴の向こう

「こちら、ロックマン！チームメンバーと共に担当区域につきました！」

ロックマンの報告にうなずいてからアシッド・エースはハープ・ノートに聞く。

「そうか！ハープ・ノート　チームは？」

「あ……あの、わたしたちさっきの場所が担当区域なんですけど……」

あ。

「……そ、そういやそうだったな……」

アシッド・エースは自分の失態を恥じ入りながら言った。

「そ、それじゃ、探索を開始してくれ！リーダー以外はいつどこにトレースの地図に爆弾の位置が書き込まれても対応できるように散らばれ！」

「了解！」

6人が返事をした。

「……ファイナライズ！」

赤黒い光がロックマンを包み、はじける。

「……ブラックエース！」

そして、光のはじけたその後には漆黒の体に紅く光る翼を携えた姿のロックマンがいた。

『……それにしても、戦闘以外の目的にファイナライズを使うとは思わなかったな……』

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ、ロック」

ロックマンはそう言うと目をつむった。ハープ・ノート、アシッド・エースも目をつむる。そして3人は探索を開始した。その間に他の5人はそれぞれ適当な方向へ散らばった。

どんどんトレースの地図に改造クリムゾンの位置が書き込まれていく。

「くっ……多い……」

ハープ・ノートが目をつむったまま眉をピクリと動かして言った。

「ロックマン……。……ブラックエースは伊達（だて）じゃねえな……」

「えっ？」

アシッド・エースに言われてハープ・ノートはロックマンの担当区域のマップをエア・ディスプレイに表示して見た。地図には高速で改造クリムゾンを示す点が表示されていく。

「は……速い……」

『これは逆に卑怯臭いくらいね……』

ハープも覗き込んで言った。

「お、これだな!?」

オックス・ファイアの声がした。

「見つけたのか?」

ジャック・コーヴァスが聞いた。

「おう!じゃ、さっそく壊すぜ!」

オックス・ファイアは拳を改造クリムゾンに振り下ろした――

「……!!!待って!!ゴン太!!!!」

ロックマンが叫んだ。「オックス・ファイア」ではなく、「ゴン太」と呼ぶくらい焦っているようだ。

「……?どうしたんだ?ロックマン?」

「……今気付いた……。改造クリムゾンは壊しちゃダメなんだ!」

「ど……どういうこと!?スバルくん!?」

「改造クリムゾンは二重の爆弾なんだ!」

「!!!」

アシッド・エースは目を見開いた。あとの者はきょとんとしている。

『だから、どういうことだよ!?スバル!』

ウォーロックが出てきて言った。

「ロック!過去に自分で言ったこと思い出してもみてよ!」

『過去にオレが言ったこと……?』

「『クリムゾンはまるでノイズの爆弾だな……』。キミ、そう言ったよね!?」

『……!!』

そう、ＷＡＸＡでのクリムゾンやディーラーに対する会議に参加した際、天地さんが発見したクリムゾンの特性を聞いたウォーロックはそういったのだ。ウォーロックもそれを聞いて、スバルの言わんとすることを理解したようだ。

『そうか!!クリムゾンが壊れると、中から大量のノイズが出て来る!』

「そう!!だからクリムゾンを改造したんだ!」

「……なんでだ？別にそんなことといいんじゃ……」

ゴン太はまだ分かっていないのか、きょとんとしている。

「何言ってるの、ゴン太くん！！」

ゴン太にミソラが叫ぶようにして喋った。

「考えても見てよ！そりゃ、クリムゾン一個じゃ、たいしてノイズの影響はないだろうけど……。１２８個ものクリムゾンがすべて壊れたら凄まじいまでのノイズが出て来る！それが電子機器に与える影響は計り知れない！」

「……！！それじゃあ！」

「……そう。」

それまで考えをまとめていたアシッド・エースが静かに言った。

「改造クリムゾンは、放っておけば電子機器の外側を破壊し、壊してしまえば電子機器を内側から破壊する。どちらを取ってもＷＡＸＡ、サテラポリスのダメージは大きい。こんな二段構えになっていたんだ！」

「じゃあ、どうするの！？」

クイーン・ヴァルゴがヒステリックぎみに言った。

「ライセンスのノイズ制御プログラムに吸収させたら！？」

ジェミニ・スパークWが言った。

「だめだ！あれはノイズに耐えるためのもので、吸収なんてことしたらすぐにぶっ壊れる！」

「……じゃあ、いらない電子機器の電脳にすべてのクリムゾンを集めたらどうだ！？」

ジャック・コーヴァスが提案した。

「そうか！それなら……」

ロックマンが意見に乗った。しかし……

「……オレも最初それを考えたが、それをしたら、入りきらなかったノイズがこの張り巡らされた電波を伝ってそこら中の電子機器にうつってしまう！病気の空気感染みたいにな！」

アシッド・エースに否定された。

「じゃあ……どうすれば……」

みんな考えこんでしまった。

「……」

「……ノイズウェーブ」

ハープ・ノートが呟くように言った。

「そうだよ！ノイズウェーブに持って行って、中で破壊すれば、出てきたノイズは全部ノイズウェーブの一部にできるんじゃない！？」

自分の考えをまとめながら話していたハープ・ノートはだんだん声に自信を宿して行った。

「それだ！」

アシッド・エースが叫んだ。

「でもよ、そのノイズウェーブってどこにあるんだ！？」

「えっと……外の岩壁にひとつ、サテラポリスの入口にある世界地図にひとつ、ＷＡＸＡのサボテンにひとつ、全部で三つあったはず！」

ロックマンが応えた。ロックマンはノイズ制御プログラムを持っていたことでよくノイズウェーブにも入っていたので、その情報にも詳しかった。

「おし！　それじゃ、ノイズウェーブに改造クリムゾンを持って行って破壊するんだ！　それで、各リーダーは改造クリムゾンの探索を続行！」

「はい！」

「……え？　僕もう終わりましたけど」

ロックマンがさも当然のように言った。

「うそ!?　早っ!!」

ハープ・ノートが驚きながら言った。

「ブラックエース……やっぱりすげえな……。っていうか、全然扱いに慣れてるじゃねぇか……」

「ちょっと、ロックマン!?　ずるいよ、1人だけファイナライズなんて使って!」

なぜかちょっと怒ってハープ・ノートは叫んだ。なんだかルナみたいな怒り方だ。

「えええ?　ハープ・ノート、今更そんなこと言わないでよ!」

「ハープ・ノート……やつあたりする暇があったら少しでも探索したらどうだ?」

ロックマンとアシッド・エースに言われてハープ・ノートは自分の発言の理不尽さに気が付き、恥ずかしそうにした。

「早く終わらせなきゃ……」

赤面しながら目を閉じて探索に集中した。

――――爆発まで、あと1時間30分――――

「……こんなとこかな！」

ハープ・ノートは目を開いた。その隣にクイーン・ヴァルゴが降り立った。その両腕にはクリムゾンが、山のようにあった。

「……うわ――――……。いっぱい集めたね……」

「ええ……ちょっと腕にためすぎたかも」

「これだけあると気持ち悪いね……」

ハープ・ノートは顔をひきつらせて言った。

「そうね……それで？ノイズウェーブはどっち？」

「えっと……」

ハープ・ノートはきょろきょろした。

「あ、あれかな！？」

ハープ・ノートの指さす先には、紫色の、岩壁の一部にモザイクをかけたような部分があった。

「あれね……じゃあ、壊してくるわ」

すたすたと歩いていくクイーン・ヴァルゴをハープ・ノートはじ～っと見ていた。

「……クインティアさ……クイーン・ヴァルゴ！！」

クイーン・ヴァルゴはその声に振り向くと、ハープ・ノートが走って来て追いつくところだった。

「……何？というか、『クインティアさ』まで言ったら全部言っちゃいなさいよ。わざわざ電波人間のほうで呼ばなくても……」

「そうだね……ってそんなことより！　クイーン・ヴァルゴ、あなた、あの時の装置持ってないの？」

「……あの時？」

クイーン・ヴァルゴが眉をひそめつつ聞いた。

「ほら、まだディーラーで活動してたときに使ってた、高速でクリムゾンを吸収してたやつ！あれなら、もっと早く回収できるんじゃ……」

「……」

急に、クイーン・ヴァルゴは押し黙ってしまった。なぜか小刻みに震えているようにも見える。

「……どうしたの？」

「……早く言ってよ……」

クイーン・ヴァルゴが小さく呟いた。

「え？」

クイーン・ヴァルゴがガバッと顔を上げ、ハープ・ノートは思わずビクッと肩を上げる。

「早く言ってよ！そうだったわ！あれがあったのすっかり忘れてた！」

「ク……クインティアさん……」

ハープ・ノートは呆れ気味に汗を掻いている。

「あれは、確か参考物としてサテラポリスに回収されて、今は多分ヨイリー博士が持ってるから……ちょっと、ヨイリー博士のところに行ってくる！」

クイーン・ヴァルゴは駆けだした。

「あ……クイーン・ヴァルゴ！」

しかし、ハープ・ノートに呼びとめられた。

「今度はなに？」

「その前に、その腕のクリムゾンを壊しちゃったほうが……」

ハープ・ノートはそう言いながら、指をさしている。その指の先を辿ると、自分の腕の中に大量にある黒いクリムゾンがあった。クイーン・ヴァルゴはすごすごとノイズウェーブに向かった。

「……クインティアさんも意外とせっかちなところあるんだね……」

ハープ・ノートはそんなクイーン・ヴァルゴの後姿を見送りながら呟いた。

『ええ……まぁ……。って、そんなこと言ってないで、早く回収しないと！』

「そうね、ハープ！クインティアさんが今、腕にあるクリムゾンを片付けて装置を持ってくるまで、すこしでもわたしもクリムゾンを回収しておかないと！」

――――爆発まで、あと1時間――――

「ふう……ひとまず、こんなところかな……」

ノイズウェーブ内。そこではロックマンが、クイーン・ヴァルゴに負けず劣らずの量のクリムゾンを抱えている。ちなみに、今のロックマンは、もう探索は済ませたのでファイナライズをといてノーマルに戻っている。

「じゃあ、さっそく……」

ロックマンは腕のクリムゾンを空中に放った。クリムゾンは空中で静止している。

「ロックバスター！！」

無数のクリムゾンが次々にノイズに変わっていく。

『ビーストスイング！！』

ウォーロックが最後のクリムゾンを爪で破壊した。

「あ――――！！」

『へっへっへ、早いもん勝ちだぜ！』

「ったく……」

ロックマンは最後のクリムゾンを横取りされて、締りがなくなったのを悔しがった。なぜ爆弾処理がゲーム感覚になっているのだろうか。

「じゃあ、出ようか」

『物の中に生まれたノイズウェーブはウェーブアウトできねぇのが面倒だな……』

「えっと……あった！　出口だ！」

ロックマンはモザイク状に空間が割れている、出口を見つけた。そこに駆け寄ったが、くぐらずに立ち止まった。

『……？　どうした、スバル？』

「……」

ロックマンは無言で振り返り、そこに広がるノイズウェーブを見回した。

「ここだ……」

『はぁ？』

ウォーロックが怪訝そうに聞き返した。

「ここだよ！　ほら、グレイが昨日、去り際に使った、黒い穴！　その向こうの世界をどこかで見たことがあるって言ったよね！？　それがここだったんだ！」

『ここ……サボテンのノイズか？』

「い、いや、サボテンのノイズとは限らないけどさ……。どこかは知らないけど、ノイズウェーブにそっくりだった……」

『……確かに、似てるな……。しかしよ、仮にそれが合ってたとしたら、なんであいつはわざわざノイズウェーブに逃げ込むんだ？　第一あいつはノイズ耐性プログラムを持ってねぇから、そんなとこに入っていったらノイズにやられるんじゃねぇか！？』

ウォーロックの反論に少し考え込んでから、ロックマンは答えた。

「そうだけど……。でも、あいつはノイズチェンジやファイナライズを使えたから、ノイズ耐性もあるんじゃない！？」

『確かに、可能性がないとは言えねぇが……』

自分の考えは、間違っているとは思えなかった。だけど、それならなぜ？　という具合に別の分からないことが出てくる。考えても考えても謎が産まれるばかりだ。今が普段と同じひと時なら考えていても問題はないが、今は爆弾クリムゾンの処理中だ。

「……でも、不確かな情報だし、時間もないから、考えるのはこの爆弾騒動が収まってからにしよう……」

『そうだな……おし、クリムゾン回収の続きだ！』

「うん！」

――――――爆発まで、あと４５分――――――

21、黒き穴の向こう（後書き）

そういえば、ジェミニ・スパークは状況によって1人と数えてるときと2人と数えてるときがあるので、ご了承ください。

なんか、ハープ・ノートがクイーン・ヴァルゴを呼ぶ時、「クインティアさん」の方がしっくりくるのはなんででしょうか。

・・・スバルといい、ミソラといい、爆弾騒動なのに、余裕ですね・・・

22、見えない視線（前書き）

ＰＶ２０，０００アクセス、ユニーク２，０００人突破っていうか、今回８９６６文字とか、ナンデスカー（。Д。）

ＸＸ？、

ｌｏｏｋ　ｎｏｔ　ｓｅｅｎ

22、見えない視線

高いところが、好きだった。高いところに上ると、それまで見えなかったものが見えるし、空により近づけるから。見上げれば、青く澄んだ空が広がる。右の手のひらを空に向けて伸ばし、太陽を透かし見た。そうすると手のひらが黒く見えて輪郭のみが赤く見える。

――少女は、それまで、自然というものに触れ合ったことがなかった。彼女はずっと、暗いところにいたから。ずっと、命を狙われ続けていたから。だから、自然のすべてが彼女には新鮮でたまらなかった。朝、昼、夜。晴れ、曇り、雨。月の満ち欠け。春夏秋冬。森に、山に、川に、海。そこに生きる昆虫や動物、魚たち。そんな普通の人間にはどうでもいいことが、彼女には素晴らしいことに感じる。呼吸の1つ1つでさえ、とても素晴らしいことに感じる。だから、こんな岩山の頂上にそびえる大要塞の上にいても、彼女にとってはこの上なく清々しい環境だった。

WAXA日本支部。それが、少女が乗っている建物の名前だ。少女はその頂上に設置されている、かつてディーラーとの戦いでサテラポリスとWAXAが開発・使用した「コピーキャンセラー」発動用のパラボラアンテナの隣に寝そべっていた。太陽に透かしていた右手をぱたりと体の横に落として体を起こすと、その腰まで届く淡いピンクの髪がひらひらと揺れながら体についてきた。そのまま白いスカートの中の脚を折ってその場に座り込む。自身の髪よりも濃い、少し紫のかかったピンクのセーターのようにも見える上着を着たその少女は、両腕を後ろに開いて自分の上半身のつっかえ棒のように手をつき、首を上げてその黒い瞳で再び空を見上げた。

――なんで今、自分は生きているのだろう、と思う。力を持ってしまったばっかりに戦いに明け暮れ、力を持ってしまったばっかり

に命を狙われて。それでもそれを苦とも感じずに「人生」をまっとうしたのに、まだ生きている。ここまで生きながらえてしまうと、さすがに自分の境遇を嘆きたくなってくる。死すらも許されず、闘い続ける運命なのだろうか、と。でも、自分は嘆くわけにはいかない。自分のせいで傷つき、自分のせいで苦しみ、自分のせいで眠りについた者がいるのだから。その者のためになら、なんだってすると、誓ったのだから。

そんな彼女が、今ここで何をしているのか。それは、彼女の使命から来るものだった。かつてこの世の頂点を治めた者としての、自分で自分に課した使命。……この世の行く末に関わる者の力量の見定めと、監視、保護。そしてその、「この世の行く末」を見守ること。

そんな使命があるから、いつまでも大好きな高いところで、大好きな自然と戯れているわけにもいかない。彼女は名残惜しそうに空を見つめ直してから頭を垂れて、その手のひらを見つめた。

「……っ……」

と、急に彼女は何かに気付いたかのようにぴくっと眉を動かした。しばらく無言で何かを考えていたが、やがて穏やかに呟いた。

「……始めましょうか、あの子も例の場所から戻ってきたようですし……」

そう言いながら彼女は姿勢を立ち膝に切り替え、右腕を地に押し付け、目を閉じた。

「勝負です、ロックマン……」

「……ッ！？」

ロックマンが急に何かに気付いたように立ち止まった。きょろきょろと周りを見回すロックマンを見て、ウォーロックが彼の隣にウィザード・オンした。

『どうした、スバル？』

「ん、なんか、声が聞こえたような気がして……」

『声？』

ウォーロックが怪訝そうなか顔でロックマンを見つめた。

「そう、声。……ロックは？　何も聞こえなかったの？」

『……むしろ、本当に声が聞こえたのか聞き返したいくらいだぜ』

それを聞いてロックマンはちょっと下を向いて考えたが、やがて再び走り出した。

「……何だったのかは分からないけど、とにかく時間がないんだから後で考えよう……」

走りながら自分の考えを口にしたロックマンに、ウォーロックは頷いた。

『そうだな、「なんだかよく分からない声について考えてたら間に合わなくて爆発しました」じゃ、誰にも合わせる顔がないぜ』

ロックマンはそう言いながらも聞こえた声について考えていた。穏やかで、まるで全てを見通したような声だった。まるで、常にこちらを見ていて、こちらのことを全て熟知しているかのような、声。その声に戸惑いながらも、ロックマンは考えを爆弾クリムゾンへと無理やり向け直した。

現在、ロックマンたちは爆弾処理の大詰めを迎えていた。数の多さに最初は間に合わない雰囲気も漂っていたが、クインティアが持ってきたディーラーのころに使っていたクリムゾンを吸収する装置のお陰でかなり作業はスムーズに進んでいた。しかし、彼女がフルに活動して他の隊員が休むほど人材の無駄遣いはないだろう。だから、彼女が向かっていない地点の電脳のクリムゾンを少しでも他の電波人間が集めているのだ。そして、ロックマンが向かったのは、メインコンピュータの電脳にあるクリムゾン。他の電子機器が爆発してもメインコンピュータだけは爆発させるわけにはいかない。そういう意味で一番危険なクリムゾンを担当区域のリーダーのロックマンが直接収集しに来たわけだ。

メインコンピュータの電脳にサイバーインしたロックマンは、その奥地を目指した。こともあろうに、昨日コピー体たちと初めて遭遇した、メインコンピュータの電脳の最奥、そこにクリムゾンが設置されているというのが自身でブラックエースになって探索したその結果であった。そこはメインコンピュータの核となる重要なプログラムも多数存在している。そんな場所にクリムゾンがあるのは非常

に厄介な話であった。

「昨日の戦闘の傷跡とか、そのままだね……」

ロックマンが辺りを見回しながら呟いた。電脳の床のあちこちが刀で切りつけたような切り傷や、焼け焦げ（おそらくそれはオックス・ファイアとジャック・コーヴァスのせいだと思われるが）がまだ生々しく残っていた。ヨイリー博士曰く、ここの電脳は直すのに日単位で時間がかかるらしい。ある意味さすがはニホンが世界に誇るコンピュータ、といったところか。高性能であるが故に精密で、逆に直すのには時間がかかると言うわけだ。

『それはオレたちが気にすることじゃねぇだろ。ヨイリーのばあさんがやってくれるさ。ほら、そろそろ着くぜ』

言われてハンターの地図を確認すれば、確かにずいぶんとメインコンピュータの電脳の最奥に近づいていた。もうクリムゾンを直線距離で目視できるだろう、と思われるほどに。ロックマンは顔を上げて行く手に目を凝らした。するとそこには、確かに黒いクリムゾンがある。しかし、それだけではなかった。

「な、なに、アレ……？」

見ると、問題のクリムゾンの周りに光が見える。遠目には、クリムゾンの周りの空間が輝いているようにも見えたが、数メートルと離れないところまで近づいてみると、違った。クリムゾンくらいの大きさのある、光の球が3つ、クリムゾンを取り囲むようにそれの周りを回転していた。まるで地球の周りを3つの月が公転しているかのような光景だ。3つの光の球は、それぞれ赤色、青色、緑色をしている。

『なんだぁ？』

ウォーロックも不思議そうな声を上げた。

『なんだか分からんが、周りのヤツごと壊しちまおうぜ！』

ウォーロックの意見に即座にロックマンが否定する。

「だ、ダメだよ！　これがなんなのか分からない以上は――」

《来ましたね、ロックマン》

「！！？」

急に声が聞こえて、ロックマンはビクッと肩を上げた。そして、素早く首を動かして周りを見回したが、誰もいなかった。

《フフ、探しても、私はそこにはいませんよ》

再び声が聞こえる。２回目を聞いて、ロックマンは気付いた。

「同じだ、さっきの声と」

もちろん、さっき聞こえた声そのものが幻聴だったかもしれない、と思えて来るほど聞こえ方があいまいだった。だから、断定はできないが今聞こえた声は、さっきのそれとかなり近いものを持っていると思う。穏やかで、全てを見透かしたような、その感じが似ているのであった。

『あぁ？　この声が、お前がさっき聞いた声だってのか？』

「こ、今度はロックにも聞こえたの？」

《それはそうです。今度は、私はあなた方2人に声を聞かせたのですから》

どうやら、その声の主はこちらが見えていて、会話も聞こえているようだ。

『あん？　「聞かせた」って、どういうことだよ？』

《今、私が語りかけているのは、あなた方の耳ではなく、心なのです。ですから、私が聞かせようとした者にしかこの声は聞こえません。俗に言う、『思念通話』、ですね》

テレパシーのようなものだろうか、とロックマンは思った。聞こえ方は、リレーション機能（ファンク）の通信に近い。心に念じた声を相手に伝えるリレーション機能（ファンク）も、伝えようとした相手にしか声は届かない。その科学的に再現されたテレパシーとかなり似ている、ということは、これは本物、ということなのだろうか？

「……それで、あなたは今どこに？」

《遠いところから、話しかけています。いまは直接お会いする必要はありませんから》

『だぁぁ！　いろんな意味でシリウスみたいなやつだな！　姿を見せやがれ！』

ウォーロックの言う「いろんな意味でシリウスみたい」というのは姿を見せずに高みの見物ばかりしているところや、彼の言葉で言う「ナヨナヨした喋り方」のことだろう。そういうところが、彼には癪に障るのだ。

「……確かに、シリウスみたいだ。感じる力の大きさも」

《……！！》

そう呟いたロックマンに、「声」は息を飲んだ。

《……フフ、さすがはロックマンですね……》

そう言った「声」には何かを懐かしむような感じがあった。

「……あなたは、何者なんですか？　目的は？」

《そうですね、長話もよくないです。要件を言いましょう。……とは言いましても、要件はすでに伝えてあるのですが、聞こえませんでしたか？》

ロックマンは、ピクリと眉を動かす。そうか、やっぱりこの声が言うようにあれは幻聴なんかじゃなかったんだ。

「……『勝負です、ロックマン……』ですか？」

《はい、それです。聞こえていましたか》

「……なんで勝負なんてしなきゃいけないんですか？」

ロックマンが怪訝そうに聞くと、声は即答した。

《力量試し、ですよ》

「力量？」

《そうです。この世の命運をかけた戦いに立ち向かえる力を持つか否か、のね》

『あぁ？　てめぇ、何様だ！？　それに、闘う理由なんてねぇじゃねぇかよ！』

「……！？」

あくまで自然に聞こえたが、ロックマンは今のウォーロックのいきり立った発言に違和感を覚えた。――闘う理由。いつもバトルを楽しむ彼は、闘う理由なんていちいち気にしていないはずだ。なのに、今回はそうでない理由。ロックマンは、自身の隣にいるウォーロックの顔を見て、すぐさまそれを理解した。冷や汗を掻き、あからさまに身構えている。彼もロックマン同様、声の持ち主の力量を敏感に感じ取っていたのだ。勝てない戦いは避けるべき、という考えなのだろう。

《闘う理由、ですか。なら、こういうのはどうでしょう？》

「『……？』」

電波人間とウィザードが同時に身構えた。

《あなた方の目の前にあるこのクリムゾン。私はこれを全力で守り

ます。あなた方が私の守りを貫いてクリムゾンを破壊できればあなた方の勝ち》

「……！！！」

《逆に私がこれを守り抜けばここが爆発、あなた方の負けです。これなら、あなた方は闘う理由にもなりますし、私に応じざるを得ませんよね？》

話し手が目の前にいれば、確実にほくそ笑んでいただろう、と思えて来るような勝ち誇った声でそう「声」は言った。

『クッ、制限時間付きの生か死かの勝負、ってわけかよ。やってくれるじゃねぇか』

ウォーロックが悔しげに呟く。

「やるしか、なさそうだね……」

ロックマンはなんとか戦いを回避してクリムゾンを回収する方法を模索した末、悔しげに言った。彼は左腕をロックバスターに変えて叫んだ。

「いくぞっ！！」

――――ＷＡＸＡの外の岩壁にあるノイズウェーブ。そこの中ではハ

ープ・ノートが周りにクリムゾンを浮かべていた。集めたクリムゾンを破壊しに来たのだ。

「パルスソング！」

ハートの音波がクリムゾンを破壊していく。クリムゾンは破壊されては内部からノイズを放出し、空間に溶けるように消えていく。

「これでよしっ！！」

ハープ・ノートは最後のクリムゾンを破壊してからガッツポーズをして言った。

『……それにしても、不気味なところよね、ノイズウェーブって』

ハープが辺りを見回しながら呟いた。

「そうだね……アシッド・エースのかけらを集めたときに入ったけど……改めてみるとあまり積極的に入りたいところではないね……」

『早く出ましょ！こんなところ！』

「うん！」

ハープ・ノートは駆けだしたが、立ち止まって後ろを向いた。

「……？」

『どうしたの、ミソラ？』

ハープが怪訝そうに問う。

「今、誰かいたような……？」

『え？　だ、誰もいないじゃない……？』

「……気のせいかな？」

「ロックバスター！」
「ステルスレーザー！」
「オックスファイア！」
「「ロケットナックル！」」
「クレイブクロー！」
「アクアウェーブ！」

7人の電波体のそれぞれの攻撃がクリムゾンに迫ったが、赤・青・緑の3つの光球がクリムゾンの周りを高速回転してその全てを弾いた。

「くっ、なんなの、これ……？」

クイーン・ヴァルゴがいらいらと呟いた。
ロックマンは最初1人で3つの光球と闘っていた。しかし、どんなパワーで攻撃しても、どんな速度で攻撃しても、3つの光球が素早く動いて攻撃を打ち消してしまう。そうするうちに他のメンバーが他のクリムゾンの処理を全て終え、最後の1つとなったクリムゾン

の処理へと集まって来たのだ。

「あと、5分……。もはや、クリムゾンを回収してノイズウェーブに持って行くほどの時間もないな……。メインコンピュータの電脳にノイズはあんまり流したくないんだが、背に腹は代えられない。なんとしてもここでこのクリムゾンを破壊するぞ！　メインコンピュータそのものが破壊されるよりマシだ！」

「「了解ッ！！」」

アシッド・エースの声に他の6人が叫ぶように応じた。

《その前に、破壊できますか？　……フフフ……》

「くっそ、舐めやがって！　アンガーパンチ！」

ガキンッ！！

オックス・ファイアの拳も、赤い光球に阻まれた。

「くっ、なんでこんなに堅いんだ、これ！」

その時、その赤い光球がより紅く輝きだした。

「ッ！　ゴン太、危ないッ！」

「くそっ！」

オックス・ファイアはとっさに周波数変換で距離をとった。

ゴッ！！

と、その瞬間に紅い光球からレーザーが放出され、オックス・ファイアに迫った。

「ぐぅっ！！」

オックス・ファイアはそれを避けることなく、腕を胸の前でクロスさせて受けた。

「スバル、いまだ！」

「分かってる！」

レーザーを受け続けているオックス・ファイアの左隣をロックマンが駆け抜ける。腕にはすでにソードが宿っている。

《……！！》

それを見た声の主の少女は、緑と青の光球がそれぞれ別の方向からレーザーをロックマンに向け発射した。

ドンッ！

それらのレーザーはそれぞれ黄色く輝く刀に阻まれた。

「ジェミニ・スパーク！」

「喋ってる暇あったら走れ、ロックマン！」

ジェミニ・スパークBに言われて軽く頷いたロックマンはさらに走るスピードを上げた。

（3人が光球の動きを止めてくれてる今なら……ッ！！）

ロックマンはソードを振り上げながらクリムゾンの元へと迫った。

「これで終わりだ！」

ブンッ！！

ガキン！！

「！！？」

クリムゾンに向けて振るったソードの刃が粉々に砕けた。そして、ロックマンの視界いっぱいに3色の光が満ちる。

「ぐぁあっ！！」

ロックマンは3本のレーザーを食らって数メートル後ろへ吹っ飛んだ。

《惜しかったですね……。でも、誰も1つの光球から1つのレーザーしか撃てない、なんて言ってませんよ》

オックス・ファイアとジェミニ・スパーク2人に向けてレーザーを放出したまま、光球はロックマンのソードに対してもレーザーを放出して破壊、ロックマン自体も攻撃したのだ。

「く……くそ……っ」

ロックマンがよろよろと立ち上がる。そんな彼にたたみかけるように「声」が言った。

《……あと、2分、というところですね……。このまま防ぎ切ってもいいのですが……私も防いでばかりではつまりません。今度はこちらから行かせてもらいますよ》

「……ッ!?」

その声の言葉が終わるや否や、3つの光球が今までにないくらい激しい光を放ち始めた。アシッド・エースはそれの異常さを感じ取って、すぐさま反応した。

「……まずい、避け――――

《……ジェノサイドレイ!!》

しかし、遅かった。3つのレーザーが3方向に放出され、それらが電脳の地面にぶつかると、それぞれの地点から衝撃波による爆発が生まれ、辺りは3つの爆風で埋め尽くされた。

「「うわぁぁあああ!!」」

……気がつくと、7人全員が倒れていた。爆風から三つの光球が守ったようで、クリムゾンは傷1つなかった。ロックマンをはじめとする全員が悔しげに地に伏し、クリムゾンとその周りに浮かぶ光球を見つめている。

《……フフ、終わりですか？　あと1分もありませんよ？》

「くそ、体が……動かない……」

ジャック・コーヴァスが悔しげに呟く。

「こ、こんなところで諦めて――――

声の元をたどってみれば、ロックマンが地に伏しながら左腕のバスターをクリムゾンに向け、銃口には黄緑の光が集中していた。

――――たまるかぁぁあああッ！！」

ドォン！！

ロックバスターからチャージショットが放たれてクリムゾンへと迫った。

バチン！！

しかし、やはりそれも光球に弾かれた。

「くそ……ッ！」

ロックマンが悔しげに地面を拳で叩いた。

《諦めませんか、さすがですね。でも……》

でも、の続きは誰もが分かった。任務開始前にアシッドが全員に送ったクリムゾン爆発までのカウントダウンデータが、あと１０秒を知らせていた。

《あと、９，８，７，６，５……》

「く……っ、こんなところで……！！」

誰もが悔しがるが、動ける者は誰もいなかった。

《……４，３，２，１……》

《０（ゼロ）ッ！！》

ドンッ！！

「……！！？」

見れば、３つの光球がレーザーをクリムゾンめがけて放っていた。
レーザーを食らったクリムゾンはノイズを放出し、「ジジジ……」
という無機質な音をたてながら消えて行った。

「……な、なんのつもりだよ……！？」

《言ったはずです、私の目的はロックマンの力量試しだと。だから、
ここを爆破するつもりなど毛頭ないのです。……まぁ、途中からあ
なた方全員の力量を見ていたわけですが》

「な、なんだよ、それ……！？」

《クリムゾンは、あなた方を本気で闘わせるための口実に使っただ
けです。あなた方の本気を見たいがために、『私の守りを突破でき
なければこのクリムゾンでここを爆破させる』などと嘘をつきまし
た。人間は追い詰められたときに真の力を出すことができますし、
またそのときにその人の本質が現れますからね。ですから、あなた
方に嘘ついたこと、多大な迷惑をかけたこと、そして攻撃したこと
については謝罪します、すみませんでした》

「あ……いえ……」

それまで敵だと扱っていた者に急に謝罪され、全員が戸惑っていた。

《私が与えた傷は、私がいま治します》

「！？」

目の前に浮かんでいた３つの光球それぞれが７つに分裂して、７人
の電波人間の周りに飛んできた。電波人間１人につき３つの、３色

の光球が向かい、彼らの周りをくるくると回転し始めた。すると、不思議な感覚が彼らを支配し、次の瞬間には何事もなかったかのように全員が回復していた。

「……な、直った……」

《……これで、もう大丈夫でしょう。しかし、1つ言わせてもらえれば、まだまだ皆さんは力不足です。それでは今回メインコンピュータを守り切れなかったように、世界は守りきれないでしょう》

「くっ……」

言い返したいが、守れなかった事実をつき付けられてなにも言い返せなかった。

《……敵は、グレイだけだと思ったら大間違いです。他にも世界を脅かす危険要素はたくさんはびこっています。世界を、大切な者を守りたいと願うなら、もっと力をつけなければ……全てを失うことになりますよ》

「……」

《……伝えることは全て伝えました。では、私はこれで……》

「ま、待って！　あなたは誰なの!?」

ロックマンが叫ぶと、「声」は一瞬の沈黙ののち、答えた。

《私は、かつてこの世が生み出した世界の頂点に立った者、とだけ言っておきましょうか……》

「……ど、どういうこと!?」

しかし、「声」はロックマンを無視した。

《……いつでも、見守っていますよ、ロックマン……。この世を救う可能性があるのは、あなたと「音を究めし者」、そしてもう一組の英雄とその支援者（サポーター）しかいないのですから……》

そして、声は、消えた。

「……星河スバル……過去3回に渡って世界を守った英雄……。確かに、その力は本物ですね……。しかし、まだ彼の中に眠る力は開花していない……。それを開花できなければ……」

ＷＡＸＡの頂上で、ピンクの長い髪の少女は唇を噛んだ。

「……この世に、幸が有らんことを……」

その言葉を残して、少女は消えた。あとには静けさのみが残された。

「……」

ハープ・ノートはノイズウェーブの出口の前で再び振り返っていた。

『どうしたのよ、ミソラ！　そこには何もないでしょ！？』

「……いや、何かいる！　出て来なさい！」

しかし、ノイズウェーブは静まりかえっている。

『ミソラ、やっぱり……』

ハープ・ノートはハープの言葉を無視した。

「そっちが出てこないんなら力づくで！　ショックノート！！」

ハープ・ノートは何もないところに音符を放った。音符はそのままノイズウェーブの奥へ飛んで行った。

『……何にも当たらなかったわね……』

ハープがまるでミソラをなだめるように言った。

「避けられたの！　絶対誰かいる！　早く出て――――

その時、青白い衝撃波が何もないところから放たれた。

「！！　くっ！！」

ハープ・ノートは衝撃波を横に飛んで避けた。

ブンッ！！

そこへ、青白い刀が振り下ろされた。

「！！！」

ハープ・ノートは目を見開いた。

23、ナゾガナゾヲヨブ（前書き）

XX？、

THE MYSTERY CALLS THE MYSTERY.

23、ナゾガナゾヲヨブ

「シラハドリッ！！」

ハープ・ノートは刀を手のひらで挟んで受け止めた。

「よく反応するもんだね、驚きだよ」

「……バトルカード、ステルスレーザー！！」

ハープ・ノートの頭上にステルスが現れ、刀の持ち主に向かってレーザーを放った。相手はそれを避けてハープ・ノートと距離を取った。そのおかげで、ハープ・ノートは相手を目視できた。その姿は――――

「ス……スバルくんっ！？」

そう。スバルだった。手には先ほど自分を攻撃した青白い刀があるものの、それを除けばスバルそのものだった。

『あなた……グレイね』

ハープが言った。

「そう。やっぱり気付いた？」

グレイが不敵な笑みをこぼしながら言った。

『そりゃそうでしょ！？　あなたたち全員、人間体と電波体の電波変換した姿が偽者だって、あなた自身言ってたじゃない！』

ハープのその声に、グレイはピクリと眉を上げた。

「その偽者と僕を混同しないでくれるか？　僕とそいつらは根本的に違うんだ」

『……どこが違うのよ！？』

「じゃあ、聞くけど、なんで僕は今、電波変換せずにノイズウェーブに立ってると思う？」

『……！！』

ハープ・ノートとそのウィザードが目を見開く。そういえばそうだ。人間のままウェーブロードに入る方法はあることはある。しかし、そのためには何か特殊な方法が必要だ。つまり、彼もなにか特殊なものを持っていることになる。

「ほらね、違うだろ？　そりゃそうだ、偽者は僕が作ったんだから」

『……なんとなくそうじゃないかって思ってたわ。でも、それならあなた自身はどうやって――』

「ハープ・ノート？　何かあったの？」

ロックマンからの通信だった。……謎の声と光球との戦いのために、メインコンピュータの電脳にはハープ・ノート以外の全員が集まっていた。ハープ・ノートにもクリムゾン爆発までのカウンターデータは送られていたから、本当にぎりぎりだったことは彼女にも分かっていたはずだ。なのに、なぜ彼女だけ集まらなかったのか、それを聞くためにロックマンは通信してきたのだ。

「ロックマン！　ねぇ、聞いて！　今、目の前にグレイがいるの！」

「ッ！！　なんだって!?」

「ノイズウェーブに潜んでたの！」

「あ……暁さん！」

ロックマンはすぐさまトランスメンバーのリーダー格のアシッド・エースに指令を仰いだ。

「聞いてたぜ……。ハープ・ノート、オレ達もすぐにそっちへ向かう！　なるべく戦闘は避けて、持ちこたえろ！」

「はい！」

「くっ！！」

ロックマンは通信を切るとすぐさまサイバーアウトした。他のトランスメンバーもロックマンに続いてメインコンピュータの電脳からサイバーアウトしてハープ・ノートの元へと向かう。

「目的が全く分からないな……」

アシッド・エースが高速移動をしながら言った。

「爆弾仕掛けた犯人がなんであんなところにいるんだ？」

『なんだか、目的が見えないところも含めて愉快犯みたいな行動を起こしますね……奴ら』

アシッドがシドウの後ろについて空間を滑るように走りながら言った。

「愉快犯、か……。楽しんでるって言いたいのか、アシッド？」

『その可能性もあるかと』

「……」

愉快犯、それで片付けていいのだろうか、とシドウは思う。情報がまだ少なすぎるこの状況でそう決めつけるのは早いと思う。

「……ひとまずはハープ・ノートに加勢するのを優先か……」

「終わったか？　仲間同士のおしゃべりは」

偽スバル暇そうに呟いた。

「……待ってたの？」

「まぁね、会話の隙なんてつかなくても、やろうと思えばすぐ殺れるからね」

「……」

ハープ・ノートは、先ほどシドウに言われたことを頭の中に反芻していた。

「なるべく戦闘は避けて、持ちこたえろ！」

「さっきの続きだけど、あなた自身は、どうやって生まれたの！？」

会話で時間を稼がないと。そう思って、ハープ・ノートは質問をする。

「僕かい？　そうだなあ……母さんかな」

『なめてるの……？』

ハープがイラッとして言った。

「なめてなんかないさ、本当に星河あかねから産まれたんだって」

『……それも偽者？』

「本物だよ」

『あなた、冗談もいい加減にしなさい！』

ハープは、なぜかいきり立って話す。時間を稼ぎたいハープ・ノートにとってこれは問題だった。敵を挑発し煽（あお）ればそれだけ戦闘開始までの時間が早くなってしまうだろう。

「待ってよ、ハープ。キミが勝手に冗談って判断しているだけじゃないか！」

グレイは白々しくハープに答える。

『「判断」じゃない！「事実」よ！』

「ハープ、落ち着いて！」

ハープ・ノートが耐えかねてハープを制止した。ハープがそれで黙ったのを見て、ハープ・ノートはなるべく優しくグレイに問いかけた。

「……ねぇ、グレイ？　話は変わるけど、そのソード、何？　バトルカードじゃないよね？」

ハープ・ノートは話を長引かせるために、別の話に切り替えた。

「そうだよ！」

「じゃあ、なんなの！？」

「それは食らって確かめな！」

突然背後から声がした。グレイはハープ・ノートの魂胆を既に理解していたのだ。

「！！！」

青白い閃光がハープ・ノートに迫った。

ギィン！

「大丈夫！？　ハープ・ノート！！」

「ロックマン！」

ロックマンが偽スバルのソードをワイドソードで止めていた。

「みんな！」

「ロックオンソード！」
「「エレキソード！」」
「フェザーシックル！」

ロックマンが叫ぶと、４本の刃が偽スバルに向かって振り下ろされた。

ギィィィン！

「「！？」」

４本の刃全てが止められていた。４本の、宙に浮く青白いソードによって。

「な……なんだ、これは……？」

偽スバル本体はロックマンと鍔迫り合いを続けている。見えない人間が刀を握り、４人のソードを受け止めているようであった。

「くっ！！」

アシッド・エース、ジェミニ・スパーク、ジャック・コーヴァス、ロックマンはそれぞれ自分のソードを受け止めている刀を押し返してハープ・ノートの周りに彼女を守るように降り立った。鍔迫り合いの相手を失った４本のソードはその場で消えた。

「なんだったんだ……？」

ジャック・コーヴァスが不思議そうに呟く。

「ふぅ、これで全員そろったね」

8人は偽スバルを睨みつけた。

「これだけ集まったら、こっちもやらなきゃだめかな？」

そう言うと、偽スバルはディスプレイパーツを収納したハンターVGを取り出して、左腕に装着した。マージノイズを使うときのように、その左腕を顔の前に掲げて叫んだ。

「電波変換！　星河スバル、オン・エア！」

光が偽スバルを包み、消えるとロックマン……いや、グレイが立っていた。

「……で、グレイの完成、ってわけかよ……」

アシッド・エースの声に応えるようにグレイはフッと笑った。

「やぁ、また会ったね」

『うるせぇ、白々しくすんな！』

ウォーロックが頭に怒りマークを浮かべながら叫んだ。対してロックマンはグレイに背を向け、ハープ・ノートをまっすぐに見つめていた。

「……大丈夫？ミソラちゃん」

「うん、……はぁ、はぁ、大丈夫、だよ……」

「……！？　ミソラちゃん？」

『ミソラ……？』

ロックマン、ハープがハープ・ノートを見ると、胸を手で押さえて苦しそうにしている。

「ホントに大丈夫なの！？」

「う……ん……。ちょっと、息苦しいだけ……」

ロックマンはグレイをキッと睨みつけた。

「ミソラちゃんに何をし……っ……！！」

ロックマンは膝をついた。苦しそうに顔をゆがめながらグレイを睨みつけている。

『スバル！？』

「……ボクもだ……。なんだか、息苦しい……」

『グレイ！　スバルやミソラに何をした！？』

今度はウォーロックがキッとグレイを睨みつける。

「……何もしてないけど？」

『そんなわけねぇだろ！お前が何かした以外にねぇだろ！』

「ロック……大丈夫、だよ……」

ロックマンはよろよろと立ちあがった。

「息苦しい、とは言っても戦いには支障はなさそうだし。慣れたよ」

「うん……なんとかなりそう……」

ハープ・ノートもふらふらしながらも立ち上がる。

『2人とも、無理だけはしちゃだめよ……？』

ハープが心配そうに言った。

「うん、もう平気！　いけるよ！」

ハープ・ノートが応える。ロックマンはグレイに向き直った。

「……グレイ、1つ教えてくれないか？」

「……まぁ、質問によってはね」

「偽者はどうやって作ったんだ？」

「……いいよ、答えてやる。別にそんなところを隠してももう意味

ないしね。……偽者がメテオGと入れ替わりに産まれた、と言うのは話したよね？」

ロックマンはうなずいた。

「『産まれた』、じゃなくて『作った』でしょ」

ハープ・ノートが言った。

「え？　作った？」

「うん、偽者はコイツが作ったんだって」

ハープ・ノートがロックマンの方を向いてうなずいた。グレイはそれを見て溜息混じりに応じた。

「分かった、分かった。僕が偽者を作った。その時に使ったのが、メテオGの中にあったお前らの記録（ログ）だ」

「記録（ログ）・・・だって？」

「そう、メテオGはサーバーだっていうのは知ってるだろ？　そのサーバーには地球にいるウィザードや電波人間のデータ、さらには電波変換などの特殊な力を持った人間などのデータが記録されていたんだ」

『……そういえば、シリウスも「メテオGの中のロックマンのログに興味を持った」とか言ってたな』

ウォーロックが思い出したように言い、グレイはうなずきながら続

きを言った。

「……そして、メテオGが霧散した時に内部のデータがノイズとしてはじけ飛んだ。その宇宙空間に漂っていたデータの混ざったノイズを元に、ボクはコピー体を作った。人間のデータを元にクローン体を生み出し、ウィザードのデータを元にコピー体を生み出し、さらにそいつらを電波変換させてできる電波人間に同じ電波人間のデータをインストールさせてな。そうすれば、より強いコピー体を生み出せると踏んだ」

おそらく、電波人間のデータをインストールさせたのは言ってみれば接着剤のようなものなのだろう。メテオGの中のデータから作りだした人間とウィザードを電波変換させ、さらにそこに、同じくメテオGの中のデータである電波人間のデータをインストールさせることで人間とウィザードの双方のより強固な結合を図ったというわけだ。

「だけど、一つこれには弱点があった。元々電波人間には『ウェーブコア』と呼ばれる電波エネルギーをため込んで全身に送りコントロールする、人間で言う心臓がある。ここに電波人間のデータをインストールしたせいで、2つ目のコア、『クリムゾンコア』ができてしまった。二つのコア、それらの相乗効果でメテオGから作った電波人間は本物よりも強い力を手にする代わりに、弱点も増えてしまった。どの電波人間にも存在する『ウェーブコア』とメテオGのデータから作った電波人間が持つ『クリムゾンコア』、このどちらが破壊されても即、電波人間はデリートしてしまう。その上、『クリムゾン・コア』はご丁寧に電波人間のエンブレムの内側に設置と来たもんだ。これじゃ弱点を晒して戦ってるようなもんだ」

つまり、その「クリムゾン・コア」が昨日の戦いでハープ・ノート

が気付いたコピー体たちの弱点、というわけだ。

「……まぁ、コピーをそんな陳腐なデータから作ったのは単なる実験だがな。あのデータを使うとどういうコピーが生まれるのか、のな」

「……じゃあ、昨日戦いを挑んできたのは実験のため？」

ロックマンが口を開く。ようやく、コピー体たちの謎が分かり始めていた。うまく行けば、ここからグレイのことも分かるかもしれない。

「それだけじゃない。爆弾を仕掛ける目的もあったし、お前らの実力を確かめる目的もあった」

「……じゃあ、その爆弾はなんで仕掛けたの！？」

やはり、最初から分からないのが爆弾を仕掛ける目的だ。単に敵の総本山の爆破と受け取ってしまえばそれまでだが、それにしては爆弾の位置が分かりやすぎた。それに、本当に爆破する目的で仕掛けたのなら、制限時間をもっと早めてさっさと爆破してしまえばいい。仕掛けた時間も考慮に入れれば１日ほども長い制限時間を設ける理由は、やはり別にあるように思える。

「……時間稼ぎ、といえば伝わるか？」

『はぁ！？どういうことだよ！？』

「自分で考えな」

グレイはにやりと笑っていった。ウォーロックは顔をゆがめた。――こいつ、自分の起こす謎の行動に悩む自分たちを見て楽しんでやがる。

「……まぁ、それに――――

ダンッ！！

グレイは腕を地面に叩き付けた。すると、グレイの目の前の地面が白く、丸く光り、その丸い円から光の柱が立ち上った。

「うっ！！！」

ハープ・ノートが突然跪き、胸を押さえた。

「はぁ、はぁ、はぁ！」

さっきよりも息が荒く、過呼吸並みである。

「ハープ・ノート！？　しっかり！！」

ロックマンはハープ・ノートをいたわるように彼女の両肩に両手を置いた。

「……コピーなんて、自分で普通に作れるんだけどね」

グレイの声に呼応するように、光の柱が細くなって消えた。柱が消えた後には人影があった。

「……え！！？」

ロックマンは目を見開いた。なぜなら、その人影の持ち主をロックマンはよく知っていたからだ。

「う……くっ……」

ドサッ……

ついにハープ・ノートは気絶して仰向けに倒れてしまった。

「！！　ハープ・ノート！！」

ロックマンはハープ・ノートの上体を助け起こし、再び柱から出てきた人影に見上げた。

その人間はうつむき、目を閉じている。赤紫の髪に、ピンクの服、緑の短パン。

その姿はまるで――――

「ミソラちゃん！？」

23、ナゾガナゾヲヨブ（後書き）

ちなみに、グレイの電波変換の掛け声が「トランスコード！」じゃなかったのは、トランスコードによる電波変換はＷＡＸＡ公認の電波変換のみで、彼の場合は非公認の電波変換だったからです。まぁ、分かってるかもしれませんが。このさきの展開でも、たまにこの「電波変換！」のほうの掛け声が出て来ますが、それらもすべてこういう理由からである、ということを覚えておいてください。

２４、ラソミとルバス（前書き）

ＸＸ？、

Ｇｒａｙ　&ａｍｐ；　Ｓｏｐｒａ

24、ラソミとルバス

「ミソラちゃんの……コピー？」

ロックマンが驚いた表情のまま呟く。

「その通り、見りゃ分かるだろ」

柱から出てきたミソラは目を開き、緑の瞳でロックマンを見た。

「……ふぅ……疲れた」

「何疲れてんだよ」

「そりゃ疲れるよ、グレイ！　わたし、たった今作られたんだよ？」

それは疲労と言うより、まだ産まれたばかりで体力がそれほど備わっていない、ということなのだろう。

「分かった、分かった。早く電波変換しとけ」

「はぁ……作られてすぐの電波変換も疲れるんだけどなぁ……分かった」

偽ミソラは憂鬱そうにポケットからハンターを取り出して腕に装着した。そしてそれをノイズウェーブの空へと掲げて叫ぶ。

「電波変換！　響ミソラ、オン・エア！！」

偽ミソラはピンクの光に包まれ、ハープ・ノートに電波変換した。

『偽ロックマンと偽ハープ・ノート、そろい踏みってわけかよ……』

「おい、グレイ！ミソラちゃんに何をした！？」

ロックマンが血相を変えて言った。

「だから言ったろ！？　何もしてねぇって！」

「くっ……」

「あいつ……あんな簡単に偽者を作っちまうなんて……」

ウォーロックが憎々しげに言った。それに気付いたグレイは答えた。

「……メテオGのデータを元に作ったコピーは本物より強くなるが、弱点がある時点で役立たずのゴミだ」

「……！！」

「そんなやつら使うぐらいなら、ボクのやつを使った方が早い。ボクの作る偽者は、本物と同じ力になる代わりに弱点はない」

「……クイーン・ヴァルゴ」

ロックマンはグレイを睨みつけたまま、話しかけた。

「なに？」

「ミソラちゃん……頼める？」

「ええ……」

クイーン・ヴァルゴは前に進み出た。

パチン！

辺りに指を鳴らす音が響いた。

すると、クイーン・ヴァルゴの周りに青白い壁が現れ、四方を囲んだ。その壁は、電話ボックスに酷似している。

「……！！　な……なにこれ！？」

クイーン・ヴァルゴが驚いたように辺りを見回している。

「クイーン・ヴァルゴ！」

アシッド・エースが彼女の方に駆けだすのと同時にグレイが動いた。

「おぉ～っと、アシッド・エース、それにお前らもだ」

再び指が鳴らされ、ロックマンとハープ・ノート以外のトランスメンバーが壁に囲まれた。

「くっ……！　なんだ、これは！」

「その壁は、そもそもお前らには破壊は無理だ。それに、そんなにギリギリ入れる程度のサイズじゃ、まともに攻撃すらできないだろ？」

そんなグレイの言葉に、オックス・ファイアは抗おうとした。

「うぉぉぉおっ、やってやる！　ファイア――――

「やめろ！　オックス・ファイア！」

しかし、オックス・ファイアはアシッド・エースを無視した。

「――――ブレス！！」

オックス・ファイアの口から炎が放出された。その炎はオックス・ファイアを取り囲む壁に跳ね返され、その電話ボックスの中は炎でいっぱいになった。

「……ったぁ～、ゴン太のやつ～……」

アシッド・エースはあきれたように額に片手を押し当ててうつむいた。壁の中の炎が消えると、黒こげのオックス・ファイアがげっそりしていた。

「……とまぁ、あんな感じになるから、やめとけ。悔しいが」

「すっげぇ反面教師っぷりだな……」

ジェミニ・スパークBが、こちらもあきれたようにオックス・ファイアに白い目を向けた。

こうして、壁の中にいないのはロックマンと気絶したハープ・ノートのみとなった。

「何をする気だ!?みんなを出せ!」

ロックマンが、ハープ・ノートを助け起こした姿勢のまま、いきり立って叫んだ。

「邪魔だったんでな、こうさせてもらった。……ボクと戦え、ロックマン」

「は？　何を言って……」

「だから、一対一で戦えって言ってんだよ。こっちもハープ・ノートは下がらせるからさ」

そう言いながら、すでに偽ハープ・ノートは少し離れたところからこちらを見ていた。

「……いいよ、ボクが勝って、ミソラちゃんも、みんなも助けてみせる」

そう言ったスバルの瞳は、怒りに燃えていた。

「なんだ、怒ってるのか」

「当たり前だ!!　みんなをこんな目にあわされて、悔しくないわけがない!!」

「……無理だな、お前はボクには勝てない」

「そんなの、やってみなきゃ分からないじゃないか!」

「……力が使えないお前にボクを倒すことは物理的に不可能だ。力が使えるボクにはね」

「物理的に・・・？わけが――――」

「分からないんなら、戦って分からせてやるよ！」

グレイはそう言いながら大きく跳躍して手にした青白い刀でロックマンに切りかかった。

「シールド！」

ギィィィン！

シールドと刀の間に火花が散った。

「チャージショット！」

バスターを放つと、グレイは再び跳躍して後退した。

ロックマンはハープ・ノートを背中と膝の裏に腕を回して持ち上げて運び、クイーン・ヴァルゴが入っている電話ボックスを背もたれにして座らせた。そして、グレイを振りかえり、ものすごい形相でにらんだ。

「おー、怖い、怖い」

「……マージノイズ！コーヴァス×オックス！！」

ロックマンは頭に大きな角があり、全体的に黒い姿に変わった。

「ショッキングフレア！」

グレイは紫の炎を避けた。その隙に、ロックマンはインビジブルで姿を隠し、グレイの背後に回った。

「バトルカード、アンガーファイア！」

グレイの背後から巨大な火球が放たれる。

「もらった！！」

ドゴォォン！！

しかし、グレイは素早く手にしたソードを背後に回して防いだ。

「！！」

「……なるほど？　さっきシールドで防いだのも、炎系のノイズにチェンジしたのも、このためか」

グレイは不気味に赤く光る瞳のみを背後のロックマンに向けて言った。

「なんで背後からの攻撃を……？」

ロックマンはインビジブルを解きながら言った。

『こいつ、後ろが見えてんのか……？』

「……ファイアスラッシュ！！」

ロックマンの左腕に赤い剣が宿った。

「やぁああ！」

ロックマンはそのファイアスラッシュでグレイに切りかかった。グレイはそれを青白い刀で止めた。

ギィン、ギィン、ギィン！

ロックマンは一心不乱に刀を振るい、それをなんでもないようにグレイはいなしていく。

ギィィィン！

そして鍔迫り合いになった。

「……もう一度言う！みんなを元に戻せ！」

「それを言ってボクが従うとでも？」

「……昨日もロックが聞いたけど、『力』ってなんの力だ！？」

「答えない、と言ったはずだが？」

グレイは不敵な笑いを浮かべて言った。

『くっ……なめやがって……』

「そんなに『力』について知りたければ、こういうのはどうだ？
ボクはこれから少しだけ本気を出す」

「グレイの……本気！？」

ロックマンは思わず身構える。まだまだ、グレイの能力は未知数だ。
どんな力を隠し持っているのか、分かったものではない。

「……とは言っても、『力』を使うか否かの違いだけど」

グレイの力。それは、今までグレイがやってきた不思議なこととの関係があるのだろうか。そう考えていたロックマンに、声がかけられた。

「おい、ボサボサすんな。後ろから攻撃が来んぞ？」

「！！」

ロックマンがとっさに鍔迫り合いのまま頭を伏せると、そこを青白い閃光が通り過ぎた。

「もう１人！？」

ロックマンが後ろを振り返ると、そこには見えない誰かが持ってい

るかのように宙に浮いた刀があった。

「……違う、これはさっき４人のソードを防いだ刀……！！」

「ほら、次行くぜ！！」

「くっ！！　マージノイズ、ウルフ×キグナス！！」

ロックマンは宙に浮かび、グレイが振るった第二撃を避けた。

「ノイズでスピードナンバー１のキグナスとナンバー２のウルフを組み合わせたって、避け切れるもんじゃねぇぜ！

――この２０の刀からはな！！」

「な！？」

いつの間にか、グレイの後ろに相当な数の刀が浮いていた。

「クッ！！」

ロックマンは最初に襲ってきた刀の攻撃を避けた。が、気付くと刀によって取り囲まれていた。

「！！！」

ヒュン！ヒュン！ヒュン！

刀が空を切る音が次々に聞こえてくる。

ロックマンはそこらじゅうから繰り出される斬撃を避け続けた。

「く……このままじゃ……」

ロックマンは徐々に追いこまれていく。

「へ、もう終わりか！？」

ザシュッ！！

「ぐぁああっ！！」

ついに、斬撃のうちの１つがロックマンをとらえた。

「くそ……ッ！　ＮＦＢ（ノイズフォースビッグバン）、エレメンタルサイクロン！！」

緑の竜巻が刀を破壊していく。

「ほぉ……？」

緑の竜巻が消えると、ノイズがリブラ×キグナスに変化していた。

「ＮＦＢ（ノイズフォースビッグバン）、メテオライトバレッジ！！」

グレイに向かって無数の青い衝撃波の弾が放たれた。グレイの立つ場所のあちこちで爆煙が巻き起こった。

「ウォーロックアタック、ドリルアーム！！」

ロックマンは爆煙に飛び込み、腕に出したドリルをつき付けた。

「やっぱりこの程度じゃねぇか……」

「……！」

爆煙が晴れるとドリルアームを左手で、しかも素手で掴んだグレイが立っていた。

「そんな……あれほど叩きこんだのに！」

グレイは不敵な笑みを浮かべ、ロックマンの顔に右手の人差し指を平を上にして突きつけ、くいっと上に曲げた。

グサッ！

途端に無数の刀がロックマンに突き刺さる。

「ぐぁぁあああっ！！」

無数の刀が、ロックマンの体が見えなくなるほどに刺さった。

「……終わりか」

刀の山にグレイは背を向けて、偽ハープ・ノートに向き直った。

「終わったぜ、ハープ・ノート」

「……そう……」

偽のハープ・ノートがぽつりとつぶやいた。

「……ねぇ、グレイ？　スバルくん、生きてる？」

悲しげに目を細めながら、偽のハープ・ノートは聞いた。

「さぁな、あいつしぶといし、生きてるんじゃ――――

その時、刀の山から多数の赤黒い光の筋が放出された。

「……」

グレイはそれを見て一層不気味な笑みをした。

「……レッドジョーカー！！」

刀の山が弾け飛び、その後には紅蓮のファイナライズをしたロックマンが立っていた。

24、ラソミとルバス（後書き）

つい最近知ったんですけど、「ロックマンゼクス　アドベント」の主人公の名前もグレイなんですね・・・。びっくりしましたよ。でも、全然関係ありません。この人からとった、なんてことはないのであしからず。

25、口先だけの負け犬（前書き）

XX？、
Empty underdog

25、口先だけの負け犬

「レッドジョーカー……がんばるねぇ、キミも……」

まるで同情でもするかのようにグレイが呟いた。

「……グレイブメテオレーザー！！」

ロックマンが両手を突き出すと、赤黒い極太のレーザーが放出された。

「だからぁ、

グレイは腕を前に突き出した。そこにレーザーがぶつかり、押し合っていたが、やがて霧散した。

「――――意味ねぇんだって。たとえファイナライズだとしてもな」

「！！　ギャラクシーアドバンス、グレイブジョーカーＧＡ！」

そう叫びながらロックマンは腕を地面に向かって振り下ろした。すると、グレイの足元から鉄柱が生えた。

が、鉄柱はグレイに当たる前にヒビが入り、粉々に砕け散った。

「そんな！？」

「いい加減分かれよ……お前の攻撃全部、無駄だってなぁ！！」

「ＮＦＢ（ノイズフォースビッグバン）！　レッドガイアイレイザー！！」

パシッ！

「！！」

いつの間にかグレイが目の前まで接近して、レッドガイアイレイザーが発射されるはずの左手を掴んだ。すると、技は発動しなかった。

「わ、技が出ない！なんで！？」

「意味ない、って何回言った？　……もういい、終わらせてやるよ」

グレイの言葉が言い終わると同時に、刀が急激に増大し、もう青白い塊にしか見えないくらいになっていた。その光景はまるで、小さな魚が無数に集まって遊泳して、１つの巨大な銀色の塊になっているような光景だった。

「これ全部……あの刀！？」

「そうだ。元々レッドジョーカーはスピードはないから、コイツを食らったらどうなるのかなッ！？」

ゴォッ！！

青白い塊がロックマンに迫った。

「ア、アトミックブレイザー！！」

燃え盛る炎を青白い塊に放ったが、塊は形を変えて、アトミックブレイザーが当たるはずの場所のみに穴があき、炎をスルーして、ロ

ックマンに突っ込んだ。

「クッ！！」

ロックマンは飛び上がり、その跡地に無数の刀が刺さり、ザクッと連続で音を立てた。ロックマンはそのまま宙返りして後ろに着地した。

「……分かってるか？　今のは外れたんじゃない。外したんだ。次は外さねぇぜ？」

目の前の青白い針山が空中に持ちあがった。刀は空中で矛先を変え、すべての切っ先がロックマンに向けられた。

「……」

ロックマンは右腕を胸の前に掲げると、右腕は緑色に輝いた。

「くらえッ！！」

グレイが叫ぶと、再びロックマンに向けて剣が飛んでいった。

グサッ！！

地面に剣が刺さる音がした。どの剣も、ロックマンをとらえてはいなかった。

「……」

「！」

グレイが気配を感じて下を見ると、ロックマンが黒いグローブを構えて懐に潜り込んでいた。グレイが何も言わずに赤い瞳をわずかに動かすと、一本の刀がロックマンの背中に迫った。

パキン！

「ッ！？」

ロックマンの背中に刀が触れると、刀は背中に刺さってはいかず、逆に刀が粉々に折れた。

「デストロイアッパー！！」

ロックマンはグローブをグレイの顔めがけて突き上げたが、グレイはそれを大きく反り返り避けた。

「ハァァアアッ！！」

振りあげたグローブを素早く振り下ろすと、反り返った姿勢をしているグレイの腹にめり込んだ。

ドゴォオオン！！

ロックマンはそのままグローブをグレイごと地面に叩きつけた。

「……」

ロックマンはグローブを持ち上げて消し、倒れているグレイを見下ろした。地面がえぐられた際に巻きあがった粉塵を掻きわけてグレイは後ろに飛び、ロックマンと距離を取って向き合った。

「『ウォーロックブースト』……だな？」

グレイの問いかけに、ロックマンは無言でうなずいた。

「そいつを使っておいて、刀の塊をウォーロックアタックで避けつつ懐に潜り込み、もし反応されても無敵になるっていう保険をかけておいた……」

「そうだよ」

「めんどくせぇ……そんな舐めた手を使ってくるんなら、さっさと終わらせたほうがマシだったか？」

「……さっきから気になってたんだけど、キミ、さっきメテオGのデータで作ったコピーをゴミって言ったね？」

グレイは眉をなにかカンに障ったようにピクッと動かした。

「……そうだが？」

「……自分勝手すぎるだろ……。自分で生み出しておいて、負けたらゴミ扱い……。これを自分勝手と言わずに何と言うの！？」

「なんだよ、敵に同情か？」

グレイが嘲笑気味にロックマンを見つめながら言った。

「敵だろうと、コピーだろうと、感情があることに変わりはないだろう！　お前のために戦ったやつになんてこと言うんだよ！」

「……『感情があることに変わりはない』……か……」

グレイはゆっくりとロックマンの言葉を復唱する。

「お前、何にも分かってないのな。だから、うざいんだ」

「なに！？」

「うぜぇんだよ。敵にまで同情しやがって……。いつまでもヒーロー気取りしてんじゃねぇ！」

先ほどの塊くらいの数の刀が出現し、元々あった刀もそれに合流し、無数の刀がロックマンを取り囲んだ。

「！！！」

「お前だけはゆるさねぇ……絶対に！！！！！」

その叫び声はノイズウェーブ中に響き渡った。グレイの顔は、これまでのどんな表情よりも、憎しみ、恨んでいた。

「これは……やべぇぞ！スバル！」

「わかってる！」

「死ねぇ！」

数が多すぎて青白いドームのようにも見える剣の塊は中にいるロックマンめがけて直進した。

「オーラ！！」

ロックマンは黄色いオーラを身にまとった。しかし、いとも簡単に刀は突き抜けた。

グサッ！！

「グァァアアアアアッ！！！」

今度はロックマンに刺さる音と、断末魔が響いた。

パチン！

グレイの指を鳴らす音が聞こえると、ロックマンに刺さった剣が消えた。

グレイは無言でロックマンに近づいていく。ロックマンはボロボロの体でなんとかうつ伏せの状態から起き上がり、膝に手をあてて立ち上がろうとしたが、力が入らず、その場に座り込んだ。すでに、ファイナライズは解除されている。グレイはそんなロックマンの前まで来ると、しゃがんでロックマンと目線を合わせた。

「……お前がこの世に存在する限り、ボクの攻撃から逃れることなんてできないよ」

「くっ……絶対に……負けない……」

「もう、お前の負けだ。あきらめろ」

「まだ、負けてない……！　負けたら、みんなを助けられない！　だから……勝つ！」

そんなロックマンをなにか悲しげにも見える表情で見つめていたグレイは、やがて口を開いた。

「……お前に、１つ忠告しておくぜ」

「……忠告？」

「『助ける』って言葉はな、助けられる側にできないことが助ける側にできて初めて成立する。」

「……ッ！？」

「まぁ、もっとも、あいつらにもできたとは思えないがな」

グレイは気絶しているハープ・ノート、壁に閉じ込められているアシッド・エース達を見回して言った。

「だが、お前もあいつらと同じくボクを越える力は持っていないだろ？　そんな奴が、ボクから周りの人間を助けることなんてできないんだよ。助けられる側と一緒にお前も怪我するだけだぜ」

「……」

「自分のために、力も引き出せないようなやつが、誰かを助けようなんて、よく言うよ。お前は、他人のため、友達のためと言って戦

いに飛び込み、やられて自分を大切に思ってるやつに迷惑をかけて死ぬのがオチだ。他人のために戦うやつに限って、早死にする。それが残された奴にとって、どれほど辛いかも知らずにだ！　そう言う奴をボクは嫌と言うほど知ってる！　お前らみたいなやつらが一番気にくわねぇ！」

「……」

ロックマンは目線を落とした。……なにも言えなかった。今さっきの「負けない」、「勝つ」という言葉だって、所詮は根拠のない絵空事なのだ。自分を奮い立たせるために言った、実行できる保証なんて一切ない言葉にすぎないのだ。思いがけずグレイに真実を言われた気がして、ロックマンの心は絶望に満たされて行った。

（やっぱりこいつは自分のためには力を引き出せねぇ……なら……）

「……お前は、今まで、大切な人のために戦ってきたんだったな？」

「……それがどうした？」

急にグレイが言った言葉の意図が分からずにスバルは聞き返した。

「なら――――

グレイは、瞳をハープ・ノートに向けた。その瞳の先に、新たな剣が形成された。

「その大切な人のためなら、出すしかねぇよなぁ！力を！！」

「お前、ミソラちゃんを！」

「ほら、助けてみろよ！　口先だけの負け犬め！」

その言葉を合図に、剣がハープ・ノートに向けて猛スピードで突き進んだ。

「やめろぉぉおおお

25、口先だけの負け犬（後書き）

この小説では、召喚系カードは、ゲームでは召喚されたキャラが使う技を使用者が使えるようになる、という設定にしました。なんとか小説で召喚カードを使えないかと考えた結果です。少し無理がありますが、慣れて行ってください。

あと、ファイナライズ時のバトルカードは専用フォルダの存在は無視して使わせていくので、本来はレッドジョーカーでは使えないバトルカード、ブラックエースでは使えないカードも使います。

グレイが自分を『ボク』というのはらしくないと思いますが、これはもう1人のスバル、ということで、その辺のことは本物と一致させているんですね、はい。

26、英雄の覚醒（前書き）

XX？、

Hero's Awakening

26、英雄の覚醒

ロックマンは凄まじいまでの殺気を放ちながら立ち上がった。その殺気は、常人なら気絶させるほどであろう。

パキパキパキ……

ロックマンの体が、音を立てている。みるみる体の刀傷が治癒していた。

ロックマンはゆっくり歩いて、空中で静止している刀の元にたどり着いた。そのころには体の傷は完治していた。

「……」

ロックマンはその刀を握ると、グレイに切っ先を向けた。

「……！！」

（刀が……消せない！？　こいつ……）

グレイは顔をゆがめた。本来、自分の能力によって作りだした刀なのだから、自分の支配下にあって当然なはず。そして、彼の能力上、出現させた剣を消すのなど、造作もないことのはずなのだ。しかし、今はそれができない。

「……いつまでそっち向いてるんだ？」

「！！」

グレイは背後を振り返った。

「遅いッ！！！」

ザンッ！！

「グアッ！！」

ロックマンはグレイの背中を切りつけ、グレイは悲痛の声を上げた。

ドスッ！

「ぐ……っ」

ロックマンの拳がグレイの背中にめり込み、グレイの体は２、３０ｍほど吹っ飛んだ。そのままごろごろとノイズウェーブの地面を転がっていく。

「く……そッ……」

バキン！

「！！」

先ほどグレイを切りつけた刀がグレイの背後の床に刺さった。気がつくと、グレイのバイザーの右側が割れていた。ロックマンが刀を投げ、その刀がバイザーのみを破壊し、地面に刺さったのだ。

「……返すよ、その刀」

「このっ！！」

グレイが見開くと、ロックマンの周りに、再び刀の集合体が発生し、ドーム状に取り囲んだ。

「……芸がないね」

ロックマンが冷静にその剣の大群を見まわしながら呟いた。

「ふん、うるせぇ」

「……今度はこっちが言う番だ。こんなの、無意味だ！！」

パキ――ン！

ロックマンがそう叫ぶのと同時に、無数の刀やアシッド・エース達を囲んでいた壁は粉々に砕け、小うるさい音を立てて地面に破片が降り注いだ。

「な……？」

「だから、遅いって」

「！！」

いつの間にか、ロックマンが横にいた。

ドガッ！！

「ガァッ！！」

ロックマンはグレイに思いっきり裏拳をかまし、グレイは再び長い距離を吹っ飛んだ。
ごろごろと転がり、やっと仰向けに止まったが、その視線の先には、脚を天に振りあげた青い影が見えた。

ドゴォォォン！

地面に放射状に亀裂が入り、粉塵が巻きあがる。それが晴れると、大きなクレーターができていて、その中にグレイが横たわり、そこにロックマンが脚を踵落(かかと)としをした後のように振り下ろした姿勢でたたずんでいた。

ロックマンは後ろに跳躍して、クレーターの淵に着地してグレイを見下ろした。

「……想像以上だ」

グレイがガラガラと地面の破片を体からどけて立ち上がりながら言った。

「怒りで発現した一時的な『力』でそこまでやるとはね……」

「……！！　今のがお前が言ってた『力』なのか！？」

「そうだ。お前にも力がある、という意味合いの事を今までも何度か言ってたはずだぜ？」

「今のが……」

ロックマンは手を胸の高さまで上げて、手のひらを見開いた目で見

た。

「しかも、ボクが作りだした刀や壁のみを選択して、仲間は傷つけずに破壊したあたり……大したもんだ」

「なんで……ボクにまで『力』が……」

「『ボクにまで』……とか言ったが、ボクとお前に宿った力は別物だぞ？」

「なんの力なんだよ……？　これ……」

「さぁ？　お前も発現できたんだから自分で発見しろよ。まぁ、多分その力は一時的な物で、しばらくしたらまた使えなくなると思うけどな」

ロックマンが怪訝そうに聞き返した。

「どういうことだ！？」

「ボクも力を持つ者だ。お前から感じる力の度合いで分かる。今のは怒りで発現できただけで、自由にコントロールできたわけじゃねぇ」

「……」

「……帰るぜ、ハープ・ノート」

「……うん……っ……うん、分かった」

偽ハープ・ノートは軽く嗚咽をもらしながら返事をした。

「……なに泣いてんだよ」

「だって……スバルくんが、無事で安心しちゃって……」

「……なんというか、さすがだな、ミソラ……。ここにはもう用はないんだ、さっさとズラかるぞ」

「『もう用はない』？　ここに来たのにも意味があるのか！？」

ロックマンが気にかかった発言に対して口をはさんだ。

「あるに決まってるだろ、お前が力を発現できるかどうかを見に来たんだよ」

「……じゃあ、ボクが力を発現するのも計画の内だっていうのか！？」

「その通り、そして、お前が力をコントロールするに至っていないにしても、発現はしたんだ。もう、ボクとお前は対極の存在。これで、オレとお前は同じ土俵に立ったと言える。」

「同じ……土俵……」

「そう。これからは、オレとお前は力をめぐって闘うことになるのさ」

「……」

「じゃ、またな」

グレイはそういうと、トランスメンバーたちに背を向けた。

「待て！　さっき、『時間稼ぎ』って言ったな!?どういう意味だ！」

グレイは頭だけをくるっと後ろに向けて言った。

「……オレはあるものを探している。その探している事をお前らに気付かれないように、時間稼ぎで爆弾を仕掛けた」

「……あるもの？」

「言う気はねぇ」

グレイはそう言って後ろを向いた。

（アイツが持っていると踏んでいたが、昨日の戦いで感知したら、アイツからは反応はしなかった……。かといって、あそこにも見つからなかった……。つまり、これはアイツが……）

「……じゃあな」

グレイがそう言うと、グレイと偽ハープ・ノートは光に包まれ、その光が弾けると、そこには誰もいなかった。

26、英雄の覚醒（後書き）

短い・・・ここまで短いのは久しぶりではないのでしょうか。切り方悪かったな・・・

ところで、僕はたまにこれまでの自分の小説を見直すのですが、０話からキャラクターファイルに移ると、目がチカチカしますね・・・。ゴメン、我慢して！

・・・ってこの話、ケータイで読んでくださる皆さんには分からない話ですね・・・すみません。

27、口は災いの元（前書き）

ＰＶ３０，０００アクセス、ユニーク３，５００人達成

ＸＸ？、

Ｔｈｅ　ｍｏｕｔｈ　ｉｓ　ａｎ　ｏｒｉｇｉｎ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｍｉｓｆｏｒｔｕｎｅ．

27、口は災いの元

――――WAXA、指令室――――

エレベーターの扉が開き、ヨイリー博士とミソラが入ってきた。

「ミソラちゃん！大丈夫！？」

「う、うん、大丈夫……。ごめんね、心配かけちゃって……」

ミソラはうなだれて申し訳なさそうに言った。

「謝ることないって。」

「……えへへ、昨日とは立場が逆だね……」

「……うん……そうだね、お互いさま、だね！」

「おーい、イチャイチャするのもいいが、そろそろ始めるぞー！」

シドウがからかうように大声を出す。

「イ……イチャイチャなんてしてませんっ！！」

スバルとミソラが顔を赤らめて声を揃えて叫んだ。

「はいはい……」

シドウがにやにやして言った。

「……グレイに関して、どうやって偽者を作っているのかとか、あの刀や壁は何なのかなど、分からない事は山積みだが、今はとりあえず保留にしておくぞ。ＷＡＸＡも総力を挙げて調べるから、俺たちがいろいろ考えるよりは待っていたほうがいい」

「はい……」

スバルは、グレイに関して本当に気になることがいろいろあったが、質問を呑み込んだ。

「あと、あの最後のクリムゾンを守っていた謎の光と「声」も気にかかるところだが……」

シドウは考えながら呟いた。スバルも、そこには気にかかっていた。クリムゾンを守ったところだけ見れば敵だが、本人曰くそれは自分たちの力量の調査。あとから自分たちを回復してくれたことといい、こちらに忠告したことといい、どうも敵のようには思えなかった。

「――それも、情報が少なすぎるから、ここでは考察はしないぞ。個々に考えて、なにか思い当たることがあったら知らせてくれ」

「了解、です……」

「それで、これは本来、今日やるはずだった会議で言うはずだった内容なんだが……次の土曜！　お前ら、予定空けておいてくれ」

シドウが言う。ちなみに、今日は火曜日である。

「……なんでですか？」

「任務があるからだ。」

「どんなのですか？」

スバルが怪訝そうに聞き返す。

「……ムー大陸を掘り起こす！！」

「えええ！？」

ムー大陸はスバルの活躍で崩壊し、海の中に消えたはずだ。

「な、なんでそんなこと……」

「太平洋に沈んだムー大陸のせいで、あの一帯の電波ウィルスが凶暴化して、いろんな船が転覆してるからよ」

ヨイリー博士が応えた。

「それに、かつてオリヒメがムー大陸をコントロールしていた際に世界中にばらまいた電波体と同じ連中までなぜか混ざっていてね……」

『……まさか、あのときのコールドスリープの連中が起きたんじゃねぇか？』

ウォーロックがスバルの隣に出てきて言った。

「コールドスリープ？」

それに対しヨイリー博士は眉をひそめる。

「そうです！　ボクらがムー大陸に乗り込んだ時、大量の電波体がコールドスリープの状態で眠っていたんです！」

「そう……なるほどね……それなら、今更出てきたのもうなずけるわ」

ヨイリー博士がうなずく。時間の経過とともに、凍結が除々に解けて、今の時期に解除されたのだ。

「あの……さっき船が転覆してるっておっしゃいましたが……」

ミソラが聞いた。彼女だからこそ、気にかかることがあった。

「そう。電波ウィルスやコールドスリープから目覚めた電波体が、船の電子機器を壊して、沈んでしまっているの……。ううん、船だけじゃない。飛行機も同様の被害を被（こうむ）っているわ。まさに――――

「第二の……バミューダラビリンス……」

続きが分かっていたかのように、ミソラが続きを引き取った。ミソラはオリヒメの元でバミューダラビリンスを調査させられていたことがあったのでこういうことには人一倍敏感だ。

「そのとおり。それも、本物のバミューダラビリンスよりもタチが悪いの。なんたって、世界の船、飛行機が行き交う太平洋が使えなくなっているんだからね」

「そう、こうなると、問題は世界レベル。しかし、凶暴化したウィルスのせいで、バトルウィザードでも太刀打ちできず、ムー大陸を回収できずにいた。だから、日本が新設したオフィシャルに依頼がきたんだ。ウィザードがダメなら、トランスメンバーで、ってことだ」

話を聞いていたスバルが口を開いた。

「この任務ってこの前言ってた……」

「そう、国家機密レベルの任務。ＳＳＳ（スリーエス）からＥまでの８段階評価の任務難易度ランクで言えば、Ｓランク任務だ」

「これでもＳって……ＳＳＳはどんな任務なんですか……？」

スバルに聞かれて、シドウは悩むように眉をひそめた。

「そうだなぁ……例えば……お前がやった、メテオＧの破壊、あれがもしオフィシャルの任務でやっていたら確実にＳＳＳだろうな……。ＳＳＳはもうこれを失敗したら、地球は終わりだって言うくら

いの奴だから、そうそうない。」

「なるほど……。それで?その任務はどうやってやるんですか?」

「そう、そこだよな。まず、貨物船を２０隻ほど、ムー大陸の沈むポイントまで進め、そのうちの一つに俺らも乗って、そのポイントにたどり着いたら、電波ウィルス、電波体を電波変換して打ち砕く！　以上！」

「ん?」とスバルが何かが気にかかり、質問する。

「戦闘だけなんですか?　ボクらがムー大陸の物を船に運ばなくてもいいんですか?」

「それはサテラポリスの職員の方でやってくれる。俺らは安全に作業が進むように危険分子を排除するのが目的だな」

「なるほど、了解です」

「ただ!行くのは俺、スバル、ミソラのみだ」

「な!?」

「なんでだよ?」

ゴン太、ジャックが聞いた。それを見たシドウは言う。

「アシッド・エースはジョーカーから吸収したアビリティもあって、安定した電波変換ができる。ロックマンとハープ・ノートは、元になる電波体が、宇宙人のオリジナルのままウィザード化してるから、当然電波変換も安定している。が、あとのお前らはハンターの中で

再構成されたウィザードを使っているから、電波変換がそれに比べると安定していない。この任務はSランク！安定した電波変換でないと、身を滅ぼすだけだ。……分かるな？」

「くっ……」

ツカサが悔しそうにした。

「あなた方、任務に参加しない人は、土曜日にはシンクロ率の調整をするから、ＷＡＸＡへ来てね」

「シンクロ率……そう言えば、昨日も暁さんが戦闘中にシンクロ率がどうのって言ってましたけど、それってなんですか？」

「あぁ、シンクロ率は……って、いい機会だからついでに「電波人間の力の３要素」についても教えてあげるわ」

「電波人間の力の要素！？そんなのがあるんですか！？」

「ウィザードの性能、精神力、そしてシンクロ率ですよね？」

ミソラが言った。

「そうよ。やっぱり修行の時にシドウちゃんから聞いてたのかしら？」

「はい……そのうちの精神力を上げるためにしごかれて大変で……」

「ほ～う？　愚痴をこぼすとは、覚悟はできてるんだろうな？」

シドウがイジワルっぽく言う。

「え、あ、暁さん？　こ、これは、その、ほら、なんと言うか、その……」

ミソラはかなりどもりながら、なんとかその場を取り繕おうとした。

「そんなんなら、またしごいてやろうか～？」

「あ、暁さん、許してぇ～！」

ミソラは本気で焦っていた。泣きそうになっているようにも見える。

「……なんてな、冗談だ」

「……え？冗談？」

「おう、冗談……だ……って……」

シドウはあくまで明るく言った。それでミソラが安心するものと思って。でも、違った。

「……」

見ると、ミソラは涙目でシドウを睨みつけている。悲しいのではない。……怒っているのだ。

「えっと、……どうした、……ミソラ？」

プツン！！

「ぱ、パルスソングッ！！」

ミソラは、素早くギターを構えて音波をシドウに向けて放ち始めた。

「ちょっ、あぶっ、やめろ～～～～！！」

ハート型の音波が次々とシドウに迫り、彼はそれをなんとか避けていく。

「待ちなさ～い！！」

ミソラは怒りによる涙目のまま音波を放ち続ける。

「……何やってんですか、あれ……」

スバルは半目を送りながらあきれて言った。

「ま、まぁ、ほっときましょう……。あの二人に説明はいらないし……」

ヨイリー博士もそう言う。ミソラはその後もシドウを襲っていた。

27、口は災いの元（後書き）

じ、地の文が思いつかないｏｒｚ

28、フィフティオーバー（前書き）

ユニーク４，０００人突破！

ＸＸ？、
ｆｉｆｔｙ　ｏｖｅｒ

28、フィフティオーバー

「……で、『電波人間の力の3要素』の1つ目、これは分かるでしょう？『ウィザードの性能』は」

ヨイリー博士の言葉にスバルがうなずく。

「ですね。ウィザードにアビリティを組み込むと電波人間時にも反映されますから」

「だから、説明は二つ目からね。『精神力』」

スバルはピクリと眉を動かす。

「それって、オペレーターの方の、ですか？」

「もちろん。……スバルちゃんは、この中でダントツに電波変換の使用歴が長いわけだけど、電波変換をするようになってから、筋肉がついたりした？」

「……いや、あんまり以前と変わりないですね」

「でしょう？　それが、電波変換の際の強さを決める要素に精神力がある証拠よ。電波変換時の経験値は全部、精神力として蓄積されていくの。そして、精神力が高いと、電波人間の状態で、体の攻撃に対する耐性が強くなったり、攻撃力が高まったりするわ。だから、人間体の身体的なものは、体格しか関係ないの」

スバルは再び気にかかる点を見つけた。

「体格は関係あるんですか？」

「もちろん。人間の状態での体格と、電波変換後の体格が近ければ近いほど電波変換は安定するわ。ちなみに、ゴン太ちゃんが電波変換することすら練習が必要だったのは、ゴン太ちゃんの体格とオックス・ファイアの体格が違いすぎたのが主な原因なんだけどね……」

「そうか、道理で！」

すかさずゴン太が言う。なにか自分の過去に電波変換が自由にできなかったことを合理化しようとしているようにも見える。

「ゴン太くん、今の話本当に理解した？」

ツカサが聞いた。

「……おう、りかい……したぜ？」

（してないな）

その場の全員がそう思った。

「……それと、反射神経とか、いわゆる脳内でやることに関しては人間体の時と変化はなし。逆に言えば、人間体でそれらが上昇すれば、必然的に電波人間の状態でも上昇が見込めるわ」

「へぇ、変わらないんですね……。いつもより反応できてるって思ってたけど……」

スバルの言葉にヨイリー博士は答える。

「それは電波人間になった時にしかフルに反射神経を使わないからでしょ」

「それもそうですね……」

「そして、次がいよいよシンクロ率。これは、電波変換時の人間と電波体の精神的な同調を指すわ」

「精神的な同調？」

スバルがわけが分からない、と言いたげに首をかしげる。

「……例えば、友達と会話してて、同時に同じことを言ったりすることってあるでしょう？あれって、初めてあった人とはほとんどやらないとは思わない？」

「そういえば、そうですね……」

今までの記憶をたどりながら、スバルは答えた。

「そう言う風に、人間と人間同士でもある程度はシンクロするの。それで、電波人間では、人間体と電波体のシンクロが、そのまま強さに反映されるの。」

「簡単にいえば、仲がいいほど強いってことですか？」

ヨイリー博士はむぅ、とすこし考えたのちに言った。

「……ちょっとそれだと語弊があるけど……そう思っておいてかま

わないわ」

『じゃあ、オレとスバルじゃ大したシンクロ率にはならねぇな～』

突然、スバルの隣のウォーロックがまるで挑発するかのように言った。

「ちょっと、それどういうこと！？」

「だって、オレとお前じゃ、性格正反対だぜ？」

「な！」

「あはははは……」

ツカサが苦笑いをした。

「……このシンクロ率、という原理は元々は、ナビの強化の研究をしていた２００年前の科学者、光　祐一郎博士によって確立されたものなんだけど、ナビと人間のシンクロよりも、ウィザードと人間のシンクロの方がはるかに難しいの」

「？　なんでですか？」

「人間の形じゃないからだよ」

声の方を見ると、声の主はミソラだった。ミソラはまだ不機嫌なのか、眉間にはしわが寄り、口はへの字に曲がり、腕組みをしている。しかし、怒っても可愛げなところは失われていないのはすごい。その後ろではシドウがぐったりしていた。

「……マジで追いかけやがって～」

「……わたしを焦らせたバツ！本当に反省してたのに、冗談だったなんて～！」

冗談と発覚するやいなや、あれほど怒るということは、そうとう焦っていたということで、それはつまり、どれほど修行でみっちりしごかれたのだろうか。

「悪かったよ。それで、ミソラの言うとおり、ウィザードはほとんどが人間型じゃないから、その分シンクロも難しい。それに、ナビは人間の精神構造を参考に作られたから、まだシンクロしやすいが、ウィザードはそうはいかない。ウィザードはウォーロック達、電波生命体の宇宙人を参考に作ったために、人間のような感情はあるが、精神構造が異なるためにシンクロしにくくなってるんだ」

シドウの説明にヨイリー博士が説明を重ねる。

「比較的簡単なナビとのシンクロなら、２００年前のオフィシャルのメンバーは大抵６０％前後はあったわ。だけど、電波人間の場合は３０％あればいい方ね。５０％あったら……もう天才レベルかしら」

「６０％と３０％……ずいぶん差がありますね……。そんなに難しいんですか？」

ミソラの問いに、ヨイリーがうなずく。ミソラもそこまでは教わらなかったようだ。

「そして、フルシンクロ……いわゆるシンクロ率１００％は、もう神か何かのレベルね。ナビとのフルシンクロでさえ、発現できたのは、たった1組の人間とナビの間にのみ……。その2人にも、フルシンクロを可能にした理由があったの。ナビとのフルシンクロでさえ、理由なしにはフルシンクロを可能にすることはできなかった……。まして、ウィザードとのフルシンクロなんて、もう無理と言いきってもいいかもしれないわ」

「フルシンクロ……って強いんですか？」

「そうね。ナビとのフルシンクロと比べて難しい分、発現できたときの力の上昇力は相当なものだと思われるわ。フルシンクロを象に例えれば、ファイナライズは蟻（あり）……といえば、力の度合いが分かるかしら？」

「ファイナライズが……蟻！？」

話を聞いていた全員が生唾を飲む。

「まぁ、フルシンクロなんて所詮は絵空事だから、考えるだけ無駄ね。それよりも、ついでだからシンクロ率、測ってみる？」

『お？なんか面白そうだな！』

ウォーロックが言った。

「の、乗り気だね……ロック」

『おう！　オレとお前でファイナライズを蟻にしてやろうぜ！』

「それが狙いか……。無理でしょ」

スバルが溜息混じりに言った。

『はぁ？　やってみなきゃ分かんねーだろうが！』

「だって、神の領域なんだよ？　ナビとだって1組しかできなかったんだよ？　普通に考えたらウィザードとなんて、1組もできないよ！」

『じゃあ、オレらは普通じゃねぇ！　なんたって、世界を救ってるんだから！　その人間とナビが何者かは知らねぇが目じゃねぇだろ！』

「あのね……」

スバルがやはり呆れ気味に言う。

「じゃあ、みんなついてきて！」

その場の人間はヨイリー博士について歩き、別の部屋に着いた。

「ここは……？」

部屋に入ると、そこは学校の教室程度の広さで、壁は白1色だった。

「この部屋の中で電波変換してちょうだい」

「はい。……トランスコード！」

再びそれぞれがそれぞれのウィザードと電波変換した。

「じゃあ、その状態であまり動かずに待っててね」

そう言うと、ヨイリー博士は部屋から出て行った。

「……シンクロ率かぁ……どんな結果が出るんだろう……？」

「３０％あればいい方って言ってたよね？……わたしとハープ、仲はいいほうだよね？」

ミソラがどんな結果が出るんだろうと、わくわくしながら聞いた。

『当たり前じゃない♪　６０でも７０でもいくわよ』

「ボクとロックは……２０％くらいかな」

『スバル、てめぇ！』

どうやらウォーロックはどうしてもフルシンクロをやりたいようだ。

「ははは……。まぁ、オレとアシッドは４９％だったがな」

「４９％って……ほとんど５０％じゃないですか！すごいですね！」

「へっへ～！」

『……シドウ、ロックマンとハープ・ノートの前であんまり自慢げに話さないほうがいいですよ』

アシッドが突然アシッド・エースの隣に出現して言った。

「ん？なんでだよ、アシッド？」

「……」

（これは……すごいですね……。いや、さすがと言うべきか……）

「終わったわよ！もう電波変化を解いてもいいわよ！」

ヨイリー博士が部屋に入ってきた。それを聞いて、全員が人間に戻った。そして、ヨイリー博士に連れられて、ＷＡＸＡの指令室に戻った。

「すごい事になったわね……」

「なにか分かったんですか？」

「……結果をメインモニターに出すわ」

昨日、偽者たちを表示したディスプレイに、ロックマンやハープ・ノートといった名前と、その横にパーセンテージが表示された。

ロックマン　５５％
ハープ・ノート　５３％
アシッド・エース　４９％
クイーン・ヴァルゴ　３８％
ジャック・コーヴァス　３５％
オックス・ファイア　１９％
ジェミニ・スパーク　９％

「……え？」

「５５……５３！？」

「そう……まさかの５０％越え（フィフティオーバー）が２人……」

「……すごいや、ロック！　意外とボク達、調和してたんだね！」

『え～、こいつと本当にここまでいくのかぁ？』

……どうやらウォーロックはさっきのスバルの言ったことを根に持っている様子。

「どう言う意味だよ！？　ロック！」

『……２人とも、根は同じなのかしらぁ？』

ハープがからかうように言った。

「『こいつと一緒にするな！』」

スバルとウォーロックが声を揃えて叫んだ。

『はぁ……』

ある意味、確かにシンクロしている。

「すご～い、わたしとハープもここまでいくんだね～。」

ミソラもうれしそうに目を輝かせて言った。

『当たり前じゃない！　７０いくと思ったんだけどなぁ、わたしたちなら』

「そんな……十分だよ！これで！」

「……」

「……あ……。えっと……暁さん、そんなところで体育座りしてないで……」

「ズーン……」

『だから、２人には自慢げに話すなと言ったのに……』

アシッドがあきれたように言った。

「ズーン……」

「あれ？　ツカサくんも体育座り？　なんで？」

『ミソラ、見てみなさいよ、シンクロ率……』

「え？」

ミソラは再びディスプレイに目を戻した。

ジェミニ・スパーク、９％

……ミソラは思わず困惑の汗を流す。

「あ……なるほど……。ツ、ツカサくん、元気出して！」

「しょうがないわよ、ジェミニ・スパークとオックス・ファイアのシンクロ率が低いのは」

「ヨイリー博士、ジェミニ・スパークのシンクロ率が低いのも、体格の影響ですか？」

ミソラが、ツカサをフォローする要素が欲しいのか、ヨイリー博士に聞いた。

「そうよ。というより、体格どころか、人間で1人なのが、電波変換で2人になるから、体格うんぬんの問題じゃないわ」

「確かに……」

「それに、電波人間になると、ツカサちゃん、ヒカルちゃん、ジェミニちゃん三人分の精神があるから、それもたぶんシンクロを難しくしてるわね。むしろ、そのシンクロ率であそこまで戦えることを誇るべきだと思うけど？」

「ほら、ツカサくん、ヨイリー博士もこう言ってるし！」

「うん……はぁ……」

「それじゃあ、今日はみんなご苦労さま」

「今日はもういいぞ」

「じゃあ、ボクら、帰ります！さようなら！」

スバル達は出口に歩き始めた。

「……シドウちゃん」

ヨイリー博士が歩いていく一団を見つめたまま言った。

「……分かってますよ。……あ！そうだ、次の任務でまだ打ち合わせなきゃならないことがあった！　だから、スバルとミソラは残ってくれ！」

その声に、一団の全員が振り向いた。

「……で、話すことって何ですか？」

2人以外が帰ってから、スバルが聞いた。

「いや、任務の話じゃない」

「え？　でも、さっきは……」

スバルが怪訝そうに聞き返す。

「お前ら二人のみに聞いてほしい事がいくつかあってな、そのための口実だ」

「わたしたちだけに聞いてほしいこと……？」

ミソラは首をかしげて聞いた。

「そうだ。お前ら、グレイと接触したとき、苦しんでたよな？」

「！！　はい！　あれは何だったんでしょう！？　気になってたんです！」

「昨日今日と、アシッドちゃんがグレイについて闘いながらデータを取ってくれたの。それをさっき解析したんだけど……そしたら、1つ、分かったことがあるわ」

「それが、ボク達が苦しくなった理由ですか？」

「そう。あの、グレイからは……

――――スバルちゃんとミソラちゃん、2人の周波数が混ざって感知

されたわ」

29、ヨイリーの警告（前書き）

XX？、

The doctor's warning

29、ヨイリーの警告

「ボクとミソラちゃんの周波数……？　ボクのは分かりますけど、なんでミソラちゃんのものまで……？」

「それは分からないけど、でも、これであなたたちが苦しみ出したことの説明がつくわ」

「なんでですか？」

ミソラが続きを促した。

「つまりね、相手も同じ周波数を持っていたから、それと一種の共鳴が起きたの。その共鳴によって、スバルちゃんとミソラちゃんの精神に異常が起きて、それが苦痛として現れたのだと考えられるわ」

「精神に異常って……大丈夫なんですか？　ボクたち……」

スバルが心配そうに聞いた。

「大丈夫よ。周波数の共鳴は一時的なものだから。その証拠に、その苦痛には『慣れ』があったでしょう？　しばらくすると、楽にならなかった？」

「そういえば、そうでした！」

ミソラがハッと思い出したように言った。確かに、時間の経過とともに苦しみは軽減されて行った。

「それに、ミソラちゃんが途中で気絶までしてしまったのは、ミソラちゃんのコピーが現れて、ミソラちゃんの周波数がより色濃くなったからよ。」

「な、なるほど……」

「だから、今は何の問題もないわ。むしろ問題なのは、苦痛を受けている最中よ。そのときは、身動きが取れず、丸腰になってしまう。戦闘において、そっちの方がまずいわ」

「……ちょっと待ってください。ミソラちゃんのコピーが出てきて周波数が色濃くなったなら、コピーも本物と同一（どういつ）の周波数を持ってるってことですよね？　それじゃあ、なんで昨日は他のみんなは苦痛を受けなかったんですか？」

スバルが問う。なぜミソラちゃんだけ？と思ってしまう。

「メテオGのデータから作ったコピーの人間体の周波数は、ノイズのせいか、本物とは違うものになっていたわ。でも、あの新たに作られたミソラちゃんのコピーからは本物と同一の周波数が検出されたの。グレイ自身が作るコピー全員がそうなのか、あのミソラちゃんのコピーだけなのかは分からないけどね……」

言われてみれば、昨日はミソラ自身もハープ・ノートのコピーを目の前にして、苦しむ様子は一切なかった。

『そうか、だからね！』

「ど、どうしたの、ハープ？」

突然ハープが叫んだので、ミソラは驚いた。

『ホラあなた、グレイが潜んでいることとその場所を察知できたじゃない！　あれも周波数の共鳴だったのよ！　道理でわたしには分からなかったわけだわ！』

ハープに言われてミソラは納得したように軽く目を見開く。

「そっか……でも、なんで、わたしたちだけなんですか？　その話なら、グレイやわたしのコピーのほうにも、共鳴してるはずでしょう？　なんで苦しまなかったの？」

そうミソラに言われてヨイリーは困ったように目を伏せた。

「そう、そこよ。今までの情報では分からないのが、なんで向こうは大丈夫なのか？　強引な推測をすれば我慢してたとか言えなくもないけど……」

「でも、とてもそんな風には見えませんでしたよ？」

スバルが怪訝そうに言う。

「でしょうね。今のところ、グレイの言う『力』が共鳴から彼らを守っていたとしか……言えないわ」

「『力』……か……。そういえば、キングＰＧＭからは何か分かりましたか？」

スバルは、戦闘の後、調べたいことがあると、ヨイリー博士にキングＰＧＭを預けていた。

「あぁ、まだ預かったままだったわね、ありがとう。もういいわ」

ヨイリー博士はそう言うと、キーボードを叩いた。すると、スバルのハンターが何かの着信音を鳴らした。しかし、スバルはそれが何かを見ようとはしなかった。すでに何がきたのか、分かっていたからである。

「で、分かったことは？」

「キングＰＧＭ……これの中に謎のプログラムがあるのは覚えてるわね？」

「はい……」

「そのプログラムが、一回だけ使用された履歴が残されていたわ」

スバルがハッと目を見開き、ヨイリーを凝視した。

「え……？　それってどういうことですか？」

「つまり……ロックマンがグレイに勝ったあの力は、そのプログラムによってもたらされた可能性が高いわ」

「……でも、これって、キングが自分で使うために作ったプログラムですよね……？　あの妙な力が、キングの欲しかったものなんですか？」

そもそも、キングは世界に勝った後の世界でこのプログラムを使おうとしていたのだ。先ほどのような飛躍的な戦闘能力は必要はない

はずだ。

「う～ん、まだプログラムの正体も、力が何なのかも分からない今はなんとも言えないわ……」

「……」

「暁さん！」

突然、ミソラがシドウを呼んだ。シドウは、会話の内容がすべて自分の知っている情報にまつわる話だったので、説明をヨイリー博士に任せて、自分はうまい棒を食べていたのだが、急に呼ばれてビクッとした。

「ど、ど、どうした？　ミソラ……」

「暁さんの、グレイのあの力の考察を聞きたいです」

ミソラが凛として期待した目をシドウに送る。

「あ～、あの力ね……」

シドウは急に真剣な顔になり、ミソラとスバルに向き直った。

「俺の見解では、あの力は――――

――わからん」

ズッ！

その場にいた全員がこけた。

「分からないんなら、なんでそんな真剣な顔したんですか！」

スバルが起き上がりながらツッコンだ。

「だって……そういうシリアスな場面かなと思ってさ……」

「期待しなきゃよかった……」

ミソラも起き上がりながら、あきれたように言った。

「そもそも、なんでそんなこと聞いたんだ？」

「気になるからですよ。あの刀はバトルカードではなかった……」

「そうだな……。あの壁も何なのか気になる……。」

「壁……？なんのことですか？」

ミソラがきょとんとして首を傾け聞く。

「……？　あぁ、そうか、グレイが壁を出したのはお前が気絶した後だもんな」

ミソラは、グレイが作りだした壁について、説明を受けた。

「そんなことが……」

「それに……刀はもう数えられないくらい出して来るし……。何をどうしたらあんなことができるのか……」

「ボクのあの力も……よく分かりませんでした……」

スバルは自分の中のものに戸惑いながら呟くように言った。

「動きが速くなり、高速で回復し、触れずに刀を破壊した……。すごいが、そっちもよく分からんな」

「そんなことできたの？」

ミソラがスバルに聞いた。

「うん、自分でもなんでそんなことができたのかが不思議……」

「怒りで発動しただけだとグレイは言っていたが、どうすれば自分の意思で発動できるものか……。なんとか自由に使えるようになれ

ば、あのグレイにも対抗できるかもしれないし、何の力か調べるためにも必要だしな」

シドウが考えながら呟く。ミソラは彼のセリフの1部分に反応した。

「……ん？　スバルくん、なんで怒ったの？」

「それは、気絶してるミソラちゃんにアイツが攻撃しようとしたからだよ！」

また怒りがぶり返したのか、ちょっといきり立ちながら噛みつくように言った。

「……ふぅん……。……」

ミソラは複雑な気持ちであった。気絶した自分を攻撃したことに怒るほどに自分を大切に思ってくれるのがうれしくもあり、また守られたのか、という無力感もあり。しかし、無力感のほうがずっと上であった。あれほど修行したにも関わらず、結局また守られた。それを言葉に表せば、スバルはきっと「周波数の共鳴で気絶してたんだ、しかたない。気にすることはない」と言う。でも、それでも、無力感は簡単には振り払えるものではなかった。

「ミソラちゃん、大丈夫？」

「……え？　あ、うん、大丈夫……」

「そう？」

「……そういえば、話がそれたせいで言えなかったけど、周波数の

共鳴の対抗策、つまり、今後グレイと接触して苦痛を受けなくて済む方法だけど、これは二つ考えられるわ」

「対抗策あるんですか？　どんな？」

スバルは、もはやどうしようもない事実なのだと思っていた。

「１つは、ミソラちゃんにはできないけど、『力』を完全にコントロールすることよ」

「……それがどう対抗策に繋がるんですか？」

「さっき言ったでしょう？　グレイは『力』で共鳴から逃(のが)れていたと。それはスバルちゃん側も同じはず」

「そ、そうか！」

「まぁ、まだ私の推測に過ぎないんだけどね……。そして、もう１つは……」

「もう１つは……？」

１つ目はミソラにはできないということは、次はミソラにもできる、ということだ。一体どんなことなんだろう。

「――スバルちゃんとミソラちゃんの絆を高めることよ」

「……へ？」

なんで、そんなことで共鳴に対抗できるんだろう。

「つまりね、２人の絆を高めることで、グレイ側からの干渉をシャットダウンしようってことよ」

「そんなことできるんですか？」

「可能なはずよ」

スバルとミソラはお互いに顔を合わせ、そして顔を赤らめて伏せた。

「で、でもっ、そんな意図的に絆を高めようって言われたって……」

ミソラが顔を高揚させて呟く。

「ん？」

「……恥ずかしいです……」

ミソラは消え入りそうな声で言った。

「そ、そうですよ！そもそも、絆ってやろうとして深まるものじゃ

ないし、大体どうやって絆を深めろって……」

「……そんなもん、キスでもなんでもすればいいじゃないか」

……突然投下された爆弾発言。投下者、暁シドウ。

「キ、キス！？」

スバルもミソラも、顔から湯気が出そうなくらい真っ赤になっている。

「な、な、な、なんてこと言うんでうか！」

焦って喋って噛んでしまったスバル。

「そうですよ！　わたしたち、まだそんな関係じゃないし……それにそんな度胸もないし……って！？　なんですか、暁さん、その顔は！」

シドウはミソラの話の途中でにやつきだした。

「……いやね、まだって言ったよな？」

「……あ」

「ということは、将来的には……ってことだろ？」

ボンッ！

ミソラは、すでに真っ赤だったのに、まだ上があるのかと言いたく

なるくらい赤くなった。もちろん、スバルも例外ではない。

「暁さん！　いい加減にしてくださいっ！！！」

ミソラはもう自身の髪と同化してしまいそうなくらい真っ赤になっている。

「ははは、悪かったよ。でも、マジ話、お前ら普段から仲はいいんだから、絆を深めるのはそう難しい事ではないはずだぜ？」

「それは……そうかもしれませんが……」

ミソラもスバルも、再び恥じ入って頭を落としていく。

「まぁ、これはお前らで考えることだ。キスするのかどうかはな」

「……ってそっちですか！？」

「はは、冗談だ、冗談。……じゃあ、今度こそ伝える事は全部かな」

「……あ、そうそう、この先、精神的に何か異常を感じたら知らせてね」

「せ、精神的な異常って……？」

ギクリとスバルとミソラの動きが止まる。

「例えば、意味もなく腹が立ってきた、とか」

「それ、知らせたら、何やら精神科のお世話になりそうなのですが

……」

「そんなことはしないわよ。……症状によるけど」

「……」

何がなんでも精神科の世話にはなりたくないと心に刻んだスバルとミソラであった。

「それじゃ、今度こそお開きだ。もういいぜ」

「わかりました。じゃあ、土曜日、よろしくお願いします！」

「おう！」

スバルとミソラは自動ドアを通って去っていった。

「……とは言ったものの、大丈夫かしらね……」

「スバルですか？」

シドウの問いに、ヨイリーは首を横に振った。

「ミソラちゃんよ。まぁ、スバルちゃんもそうだけど。でも、いくらコピーが出てきて自分の周波数が色濃くなったとはいえ、気絶するのはちょっと過剰反応すぎるわ」

「……それはミソラが弱い、ということですか？」

シドウは少し怒って言った。ミソラとシドウは修行を通じてすでに

師弟のような関係になっていた。弟子をけなされたような気がしたのだ。

「あら、ごめんなさい、そういう意味じゃないのよ。ただ、グレイはスバルちゃんとミソラちゃん、2人を特別視してる。スバルちゃんは自分に限りなく近い存在として特別視するのは当然だけど、なんでミソラちゃんまで特別視するのかしら？」

「……」

「……なにか、ミソラちゃんはグレイに目をつけられてる気がしてならないのよ。それが心配なの」

「……そうですか」

何も起きないといいが。シドウはそう思うことしかできなかった。

29、ヨイリーの警告（後書き）

ミソラはウォーロックのことを「ロックくん」と呼んでいますが、実はこれは流星1、2の話で、3では一部「ウォーロックくん」になっています。なぜ？

この小説では「ロックくん」で統一させていただきます。そっちのほうがミソラらしいと思うので。

30、それぞれの夜（前書き）

XXX、
Each night

30、それぞれの夜

「……スバルくん」

「なに？」

今、２人はＷＡＸＡの廊下を建物の出口に向かって歩いていた。

「あのね……」

そう言ってスバルの方に顔を向けると、当然ながらスバルと目が合った。すると、ミソラは困ったように唇を噛んで目を背けた。

「え？　ミソラちゃん、ボクなにかした？」

「う、ううん、そうじゃないの！　ただ……」

「ただ？」

スバルは怪訝そうに眉をひそめた。

「あぁいうこと言われたあとで、なんか恥ずかしくて……」

「あぁ……暁さんの……。キスとか言われたしね……」

ボンッ！

再びミソラの顔が赤く染まった。

「ス、ス、スバルくん！　それ言わないで！」

「ご、ごめん……」

……「キス」でそこまで恥ずかしがること自体、お互い意識していることに他ならないわけで、意識していなければ平然としているはずなわけだが、そこに気付かないスバルであり、ミソラであった。スバルはともかく、ミソラも今は恥ずかしさで冷静な思考ができていなかったのである。いや、ミソラもそういうことに関しては普通の思考が働いても、気付かなかったかもしれない。

「そ、それで？」

ＷＡＸＡの出入り口から2人で外に出ながらスバルは聞いた。

「な、なにが？」

「いや、何か聞きたいことあったんでしょ？」

そう言われてミソラは、思い出したようにバッとすばやくスバルの方を向いた。

「……そうそう！　……ねぇ、スバルくん、……この質問、すごく変な質問かもしれないけど……」

「うん？　なに？」

なんだろう？

「これって、わたしの体だよね？」

ミソラは自分の頭を指差して聞いた。

「……え？」

本当に変てこな質問である。

「……そう、でしょ？　それはミソラちゃんの体だよ？　どうしたの、そんな質問するなんて」

「うん……。なんか、こう……気絶して、目が覚めてから、なんだか自分の体が自分のものじゃなくなったみたいな感じがして……。うまくこの感じを言葉で言い表せないんだけど……」

「……」

スバルはミソラの顔に自分の顔を近づけた。

＞ｉ９３６１―１３９６＜

「ひゃわっ！？」

ミソラは突然の出来事に、またまた顔を赤くしてすっとんきょうな声をあげた。

「……顔色は悪くないけど……。気分はどう？」

「……え？　な、なんだ……びっくりした……」

「なんで、びっくりするの？」

スバルはまた怪訝そうな顔をミソラに向ける。

「な、なんでもない！　……気分は悪くないよ。っていうか、そう言うことじゃないの。ごめん、ホントになんて言い表したらいいのか分からないの」

「大丈夫？」

「うん。ごめんね、変なこと聞いて」

「いいよ。……ねぇ、今のその……『自分の体が自分の体で無いような感覚』ってヨイリー博士のいう『精神的異常』に入るのかな？」

「う～ん……たとえそうだったとしても、正確にこの感覚を伝えられない限りは言っても無駄かも……」

ウェーブライナーの駅にたどり着き、次を待ちながらミソラは言った。

「それもそうだね。……あ、来た来た」

ウェーブライナーが駅に着き、スバルとミソラを乗せて再び走り出した。そして、コダマタウンで降りて、2人は自分の家に着いた。

「ミソラちゃん、また明日！」

「うん！　……あ、ちょっと待って。これは言っておかないと」

「何を？」

「さっきは守ってくれて……ありがとう……」

「……当たり前、お互い様、でしょ？」

「うん……。おやすみ、スバルくん！」

「おやすみ、ミソラちゃん」

《こいつら、ベランダ越しにまた、おやすみを言うんじゃねぇか？》

雰囲気ぶち壊しのウォーロックの心の突っ込みをよそに、2人はそれぞれの家に入った。

「ただいまー」

「お帰り、スバル！」

家に入ると、あかねが出迎えた。

「ただいま、母さん」

「また忙しかったみたいね」

「なんで知ってるの？」

「大吾さんに聞いたのよ」

スバルはそれを聞いてハッと顔色を変えた。

「父さん、今日は帰ってきてるの？」

「えぇ。今はご飯食べてるわよ」

「ボクの分は？」

「もちろん、あるわよ。食べる？」

「もちろん！」

スバルもリビングに入った。

「おぉ、お帰り、スバル！」

食卓についていた大吾が言った。

「ただいま、父さん」

スバルは自分の机に腰掛けながら言った。

「聞いたぞ。大変だったらしいな」

大吾はご飯を口に運びながら言った。

「まぁね。爆弾騒動があった後に敵の侵入だしね……」

スバルは箸を取って合掌しながら応えた。

「二日連続で事件を起こすなんて、奴らも何を考えてるんだ……」

「さぁ……」

「ほらほら、2人とも、食事中は物騒な話はやめなさい！」

あかねが自分の皿を洗いながら言った。

「しょうがないじゃないか、あかね。食事中くらいしか話す時間取れないんだから」

「まぁ、そうだけど……」

「……そういえば、オフィシャルにいずれ新入りが入るらしいな」

「え？　そうなの？」

味噌汁を飲んでいたスバルはお椀から口を離して言った。

「なんだ、聞いてないのか？」

「うん、全然……」

「そうか……。まぁ、暁くんにもなにか意図があるんだろうが……」

「新入りか……どんな人だろう？　電波変換できるのかな？」

まだオフィシャルに入って2日のスバルも十分新入りなのだが……

そこは突っ込んではいけない。

ちなみに、オフィシャルだからといって電波変換できる人間ばかりが入るのではない。バトルウィザードをナビのようにオペレートして任務をこなすメンバーもいる。むしろ、そちらが大多数である。

「できるらしいぞ。でも、入団にいろいろと条件を要求したらしいが……」

「条件？」

「やりたい任務以外を断る権利などの条件を要求したらしい」

スバルは途端に口の中のものを吹き出しそうになる。せき込みながらなんとか聞き返した。

「げほっ、ごほっ、な、なんでそんなわがまま、サテラポリスが通したの！？」

「違うぞ、スバル。わがままを言ったのはサテラポリスのほうだ」

「え？　どういうこと？」

「つまり、サテラポリスが何度もしつこくオフィシャルに入れと言って、ようやく条件付きで承諾したんだ」

スバルが目を見開く。

「……！！　そんなサテラポリスが欲しがった人って一体……？」

「さぁ。でも、同じオフィシャルに入るんだから、いずれ会うだろ」

「まぁ、そうだね……」

その後、スバルは食事を終わらせて部屋に入った。

ちなみに、部屋の窓から見えるミソラの部屋は、窓にカーテンがかかっていて見えない。

「新入りのオフィシャルか……どんな人かな……？」

スバルはハンターの画面を見ながら言った。

『サテラポリスが必死になって取り入れた奴……どんだけ強ぇんだろうな？』

「やっぱりロックはそっちに走るんだ……」

『闘ってみたいぜ！』

「はいはい……」

スバルはあきれて風呂に入る準備を始めた。

「ただいまー」

「おかえり、ミソラちゃん」

出迎えたのはクインティアだった。

「どうだった？任務の打ち合わせは」

（あ……そういう建前だったんだっけ……）

「うん……ボチボチってとこ？」

「そう？　ご飯まだあるわよ？」

「あ、１人で作ったの？」

普段（といってもまだ3、４日、であるが）、このハートレス家ではミソラとクインティアが3人分のご飯を作っていた。

「えぇ」

「ごめーん、わたしも作るはずだったのに……」

ミソラは顔の前で両手を合わせながら謝った。

「いいのよ。オフィシャルの仕事ならしかたないわ」

「うん、ありがと……」

ミソラはそのままクインティアに連れられてリビングに入った。リビングには3人分の食べた後の食器が置いてあり、1人分の食事が並んでいた。これがミソラの分であろう。……ん？

「なんで4人分あるの？」

この家は、ハートレス（家主）がいつもいないので、ミソラ、クインティア、ジャックの3人しかいなかった。

「それは――――

「あ、ミソラちゃん、おかえり！」

ミソラは声の聞こえた方を振り向いた。

ツカサが階段の上から声をあげていた。

「ツカサくん！　もうこっちに来たの！？」

ミソラがぱっと顔を嬉しそうにさせながら言った。

「うん、ボクあんまり物持ってないから荷物まとめるの昨日で済んじゃってさ……」

「へぇ～、じゃあ、また楽しくなるね！」

「うん、じゃ、また部屋で荷物まとめてくるよ」

「うん、いってらっしゃい！」

「これは……ここにでも置いておくかな」

――ツカサの部屋。ツカサはいまだ荷物の整理中である。あまり物を持たないといっても、引っ越しすればその整理は結構時間がかかるものである。

コンコン！

ドアをノックする音が聞こえた。

「あ、どうぞ！」

ドアが開き、ミソラが入ってきた。

「へぇ、ここがツカサくんの部屋かぁ」

ミソラは部屋をあちこち見まわしながら入っていく。

「ミソラちゃん、どうしたの？」

「整理、手伝ってあげようと思って！」

ミソラは胸の前で両手をガッツポーズのようにグッと握りしめながら言った。

「って、夕飯は？」

「もう食べ終わったよ？」

「早っ……」

軽くコケながらツカサが呟く。

「何かすることある？」

「いいよ、大丈夫」

「遠慮はいらないよ？」

ツカサは、ミソラの好意を足蹴りするのも悪いと思ったのか、なにか手伝ってもらうことはないか、考え始めた。

「……じゃあ、……本を段ボールから本棚に移すの、頼める？」

「もちろん！」

「……それにしても、ツカサくんって似てるな」

ミソラはせっせと本を棚に移しながら言った。

「だれに？」

ツカサは自分の衣類をクローゼットにしまいながら聞いた。

「スバルくんだよ。その謙虚なところとか、落ち着いてるところとか。さっきのやり取りだって昼間のスバルくんとのやり取りと似てたし……」

「……ミソラちゃんってさ、」

「？」

「スバルくんのこと、好きなの？」

ブッ！

ミソラは突然、そして再び放たれた爆弾発言に、何故かむせ込んだ。

「げほげほげほっ！！」

胸をドンドンと叩く。そして収まると、本を一冊手に持ったまま振り向いた。

「な……何を言いだすの！？　げほっ、ツカサくん！」

「いや、違うんならいいけど、ずいぶんとスバルくんのことを楽しそうに話すな～と思って」

今日はやたらみんなに色恋沙汰を言われるなと思いながら、ミソラは叫ぶ。

「ち、違うよ！　そ、そんなんじゃ、ないんだから……」

本当に？という自分の声が心の中で聞こえた気がするが、あえて無視した。

「ふうん……。でも、仲イイよね、キミたちって」

「それは、ブラザーだからだよ！」

「ブラザーになれば、そんなに仲良くできるの？」

「……というより、仲がいいからブラザーは結ぶんだけど……。でも、うん、ブラザー結ぶ前よりも仲良くなれるかもね」

それを聞いて、ツカサは少し俯いた。

「じゃあ、ボクも早く、キミらくらいにスバルくんと仲良くなりたいな」

「ツカサくん……」

ミソラの目の前で、ツカサは少し寂しそうな顔をしていた。

「大丈夫、なれるよ！　ツカサくんとスバルくん、本当に似てるもん！」

その声に、ツカサは顔をあげた。

「『類は友を呼ぶ』って言うでしょ？」

ミソラはそう言いながら首をかしげてほほ笑んだ。

「うん……そうだね！」

それから数分後、ミソラは部屋の整理を終えてツカサの部屋から出てきた。

「じゃあ、おやすみ、ツカサくん！」

「うん、手伝ってくれてありがとうね！」

ミソラはドアをパタンと閉めて、自分の部屋に向かって廊下を歩きだした。

『クスクスクス……』

「何を笑ってるの？　ハープ？」

『ミソラ……ツカサくんの部屋には躊躇（ちゅうちょ）なく入ったわね……』

「どういう意味？」

とかムッとしながら聞きつつ、ミソラは心のどこかでその答えが分かっていた。

『朝、スバルくんの部屋に入るときは、男の子の部屋に入るの恥ずかしいとか言ってたのに、……ねぇ？』

「もう！　みんなでわたしをからかって！」

この話題でミソラが赤面するのはこれで早3回目である。今回もミソラはプ～ッ！と頬を膨らませながらそっぽを向いている。

『クスクスクス……』

「ほらほら！　もう9時だよ！　よい子は寝る時間だよ！　お風呂入って寝ないと！」

ミソラはよく分からないことを言って話題をそらしながら自分の部屋に入ってパジャマやタオルなど、風呂に入るために脱衣所に持って行くものを出し始めた。

30、それぞれの夜（後書き）

流星のロックマンをやり始めたころから思っているのが、スバルって「エヴァンゲリオン」のシンジに似てませんか？　スバルのほうがずっと立ち直りは早かったけど。

途中の挿絵は僕が書いてみました。う～ん、もうちょっとミソラをかわいらしく書きたかったですね・・・。でも、楽しかったです！

この先も書くかもしれません。

31、孤独の続き（前書き）

XXX？、

Continuation of solitude

31、孤独の続き

「嫌な記憶？」

ヨイリー博士の声に、エア・ディスプレイの向こうでミソラがうなずいた。横にはスバルもいる。背景から察するに、2人はコダマ小学校の屋上にいるようである。

「具体的にどんな感じだったんだ？」

ヨイリー博士の横からシドウが2人に話しかけた。

「えっと……」

――昨夜、スバルもミソラも、風呂に入って、ベッドに入った後のこと。

「クソッ、消えろ！　消えろ！　消えろ！」

ベットに横たわりながら、スバルは枕を何度も殴っている。

『やめろ、スバル！　いきなりどうしたんだ！』

「消えろ！！」

ウォーロックが心配になって話しかけても、耳をかさない。

「やめてよ！　もう思い出させないで！」

……対してミソラはまるで上から降ってくるものから頭を守るように、枕を頭の上に乗せてギュッと押しつけている。

『ちょっと、ミソラ！　落ち着きなさい！』

「やだよ、こんなの！」

こちらも、ハープの声はミソラには届いていない。

「父さん……どこ行ったんだよ……？」

「消えろっ！　思い出させるな！」

「ママ、わたし、もうやだよ……。歌いたくない……」

「せっかく忘れてるのに！思い出したくないよ！」

『やめろ、スバル！！！』
『落ち着きなさい、ミソラ！！！』

スバルもミソラも、ウィザードの大声でやっと我に返った。

「……ごめん、ロック……」

スバルは枕から手を離した。

「……ハープ、ありがと……」

ミソラも枕を元の位置に戻した。

『突然、どうしたんだよ？』

「分からない……。でも……」

『でも、なによ？』

「同じなの……昨日と……」

「「……」」

スバルもミソラも、不安になっていた。自分はどうしてしまったのだろう、と。

――翌日の朝。

コンコン！

「どうぞ！」

スバルはノックに気付いて、回転いすをくるりと回してドアの方を向きながら言った。

「……」

開かれたドアの向こうに、ミソラが立っていた。

「ミソラちゃん！？　母さんかと思った……」

「……」

「もう来たの？　ずいぶん早くない？」

時計を見ると、まだ６時である。

「……スバルくんこそ、ずいぶん早起きだね」

ミソラの声はえらく沈んで聞こえる。

「それは――」

「……あのね、スバルくんに聞いておきたいことがあって、こんな

時間に来たの」

ミソラがエメラルドグリーンの瞳でまっすぐにスバルを見つめる。

「まさか……」

「……うん、スバルくんもだね？　こんな早くに起きてるってことは」

「うん。おととといと同じ。嫌な記憶を強制的に思い出させられたみたいな……」

「やっぱり……。だから、2人だけで話す時間が欲しかったの」

「そうだね……」

この謎の苦しみが2人だけのものなら、やはり2人で話し合うのがいいだろう。

『でもよ、出来事はおととといと同じかもしれねぇが、おととといよりずっと苦しんでたぜ？』

ウォーロックが言った。

『そうそう、ミソラもなのよ！』

スバルのベッドの階段を上りだしたミソラについていきながら、ハープが言った。ミソラはスバルのベッドに座って、ベッドの柵に腕を乗せるというスバルを見下ろす態勢で、ハープのほうに顔を向けた。

「……そう、問題はそこなんだよね」

「……これは、ヨイリー博士に知らせた方がいいだろうね……。さすがに……」

「うん……。いま電話しても時間的に出られないかもしれないから、学校に行ったら電話しよう、スバルくん……」

「分かった、ミソラちゃん」

「……というわけでお電話したわけで……」

「……」

ヨイリー博士もシドウも、昨日の夜の2人の様子を聞いて、考え込んでいる。

『すごかったぜ。枕がよく壊れなかったってもんだ』

『ミソラも、あんな取りみだしたとこ見たことないわ』

ウォーロックもハープも、WAXAの2人組にオペレーターの様子を説明していた。

「おとといの夜も、そんなことがあったのね？」

「はい。昨日よりはまだ楽でしたが」

それを聞いて、ヨイリーはふっと顔を緩めて言った。

「……なら、それも多分、グレイとの共鳴のせいね。あまり深く気に病むことはないわ」

「……そうですか？」

スバル、ミソラ共に、それでいいのかと言いたげな顔をしている。

「多分、グレイと接触した日のみに起きる現象だから、今日あたり、グレイと接触してなくて、それでもそうなるのなら、その時にまた連絡してちょうだい」

「……はい。……あ、それともう一つ、ついでにいいですか？」

「いいわよ？　なに？」

ミソラは、昨日の「自分の体が自分のもので無くなる感覚」のことを話した。

「……それも共鳴が原因でしょうね。自分の体の外から、自分と同じ周波数を感じたから、そういう感覚に感じられたんじゃないかしら」

「でも、ボクはそんな感覚、感じませんよ？」

それを聞いたヨイリーは困ったように視線をエア・ディスプレイか

らそらした。

「それは……スバルちゃんが、……」

「……ボクが……？」

「……鈍感だからよ」

ブッ！！

それを聞いて、ウォーロックとシドウが同時に吹き出した。

「ち、ちょっと、２人とも、笑うな！」

『ククク……だ、だってよ……』

「ど、鈍感もそこまで行っていたか……ククク……」

「え、えっと……」

ミソラはなにやら自分のせいでスバルの鈍感が浮き彫りになった気がして対応に困っていた。なんとかスバルの名誉を挽回してあげようと、ウォーロックとシドウを交互にあせあせと見つめてる。

「……まぁ、とにかく、共鳴を避けるために、昨日言ったことの二つの内のどちらかをがんばることね」

「絆を高める……か……」

「……はぁはぁ、でも、気をつけろよ、お前ら」

シドウは笑いをやっとのことでこらえて言った。

「何をですか？」

「また狙ってくるぜ、グレイのやつ」

「……そうでしょうね」

シドウの神妙な声に、スバルも声のトーンを落とす。

「だから、自衛のためにも、早く絆は高めておけよ」

「はい……」

「……でも、お前らほんとにいつも一緒にいるよな～」

シドウは急に声のトーンを上げた。

「……暁さん？」

さすがに昨日あれだけ自分たちの関係についてとやかく言われたミソラは、その言葉の意味と続きが分かっているようで、赤くなっていた。恥ずかしさと、怒りで。

「……これはスバルとミソラのキスフラグ確定か

ブチッ！！

エア・ディスプレイが突然消えた。

「……あれだけ元気があれば問題はなさそうですね、ヨイリー博士？」

「そうね……」

ヨイリー博士は少し笑って言った。

「……」

「ミソラちゃん……」

ミソラは震える手でハンターをポケットにしまった。

「え、えっと……大丈夫？」

「……なにが？」

ミソラはスバルを振り返った。スバルはミソラが完全にキレた顔をしていると思っていたが、ミソラの顔はむしろ嬉しそうだった。

「え……あ……いや、暁さんにからかわれて、大丈夫かって……」

「あぁ、大丈夫に決まってるじゃない！あれは暁さんの優しさだからね！」

スバルはきょとんとした顔をした。

「え？　優しさ？」

「うん。さっきの『気をつけろ』っていうのが、わたしたちを気遣う言葉が暁さんの本心。でも、そこで終わっちゃうと、自分らしくないし、それにわたしたちの不安を和らげるためにも、わたしたちをからかっておく。それが暁さんの励まし方だよ」

「……やっぱりすごいな、ミソラちゃんは」

スバルに急に褒められて、今度はミソラがきょとんとした。

「なんで？」

「だって、暁さんの真意にちゃんと気付けるんだもん」

「……まぁね、一か月も一緒にいればわかるよ」

「でも、師匠のことをそこまで理解できるミソラちゃんはやっぱりすごい人だよ」

「……スバルくんにはかなわないけどね」

「な、なんで？　ミソラちゃんのほうが全然……」

スバルの言葉をミソラは、首を横に振って制した。

「スバルくんがいなかったら、わたしは他人を気遣う心を忘れたままだったよ、絶対。それを気付かせてくれたのも、スバルくんなんだから」

「……それはボクのセリフだよ、ボクだってミソラちゃんがいなかったら、こうはなってなかったから……」

「……フフフ！お互いに、お互いがいなかったらダメだったと思えるのって、なんか素敵だね」

「……そうだね！」

……2人は測らずともお互いの絆を高め合っているのであった。

2章　謎のクリムゾン　終

31、孤独の続き（後書き）

シドウに言わせた「キスフラグ」って単語、存在するのかどうなのか・・・

ちなみに、サブタイの「孤独の続き」は、本来この回は0話のスバルとミソラのそれぞれの回想の続きを描こうと思っていた、その名残です。そのせいか、あんまりマッチしたサブタイではなかったですね・・・。

次回はいよいよ、グレイに継ぐオリキャラの登場です！お楽しみに！

32、ピンクと水色（前書き）

ＰＶ４０，０００アクセス、ユニーク５，０００人突破！

ＸＸＸ？、

ｍｉｓｏｒａ　＆ａｍｐ；　ｍａｄｏｋａ

32、ピンクと水色

――1時間目の授業後の休み時間。

「えっとあなたは……あいざわ　らぶこさん！」

「正解！」

「じゃあ、俺は？」

「やまもり　くうたくん！」

「おー！」

「……何やってるの？ミソラちゃん？」

スバルが問う。見れば、ミソラの周りにほとんどの生徒が集まっている。

「あ、スバルくん！　今ね、どれだけみんなの顔と名前を覚えられたか、試してるの！」

「へぇ、でも、3日でよく覚えたね！」

「まぁね、ドラマとかでよくセリフ覚えたりしてるし。でも……えっとキミは……かみ……？」

「かみがた　キメ太！」

「あーっ！それだ！」

ミソラは悔しそうにした。クイズで、あと少しで思い出せそうなところまで来ているのに、思い出せず、答えを言われてやっと思い出せたときのような悔しさを味わっているのだろう。

「……？　あの子は？」

教室の隅っこの席に座っている生徒を見て、ミソラが言った。教室のほとんどの生徒がその場に集まっている、と、「全員」ではなく「ほとんど」と言うしかない原因がこの子である。その子は青い、内側にカーブした短髪に、水色のワンピースという外見だ。その子は何かの本を読んでいる。

「あぁ、あれは……水瀬マドカさんだよ」

スバルが紹介した。

「……あんなやつ、いたっけか？」

ゴン太が言った。

「ゴン太くん失礼ですよ！」

キザマロが焦って言った。

「静かな子なの？」

ゴン太の態度を見て、ミソラは「水瀬マドカ」のクラスでの立ち位置を知った気がした。

「そうね、いつもあの子はあそこでああしてるかも」

ルナが応えた。クラスの委員長として、やはり心配なのかルナはちょっと悲しそうにも寂しそうにも見える顔をしている。

「ふぅん……」

ミソラはそう言うと、人ごみを掻きわけてその少女の前まで歩いていき、後ろに手を組んで話しかけた。

「何読んでるの？」

「……え？」

その少女は顔をあげた。ミソラにそういう趣味はないが、なかなか可愛らしい顔立ちであった。本を読んで俯いていたせいで見えなかったが、紫色のきれいで優しそうな、暖かみのある瞳をしている。顔を上げたことで、首から胸に下げた青い雫のような形をしたペンダントが揺れていた。

「わたし、響ミソラっていうの。よろしく」

「……うん、知ってる」

その少女はちょっと笑って言った。もちろん、ミソラ自身もこういう反応をされるのは分かっていた。しかし、やはりこちらから自己紹介した方が、相手にしてみれば自分も自己紹介をしやすくなる。クラスの隅っこで一人でいるような、あまり人と積極的にかかわらない人はこうした方が接しやすいだろう。

「……わたしは水瀬マドカ。こちらこそ、よろしく」

「うん！」

しかし、そこで休み時間終了のチャイムが鳴り響いた。「名前当てクイズ」に１０分休みの時間を割きすぎていた。

「あ……、じゃあ、またあとでね、マドカちゃん！」

「うん」

《……おい、ハープ、この周波数……》

ウォーロックがハンターに入ったままハープに話しかけた。

《……やっぱり気付いた？　懐かしいわね、あの子の周波数よ、これ》

《……オレ、ＦＭ星に帰りてぇ……》

《やっぱりあなたはあの子が苦手ねぇ、クスクスクス……》

《あー、鬱（うつ）だ――――……》

――時は進んで、放課後。

「マドカちゃん、一緒に帰ろ！」

ミソラが催促した。その後ろにはルナルナ団のメンバーが控えている。ミソラは、なんでこんなにこの子を意識してしまうのだろう、と自分でも思った。なにか、マドカからは自分と似たようなものを感じるのだ。

「……」

しかし、マドカはなにか迷っているように、挙動不審に瞳をきょろきょろと動かしている。

「……？　どうしたの？」

「……ごめんね、これから病院行かないと」

「……どこか悪いの？」

ミソラが急に心配そうな目をして聞いた。

「違うの、……わたしのお母さんのお見舞いだよ」

「お母さん、どこか悪いの？」

「うん、心臓がちょっとね……」

「そ、それ、大丈夫なの！？」

ミソラが焦ったように問う。

「たぶん……前よりだいぶ良くなってるから……。でも、もう何年も病院生活だから、なるべくわたしが行って寂しくないようにしてあげないとって思って」

「そうなんだ……」

ミソラは似ている、と思った。自分に、著しく。病弱な母親を寂しくさせないように歌を必死に作っていたころを思い出すと、今でも涙が出そうになる。そんな自分と同じ境遇を持つ少女が目の前にいる。たとえそうでなくても他人の不幸を自分の不幸のように嘆くことのできるミソラがマドカを放っておけるわけはなかった。

「わたしにできることがあれば協力するよ？」

それを聞くと、マドカはバッと顔を上げてミソラに向き直った。

「ホント！？　わたしのお母さん、ミソラちゃんのファンなの！　だから、歌とか歌ってくれると、きっと喜ぶと思うんだけど……」

「歌うぐらい、お安い御用だよ！」

「じゃあ、明日の放課後にでも……いい？」

マドカは上目づかいでミソラに聞く。

「うん、分かった。じゃあ、お母さんによろしく言っといてね！」

「うん！」

そして、マドカは教室のドアへと向かおうとした。

『おい、ちょっと待て、女』

ウォーロックがスバルの横に現れて言った。

「ロ、ロック!?　『女』じゃなくて『水瀬マドカ』って名前が……」

『じゃあ、マドカ、お前、ウィザードを出してみろ』

「……え？　いいけど……」

マドカはそう言うと、ハンターを掲げた。

「ウィザード・オン！」

マドカの目の前に、イルカのような電波体が現れた。

『みなさん、こんにちは！　わたし、ドルフィンと申します！』

「「ど、どうも……」」

みんなは急に高いテンションで自己紹介されて戸惑った。

『……そして……やっぱりハープだ！　久しぶり～！！』

ドルフィンが喋った。それに呼ばれたようにミソラの隣にハープが現れた。

『ドルフィン！　本当に久しぶり～！！』

「……ハープ、知り合い？」

ミソラが聞いた。

『ええ、知り合いどころか、親友よ！』

「へぇ～！」

ミソラがうれしそうに言った。ミソラはハープの友好関係について全くと言っていいほど知らないので、知ることができてうれしそうだ。

『そして、ロックの……クスクスクス……』

『ハープ、テメェ、黙りやがれ！』

「ロ、ロックのなんなの？」

スバル、いや、その場の全員が気になるところでハープが言葉を切ったので、スバルは続きを急かした。

『ロックの……』

『やめろ、ハープ！！』

『……女性に対する苦手意識を作った張本人よ』

「……えええええええ！？」

『ったく……ハープ、てめぇ……』

ウォーロックは額に手を当ててうなだれた。

『まぁ、この子が１００％じゃないだろうけど、この子が大きな要因であることは間違いないわね』

ハープの補足説明を無視して、ウォーロックはドルフィンに向き直った。

『……だからお前とは会いたくなかったんだよ、ドルフィン……』

『あら、わたしは会いたかったですよぉ？　ウォーロック！これでまた、からかえるんですからね！』

『……スバル、ＦＭ星に帰っていいか？』

「そんなにヤなの？」

『あぁ、コイツと一緒にいるのはハープと一緒にいるのの１０倍は嫌だ』

ウォーロックは依然としてうなだれた表情だ。

『そんなこと言わないで、楽しみましょうよ～！』

『楽しんでるの、いつもお前だけだったろうが！』

『そうでしたっけぇ～？』

ドルフィンは、現に今も楽しそうだ。

「ロック、ドルフィンってどんな人なの？」

スバルはドルフィンに飛び出していきそうなウォーロックを諫めるために質問した。

『……こいつはＦＭ星人でも１，２を争うほどの強さを持ついるか座のＦＭ星人でな……。かつての誰も信じなかったころのＦＭ王にほぼ唯一意見できたのがこいつだ。さらに、ＦＭ軍親衛隊の隊長だったのだが……、地球にいるところをみると、その任からはもう降りたみてぇだがな……』

「……そんなすごい人なの！？」

見た目や立ち振る舞いからは想像もできない。

『……ＦＭ軍親衛隊っていえば、ありがとうございました、ウォーロック！』

『あん？なんの話だ！？』

『ＦＭ星をシリウスの手から守ってくれたんでしたよね？　これでわたしの元同胞たちも安らかに眠れるでしょう……。そのかたき討ちのお礼ですよ』

――ＦＭ軍親衛隊。シリウスのブラックホールを止めるために乗り込み、壊滅させられた部隊である。

『……へっ、お前から礼を言われるときが来るとはな』

『ＦＭ星のころのあなたはやんちゃでしたからね。地球にきてまともになって、礼を言われるようなことをするようになったからでしょう』

『や、やんちゃって……』

まるで子供のような扱いに、ウォーロックは再び不機嫌な顔をした。

『……そして、スバル様、いや、ロックマン様にもお礼を言わなくてはいけませんね』

「え、いいよ、お礼なんて！（っていうか、『様』って……）」

『いえいえ、ウォーロックと共にＦＭ軍親衛隊の子たちのかたき討ちをしてくださったこと、そしてウォーロックをまともにしてくだ

さったこと、すべて感謝しております！』

「あ……えっと……じゃあ、その言葉ありがたく受け取っておきます……」

スバルは、ドルフィンのキャラにつられてかしこまって言った。

『……さてと……あなたたちにも久しぶりに会いたくなってきましたよ……。いるんでしょう？　コーヴァス、ヴァルゴ？』

ルナルナ団　＋　マドカのグループのそばにいたジャックとクインティアのハンターから呼ばれた2人が現れた。

『ちぃっ……』

『……』

いつも勝気な2人が、今は悔しそうにしながら、うつむいている。

『あなた達もＦＭ星のころはＦＭ軍親衛隊の手を焼かせてくれましたが……。すこしはマシになったんでしょうね？』

『ち……親衛隊の奴らは大したことなかったんだが、こいつだけは、手も足もでなかったってぇのに……。地球まで来て、また会っちまうなんてな……』

その言葉で、スバルは一つの考えに行き立った。コーヴァスとヴァルゴがＦＭ星を離れたのは、実はドルフィンから逃げてきたのではないか？

『……まぁ、ウィザードとして再構成されたのなら、人間に尽くすプログラムもされてるでしょうし……、今は大目に見ておきますよ』

『はぁ……』

ヴァルゴがため息をつき、2人は再びハンターへ戻っていった。

『さて！　自己紹介も済んだことですし、病院に行きましょうか？　マドカ！』

……どうやら、ドルフィンにとって今のコーヴァスとヴァルゴとのやり取りも自己紹介のつもりだったらしい。

「うん！　それじゃ、またね、みんな！」

「また明日！」

そして、マドカとドルフィンは去って行った。

「水瀬さんとドルフィンか……なんか、いいコンビかも」

「そうだね……仲良くなれるといいな……」

ミソラはそう言いながら、なぜか悲しそうな顔でその後ろ姿を見つめていた。

32、ピンクと水色（後書き）

あいざわ　らぶこ、かみがた　キメ太、やまもり　くうたは、流星３の一番最初の、５－Ａの教室に実際にいる、グラフィックの使い回しをされている、その辺を歩いてるどうでもいいキャラです。この他に、つぶら　ひとみという奴もいます。

33、イルカの告白（前書き）

XXX？、

Confession of dolphin

33、イルカの告白

「スバルくん、ここの解説、意味が分からないんだけど……」

と、ミソラはスバルの方に自分のドリルを放り投げて聞いた。

――星河家、スバルの部屋。スバルとミソラはこの部屋に集まって学校の宿題を仕上げていた。

「どれどれ……。あぁ、これはね、問題文に『列車が鉄橋を完全に通り抜けるまで』って書いてあるから、鉄橋の長さと列車の長さを足した長さを、列車は走らないといけないんだよ」

「へぇ～」

「だから、鉄橋の長さと列車の長さを足して、それを列車の速さで割れば、時間が出るってわけ！」

「おぉ～」

ミソラはスバルに感嘆の声をあげた。

「なんていうか、さすがだね、スバルくん。」

「いやいや、ボクは理系は得意だけど文系は全然……」

「なんか分からないところ、あるの？」

「うん、ここなんだよね……」

スバルが指したのは、地理の地図記号の内の1つで、その下にこの地図記号の意味を書け、と言わんばかりに長方形がプリントしてある。もっといえば、スバルはその中の円の中に×を書いたようなマークを指している。

「……あぁ、これは警察署だね。」

「交番とごっちゃになっちゃってさ……」

「地図記号っていうのは、丸で囲まれると位があがるんだよ?」

「そうなの!?」

「うん、交番を丸で囲むと警察署、小中学校を丸で囲むと高校、町村役場を丸で囲むと、市役所って具合にね!」

ミソラは説明しながら地図記号の一覧表の該当箇所を指で指していく。

「……ホントだ!そうなってる!」

「ね?簡単でしょ?」

「でも、工場と発電所と灯台は?」

「工場は歯車、灯台は灯台を上から見て周りに光が放たれてる様子、発電所は歯車と送電線を現してるから、それが分かってれば間違えないでしょ?」

「確かにそう見えるかも……」

「そんな風に、地図記号はほとんど由来があるからそれさえ分かればＯＫ！」

「……すごいじゃん、ミソラちゃんだって！」

「……へへへ、でも、スバルくんとは逆で、文系は得意だけど、理系は苦手かも……」

ミソラは普段から曲を作ったり仕事をして社会性を培ったりしているせいか、文系が得意であった。……地図記号は紙の地図をいつも使用している、などの事情がない限りはそれらで培えるものではないが。

「あと少しで終わりだね、がんばろ、スバルくん！」

「うん！」

「うわっ、それ反則だろ、ロック！」

『へっへっへ、軽いマシンで走ってるお前が悪い！』

宿題が終わり、レーシングゲームで遊ぶスバルとウォーロック。対して……

「この歌詞、もうちょっと変えた方がいいんじゃない？」

『え～わたしはこれでいいと思うけど……』

ミソラとハープは曲作りをしている。しかし、その途中でミソラは黙ってなにか考え事を始めた。

「……」

『……？　どうしたの、ミソラ？』

「ねぇ、スバルくん」

「うわっ、ちょっ……」

ヒュー……

急に話しかけられて集中力散漫になったスバルの操作するマシンはコースアウトして奈落の底へ落ちていった。

「あー……」

『へへへ、ザマミロ！』

ウォーロックが嬉々としてスバルをののしる。

「……えっと……ゴメン、スバルくん……」

ミソラは漫画でよくある後頭部にかく汗をかいて、謝った。

「……それで、どうしたの？」

気を取り直してスバルはミソラに聞いた。

「うん、あの、マドカちゃんのことなんだけど……」

「水瀬さんがどうかした？」

ゲームを中断してミソラに向き直ってスバルは聞いた。

「さっき話してた時……何か、距離を置かれてたような気がしたんだけどさ……」

「そう？　ボクはそうは思わなかったけど……」

スバルは眉をひそめながら言った。

「でも、自分のお母さんのことを話すとき、何かためらいがあったような……。間も長かったし……」

「単純に、自分のお母さんが、その……心臓の弱いってことを話したくなかっただけじゃないの？」

スバルは他人の母親の病状を話すのに気が引けたのか、口ごもりながら言った。

「う～ん、ならいいんだけど……」

『でもよ、あのマドカってヤロウ、かない深い孤独の周波数を持っ

ていたっぽいぜ？』

「そ、そうなの！？」

孤独の周波数。心に孤独を抱える者が持つ、独特の周波数。かつて、スバルもミソラも持っていたもの。ずいぶんと聞いていなかった単語である。しかし、今のウォーロックは過去形で言った。今は持っていないのだろう。

「それもお母さんが心配だっていうのと、クラスに馴染めていないだけじゃ……」

『……たぶんそうだろうけどな』

『……』

「！？」

急に気配に感づいてその場の全員が振り向くと、ドアの前にドルフィンがいた。

「『ドルフィン！？』」

『……やはり、ここでしたか。さきほど、周波数を記憶しておいてよかったです』

そのドルフィンの声は、どうもミソラに発せられているようだった。

『ドルフィン、てめぇ、何しにここへ……』

『だまりなさい、ウォーロック……』

『！！』

ドルフィンは、先ほどの、にこやかに会話していた時からは想像もできないほどの殺気を放っている。

『今はあなたを構うためにここへ来たのではありません』

どうやら、これが真面目なモードのドルフィンのようだ。

「ドルフィン、ちょうどよかった。聞きたいことがあるの」

ミソラが近寄って言った。

『……なんでしょう？　ミソラ様』

ドルフィンはあくまで平然とミソラに受け答えをする。

「マドカちゃんって、わたしのこと……その、嫌っていたりしない？」

『……かつては憎んでいました』

「！！」

ミソラの予想はおおよそ当たっていた。でも、その予想を超える事実に、ミソラはショックを受けた。

「に、憎んでた！？　なんで……」

スバルは信じられない、という面持ちで聞いた。

「な、何かあったの？昔……」

ミソラが聞いた。

『……そうです。わたしが今、ここにいる理由はそれです』

「？」

『……今でこそ、マドカはあなたとの友情を望んでいます。しかし、今のまま、何も知らないままで行動を共にしても、それは仮初（かりそめ）の友情にしかなりませんし、なによりも、あなたが何も知らないままでいる事は、あまりにも残酷すぎます。あなた自身、無知のままでいたくはないでしょう』

「……教えて、ドルフィン。何があったの？」

『……わたしはあなたに真実を知らせに来ました。しかし、ここで確認をとります。本当に、真実を聞きたいですか？』

「……どういうこと？」

ミソラは緊張でジンジンと痛む頭を無視して聞いた。

『……これからわたしが告げることは、あまりにも残酷で、あなたにとって、精神に対する負荷が強すぎると思われます。これを聞いた後、あなたが押しつぶされる可能性も十分ありえます。ですから、問います。あなたは、それでも、聞く勇気がありますか？』

「……」

聞くのに、勇気がいるほど、ショックな話。ミソラは、怖かった。憎まれるという経験ですら初めてなのに、その理由を聞かされるなんて……。でも、話を聞かずに、知らずに生きていくことの方が、ずっと怖い。だからその答えは、

「……ある。わたしが過去に何か酷い事をしたんなら、それを知らずに生きていくことはできない。現実は受け止めないといけないから……！」

ミソラは、ドルフィンに、というよりは自分自身に言い聞かせるように言った。そう言いながら、ミソラは手足が震えている。ドルフィンはそれを憐れむように見てから、言った。

『……分かりました』

ドルフィンは、後ろを向いてから、話し始めた。

『今からほぼ、ちょうど一年前……。それまで順調に回復してきて、病院生活から自宅療養で済むほどになっていた、マドカの母親が、突然、再び病院送りとなりました』

ミソラは生唾を飲み込んだ。

『それからは彼女は生死をさまよい、三ヶ月後になんとか一命は取り留めましたが、かつて初めて病院に担ぎ込まれたとき以上にマドカの母親は衰弱してしまいました』

「……」

スバルも緊張した面持ちで話を聞いている。

『彼女を病院送りにした原因は、体内に埋め込まれたペースメーカーが破壊されたため』

……ちょっと待てよ、この話の流れ、もしかして……

「そのペースメーカーを破壊したのが……いえ、もっと言えば、マドカの母親を殺しかけたのが――――

ドルフィンは振り返り、辛そうに目を細めながら次を口にした。

「――あなたです、響ミソラ様」

33、イルカの告白（後書き）

Man is a living thing that commits an offense.

３４、自責（前書き）

ＸＸＸ？、

ｓｅｌｆ－ｒｅｐｒｏａｃｈ

34、自責

「え……！？」

ミソラの目が見開かれる。

「ウソだ！　ミソラちゃんがそんなこと、するはずがない！」

『そうですね、今のミソラ様からは想像もつかない行為です』

ドルフィンはあくまで冷静に、あくまで淡々と告げる。

「……今の？」

『ですが、かつて、人を傷つけたことがあるはずです』

「……まさか！」

「ミソラちゃん！目を覚まして！！キミは宇宙人に体を乗っ取られてるんだ！」

『クスクスクス……。カワイイ坊や、わたしたちの邪魔をしないで

ちょうだい。ハープ・ノート、あの子はわたしたちを邪魔する悪い子よ』

「わたしの邪魔をしないで！」

「おねがい、スバルくん。キミは傷つけたくないの。だから邪魔しないで……」

『どうするよ？　無差別に襲い始めたぜ、後を追わなくていいのか？』

「追うに決まってるだろ！　すぐにウェーブインして追いかけよう！！」

ミソラの脳裏に、あの時に襲ったファンたちの姿が浮かぶ。

『……そう。わたしはその時はまだＦＭ星にいたのですが……、あなたがあの時に襲ったファンたちの中に、マドカの母親もいたんですよ……』

「……！！」

見開かれたミソラの瞳に、車いすに乗った女性が映る。その女性に向けて、ギターを構えて、そして――

ミソラの目に涙がジワリと浮かび、頬に伝う。

『その時に放った音波が体内のペースメーカーに作用して、破壊してしま――――

ガチャッ！！

ミソラは素早くドアノブを回して外へ飛び出した。

『ミソラ、待って！』

ハープもミソラの荷物一式を持って、後を追った。

「『……』」

後には、嵐のような静けさのみが残った。

「……教えてくれてありがとう、ドルフィン」

スバルはミソラの代わりに礼を言った。

『いえ……』

「キミの言うとおり、ショックでも聞いて良かったと思うよ、ミソラちゃんもたぶん、そう思ってる。」

『えぇ、無知よりも恐ろしいものはありませんからね。……では、

わたしはこれで』

そう言うと、ドルフィンは消えた。

「……どうしてこうなっちゃうのかな……」

『……そればっかりは分からねぇ……』

ウォーロックも親密な顔で応えた。

バンッ！

ミソラの部屋のドアが乱雑に開かれ、ミソラはそのままベッドに泣きじゃくった顔をうずめた。

「う……うぅぅぅ……」

『ミソラ……』

ハープは、何と声をかけたらいいのか分からない。ひとまず手に持った荷物を所定の位置に戻し、カーテンを閉めた。

「どうして……？　どうして！？　わたし……ッ……うぅぅ……」

『ミソラ……あなたのせいじゃ、ないわ』

「なんで！？」

ミソラは顔をバッと上げ、赤い目でハープを睨みつけた。

『あれは、あなたの意思でやったことじゃない。わたしが、あなたをそそのかしてやったことよ。責任はわたしにある。わたしが悪いの』

「その、そそのかす言葉に共感したのは誰！？　意見に乗ったのは誰！？」

『……』

「弱かったわたしだよ！！　他の誰でもない、わたしなの！！」

『……ミソラ……』

そこまで言われてしまうと、ハープは何も言い返せなくなってしまう。

「わたし、なんだよ……。わたしが、この手で、やっちゃったの……。わたしと同じ人を、わたしが作っちゃったの……」

「世界中にはわたしやスバルくんのように親をなくした人ってたくさんいる。そういう人たちのために歌を作りたいの。親を失った気

持ちを知ってるわたしなら、その悲しみを和らげるやさしい曲が作れるんじゃないか……って」

何が悲しみを和らげる歌!?自分で作っちゃってるじゃない!!悲しんでる人を!!

「お母さん、どこか悪いの?」

「うん、心臓がちょっとね……」

「そ、それ、大丈夫なの!?」

「たぶん……前よりだいぶ良くなってるから……。でも、もう何年も病院生活だから、なるべくわたしが行って寂しくないようにしてあげないとって思って」

「そうなんだ……」

ミソラは似ている、と思った。自分に、著しく。

似てるに決まってる!　そうしたのはわたし!!

「わたしにできることがあれば協力するよ？」

「ホント！？わたしのお母さん、ミソラちゃんのファンなの！だから、歌とか歌ってくれると、きっと喜ぶと思うんだけど……」

「歌うぐらい、お安い御用だよ！」

何が、「わたしにできることは協力する」！？人の不幸を作った張本人が！！偽善者もいいところじゃない！！！

自責が、過去の自分の言葉をことごとく否定していく。ミソラの中で、何かが崩れ去っていく。ガラガラと、音を立てて。

「う……うぅぅぅ……あぁぁあああっ！！」

それからも、ミソラの泣き声はやむことはなかった。

「ドルフィン、今までどこ行ってたの!?　心配したじゃない!!」

病院の廊下、そこでマドカがハンターに向かって叫んでいた。病院なので、あまり大声は出せないが。

『……ミソラ様のところです』

「ミソラちゃんの……？　なにしに？」

『……勝手ながら、話させてもらいました。あなたの過去を』

「……!!」

マドカは目を見開いた。

『すみません……』

「そっか……」

マドカはそう言うと、窓に手を当てて、外を眺めた。

「じゃあ、もう仲良くはできなくなっちゃったかな……」

そう言ったマドカの顔は、悲しみそのものであった。ドルフィンはハンターから出てきた。

『……いえ、これはミソラ様にも言ったことですが、真実を隠して友情を深めても、それは仮初の友情でしかありません』

マドカは振り返ってドルフィンに向かい合った。

「……わたし、確かにあの子を憎んでたけど、だからこそ、あの子の気持ちが分かってあげられることもあると思った。だから、いつか、そのことも話そうと思ってたけど、怖かったの。話したら、友達でいられなくなっちゃうかもって思うと……」

『……それは、今後のあなた達次第でしょう……。あなたは、自分から人に話すのが苦手ですから、それを変えていかないと、あなたが恐れたことが現実になりますよ』

「うん……。がんばってみるよ……」

マドカは再び窓の外を見た。普段ならきれいだと思う夕焼けの光景が広がっていたが、今はどこか暗く見えた。

「ミソラちゃん……。今、あなたは何を考えているの……？」

「……」

ミソラはベッドに腰掛けている。長時間泣き腫らしたせいで、目が完全に充血している。赤い目で時計を見ると、午後の９時を指していた。

「……」

『ミソラ……どうするの……？』

あれから、ミソラは部屋にこもりっきりだった。夕食も食べていない。たとえ部屋から出る勇気があっても、泣いたこともあって、絶対に食事がのどを通らない。

「……行くよ、ハープ」

『……どこへ？』

「……1つしかないでしょ」

『……付き合うわ。あなたがどう思おうと、これはあなただけの責任問題じゃない。わたしにも非は十分にある』

「……じゃあ、行こ。マドカちゃんのところへ」

35、音と水（前書き）

XXX?、

HARP・NOTE & MARINE・DOLPHIN

35、音と水

「……」

マドカは、コダマタウンの夜道を歩いていく。今は、今年の4月が5週ある内の4週目であり、少しは夜も暖かくなってきたのだが、やはりまだ少し寒いらしく、マドカは両腕を抱えている。

『冷え込みますね、コートかウィンドブレーカーか、羽織ったほうが良かったんじゃないですか？』

ドルフィンがハンターの中から問いかける。マドカは昼間と同じ、ワンピース姿である。半袖なため、余計に寒かった。

「……それを今言う？　ドルフィン……」

『わたしも今気付きましたから』

マドカはそのまま、車が一切走っておらず、無意味と化した信号機を無視して横断歩道を渡った。と、ふいに冷たい夜風が吹きぬけた。

「うぅ、さむっ……」

『一旦戻ったらどうですか？』

「い、いいよ、このくらい大丈夫。それより問題なのは……」

マドカは不安そうな目で辺りを見回した。

「……暗いなぁ……」

『夜だから当たり前じゃないですか？』

「そうなんだけど……やっぱり慣れないな……」

『マドカってホラーの類のもの、嫌いでしたっけ？』

「いや、お化けは多分大丈夫……っていうか、人並みに怖がるくらいだけど、暗いのが……ダメ……」

ドルフィンが見ると、マドカは震えている。しかし、目は恐怖を映し、少し涙がにじんでいる。寒さによる震えではないようだ。

『そんなにダメなんですか？』

「うん……。暗いと、まるで世界に自分一人が取り残されたような気になって……」

『……』

「……あ」

マドカの目の前には、学校の校門。しかし、用事は学校ではない。マドカは右に曲がって、左手に見えてきた階段を上った。

……4月の冷え込む夜道を羽織るものを忘れても歩いて目指した場所は、ご存じ展望台。それでは、展望台に何の用か？　それは……

「ゴメン、待った？　ミソラちゃん」

マドカは、展望台のベンチに腰掛けて空を見上げているピンクの服の少女に話しかけた。

「……ううん。ゴメンね、こんな夜中に呼び出して」

ミソラは空に向けた視線を落としてマドカに言った。

「いいよ。……暗かったけど……」

「？」

ミソラは不思議そうに首をかしげた。

「あ、ううん。気にしないで」

「そ、そう……？」

「う、うん、大丈夫……」

「……」

「……」

2人の間に、気まずい空気が流れる。

「「あのさ……」」

2人が同時に話しかけた。

「……どうぞ、そちらから」

「いえ、そちらからで……」

この譲り合いがしばらく繰り返された後……

「……わたしのお母さんのことでしょ」

「!?」

マドカが言いにくそうに切り出した。

「聞いたよ、ドルフィンが話しちゃったらしいね」

「……うん。それで、その……闘ってくれない?」

「……え?」

「ウィザードがFM星人なら、電波変換できるんでしょ?」

「できるけど、なんで……」

「……お願い」

マドカはミソラの目を見た。目がずいぶんと赤かった。

「……分かった。やろう……!!」

2人は展望台の広いスペースに移動し、向き合った。

「トランスコード、００４！　ハープ・ノート！！」
「電波変換！　水瀬マドカ、オン・エア！！」
それぞれ、ピンクと水色の光に包まれ、電波変換した。
「……！」
マドカの代わりにいたのは、ヘルメット、両腕にイルカのヒレが付いて、緑色のバイザーがあり、胸に雫のマークがある電波人間だった。
「……ふーん、やっぱりドルフィンと電波変換したらイルカになるんだね……」
「うん、電波人間名は『マリーン・ドルフィン』！　よろしく、ハープ・ノートさん？」
「うん、じゃ、……いくよっ！　ショックノート！！」
ハープ・ノートは両脇にアンプを設置してから手に持ったギターを弾き、音符型の衝撃波を放つ。マリーン・ドルフィンはそれを宙にジャンプして避け、空中にそのまま静止した。さらに2発、3発と連続して放つものの、それもマリーン・ドルフィンは宙を舞い、ひらりひらりと避けてしまう。
「アクアスラッシュ！」
叫んでマリーン・ドルフィンは左腕を青い半透明な刀に変える。
「今度は――」

言いながら、４発目に飛んできたショックノートを切り裂いて、

「――――こっちの番ッ！！」

ギュン、と風を切る音をたててハープ・ノートに向けて急加速した。

「！！　エレキスラッシュッ！！」

ギィン！という金属がぶつかり合ったような音が夜空に鳴り響く。マリーン・ドルフィンが振り下ろした青いソードをハープ・ノートが黄色いソードで横なぎに振るって受け止めていた。キリキリと鍔迫り合いの音が刃と刃の触れ合っている部分から漏れてくる。

（ぐ……っ）

ハープ・ノートは顔をゆがめる。地面の土をハープ・ノートの足がブルトーザーのようにじりじりと、少しずつえぐり取って山ができて行く。

（重い……ッ！）

そう、彼女が足を動かしているのではなく、マリーン・ドルフィンの刀を押しつける力が強すぎて押され、ハープ・ノートが体ごと徐々に後ろに動かされているのだ。

「……すごいな、今のを反応できるなんて」

マリーン・ドルフィンが口を開いた。ハープ・ノートとは対象的に、押し合いの最中にも関わらず少し余裕すら見られる。

「……そっちこそ、すごいじゃん。空は飛べるし、速いし、力もすごいし……」

「あぁ、ちょっと昔、剣道と、ついでに空手をやってたことあってさ、たぶん力の入れ方とかが違うんだと思うよ？」

「ど、道理で……ッ……」

ビキン！！

「「！！」」

2人が突然響いた音に驚いた。見ると、刃と刃の接触部分からエレキスラッシュの刀身に放射状にひびが走っていた。

「……」

マリーン・ドルフィンは急に剣を引き、宙返りして距離を取り、数メートル先の空間に制止した。そして腕に宿る刀を消し、普通の腕に戻した。

「……でも、あんまり使いたくないんだよね、昔を思い出しちゃうから」

「……？」

ミソラもエレキスラッシュを消しながら、眉をひそめた。そう言ったマドカの、バイザー越しに見える目はひどく悲しげに見えたからだ。

「……だから、無闇に刀は使わない。……行くよ」

マリーン・ドルフィンを取り囲むように水の球が出現したかと思うと、見えない手が粘土細工をこねているように形を変えていく。そして、その水の塊は3匹のイルカに変形した。

「……スイムドルフィン！！」

マリーン・ドルフィンが左腕をハープ・ノートにさっと向けると、それに従うように周りの水でできたイルカがハープ・ノートめがけて突進してきた。

「くっ！」

ハープ・ノートは地面を蹴って飛びあがる。それを見たマリーン・ドルフィンが左腕を下から上に突き上げるように動かすと、イルカたちはハープ・ノートを追って上に向かった。

「ッ！？」

イルカが自分の元いた地面に激突するものと踏んでいたハープ・ノートは眼下から迫ってくるイルカを見て目を見開いた。

「くぅ……はっ！」

ギターをはじくと、放物線を描いて飛び、落下を始めたハープ・ノートの体の前に畳にして1畳ほどの大きさの音符型の足場が出現した。それにスタッと身軽に着地すると、スケートボードに乗っているように両足を前後に開いて立ち、彼女は足場ごと空間をスライド

するように動き始めた。

「……へぇ、あぁやって飛ぶんだ……」

マリーン・ドルフィンは見上げながら感心したように言った。

「……だけど」

言いながら顔の横に左手をもってきて、再び前に突き出す。すると、ハープ・ノートの後ろからイルカが追いかけてきた。

「……な、なにこれ!?」

ハープ・ノートが耐えかねて、足場を操作しながら後ろから追いかけてくるイルカを困り果てた横目で見つめながら叫んだ。上に下にと足場を操って宙を舞うハープ・ノートに半永久的に付きまとう3匹のイルカ。ハープ・ノートが下に向かえばイルカも下に、上に上がればむこうも上がるし、右に曲がれば同じく曲がり、左に曲がれば曲がる。振り切ることもできずに、ハープ・ノートはとにかく宙を縦横無尽に駆け巡り、避け続ける。しかし、最初こそ焦ったが、ミソラも伊達にシドウに戦いを教わったわけではない。ハープ・ノートの視線の先には、マリーン・ドルフィン。避けるために背後のイルカにも気を配りながら、しきりにマリーン・ドルフィンの方に目を向ける。――相手をよく見ること、というのもシドウに教わったことの一つだ。スポーツなどでも、これが重要な事は多い。

「……！」

そして、見つけた。……気付いてしまえば、何のことはない、簡単なことだった。ハープ・ノートはジェットコースターが宙返りする

ように上に向かって孤を描いて大きくUターンし、そして完全に逆さになると、音符の足場を蹴って勢いよく落下し始めた。その真下には、マリーン・ドルフィンが。

「……ッ！」

「……パルスソングッ！！」

落下しながらギターを真下（マドカ）に向けて構え、叫んだ。

「……」

対するマリーン・ドルフィンはハープ・ノートの行為に驚きはしたが、それに対して何かをする仕草はない。

ドンッ！　という衝撃音が響きわたる。着弾の際の粉塵が舞い上がり、2人を隠した。

「ぶぅっ！」

と、その粉塵を掻き分けるように中からハープ・ノートが飛びだしてスタッと地面に着地した。そして自身が出てきた粉塵を見つめる。もうもうとたちこめるそれも、時間が過ぎるとともに晴れてくる。

「……！」

見ると、マリーン・ドルフィンは立っているどころか、傷一つついてはいなかった。彼女の頭上には何やら青い板状のものが浮いている。それで上からのパルスソングを防いだようだ。

「……やるね、重力も利用した音波攻撃、結構なもんだったよ？」

「……そんなぴんぴんした状態で言われても実感でないね……」

「あぁ、ごめんごめん！　でも、すごいと思ってるのはホントだよ？　……それに、イルカに追われながらわたしの技のこと、気付いたんでしょ？」

「……うん、マドカちゃんの腕の動きで分かる。あの技は自動的に追尾してるんじゃなくて、マドカちゃん自身が操作してた。なら、本体を攻撃して注意をそらせばイルカも消える……」

現に、今頃頭上から飛んできてもおかしくないイルカたちは、どこかに消え失せていた。

「うん、正解。急に上から落ちて来るもんだから、びっくりしちゃった！」

「重力利用しても破れないなんて、それすごいね……」

ハープ・ノートはマリーン・ドルフィンの頭上に浮かぶ板を見つめて言った。

「あ、これ？　これは、『アクアウォール』って言ってね、水を硬化させて造ってる防御壁！」

「水を……硬化？」

ハープ・ノートは再び眉をひそめる。

「あ、まだ言ってなかったね。マリーン・ドルフィン（わたし）の能力は、水の操作。水の状態変化そのものや水の硬度、水の存在する位置なんかを自由に制御する能力！」

水は、その温度によって固体の氷や気体の水蒸気にその姿を変える。それを水の状態変化と呼ぶが、マリーン・ドルフィンはそれすらも自在に操れるというのだ。

「……そんなことが……？」

水を操る水属性は珍しくもなんともないが、そこまで水の全てを自在に操ることができる存在となれば、話は別だ。大体、水の状態変化を操ることができる、という時点で水と氷、という通常ならどちらか片方しか専門として扱えないこの二つの概念を1人で使用できることになる。実在の電波体で言えば、クイーン・ヴァルゴとダイヤ・アイスバーン、2人の能力を1人で所持しているようなものだ。

「水の位置も操れるから、どこにある水でも関係ない。状態変化も操れるから、どんな状態の水でも関係ない！　……例えば――」

不意に、ハープ・ノートはゴウッ！という風が荒れ狂う音を聞いた。気がつくとマリーン・ドルフィンの背後に3つの竜巻が巻き起こっていた。

「……！！」

「こんなこともできる！　エアロツイストッ！！」

先ほどのイルカ同様、この竜巻もマリーン・ドルフィンが操っているらしく、彼女は先ほど同様に腕を前に突き出した。すると、3つ

の竜巻がそれぞれ別々の動きでハープ・ノートに迫ってきた。

「うわ、あれはっ……！！」

ヤバい、と言っている余裕すらない。竜巻の内の1つがハープ・ノートに、竜が体をくねらせているかのように迫って来て、彼女はとっさに高くジャンプした。途端にそれまでハープ・ノートがいたところに竜巻が横切り、地面をえぐり取った。竜巻が通り過ぎた部分だけ、ハーフパイプ状にキレイに削れている。それを目視して冷や汗をかいたミソラは先ほどまで乗っていた音符型の足場を再び呼んでそれに乗り、飛行を開始した。

「空気中の『水蒸気』の『位置』を変え続ければ、それは巨大な風になる！それを回転させれば、竜巻を作ることも可能！」

ハープ・ノートは竜巻を避けながら、風の轟音の中から聞こえて来るマドカの声に耳を傾けた。

「……飛ぶ能力も風で上昇気流を自分で造り出して乗ってるんだけどね。風って元々、高気圧とか低気圧とかが関係してて、元の元をたどっていけば水にたどり着くんだよ？だから、水を操れるわたしが風を操れないわけがない！」

「くぅぅっ……」

ハープ・ノートは唸りを上げながら、くるりとマリーン・ドルフィンの方を向いた。……いや、違う。ものすごい竜巻のせいで、マリーン・ドルフィンの姿など見えない。ハープ・ノートはマリーン・ドルフィンがいるはずの方向を向いて、ギターを構えた。

「……マシンガンストリング！！」

ギターを銃のように構え、先から弦を放つ。パルスソングやショックノートのような「実体」を持たない攻撃よりも「実体」を持つ攻撃のマシンガンストリングの方が相手に届きやすいという判断であった。が、それはすぐに間違いだと分かった。弦は勢いよくギターの先から放出し、竜巻に到達した瞬間に失速してへなへなとあらぬ方向へ流されてしまった。とても本体（マドカ）に届くものではない。先ほどのイルカ攻撃のように本体に攻撃して注意をそらす方法は使えないようだ。……それどころか、相手すら見えない。さっきの「相手をよく見る」すらままならない。

「ぐぅっ！！」

どうしたら相手に攻撃が届くのか、それを考えていたミソラは背後からの竜巻の突進に気付かず、食らってしまった。そのまま前にバランスを崩して足場から落ちて落下した。その落ちて行くハープ・ノートを追うように3本の竜巻が3方向から迫る。そして、地面に着地する寸前にハープ・ノートと地面の間で竜巻たちがぶつかりあって辺りに衝撃を撒き散らして霧散した。ハープ・ノートの体はその竜巻同士のぶつかり合いで生まれた衝撃で一瞬浮いてドサッと風が作った傷跡だらけの地面に着地した。

「ッ！」

地面にうつ伏せに着地したハープ・ノートは、気配を感じて上を見上げて目を見開いた。月を背にマリーン・ドルフィンが上空に浮いていて、腕を突き上げていた。なんとか回避のために立ち上がったハープ・ノートだったが、急に背中に痛みが走って声もなくその場にガクン、と跪（ひざまづ）いた。想像以上に背中に受けた傷は深かったようだ。

「……ダウンバースト！！」

上から声と、その直後に轟音が降ってきた。痛みに顔をゆがめながら再び彼女が見上げると、眼前には吹き荒れる嵐しかなかった。

「……」

ミソラはそれを焦るわけでもなく、恐怖するわけでもなく、……清々しい笑顔で見つめていた。

ズドォン！！

着弾と共に凄まじい轟音が響く。その暴風は地をえぐり、周囲の草木は地面にぶつかって流れてきた風だけで折れそうになる。……この展望台は学校の隣に位置しているのでもしかしたら、学校にまで衝撃波は及んだかも知れない。

風がえぐって巻きあげた土煙が晴れると、そこには――――

――――青き1人の少年が立っていた。

「……」

尻もちをついたような姿勢のハープ・ノートの前で少年は足を広げて立ち、頭を伏せて、緑に光る盾を左腕で天に、マリーン・ドルフィンに向けていた。その盾で先ほどの暴風を防いだようだ。

「……スバルくん！？」

ミソラは呟くように問いかけたが、ロックマンはそれには答えなかった。

「……ゴメン、これは2人だけの問題、ホントはボクは静観するつもりだったんだけど……、今の攻撃はさすがにまずかったな、水瀬さん」

ロックマンは顔を伏せたまま言った。バイザーに光が反射して、表情はみえない。

「ご、ごめんなさい……。やりすぎちゃった……」

マリーン・ドルフィンがロックマンの目の前に降りてきてか細い声で謝罪した。

「……スバルくん！」

ハープ・ノートがよろよろと立ち上がりながら叫んだ。

「なに？　ミソラちゃん」

ロックマンはあえて平然とした声で聞き返す。ハープ・ノートはロックマンの前に立ち、先ほどの竜巻攻撃で傷ついた背中をかばいな

がら問いかける。

「……なんで止めたの!?　なにが『まずかった』の!?　これはわたしの――――」

パァン!!!

ハープ・ノートは首が右に曲がり、その左頬は、赤く染まっている。ハープ・ノートは信じられない、という表情で、頬に手を当てながらロックマンを見返した。ロックマンはそんなハープ・ノートを、平手打ちをかました腕をそのままに、怒りと憐れみが入り乱れた表情で見つめていた。

36、春の訪れ（前書き）

ＰＶ５０，０００アクセス、ユニーク６，０００人突破！

ＸＸＸ？、

Ｖｉｓｉｔ　ｏｆ　ｓｐｒｉｎｇ

36、春の訪れ

「いい加減目を覚ましなよ、ミソラちゃん！！」

「……え？」

張り上げられたスバルの声に、ミソラは目を見開いた。

「ミソラちゃんと水瀬さんが闘う理由なんて、ないはずだよ……？」

スバルの問いかけに、ミソラは目線を落とした。

「……闘う理由は……あるよ……」

目を伏せて、ミソラが言う。

「闘って、わたしに殺されること！？」

「！！！」

スバルの背後から聞こえてきた声に、ミソラは図星だと言わんばかりに目を見開いた。見ると、マドカがまっすぐミソラを見つめていた。

「……分かってたの？」

「当たり前じゃない！　あんな思い詰めた表情（かお）してれば分かるよ！　……わたしがこの戦いを受けたのは、そんなミソラちゃんを止めるため！　わたしはミソラちゃんを殺したいなんて思ってない！」

「……なんで!?　なんでなの!?　わたし、あなたのお母さんを殺そうとしたんだよ!?　あと一歩で殺人者だったんだよ!?　死んで当然じゃない!」

ミソラの言葉に、マドカは悲しげに眼を細めた。

「だからこそ、だよ……」

「……!?」

「……だからこそ、死のうとしちゃ、ダメ。そんなんじゃ、何にも変わらないよ。誰も幸せになんてなれないし、誰もそんなの、望んでないよ。悲しむ人を増やすだけ……」

……ミソラに厳しい事を言えば、ミソラのやろうとしたことは、結局はただ逃げようとしていただけだった。本当に相手のことを想うなら、死んでお詫び、などという方法ではなく、生きて問題に向き合うこと、それが重要。……それが、マドカ、ひいてはスバルの言いたいことだった。

「……でも……」

「それに、わたし、もう誰かが死ぬとこなんて、見たくないよ……。こんな、誰かが消える苦しみはもう……」

つぅっと。マドカの目から涙があふれてこぼれ、頬を伝った。それまで堪えていたのが、耐えきれなくなったように。

「……でも、……それじゃわたし、もうどうしたらいいか分からな

いよ……」

「……お母さんがやられたことで、水瀬さんはキミを責めたりした？」

不意にスバルが口を開く。ミソラは涙を流しながら、首を横に小さく振った。

「でも、それが逆に辛くて……」

「……普通は責められて当然だよね……？」

ミソラはこくんと縦に首を振った。

「じゃあ、なんで責めないの？」

「分からない……」

「その理由を聞こうとは思わなかったの？」

「……ッ！？」

言われて、ミソラは初めて気付いた。今まで、ドルフィンに自分がしてしまったことを聞かされてから、自分はどうしてこうなったのか、自分はどうすればいいのかばかり考えていた。マドカが何を想い、何を考えていたのか。それを知ろうとしていなかった自分に気付いた。――マドカのことを考えいるつもりで、自分のことしか考えていない自分に気付いた。

「今のミソラちゃんは、自分のしてしまったことで気持ちがいっぱ

いになって、見るべきものが見えなくなってるよ……。周りの人のことも、ボクのことも、そして、水瀬さんのことも……」

「……う……」

言葉すら出てこない。自分がこの上なく薄情に思えた。

「『争いはお互いが相手を知らないから起こるんだ』……父さんの言葉だよ」

「……ゴメン、スバルくん……」

今のミソラには謝る言葉しか出てこない。自分を呪う言葉しか思い浮かばない。

「謝る相手が違うでしょ、ミソラちゃん」

「……うん。……」

ミソラは改めてマドカに向き直る。マドカも、涙を拭いて、まっすぐミソラを見返した。

「あ、あの……」

実際に会話の段階になると、頭が真っ白になって何も出てこない。

「ん？」

マドカはそんなミソラに優しく微笑みかける。ミソラは涙を浮かべたまま、言った。

「ごめんね、マドカちゃん……」

それが、精いっぱいの、ミソラの謝罪だった。自分が酷く薄情に思え、恨めしくもあるミソラの、精いっぱいの謝罪だった。

「いいよ、もちろん♪」

ほほ笑みを崩さずにマドカが言う。今なら、その笑顔の意味もミソラには分かる。……「もう、泣かないで」

「それで、その……なんでわたしを責めないの？」

ミソラは涙を拭き、情けなさや自責でまた泣きだしそうになる衝動を抑え、聞いた。

「……最初、恨んでたときに、あなたのことを調べたの。そしたら、両親を亡くしてることを知ったの。それに、去年の夏休みに、ドルフィンに会って、聞いたの。ＦＭ星からの地球侵略の事件があったこと、そのために派遣されたＦＭ星人の中に、ハープっていう人がいたこと、その人にあなたが操られたことをね。それで、今回のことは、誰も悪い人はいなかったってことに気がついたの」

「……なんで!?　わたしはハープの意見に賛成して……」

「ミソラちゃんは、ハープにそそのかされただけ。じゃあ、ハープが悪いの？　違う。ハープはＦＭ王に命令されただけ。じゃあ、ＦＭ王が悪いの？　違う。ＦＭ王は地球からのブラザーバンドが怖かっただけ。」

「……マ、マドカ、ちゃん……」

「あれは事故だったの。運命だったんだよ。いつまでもウジウジ、あいつが悪いだの、こいつが悪いだの言ってもしょうがない。悪い人なんて最初っからいないんだもん。あるのは、お母さんが苦しんでるって事実だけ。それなら、わたしは、お母さんが回復する精いっぱいの努力をするだけだって……思ったの。」

「……う……うぅぅ……」

それ以上、こらえるのは無理だった。再び、ミソラの目から涙が流れる。マドカの優しさが、心に染みた。

「……謝らなきゃいけないのはわたしの方だよ。ごめんね、ミソラちゃんもわたしと同じ境遇を持ってる人間なのに、それも知らずに、憎んだりして。そんな自分が許せなくて、あなたと話す資格なんてないって思ったら、最初にあなたが転校してきても、話せなくて……。わたしも、逃げてたの。あなたにわたしのお母さんのことを話したら、友達でいられなくなるって思ったら……」

「……そ、そんな……わたしの方こそ、自分が弱かったせいでお母さんを傷つけて、弱いせいで、マドカちゃんのこと、見向きもしないで、自分のことばっかり……。ぅぅううう……」

ミソラは両手で顔を覆って泣き崩れた。マドカはそんなミソラに近づいて、抱きしめた。

「……！」

「ほら、こうすると、結構落ち着くもんでしょ？」

「う……うぅぅぅ……」

ミソラの目から余計に多くの涙があふれた。今のミソラは、抱きしめられながら泣き崩れ、まるで母親に身を預けてなく子供のようであった。

「……逆効果だったかな？」

マドカは少し困ったように笑って、ミソラの頭を撫でながら言った。

「……スバルくんにも、ごめんね、やっぱりたたかうべきじゃなかったかな……。わたし、本当にミソラちゃんの気持ちが痛いほど分かったから、逆にためらったら失礼かなって思って闘ったんだけど……」

「……謝ることはないよ、結果、分かりあえたじゃないか、２人は」

スバルは、ちょっと口角を上げつつ言った。

「……そう、だね……。そう言ってくれるとうれしいな……」

「……でも、」

マドカの下から声が聞こえた。その方を見ると、ミソラが涙目のままマドカを見上げていた。

「でも、ホントにいいの？　わたし……」

ミソラは、自責から、まだ自分が許せないでいた。それを感じとっ

たマドカはちょっと上を向いて何かを考えてから再びミソラを見下ろして言った。

「……じゃあ、1つだけ、言うこと聞いてもらっちゃおうかな？」

「……うん……」

ミソラはなんでもする、と覚悟を決めた。マドカはミソラの目をまっすぐ見て、言った。

「と、友達になって、くれない？」

顔を赤らめて、マドカが言う。

「……へ？」

身構えていたミソラは思わず間の抜けた声を出す。

「だから、その……な、なってよ！　友達に！」

罪滅ぼしに、の建前の話なのに、なぜかマドカの方が恥ずかしそうになっている。いつも教室の隅っこにいるような性分のマドカにはこれを言うだけでも結構な精神力がいるのであった。

「……それで、いいの？」

ミソラは若干茫然とした声で言った。

「もちろん！　……わたしたちは、あんな事故さえなければ、もっと早く分かり合えてたはずだよ！」

そう言ってくれたマドカの気持ちが、ミソラには本当にうれしくて、うれしくて。

「う、……うん、ありがとう、マドカ！」

感謝の言葉しか、でない。

「あ、れ？　呼び捨て？」

「うん、まずは呼び方からって、ね！」

「あ、えっと……それはわたしも……？」

「呼びたいように呼べばいいよ。それが一番親しみやすい呼び方なんだし！」

マドカは考えながら右に左に瞳を動かして結論を言った。

「……わたしは今まで通り、ミソラ『ちゃん』で……」

「うん、それでOK！よろしくね！」

「……うん、よろしく！」

そして、笑い合う2人。4月の夜はまだ寒い。だけど、2人は暖かさに包まれていた。

「……あ、えっと……」

スバルが言いにくそうに切り出す。

「どうしたの？　スバルくん」

「いや、もう用事は済んだんだから、電波変換は解かない？　ミソラちゃんも、水瀬さんも」

……ついでに言えばスバル自身も、なのだが。

「あ、うん、そうだ――――

「……ねぇ、スバルくん、わたしだけ『水瀬さん』はさすがに、ずるくない？」

ミソラは素直に従おうとしたが、マドカは別の部分に異論を唱えた。

「え、で、でも……っていうか、『ずるい』って……」

「え～わたしだけさん付けだと違和感ありまくりだよ～……」

「う、それはそうかも……。じゃ、じゃあ『マドカちゃん』で」

「うん、それでよし！」

にっこりと笑うマドカ。「水瀬さん」という距離感のある呼び方を窮屈に感じていたのか、何かのつかえが取れたような、安心したようにも見える笑顔だった。

「それじゃ、もどろっか！」

そう言うと、ミソラは電波変換を解こうとした。

「あ、待って、ミソラちゃん！」

「どうしたの？」

「そんなボロボロの体で電波変換といたら、生身の体の方にも残っちゃうよ！」

「……でも、回復手段がないし……」

「わたしが治してあげる！」

「できるの？」

「もちろん！　後から治そうとしてて闘ってたんだから！」

そう言いながら、マリーン・ドルフィンはハープ・ノートの胸にあるハートマークに両手を合わせた。

「ヒーリングパルス！」

ブゥゥゥン……

マリーン・ドルフィンの手が青白く輝きだすと、ハープ・ノートの全身の傷がみるみるふさがり始めた。

「す、すごい……」

それを見ていたロックマンが感嘆の声をあげた。

「はい、おしまい」

マリーン・ドルフィンが手を離すと、ハープ・ノートの体のどこにも傷は残っておらず、電波変換したて同然であった。

「もう終わり!?　すごい、全然痛くなくなった！」

ハープ・ノートは体のあちこちを眺めながら言った。

「なんでこんな能力あるの？　水の能力だけだったよね？」

ハープ・ノートが不思議そうに聞いた。

「ううん、もうひとつ、音波を操る能力もあるの！　イルカも音波で会話をしたりするしね！　でも、戦闘に使えるほどの力はなくて、回復にしか使えないんだけど……。」

「へぇ～、わたしにも回復技とかあればなぁ～」

「……ハープ・ノートもできると思うよ？この回復技は音波がメインだから、音波専門のハープ・ノートなら、慣れればむしろわたしよりもうまく回復させられるはずだ――」

「それ、ホント！？」

ハープ・ノートは急にマリーン・ドルフィンに近づいて聞いた。

「う、うん……ホントだよ……どうしたの？　そんなに興奮して……」

「ぜひ、ぜひ教えて！　技の使い方！　わたし、スバルくんの役に立ちたいの！」

マリーン・ドルフィンはハープ・ノートの必死さにフッと笑って言った。

「……いいよ、いつでもどうぞ」

「やったぁー！！　ありがと、マドカ！」

本当にうれしそうに言ったミソラを、マドカは愛おしそうに見つめていた。

「今度こそ、電波変換解かない？」

ロックマンが言った。

「あ、そうだね！」

そう言うと、３人とも人間へと戻った。

ピロン！

「ん？」

「あ、わたしのハンターに何かメッセージが……」

マドカはハンターのディスプレイを見た。

電波変換を確認……

サテラポリス　アクセス……

認証中……

「……な、なにこれ？」

「マドカちゃん、もしかしてハンターで電波変換するの、初めて？」

「うん、スターキャリアーからハンターになるのと同時期に、電波世界にノイズが増えてきて、電波変換すると危ないってドルフィンに言われてたから、ウィルスとかは全部ドルフィンに任せてたんだけど……。なにこれ、どうすればいいの！？」

急な出来事に焦り出すマドカを、スバルとミソラはなだめることに徹した。

「だ、大丈夫、マドカ！　落ち着いて！」

認証完了……

水瀬マドカことマリーン・ドルフィンを電波変換ＩＤ「００７」に

登録……
ＩＤカードの発行終了
電波変換の際は、認証コードの送信を要求する
「何これ？　サテラポリスとか、００７とかって……」
マドカが怪訝そうに問う。
「何ヶ月から前から、電波変換はサテラポリスにコード管理されるようになってるんだよ」
「じゃあ、わたしもその管理下に入ったってこと？」
「そういうことになるね。大丈夫、わたしとスバルくんもそれに入ってるから」
「そうなの？」
スバルとミソラが交互に返事をするものだから、マドカは２人を交互に見つめている。
「うん。ボク、シューティングスターロックマンが００３で……」
「わたし、ハープ・ノートが００４だよ！」
「へぇ～……。じゃあ、さっきミソラちゃんがハープ・ノートになるときの掛け声も……」
「うん、登録されるとああいう掛け声になるの」

「へぇ、今度やってみよ……。じゃあ、帰ろ！　もう遅いし！」

「うん！　あ、でもその前に……」

スバルはミソラに気まずそうな顔をしながら向き直った。

「ミソラちゃん、はたいたりしてゴメン……」

申し訳なさそうに言う。

「……あれ、結構痛かったな～」

「……ゴメンナサイ」

「傷心したブラザーをはたくなんて、もう、ブラザー切っちゃおっかな！？」

「いや、あの……その……ゴメン、ほんっとにゴメンって！！　許してぇ！！」

「フフフ！！　パフェおごってくれたら許してあげよっかな～！！」

「ヒ――ン……」

「……なんてね！」

「……え？」

スバルはちょっと驚いた。ミソラは意地悪を止めて、ふっと優しい

顔に戻した。

「謝らなきゃいけないのはわたしのほうだよ、スバルくん」

「ミソラちゃん……」

「スバルくんにはいつも大切なこと教えられてばかりだね、わたし。スバルくんは今までわたしの過ちを気付かせて、正しい道を教えてくれた。初めて会ったときも、オリヒメの仲間になった時も、今だって……。ごめんね、そしてありがと……。スバルくんがいなかったら、今頃ホントにわたし……」

「そんなこと……。ボクも、ミソラちゃんのお陰でやっていけてるわけだし……」

なんだか「いい雰囲気」が2人の間に流れる。

「……あの～……」

マドカがものすごく話しかけにくそうに声をかけた。

「なに？」

「その……2人は……もしかして、そういう関係なのかなぁ、なんて……」

「「え？」」

スバルとミソラが声を合わせて反応した。

「そ、そんなことないよ！」

「そ、そう？」

「うん、だよね？」

「うんうん！そんなんじゃないんだから！」

「……」

それだけ息ぴったりに言われると……

――――マドカは何かを確信した。

「……ま、とにかく、帰ろ！もう日付変わっちゃったよ！」

マドカが気持ちを切り替えて言う。小学生に正直１２時まで起きてるのはきつい。

「え！？　あ、ホントだ！」

「なんか安心したら疲れが……」

「ミソラちゃん！　帰ってから寝て！　風邪ひく！」

「あはは……」

こうして、ようやく平穏を取り戻した３人は帰っていった。

36、春の訪れ（後書き）

スバルとミソラ、あの2人はお互いに相手に好かれてればそれでいい、という人たちではないと思います。お互いに、特にミソラが、好きではあるのですが、それ以上にお互いを大切に思っているわけで、たとえ相手に嫌われようとも、相手が無事でいてくれればそれでいいと思える人たちなんだと僕は思います。その想いの現れが、あの外伝でも描いた、ミソラのオリヒメに仲間入りした話です。

そして、事態の収拾の後からスバルが謝ったあたり、スバルらしく書けたのではないかと思います。

37、暖かい親子（前書き）

XXX？、

Warm parent and child

37、暖かい親子

「なんで、昨日よりそんなに仲良くなってるんですか？」

「それに、ミソラちゃんは呼び捨てするようになってるしよ！」

「昨日、なにかあったの？」

「それは……ねー♪」

「ねー♪」

「……」

夜中のハープ・ノート、マリーン・ドルフィンの戦闘の翌日の、木曜の昼休み。今日は昨日までのルナルナ団のメンバーに加えて、マドカも一緒にお昼をとっている。仲良く首をかしげて相槌を打ち合うミソラとマドカをスバルが見つめていた。

「……なんか、すっかり打ち解けた感じだね」

『だな～、昨日、ミソラがドルフィンに事実を聞かされて半泣きで出て行ったのがずいぶん昔のことに感じられるぜ』

ウォーロックの言葉に、スバルはちょっと笑った。

「……だね。でも、これでもう大丈夫でしょ、２人は」

『いや、まだだ。まだ試練は残されてるぜ』

「……え、どういうこと？」

スバルがウォーロックに怪訝そうな顔を向けた。

「……ところで、今日みんなでどこか行かない？」

それまでミソラとマドカに質問していた、ルナルナ団たちの話題が移った。

「あ、ゴメン。今日用事があるの」

「そう？　残念ね、マドカちゃん、せっかくルナルナ団の一員になったのに、その初日に一緒に活動できないのは」

「ごめんね～」

「わたしも用事があるんだ……。ゴメン」

ミソラも申し訳なさそうに謝った。

「ミソラちゃんも～？」

「……なるほど、そういうことか」

スバルが一連の話を聞いて言った。

『だろ？』

「じゃあ、スバルくんは来るわよね？」

ルナが突然スバルに話をふった。

「え？」

「だから、来るでしょ、放課後！」

「え、え～っと……。ボクもちょっと無理かな……」

「な、なによそれ！？」

ルナは急にむっとして叫んだ。

「な、なんでボクの時だけそんな怒るんだよ！？」

「な、なぜって……言われても……」

（なんでこんなに気落ちしてるのよ、わたし！）

ルナは心の中で自分に怒った。

「そ、そんなの、わたしが知るわけないじゃない！それよりいい度胸ね！わたしの誘いを断るなんて！」

「そ、そんな、委員長！ボクの予定も考えてよ！」

「そんなの知らないわよ！」

ギャーギャーと言い争いを始めたスバルとルナを、マドカは見つめていた。

「どうしたの、マドカ？」

ミソラがマドカの顔を覗き込んだ。

「う、うん……。あの2人っていつもあぁなのかなって……」

「あ……うん、そうみたいだね……」

「なんか、楽しそうだね……」

「あ、マドカもそう見える？　わたしも実はそう思ってたの！」

「うん、まるで弟をからかって楽しむ姉、みたいな」

「だよね、あれ。あれが、スバルくんとルナちゃんの接し方なのかもね」

「……スバルくんも罪な男だね……」

「え？　どういうこと？」

ミソラはいきなりマドカが自分の心中にないことを言ったので聞き返した。

「フフフ、それは教えられないなぁ～」

「ちょ、ちょっとマドカ、気になるよぉ～……」

こうして新たな仲間を加えた団欒（だんらん）は、昼休みギリギリまで繰り広げられたとさ。

――そして、放課後。ウェーブライナーから、それぞれピンクと青の髪をした少女が降りた。

「……え？　ここって……！！」

「……？　どうしたの？」

「マドカのお母さんの病院って、ここだったの！？」

ウェーブライナー乗り場に立つ2人の前には、大きな病院がそびえ立っていた。

「うん、そうだけど……？」

その病院は、ベイサイドシティにほど近いところにある。

「懐かしいな……」

「……あぁ、……ミソラちゃんのお母さんも、その、ここの病院だっけ？」

マドカはちょっと遠慮がちに言った。

「え？　知ってたの？」

「うん……」

マドカは、かつてミソラのことを調べたことがある、と言っていた。そのときに知ったのだろう。ミソラの母親が死去した病院の名前として、自分の母親が入院している病院の名前が書かれていれば、真っ先に目についたはずだ。

「……そっか……ちょっと寄り道していい？」

ミソラが向かった場所は病院の庭のような場所だった。ミソラは数個設置されているベンチの内の1つの前で止まり、腰かけた。マドカもそれに倣って隣に腰をかける。

「ここでね、よくママに聞かせてあげる歌を考えてたの」

「……」

ミソラは口角を少し上げながらスッと目を閉じ、そのころに想いをはせた。

「……」

それを黙って見つめるマドカ。

（……こんな友達想いで、お母さん想いで、いい子なのに、わたしったら……）

マドカは、かつて目の前で想いを馳せている少女を憎んでいた自分

を呪った。

「……さて！　ごめんね、付き合わせちゃって」

「ううん、いいよ」

「じゃあ、行こう」

「うん」

ミソラ、マドカはエレベーターで階を上がり、静かな雰囲気と病院らしいにおいが漂う廊下を歩き、ある病室の前で止まった。ミソラはその病室のドアの隣にある、ちいさなプレートに書いてある手書きの文字を読んだ。

「『水瀬綾香（あやか）』……っていうんだ、マドカのお母さん……」

「うん、そういえば言ってなかったね。じゃあ、入ろうか？」

「ちょっ、ちょっと待って！」

ドアを開けようと取っ手を握ったマドカの腕を、ミソラは制止するように握った。

「どうしたの？」

「……ひとつ、確認しておきたいことが……」

「……なに？　言ってみなよ」

「あの、その……わたしがペースメーカーを壊したってことは……」

「……うん、知ってるよ。ハープ・ノートのことも、その正体も、ね。」

「そっか……」

このドアの向こうには、自分を恨んでもなんらおかしくない人がいる。ミソラは覚悟はしてきたはずだったのだが、実際に会う段階になると急に怖くなった。うつむいて胸の前で両手をぎゅっと握り、唇を噛んでいるミソラを見たマドカは口を開いた。

「……大丈夫だよ。言ったでしょ？　わたしのお母さんはミソラちゃんのファンだって。それは事実を全部知った上でのことなんだよ？　それよりなにより、このドアの向こうにいるのは、わたしのお母さんなんだから！」

「……うん、そうだね」

「……じゃあ、いくよ」

マドカはガラっと引き戸をスライドさせて、ドアを開けた。その向こうには、長い青い髪をした女性がベッドの上で上体を起こして窓の外を見ていたが、ドアが開く音を聞いてこちらを振り向いた。目は、マドカと同じ紫の澄んだ瞳をしていた。髪の長さを除けば、なるほどマドカにそっくりである。マドカが大人になったらこうなるのだろう。

「……あぁ、マドカ。いらっしゃい」

「うん、お母さん」

「……」

ミソラは緊張で怯えたような表情で、マドカの陰から進み出た。

「……！　あら、あなたは響ミソラさんでは？」

「……はい、その、はじめまして」

綾香は、国民的トップアイドルと会った割には落ち着いている。

「マドカから聞いてますよ、三日前にコダマ小学校に転校してきたそうですね？」

「はい……」

「慣れましたか？コダマタウンには」

「はい、まだ分からないところはありますが、こっちにくる前から、こっちには友達がいたので、生活は楽しいです」

「まぁ、もう友達がいるんですか？　……マドカに見習ってほしいものですね」

「ちょ、ちょっと、お母さん！」

マドカが綾香に困ったように声をかけた。ミソラは笑ったが、ちょ

っと口元がひきつっていた。それを綾香は見ていた。

「……緊張してますか？　もっとリラックスしていいんですよ？」

「は、はい……。あ、あの、綾香さん……」

「なんでしょう？」

「す、すみませんでした！！」

ミソラは深々と頭を下げた。

「わたしのせいで、大変なことになっちゃって、ホントになんてお詫びしたら……」

「……顔をあげてくださいな、ミソラさん」

ミソラは恐る恐る顔をあげた。そこには、ミソラが息を飲んだほど優しく微笑む綾香の顔があった。

「うふ、かわいい」

「……え？」

「困った顔もかわいいですね、ミソラさん。さすがはアイドルというところですかね？」

「え、えっと……」

ミソラが反応に困っていると、綾香が続けた。

「話は全部聞いてますよ、ドルフィンも親切に教えてくれましたしね」

マドカの隣にドルフィンが現れた。

『……親切だなんて……』

謙遜したようにドルフィンが呟いた。

「ミソラさん、それにハープ、わたしはあなたを責めるなんてことしませんよ。」

ミソラの隣にハープが現れた。申し訳なさそうにうつむいている。

『ごめんなさい……』

ハープも申し訳なさそうに謝った。

「謝らないでください。繰り返しますが、わたしは責めませんよ。そんなことしたら、わたしはマドカに怒られてしまいます」

ミソラはマドカを見た。

「ね？」

マドカはミソラにウィンクを送って言った。ミソラはまだ戸惑った表情をしている。

「……ミソラさん、マドカを友達として、頼みましたよ。マドカは

人見知りが激しくて、友達を作るのが下手なので……。マドカはずっとミソラさんのことを憧れてたんですから。『わたしもあんな風に誰とでもつきあえる人になりたい』って……」

「そ、そんなこと、ないよ！」

マドカは急に自分の過去の発言を明かされて顔を赤く染めた。

「あら、そうでしたか？　3日前なんて、ここまですっ飛んできて、『ミソラちゃんが転校してきた！』って喜んで、病室を破壊しかねない勢いだったじゃないですか、マドカ」

「や、やめてよ～、お母さん～……。本人の前で、恥ずかしいじゃない……」

マドカは頬が赤く染まっているのを隠そうとしたのか、両手で頬を抑えながら消え入りそうな声で言った。

ミソラはマドカと綾香、親子揃って自分に向けてくれる優しさ、その暖かさに触れて、再び目から涙を流しかけたが、なんとか押し戻した。そして、ひきつっていない、いつもの笑顔と元気を取り戻して言った。

「……分かりました！　任せてください！　わたしがついていきます！いつまでも友達でいます！」

「ありがとうございます、ミソラさん。よかったわね、マドカ」

「……うん！」

マドカも涙目になってうれしそうに返事を返す。

そんなやりとりを黙って廊下の壁に寄り掛かって聞いている少年がいた。

「今度こそ、大丈夫だね」

『そうだな……』

少年の腕に装着されたハンターから声がした。

「……帰ろうか」

『……おう！』

少年はハンターを掲げると、光に包まれて消えた。少年が消えたあとも、その幸せそうな歌声は廊下に響いていた。

3章　青い髪の少女　終

オリジナルキャラクターファイル　マドカ&ドルフィン

水瀬（みずせ）マドカ
身長：１４３ｃｍ
体重：３３ｋｇ
ウィザード：ドルフィン（いるか座のＦＭ星人）
趣味：読書、バイオリン
トレードマーク：青い水晶のペンダント
苦手なもの：暗い所、狭い所（暗所恐怖症、閉所恐怖症）
性格：しっかり者、落ち着いてる、人見知りが激しい
血液型：Ａ型
誕生日：１２月２３日
出身地：コダマタウン
所属：コダマ小学校
引っ込み思案なため、これまでスバル達との接点がなかった少女。元々、心臓が悪く、病院で寝込みがちな母親を看病していたが、運悪く母親がハープに操られたハープ・ノート（ミソラ）と遭遇してしまい、負傷したことにより、ミソラを憎んでいた。しかし、ミソラ自身も両親を亡くしていた事実、そしてドルフィンに去年の夏休みに出会い、彼女から聞いた事実から考えを改める。成績は優秀だが、完全な理系脳で、文系教科のいまいちな点数を理系教科でカバーしている。バイオリンは3年前から始めたもの。また、なぜか空手、剣道の経験者。極度の暗所、閉所恐怖症で、時にはそういう環境に置かされただけで泣きわめくことさえある。電波変換でマリーン・ドルフィンになる。

マリーン・ドルフィン
コード：００７
技・能力：アクアスラッシュ

スイムドルフィン
アクアウォール
エアロツイスト
ダウンバースト
ヒーリングパルス

マドカとドルフィンが電波変換した姿。ヘルメットに3枚、両腕に2枚、両ひざに2枚ある、合計7枚のヒレで水を操る能力を持つ。しかし、その能力の規模が強大なため、間接的に天気を操ることも可能。大きく分けて水、風、雷を操ることができる。また、足がイルカの尾ヒレのようになっているため、それと他の7枚のヒレを使うことにより、水中では爆発的なスピードを出せるが、地上ではむしろ移動スピードを遅くしている主な原因となっているため、自ら起こした上昇気流を利用した飛行を主な移動手段としている。また、マドカは空手や剣道が得意なため、その技術を用いた肉弾戦も得意とする。ちなみに、能力の関係で技を無限に近い数持っているため、初めて使う技はマドカがその場で即興で名前をつけている。

ドルフィン
オペレーター：水瀬マドカ
ボディカラー：水色
性格：しっかり者、ハイテンション、からかい好き
元いるか座のＦＭ星人。携帯端末のフォーマットにより水瀬マドカのウィザードになる。ＦＭ星でも1、2を争う実力を持ち、ＦＭ王にほぼ唯一意見ができ、ＦＭ軍親衛隊の隊長でもあった。1年前の地球侵略に不満の意を唱え、地球侵略のためにＦＭ軍親衛隊を派遣することをドルフィンが了承しなかったため、地球に来たＦＭ星人は全員ＦＭ軍親衛隊無所属の者のみである。ＦＭ王に考えを改めさせた地球人に興味を持ち、ＦＭ王の許可をもらい、地球にやってきた。そして、マドカと出会う。ハープの親友。ウォーロックをからかうことをハープ以上に楽しんでおり、ウォーロックはそのために

女への苦手意識を持ってしまった。また、他人を呼ぶ時、人間、電波体、電波人間に関わらず、基本「様」をつけて呼ぶが、マドカ、ハープ、ウォーロック、コーヴァス、ヴァルゴなど、「様」付けで呼ばない例外も存在する。

水瀬マドカ&ドルフィン
＞ｉ９３７７―１３９６＜

マリーン・ドルフィン
＞ｉ９３７８―１３９６＜

さて、ここからはこの「水瀬マドカ」の設定がなぜこうなってるのか、などを紹介します。

・名前
このキャラは名前から決まりました。実は、このキャラは順番としては3番目に作ったキャラで、1番目はグレイ、2番目は「22、見えない視線」に出てきたピンクの長い髪の女の子で、この2人はストーリー的にキーマン（キーウーマン？）とも言えるくらいの重要キャラで、ストーリーが具体的に決まると同時に偶発的に出来たキャラなのですが、このマドカはそれとは別に「オリキャラを作ろう」として作ったキャラですね。オリキャラが2人だけじゃつまんない、と。で、ぼんやりと作ろうと思ったところで、何も浮かばないわけで・・・。ここで話は変わりますが、僕は流星3をプレイしていて、スズカが初登場した際に、何をどう間違ってそう読んだのかは今でもわかりませんが、「マドカ」と読み間違えちゃったんですね。その後すぐに間違いには気が付いたのですが、その後もスズ

カをマドカと呼んでしまうことが多々ありまして・・・。（実は０話でスズカが出て来ますが、ここも最初、気付かずに『マドカ』と書いていて、慌てて消したのを覚えています（汗））で、話は戻ります。オリキャラを作ろうと思った際に、この謎のキャラ、「マドカ」をオリキャラにしてしまえ！と思ったのが出発点です。ですから、このキャラの名前に由来は存在せず、偶然できた名前です。僕はまだ出してないだけでいろいろとオリキャラを考えていますが、ここまで変な名前の付け方をしたのは、このキャラぐらいですね。

・役割

この「マドカ」という、名前しかないキャラにいろいろ肉付けするのに、まず必要だったのが、ストーリーに置いての役割、です。役割って結構重要ですし、あればかなりキャラクターも作りやすくなると思います。で、考えたのが、「ミソラの親友」。よく考えたら、ミソラってあんまり深い女友達がいない気がしました。スズカは同期っていう程度の仲だろうし、ルナは仲は悪くないけど親友まではいかなそうだし、それにスバル、ミソラ、ルナの三角関係のせいで反面では対立関係になりそうで。だから、スバル級に仲の良い女の子の友達を作ったら楽しいんじゃないか、と思いました。それと、もう１つの役割が、スバルとミソラの橋渡し、ですね。スバルもミソラも、お互いに近づきたいけどなかなか近付けない感じになっていたので、その恋路を引っ張っていけるキャラにしたかった、というのもあります。いまではこっちの側面はあまり前面には出せない気がしますが。

・イメージカラー・キャライメージ

ミソラの親友にしたことで、ミソラとはいろいろと関わっていくわけで、そこでミソラと似ているキャラにしてはいけないなと思い、この辺りから、マドカはミソラとは真逆のキャラにしようと思い始めました。で、ミソラは完全にピンク色のキャラだったので、マド

カは逆に水色のキャラにしよう、と思ったわけで。また、ミソラは元気な性格だったので、マドカはおしとやかなイメージで行こうと思いました。

・容姿

それに伴って決まっていったのが、姿です。ミソラと逆にしょう、ということで最初はロングヘアーにしようと考えたのですが、それだとさっきの2番目に作ったピンクの長い髪の女の子とかぶると思ったのでショートヘアにして、代わりにミソラは外に広がるような髪型だったので、逆に内側にまとまる感じにして、色も青にしました。服も水色に。ワンピースを着ているのは・・・最初はこれ、ただ単に服を考えるのが面倒で、上と下が一体化しているワンピースでいいや、みたいな感じだったのですが、おしとやかな感じが出て良かったんじゃないかと思います。あと、紫の瞳は・・・青い髪にはこの瞳の色が一番合うかなという僕の判断です。

・性格

これも、ミソラと真逆にすると決めたらどんどんと決まって行きましたね。元気キャラの反対は落ち着いたキャラ?というのは僕の偏見でしょうか?世界通念でしょうか?まぁ、どっちでもいいですが。また、ミソラはどんな人とも積極的に関わっていく性格なので、こっちは人見知りを激しくしてみました。これは設定上、それまでもスバル達と同じクラスだったにも関わらず、それまで接点がなかったその言い訳にも使えたので、うまくいった気がします。ただ、今のところこの落ち着いてる設定が薄くなってる気がするのでなんとか修正してきたいです。

・登場シーン

登場のさせ方ですが、定番の転校はミソラがして来てしまっていたので使えなかったので、すでにいたことにして、接点がなかった理

由を前述の通りにしました。

・ウィザード

これで大体のマドカのキャラはできたので、次はウィザードです。水色のイメージのマドカには、やはり水っぽいウィザードがいいと思っていました。でも、具体的にウィザードを決める前に決めないといけなかったのが、種族。電波変換ができる電波体の種族は主にはＦＭ星人、ＡＭ星人、ムーの電波体、Ｐｒｏｊｅｃｔ－ＴＣ製の電波体だけだったので、この中から選ぶか、新しい種族を作るかのいずれかでしたが、ＦＭ星人なら既存のＦＭ星人たちとの絡みも書けるので、ＦＭ星人にしました。で、８８星座を調べたら、即決しましたね。いるか座。水系の電波体のイメージ、そしてマドカのイメージにぴったりでした。これは順番が少し前後しますが、この後の電波変換後のキャラを考える工程で、万能な感じになってきたので、それに伴ってこのドルフィンもＦＭ星１，２を争う強さのＦＭ星人、という設定を加えました。

・苗字

何か順番がおかしい気もしますが、次はマドカの苗字です。ここで、既存のキャラの名前を考えてみると、星河スバル、響ミソラ、暁シドウ、白金ルナなど、世帯数の少なそうな苗字　＋　カタカナの名前という構成のキャラが多かったので（これはきっと現実に同姓同名の人を作らないようにしようという、スタッフの考えでしょうが）、それに則（のっと）って考えました。水をモチーフにしたキャラなので、「水」は入れたかった。で、「水瀬」にしました。最初はこのキャラは「水沢マドカ」だったんです。でも、「水沢」はたくさんいそうだったので止めました。

・電波人間

最後は電波変換後のキャラです。まず、名前は「ドルフィン」はも

ちろん入れるとして、もう1つ別の単語を考える必要があったわけですが、ここでまずパッと思いついたのが「マリン」。でも、「マリン・ドルフィン」や「ドルフィン・マリン」では語呂が悪くて、調べてみると、「マリン」は「マリーン」と延ばしても大体同じ意味らしかったので、「マリーン・ドルフィン」にしました。でも、「ン」がかぶってるのが相変わらず語呂が悪い気もします。そして、能力は・・・まぁ、水ですね。あくまでイルカなのとマドカの「おしとやか」のイメージから、戦いの中でも優雅さが欲しかったので、宙に飛んでもらうことにしました。で、飛べる言い訳、どうしよう、と考えて、上昇気流を起こして飛ばせよう、なんで上昇気流を起こせるんだ?・・・と数珠つなぎに考えていった結果、水を自在に操る能力にしました。ちなみに、空手、剣道をとりいれたのは・・・まだ明かしてない、マドカの秘密にあります。また、この話はいずれ。そして、イラストを描く際に、参考にしたのは、ロックマン、ハープ・ノート、そして意外かもしれませんが、キグナス・ウィング。このキグナス・ウィングに関しては、モチーフになってる動物のかぶり物をかぶってるような外見のアイデアをいただきました。ハープ・ノートはバイザーの形や人間体の髪の毛を引き継いだあたりとスカート、ロックマンは腕、足のパーツの感じですね。実は、最初はこのスカートがなくて、ロックマンの路線が強すぎたんですね。これだと女の子っぽくないぞってことと、マドカのワンピースのスカートの部分はどこに行った?という自分自身の突っ込みにより、スカートをつけました。これによって全体的にバランスが出来て良かったと思います。あと、足をイルカの尾ヒレにしたのは、なぜわざわざ宙に浮く必要があったのか、というその言い訳のためですね。

そして、マドカの趣味の中にあった、バイオリン。これは、ミソラがギターだったので、同じ弦楽器で、マドカのキャラに合うものを探した結果です。いつか、ミソラとマドカが仲良く演奏してる絵なんかを書いてみたいです（それが目当てで設定した節もあり）。

こんな感じで決まったマドカはほとんど僕のオリジナルキャラですが、唯一、性格にはモデルがいるんです。ついでに顔もモデル似にしたつもりですが、僕の画力では表現不能でした。・・・とは言っても、マドカの設定はそのほとんどがミソラの持つ要素を逆転させたものなので、ある意味、ミソラがモデルかも知れませんが。

38、ディーラーのはぐれ者（前書き）

ＰＶ６０，０００アクセス、ユニーク８，０００人突破！

ちなみに、前書きにこうしてＰＶとユニークを記録していってるのは、僕が後からどの話の時点でどのくらいのＰＶ・ユニークだったのか見たいだけなので、実際のところ皆さんはあまり気にしなくていいです。

ＸＸＸ？、

Ｔｈｏｓｅ　ｗｈｏ　ｇｅｔ　ｌｏｓｔ　ｆｒｏｍ　Ｄｅａｌｅｒ

38、ディーラーのはぐれ者

「いよいよかー」

「いよいよだねー」

「……」

今日はついに土曜、運命の任務の日である。ウェーブライナーに乗ってＷＡＸＡを目指すのは、いつものメンバーである。

「いいよな、スバルといい、ミソラちゃんといい……」

「ボクらも行きたいのに……」

「……」

ゴン太とツカサが恨めしそうに言った。

「だ、大丈夫だよ。わたしたちがゴン太くんたちの分まで頑張ってくるから！」

「そうそう！　そっちもシンクロ率の調整、頑張ってよ！」

「……」

ミソラとスバルが励ますように言った。

「……でも、気をつけろよ、お前ら。相手は仮にもアメロッパやシ

ャーロのバトルウィザードを返り討ちにするくらいのウィルスなんだぞ？」

「……大丈夫よ、ジャック。それを言うなら、こちらは仮にも世界を救った英雄様なんだから」

『それに、健全なムー大陸に乗り込んでほぼ無傷でラ・ムーのところまでたどり着いたんだから、今のボロボロ大陸の残党なんかなおさらでしょうしね。わたしたちだけでも出来るわよ』

「……」

ジャックの警告にクインティアとハープが異論を唱えた。

「……ねぇ」

それまで、何か言いたげに口を閉ざしていた者がしびれを切らして口を開いた。

「ん？　どうしたの、マドカ？」

前言撤回。いつものメンバー（スバル、ミソラ、ゴン太、ツカサ、ジャック、クインティア）に加えて、マドカも一緒にウェーブライナーに乗っていた。

「どうした、じゃないでしょ！　なんでオフィシャルメンバーに混じってわたしまでかり出されてるの！？」

……どうやらマドカは目的すら聞かされずに連れて来られたようである。

「そりゃあ、ほら、マドカちゃん、この前『わたしもオフィシャルに入ってミソラちゃんたちと一緒に戦いたい』って言ってたじゃん」

「うん、言ったけど？」

「だからオフィシャルにマドカをわたしたちが推薦するためだよ」

スバルとミソラの言葉に、マドカは目を輝かせた。

「ホ、ホント！？　やった！　ありがとね！」

「いいよ、礼なんて」

「・・・でも、実際のところ、いいのかな、わたしみたいのがオフィシャルに入っても？」

マドカは急に不安になったのか、顔を少し曇らせて呟いた。

「何言ってるの。いいに決まってるじゃない！　マドカの力は戦ったわたしが１番知ってる！」

「トランスコード持ちって時点でもう採用だと思うよ。お母さんもいいって言ってくれたんでしょ？」

「うん、『世の役に立とうというんなら、止める理由はない』だって！」

「さすが綾香さん！　物分かりがいい！」

スバル、ミソラ、マドカのやり取りを見ていて、ゴン太はツカサに話しかけた。

（なぁ、ツカサ、あいつら、いつの間にあんなに互いを知ってるんだ？）

「戦ったわたし」、「トランスコード持ち」、「綾香さん」。ゴン太の知らない、いや、スバルとミソラ以外の誰も知らないマドカの情報を、二人が知っていることにゴン太は疑問に思った。
それに対しツカサは、

（スバルくんたちは、ボクらの知ってるスバルくんたちだけじゃないってことだよ）

と、すべてを見通したような言葉を発した。

（はぁ？　どういう意味だよ？）

ゴン太の問いにツカサはちょっと笑っただけであった。

（？？？）

「それにしても、マドカちゃんの力を見たら、暁さんは何て言うだろうね？」

スバルがミソラに聞いた。

（……え？　暁？）

マドカは目を見開いた。

「……とりあえず、うまい棒を片手に喋るのは確定だろうね」

「あはは、それ、言えてる！」

（暁って……まさか……）

「……？　どうしたの、マドカ？」

ミソラがマドカの顔色が少し悪いことに気づき、聞いた。

「ううん、なんでもない！　……ありえないもん」

「？」

ミソラは首を傾げている。

（あの暁って人が、サテラポリスにいるわけが……ないもんね……）

マドカはちょっと考えてから首をふるふると振った。

（……姉ちゃん、あいつ……『水瀬マドカ』って、もしかして……）

ジャックは首を振っているマドカを見つめながらクインティアに話しかけた。

（……えぇ、そうでしょうね……。まさか、こんなところで会えるなんてね……）

首を振るのをやめて頭を上げたマドカは視線を感じてその方向に瞳

を向けた。思わずジャック、クインティアと視線が合い、一瞬その3人の中の時間が止まった。

「「……」」

時間停止を振り切ってマドカは立ち上がり、二人に近づいた。

「……あなたがジャックくんで、あなたがクインティアさんですね？　ミソラちゃんから話は聞いてます」

マドカはそう言うと、ジャックに手を差し延べた。ジャックがその手をとって握手をした。

（……会いたかったです、ディーラーの元幹部さんたち？）

（……！！　知っていたのか！？）

（えぇ、あれからディーラーのことはいろいろ調べさせてもらいましたから）

（さすがね、ディーラーのブラックリストに載ってただけのことはあるわ）

（それはどうも。……で、わたしのことは、あの二人には話さないでもらえますか？）

マドカは瞳だけで背後で会話をしているスバルとミソラを見てささやいた。

（……どうしてだ？お前らブラザー同士なら秘密は話さないといけ

ないんじゃないのか？）

（……ブラザーだからこそ、ですよ。ブラザーだからこそ、秘密は自分の口から話したいの……。でも、まだ心の準備が……）

そういってマドカは目を細めた。

（分かったわ。そういうことなら、頑張りなさい）

（はい、それじゃ、）

「これからもよろしく！」

「……おぅ」

「……えぇ」

密談を終えたマドカはスバルとミソラの隣の自分の席に座った。

「……マドカすごい、自分から話せたじゃない！」

ミソラは会話の内容も知らずに、うれしそうに言った。

「……え？　あ、そうだね……」

（……いつ話そう……？）

乗客の会話をよそに、ウェーブライナーはＷＡＸＡに到着した。駅前にはすでにシドウがいて、出迎えた。

「よぅ！　お前ら！　遅刻せずにちゃんと来たな！」

「「じと～……」」

スバル、ミソラ、ゴン太、ツカサはシドウに白い目を送っている。
その視線に、シドウの表情が固まった。

「ど、どうした……？」

「暁さん、いま何時ですか……？」

スバルが４人の気持ちを代表して、白い目のまま聞いた。

「えっと……

シドウはハンターを確認する。

「朝の４時だな、うん」

シドウはにこやかに笑いながらそう言った。

ブチン！

「「『朝の４時だな』、じゃな～い！！」」

スパーン！！

「ごぶッ！！」

四人はハリセンでシドウを叩き倒しながら叫び、シドウはそれに誘発された声を上げながら吹っ飛んで地に伏した。

……四人がどこにハリセンを持っていたのか、それは神のみぞ知るところである。

「なんですか、朝の４時って！　まだ日も大して昇ってないし！」

ツカサがどなり散らす。日が大して昇っていないせいで、辺りは薄暗い。

……ちなみに、四人がどこにハリセンをしまったのか、それも神のみぞ以下同文。

「だ……だって、今回の任務、日帰りだから、往復の分の時間を考えたら必然的にこうなる……」

「なら、最初からそう言ってください！　なんで深夜なんていう直前にメールしてくるんですか！」

今度はミソラが、その小さな体からよくそこまで出せたなと言いたくなるほどの大声を出した。まだ完全には日の出してないフジ山の頂上の、朝の空気には余計に声が響く。

補足だが、ＷＡＸＡ日本支部のこの大要塞は、フジ山の頂上にそびえたっているのである。

「わ、悪かったよ……」

シドウはそういうと、すっと立ち上がった。シドウのかもしだす雰囲気が変わった。

「……確かに直前になってメールしたのは悪かった。そのせいで緊張感が阻害されたのは俺のせいだ」

シドウは眉間にしわを寄せて続きを言う。

「……しかし、何度も言うが、今回の任務は世界レベルの任務、おふざけはお互いここまでにして気を引き締めないと、命取りになるぞ、スバル、ミソラ！」

「……はい！」

シドウの雰囲気が変わったのをスバルもミソラも感じて、二人はモードを切り替えて言った。

「おし、いい返事だ。それじゃ、出陣式があるから、それに向かうぞ」

「しゅ、しゅつじんしきってなーに？」

スバルが思わずふざけた口調で質問した。

「なに、長官やヨイリー博士から言葉を貰うだけさ」

「任務も、ランクが高いとそういうイベントが入ってくるんですね……」

ミソラが苦笑いしながら言った。

「そういうこと。じゃ、スバルとミソラ以外のヤツは出陣式に客として参加した後、ヨイリー博士についていけよ」

「「はい」」

ゴン太、ツカサ、ジャック、クインティアが返事をした。

「……？　その子は？」

シドウはマドカを見て聞いた。

「……そうそう！　この子、電波変換できるんですけど、オフィシャルに入りたいらしくて、……入れて貰えませんか？」

スバルがマドカをシドウの前に進みださせながら言った。

「お、そうか！　名前は？」

「……」

「……マドカ？」

「……」

「……水瀬マドカです！」

マドカがシドウを怪訝（けげん）そうな表情で睨みつけたまま何故か名乗ろうとしないので、ミソラが変わりに名乗った。

「……いや、知ってるさ」

シドウはなにかシリアスな雰囲気を醸し出しながら言った。

「……え？」

「俺が聞いてるのは組織内でのコードネームだよ」

「組織？　コードネーム？　なんのこと？」

ミソラが聞いた。スバルもミソラ同様、眉をひそめている。

「……やっぱりあなただったんですね、暁シドウさん？」

マドカがＷＡＸＡに着いてから初めて口を開いた。

「……！？」

その場にいる人間の中でツカサのみが違和感を覚えた。

――まだ誰もマドカの前で暁さんの下の名前を言っていない。それなのに、マドカは暁さんをフルネームで呼んだ。

……ジャック、クインティアは当然、といいたげな涼しい顔をしている。

「まさか、元ディーラーのあなたがサテラポリスにいるなんて思いませんでしたよ」

これにはさすがに全員が事態のおかしさに気づいた。

（なんでマドカが、暁さんが元ディーラーって知ってるの？）

ミソラが思った。いや、ミソラだけでなくジャック、クインティア、シドウ以外の全員がその疑問を頭に浮かべた。

「……水曜に新しく登録されたトランスコードのユーザーネームを見て、まさかと思ったが……。俺も、こんなところでキミに会えるとは思わなかったぜ。……なぁ？

「元ディーラー幹部候補者、水瀬マドカさんよ？」

38、ディーラーのはぐれ者（後書き）

・・・まだ、マドカの紹介が終わってなかったっていうね・・・

残るマドカの謎、というよりマドカのディーラーにまつわる謎は、少しづつ明かしていきたいと思います。

39、もうひとつの自責（前書き）

XXX?、

Another self－reproach

39、もうひとつの自責

「……マドカが……」

「ディーラー……？」

「……ったぁ～～～……」

スバルとミソラが驚いたように目を見開き、マドカは頭を抱えた。
そんな3人を見たシドウは言った。

「……もしかして、まだ言ってなかった……？」

その問いに、マドカは申し訳なさそうにこくんと頷いた。

「……そりゃ、悪い事したな……」

シドウも申し訳なさそうに言った。

『……絶好調ですね、シドウ』

アシッドが隣にウィザード・オンをして言った。

「……アシッド、どうことだ、そりゃ」

シドウが額に怒りマークを浮かべながら聞いた。

『なんでもありませんよ』

アシッドが白々しく言った。シドウがアシッドに何かを言いかけたが、

「悪い事ではないですよ」

というマドカのセリフを聞いて彼女を振り向いた。

「……なんでだ？」

「わたしも、いつかは言わなきゃと思って言いだせなかったんです。いいきっかけになりました」

マドカはそう言った後、スバルとミソラを振り向いた。

「……あのさ、隠しててごめんね」

「……隠してたのはいいけど……。何か理由はあるの？　どう考えてもマドカがディーラーの思想に共感してるとは思えないし……」

「……しかたなかったんだよ。お母さんのためだもん」

「……お母さんの……ため？」

スバルは確かめるように復唱した。

「うん、お母さんは確かに心臓が弱かったけど、昔はまだ気をつけて生活してれば入院しなきゃいけないレベルじゃなかったんだ……。……でも、４年くらい前に飛行機事故にあってその事故でパ……お父さんは死んじゃって、お母さんも体に障(さわ)っちゃってね……。で、お母さんは入院したんだけど、手術にかかるお金がなくて……」

……そういえば、マドカの父親はどうしてるのかについて、マドカの口から聞いたことは、スバルもミソラもなかった。それについて2人は考えたこともなかったが、突然亡くなっていたと聞かされて、ショックを受けていた。

「そんなときに、わたしの前にキングが現れた」

「！！」

ディーラー、と聞いた時点で予測するべきだった。マドカのディーラー入りの裏にキングが絡んでくることを。

「その時はキング財団もまだ無名だったから、今考えれば、得体のしれない人に突然『金はわたしが工面しよう』なんて言われても信じちゃいけなかったのかもしれないけど、でも、その時のわたしはお母さんを助けたくて必死で……そのキングの援助を受ける事にしたの」

「……」

スバル、ミソラだけでなく、そこにいる全員がその話に聞き入っていた。

「それで、わたしは育ててくれる人がいなかったから、キング財団が運営する施設に入れられて、そこで過ごしてきた。空手とか剣道とかは、その時にキングに『自分や母親を守るためだ』って言われて、教えられたの。……あ、実際にわたしに教えたのはキングじゃないよ。……だけどね、後から知ったんだけど、それもディーラーの幹部になるためのものだったんだって。いつの間にか、わた

しの幹部入りは内定してたの」

「……そうだったんだ……」

ミソラはまるで自分のことのように辛そうに眼を細めた。

「それを聞いたらわたし、怖くなって……逃げたの。その逃げる途中でドルフィンに出会って……。ドルフィンのお陰で、ディーラーの、追手から、……う、ぐすっ……なんとか逃れてきたの」

「……」

マドカの言葉は除々にか細くなり、目には涙が溜まり始めた。

「わたし、なにも……ぐすっ、知らなくて……。でも、いつの間にか、悪に加担しちゃってて……。わたしは、ただ……お母さんを――」

そこまで言って、マドカは体に重みを感じて言葉を切った。ミソラが抱きついたのだ。

「み、ミソラちゃん？」

「ほら、こうすると、結構落ち着くもんでしょ？」

「！」

マドカは目を見開いた。

「……えへへ、この前のお返しっ！」

そう言って、ミソラはマドカから離れた。ミソラの目と頬にも涙が浮かんでいた。

「――助けたかったんだよね、お母さんを。……わたし、マドカの気持ち、分かるな」

「……え？」

「わたしも助けたい人がいて、悪いやつらのところに行ったことがあってさ……。マドカとは状況はいろいろ違うけど、でも、それで罪の意識を感じてるのは同じだと思うの」

「……責めないの？」

「え？」

ミソラは、マドカの震える唇から漏れ出た声の言うことが理解できなかった。

「わたし、ディーラーだったんだよ？　わたしを責めないの！？」

マドカはミソラの二の腕を掴んで言葉を振るいだした。ミソラは口元でふっと小さく笑った。

「……これじゃ、この前と逆だね。……マドカは、何も悪いことなんてしてないじゃん。責めるわけないよ」

「でも……！」

「マドカは、マドカの心は、悪には染まってない。それどころか、わたしを許してくれるくらい、きれいな心を持ってる！　マドカは悪人なんかじゃないよ、わたし、信じてるもん！」

それを聞いたマドカはミソラの体をずるずるとずり落ちるように上体を落とし、ワンピースの袖で涙を拭いてからミソラの両手を握って顔をあげた。

「ミ、ミソラちゃん……ありがとう……。黙っててゴメンね。わたし怖がりだから、せっかく仲良くなれたのに、嫌われちゃうかと……」

「嫌うわけないよ。言ったじゃん！　『ずっと友達でいる』って！　ありがと、勇気出して話してくれて」

「そ、そんな礼なんて……」

……それから、2人が泣きやむまで、しばらく時間がかかった。でも、ボクはこれでよかったと思う。またひとつ、マドカちゃんのことが理解できたんだから。

「……そんじゃ、そろそろいいか？」

シドウはなるべくその場の雰囲気を壊さないように、優しく話しかけた。

「……はい、暁さん」

マドカが応えた。

「じゃ、いくぞ。ミソラ、泣いて赤くなった目を出陣式までになるべく抑えておけよ」

「む、無茶言わないでください！」

ミソラはそう言いながらちょっと笑っていた。

（ありがと、暁さん……）

シドウのさりげない励ましに、ミソラは心の中で礼を言った。

シドウがＷＡＸＡの建物に向かって先陣を切って歩き、ぞろぞろとみんながそれに従った。スバルもそれに倣おうとしたが、誰かが服の袖をつかんでいたため、くんっ、とつっかえた。スバルは後ろに向いた。

「マドカちゃん？　どうしたの？」

スバルの袖を掴んでいたのは、マドカであった。マドカはうつむいていたため、前髪に隠れて表情は見えていなかった。が、マドカはゆっくりと顔をあげてスバルに目を合わせた。口元がちょっと笑っている。

「ありがと、スバルくん……いや、『青き流星』さん♪」

マドカはぱっと顔を笑顔にして言った。

「……？　なんのお礼？」

「……わたしね、ディーラーを抜けた後、なんとかディーラーを倒そうとしたんだけど……ダメだった。そんなとき、ロックマンがディーラーと闘ってるって知って……わたしはもう、あなたにかけるしかなくて……。あなたは、ディーラーを、キングを倒してくれた。願いを、かなえてくれた。……流れ星は願いをかなえてくれるっていうけど……ロックマンはホントに流れ星だったね！　本当にありがとう！」

……セリフの最後の方は、マドカは鼻がくっつきそうなくらい顔を近づけて話していたため、さすがに鈍感のスバルも赤くなった。

「……あ、その礼なんて、別に……」

『……お？　照れてるか？スバル？』

ウォーロックがからかった。

「ち、違うよ、ロック！」

『お前も気が多いやつだな～』

「だ、黙れ、ロック！！」

スバルとウォーロックが口論し、当のマドカは何を言い争っているのか分からないのか、眉をひそめ首をかしげている。その言い争いの要因が自分であることにすら気づいていない様子だ。そんな彼らの様子を、ミソラは静かに見つめていた。

（スバルくんは流れ星、かぁ……）

『ん？　どうしたの、ミソラ？』

ハープがミソラに問う。それに対してミソラは応えた。

「わたし、やっぱりスバルくんに会えてよかったよ」

４０、碧の決意（前書き）

ＸＬ、

Ｄｅｃｉｓｉｏｎ　ｏｆ　ｇｒｅｅｎ

40、碧の決意

「……出陣式前に、いくつか伝えておくことがある」

シドウが廊下を歩きながら切りだした。

「任務のことですか？」

ミソラが首を右に曲げて聞いた。

「そうだ。お前ら、今回の任務、何かおかしいと思わなかったか？」

「……う～ん……」

スバルもミソラも、頭を抱えて悩んだ。

「……そういえば、なんで船で行くんですか？　ウェーブロードに乗って行った方が早いじゃないですか」

先ほど、シドウたちからこれからやる任務の概要を聞かされたマドカが聞いた。

「……あ、ほんとだ！　なんで？」

「そう、そこだよな。……実は、あの海域を走るウェーブロードと世界各国のウェーブロードとは、世界中のＷＡＸＡが分断してるんだ」

スバルが何故かを聞こうと口を開くと同時に、隣から声が聞こえた。

「まぁ、それが賢明な判断でしょうね。ウェーブロードを繋いだままだと、凶暴化したウィルスがウェーブロードを伝って世界各国に散らばって、大混乱になるでしょうから」

「……おう、その通りだ」

マドカの理解の早さに驚きながらシドウは応えた。

「だから、船に乗って行くしかないんだ。……それと、太平洋のウェーブロードが分断されたことにより、世界各国同士の通信が相当遅くなっている。スカイウェーブやコスモウェーブを使えば国同士の通信もできないわけではないが、上に転送する手間がかかる分、遅くなる。今はまだ問題は大きいものは起きてないが、放っておけば、世界は大混乱だ」

「……つまり、この任務は海路、空路、そして電波路（ウェーブロード）の三つのパイプを回復させるための任務、ってことですか？」

ミソラの要約にシドウがうなずく。

「そういうことになる。今回はオリヒメの時と違ってラ・ムーの電波体が世界にばらまかれていないだけで、実際のところ、この世界が置かれている状況はあの時と同じだ」

「……また世界をかけてムー大陸と戦わなきゃいけないのか……」

スバルはため息交じりに呟いた。

「大丈夫、スバルくん？」

マドカが心配そうに聞いた。

「うん……でも、ムー大陸は壊れた後とはいえ、あそこにはコールドスリープで眠ってた電波体がかなりの数いたし、コールドスリープ以外にも電波兵士……エランドって言ったかな？あれが壁面にこれでもかって位に眠ってたし、元々いたウィルスにしたって、かなりの数がいただろうし、それを凶暴化させたとなると……。それぞれが外国のバトルウィザードを帰り打ちにするくらいの強さを持って、それが星の数いること考えると……」

「……言われてみれば確かに不安だね、その状況は……」

マドカはスバルの言葉にうなずいた。

「それに、それがなくても、なんか、こう……。胸騒ぎがするっていうか……。予感がするんだ、よくないことが起こるって……」

スバルはこれまでいくつもの試練を乗り越えてきて、いつの間にか、「闘う者の勘」が身についていた。これから身を投じる戦いがどうなるか、ということがなんとなく分かってしまう。

「……スバルくん……」

スバルにそんなつもりはなくても、その場が不安で埋め尽くされていた。

「大丈夫だよ、スバルくん！」

声に振り向くと、ミソラが決意に満ちた瞳をこちらに送っていた。

「あの時とは違うことが二つある！　……ひとつは、みんなの絆は切れてない！　『滅びの前兆』なんてないし、みんな繋がってる！」

「……ミソラちゃん……」

「それに、二つ目！

――――今度は、わたしがいる！」

ミソラは右手を胸にあてて言い放った。

「！！」

「わたしがついてる！　それに、暁さんも！　今度はスバルくんひとりだけに戦わせなんてさせない！」

「で、でも危険な戦いなんだよ！　もし、まだラ・ムーみたいなのが残ってたら、あの時以上に危険な戦いになる！」

「だからこその絆じゃないの！？」

「！！　……ミソラちゃん……！」

「絆は、一番の力になる！　それはスバルくんが一番分かってるはずでしょう！？　危険な戦いなら、なおさらみんなで挑んだほうがいいに決まってる！　……この戦いは文字通り、繋がりを守る戦い。ムーが勝てば繋がりは切れて破滅、わたしたちが勝てばまた、国同士で繋がれる！　絆は、絆で守ろうよ、ロックマン！」

スバルは、その言葉を聞きながら、ミソラの瞳に目を合わせて一度もそらさなかった。迷いのない、絶対に守るという決意。それがミソラの瞳にはこもっていた。

「……強いな、ミソラちゃんは」

「……ううん、わたしなんか全然……」

「ありがとう、ミソラちゃん……。勇気が湧いてきたよ」

「……もう大丈夫？」

ミソラが気遣うようにスバルに問う。

「うん！」

「じゃ、任務にレッツゴー！」

ミソラは右腕を上に突きあげたあと、あらぬ方向に歩き始めた。

「おーい、どこに行く気だ――――？」

シドウが細い目でミソラを見つめて言った。途端に、ピタッとミソラの動きが止まる。

「……」

ミソラは無言でそのままの姿勢で後ろ向きに戻って来てから、こちらを向いた。

「……すみません、早とちり☆」

ミソラはペロッと舌を出して後頭部を掻いた。

「……ったく……。俺抜きで盛り上がりやがって……。それにまだ任務の補足説明は終わったわけじゃない」

「え？　まだあったんですか？」

スバルが少し驚いたように小さく口を縦に開いて聞いた。

「あぁ、実はな、お前らに今回の任務のことを伝えたあとから、新たにオフィシャルに配属されたメンバーがいてな、今回の任務にそいつも参加する」

「そ、それって、サテラポリスが無理言ってひきこんだ人ですか？」

「おう、それだ。大吾さんに聞いたのか？」

「はい。でもその人、どんな人なんですか？」

「……とりあえず、協調性に欠ける奴であることは間違いないだろうな」

「協調性に……？」

ミソラがスバル同様眉をひそめながら言った。

「これから出陣式の後、ウェーブライナーで港へ行ってそこから船に乗り込むわけだが、そいつは現地集合を申し出たから、港で集合する。そのこと、覚えておけ」

「はい……」

「じゃ、サテラポリスの指令室に向かうぜ。長官もお待ちかねだろうからな」

指令室に通じる階段を下りると、すでに長官と、その隣にヨイリー博士が待っていた。

「おぉ、来たか！」

長官がシドウたちを見つめながら言った。

「はい、星河スバル、響ミソラ、そして今回の任務の小隊長、暁シドウ、以上3名、そろっています！」

シドウがキビキビと言った。長官とは指令用デスクを挟んで向かい側に、長官から見て右からスバル、ミソラ、シドウの順に並んだ。

その3人の後ろに、ゴン太、ツカサ、ジャック、クインティア、マドカが並んだ。

「出陣式など銘打ったが、ただ私とヨイリー博士から少し話をするだけだ、楽にするといい」

……と言われて楽にするほど、聞きわけのいい人がいるわけもない。

「……では、始めるぞ。諸君も聞いている通り、この任務は世界の通信状況や交通路の回復が目的だ。言ってしまえば世界がこの任務にかかっている。キミたちの力に案ずるところはないが、そのことを忘れないように頼むぞ」

「「はい！」」

任務参加者3人が返事をした。

「プレッシャーをかけるつもりはないけど、がんばってちょうだい。これまでも、世界各国がそれぞれに対策をとってはいたんだけど、どれも効果があまりなくてね……。あなた達が人類の最後の砦なの。危険な任務になるけど……気をつけて」

「「はい！」」

ヨイリー博士の話にも相槌を打つ。

「任務の具体的な内容は聞いてるな？」

長官はスバルに聞いた。

「はい、暁さんから聞きました」

「よろしい、それじゃ、さっそく向かってもらおうか」

「はい、では行ってまいります！」

シドウが長官に敬礼して言った。スバルとミソラもそれに倣う。

「よし、では頼んだぞ！」

「おし、ウェーブライナー乗り場まで走っていくぞ、スバル、ミソラ！」

「「はい！」」

シドウの後を追って、スバルとミソラも駆けだした。

「あ、ちょっ……」

マドカは、何かを言いたそうだったが、3人はそのまま行ってしまった。

「……行きなさい」

「……え？」

ヨイリー博士はマドカをじっと見つめて言った。

「あなたの報告は受けてるわ。これから、オフィシャルに入る手続きとか、シンクロ率の測定とかがあるけど、急ぐ用事じゃないわ。

これから危険な任務に向かうお友達を見送っておきたいのでしょう？」

「え……あ、はい……」

「じゃあ、お行きなさい。ほら、あなたたちもよ」

ヨイリー博士はゴン太達を見据えて言った。

「じゃ、じゃあ、見送ってきます……！」

ツカサの言葉と同時に、５人は後を追い始めた。そんな５人を長官とヨイリー博士は目で追っていた。

「いいですね、若いというのは」

「そうだな、だからこそ、あの子らの未来を守っていくのがわたしたちの仕事だ……」

「そんな、わざわざ見送らなくてもいいのに！」

ＷＡＸＡ、ウェーブライナー乗り場。任務に向かう３人はウェーブ

ライナーに乗り込み、窓越しに5人と接していた。

「水臭いこと言うなよ、スバル！」

「そうそう、せめてこれくらいさせてよ！」

ゴン太とツカサが言った。

「スバルくん、ミソラちゃん、シドウ……スバルくんもヨイリー博士も言ってたけど、危険な任務であることに変わりはないから……気をつけて……」

「油断はするなよ、お前ら！」

クインティア、ジャックが言った。

「油断なんてするかよ！　……まぁ、気をつけてはおくけどな」

シドウがすこし考え直したように言った。

「じゃあ、ホントにがんばって！応援してるから！」

「帰ってきたら、牛丼一緒に食おうぜ！」

ツカサ、ジャックが言う。

「キミらもシンクロ率の調整、がんばってね！」

スバルが言った。

「……この任務終わったら、今度はわたしも混ぜて任務やってね、みんな！」

マドカが笑顔で言った。

「任務だけじゃなくて、お買いものなんかも一緒にいこうよ！」

ミソラも笑顔を返してしゃべった。

「……うん！　楽しみにしてる！」

……それから、数秒置いて、ウェーブライナーは走り出した。スバルとミソラは窓から乗り出して手を振り、駅に残された面々も、２人が見えなくなるまで手を振り返していた。

……再び始まった、ムー大陸との世界をかけた戦い。その先にあるものはなにか……？　新たな戦いが、幕を開ける。

４０、碧の決意（後書き）

・・・なんか、このムー大陸との戦いの話は、まるで最終回が近いような展開や表現、発言が多くなってますが、まだまだこの後も続くので、ご安心を。

・・・ただ、次回もまだバトルに入る予定はありません。

41、独奏（前書き）

ユニーク、9，000人突破！

XL?、
solo

41、独奏

「うわーっ、すごい！」

ミソラが歓声をあげる。３人が港にすぐ近くのウェーブライナー駅で降りると、目の前には、港に貨物船がずらりと並んでいた。この港はかなりの規模と大きさを誇るところではあるが、それでも今回の任務に使う船を全て停泊させられるほどではなかったらしく、沖合にも数十隻の船が浮かんでいた。

「……なんかずいぶんと船が多くありませんか？　２０隻とか聞いてましたけど？」

スバルが怪訝そうにシドウの方を向いて聞いた。船はざっと見渡しただけでも、５，６０隻はある。それも目測であり、正確な数字ではないが、少なくとも２０隻以上はあることは確実だ。

「……あぁ、それは……まぁ、大雑把に言えば、世界各国が任務遂行を急かしてな、それでＷＡＸＡ日本支部から『そう言うなら少しは援助しろや』と言ったら、相手のプライドに障ったのか、この始末だ」

「ホントに大雑把ですね……」

「まぁ、そういうな。ほら、早く港に降りるぞ。たぶん、新人さんもお待ちかねだ」

３人の目の前には石造りの、横幅５メートルほどの階段があり、そこから直接、船着き場に向かえるようになっていた。その階段の右

手にはターミナルがある。しかしそこは、というよりこの港全体は、今はＷＡＸＡの貸し切り状態で、今の時間帯の本来の便は全部運休となっている、とスバルはシドウにウェーブライナーの中で聞かされていた。……港側からすれば、ずいぶんと迷惑な話である。急いで任務に向かう理由の一つにはそれがあるのだろう。

広いコンクリートの船着き場を歩いていく3人。すると……

「……ん？」

ミソラが唐突に声を出した。スバルが見ると、ミソラは何かをよく見ようとして目を細めていた。

「どうしたの、ミソラちゃん？」

「……なんかさ、一隻だけ明らかに仲間はずれの船があるんだけど」

ミソラの視線を追って、先を見ると……あった、確かに。貨物船が並んで、まるで黒っぽい色をした壁がずらりと立ち並んでいるその中に、一か所だけ場違いに白い部分が。黒黒黒黒黒黒黒黒黒白黒黒黒黒黒黒黒。黒の物々しい雰囲気を分断するような、純粋な白。これはもはや、ＫＹという言葉すらマッチしそうな状況である。黒と白という、正反対な色だけに、目立ち方は半端なものではない。

「あぁ、あれが俺らの乗る船だ」

「……」

「ん？どうした？」

シドウは急にシン、となったことに気がつき、2人に聞いた。

「……乗るの、あれに？」

「だから、そう言ったろ？」

……

いや、別に白い船に乗ることはいいのだ。見かけは豪華客船のようで、むしろ大歓迎だ。問題は、他はみんな黒いのに、自分たちだけ白いのに乗るという状況。例えるなら、レストランで、みんな普通の椅子に座っているのに、自分だけお子様用の椅子を勧められたような。なんか自分が間違って見えてしまう、そんな状況だった。少なくとも船に乗ったら落ち着かないだろう。

「あれは新手のイジメですか？」

「いやいや。あれだけ、任務の特性上、違う機能を搭載してるだけだ。それと色が違うのは、俺らの船を先頭にして進む予定だから俺らの船が分かりやすくなるように、だな」

「……あ、そうですか……」

「『違う機能』に関しては新人さんも交えてもっと具体的な任務の進め方を話すときに一緒に話す。まずは合流して船に乗らないとな」

「あ、もしかしてあの人ですか？」

ミソラが指を指した先、白い船のすぐそばに人影があった。

「あぁ、そうだが……」

シドウが応えたが、あまりこころよさそうな返事ではなかった。

「でも、あの人影、どこかで……」

「……あぁ、見覚えはあるだろうな……」

歩くたびに大きく見えて来るその人影。そして、何者か判別できるほどにまで近づき、その人を見たスバルとミソラは息を飲み、そして叫んだ。

「「ソロッ！？」」

「ふん、遅いぞ、お前ら……」

そこにいたのは白髪に赤い瞳、胸には黄色いムーの文字。ムー人の末裔、ソロその人だった。新人がソロと分かった瞬間、その場の空気がずしっと重く感じた。

「……な、なんで……」

スバルが驚いて開いた口を動かして言った。

「……サテラポリスがあんまりしつこいもんでな……」

「確かに、協調性には欠けるね……」

ミソラが呟いた。その声に反応したように、ソロはミソラの方を向く。しかし、ミソラには目を合わせず、正確にはミソラの下の方を見ている。

「「……？」」

その視線を追って、スバルとミソラが下を向くと、ミソラが腕を胸に伸ばし、手で服の胸の辺りをわしづかみにしていた。ミソラの手から放射状にしわが伸びている。その姿は、ミソラが胸に苦しみを覚えて胸を押さえているようにも見えたが、ミソラがそれをすこし驚いたように見ているところを見ると、ミソラ自身も無意識にやっていたようだ。

「……ふ、どうした、今更あの時の傷でもうずくか？」

「……！！」

あの時、とはまぎれもなくバミューダラビリンスでミソラがスバルをかばって、瀕死の状態にさせられた、あの時だ。

ミソラはディーラーとの戦いの最中ではもうそのことは気になっていなかったのだが、数日前にグレイとの共鳴のせいであの時の記憶が呼び起こされて、心では気にしていないつもりでも、体が自分を傷つけたソロを拒絶してしまうのだろう。

「……確かに、あの時は酷い事されたけど……」

ミソラは小さく切りだした。

「でも、恨んではないよ。結局わたしは生きてるし、それに、……ソロ……くん？　キミはスバルくんを、ムー大陸で力尽きて倒れていたスバルくんをどんな理由であれ、運び出してくれた。それに、メテオGが消滅したあとに、ジャックくんとクインティアさんのスバルくんのための行動につきあってくれた。スバルくんを二回も助けてくれたキミを、恨むわけにはいかな――」

ブンッ！！

「！！」

ミソラのセリフが終わる前にソロは、いつの間に召喚したのか、ラプラスソードを振るってミソラの喉元につき付けていた。

「……オレの前で友情ごっこはやめろ」

ミソラは瞳だけを動かしてラプラスソードを見下ろしていたが、や

がて再び目をソロに合わせた。

「やはりお前らは変わらんな。その2回は、どちらも星河スバルを助けるためじゃない。オレはそいつを倒して絆を否定すると決めている。そのためにすぎん」

「それでもいいよ。言ったでしょ、どんな理由であれ、って。どんな理由であれ、スバルくんを助けてくれたキミにわたしは感謝してる」

ミソラはソードをつき付けられたままそう言った。

「……」

ブン！！

黒い閃光が走り、そのままラプラスソードが振るわれる。しかし、ミソラはそれをギリギリで後ろに反り返って避けた。ミソラは右手を地につけて、体を右にひねって左手も地面につけて、体をひねった際の回転力を利用して右足を踵（かかと）からソロへと振るった。ソロはそれを後退して避けたが、その隙にミソラは体勢を立て直し、背中に背負ったギターを前に構えた。

「いくよ、ハープ！　パルスソング！」

ギターからハートの音波が放たれ、ソロに迫る。ソロはそれを、ラプラスソードを突き上げるように振るって切り裂き、ソードをバットのように構えた。

「ブライスラッシュ！」

水平にラプラスソードを振るうと、その刃から衝撃波が生まれ、ワイドウェーブのように地面と水平にミソラに向けて直進した。
ミソラはそれを足を折り左手を地面につけ体勢を低くしてブライスラッシュをやり過ごし、その勢いを殺さずにソロに向かって駆けだした。それを見たソロも駆けだす。

ザッ！

ソロは再びミソラの首にソードをつき付け、ミソラはソロの喉元にギターの先をつき付けていた。

「――感謝しているなら、なぜあの喉元から振るったラプラスソードを避けることができた？　警戒していたんじゃないか？」

「感謝してるからって、警戒しないわけじゃないでしょ。わたしはキミを感謝するけど、キミはわたしをいつ攻撃するか分からないから……。……わたしが気にくわないなら殺ってくれて構わないけど、今のわたしね、あの時みたいに病院で寝込んでるわけにはいかないの。グレイみたいなのがまたいつ攻めてくるか分からないから。だから今は……協力して。それが出来なくても、せめてわたしたちと争うことはしないで」

「……」

ソロはしばらくミソラを見つめていたが、やがてラプラスソードを引っ込めた。それを見てミソラもギターを背負い直す。

「……ふん、いいだろう。お前と戦ってもほとんど無意味だ。……絆のもろさを叩きこんで教えてやる意味はあるかもしれないがな。

オレの標的は星河スバル、お前1人だ」

スバルは、ソロを警戒してウィザード・オンしたウォーロック越しに反論する。

「……なぜ？」

「忘れたとは言わせないぞ。お前にはまだムーメタルがある」

『お前、まだ狙ってやがるのか！？』

ウォーロックが口をはさんだ。

「当たり前だ。いつあきらめたと言った？　……オレのオフィシャル入りの目的の1つは、お前の観察だ。同じ組織に入れば、見張りやすくなる。それに、こいつもなかなか便利だしな。」

ソロはそう言ってハンターを掲げた。ハンターVGにはこの港の地図が表示されている。

「トレースファンク（機能）……！　そういうことか……！」

「これでお前の位置をいつでも知ることができる。せいぜい日々の生活を注意して過ごすことだな」

「くっ……！」

「……さて、自己紹介は済んだか？」

シドウはスバル同様警戒のために出したアシッドを従えながら呼び

かけた。

「俺たちはここでやり合ってる場合じゃない。それにソロ、お前は今回の任務に自主参加したんだから、少しは協力しろ」

「……できたらな」

「……ふ、お前にしちゃあ、素直だな」

シドウはソロに皮肉を言った後、説明を始めた。

「この白い船、この船だけは、ＷＡＸＡの所有のもので、他の貨物船は世界各国からのレンタルなんだが、まずは俺達のこの船だけが例の海域の中心まで進む。それまで、他の貨物船は海域の外で待機だ。そして、……アレを見ろ」

シドウが指差した方向を、他の３人が見ると、ＷＡＸＡの船の頂に大きなアンテナが乗っていた。

「アレはいわゆる、ウィルスの類のものを引き寄せる特殊な電磁波を発するやつでな、アレを海域の中央で使用して海域中の有害な電波体を集めて、一気に殲滅するのが作戦だ」

「なるほど、どうやって海域中の電波体を全滅させるのかと不思議でしたが……」

スバルがアンテナを見上げたまま呟くように言った。

「まぁ、海域の中央に到達する前に、海域に入った瞬間からウィルスは攻めてくるから、具体的な任務開始もそっからだな。……質問

は？」

「……ありません」

「わたしもです。」

「……」

ソロは返事をしない。しかし、シドウは了解の意味と察したようだ。

「じゃあ、さっさと乗り込むぜ。いつまでもここを貸し切っておくわけにもいかないからな」

一行は船着き場と船の入口を渡した橋を渡り、船の中に入った。

ほどなくして、ＷＡＸＡの船は出港した。決して結束しているとは言えない新たなオフィシャルのメンバーを乗せて、無数の貨物船を従えて。

41、独奏（後書き）

・・・ありましたね、バトル。

ソロ、いよいよ本編初登場！

ブライスラッシュは本来はブライソードでしかブライは使いませんが、別にブライの技だからいいかな～と、ね。ミソラが電波変換なしでパルスソングを打てたのは、ゲームでも外伝1の最後にミソラが五陽田をギターで気絶させていたので、まぁ出来るかな、って感じでやらせました。

・・・ミソラ、なんか強いですね。電波変換なしでソロとまともにやりあってますから。

そして、次回の最後、もしかしたら次々回からやっと任務開始です！次回の大部分は嫌にほのぼのする予定です（汗）

42、バレていた想い（前書き）

ＰＶ７０，０００アクセス突破！

ＸＬ？、

Ｋｎｏｗｎ　ｄｅｓｉｒｅ

42、バレていた想い

困った。どうにも、困った。正直、このままで大丈夫なのだろうか、と思ってしまう。その理由は……

「スバルくん！　今度はこっち行ってみよ！」

「え、あぁ、うん……」

これだ。ミソラが異様にスバルを引っ張り回して、かれこれ1時間はこの調子だ。

なんでこうなったのかといえば、それは数分前……

「じ、自由行動！？」

「そうだ」

シドウがスバル、ミソラ、ソロの前で腕組みをして返事をした。今、4人は船の甲板にいる。

「この船が問題の海域に到着するまで、しばらくかかる。それまですることがないんでな。自由行動だ」

「じゃ、じゃあ、この船いろいろ見て回ってみていいですか！？」

ミソラが身を乗り出して聞いた。

「おぉ、いいぞ。今、この船は１０人くらいしか乗組員（クルー）はいないが、そいつらにあまり迷惑のないようにな。それと、一応それぞれの船室も用意してあるから、特にすることがなければそこにいてもいいぞ」

これはどっちかといえば、ソロに向けた発言のようだ。それをソロも気付いたらしかったが、やはり群れるのは嫌いだったらしく、船内へと向かうドアに向かった。

「スバルくん！　この船、いろいろ見て回ろうよ！」

「う、うん、いいよ」

……で、今に至るわけだ。しかし、正直、乗組員の方に迷惑なんじゃないかと心配になってしまう。

この船は、中身は案外普通の客船というところで、シドウに聞いてみれば今回の任務のために作られた船らしくて、ウィルスを集める例のアンテナ以外にも、船の外壁に電波的な攻撃に耐える特殊な装置と素材を用いているらしい。客室は２０人分程度しかなくて、本来はもっと小さな船になるはずなのだが、そのアンテナやら装置やらを使うための動力源、バッテリーみたいなものが、この船の大きさを周りの貨物船なみの大きさにしているらしかった。……元々ＷＡＸＡは宇宙を専門としているため、船なんかはあまり持っておら

ず、今回の任務を達成するためには新たに作るしかなかったそうな。

そして、今回の任務のために作った船の割には客室や廊下が豪華で、どこぞの高級ホテルみたいな感じになっていて、こういう「豪華客船」というのは女の子の憧れなのか、それが今のミソラを動かしているようだった。

……いや、もう1つミソラちゃんがはしゃいでいる理由があることも、すでに分かってはいるのですが。

「……あれ？　この扉、なんだろう？」

ミソラが突然、これまたゴージャスな装飾が施された扉に興味を持って立ち止まった。スバルは先ほどシドウからハンターに送ってもらってトレースファンクに追加された、この船のマップを見て応えた。

「……食堂みたいだね」

「食堂!?　うわ、見てみよ！」

ミソラはスバルの返事を待たずに扉を開けた。ぎぃぃぃ……という、いかにもな音を立てて、扉が開く。

「うわーっ、すごい！」

ミソラの声は反響して聞こえた。天井は船内としてはかなり高く、5メートルくらいあり、シャンデリアまで下がっている。そして、よくパーティで見かける丸いテーブルがいくつも並んでいた。

……いやいや。なにやってんですか、ＷＡＸＡの人たち。まず、食堂なんて日帰りなんだからせいぜい一食食べるくらいだからいらないし、反響するくらい大きい部屋にするほど人数はこの船には乗ってないし、なによりシャンデリアって……。今回の任務のために作ったのなら、もう少し節約してもいいのでは、と言いたくなる。だが、ここだけにとどまらないのが、この船だ。廊下にはところどころに高そうなつぼが小さなテーブルの上に置いてあるし、壁には誰かの絵画が飾ってあるし。税金の無駄づかい、と取ってもいいのだろうか。

心の中でつっこみまくっているスバルとは対照的に、ミソラは目をキラキラと輝かせていた。

「ミソラちゃん……船室行かない？」

スバルの声に、ミソラは瞳のキラキラを消してスバルに向き直った。

「スバルくん、どうしたの？　疲れた？」

「う、うん、まぁね……」

「……そっか、じゃあ、船室もいいけど甲板にまた出てみようよ。潮風にあたれば、いい休憩になるんじゃない？」

「そうだね、そうしよっか」

2人は踵を返して食堂の扉を閉めて、甲板へと歩き出した。

《……？　ずいぶんと素直ね、ミソラ！》

ハープが小声で話しかけた。

（う、うん。だって、これから任務だって言うのに、疲れてちゃダメでしょ？）

《それにしたって、さっきのモードのミソラだったら、いつもなら『もうちょっと回ってみようよ！』とか言ってるじゃない！》

（そ、それは……）

「ミソラちゃん……」

「はっ、はいっ！？」

ミソラは突然スバルに呼ばれて、ビクッ！と肩をあげながら返事をした。

「あのさ……」

「な、なに……？」

「ありがとね、気を遣ってくれて」

「え！？」

ミソラは思わず顔が赤くなった。それを自覚すると、てれ隠しなのかスバルに顔を背けた。

「な……なんのこと？　わたしにはよく……」

スバルはクスッと笑って言った。

「分かってるよ、さっきの不安がってたボクを見て、元気づけようとしてくれて、さっきまでみたいなハイテンションにしてたんでしょ？」

ぎくぅ！という声が聞こえそうなくらい、ミソラは肩を震わせた。

「……」

ミソラは顔を真っ赤にして唇を噛んでいる。そして急にスバルの後ろに回り込んだ。

「と、とにかくっ！　甲板に行ってみよっ！」

そう言ってスバルの背中を押し始めた。ミソラ自身も言ってて気付いた。……今の言葉じゃ、肯定したも同然だ。

「わかった、行こう！」

スバルもその提案に合わせた。

（……あぁ～～～、恥ずかしい、ばれてたなんて……！）

スバルの後ろに回り込んで顔を見えないようにしたミソラは恥じらい全開の顔をしている。

《なるほどね～。それにしてもスバルくん、それに気付くなんて、なかなかやるじゃない……》

鈍感なスバルが気がついたことにハープは感心した。

《なぁ、ハープ……》

《なによ、ロック？》

《さっきのスバルの言ってたこと、どういうことだ？》

《……こいつはダメだったか――――！！》

ハープは声に出さずに叫んだ。

「……お前ら、またイチャイチャしてたのか？」

「「はぁ！？」」

甲板に上がって聞いた、第一声。発言主はもちろんシドウだ。

「ミソラ、お前、顔真っ赤だぞ？」

それを聞いたミソラは両手を頬にあてた。

「ほ……ほっといてくださいっ！」

「ははは……で、どうだったよ、この船？」

「あ、すごかったですよ！」

ミソラが再び目を輝かせて言った。

「……確かにすごかったけど、この任務のために作った割には豪華すぎませんか？」

スバルがこの数時間中に膨らんでいた疑問をシドウにぶつけた。

「あぁ、だろ？　実はこの船、元々普通にその辺を運航してるような客船だったんだよ。……まぁ、豪華ではあるんだがな。でも、老朽化で廃棄処分が決まってな。なるべく早く任務用の船が欲しいってところにそんな船があるって話が転がりこんできたもんだから、ＷＡＸＡが取り急いで買い取って、運航できるように修復したうえでＷＡＸＡの、任務に必要な技術を組み込んだんだ」

「じゃあ、あのシャンデリアとか食堂とかつぼとかって……」

「そう、豪華客船のころの名残だな」

「なんだ、ＷＡＸＡがわざわざそう言う風に作ったのかと思いました」

「さすがにそこまでＷＡＸＡにも余裕はねぇよ」

シドウの笑いに2人も笑い、納得した2人は甲板のふちの柵に腕を乗せて寄りかかった。眼下には海が広がり、船が波を起こしているのが見えた。

「うぅ……」

スバルが突然困ったような声を出した。

「どうしたの？」

ミソラが問う。

「い、いや、高いなぁって……」

『お前、まだ高い所に慣れてねぇのかよ……。宇宙飛行士志望がそれじゃ、まずいんじゃねぇか？』

ウォーロックがあきれたように言った。

「へぇ、スバルくんって高い所ダメなんだ……」

「い、いや、大丈夫だよ、これく――――

ぐらっ

船がすこし揺れた。

「うぅぅ――――！！」

スバルはそう叫びながら、その場にしゃがみこんだ。ウォーロックは完全にあきれている。

「……」

ミソラもそれに合わせてしゃがむ。さっき治まったはずの赤面が再び復活を始めている。

「……じゃ、じゃあ、落ちないように、手、に、握ってあげようか？」

言った瞬間に、ミソラは再び真っ赤になった。真っ赤になりながら手を差し伸べる。

「……じゃ、お願いします……」

スバルも赤くなりながらその手を握った。

「……」

そのまま黙って水平線を見つめる2人。

「……っ！？」

ミソラが視線を感じて素早く振り返った。……シドウが慌てて

目を背けたところだった。

「～～～～～！」

ミソラは頬を膨らませてぷいっ、と首を振って再び水平線の方を向いた。

「あ、カモメ！」

スバルの声がして、ミソラが顔をあげると、カモメが数匹、船に沿って飛んでいた。

「ホントだ、かわいい～！！」

ミソラはスバルの手を握ったまま立ち上がり、カモメに顔を近づけた。それに伴って、スバルも立ち上がった。

「♪～～、♪～～、」

ミソラが鼻歌を歌いながら人差し指を水平に伸ばした。

「……いや、ミソラちゃん、カモメはトンボじゃないんだから……」

……しかし、そのスバルの予想に色んな意味で反して、ミソラの指ではなく伸ばした腕に止まった。カモメの脚はヒレが付いていて掴むことはできないので、うまくバランスを取りながら乗っていた。

「うぉっ、ミソラちゃん恐るべし……」

「……なんかできちゃった……」

ミソラ自身もこれにはびっくりの様子である。そのままだとカモメがバランスを崩して落ちそうなので、とりあえずカモメを両手でつかんで、甲板の床に降ろしてあげた。

「……カモメって、なんか食べたっけ？」

「エビせんとかは食べたけど……」

「なんか、そういう系のもの、ないかな？」

2人は辺りをきょろきょろと見回す。

「……あ。」

2人の視線が止まった。シドウに視線が集まる。いや、シドウではなく、シドウが手に持っているものに視線が集まる。

「……お前ら、まさかこれをカモメにやろうって言いだすんじゃ……」

「それ以外に何があるんですか」

「……わかったよ、うまい棒の一本や二本」

そう言うと、シドウはポケットからうまい棒を取り出して投げた。それをキレイにスバルがキャッチする。

「ありがとう、暁さん！」

礼を言いながら、包みを開け、うまい棒を出して少し割って小さくした。スバルからそのうまい棒のかけらを受け取ったミソラは、カモメのくちばしに近づけた。

「……」

しかし、カモメはくちばしを動かそうとはしない。

「あれ～？　やっぱり暁さんのうまい棒じゃ、ダメなのかな～？」

ミソラが残念そうに言った。

「……おい、『暁さんの』ってどういう意味だ？」

シドウは若干、怒筋を浮かべて聞いた。

ぱくっ！

「お、食べた、食べた！」

「ホントだ～！」

「……」

タイミング悪くカモメがうまい棒を食べたため、シドウは完全に無視された。

『私からはドンマイ、とだけ言っておきます』

アシッドがハンターから言った。

「……ありがとよ」

シドウがそっけなく言った。

ぎぃ……

船内へと続く扉が開き、ソロが甲板に出てきた。

「……ん？　ソロ、どうした？」

「……オレの中に流れる血が知らせている。もうすぐだぞ」

それを聞いたシドウはハンターで現在地を確認する。

「マジだ……！」

「あっ……！」

シドウが声に振り向くと、スバルとミソラが空を見上げていた。

「どうした？」

「カモメが突然飛んで行っちゃいました……」

2人は名残惜しそうな目でシドウに言った。

「あぁ、そうだろうな。さしずめ、動物的な勘が働いて逃げたんだ

ろうよ」

「逃げる……？　何から……？」

「あれ、見てみな」

シドウが指差した方を見ると、水平線上に何か黒いもやのようなものがかかっている。

「なにあれ……？」

「黒い……霧？」

「いや、あれ全部ウィルスさ」

・・・・・

「「えぇぇぇ――――！！！」」

遠近法でウィルスが黒い点に見え、それがいっぱいいる……と言うことらしい。

「え、えぇ！？集める前からあんなにわらわらいるんですか！？」

「そ、だから頑張ろうな」

シドウはあえて二カッと2人に笑いかける。

「はぁ……しょうがないか」

「うん……がんばろ！」

スバルとミソラが言う。シドウはスバル、ミソラ、そしてソロが見渡せる位置に進み出た。

「じゃ、いよいよ任務開始だ！貨物船はそろそろこの辺で待機して、俺らは電波変換していくぞ！」

「「ハイ！」」

「それと、戦闘では相手の攻撃、自分の攻撃問わず、極力船に当たらないようにしろよ。一応防壁はあるが、頼りすぎは禁物だ」

「了解です！」

ミソラがピッと敬礼をした。

「じゃ、電波変換しておくぜ」

スバル、ミソラ、シドウがハンターを取り出す。

「……？」

シドウが左を向く。その視線の先では、ソロが古代のスターキャリ

アーで空間にムーの文字を描いていた。

「お前、ハンターで電波変換しろよ……」

ソロの後ろと左右に同じ文字が出現する。

「……断る。オレがハンターを持つのは、ラプラスの入れ物が欲しいという、それだけだ」

そう言って両腕を左右に広げる。

「……お前らしいな」

ソロの周りの文字が回転を始めた。

「……フン」

「電波変換！　ソロ、オン・エア！」

そして、ブライが出現した。

「おし、俺らもやるぞ！」

「「はい！」」

「「トランスコード！」」

「００１、アシッド・エース！」
「００４、ハープ・ノート！」
「シューティングスターロックマン！」

他の３人も電波変換し、４人の電波人間がそろった。

「さて……」

アシッド・エースが船の行く先を見つめ、他の３人もそれに倣った。
今はさっきよりかなり近づいて、それぞれのウィルスを判別できるまでになっている。

「うぅ……近くに来てみると、気持ち悪いくらいうじゃうじゃいる……」

ハープ・ノートは本当に気持ち悪そうに、口の中の汚物を吐き出すように舌を出して言った。

「気持ち悪がってる場合じゃないぜ。心していかないとマジでやられるぞ」

「分かってます、大丈夫です！」

「おし、それじゃ、そろっと行くぜ！」

４人はウィルスを殲滅すべく、駆けだした。

42、バレていた想い（後書き）

カモメってうまい棒食べるんすかね？

っていうか、今回のカモメが出てきた辺りの描写、いろいろつっ込みたいでしょうが、そこは温かい目で見てくださいｗｗｗ

途中のミソラの「手を繋いであげようか」発言ですが、あれは流星3の分岐シナリオでミソラのポーチを選んだときにミソラが同じ事を言っていたので、まぁやりすぎではないかなと思ってやってみました。

ようやく次回から任務バトル開始です！

43、ウィルスバスティング！（前書き）

XL？、

virus bustingｷﾀｰ

43、ウィルスバスティング！

「グレートアックス！」

ロックマンが巨大な斧を振るい、大量のウィルスを切り裂いた。

「マッドバルカン！」

アシッド・エースがブラスターを連射銃に変えて射撃した。ウィルスが一掃されるものの、またすぐに新手が現れる。

「ショックノート！」

背後に十数個のアンプを出現させ、ハープ・ノートがギターを弾いた。音符が発射され、正確にウィルスをデリートしたが、やはり数が減ったようには見えない。

「クロスロード――」

ラプラスソードが宙を回転しながら舞い、ウィルスを切り裂いていく。ラプラスソードがウィルスの一団の上空まで舞い上がったところにブライが待ち構えていた。ブライはソードをキャッチすると、それを振り下ろしながら落下した。

「――ブライブレイク！！」

着弾の衝撃でかなりのウィルスがデリートされたが、そのブライの背後からモノソード、ブレイブソードやファイアスラッシュのウィルスが切りかかった。

「くっ！」

すぐさま振り返りラプラスソードを振るう。モノソードは剣を構えて防いだが、ラプラスソードはその剣ごとモノソード自体も切り裂き、モノソードはデリートした。

「ウィルス風情（ふぜい）が……」

ブライは攻撃の手を休めることなく剣を振るいながら呟いた。

「お、思ってた通り、多いね……！」

パルスソングをギターから放出しながらハープ・ノートが言った。

「やっぱり、ゴン太たちも連れてきた方が良かったんじゃないですかぁ！？」

ロックマンが戦闘の最中のせいか声を張り上げて叫んだ。

「……そういえば言ってなかったな！　あいつらは確かに強い！　いくらなんでも、このウィルスくらいは駆除もたやすいだろう！　だけど！」

ロックオンソードで目の前のメットリオを切り裂いてから次を言った。

「これはディーラーのアジトに残されていた情報なんだが、ムー大陸は、戦闘があったせいで滅んだのは知ってるな！？　実は、その戦闘を止めるべく、電波変換を強制的に解除する技術がムーで開発

されていたんだ！　キングが悪用していたムーの技術のなかに、その技術もあったわけだが……。その研究結果の装置がまだこの海域で生きていて、この海域一帯が、生半可な電波変換を許さない領域と化しているんだ！　この海域では、大体シンクロ率４０％以下の電波変換はできない！　だから、あいつらを連れてきても、足手まといが増えるだけなんだ！」

「く……やるしかないのか……！　ウィンディアタック！」

ロックマンは風の力でウィルスを吹き飛ばして、隙を作った。その間に腕を顔の前に構える。

「マージノイズ、オックス×コーヴァス！」

腕を振り下ろすのと同時に赤い姿に変身したロックマンは腰を低くして左腕を構えた。

「うぉおおおお！！」

左腕にオレンジのエネルギーが球体となってたまっていく。そして、それが最大になると腕を前に突き出した。

「アトミックブレイザー！！」

燃え盛る炎が左腕から放出され、目の前のウィルスを焼いた。即座に消し炭になってデリートするものもいれば、黒こげになって海に落下していくものもいる。

「オメガレーザー！！」

アシッド・エースは両肩に、こちらは赤いエネルギーをためて発射した。

「ブライナックル！！」

右腕を前方にある何かを殴るかのように突き出すと、紫の拳がそこから無数に放出された。

「ギャラクシーアドバンス！　インパクトキャノン！」

他の3人のような固有の大技を持たないハープ・ノートはキャノンのカードを3枚融合させてインパクトキャノンに変化させ、凄まじいまでの砲撃を放った。

それぞれが繰り出した攻撃のせいで、辺りは何かが焼け焦げたような黒い煙が立ち込めている。そして、一瞬ウィルスからの攻撃が止んだが、やはり一瞬は一瞬で、再びさまざまな方向から攻撃が放たれた。

「くっ……！　数が多すぎる！　ロック！」

『お呼びのようだな、参戦命令か？』

「うん、今は人手が足りない、手伝って！」

『了解！　暴れるぜぇぇぇ！！』

ロックマンの隣にウォーロックが現れた。

『ビーストスイング！』

ウォーロックが腕を大きく振るうと、自慢の爪がウィルスを一気に切り裂いた。

『まだまだァ！　ビーストブレス！！』

白い衝撃波がウォーロックの口から放出され、当たったウィルスはデリートしていく。こういう状況下ではあるものの、ウォーロックは楽しそうに技を繰り出していく。

「……ハープ！」

ハープ・ノートがショックノートを打ちながら呼んだ。

『分かってるわよ！』

ハープが即座にウィザード・オンをした。

『いくわよ！　パルスソング！』

ハープの、人間の顔で言えば額に当たる部分にある弦からハート型の音波が放たれウィルスをデリートしていく。

「アシッド！　出てきてくれ！」

『了解！』

アシッドも前の2体同様にウィザード・オンをして腕を構える。

『ギルティ・スラッシュ！』

電波人間４人と電波体３体がどんどんウィルスをデリートしていく。

――――そして、数十分後。

「や、やっと片付いた……」

ようやく、周りにウィルスを見なくなった。気がつくと、船も進行を止めてとまっている。

「……まだだ、こっからが本番だぞ……！」

アシッド・エースが言った。

「ど、どういうことですか……？」

「今、この海域の中央に船がついた。今から電磁波でウィルスを呼び寄せる」

それを聞いたロックマンとハープ・ノートは挫絶した人のように膝と肘を床につけた。

「そんな話があったんだっけ～～～！！」

「休憩するなら今だぞ……」

アシッド・エースもそう言いながら辛そうに腰を下ろした。

「回復、できるかなぁ……」

「大丈夫、任せて！」

ハープ・ノートが今までの苦労を感じさせない元気な声で言った。

「任せて……ってどういうこと？」

「わたしもできるようになったから、回復術！」

「え、ホント！？」

「うん、昨日マドカに教えてもらったから！」

そう言いながらハープ・ノートはロックマンの背後に回り込み、彼の背中に両手を乗せた。

「……」

ハープ・ノートは集中するように目を閉じる。

「さて！　回復技を今から教えるわけだけど……」

昨日の放課後、場所は展望台。そこでマリーン・ドルフィンとハープ・ノートが向き合っていた。

「うんうん！」

ハープ・ノートは期待の目をマリーン・ドルフィンに送る。

「でも、そのまえに――――」

マリーン・ドルフィンは左腕をアクアスラッシュに変えた。

「え、マドカ、何を――――」

マリーン・ドルフィンがアクアスラッシュを振りあげ、右腕を前に差し出しているのを見て、ハープ・ノートは期待から恐怖に目の色が変わった。

「こうするのっ！！」

ズバッ！

「くっ！」

マリーン・ドルフィンは痛みに目を細めた。彼女の腕には刀傷が痛々しくつき、そこから電波が粒子のようになって除々にあふれているのが見える。

「マドカ、何やってるの！？」

「だって、これからやるのは回復技の練習なんだよ？傷がなければどうにもならないじゃない！」

「でも、なにもマドカがそんな風にならなくても……」

ハープ・ノートはマリーン・ドルフィンの腕の傷を痛々しく見つめ、目を細めて言った。

「いいの、わたしのことは。それに、ドルフィンがわたしに技を教えてくれた時もこうしてやってくれたんだから」

『あの時はマドカがなかなか習得してくれなくて、ずっと痛い思いをしてたんですけどね～』

ドルフィンが隣にウィザード・オンをして楽しそうに言った。

「ちょ、あれは、その、もう謝ったじゃん！　蒸し返さないでよ！」

マドカが焦って言った。

『フフフ、冗談ですよ』

「も～……。じゃ、説明するね」

マリーン・ドルフィンはハープ・ノートに向き合って言った。

「う、うん……！」

ハープ・ノートは何かを決意したように返事をした。

「まず、治したい傷のところに手を当てて、……ほら、やってみて」

「うん……」

ハープ・ノートはマリーン・ドルフィンの刀傷に手をそえた。

「で、考えに集中する。相手の傷が治るところを思い浮かべて、そのイメージを何回も頭で反芻（はんすう）する」

ハープ・ノートは目を閉じ、イメージに集中した。なるべく鮮明になるように、マリーン・ドルフィンの刀傷が治癒していく様子を想像する。

「そして、電波エネルギーを手のひらから放出する！」

「……え！？」

ハープ・ノートは思わずイメージを消して、目を開いた。

「……ダメだよ、ちゃんと集中しなきゃ」

「……いや、電波エネルギーを放出ってつまり、いつも技を発してる時のあの感じだよね……？」

「そうだけど……？」

「それって、間違って技を発動したり、……しない？」

「うん、する。っていうか、した」

マリーン・ドルフィンは嫌にあっさりと言った。

「か、過去形！？」

「わたしも練習したてのころは技が暴発しちゃってさ～」

『それで痛い思いを――――』

「ドルフィン～、ゴメンって言ってるじゃん～」

マリーン・ドルフィンは再びしゅんとして言った。

『分かってますよ。ご主人様♪』

ドルフィンは明るく言った。

「『ご主人様』がどうも皮肉に聞こえるんだけど……」

『き、気のせいですよ～』

「あ、あの～……」

「あ、ごめんごめん、話しこんじゃって！……大丈夫だよ、ミソラ

ちゃんならきっと暴発はしないよ！それに、暴発しても大丈夫！……我慢するから」

最後の一言はぼそっと呟くように言ったが十分にハープ・ノートにも聞こえた。

「うぅ、プレッシャー……」

「だ、大丈夫！ほら、やってみて！」

「う、うん」

ハープ・ノートは再び傷に手を当ててイメージに集中する。

「ふんっ！！」

ハープ・ノートは力（りき）み、その手からはピンク色の光が放出され、ハープ・ノートの両手とマリーン・ドルフィンの傷を球体のような形になって包みこんだ。

「……」

ピンクの球体の内部に水色の肉片のようなものが小さくできると、それはジグソーピースを合わせるように傷に入り込んだ。その後も次々に肉片ができては傷に入り込むのを繰り返していく。

そして――

「……うわ、すごい！！」

マリーン・ドルフィンの感嘆の声に、ハープ・ノートは閉じていた目を開けた。

「……どうしたの？」

「か、完治しちゃった……！！」

マリーン・ドルフィンはそう言って腕をハープ・ノートに見せる。その腕のどこにも傷跡すら見つからなかった。

「や、やったの！？」

「う、うん！　一発合格！」

「や、やったぁー！！」

ハープ・ノートは嬉しそうに両手を挙げた。

「すごいなぁ～、わたしなんて習得するのに1週間はかかったんだよ？」

マリーン・ドルフィンはうらやましそうな眼をハープ・ノートに送る。

「そうなの？」

『だからわたしはずっと痛い思いを――――』

「……あ」

ハープ・ノートの声に反応してみればマリーン・ドルフィンは思いっきり負のオーラを放出して体育座りをしていた。

「……わたしだってわたしなりに頑張ってたんだよ？別にわたしは悪気があってドルフィンにずっと痛い思いをさせたわけじゃないし、それを申し訳ないとも思ってるし、ほんとにあれは反省してるし……」

ブツブツと呟く声が聞こえて来る。これはもう哀れを通り越して怖い。滝のような冷や汗をハープ・ノートとドルフィンは流していた。

『マ、マドカ、調子に乗ってゴメン……』

ドルフィンは本当に申し訳なさそうに言った。

「……うん……っていうか、わたしだよね……？　謝るべきは」

『いや、実際、ホントにそれはもういいですから』

「……わかった」

「……で、でさ！わたしのこの技の名前、どうしよう！？」

急に湿っぽくなってしまった空気を変えるために聞いた。

それを聞いてマドカはちょっと上を向いて考えた。

「う～ん、そうだなぁ……。……じゃあ、こんなの、どう！？」

「ヒーリングサウンド！！」

ハープ・ノートはロックマンの背中に乗せた手に力を込めた。

43、ウィルスバスティング！（後書き）

・・・切り方おかしい・・・。そのせいで、次はかなり短く終わるかもしれません・・・

そういえば、ウィルス、「絆」初登場・・・

４４、信頼の光（前書き）

ここで、この小説の時間軸の整理をしておきます。
月曜　グレイとの初戦（１～１８）
火曜　爆弾騒動、グレイとの第二戦（１９～３０）
水曜　マドカ登場、ミソラＶＳマドカ（３１～３６）
木曜　ミソラとマドカ、病院へ（３７）
金曜　回復技の修行（４３話内）
土曜　ムー大陸の任務（３８～）

ＸＬ？、
Ｌｉｇｈｔ　ｏｆ　ｔｒｕｓｔ

４４、信頼の光

「はい、終わり！」

ハープ・ノートはそう言ってロックマンの背中から手を離した。

「え、終わり！？」

ロックマンは驚いて声を発した。

「……うん。どう？」

ハープ・ノートは少し不安そうに具合を聞く。ロックマンは腕を確かめるように動かしてから言った。

「うん、全快！すごいや、ミソラちゃん！マドカちゃんより早かったんじゃない？」

ロックマンは正直、回復速度はマドカのそれ未満か、同じかという程度だと思っていた。しかし、今のは明らかにミソラの方が上だった。

「そ、そうかな……？　まだやり始めたばかりでその辺のこと分かんないけど……」

「うん、昨日教わったばかりだとは思えないや！」

ロックマンは嬉しそうに返事を返した。

「マドカが言うには、この回復技は相手を想う気持ちが大きければ大きいほど効果も大きいらしいから、多分それが影響してるんだと思う……」

「……ミソラちゃん？」

ロックマンが怪訝そうな顔でミソラの名を呼んだ。

「……え？」

呼ばれてロックマンの方を向き、顔を見て、ハープ・ノートはだんだん自分の言った言葉の意味が分かってきた。

「……はっ！　い、今のなし！　何も言ってない！」

ハープ・ノートは赤面してそう言い、アシッド・エースの回復へ回った。

数分後。

「大丈夫、ハープ・ノート？　自分だけ回復出来てないけど」

ロックマンが問う。ブライを除く2人を回復させて（ブライは断った）、自分だけ回復していないハープ・ノートを心配そうに見つめている。

「うん、大丈夫。自分自身の回復が出来るまでにはまだなってないから自分は回復できないし、無茶はしないよ」

そうは言うものの、ハープ・ノートは無茶をしてしまいそうで怖い。
彼女は、他人のためなら無茶もしてしまう人間だから。

「……うん、わかった」

スバルは思った。自分がしっかりしなきゃ、ミソラちゃんに無茶はさせまい、と。

「……よし、配置に着け」

アシッド・エースは隊員（スバル達）の決意が固まったのを見計らって命令した。
配置、というのは回復中に立てた作戦で、船頭と船尾、船の両サイドの４か所に４人を配置し、なるべく遠距離攻撃でウィルスを撃破するというものだ。船にウィルスが近づくまでにできるだけ数を減らしておかないと、船に接近されてから迎撃していたのでは、処理が間に合わない。

ちなみに配置は、船頭がアシッド・エース、船尾がブライ、進行方向に向かって左がロックマン、右がハープ・ノートだ。

「各員、攻撃準備、いいか！？」

アシッド・エースが通信で聞いた。

「ＯＫです！」
「こっちも！」
「……早く始めろ」

それぞれの返事を聞いて、アシッド・エースは続ける。

「じゃあ、1，2，3で始める！　武器を構えろ！」

言いながらアシッド・エースはオメガレーザーを発射しやすいように腰を低くした。ブライは腕をふりかぶり、ロックマンはキグナス×リブラの状態で腕に宿したロックバスターの銃口を前に構えた。

「ハープ、さっきは体力温存のために使わなかったけど、今度はいいよね？」

『そうね、でも無理しちゃだめよ？』

ハープは心配そうな顔を浮かべている。

「大丈夫だよ！　きっちりウィルスバスティング、決めるんだから！」

ハープにウィンクを送り、前方を向いて眼前に広がる大海原を睨み、ギターを構える。彼女の前には２ｍ四方はあろうかという、巨大なアンプが宙に浮いていた。大きさを除けばショックノートを放つときに出すアンプと同じだ。

「いくぞ！　1！」

アシッド・エースがカウントを始めた。

「2！！」

ごくっ

ロックマンとハープ・ノートは唾を飲み込んだ。

「3！！！」

『ウィルスギャザー、発動！』

アシッド・エースの掛け声と共にアシッドがウィルスを集める電磁波を放つ装置を作動させた。

……一瞬の空白があった。何も起こっていないようにも思えたが、それも一瞬だった。

「……ん？」

ロックマンが目を凝らす。彼がよく見ようとしているのは、はるか彼方の水平線。

「……水平線が、黒くなって動いてる……」

ロックマンの言うとおりだった。水平線が、まるで毛虫にでもなったかの如く、黒くなりもぞもぞと動いている。そして、除々にその黒い線は太くなっている。

……いや、もうそれの正体はその場にいる全員が分かっている。ただ、冗談じゃない、とでもいいたくなるくらいの状況だ。

「全員、攻撃ッ！！」

アシッド・エースの掛け声で、ロックマンは思わず滅滅していた目をまじめな色に戻して茶色いバスターの銃口を構えた。

「メテオライトバレッジ！！」

水色の光球が無数に発射され、黒い水平線に向けて疾走した。普段なら連続して十数発くらいしか撃たないこの技を、ロックマンはとどめることなく発射し続けた。

「ブライナックル！！」

ブライが腕を突き出すと、再び紫の拳が群れを成して放たれた。

「オメガレーザー！！」

アシッド・エースも、肩から赤いレーザーを放出した。

「……すぅ、はぁ……」

対してハープ・ノートは集中する必要があるのか、目を閉じて深く深呼吸した。そしてキッと目を開いて腕を振り上げた。

「はぁぁぁッ！！」

力を込めると、目の前の巨大なアンプの、本来音がでる部分にピンクの光が溜まり、除々に大きくなっていく。

「パルス――――

ハープ・ノートは腕をギターに向けて振り下ろし、弦を弾きながら叫んだ。

「――ブレイカー！！」

弦が弾かれた瞬間、アンプに溜まっていたピンクの光が一気に放出された。それは極太でピンクのレーザーとなり、水面に風圧で波を作りながら水平線に迫った。

４人それぞれの技が宙を舞い、そして遠く離れた海上で黒い線（ウィルスたち）にぶつかった。

ズドォォォン！！

轟音と爆発煙が遠くで起きるが、線の被爆しなかった部分がどんどんこちらに迫ってくる。

「く……ッ！」

ハープ・ノートが顔をゆがめる。

「……まだまだァ！！」

ロックマンは自分を奮い立たせるように叫んだ。

４人はそれぞれの技を操って攻撃方向を変え、それに対処していく。しかし、４人の技はどれも長時間撃ち続けるようには出来てはいな

い。撃ち続ければ、体力も消耗が激しい。中でも、それが顕著なのが……

『ミソラ、ホントに大丈夫!?』

ハープはミソラの顔を覗き込みながら聞いた。ハープ・ノートは顔色はまだいい方だが、冷や汗をびっしょりと掻き、かなりきつそうにしている。

「う……んっ……！　まだまだ……いけるっ！」

ゴォッ!!

叫んでレーザーの出力を上げる。それが自身へさらなる苦痛を与える事を知りながら。

『昨日開発したばっかりの使い慣れてない技をそんな長時間打ち続けるなんて、無茶よ!』

ハープが心底心配した声を出した。

「無茶じゃないよ……マドカが夜まで付き合ってくれて完成したこの技、コントロールしてみせる!!」

ハープ・ノートは両手をアンプの後部に押し当てて踏ん張った。

『ミソラ……』

ハープには分かる。自分とミソラの間にはシンクロという繋がりがあり、高いシンクロ率のお陰で、今のミソラの疲労状態くらいは自

分の体のことのように分かってしまう。すでに技を撃つ限界は超えている。

無理はない。ロックマンやアシッド・エースの回復に力を使い、自分は回復できず、使っている技は本来彼女には出せない出力の技の上、ほぼ初使用。どう考えても４人の中で一番疲労は激しい。

「だい、じょうぶだよ、ハープ……。みんなと約束したもん、絶対帰るって！」

『……』

「任務して、買い物して！　マドカにもそう誓った！　わたしは負けない！　みんなが待っててくれるから！！」

『……』

ハープはミソラの目の前に進み出て、パルスブレイカーを放っているアンプの後部に触れた。途端にハープの体がうっすらとピンクに輝きだした。

「……ハープ？」

『ずっと、ドルフィンと再開してからずっと考えてたの……』

「……何を？」

ハープ・ノートが技の出力を落とさないように歯を食いしばりながら聞いた。

『ドルフィン……。かつての、ＦＭ星親衛隊の隊長のころよりもずっと幸せそうだった……。あの、マドカちゃんを主人として付き従い、お互いを信頼しあって……』

「……」

『あの子がなんであそこまでマドカちゃんを慕っているのかは分からないけど、マドカちゃんとドルフィン、これ以上にないってくらいの信頼とか、繋がりとか、絆とか、そういうもので結ばれてて……。わたしはあそこまでミソラを想えているのかなって……』

「そ、そんな！　ハープも、ちゃんと――――

ミソラの言葉を、ハープは首を振って制した。

『ううん、足りないの。あの子らに比べれば全然……。わたしはミソラが無茶しても、ただ心配して見てるだけしかしてなかった……。でも、それだけじゃダメだってあの子に気付かされた！主人が無茶するなら、ウィザードはその主人に力を添えて、無茶しなくて済むようにする！それがホントの信頼でしょ！？』

「……！」

『わたしは、あの子ほどすごい力はないけど、でも、少しでも近づきたい！だから、協力させて！』

「……なんだ」

『……？』

ミソラの声に、ハープは振り返った。

「結局、わたしもハープも同じなんだね。2人とも、あの2人に近づくために頑張るって結論にたどり着いた。」

『……クスクス、そうね。……それじゃ』

「いっちょ、ムーのウィルス達に信頼の力を見せてあげようか！」

ミソラとハープは眼前のウィルスの壁を不敵な笑みで見つめる。

『……いくわよ、

「『せぇ～のォ！！」』

「『トリプルパルスブレイカ――――――――！！！』

ドォォォォン！

既存のアンプの左右に同じサイズのアンプが現れ、同様のレーザー砲を発射した。

「「！！？」」

ロックマン、アシッド・エース、ブライは突如大きくなった轟音の聞こえる方を振り返った。

「ハープ・ノート……すごい……！！」

「どこからあんな力が……！？」

「……フ」

ロックマン、アシッド・エースは驚きの顔を浮かべ、ブライは口元のみで少し笑った。

『！！　スバル、前ッ！！』

ウォーロックが叫び、ロックマンは視線を戻す。後ろを向いて注意が散漫になったせいで、眼前にまでウィルスの大群が迫っていた。

「くぅっ！！」

なんとかメテオライトバレッジを放って対処するが、除々に追い込まれる。

『ほ、本当に何体いやがるんだ……？』

ウォーロックが悔しげに問う。ロックマンはもう、両腕をバスターに変え、全てが1つに繋がって見えるくらい高速で光の弾を発しているが、やはり押されかけている。

「こ……のっ……！！」

「スバルくんっ、伏せて！！」

突然聞こえた声が誰のものなのかを確認するより先に、ロックマンは反射的にその声に従い伏せた。

ドゴォォォンッ！！

途端に、ロックマンの頭がそれまであった空間を、ピンクのレーザーが駆け抜け、ロックマンの前のウィルスの壁を破壊した。

「す……すっご……。って、ハープ・ノート！？」

ロックマンが背後を振り返ると、自分の分のウィルス全てを倒したハープ・ノートがサッと両手を左右に広げたところだった。その腕の動きに合わせて巨大な3つのアンプの内の2つがハープ・ノートの元からアシッド・エース、ブライの方へと走り、2人の前の壁に向けて同様にレーザーを放ち、それを破壊した。

「……、よ、よくやった、ハープ・ノート」

「余計なマネを……」

2人が（距離があるので通信を使って）ハープ・ノートに話しかけたが、それに対してハープ・ノートは聞こえたようなそぶりを見せなかった。両腕を左右に広げたまま、肩で息をしている。

「……ミソラちゃん……！？」

ロックマンはハープ・ノートを見つめながら立ち上がった。

突然、ハープ・ノートの腕から力が抜け、体の両脇にブラリと垂れさがったかと思うと、がくっと膝をついた。

「！！！　ミソラちゃん！」

ロックマンは駆けだしてなんとかハープ・ノートの体が地面に叩きつけられる前に受け止めた。

「ミソラちゃん、しっかり！」

ロックマンはハープ・ノートを揺さぶりながら声をかける。対してハープ・ノートは苦しそうに、はぁはぁと息を吐いている。

「無理がたかったな」

船頭からアシッド・エースが近寄って来た。

『響ミソラに生死にかかわるような異常は見受けられません。純粋な、極度の疲労のせいでしょう』

アシッドがハープ・ノートをスキャンして言った。

『スバルくん、ミソラを床に寝かせて』

ハープが頼んだ。

「え、うん……」

ロックマンは静かにハープ・ノートを床に下ろした。

ハープはふわふわとミソラの胸にあるハートマークまで飛んで行き、両手をそこに当てた。

『……ヒーリングサウンド！』

ブワッ！

途端にハープ・ノートの胸元がピンクの光に輝いた。

『な、ハープ、てめぇもそれ出来たのか！？』

ウォーロックが驚いたように聞いた。

『分かんない！』

『わ、分かんないって……』

思わずズッとこけるウォーロック。

『ダメもとよ！　出来るかどうかなんて分からないけど、出来るかもしれない！　なら、やらなきゃいけないのよ！　さっき、ミソラとそう確認し合ったばかりだし、それに急がないと！』

『……そうだな、なるべく早くしろ、手遅れになるまえに！』

「ロ、ロック、『手遅れ』ってどういうこと！？アシッドは命に別状はないって……」

どうもウォーロックとハープが焦っているように見え、その理由が分からないロックマンは聞いた。ハープ・ノートは確かに苦しんでいるが、急がなくてもウィルスを全てデリートした今ならじっくり治せるはずだ。ミソラの苦しむ時間を少しでも短くしよう、という

こと以外に急ぐ理由が見当たらない。

『ミソラが動けないままじゃ、この先の戦いではこいつを守って闘わなきゃいけなくなるだろ』

「え、この先の戦いって……まだ何かいるの！！？」

「いるわけがない。オレがムーの電波体をこれ以上感じない！」

ブライがウォーロックを睨みながら言った。

『あぁ、そうだな、確かにムーの電波体はもういねぇ』

ウォーロックは一筋の冷や汗をかきながら、わざとにやりと不敵に笑い、ブライに告げた。

「ムーの電波体は……だと……？」

ブライは怪訝そうな顔と目つきで聞き返した。

『そうですね、ウォーロックの言うとおりです。そして、それはもうこの船の下まで来てます』

今度はアシッドが言った。

「おい、アシッド、それにウォーロック、ハープ、一体何が来るって……？」

アシッド・エースも聞き返した。

『あぁ、俺たちもなんであいつらがここへ攻めてくるのか、聞きたいぐらいだが、事実、攻めてきてるぜ　――――――

「――――――オフィシャルのバトルウィザードがなぁ！！！！！」

ザバンッ！！

船の周りの海の、水面の至るところに水柱が立ち上った。それを見上げればそこには、かつてＷＡＸＡにウォーロックコピーが攻め込んできた時やディーラーのアジトに攻め入った時に力を貸してくれたはずのＷＡＸＡのバトルウィザードが敵意むき出しでたたずんでいた。

45、鼓動（前書き）

XL？、
beating

45、鼓動

ギィン！

「ぐっ！」

刀と刀がぶつかり合い、火花が散る。バトルウィザードの繰り出した斬撃をロックマンが受け止め、彼は顔を歪めた。

「ぐぅぅ……ッ」

実力はロックマンの方が遥かに上。本来なら、押し合いでは負けないはずであった。しかし、今のロックマンにはそれは出来ない。なぜなら……

（ミソラちゃんが……まだ……）

ロックマンは背後の床に横たわるピンク色の電波人間を瞳だけを動かして見つめる。ハープ・ノートは仰向けに横たわり、ひどい風邪でも引いたかのようにはぁはぁと苦しそうな吐息を漏らしている。そして、その胸元ではハープが治療を続けついるが、マリーン・ドルフィンやハープ・ノートほどうまくは回復させられないようだ。ハープ・ノートがロックマンやアシッド・エースにしたような回復の早さが、ハープのそれにはない。背後にそんな二人がいるから、脚を後ろに開いて踏ん張ることも受け流して避けることもできなかった。

と、不意にロックマンの背後から別の2体のウィザードがハープ・ノートに斬り掛かった。

「く……そッ！」

ロックマンは自分に斬り掛かるウィザードの対処に手一杯でその２体を受け止めることが出来ない。――一か八か、片足で蹴り飛ばすか？

ギィィイン！

「！！」

しかし、ウィザードたちは脚ではなく彼らの刀を受けた二振りのソードに阻まれた。

「……俺たちを忘れるな、ロックマン！」

「チィ、手間かけさせやがって……」

「アシッド・エース！ブライ！」

二人はロックマンの声には応えず自分が受け止めついるウィザードを睨むように見つめている。ロックマンは心で二人に感謝しながら自分も相手に向き直った。

「……それにしても、どうしちゃったんだろう、みんな……」

ロックマンが問う。目の前で自分たちに切り掛かっているのは、まさしく、サテラポリスのバトルウィザード。ＷＡＸＡがウォーロッ

クコピーの襲撃を受けたときにロックマンに助力し、ディーラーのアジトのクリムゾンマシンの電脳でノイズドウィザードに取り囲まれたロックマンをかばって殉職していった、あのバトルウィザードたちと個体こそ違えど、同じ種のウィザードのはず。それなら、その身に宿る信念も同じはずだ。……その彼らなら、普通サテラポリスの隊員に切りかかるなんて、ありえない。

「それについては、今アシッドが解析してる」

アシッド・エースの声だ。アシッドがその言葉に重ねるように言う。

『今のところ、分かっているのはここにいるウィザードたちはアメロッパ、シャーロ、アッフリク、アジーナなどの国の出身のものがほとんどで、この中にはニホン製のバトルウィザードはいない、ということです。』

「そうなの？」

「ニホンのＷＡＸＡやサテラポリスはディーラーを倒した。その恩が外国のＷＡＸＡにはあるからな。外国としてはこれ以上ニホンに恩を作りたくない。だから、この海域の調査はニホン抜きで行われていたんだが……」

そこでアシッド・エースは悔しそうに歯ぎしりをした。

「……外国ＷＡＸＡの上の連中め、自国の失態を隠しやがったな……！　こいつらに何があったかは知らないが、こんなの報告にないぞ……！！　こういうことするから余計に国際関係が悪化するんだろうが！！」

憎々しげに呟くアシッド・エースの言葉を聞くロックマンは、今の国際関係の悪さを思い知ったような気がした。

その主な原因はサテラポリスが保有する電波人間の存在が1つの原因である。1年前、ウォーロックがアンドロメダの鍵を持って地球のニホンに舞い降り、それを狙って次々にFM星人がニホンに来て、ニホンの様々な人間が電波体を持ち、電波変換の能力を手に入れた。結果、ほとんどニホンしか電波変換、という「戦力」を保有していないことになる。人工的な電波変換も研究されているが、完成してない上に、完成したところで下手にその技術を渡すわけにもいかないだろう。なにせ、電波変換などというものが世界各国で量産できてしまえば、下手をすればなにかの拍子に起こった戦争の「戦力」に使われかねない。世界は今、電波技術で成り立っているのだから、電波をウィザード以上にうまく操れる電波人間が戦争目的に使われれば、これほどの脅威はない。しかし、そんなニホンのWAXAはメテオGの脅威から地球を救った組織でもある。つまり、世界各国はニホンのみが「戦力」を独占している状態なのに、ニホンには頭が上がらない状況なのである。これでは関係も悪くなる。

「……今は国際関係の話をしてる場合ではないだろう」

ブライが冷静に言う。ラプラスソードを使ってこともなげにウィザードの刀を止めている。

「そうだな……。しかし、どうする？相手に何が起こったか分からない以上、こちらからは手を出せないぞ？」

アシッド・エースはどちらかと言えば自身に問いかけるように言った。国際関係の話を差し置いても、彼らを無事に保護できるものなら保護したい。

「それはアシッドの解析が終わらないことにはどうに……もッ！？」

ロックマンが言葉を切る。……先ほど倒した空を黒に覆い尽くさんばかりのウィルスほどではないが、かなりの数のウィザードがいたのを忘れていた。見ると、３人が押さえているのとは別のウィザードが、バルカンでハープ・ノートをねらい打とうとしていた。

「ま、間に合わな……！！」

急いで防御をとろうにも、手がふさがっていてそれができない。

バルカンが弾を連続で発射する音が響いた。

「バ、バトルカード、オーラ……ッ」

３人の足元から弱り切った声が聞こえるのと同時に、３人を包みこむ黄色いオーラが出現し、３人が押さえつけていたウィザードは彼らから引き離され、同時にバルカンを全部防いだ。オーラにあたったバルカンの弾が地に落ちるパラパラという音を無視して、ロック

マンは振り返った。

「ミソラちゃん……そんな体でカードを使っちゃダメだ！」

３人に囲まれるようにして横たわっていたハープ・ノートは、痛みに顔をゆがめながら、ふらふらと立ち上がろうとしていた。

「だ、大丈夫……もう、闘える……っ」

と、そこまで言ってがくっと膝をついた。ハープはミソラに抱えられてなんとか回復を続けている。

『……回復率、４０％というところですね……。戦闘要員に数えられる数値が８０％として……まだ半分にしか到達していません。回復効率の妨げにもなりますので、じっとしていてください』

アシッドが周りのウィザードの解析をしながらハープ・ノートを看て言った。全快の状態のハープ・ノートをすでにアシッドは知っているので、そのくらいは簡単にできるのだろう。

「で、でも……っ……」

「ミソラちゃんの今の仕事は闘うことじゃなくて回復することだよ！とにかく、ボクが合図したらオーラを解いて！今のミソラちゃんに、こんなに大きいオーラの維持は、負担が大きすぎる！」

体力全快の電波人間がオーラを張るのでさえ、１人入れる大きさのオーラを数十秒維持するのが限界とされているのに、４人がまるまる入れ、バルカンやソードによる多方向からの攻撃を弾くほどの防壁を今の状態のハープ・ノートが作りだせたのは、奇跡としか言い

ようがない。

「……分かった……」

ハープ・ノートは痛みで歯を食いしばる。体の痛みだけではない。ここでロックマンに頼るのは彼女の性格上、許せないことであった。プライドが高いのではなく、どうしても自分が足手まといに感じてしまうのだ。……傍から見れば、もうすでにかなり働いているハープ・ノートであるのだが。

「……マージノイズ、クラウン×ジェミニ！」

ロックマンの姿が、両肩と額からトゲのような突起が飛び出し、全身を緑に、頭部をオレンジに染めた姿に瞬時に変わった。

「……どうする気だ、ロックマン？」

「ボクがアシッドの解析時間を稼ぎます！　……ミソラちゃん、いくよ？」

ロックマンの問いかけにハープ・ノートは黙って静かにうなずいた。ロックマンはそれを見ると、ゆっくりと何かに集中するように目を閉じる。

「3、2、1、……ゼロッ！！」

ロックマンの掛け声と同時にオーラがかき消すように消えた。途端にそれまでオーラに阻まれていたウィザードがなだれ込んでくる。

「バトルカード、サンダーオブアースッ！！」

すかさずロックマンが叫ぶと、周りに電気の球体が無数に現れ、ウィザードたちに飛びかかった。帯電した球体はウィザードたちをまとめてマヒさせ、動きを奪う。

「……なるほど？　それならまとめて動きを封じられるってわけだ」

そのアシッド・エースの言葉にうなずくロックマン。

「ボクがこれで動きを封じるから、２人はカバーしきれなかったウィザードを取り押さえて！」

「はいよ」

「……フン」

なんとかウィザードを押さえつけた４人は、周りでマヒしてるウィザードを警戒しつつアシッドの解析を待つことになった。

定期的に電気の塊を操ってウィザードの動きを止めるロックマンをひざまづいて見つめていたハープ・ノートはこらえ切れなくなったのか、口を開いた。

「……ロックマン、……いやスバルくん――――

「『ごめんね』なら言っちゃダメだよ、ミソラちゃん」

「え？」

ミソラは目を見張る。スバルは目こそ合わせなかったが、電気の球を操りながらにこやかに言った。

「ミソラちゃんは、１人でほぼ全部のウィルスを殲滅したじゃないか。だったら、そのくらいの疲労は当然だよ。だから、ミソラちゃんは休んでて。ここからはボクたちが頑張る番だから」

「……」

「それに、ミソラちゃんは足手まといになりたくないと思ってるんだろうけど、そんなことは全然ないよ。この先もそうなりたくないと思うなら、早く全快することを考えて。回復するまではボクたちがフォローする。」

ミソラはうつむいて言葉を噛み締める。

「……うん、ありがとう……！」

スバルの言葉の１つ１つが、心に響く。なにか、安心させられる。この、敵か味方かすら分からないウィザードたちに取り囲まれたこの状況でも、乗り切れる気がしてくる。

ドクンッ！！

「「！！」」

それは、突然だった。突然、ロックマンとハープ・ノート、2人の中で鼓動が響く。まるで、楽しいことをして興奮した時のような、胸が高鳴るような大きな鼓動。それも、自分の中から聞こえるのではなく、聴診器で他人の鼓動を聞いているような、そんな感覚。

（（なに……これ……？））

2人とも、その突然感じた不思議な感覚に、茫然と立ち尽くしていた。

「2人とも、上だ！！」

「「！？」」

突然起きた感覚にとらわれていた2人は、突然響いた声によって一気に現実に引き戻された。バッと上を向くと、今しがたの謎の感覚にロックマンがとらわれてサンダーオブアースを操るのに隙が生じたからか、ウィザードがマヒから解放されていた。しかし、驚くべきはそこではない。そのウィザードの首筋から植物のツタにもイソギンチャクの触手のようにも見える細長いひも状のものがハープ・ノートの首筋めがけて伸びていた。

「「な……！？」」

突然の事態に、とっさにロックマンはロックバスターを、アシッド・

エースはステルスレーザーを構えようとする。ハープ・ノートは驚きでとっさの判断が効かなくなっているようだ。

（間に合え……っ！！）

しかし、どう見ても、触手が首筋に到達する方が早い。そして――

――

ドンッ！！

音が、響いた。

45、鼓動（後書き）

国際関係の話は、まぁ、実際こうなってるんじゃないか、って感じで書いてみました。
今回若干短いですが、これは元々、次の話と合わせて1話だったのを文字数の長さの関係で切ったためです。

46、侵食（前書き）

XL？、
erosion

46、侵食

「……え？」

触手は弾けた。横から飛んできた、紫の拳によって。

「……驚いてる暇があったら早く動きを封じろ」

「う、うん！」

ロックマンは急いでサンダーボールを触手を伸ばしてきたウィザードに当てて、その動きを止めた。ハープ・ノートは突然のことの連続で唖然としていたが、ハッと我に返り、触手を攻撃して消した者を見つめた。

「……あの、ありがとう、ブライ……」

ブライはフン、とつまらなそうに鼻を鳴らした。

「オレはただ、お前があそこでやられればまたそいつがうるさくなるのが耐えられなかっただけだ。そいつの生ぬるいセリフは耳触りで仕方ない」

と、ロックマンを見据えて言う。

「……うん、ごめんね、わたしの不注意だね」

変わったな、とロックマンもハープ・ノートも思った。当初の、スバルの仲間をカミカクシで呑み込んだ時やバミューダラビリンスの奥地でスバルとミソラのかばい合いにむしずが走る、とミソラを半殺しにしたころのソロとは大違いだった。かつてのソロだったら今の状況ならただ見ているだけか、下手したらミソラごとウィザードを消していただろう。

「……」

ブライは返事もせず、他のウィザードの監視にもどる。そんなブライの後ろ姿を見て、ミソラはフッと笑ってから、ロックマンとアシッド・エースを交互に見た。

「……それで、今のは一体何？」

『……先ほどのウィザードから出てきたものを解析してみて、ようやく分かりました』

ロックマンとアシッド・エースが返事をしようと口を開いたその隣から、別の声が聞こえた。アシッドが再びウィザード・オンをしていた。アシッドは何か深刻な雰囲気をかもし出している。（アシッドの顔は表情が変わらないので平常との判別が難しかったが）

「……それで？なんであいつら切りかかってくるんだ？っていうか、さっきの触手はなんだ？」

シドウがアシッドに問う。アシッドはあくまで冷静に応えた。

『あの触手、あれがウィザードの反乱の原因です』

「!?　……どういうこと!?」

ロックマンが目の前のマヒが解けたウィザードにマヒをかけ直しながら聞いた。

『……情報があいまいなので、解析結果とＷＡＸＡが集めたデータに私の考察を含めて言いますが……』

アシッドの演算能力は、人間で言うところの推理能力でもある。彼のスペックを考えれば、それなりに信頼は出来るだろう。

「構わないから、続けてくれ、アシッド」

『……はい。かつてのムー大陸で起こった内乱、それには二つの勢力がありました。そのうちの片方の勢力が開発したウィルス、それがあの触手です。あのウィルスは電波体の体内に入り込み、なんらかの力でその電波体の精神を封じ込め、代わりにそのウィルスが電波体の体を操る、いわゆる電波体を侵食して操るウィルス。それが先ほど倒したウィルス同様野生化したものと思われます。』

「……『なんらかの』って、ずいぶんあいまいだな」

アシッド・エースが怪訝そうに聞いた。

『何せデータが少ないもので……。……その侵食ウィルスに対抗して造られたのが拒絶領域（リジェクションフィールド）……つまり、今私たちがいるこの海域に自然発生的に施された「電波変換ができなくなる領域」を発生させる技術ですね。……実際にはこの海域に施されたのはそれの劣化版で、高いシンクロ率なら電波変換は可能なわけですが……っと、その話は余計でしたね』

「……それで？　なにかそのウィルスとウィザードを分離させる方法はないのか？」

『ありません』

あまりにもきっぱりと言い放つアシッドに、ロックマンは食ってかかった。

「そんな！　なにかないの！？」

『無理です。結合していた期間が長すぎました。もう、彼らはウィルスと文字通り一心同体の身です。無理やり切り離そうとすれば、彼らの重要な精神データまで切り離してしまうことになるでしょう。……残念ですが』

まるで患者に余命数カ月であることを伝える医者のように言いにくそうにアシッドは言った。

「で、でもさ……あきらめなければ、なんとか――――

『わたしが、かれらとおなじ人工電波生命体であるわたしが、あきらめてこんなことを言うと、お思いですか……？』

「……！！」

『……私だって……あきらめるつもりなんてない……！　彼らを何としてでも救いたい！！　でも、もう話はあきらめるとかあきらめないとか、そんな話を一線しているんです！　死んだ者を生き返らせろというような！　そんな次元にまで事は進んでしまっているん

です！　だから……だから……』

スバルは、そこまで感情を爆発させたアシッドを見たことがなかった。シドウですら、見たことがなかったのかもしれない。自分よりずっと彼らウィザードのことを知ってるアシッドが、いつも冷静沈着なアシッドがそこまで取り乱して言ったことが、彼らを救う方法がない、何よりの証明となり、じわじわとスバルたちを苦しめていた。

「……そんな……みんなは、ボクたちを今まで何度も助けてくれたんだよ……？　こんな、人間のために働いてここまで危険を冒して調べに来てくれたんだよ……？　それなのに、なんだよこれ！？　人間のために働いたツケが、この仕打ちだっていうの！？」

「スバルくん……」

ハープ・ノートは泣きそうに眼を細めてロックマンを見つめている。

「これじゃ、人間の一方的なエゴじゃないか！　自分たちが今どんな状態にあるのかすら、人間たちに隠されて、この地獄で苦しんでいたんだ！　ただ、道具として使われて、道具として消されるっていうの！？　こんなことのためにこのウィザードたちは生まれたわけじゃ――――

心の乱れが、注意力を散漫にさせた。スバルのサンダーオブアースによる縛りから解放されたウィザードがロックマンに切りかかる。

「ッ！！　スバルくん！！！」

ミソラに叫ばれて初めて「敵」の接近に気付いたものの、すでに避

けられる間合いではなかった。ウィザードはそのままソードを振り下ろして――

ザンッ！！！

――肉を引き裂く音が、響く。ウィザードが切り裂かれて消えて行った。

「……え？」

ロックマンの目の前で消えたウィザード。見れば、ブライがラプラスソードを振り下ろしていた。

「ブライ？」

「……」

ロックマンの問いには答えず、次を切り裂くブライ。その眼に、立ち筋に迷いはなかった。

「……ブライッ！」

ロックマンは前に駆けだした。グイッ、と。ブライの胸倉を掴む。

「……なんの真似だ」

「……こっちのセリフだ！　何してるんだよ！！」

「……」

「答えろ！！」

ブライは眉ひとつ動かさずに応える。

「……ウィザードを切り裂いている」

「……今すぐ止めろ……！！」

ロックマンは見るものを焼き切らんばかりの形相で目の前の電波人間を睨む。

「……フン」

ロックマンの肩を掴んでその反動を使ってグイッと自身の体を前に押し、ブライはロックマンの背後に迫っていたウィザードを斬りつける。

「やめろって――――

ロックマンの叫びが途中で中断される。ブライがロックマンの額に拳を叩き付けていた。

「ぐ……あっ！！」

ロックマンはそのまま船の甲板の柵に激突した。その衝撃で柵が外側に不自然にひん曲がり、ロックマンはそこにもたれるように倒れていた。

「……あまったれるのもいい加減にしろ」

ブライが言葉を浴びせる。

「……お前の言うとおりだ。こいつらは苦しんでいる。そして、こいつらを助ける方法はもうない！なら、奴ら(ウィルス)の呪縛から解放してやるのが、こいつらのためだとは思わないのか？」

「……！！」

まさか、ブライにそんな風に言われるとは思わなかった。が、確かにそうだ。少なくとも、世界の平和を願いながら、誇り高きサテラポリスとして殉職していった彼らなら、意識さえあればきっとそう言っていただろう。……自分たちを殺せ、と。世界にとって脅威になってしまった自分たちを止めてくれ、と。

「……」

曲がった甲板の柵に崩れ落ちるようにもたれかかるロックマンに、ウィザードの1人が切りかかる。

「……」

ドンッ！！

銃声が響き渡る。ロックマンが自分に切りかかるウィザードにロックバスターを向け、バスターの銃口からは煙が立ち上っていた。……ウィザードは消えた。ロックマンの手によって、消された。

「……ごめんよ……」

バイザーの下から涙が滴り、頬を伝う。もう、後戻りはできない。自分は彼らを救えない。それを、認めるしかなかった。

「……現時刻を持って彼らウィザードを敵とみなし、殲滅する。……いいな？」

アシッド・エースも辛そうに言う。

「……は、い……」

ごくりと、唾を飲み込んだ。左腕を天にかざして呟く。

「バトルカード、ソード……」

腕が青く輝いてひと振りの刀にその姿を変える。腕の刀を後ろに振りかざし、叫んだ。

「行くぞぉおおおおお！！」

駆けだして、斬りかかってくるバトルウィザードを斬りつける。自

らの手で、彼らを斬る。飛び道具は使わない。せめて、その腕に、刀を振るう感触を残したかった。彼らを、自分の手で葬ったことを忘れないように。

……本当に、これしかなかったのだろうか。他に、なにか方法があったんじゃないか。そう思ってしまう。でも、分かっていた。それはただの願望に過ぎないと。そうであって欲しいと思っているに過ぎないと。自分の無力感に押しつぶされそうになっていく。みんなに「世界を救った英雄」、とかもてはやされていながら、結局は守れなかった。目の前で苦しむ者を斬ることでしか苦しみから解放してあげられない。彼らはただ、人間に従っただけなのに。彼らはただ、人間の幸せを願っただけなのに。その最期がこんな終わり方なんて、残酷すぎる。

『……ビーストスイング』

ロックマンの横にウォーロックが現れ、爪を振るった。爪に切り裂かれ、叫び声すら上げずに消えて行くウィザードたちを沈んだ瞳で見届けてから、口を開いた。

『……こんなに、楽しくねぇバトルは初めてだな……』

「……ロック？」

いつも、バトルを楽しんでいたウォーロックも、今回ばかりは残酷さを感じずにはいられなかった。

『……いや、こんなの、バトルですらねぇ。ただの殺戮だ』

自分の言葉を否定し、震えるこぶしを握ってから、ロックマンに向

き直った。

『……お前だけに背負わせたりしねぇよ。お前が罪を背負うなら、オレも背負う。……苦しみ分け合うのが相棒ってもんだろ？』

「……ロック……ごめん」

スバルは、相棒にまで罪意識を背負わせてしまう自分を呪った。

『お前は何も悪いことなんてしてないんだから、1人で背負うことなんてねぇんだよ。……さて、終わらせようぜ。こんな悲しいだけのくだらねぇ戦いをな！！』

「……うん、終わらせよう……！！」

もう、耐えられなかった。なにもかも。死ぬ定めの彼らを見るのも、それを斬りつけるのも、ぜんぶ、全部全部、もう嫌だった。

ロックマンはふと周りを見回した。ブライもアシッド・エースも、無表情で刀を振るう。ハープ・ノートはようやく動けるくらいには回復したらしく、敵の攻撃を避け回っていた。誰もが、楽しそうな顔をしない。誰もが、苦しんでいることは明白だった。

『スバルッ！！』

「分かってる！」

もう、後には引けない。終わらせよう、この戦いを。

ザバンッ！！

そんな信念で刀を振るう彼らの耳に、再び水面を突き破る音が入る。見れば、船は今度はムーの電波騎士、エランドやかつてオリヒメの一味に関わった人間が使用し、世界にばらまかれた電波体のイエティやブラキオ、コンドルに取り囲まれていた。

「ま、また増援！？」

ハープ・ノートが悲鳴にも似た声を上げる。ロックマンもブライも、消しても消しても減ることのない電波体たちを憎々しげに見つめていた。

（おかしい……奴らの動き、明らかに統率されている……）

アシッド・エースは、１人考えを巡らせていた。相手の動きは、まるで戦争などで第１軍がやられたら第２軍を送り込むかの如く、１つの戦闘グループがほぼ壊滅してから出てきている。イエティなどの電波変換ができる電波体は知能があったようだからまだそういう考えが働いたとしても、ただのウィルスや侵食ウィルスに操られたバトルウィザードたちは本能のまま動いているようにしか見えず、知能のかけらも見られない。その彼らまで統率された動きをしているのはどういうことなのか。

（まさか、裏から操ってる奴がいる……！？）

そんなことが可能なのだろうか。これだけの数の電波体を一度に動かせるほどの敵が、この船の下にいるとでもいうのか。だとすれば、そんな奴との勝負は避けられないだろう。それほどの敵に、はたして自分たちは勝てるのか？

（……とりあえず、今は目の前の敵を、か……）

今は考えるべきではない、と判断してアシッド・エースは迎撃に移った。

「さて、どうしたものかねぇ……？」

アシッド・エースの声に、他の３人が振り向いた。

「こんなにいたんじゃ、キリがありませんよ？　こっちが消耗していくだけ……」

ハープ・ノートが誰ともなく問いかけた。彼女はほとんど回復してきているようだが、まるで自分たちをあざ笑うかの如く増える敵に、体は治っても精神力をすり減らしていた。いや、それはみんな同じであろう。

「……なんか海の中にいる奴らも含めて一気に引きずり出せる方法があればな……」

これまでの相手たちの動きから考えて、まだ何か海の中にいて自身の出番を今か今かと待ち構えているかもしれない。

「そ、そんな掃除機みたいな方法、あるわけないじゃないですか……」

ハープ・ノートが脱力気味に言う。

「掃除機……！？」

対してロックマンはハープ・ノートの言葉を繰り返す。そして少し考えてから顔を上げた。

「そうだ、ロック、今のノイズ率は！？」

『さっきのウィルスとかバトルウィザードを倒したから、もう２００％近く行ってるが……何をする気だよ？』

ノイズ率と言えばファイナライズだが、今ではキングＰＧＭがあるため発動にそれは関係ない。そもそもファイナライズをするのにノイズ率が必要だったのはメテオＧにの流星サーバーにアクセスするため。だが、今はキングＰＧＭそのものにファイナライズを記憶できるため、たとえノイズ率０％であろうともファイナライズはできる。

ウォーロックの問いを無視して、スバルは叫ぶ。

「ファイナライズ、ブラックエースッ！！」

赤黒い光の渦がロックマンを包んで弾ける。その後には漆黒のファイナライズを遂げたロックマンが佇んでいた。

『オイ、スバル！　たとえブラックエースになって作り出せるブラックホールだって海の中にいる奴らまでは引力が届かねぇぜ！？』

「届くさ！　今のノイズ率なら！」

『な……！？』

ロックマンの自信に、ウォーロックは少し尻ごみをする。本当にそんなこと、できるのか？

「みんな、何かにつかまってて！」

そう言いながら、ロックマンはブラックエースの翼で飛行して船の上空に上がる。そして、腕を上に突き出した。

「うぉおおおおおおおおッ！！」

ロックマンの腕に黒い球体が発生し、徐々にその大きさを増していく。テニスボール大がサッカーボール大になり、大玉送りの大玉並みの大きさになり、アドバルーン並みの大きさになり……

「え、えぇぇえええっ！？」

思わずハープ・ノートが声を上げる。そこには、空を覆い尽くさん限りの巨大な球体。まるで、月を黒く塗りつぶして、それが地表にまで急接近したかのような。そう錯覚するほどの、巨大な黒い球体がロックマンの腕に形成されていた。

「そうか……！」

「!?　ど、どうしたんですか!?」

アシッド・エースの声に、ハープ・ノートが聞く。

『つまり、星河スバルはノイズ率２０００%の驚異的な周囲のノイズをファイナライズすること自体ではなく、ブラックホールを作り出すことに利用したんです』

代わりにアシッドが応えた。ファイナライズは、ノイズを自在に操る能力を備え、その体には周囲のノイズを吸収する機能がある。そして、吸収したノイズを自身の技のエネルギーとして使うこともできる。ならば、周囲のノイズが多ければ、当然より強力な技を繰り出すことも可能。

周囲に風が吹き荒れる。いや、これは風ではない。ブラックホールの引力が周囲の物を吸収し始めているのだ。

「ぐぅぅっ!!」

ロックマン以外の3人はその場にかがんで引力に耐える。電波人間が耐えることができても、敵の電波体たちは耐えられなかったようだ。それこそ掃除機に吸われるゴミのように、次々に黒い球体に呑まれていく。そして、海の中からも次々に飛び出して、同じく吸収されていく。

「ま、まだあんなにいたんだ……」

ハープ・ノートは次々に飛び出していく電波体たちを見て呟く。正直、あの数をまともに相手していたらと思うと、ぞっとする。

ブラックホールで全てを吸いつくしたロックマンは右腕を軽く引くと、その腕が黒く輝きだした。その黒い光は形を徐々に変え、大きくなり……巨大な、ＴＫタワーを軽く超しそうなほど巨大な黒刀に変化した。長さがありすぎて刀身が途中から海の底に消えて見えない。

「ブラックエンドーーー」

黒刀を強く握りしめる。そして、ジェット機を思わせる速度で加速した。

「ギャラクシー！！！」

一閃。黒い巨大なブラックホールに白い１本の線が走る。そして、切断されたその切り口が瞬時に広がり、辺りに七色の光を撒き散らした。眩い光に、３人は目を腕で覆った。

そして、静寂が訪れた。３人が腕を目からはずして見上げると、ロックマンが空中に漂って悲しげに空を見つめていた。

「本当に……ごめんよ……」

今のブラックホールの中に消えたウィザードもいた。彼らには今日初めて会ったし、会った時点でもう「敵」だった。でも。それでも。「敵」なんて言葉で割り切ることなんてできなかった。自分はどうすれば彼らを救えたのだろう。この事実を知っていれば、任務を知らされた時点で何をしてでもここへ来て、彼らを救おうとしただろう。……でも……

スバルの心とは裏腹に、空は晴れて澄み渡っていた。彼らの死を踏み越えて、手に入れてしまった平和がそこにはあった。

46、侵食（後書き）

ちょっとバットエンドになりました。でも、この小説はこんなもんじゃ終わりません。

拒絶領域（リジェクションフィールド）は、元ウェーブチェンジキャンセラーです。　ちょっとこういうのやってみたかったんです。

っていうか、なんかいろいろやり過ぎな気がする。ノイズ率２００％は、遠目に黒い霧にすら見えるほどの数のウィザードを倒せばそのくらいは行くかな、と思ってやりました。既にゲーム内での上限を越してしまってますが（汗）

・・・さて、これでこの章が終わるかといえば、そんなことはありません。まだ激しくなります。・・・今回マジで長い・・・

47、新たなる敵（前書き）

ＰＶ１００，０００達成！

前話まででグダグダの内容が終了しまして、こっからが本当（従来の）の戦闘形式のバトルに入って行きます。まだだ、まだ終わらんよ！（笑）

ＸＬ？、
Ｎｅｗ　ｅｎｅｍｙ

47、新たなる敵

「スバルくん、大丈夫？」

ブラックエンドギャラクシーを使うために舞い上がった上空から船の甲板に降り立ったロックマンにハープ・ノートが心配そうに声をかけた。

「うん、大丈夫だよ。ハープ・ノートの方こそ大丈夫？」

ファイナライズを解きながらロックマンは聞いた。

「もう全快だよ！　……だよね、アシッド？」

言ってから心配になったのか、アシッドに判断を仰いだ。

『……回復率、９６％。そうですね、もう戦闘もできるぐらいでしょう』

アシッドが満足そうに言ったので、ミソラも安心したように笑った。

「……だってさ！　みんなのお陰で、傷１つつかなかったんだよ！　守ってくれて、ありがと！」

笑顔でお礼を言うハープ・ノート。普段の彼女なら、守られてしまう自分を悔やんでいただろうが、今回は違った。

――――ミソラちゃんは足手まといになりたくないと思ってるんだろうけど、そんなことは全然ないよ。

そう言ってくれた、スバルの言葉が、まだミソラの中に残っていた。彼がそう言ってくれたから、彼女は心を乱したりはしない。ありのままの自分でいる事ができた。

『……しっかしよ、今更だがハープって回復使えたんだな』

『ええ、わたしもそれにはびっくりしたわ』

ウォーロックが怪訝そうに言い、ハープがそれに相槌を打つ。

『……電波人間の強さはウィザードの性能、オペレーターの精神力、そしてシンクロ率によって左右しますが、電波人間の能力や技はウィザードの性能のみに依存しているのです。ハープ・ノートが回復を使えたのを考えれば、ハープも回復技を使うことができたのも、回復速度がハープ・ノートのそれに比べて遅かったのも自然なことですよ』

アシッドが2人の疑問に答えた。一口に「電波人間の力を決める要素」といってもただ3つが組み合わさっているのではない。一番基本になっているのはウィザードの性能。それが電波人間の能力や技などを決定させ、それをオペレーターの精神力や双方の間にあるシンクロ率によって高めている。つまり、電波人間の能力や技は単純に言えばウィザードのそれを強化したものなので、ウィザードに使えない技は電波人間にも使えない。逆に言えば電波人間に使える技はウィザードにも使えるはずなのである。

『なんだ、じゃあ今までは自分の能力掴み損ねてたってことか』

『……ちょっと、それどういう意味よ?』

『そりゃあ……って、うぉ!?　な、なんでちょっとキレてんだよ!?』

ハープの言葉に応えようとして振り向いたウォーロックはハープのむくれた顔を見て驚いた。

『うるさい!　そんな風に言われたら、わたしがバカだったみたいじゃない!　自分のこと棚に上げて!』

『て、てめぇ今、バカにされたこと問い詰めながら、さりげなくオレのこともバカにしただろ!』

『あ!　バカにしたこと認めたわね!　覚悟しなさいっ!!』

『まぁ、電波人間とウィザードでは体の形態が違いますから、その影響でどちらか片方にしか使えない技もある……って聞いてませんね……』

急に口論を始めた2人に付け加えるように説明するアシッドであったが、すでに2人は聞く耳を持っていなかった。

「ま、勝手にやらせておけ、アシッド」

アシッド・エースが若干あきれ気味に言った。ブライはすでに輪に入る気がないのか集団から少し離れたところで冷めた目をしながらたたずんでいる。対して2人のオペレーターは、

「ちょ、ちょっとロック!　そんなことでケンカしないでよ!」

「ハープもだよ！　やめなさいっ！」

なんとか口論を沈めようとしていた。

『なんだよ、スバル！　ケンカ売ってきたのは向こうだぜ！？』

『なによ！　アンタの方が悪いんじゃない！』

「どっちが悪いかどうかなんて、関係ないでしょ！？　とにかく、止めなさ――――

と、そこまで言ってハープ・ノートは口を閉ざした。背後に広がる海を首をわずかに動かして瞳で見つめる。

「スバルくん、暁さん、ソロくん……！」

「うん……！」

「あぁ……！」

「……」

それぞれ、急に険しい顔をして、背中を合わせる。４人が４つの方向をそれぞれに見つめている、その状況が意味することをウィザードたちも分かるようで、３人のウィザードは消えてハンターへと戻った。

「……コソコソしてないで、出てこいよ！」

アシッド・エースが何もいないように見える空間に向けて叫ぶ。

『ふ、よく気付いたな』

そう声が聞こえると、まるでハンターからウィザードがウィザード・オンをする時のように電波の小さな塊が無数に現れて素早く1つに固まり、電波体を形成するという事象が、4人の周りの3か所の空間で起こった。

『先ほどまでの戦いを見れば、このくらいは気付いてもらわねば困るがな』

3か所に現れた電波体、それは先ほど無数に現れ、ブラックエンドギャラクシーでデリートしたはずのムーの電波体と同じ姿をしていた。雪男のような紫の電波体、イエティ。ドッシー、200年前で言うところのネッシーのような姿をした黄色い電波体、ブラキオ。地上絵に描かれるような鳥の姿をした赤い電波体、コンドル。しかし、3匹とも先に倒した奴より一回り体が大きい。

「まだ生き残りがいたとはな……」

「でも、なんで!?さっきのスバルくんの技で、全部吸い込んだはずじゃあ……」

ハープ・ノートの問いに、ブラキオが応える。

『我らを先の奴らと同じと思われては困るな』

「お前らがあいつらの親玉か!?」

ロックマンの問いには、イエティが応える。

『似たようなものだな。……だが、ムーの電波体は無限、というこ

とを忘れたわけじゃなかろう？』

ロックマンはそれを聞いて顔をゆがめる。……まだ他にも敵がいると言いたいのだろうか？

『……はぁ？なに言ってやがる！？お前らが無限だったのはラ・ムーがいたからだろうが！』

ウォーロックが噛みつくように言う。コンドルが口を開いた。

『我らの前で、ラ・ムーなどと言うムーの面汚しの名を口にするな。むしずが走る』

「……！？」

ロックマンは目を見開いた。ムーの電波体は、全員、ラ・ムーを神と呼び、あがめていた。それなのに、目の前の電波体たちは「面汚し」とまで言った。これは一体、どういうことなのか？

『まぁ、なんにせよ、お主らはなかなかにやるようだ。１人は、ウィルスを一掃するほどの力の持ち主……』

「……」

ブラキオの言葉に、ハープ・ノートが唇を噛む。

『１人は、力ある者たちを統べ、自身も相当な力と精神を持ち……』

「……チッ」

イエティの言葉に舌を打つアシッド・エース。

『1人は、どんな時も揺るがない精神を持つ、ムーの血を引く者……』

「……フン」

コンドルの言葉につまらなさそうに鼻を鳴らすブライ。

『そして――』

3人の電波体が一斉にロックマンに視線を集中させる。

『『我らの力を引き継ぐ、継承者……』』

「……え!!?」

再び目を見開くロックマン。

『はぁ!?お前らの力を、スバルが引き継ぐだと!?どう言うことだ!?』

『その青い電波人間からは、我らと同じ力を感じる。力を所有し、また使用経験もあると見た』

ウォーロックの問いにコンドルが応えた。

『……オーパーツ、いや、トライブオンのことか?』

ウォーロックが問う。ムーに関係があり、ロックマンが使ったこと

のある力と言われて思いつくのはこれくらいしかない。

『いや、オーパーツは確かにムーの作り出したものだが、その中に眠る力は我らの力とは異なるそれぞれの種族の力だ。我らとは関係がない』

『じゃ、どういうことだ!?』

『答える義務はない。「継承者」ではあっても、もはや我らの敵のようだからな……下手に教えて我らの脅威になってもらっては困る』

ロックマンはさらに何か聞こうとしたが、先にブラキオが口を開いた。

『……さて、おしゃべりはここまでだ。お前たちには消えてもらおう』

それが合図だったように3体の電波体の前にこれまた一回り大きいエランドが現れた。

「……ッ!!」

「……なんだ、あいつら?」

「何をするつもりなの……?」

「ミソラちゃん、暁さん、ソロ!!あいつらを消すんだ!!!」

ロックマンが突然叫ぶ。

「……え？」

ハープ・ノートが突然叫ばれてわけが分からない、という顔をしている。

「早く！！！」

ロックマンは3人を急かしながら自分もイエティの前のエランドに向けて駆けだした。

『『……電波変換ッ！！』』

声を揃えて3体が言い、同時に3体が光に包まれた。

「クッ、遅かった……！！」

ロックマンが悔しげに顔をゆがめる。対して……

「で、電波変換だと！？」

「ウソ……！？　あの電波兵士とで！？」

「……」

他の3人は初めて見るタイプの電波変換に戸惑いを隠せなかった。

そして、光が弾けた。そこにはそれぞれが電波変換した姿、イエティ・ブリザード、ブラキオ・ウェーブ、コンドル・ジオグラフがい

た。

「ク……今から電波人間との戦闘か……少々キツイが、やるしかないか……」

アシッド・エースは彼らが電波変換するとは思っていなかったらしく、電波体と戦う算段をつけていたようだ。

「ど、どうするんですか、暁さん……？」

「……ブライ、お前は海に潜れ」

「「！？」」

アシッド・エース以外の3人は背中合わせで立ちながら驚いて振り向いた。

「……さっきから気にかかっているんだ。ウィルスや操られたウィザードたちが本能のまま暴れることしかできないはずなのに、動きは統制されてるとしか思えない。あの3体が裏から動かしていたのかとも思ったが、口ぶりから違うようだ……。つまり、まだ裏になにかいるのかもしれない。敵が全て海から飛びだしてくるのをみれば、もしそういう奴がいるのなら、そいつは海の中にいるんだろう」

「……つまり、オレがそいつを探し出して始末しろ、ということか？」

「そうだ。お前はオレらとの共闘はしたくないだろうからな。適任だろう」

それを聞いてブライはフン、と鼻を鳴らす。

「分かった。お前らもせいぜい、奴らにやられないようあがくことだな」

ブライはそう言うと甲板を走り始めた。

『行かせると思うのか？』

どの電波人間かは分からなかったが誰かがそう言うと、それを合図に3人が動いた。

『ユキダマフォール！』
『サンダーブレス！』
『ミサイルバード！』

3体の三つの技が、ブライに迫る。ブライは走りながら後ろ目で見つめるが特に何をしようとはしない。……なぜなら、

「ステルスレーザー！」
「ショックノート！」
「ロックバスター！」

――どうせ3人が動くと分かっていたからだ。

ズドォン！

3人の技が、3体の技を打ち消した。ブライはその隙に甲板の柵を左腕で掴んで足で床を蹴り、柵を飛びこしてそのまま下の海に落下した。

ドボンッ、と音と共に水柱が立ち上り、ブライは海に消えた。

『……逃がしたか。ふん、まぁいい。こいつらを葬ったあとで片付ければいいことだ』

ブラキオが傲慢（ごうまん）な態度で言う。そんな彼を見つめながら、アシッド・エースは口を開いた。

「さて、オレらはどうするか……」

「ボクがあの、赤い鳥をやります」

ロックマンが言った。2人は電波体の具体的な名前を知らないので、特徴で呼んだようだ。

「キグナスノイズやブラックエースになれば、この中で一番飛行能力が高いのはボクです。だから、鳥はボクがやる。ミソラちゃんは、黄色い恐竜をお願い」

「恐竜？　……、あ、あいつね！」

ハープ・ノートがきょろきょろしてから、ロックマンの言った特徴に合う電波人間（ブラキオ・ウェーブ）を見つけて言った。

「ミソラちゃんもキグナスノイズほどじゃないけど空を飛べるから、恐竜がもし海に逃げても追えるからね」

「うん！　りょーかいっ！」

ハープ・ノートがブラキオ・ウェーブを見据えながら言った。

「……だから、アシッド・エースはあの雪男をお願いします」

「……おい、それだと俺は消去法で残った奴と、ってことじゃないか？」

「あ、う、えっと、それは……」

事実を言われて焦るロックマン。

『いいじゃないですか。ムーの電波体たちと戦うことに関してはロックマンの方が慣れています。さっきだってロックマンの言うとおりにわたしたちが動けていれば今のような状況にはならなかったわけですし、それに作戦の立案も理にかなってますよ』

そう、ロックマンがエランドたちを消せ、と言った時にその通りに動けていれば、電波変換は未然に防ぐことができたはずだ。かつてオリヒメとの戦いの中でなんどもムーの電波体とぶつかり合った彼がこの中で一番ムーの電波体と戦うことには長けていた。

「分かってるよ、少し気になっただけだ。……それじゃ、今のロックマンが言った動きで行くぜ、いいな？」

「「ハイ！」」

ロックマンとハープ・ノートは声を揃えて、気を引き締めるように叫ぶ。

「……おし、じゃ、やるぜッ！！」

その、アシッド・エースの声を合図に、彼らはそれぞれの相手に向かって駆けだした。

ムーとの戦い、第2幕が幕を開ける。

47、新たなる敵（後書き）

「オーパーツがムーの作ったもの」というのは、この小説の設定です。今のところ、ゲームの設定とは違うように見えますが、いずれ合うようになります。

なんか、地の文の文章力、前の2回と比べて落ちた気がｏｒｚ

48、探し物（前書き）

今回、ちらっとハープ・ノートが見慣れない飛行技を使っていますが、これは流星1（外伝）において出てきたものです。改定後のミソラVSマドカでもハープ・ノートは使っていますが、改定前から読んでくださっている皆さんは初見ですよね。

XL?、

Looking for something

48、探し物

「ノイズチェンジ、キグナスノイズ！」

ロックマンがコンドル・ジオグラフに駆け寄りながら叫ぶ。水色の光が彼を包んで弾け、背中に小さな翼のようなものが付いて、帽子のつばをクチバシの如く鋭く伸ばしたようなヘルメットをしたフォルムのロックマンが現れた。

見上げれば変身の隙に上空に舞い上がっていたコンドル・ジオグラフがカパッと大きく開いた口をこちらに向けていた。その内部が緑に輝いているのを見て、ロックマンは左腕を軽く後ろに引いた。

『ウイングレーザー！』

「バトルカード、ジェットアタック！」

二人が叫ぶと、コンドル・ジオグラフは口から細い緑のレーザーを放出し、ロックマンは船の甲板を蹴って空中に飛び出し、左腕を前に突き出しながらレーザーに真っ向から突っ込んだ。

レーザーの光はロックマンに当たると、四方八方に飛び散り拡散していく。無敵状態を利用して、ロックマンはレーザーを弾きながらコンドル・ジオグラフに向けて彗星の如く直進していく。

『くっ！』

コンドル・ジオグラフはギリギリのタイミングでレーザーの放出を止めて横に素早く移動、なんとか突進してきたロックマンを避けた。

ロックマンはコンドルの元いた空間を勢いよく横切ると、くるりと宙を旋回して空に静止し、コンドル・ジオグラフを見据えた。

「不意打ち……。らしいというか、なんというか……」

『命を賭けた戦いに卑怯も何もないだろう。戦いに挑んだ者は皆、どこから来る攻撃をも避け、どこにいる敵も倒す、そういう覚悟で挑んでいるはずだ。その覚悟がないのなら、その者は戦士とは呼べん』

戦争は、どこから攻撃が飛んでくるか分からない。何人の相手に勝とうと、一回のミスで命を奪われてしまう。ムーの内乱を経験した彼らならではの見解だった。

「……、……一体、かつてムーで何が起きたんだよ!?　なんで内戦なんて……！」

『力を手にした者は、戦いを欲する！　そういうものだ！　ミサイルバード！』

鳥のような姿のミサイルが現れ、ロックマンに迫った。

「バトルカード、レーダーミサイル！」

ロックマンもミサイルを放出して対応する。ミサイル同士がぶつかり合い、２人の間で無数に爆風が起きた。

『我の相手は貴様か、小娘……』

ブラキオ・ウェーブに言われてムッと顔を曇らせるハープ・ノート。

「小娘って……！　後で吠え面かいても知らないからね！」

『ふん、貴様にそれができたらな！』

ブラキオ・ウェーブはそういうと、（どうやったらその巨体でそんな動きが出来たのかは分からないが）大きくジャンプして船の外に跳んだ。そして、バシャン！　と大きな音を立てて海の上に着水した。

「あ、待ちなさいっ！　フライングノート！」

甲板の端に駆け寄ってギターを鳴らすと、ハープ・ノートの前の空間に畳1畳分のサイズの音符型の板が現れた。彼女はフライングノートに飛び乗ると、それごと宙を移動して海上のブラキオ・ウェーブの前までスーッと飛んで行った。ブラキオ・ウェーブはハープ・ノートが乗っているものを見つめながら嘲笑ぎみに言った。

『そんなもの、すぐに打ち落としてくれるわ』

「わたしのスピード、なめたら痛い目に合うよ？」

ハープ・ノートも負けじと不敵な笑みを漏らして言った。

「……よし、それぞれの戦場に移ったな」

アシッド・エースが空と海を交互に見つめながら言った。

『ビッグスタンプ！』

上空から声が聞こえ、同時に巨体が落ちてきた。

「ロックオンソード！」

アシッド・エースは頭上めがけてブラスターの先から伸びる青白く輝く刃を振るった。ガキン！　という音が響き、イエティ・ブリザードの脚とアシッド・エースのロックオンソードの押し合いになった。イエティの脚の裏は、堅くできているのかアシッド・エースのソードですら切れなかった。

「お前も不意打ちか……。ムーってのはみんなそうなのか？」

『これから何人と殺すのに、いちいち気にかけてらんねぇんだよ！』

そう狂気じみた笑いを洩らすイエティ・ブリザードに眉をひそめるアシッド・エース。

「お前、キャラ変わってない？」

アシッド・エースはその豹変ぶりに引きながら聞いた。電波変換前はクールな性格だったのに、今はかなりワイルドになっている。

『電波変換すっと、血が騒ぐんだよ！』

「……尾上十郎みたいだな……。ま、なんでもいいが。とにか

くこれにさっさと勝って、他の戦闘の支援に回るぞ」

『はっ！　それが出来るとでも思ってるのか！？』

「やるさ！」

言いながら、アシッド・エースの肩に紅い光が集まり、徐々に大きくなっていく。それを見てイエティ・ブリザードは目を見開き、アシッド・エースのロックオンソードを蹴って大きく後ろに飛びのいた。

「オメガレーザー！」

『ナダレダイコ！』

アシッド・エースが肩から紅いレーザーを放出するのと同時にイエティ・ブリザードはドコドコとゴリラのように自身の胸を両腕で叩き始め、そんな彼の前から雪崩が起き、レーザーと押し合った。

空中で緑の光線と黄緑の光球が縦横無尽に駆け巡っている。コンドル・ジオグラフの口から放たれるウィングレーザーとロックマンの左腕から放たれるチャージショットが空のあちこちで横切り、衝突している。時にミサイルまで飛び交い、激しい銃撃戦を繰り広げていた。

『フライングインパクト！』

「！！　ジェットアタック！」

コンドル・ジオグラフがロックマンめがけて急加速したのを見て、ロックマンは再び左腕をクロッカーに変えて同じく前に猛スピードで迫った。

ゴッ！！

重い音が響く。ロックマンとコンドルは激突地点を通り過ぎてから向き直り、向かい合った。

「……1つ、聞きたい……！」

今の激突で切れた頬を右腕で拭いながらロックマンが聞いた。

「ラ・ムーはキミたちの神じゃなかったのか！？なんで面汚しなんて……！」

コンドル・ジオグラフは聞かれたくないことを聞かれたように不快そうに顔をゆがめた。

『ラ・ムーを神としているのは我らの反抗勢力の人間であって、我らではない』

「！？　どういうこと！？」

『……かつて、発展の一途をたどっていたムーは、2つの技術の研究を同時進行で進めていた。そしてムー人は、極限まで高まったそれらの技術を用いて、2人の神を作り上げた。……しかし、その矢先に内戦は起きた。ムー人たちの中に二つの思想が生まれ、その食い違いによって、ムーは2つの勢力に分かれた。2つの勢力はそれ

ぞれ別の神を信仰し、２つの研究されていた技術の力を用いて戦った』

目を見開いていたロックマンは、声を絞り出して聞いた。

「……、じゃ、じゃあ、その２人の神の片方は……」

『そう、それがラ・ムーだ。そして我らはラ・ムーを崇め戦った勢力、それの敵勢力の側だということだ』

「だ、だから面汚しなんて……」

彼らは、自分たちの信じる神が、ムーの真の神だと思っていた。だから、敵の神（ラ・ムー）は邪魔者でしかなかったというわけだ。

『内乱の結果、我らは負け、我らの神は宇宙に永久追放された。そして、ラ・ムーがムー大陸の神として崇められるようになったのだ。だが、我らはラ・ムーをムーの神とは認めはしない。真のムーの神は、我らが主だ！』

「……」

『……今度は逆に我（われ）が聞こう。いつの間に能力を変えた？』

「……え？能力……？」

ロックマンが眉をひそめた。

『そうだ、先日ここに来た時は我らの敵勢力と同じ能力を持っていただろう。どうやって能力を変えた？　それになぜまたここに舞い

戻って来たのだ？』

『はぁ？　てめぇ、何を言ってやがる？』

ウォーロックもわけが分からない、とさも言いたげな声を上げた。

『とぼけるな。４日前、ここで「探し物がある」だの言って暴れまわっていただろう』

「そ、そんなの知らないよ！　……って、……」

ロックマンは顔の前で腕を振りながら否定していたが、唐突に顎に指を当てて考え始めた。

『どうした、スバル？』

ウォーロックの問いかけにも応じずに思考を巡らせるスバル。

――今日は土曜日。その４日前と言うと、火曜日だ。月曜にミソラが転校してきて、ＷＡＸＡに呼び出されたところでグレイの襲撃にあった。その翌日、つまり火曜にＷＡＸＡに爆弾をしかけられ、それの処分に奔走するところへグレイが再び現れた。つまり、４日前の火曜には、自分たちはＷＡＸＡに……

と、そこまで考えて、ロックマンはハッと目を見開いた。　グレイ！？

（……まさか、こいつ、グレイのことを言ってるんじゃ……！？）

そういえば、グレイはなにか言っていなかったか。あの時、わけのわからないことを。

「……じゃあ、その爆弾はなんで仕掛けたの！？」
「……時間稼ぎ、といえば伝わるか？」

「！！！」

そうだ、彼はそう言った。ＷＡＸＡ中に爆弾を仕掛けた理由を、時間稼ぎと。

「……オレはあるものを探している。その探していることをお前らに気付かれないように、時間稼ぎで爆弾を仕掛けた」

探し物……。コンドルは先ほどこう言った。『４日前、ここで「探し物がある」だの言って暴れまわっていただろう』

「そうか……そうだったんだ……！！」

『ん？　なんか分かったのか？』

「ロック……４日前、グレイはここに来ていたんだ！」

『はぁ！？　なんでそんなことが……』

スバルは、ウォーロックに自分のたどり着いた考えを頭の中で整理し、興奮する気持ちを抑えてなんとか伝えた。

『……、なるほど……って！　待てよ、スバル！』

今度はウォーロックが興奮気味に叫んだ。

「ど、どうしたの？」

スバルに聞かれたウォーロックは冷や汗を掻きながら言った。

『あいつ……さっき、オレらを指して「先日ここに来た時は我らの敵勢力と同じ能力を持っていた」って言ったよな？　それがグレイのことだって言うんなら、奴が言う「力」っていうのは、まさか……』

「！！！」

ロックマンが目を見開いた。「我らの敵勢力と同じ能力」は、もちろんムーの技術で作られた能力。それを、先日ここに来たロックマン（グレイ）が持っていたというのなら、グレイの持つ能力は……！！

「……そう」

その船の何十キロも離れた場所にあるウェーブロード。その上に、星河スバルが腰かけていた。

「オレの持つ能力も、オレの探し物も、全てはムーの遺産なんだよ。そして、スバル、お前の中に眠る能力もな……！」

不敵な笑みを浮かべて笑うグレイ。そんな時、横から声が聞こえて

きた。

「……ねぇねぇ」

見れば、グレイの隣にミソラがウェーブロードのふちに腰かけ、両足を交互にぶらぶらと振っていた。グレイの着ている、スバルと同じ赤い服の袖を指でつまんでくいくいと引いている。爆弾騒動の直後にノイズウェーブに集まったオフィシャルメンバーたちの目の前でグレイが作り出し、そのせいでミソラを気絶させた、ミソラのコピーだ。

「なんだよ、ソプラ？」

グレイが応えると、ミソラのコピーは口を開いた。

「今回、わたしたちは見てるだけなの？」

「そうだが？」

グレイが怪訝そうな顔をする。

「なんで？　グレイの探してるものって、ここにあるんでしょ？なんで、探しもせずにここで見てるだけなの？」

「……そういや、ソプラ、お前はオレが前にここに来た時はまだいなかったからな……。前にここに来た時、オレの探し物はスバルにしか見つけられないことが分かったんだよ。だから、スバルが見つけるのを待つ。それだけだ」

すると、ソプラは眉をひそめた。

「え？　スバルくん、闘ってるだけだよ？」

「それでいいんだよ。アイツがここに来れば、それでおのずとアイツはオレの探し物を見つけるはずだ。オレはそれを奪い取るだけだ」

「……」

ソプラは納得した顔はしていない。それを見たグレイは鼻で笑ってから言った。

「まぁ、見てな。そのうち分かるかもしれないぜ？」

「ふぅん、まぁ、いいけどね♪」

ソプラは前に向き直り、遠くに見える船を見つめながらちょっと嬉しそうに言った。

「……なんだ？えらくご機嫌じゃねぇか」

グレイが不思議そうに聞く。ソプラは　だって、と顔をグレイの方に突きつけながら言った。

「名前がもらえたのがうれしいんだよ。ありがと、グレイ！」

「……そんな嬉しいもんか？名前があるってのは」

グレイが再び怪訝そうな顔をして聞く。

「そりゃ、そうだよ！グレイは嬉しくないの？」

「……オレはこの名前、気にいってねぇんだよ」

不機嫌そうにいったグレイに、ソプラはなだめるように言った。

「いいじゃん、『グレイ・サリチュード』。いい名前じゃん」

「フルネームで呼ぶんじゃねぇ、『ソプラ・サリチュード』。『グレイ』ですら気にいってねぇてのに……」

「名前って、重要だと思うよ？」

ソプラは眉をひそめて言った。グレイはうんざりしたように顔をしかめる。

「あぁもう！　名前の話いいから、戦況見るぞ！」

「は～い！」

ソプラはミソラと同じハイテンションな声をあげて、再び船を見つめた。対してグレイは、戦況を見ると言っておきながら、空をボンヤリと見つめていた。

48、探し物（後書き）

グレイ・サリチュード、ソプラ・サリチュードの綴りはそれぞれ「Ｇｒａｙ・Ｓｏｌｉｔｕｄｅ」、「Ｓｏｐｒａ・Ｓｏｌｉｔｕｄｅ」です。ソプラの名前の由来はもちろん「ソプラノ」からです（笑）

イエティの性格は五里　門次郎に似せました。イエティ・ブリザードにクールな性格は個人的に似あわないと思ったので。

49、神の親（前書き）

XL？、

God's parents

49、神の親

「はぁ、はぁ、はぁ……」

ハープ・ノートが宙に浮くフライングノートの上で、顎に滴る汗を手の甲を使って拭いながら荒い息をしていた。彼女の前ではブラキオ・ウエーブが悠長に構えていた。

『もう終わりか？　小娘』

「……マシンガンストリング！」

毎度の如く、ギターを銃のように構えてその先から弦を打ち出す。しかし、その弦は小さな水しぶきを上げて海へと沈んでいった。

「ッ！？」

……いや、何もそれはハープ・ノートがノーコンだったのではない。ハープ・ノートは確かにブラキオ・ウェーブを狙って弦を打ち込んだ。だが、突然ブラキオ・ウェーブが消えたのだ。一瞬前には確かに目の前にいたのに、一瞬後にはもういなかった。あまりにも唐突に、まるで掻き消すように。

『アクアファング！』

「っく！」

ハープ・ノートはとっさに足場を蹴って垂直に跳び上がった。途端に大きな顎がフライングノートを捕らえて噛み砕く。その様子を眼

下に見下ろしていたハープ・ノートはギターを弾き、新たな足場を出現させてそこに着地した。

（まただ……また消えて、別の場所に現れる……）

今しがたの現象は今に始まったことではない。戦闘を始めてからずっと、こちらが攻撃を仕掛けると相手は消え、別なる方向にいつの間にか移動していて、攻撃を仕掛けてくる。その度に攻撃を避けているのだが、正直それもいつまでもつか分からない。

しかし、ハープ・ノートはすでにその現象が何から来るものなのか、すでにもう分かっていた。

（――スピード、か……）

そう、それだけ。ただ、圧倒的なスピードで移動しているだけ。ハープ・ノートでは見ることも反応することも出来ないほどの速度で移動しているのだ。それほど速く動ける奴を相手にして、まだほとんど攻撃を喰らっていないのは、舐められて、もてあそばれていることに外ならなかった。

『鈍（のろ）いな、小娘』

「く……ッ！」

不敵な笑みを浮かべて言われたブラキオ・ウェーブの挑発に、ハープ・ノートは歯ぎしりをする。

（スバルくん、ムーの電波体って、みんなこんな速かったの!?）

ハープ・ノートはリレーション機能（ファンク）を精神制御（マインドコントロール）して、ロックマンと

交信した。

（い、いや……！）

返ってきたロックマンの声はひどく疲れているようだった。恐らく、自分と同じく苦戦しているのだろう、とハープ・ノートは確信した。

（ボクの知ってるムーの電波体たちにここまでのスピードはなかったよ……）

（二人とも、こいつらただ速いだけではないみたいだぜ？）

今度はアシッド・エースの声だ。比較的疲れた声はしていないが、声のトーンは低い。

（どういうことですか！？）

ロックマンが聞くとアシッド・エースはうんざりしたような声を上げた。

（こいつら、斬ってもすぐに回復するみたいだ……）

（（回復！？））

ロックマンとハープ・ノートは同時に聞き返した。

（あぁ、いろいろやってみてはいるんだが、ボディの破損箇所が瞬時に治ってるんだ）

（（……））

ロックマンの頭にもハープ・ノートの頭にも、同じ考えが浮かぶ。
圧倒的なスピードで攻撃が当たらない上に、仮に当てることが出来たとしてもすぐに回復してしまうような敵に、どう対処すればいいんだろう？

『……シドウ』

唐突にアシッドがシドウに話しかけた。

「……やっぱり思ったか？　アシッド」

『はい』

（っと……ねぇ、何の話？）

ハープ・ノートがブラキオ・ウェーブのサンダーブレスをなんとか避けながら聞いた。

（……似てるんだよ、ロックマンと）

（……ええ！？　ど、どういうこと！？）

ロックマンはロックマンで、相手のミサイルバードをシールドで防ぎながら聞く。似てる、というのは話の流れから敵がだということは分かる。しかし、どこが自分に似てるというのか？

《今のあなたに、ではありませんよ、ロックマン》

（な、なおさら分からないよ。じゃあ、いつのボクに似てるってい

うの？）

ロックマンが怪訝そうに聞き返した。

（火曜にハープ・ノートをやられそうになったときに、お前はなにか不思議な力を使っていただろ？　あの時の力と、いま目の前にいる敵の力が似てるんだよ）

《圧倒的な速度と回復力、どちらの力にも共通した能力です》

（……！！）

正直、スバルははっきりとはあのときのことは覚えてはいないが、確かにそんなことをしたかもしれない。

……いや、あのときのことを覚えているかどうかはさほど問題ではない。注目すべきは、敵の力と自分が使ったことのある力が似ている事実。そして、先程敵が言った、『グレイが自分たちの敵勢力と同じ能力を持っていた』という言葉。

つまり、さっきのウォーロックとの読みと合わせて考えると、やはり自分とグレイの中の能力は元はムーの技術から来るものだ、という考えがより深くなってくる。

ロックマンがその考えを他の二人に打ち明けると、まずシドウが反応した。

（……なるほど……）

（……でもでも！　なんで、いつの間にスバルくんはムーの力を手に入れたんですか？）

ハープ・ノートが問う。確かに、今までの考えでは、自分たちの能力がどこから来たのかが説明出来ない。

（……キングＰＧＭ、だな）

（え、キングＰＧＭ？）

それまでの思考にはなかった単語が突然出て来たので、ロックマンは戸惑った。

（キングＰＧＭには、キングが作った解析不能の謎のプログラムがあっただろ？）

（それは覚えてますけど……）

《そして、ディーラーはムーの技術（テクノロジー）を研究・悪用していたんですよ？》

「……ああっ！！」

アシッドの重ねるように言った言葉に、ロックマンは衝撃を受ける。そうだ。ヨイリー博士はキングＰＧＭをスバルに渡すとき、謎のプログラムを「キングの研究の最高傑作」だと言った。あれの真実がもし、「キングがムーの技術を研究した結果を受けて作り出したプログラム」だったとしたら？

『……いつまで話しているつもりだ？』

「「ッ！！」」

突然の聞こえた声に3人は跳び上がった。そうだ、それどころではなかった。敵の分析のつもりがいつの間にかロックマンの能力の話になってしまっていたが、今は考えるとしたら敵について考えるべきだ。

「……なんだよ、さっきは不意打ちしたのに、今度は待っててくれたのか？」

アシッド・エースが怪訝そうな顔で聞いた。イエティ・ブリザードが応える。

『……感謝しな、俺らの長（おさ）が、「客人がなにか考え事をしている、だから待っていろ」と仰せになったから、待っただけだ』

「お、長！？　お前らの神のことか！？」

通信を通してイエティの声を聞いていたロックマンが聞いた。それにはコンドルが答えた。

『言っただろう、我らが神は宇宙に追放されたと。神ではなく、神や我らの産みの親だ』

「親！？　な、なにそれ！？」

ハープ・ノートが驚いて聞いた。ラ・ムーと肩を並べる神に、上がいるとでもいうのか？

『我らの親は、この海の中から見守って下さるのだ』

「や、やっぱり暁さんの読みの通りだ！　この船の下に、何かいるんだ！」

ロックマンが興奮して叫んだ。

「……ねぇ、それって、ソロくん、大丈夫なの!?」

ハープ・ノートが神妙に言う。確かに、神を作り出すような奴が海の下にいるというのなら、いくら彼でも無事でいられるのか？

（ブライ……ッ！）

「……だいぶきたな」

海中でブライが歩いてきた振り返りながら呟いた。ここまで歩いてくる間、ロックマンが消しそこねたウィルスがわずかにいたが、それを除けば何も異常はなかった。

「……本当に何かがここにいるのか？」

だんだんそこへの疑問が湧いてくる。暁シドウの読みが外れたのではないかと。

（……）

もう少し奥に行ってみるか。そう思って、また歩き出した。

『……ギ……』

唐突にラプラスが声を発した。

「どうした、ラプラス」

ブライが聞くとラプラスは彼の隣にウィザード・オンをした。見れば、進行方向の右をじっと見つめている。

「……そっちの方になにか――――

と、そこまで言って口を閉じた。彼の中から、なにかが知らせてくる。彼の言う「血が知らせる」という感覚だ。

「……確かに、なにかあるな」

ブライはその方を憎々しげに見つめながらそう呟いて、その方角へと歩を進めた。

そして、見つけた。何やら黒ずんだ緑色の何かを。

「……これは……」

それはまるで巨大な人間の胸像だった。それも、両腕のない像。人間でいう頭は電波塔のように鋭く針のように尖っていて、胸には黒い、例えるならスターキャリアーのような装甲があり、目のように見える部分は暗く何も映してはいない。
まるで腕と下半身がないロボットのようなそれはかつては動いていたのかもしれないが、今は停止して見る影もない。

『……キサマは誰だ?』

「!?」

突然声が聞こえた。それも、普通の声ではない。まるでヒソヒソ話の声を拡声器で大きくしたような、ざらざらした不気味な声が突然響いたのだ。

「どこだ!?」

ブライが警戒しながら辺りを見回す。先程まで目の前の大きな胸像を観察していて気付かなかったがブライの周りには建物の廃墟や瓦礫とおぼしき物体がごろごろしているため、誰かが隠れる場所はいくらでもあった。

すると、目の前の像の胸の装甲から何か青白く光るものが出て来た。それは言ってみればミステリーウェーブのような八面体の宝石のような物体だった。

『ふん……。やはり、壊れたラ・ムーを操作したところで大したことは出来んな……。やはり、所詮は神とは名ばかりの出来損ないのようだ……』

声はその八面体から聞こえる。八面体が喋っているようにしか見えなかった。

「貴様、何者だ？」

ブライが怪訝そうに聞く。

『人にものを聞くときは自分から、ではないか？　それに、そもそも私が先に聞いていたはずだが？』

ブライはカンに障ったようにピクッと目尻を動かしてから名乗った。

「……ソロだ」

『ふん……。見たところ、ムー人の血を引いているようだが……あの船の連中の仲間か？』

再びブライはムッとした。

「違うな。オレはただ、奴らを利用しているだけだ」

『ふん……。なんにせよ、上の奴らは厄介だな。あのシンクロ率ではコンドルたちではそのうち手も足も出なくなるであろう。……私が直接、世界もろとも破壊してくれよう……』

「おい、貴様は誰だと聞いている……！」

ブライがじれったそうに聞いた。

『ふん……。そんなに私の名が聞きたいか？　なら、聞くがよい、キサマを殺す男の名をな！』

「……！！」

ブライは目を見開いた。海底が地震でも起きたように揺れている。しかし、それは地震などではない。目の前の、人間とも電波体とも違う謎の八面体の物体から発される、圧倒的な力が地すらも揺らしているのだ。

『私はアレグロ……。ムーの、真なる支配者だ！！』

ドゴンッ！！！

「グッ！！？」

突然それから衝撃波が放たれ、ブライを凄まじいスピードで弾き飛ばした。

ザバン！　という、海面を突き破る音が響きブライは孤を描いて飛び、なんとか元の船にズサッと着地した。

「ブライ、どうした！！？」

アシッド・エースがイエティ・ブリザードに剣を振るいながら聞いた。海底から物凄い速度でブライが飛び出してくれれば、この状況でも誰だって何事かと思う。

「ハァハァ、分からん、が、……来るぞ」

ブライはかなり荒く息を漏らしながら答えた。

「はぁ！？　来るって、何が！！？」

キィン……

ブライが答える前に何か音が響いた。その方を敵味方関係なく全員が見つめると、海面の下から何やら青白い光が上がってきて、静かに水面から出て来た。その光は船から数十キロと離れているのに、まばゆさに目を覆いたくなるくらい大きな光だ。さしずめ、海底から出て来た青白い太陽、といったところだろうか。

その太陽は雲に届きそうなほど高い空に浮かび上がったかと思うと、さらにその光を増していく。

すると、その光の下の海面のあちこちから水しぶきが上がり、黒いコンクリートのようにも岩のようにも見える物がものすごい数で飛び出してはその光を中心にして固まっていく。

「……あ、あれって……！！」

ハープ・ノートが顔面蒼白で口を押さえて呟く。他のサテラポリス陣も、目の前で起きていることを呑み込めずにいた。……いや、呑み込みたくなかった。なにせ、その光にコンクリートや岩が固まって形を成したものは、かつて世界を大混乱に陥れた、大要塞と同じ姿をしていたのだから。

「……ムー大陸……！！」

ムー大陸が、再び空に舞い上がった。悪夢の、再来であった。

５０、死を選ぶ（前書き）

５０話達成です！いやぁ、５０話でこんなところを迎えるとは、最初はまったく思ってなかったＺＥ☆　ＰＶの記念も含めてこの記念にいつかイラスト描きますね、ハイ。

・・・バトル、グダグダだ。

アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ（↑壊れた

Ｌ、

Ｃｈｏｏｓｅ　ｄｅａｔｈ

50、死を選ぶ

恐怖。彼らの心にはそれしかなかった。そして、状況は八方ふさがり。ムーの電波体たちと戦いながら大陸にまで気にかけることなんて、できるのか？　大体、1対1のタイマンだってこちらが押されていたのに。

『ふっ、我らの頭領が復活なされた！　仮に我らに勝てたとしても、この世界はムーのものだ！』

「くっ……！」

コンドルがそう言うのを、ロックマンは憎々しげに睨みつける。しかし、このままでは彼の言うとおりだ。ムーが復活してしまったその原理は分からないが、なんとかして破壊しなければ、世界が崩壊する。

（どうする……？）

「あ、あんなの……どうすればいいの！？」

ハープ・ノートは眼前に浮かぶ大陸を見上げて恐怖に目を見開いている。

『そんなの、決まっているだろう！　どうしようもない！　お前ら

に待っているのは破滅の未来だけだ！』

ブラキオ・ウェーブがそう叫ぶのを、おびえた眼のままハープ・ノートは見つめる。

『絶望しろ！　お前ももう、あの大陸の恐ろしさは重々承知のはずだろう？』

その言葉がハープ・ノートの脳裏に刻み込まれた記憶を想起させる。その存在だけで地を震わせ、海を削り取るほどの砲撃を放ったムー大陸の、かつて見た姿を。あれもそれと同じ。ミソラはかつてオリヒメの元で働き、少なからずムー復活に加担してしまったその責任感からか、人一倍ムー大陸に対し抱く恐怖心は大きい。

「……」

おびえたように唇を噛むハープ・ノート。自分の決意がここまでのものだったのか、と情けなくなってくる。

わたしがついてる！

絆は、一番の力になる！

……全部、自分が言った言葉だ。スバルに、言った言葉だった。確かに、この言葉はウソじゃないし、ウソにしたくもない。　……でも……

『ゲキリュウウェーブ！』

「ッ！　スーパーバリアッ！！」

思考の隙を突かれたハープ・ノートはとっさにオレンジ色のバリアを張った。なんとか大波をやり過ごしたハープ・ノートに、ブラキオ・ウェーブは問いかける。

『臨終する心の準備はできたか？』

「……臨終なんて……しないよ……」

不安をぬぐいきれない目で相手を見つめながら、ハープ・ノートは答えた。

「ハァァァッ！」

アシッド・エースが叫びながらイエティ・ブリザードに切りかかる。

『フン！！』

ドンッ！

しかし、イエティは彼をソードごと殴りつけた。

「ぐっ！！」

アシッド・エースは二度三度甲板の上をバウンドして仰向けに倒れてとまった。ソードごと殴りつける。そんなことをすればイエティの腕も切れそうなものだが、アシッド・エースが体を起こして見てみれば傷1つついてはいない。

「こ、ここにきてまた一段とパワーアップしてない？」

『はい、あの大陸の影響を受けているようです』

アシッドの受け答えにシドウは憎々しげに目を細める。

「この、あの大陸をどうにかしないとって時に……」

『お前がオレを倒せたとしても、ムー大陸は止まらねぇよ！』

イエティ・ブリザードは弱々しげに呟いたアシッド・エースに向けて誇らしげに叫んだ。

「……ふ」

アシッド・エースはイエティに対して不敵に笑った。

『何がおかしい？』

「……あの大陸がそんな簡単に止められる代物じゃないってことくらいはわかってるさ。でも、現に過去に止められただろ？　それこそ流星のごとく現れた、青いヒーローにさ」

「……！」

ロックマンはハッと目を上げて、空から船の上のアシッド・エースを見下ろした。

「俺は普段、ヒーローって名乗ってるが、そんなん、誰だって名乗れるんだよ。誰かに想いを託されて、そのために戦えば、誰だってな！　想い託されてヒーローになった奴は、これ以上にない力を出せる！　お前らみたいに内乱で絆壊した奴にこんなこと言っても、分からないだろうけどな！」

『……』

「……今回任務に参加した奴ら全員、想いを託されてるんだよ！　だから、お前らムーになんて負けない。かつてどっかの誰かさんが絆でラ・ムーを打ち砕いたみたいにな！　……だから、絶対に勝つ！　想い託された、サテラポリスの名にかけて！」

どちらかと言えば、それは自分を奮い立たせるものだったのかもしれない。世界をかつて恐怖に陥れたものが再び現れて戸惑う自分を奮い立たせるための、言葉。しかし、その言葉が奮い立たせたのは彼自身だけではなかった。

「……はは、暁さんらしいや……」

「……そうだね、でも……暁さんの言う通りだね……」

空と海というそれぞれの戦場に浮かびながら、青とピンクの電波人間が呟く。どんなに悩もうとも、どんなに絶望しようとも、目の前の敵を倒して大陸も止める。きっと、それが自分達にはできるはず。ヨイリー博士に、長官に、ジャックにクインティアにヒカルにゴン太に、そしてマドカに想いを託された自分たちなら。

ゴッ……！

『『……！』』

ムーの電波体たちは目を見開いた。

《シンクロ率……６０％!?　しかも全員が……！　こいつら……！！》

コンドルが目の前の、急に強い波動を放ち始めた青い電波人間を憎々しげに見つめた。

『……お主らは……、お主らは、なんなんだ!?　なんで、そこまで戦える!?』

３人はゆっくりと顔をあげて答えた。

「「守りたいものが、あるからだ！！」」

『『ッ！？』』

ムーの電波体たちはさらに驚いたように目を見開いた。言葉の内容に驚いたのではない。その目の前の電波人間たちの、存在だけで焼き切られそうなほどのチカラにだ。

「「いくぞぉぉおおお！！」」

『『くっ！』』

ロックマンとハープ・ノートは腕を相手に向けて突き出した。

「ギャラクシーアドバンス！　インパクトキャノンッ！！」
「ギャラクシーアドバンス！　プラチナメテオッ！！」

ロックマンはコンドルに向けて砲撃を、ハープ・ノートはブラキオに向けて白い隕石を発射した。

《《速い！》》

コンドルとブラキオはそれぞれの敵の攻撃速度に驚きながらもなんとかそれらを避けて、相手に向けて大口を開いた。

『ウィング――』
『サンダー――』

「ウォーロックアタック、エレキスラッシュ！」
「マシンガンストリング！」

ロックマンとハープ・ノートは相手に攻撃を出すヒマを与えずに動いた。それぞれの大技に誘発されてムー側の電波人間も初動の大きい技を繰り出していた2人は隙の少ない2人の技に対応できない。コンドルはロックマンのエレキスラッシュでマヒして身動きが取れず、ブラキオは弦にまとわりつかれて動けない。なんとか解放されようともがく2人をよそに、ハープ・ノートは弦の束をまとめて握って叫んだ。

「いくよっ、スバルくん！！」

叫びながら、その小さな体のどこにそんな力があったのか、弦の束を両手で握りしめたままハンマー投げのように回転し始めた。

「分かってる、ミソラちゃん！！」

ロックマンもノイズをオックス×キグナスに変えながら左腕のハンターでバトルカードを引きだした。

「バトルカード、サウザンドキックッ！！」

ロックマンがマヒしたままのコンドルに無数の蹴りを入れる。目に

もとまらぬ速さで繰り出されるキックを食らったコンドルはそのまま吹っ飛ばされた。対してハープ・ノートも振り回していたブラキオを上に投げ飛ばした。吹っ飛んだコンドルと投げ飛ばされたブラキオは空中でぶつかった。

『ぐっ、舐めるな――――』

よ、とはセリフを言いきれなかった。コンドルが見たのは、左腕にオレンジのエネルギー弾をチャージしているロックマンだった。

『あいつ……ッ！！』

ブラキオの声に振り返ってみればハープ・ノートの前に大きめのアンプが浮かび、こちらはピンクのエネルギーを溜めている。

「耐えられる？　わたしとスバルくんの――――」

「連係砲撃ッ！！！」

ハープ・ノートの声に合わせて吠えるようにロックマンは叫ぶ。そんな2人を見て、投げられて弦から解放されたブラキオは即座に持ち前の高速移動法で避けようとした。

『そんな攻撃――――』

ドン！

唐突に下から何かが投げ上げられて2人にぶつかった。何かと思って見れば、イエティだった。

「なるほど、その連係、俺も混ぜてもらっちゃおっかな？」

ムーの３人とロックマン、ハープ・ノートが見下ろせばアシッド・エースが両肩を赤く輝かせて佇んでいた。ロックマンとハープ・ノートはニッとアシッド・エースに向けて笑いかけ、キッと前を見た。

「アトミックブレイザー！！」
「パルスブレイカー！！」
「オメガレーザー！！」

３方向から放たれたオレンジとピンクと赤の３つのエネルギー波が、１か所に集められたムーの電波体たちを合流地点にして、ぶつかり合った。ぶつかったエネルギーは、互いに反発しあって、大爆発を起こした。

『『うぐぁぁあああッ！！』』

絶叫して、焼け焦げて落ちて行く３人の電波体。船の甲板に着地した３人に合わせてロックマンとハープ・ノートも着地し、ロックマンはノイズチェンジを解いて元に戻った。

「……息ぴったりだったね！　スバルくん！！」

にっこりと笑って言うミソラに、スバルもほほ笑んだ。アシッド・エースはそんな２人を交互に見つめていた。

（……わざと避けられやすい初動の大きい攻撃を放ち、心理的に相手にも隙の大きい攻撃を誘う。その隙を狙って発生の早い攻撃で相手の動きを封じ、大きな力で強制的に敵を一か所に集め、一斉砲撃をすることで双方の威力を高める……。これだけの作戦の立案・決行を一切の打ち合わせもなく、それこそ奴らの言うとおり息ぴったりに合わせてやってのけた……）

アシッド・エースは片腕を高く上げて手のひらをパン！　と打ちつけ合うロックマンとハープ・ノートを見つめながら、フッと笑った。

（……確かに、絆を深めろとは言ったが……。どこまで深いんだろうな、この2人の絆は？）

「で、どうしますか？　このヒトたち？」

声を聞いて思考から現実に引き戻されたアシッド・エースは、ロックマンが足元に伏している電波体たちを指差してこちらを見つめているのを見た。

「……そりゃ、拘束してサテラポリスで留置処分だな」

『……はぁ？　生かすのか？　オレらを？』

怪訝そうにイエティが言った。

「当たり前でしょ？」

声がした方を見ればハープ・ノートがこちらを見つめていた。

「わたしたちはあなたたちを殺そうとして戦っていたわけじゃない。

船や飛行機が沈んじゃうこの海を平和にできればそれでいいの。助けられる命は助けたいもの！」

ロックマンとアシッド・エースを見てみても、それで当然、と言いたげな顔でこちらを見ていた。ロックマンはムーの電波体から目を背けてアシッド・エースの方を見て聞いた。

「それは分かりましたが、暁さん、ブライは……？」

「あの大陸に侵入できないかウェーブロードから探索して――」

『……ふざけるな！！』

ロックマンとアシッド・エースの何事もなかったかのような会話をコンドルが遮るように叫んだ。

『我らを生かすとは、なんと惨(むご)いことをしてくれる！　……それに、そうなれば、我らが頭領が黙ってないぞ！』

その言葉と同時に、ムー大陸にある天に向けて張り出した電波塔の内の3本の先が輝きだした。

「「！！！」」

3人はそれを見て目を見開く。あの大陸、こちらを攻撃しようとしてるのか？　だとすれば、勝てるわけがない。3人の電波人間と1つの巨大な電波要塞では力の差は目に見えている。人間がピストルを持って戦車に挑んだところでかなうはずがないのと同じだ。力の次元が違うのだ。それも今回は、人間と戦車なんて比較が滑稽に思えて来るほどの力の規模の差がある。

『ははは！　お主ら、後悔するんだな！　このムー大陸を敵に回したことを！』

「く……っ！！」

コンドルの声に歯を食いしばるロックマン。その時だった。

キュンッ！

先ほど輝いた電波塔の先からこちらに向けてレーザーが打ち落とされた。それは人間の頭に対しての髪の毛ほどの太さしかない細いレーザーではあったが、電波人間1人を吹き飛ばすには十分な出力であった。それが3本、こちらの船に向かって空中を一直線に突き進んできた。

「「ッ！！！」」

ドゴン!!

重い音を立てて、レーザーは船上の電波人間3体に激突した。

ムーの電波人間、3体に。

「……!!」

ロックマンも、ハープ・ノートも、アシッド・エースも、動揺を隠せない。手下でも、仮に手下でも、それでも仲間であるはずのイエティ、ブラキオ、コンドルの3体を、レーザーで焼き殺した!?

『……ふは、なにを、いまさら　おどろいている?　われらは　ムーのほこりたかき、せんし　だぞ?　まけて、ながらえることが、ゆるされるわけが　ないだろう?』

ロックマンたちは彼らに駆け寄り、視線を合わせるためにしゃがみこんだ。息も絶え絶えに、声をゼイゼイと絞り出すコンドルを絶望した目でロックマンたちは見つめる。

『……わすれるなよ、いまをいきる、せんしたちよ……。　これが、おまえたちが　あいてにしているムーたいりく　なのだ……！！』

「そ、そんな、こんなのってないよ！　キミたちだって、ムーのために戦ったのに！！」

『なんのために、たたかおうとも……』

コンドルはもう一息で言いたい言葉を全部吐く体力も残っていないのか、一呼吸置いた。

『なんのためにたたかおうとも、まけてはいみがない……。まけてながらえるのは、ほこりをうしなっていきるのは、しんでいるのとおなじだ……！』

「……！」

『それなら、われらは、ほこりをもったまま、ほこりたかきせんしとして――

――死をえらぶ

そして、3人の体は突然輝きだしたかと思うと、パッと白く輝く光の球となって天に昇って、消えた。それはまるで、シャボン玉が空へと昇っていって、消えたようであった。

「……」

ロックマンはゆっくりと立ち上がった。噛み切らんばかりに、唇を噛んでいる。

「……ぐすっ」

ハープ・ノートも鼻をすすりながら立ち上がった。

「……、思うことはいろいろあるだろうが、全部後にしろ。あの大陸をなんとかしないといけないんだぜ、俺たちは。今のところ、世界であれに立ち向かえる可能性があるのはこの拒絶領域下（リジェクションフィールド）においても電波変換できる俺たちしかいないんだぞ？」

「はい……」

ロックマンとハープ・ノートは腕や手のひらで目をこすってから、キッと眼前に浮かぶ巨大な大陸を見つめた。

「はい、やりましょう！」

「うん、みんなであれを倒そう！！」

世界の命運をかけた、最後の大勝負の幕開けであった。

50、死を選ぶ（後書き）

「耐えられる？　わたしとスバルくんの――――」

「連係砲撃ッ！！！」

・・・何気に自分で書いてて気に入ってしまったやり取りですｗ

51、焦燥（前書き）

少々遅れました。正直ここまで長くなると思わなかった。まさかの８０００文字弱・・・

51、焦燥

アメロッパ東部に広がる海域。そこには水平線を境に澄みわたった海と空が広がっている。いわゆる北大西洋に位置するこの海域は、かつて電波の霧に覆われ、船や飛行機の電子機器の異常が原因で沈没や墜落が絶えなかった。……そう、俗に言う「バミューダラビリンス」である。現在はムー大陸が埋まっていたせいで起こっていた電波障害も解消され、電子機器を乱していた電波の霧もなく、広く見通しの良い晴れわったった空が広がっている。

その海に張り出した崖、その上に1人の少女がいた。潮風に、その腰まで届くいちごミルク色の長い髪や純白のスカートをたなびかせて佇むその少女は、髪より濃いピンクのセーターのようにも見える上着を着ている。彼女は眼下に広がる海の、穏やかに寄せる波に目を送っていたが、やがて、まるで誰かに呼ばれたかのように顔をあげて振り向いた。

「始まってしまいましたか……」

穏やかな声が彼女の唇から聞こえた。目前に広がる空には、今まで彼女が見つめていた海の方へと様々な種類の鳥が、群れを成して飛んでいた。そのせいか、空はすこし暗く見える。しかし、その常人なら何事かと恐れおののきそうな光景には彼女は目もくれない。彼女の瞳にはその先の、そこからは見えるはずのないものが映っていた。

「ムー大陸……はるか古(いにしえ)に封印され、かつて青き流星に打ち砕かれし浮遊大要塞……。鳥たちも動物の本能からあれは危険だと判断して逃げて行ってますね……」

いくら巨大といえど、何万キロも離れた太平洋の空に浮かぶ黒い大陸など見えるはずもない。しかし、彼女には確かにその巨大で不気味な要塞がその眼に見えていた。そして、その大陸からさほど離れていない海に浮かぶ、白い船も。黒い大陸の後にこの船を見ると、ずいぶんとこの船が小さく見える。……アリ、という形容すらまだ大きいと感じるほどに。

「現在、大陸にはウェーブロードもスカイウェーブも繋がってはいません。ゆえに、かつてのような大陸に潜入し内側から叩く方法は使えませんよ……」

感情のない顔で穏やかに彼女はそう言った。彼女はそれまで無表情だったが、そこでクスッと笑って愛おしそうな眼をして言った。まるで、眠るわが子を見つめる母親のような眼で。

「さて、お手並み拝見と行きましょうか？　星河スバル、響ミソラ、そして――――」

彼女は突然消えた。ヒュッ、と軽く風を切る音を残して。

――――　もう1人――――

「ヤバいよね、これ……」

海の中を高速で泳いでいく少女が周りを見回しながら呟いた。その周りでは大量の魚が彼女とは逆方向に泳いでいく。それも、群れを成す習性はないはずの魚まで全部だ。中にはサメまでいる。周りに彼らの食料になりそうな魚が大量にいるのにそれには目もくれず、他の魚同様彼女とは逆方向へ猛スピードで泳いでいく。まるで、何かから一目散に逃げるかのようだ。

『逃走本能に従っているんです。博士から通信妨害電波に対抗するためにもらった通信機はいりませんでしたね、この魚たちが来る方向が目的地です』

彼女の隣で青い電波体が答えた。彼女はバイザーの下の瞳を電波体に向けながら言った。

「目的地に到達するためにはいらなくなったけど、でもこれを届けるのがわたしの役目の１つでしょ？」

『はい、ですから急ぎましょう……！！』

「もちろ――――

スドン！！

「！！」

前方から凄まじい爆音が響いてきた。それと同時に激しい水流が彼女を襲う。

「くぅっ！！」

彼女はあまりの衝撃に、パチクリと瞳を瞬きさせる。

「な、なにが起きてるの……！？」

『分かりませんが、なおさら急いだ方がよさそうですよ！！』

彼女の隣の青い電波体がせききって叫んだ。

「うん、分かってる！！　行くよ！！」

彼女は一段と泳ぐスピードを上げた。左手を強く握りしめて心に呟いた。

（お願い、間に合って……！！）

Ｌ？、

Ｆｒｅｔｆｕｌｎｅｓｓ

「はぁ、はぁ、はぁ……」

オックス×キグナスのマージノイズに変身しているロックマンがバスターを前に突き出した姿勢のまま、激しく吐息を漏らしている。大陸がさっきムーの電波体たちを消した時と同じようなレーザーで攻撃、ロックマンがアトミックブレイザーでそれを相殺したのだ。しかし、ロックマンにも負担は大きかったようだ。

「だ、大丈夫、スバルくん……？」

「う、うん、なんとか……」

ハープ・ノートの心配そうな問いかけに、ロックマンは振り向かずに答える。目をそらす余裕すらなかったのだ。

「……あの大陸、力を出し惜しみしてるな……」

「やっぱり、そうですよね……」

アシッド・エースの読みにロックマンが賛成した。かつて、ムー大陸は海を丸ごと削り取りそうなほどの攻撃を繰り出している。しかし、今の大陸は違う。さっきから極細のレーザーしか放ってこない。例えるのなら、トンネルくらいの太さのレーザーだ。その気になればこの船全体をまるまる消し飛ばせそうな光線を撃つのもわけないはずなのだが、どういうわけかそのレベルの攻撃は来ない。ただ単に舐められてしょぼい攻撃ばかりしてくるのかと思ったが、あることをロックマンは思い出し、顔を上げた。

「……そうだ！　ムー大陸は復活してから完全に力を発揮するまで時間がかかるってオリヒメが言ってた！　だから今はまともな攻撃が出来ないんじゃない！？」

「……それ、どのくらいかかるんだ？」

アシッド・エースが問う。その時間によって状況は大きく変わってくることをすでに彼は読み取っていた。

「……たしか、半日以上はかかっていたかと……」

『いえ、それは違いますね』

シドウの隣にアシッドが現れて言った。アシッド・エースがどういうことか聞くと彼は答えた。

『あの大陸、明らかにかつてよりも蘇生速度が速いんです。たぶん本来の力を発揮できるようになるまで3時間ほどしかかからないと思われます』

「……ちっ、じゃあ、それがタイムリミットってわけか……。それまでにアレを倒せばこっちの勝ち、3時間持ちこたえれば向こうの勝ち……」

アシッド・エースが舌打ち交じりに言った。

キィン……

その時、チャージ音が聞こえた。

「……こ、今度は5本！？」

ハープ・ノートが光を溜めている電波塔の数を数えて絶句した。

「ミソラちゃん、暁さん、2本よろしく！　ボクは残り3本、まとめて相手する！」

「どう……っ、……分かった！」

どうするつもりなのか聞こうとして押さえた。説明してる暇などなかった。ロックマンがそう言うのだからなにか考えがあるのだろう、と彼を信じて彼に2人とも従う。

「……ファイナライズ！」

ロックマンを赤黒い光が包む。

ドォン！！

その時、ムー大陸から5本のレーザーが発射された。

「くっ、オメガレーザー！！」

「パ、パルスブレイカー！！」

赤とピンクのレーザーが5本のうちの両端の2本とぶつかった。残りの3本はそのまま船に向けて直進する。

「おい、ロックマ――」

「……レッドガイアイレイザー！！」

これまた赤黒いレーザーが赤黒く渦巻く光の内側からそれを突き破

って飛びだしてきた。さらに赤い円盤も二つ、渦巻く光を突き破って飛びだし、同じく赤黒いレーザーを放出する。その計3本のレーザーがムー側の3本のレーザーとぶつかり合って爆発を起こした。

「……ふぅ、危なかった……」

渦巻く光が弾けると、左腕を眼前の空に突き出してそこからレーザーを放出する、紅蓮のファイナライズを遂げたロックマンの姿があった。

「……なるほど、さすがにファイナライズの扱いが上手いな」

「暁さんこそ、それにミソラちゃんもいい判断だったよ！」

「……ふっ」

「……えへへ！」

ロックマンの言葉にそれぞれの反応をするアシッド・エースとハープ・ノート。各々（おのおの）、自分の出す砲撃の出力を落とさないように踏ん張っていた。……その時だった。

キィン……

「！！！」

また、チャージ音。もう1本、電波塔が光っていた。

「ま、まだ出すのか！？」

正直、もうこれ以上同時に砲撃されても対応できない。

「くっ、他のどれかのレーザーが止まってくれれば……」

ドォン！！

しかし、そんな淡い期待を嘲笑うかのごとく、大陸がレーザーを発射する。それは押し合う5組のレーザーたちの間を縫って直進し、そして――――

「グラウンドブレイクソード！！」

バチンッ！！

弾けた。上空から落ちてきた者の斬撃によって。

「ブ、ブライ！」

ブライはロックマンの声に瞳だけを送り、キッと前を見据えてラプラスソードを構える。途端にレーザーがそのソードに襲いかかってきた。水道の蛇口から流れ出る水と同じだ。蛇口から出る水を弾き飛ばしても、発射元を止めない限り水は出続ける。

「ラプラス！」

ブライが叫ぶと流線状の剣から灰色の電波体の姿に戻った。ラプラスはブライに代わってレーザーを腕で止めている。ブライはラプラスのとなりに進み出て、ココウノヤミをまとわせた右腕を軽く後ろに引いた。

「ブライナックル！！」

右腕を何かを殴るように突き出すと、そこから無数の紫の拳が飛び出した。それは宙を直進し、遠近法で小さくなり見えなくなり……

ドゴン！！

ほどなくして、レーザーを放出している６本の電波塔が音を立てて崩れ落ちた。元を断たれたレーザーは放出されなくなり、味方側もようやく砲撃を止める事が出来た。

「……ブライ、ありが……は、いらないか……」

ロックマンはブライに礼を言いかけたが、ブライの受け答えは目に見えていたので言わなかった。今は無駄に時間を使うべきではない。ブライはロックマンが礼を言いかけたことすらも無視して、目の前のムー大陸を見すえたまま呟いた。

「……やはり、ウェーブロードからの潜入は不可能のようだ」

「……やっぱりか……」

ブライの報告に、アシッド・エースは肩を落とす。

「……とにかく、まずはあのレーザーを撃ってくる電波塔をブライがやったように破壊すれば攻撃方法が1つ消えるはずだ。それから始めるぞ。……まだ、それぞれ技を撃てるな？」

ロックマン、ハープ・ノートが深刻な面持ちでうなずき、ブライは視線のみを送った。

ロックマンがレッドガイアイレイザーで、ハープ・ノートがパルスブレイカーで、アシッド・エースがオメガレーザーで、ブライがブライナックルで、それぞれムー大陸の電波塔を破壊していく。時折発射されるレーザーは1人が砲撃で相殺している隙に別の1人がそのレーザーを放出している電波塔を破壊する、という具合に作戦を進めた。

しかし、ロックマンの心には、不安があった。元々、内部に潜入できた前回でさえ、ラ・ムーにボロボロにされてようやく倒したのだ。今やっているのだって、大陸そのものにダメージを与えるものではない。ムー大陸は再び破壊しないと止まらないはずだが、かつてのようなコア（ラ・ムー）の破壊無しに、どうすればムー大陸は落ちるのだろうか？

たしか、ラ・ムーのいた大神殿は、ムー大陸の中央にそびえ立つ一番太くて一番大きな電波塔の先端部分にあった。今、ムー大陸を動かしているのがラ・ムーなのか何なのかは分からないが、もしかしたらそこに今、あの大陸の中核となっているものが有るのかもしれない。

と、思ってロックマンがその巨大な電波塔を見上げると、その電波塔から今までで一番太いレーザーがすでに発射されているのが見えた。どうやら、自分たちが撃っている砲撃や大陸側のレーザーが発する音にまぎれてそのレーザーも発射されたようで、自分以外の誰もそのレーザーの接近には気付いてはいないようだ。それはまっすぐにロックマンの隣のハープ・ノートめがけて直進していき、そして――――

「ミソラちゃん、危ないッ！！！！」

ドンッ！！！！！

「え……っ！？」

ハープ・ノートが突然聞こえた叫び声と轟音にハッと顔を上げると、そこに見えたのは、レーザーを真正面から受けたロックマンの姿だ

った。

「ぐぅっ！！！！」

ロックマンはそのまま吹っ飛ばされ、甲板に水平に飛び、甲板の端に取り付けられた柵をぶち壊してそれでも止まらず、数十メートルの空間を飛び、海に落ちた。

「スバルくんッ！！！」

ハープ・ノートは即座にフライングノートを作り出してそれに乗り、宙を舞って海に突っ込んだ。そして、海中を突き進み、力なく沈んでいく電波人間を見つけると彼の下に回り込んで両手に受け止めた。そしてフライングノートを操って再び彗星のごとく突き進み、海面を突き破って宙を飛んで船に向かって飛ぶと、最後までフライングノートで飛ぶのももどかしかったのか、ジャンプして船の甲板に飛び移った。

「ス、スバルくん！！　大丈夫！！？」

体からロックマンを下ろして甲板の床にあおむけに寝かせながら、ハープ・ノートが焦って問う。しかし、返事はなかった。さっきのハープ・ノートと同様に、今度はロックマンが酷い風邪をひいたかの如く、はぁはぁと荒い息を漏らしている。

「くっ、なんてこった……！！　ミソラ、なんとか回復させられるか！？」

アシッド・エースが早口で聞く。もちろん「ロックマンが負傷した」という事実もショックだが、それと同じくらいに人手が減ったのも

問題だった。今まで、４人でやってようやく大陸との攻防が取れていたのに、ロックマンが負傷し、ハープ・ノートがそれを回復させるとなると、それだけで、戦力は半減だ。

それでもなんとかアシッド・エースはブライと２人で大陸を抑えようとする。そんな２人を前にしながら、ハープ・ノートはロックマンの胸のシューティングスターエンブレムに両手を添えた。

――――自分のせいだ。自分があの時レーザーが飛んできていることに気付いていれば、こんなことにはなっていなかった。ロックマンはあの時、ハープ・ノートにレーザーの接近を知らせても、自身の攻撃で相殺しようとしても間に合わない、と判断してあの行動をとったのかもしれない。はたまた、そんなこと考えてる余裕は全くなく、とっさに体が動いたのかもしれない。そのどちらが事実だったとしても、自分を守るために動いてくれたことは明白だった。

「スバル、くん……ゴメン……」

呟くように、絞り出すように、泣き出しそうな声で、弱々しい声で、そう言った。

こんなことになるために、ここに来たんじゃないのに。スバルくんを、こんな目に合わせるために、ここに来たんじゃないのに。ただ、スバルくんの役に立ちたくて、今度こそスバルくんを守りたくて、ここに来たのに。なんでいつもいつも、こうなってしまうのだろう。

「ヒ、ヒーリ、ング、サウンド……」

泣いてまともな声すら出せない。それでも、なんとか回復のエネルギーを……

「……！？」

そこまでいって、ハープ・ノートは急にロックマンから手を離した。

『……ミソラ！？　なにしてるのよ、早くしないとスバルくんが……！！』

「できない……」

ぽつりと。そう呟く。一瞬、空気が凍りついたかのようだった。

『……え？　何を言って――――』

「回復、できない……！」

目を見開いて、両手の掌を見つめながらそう言った。

『な、何言ってるのよ！　さっきはあんなに簡単に――――』

「で、出来ないの！　さっきまでの、『癒しのエネルギー』がスバルくんに流れて行く感じが全くないの！！」

『……そ、そんな……！！』

ハープも愕然とした表情だ。

「なんで！？　なんでできないの！？　これじゃ……！！」

「でも、ひとつだけ、気をつけてね」

ミソラは、急に記憶を想起させた。それは、つい昨日、マドカに技を教えてもらった時のことだった。

「！！」

「でも、ひとつだけ、気をつけてね。最初のうちは焦ったり、怖がったりすると、回復してあげられなくなることがあるから」

「……どうして？」

「焦ると、人って自分を焦らせてるもののことしか考えられなくなるでしょ？　この回復技で重要なのは、回復させたい相手が回復していくそのイメージと、相手に対する想い。だから、焦ったり怖がると、それで心がいっぱいになっちゃって、回復できなくなっちゃうことあるから……」

「……その場合、どうしたらいいの？」

「とにかく、心を落ち着けること。冷静になって、心を澄ませて、なるべく相手に心を集中させる。それしかないね」

――今、自分は明らかに焦って、怖がっている。……早くスバルくんを回復させないと。そうじゃないと、スバルくんが大変なことになる。そう思っている、それがいけないのか。自分の心配が、逆に焦燥感となって、回復の邪魔になってるんだ。

「……そんな……」

失望したように呟くミソラ。とにかく、マドカに言われたとおりに落ち着かないと。そう思って、ハープ・ノートは再びロックマンに手を添えて、集中しようと目を閉じた。冷静に、心を澄ませて、なるべく相手に心を集中させて……

――それでも、出来なかった。回復技の発動に成功すればハープ・ノートの手のひらを包むようにピンクの光が出るはずだ。しかし、彼女の手のひらには、何も変化が起きなかった。

「なんでなの!?　なんで、出来ないの!?　これじゃ、このままじゃ……

……スバルくんが、死んじゃうよ……」

自分の言葉すら、自分を焦らせていく。有事などで本当に焦っている人間は、自分が焦っていることを自覚できない。今のミソラが、まさにそれだった。

「やだよ、こんなの……！　スバルくんはわたしのせいで傷ついたのに！　そのスバルくんを助けてあげられないなんて!!」

『ミ、ミソラ、落ち着きなさい！』

しかし、もはやミソラは軽い錯乱状態に陥っていて、ハープの言葉など届かなかった。自分が自分を守った人を守れない、その絶望感に心が支配されていた。

『ッ!!?』

突然だった。突然、アシッドが驚いたように息を飲んだ。

「どうした、アシッド！？」

『む、ムー大陸……完全覚醒を確認……』

「な！？」

アシッドのかすれた言葉に、アシッド・エースだけでなく、その場の全員が驚く。

「早すぎるだろ！？　まだ時間があるんじゃなかったのか！？」

『急に覚醒の速度が上がって……！！』

キィィィン！

音が聞こえて振り向いてみれば、先ほどハープ・ノートを狙い撃ちしてロックマンが代わりに食らったレーザーを発射した、中央の巨大な電波塔に光が集中していた。それも、今までの比ではないほどの強大なものだということが、見てとれる。

『あ、あんなの発射されたら、この船ごと吹き飛びますよ！！』

「くっそ、あの電波塔を破壊するぞ！！」

アシッド・エースの声に、ブライは無言で従った。

「オメガレーザー！！」

「ブライナックル！！」

赤い光線と紫の無数の拳が電波塔めがけで飛んで行く。

ズドォォン！！！

しかし、その電波塔に技が到達する前にレーザーのチャージが終わったらしく、そこから今まで見たこともないような閃光が発射され、オメガレーザーもブライナックルも打ち消してまっすぐにこちらへ突き進んできた。

「クッ……！！！」

「このっ……！！」

「こ、こんなの、ないよ……！！　こんな終わり方……やだよ！！」

ハープ・ノートは目をつむった。

「アクアウォールッ！！！」

ドンッ！！

轟音が響くのが、聞こえた。

「！！？　こ、この技は……！！」

ハープ・ノートが目を開いて見上げると、船の前に巨大な、青く透明な分厚い壁が出来ていて、ムー大陸の太いレーザーを止めていた。そして、その壁に軽く手を添えている青い電波人間がいる。その電波人間の顔は後ろ姿で見えないが、イルカを模したヘルメットをかぶり、腕にはイルカの胸ビレ、足には尾ヒレがついて水色のスカートを穿いていた。

その電波人間は振り返って緑色のバイザーの奥に見える紫の瞳で一同を見回しながら言った。

「な、なんとか間に合った……！！　みんな、大丈夫！？」

ハープ・ノートはその電波人間に覚えがあった。……いや、「覚えがある」などというレベルではない。つい前日、知り合って仲良くなったばかりの、友達であった。ミソラは、その友達の名を叫んだ。

「マ……マドカッ！？」

52、海洋　VS　大陸（前書き）

・・・誰か私に技のネーミングセンスをください・・・

L?、

Marine　VS　Continent

52、海洋　VS　大陸

「な、なんでマドカがここに……？」

ミソラが目の前に浮かぶ電波人間に問いかける。それを聞いて、アシッド・エースは質問を重ねた。

「お前……マドカの電波変換体なのか？」

「はい……」

その問いに、マリーン・ドルフィンは呟くように答える。レーザーが彼女の作り出した壁にぶつかる、その轟音が鳴り響いている割にはその声ははっきりと聞こえた。彼女は船全体をカバー出来そうなくらい大きな分厚い壁を作り出しておきながら、そして船ごと海を削り取りそうな威力のレーザーを受け止めておきながら、大して疲れた様子も見せず、涼しい顔をしている。

「……それより、スバルくんは……」

マリーン・ドルフィンは壁に手を添えたまま、後ろに視線を送り、ハープ・ノートの前に横たわるロックマンを見つめている。ハープ・ノートがそれに対して目を伏せ、ぽろぽろと涙をこぼしたのを見て、アシッド・エースは代わりに答えた。

「……ミソラをかばって負傷したんだ」

「……そう、ですか……」

マリーン・ドルフィンは首を再び前に向けて、俯くように伏せた。

（……間に合ってなんか……ないじゃない……）

唇を噛んで、心にそう呟く。アシッド・エースにも、心は読めなくても考えていることは伝わってきた。

不意に、マリーン・ドルフィンは後ろ手で何かを投げた。それは宙を一直線に飛び、アシッド・エースがそれを片手で受け取った。

「これは？」

アシッド・エースが何かを受け取った拳を開くと、そこには紅い色の結晶のようなものがあった。ミステリーウェーブを紅く塗ったような見かけをしている。

「……みんなは戦闘で気付かなかったのかもしれないけど、低いシンクロ率での電波変換ができなくなる領域、あれには電波妨害の機能もあったみたいで、この海域と外部との通信は遮断されていたの。

でも、そのプログラムがあれば、強引にハンターとＷＡＸＡのコンピュータをつなぐことができる。聞きたいことはわたしから説明するよりヨイリー博士からしてもらった方がいいから、まずはそれを使って博士から事情を聞いてください！」

マリーン・ドルフィンの説明を聞いて、アシッド・エースは手に持った彼の銃、アシッドブラスターを取り上げる。暁シドウのハンターが組み込まれているこのブラスターに、先ほどの紅い結晶が吸い込まれるようにしてインストールされた。すると、彼の前にエア・ディスプレイが飛び出し、彼の見えやすい高さに静止した。どうやら、インストールと同時に自動的にＷＡＸＡにつながるようになっていたらしい。

しばらくはチャンネルが繋がらないテレビのように砂嵐が見えていたが、次第に映像がはっきりしてきて、ヨイリー博士が映し出された。

『あぁ！　マドカちゃんがそっちに着いたのね！』

エア・ディスプレイの向こうでヨイリー博士が叫ぶように言った。

今か今かと待っていたようである。

「はい。マドカに、博士に事情を聞けと言われましたが」

『そうそう、それも私の伝言ね！』

「マドカをこっちに向かわせた理由は……聞くまでもないですね。増援と、この通信機能の伝達役、ですよね？」

ヨイリー博士はニッと笑った。

『そのとおり、察しが良いわね、シドウちゃん』

「マドカが敵の攻撃を防いでこの会話の時間稼ぎをしてるので、手短に話します。マドカがいまこうして電波変換してるということは……」

『その通りよ。マリーン・ドルフィンは、シンクロ率４８％。それに、ウェーブロードがなくても海を泳いで任務の現場に行ける能力も持ち合わせていたから、増援にはぴったりだったのね』

「なるほど……」

『とにかく、そっちの状況もまずそうだけど、がんばって！　わたしたちもモニターしてるから！』

そう言って、通信は切れた。切れた、とは言っても、ヨイリー博士はシドウのハンターを通してこちらの戦況を見ているはずだ。

「……それで、あの大陸、なんでまた復活してるんですか？　どういう戦況なんですか、これ？」

ヨイリー博士との通信の終了を見計らってマリーン・ドルフィンがアシッド・エースに問いかけた。シドウは一瞬、マドカがすでにムー大陸を知っていたことに疑問を覚えたが、よく考えれば当たり前だった。オリヒメが悪用した時にムー大陸は世界にその姿を晒し、世界支配を目論んだのだ。むしろ、知らない方がおかしい。

「それはオレたちもよく分からない。ソロが海底で何かを発見したら、急にムー大陸の破片が集まりだして、アレが形成されたんだ」

「？　ソロって？」

マリーン・ドルフィンがきょろきょろと後ろを見回し、ブライを見つけた。その場にいるのは彼女本人を除けばアシッド・エース、ハープ・ノート、ロックマン、そしてブライのみだ。マドカは消去法でソロが誰なのか特定したようだ。

「……キミ？　ソロって」

「……今はブライ、だがな」

「ふうん、ひとまずはよろしく！」

ブライはそれに対してわずかに瞳を閉じただけだった。マリーン・ドルフィンは、なんとなくブライという男がどういう性分の持ち主なのか、分かった気がした。

「……とにかく、わたしがアレをやります」

マリーン・ドルフィンが真っ直ぐに、自身にレーザーを撃ち続けて来る大陸を見すえて決意を固めたように言った。

「そんな、1人でなんて、無茶だよ！」

ハープ・ノートが叫んだ。しかし、アシッド・エースはそれを片手を伸ばして制した。

「……止めはしないが、できるのか？」

アシッド・エースが問う。正直、自分たちは4人がかりでやっと、大陸との均衡がとれていたのだ。それも、完全覚醒前の大陸を相手にして、そこまでしかできなかった。対して、目の前の電波変換体は1人でレーザーを事もなげに受け止めているのだ。そんな「実績」の差が、「可能性」の差を明確に示していた。彼女には可能性があるのかもしれない、と思わされる。しかし、どこまで強くともやはり1人の電波人間であることに変わりはない。小学生の代わりにボディービルダーが出張っても戦車には勝てない、それと同じことだ。やはり返り討ちにされてしまうのではないかと思ってしまう。

マリーン・ドルフィンはその問いを聞いて、口角を上げた。

「……確かに、普段のマリーン（わたし）・ドルフィンだったら勝てないでしょうね……。でも！」

マリーン・ドルフィンは壁から手を離し、両腕を左右に広げて高らかに言った。

「今のわたしは、自分の武器に囲まれてる！　わたしの周りにはいま、自らのチカラの源になるものが大量にある！！　これなら、アレにだって、対等に渡り合えるはず！」

「……！！」

ハープ・ノートが目を丸くして驚いた。マリーン・ドルフィンは、水の全てを操る電波人間。そして今、この船の周りや大陸の下には海が広がっている。つまり、彼女は海の水を戦闘に利用しようとしているのだ。

「……さて……じゃ、暁、さん……？」

「アシッド・エースだ」

マドカはまだシドウの電波人間名を聞いたことがなかったので言い淀み、それを察したアシッド・エースが答えた。

「アシッド・エースとブライは、わたしが防ぎきれなかった攻撃から船を守ってください！　そして、ハープ・ノートは引き続きロックマンの回復！　これで行きます！」

「お手並み拝見、とさせてもらおうか」

「……」

アシッド・エースは軽くにやりと笑って言い、ブライは沈黙を守る。

「……気をつけてね、マドカ……！！」

ハープ・ノートが不安そうにマリーン・ドルフィンを見上げて言った。

「大丈夫。スバルくんをよろしくね！」

マリーン・ドルフィンはそう言ってウィンクをしてから前方に向き直り、両腕を前に突き出した。その行動が合図だったかのように、マドカの隣にドルフィンが現れた。

「……ドルフィン、フォローおねがい！」

『了解ですっ！』

マドカの言葉に元気よく答えるとドルフィンは、集中するように目を閉じた。

「じゃ、いくよ！　スクールドルフィン！！」

叫ぶと同時に、ザバン！　と海から何かが飛び出した。それも1か所ではなく、海のいたるところから。海は一瞬で海面からそれが飛びだす水しぶきで白に染まりあがった。その飛びだしたものとは、イルカの形をした水の塊。それが尋常ではない数で海面から飛びだし、ムー大陸に突進していく。その数はもはや「数える」という言葉そのものがずれていると思わされるほどだ。

ズドォォオン！！　という激しい音が響く。ムー大陸が標的を変更し、下に張り出した電波塔を使って自身に迫りくるイルカたちを撃

ち落とし始めたのだ。
しかし、それこそがマリーン・ドルフィンの思うつぼ。まずは相手の注意をそらし、船や自分を狙って放っているレーザーを止めること。狙い通りレーザーから解放されたマリーン・ドルフィンはレーザーを防いでいた水の壁を消した。やはり、壁の維持にもそれなりに労力を使うのだ。そしてドルフィン同様、集中するために目を閉じた。
大陸がトチ狂ったように乱雑にレーザーを放つが、１つとしてイルカには当たらなかった。まるでどこぞの映画に出て来る秘密結社のアジトが、侵入者を見つけるためにスポットライトを巡らせるような動きでレーザーが放たれるが、イルカたちはその隙間を縫うように、まるで海中を泳ぐように空中を進み、大陸に突進しダメージを与えて行く。

「す、すごい……！！」

ハープ・ノートが思わず声を上げる。イルカの数も、その動きも、１人の電波人間が作り操作しているとは思えなかった。

「なるほど、あれだけの数を１人ではさすがにコントロールしきれない。だからドルフィンと一緒にやってるのか」

アシッド・エースが関心したように言う。それに対し、アシッドが疑問を口にする。

『しかし、そのためには高いシンクロ率を必要とするはず。あそこまでの動きを見せる連係をしていながら、シンクロ率４８％は妙ではありませんか？』

「……確かに……」

アシッド・エースは顎に手を当てて考える。そもそも、周りが海という地の利を得ているとはいえ、マリーン・ドルフィンの戦闘力は異常だった。確かに電波変換の素体であるドルフィンのチカラもかなりのものだが、ウォーロックやアシッドと言ったウィザードたちと比べて大差はない。せいぜい、クラスに数人いる成績のいい子、という程度のレベルでしかない。さらにあれほどのチカラを持っていながら、シンクロ率は自分たち以下。自分たちとさほど変わらないウィザードに、自分たち以下のシンクロ率。この条件下であそこまでのチカラを手に入れる方法は……

「……精神力、か……？」

確か、マドカは任務の前に自分の生い立ちを話したときに、こう言った。ディーラーの追手からなんとか逃れてきた、と。その時に精神力を培われてきたのだろうか？

『……いえ、確かに水瀬マドカの精神力はかなりのものがありますが、それでもあそこまでのチカラを生み出せるものではないでしょう』

アシッドが反論する。シドウはそれに頷いた。

「そうだよな。あのチカラは電波人間のチカラの要素、３つ全部が高いなら納得がいくが、精神力一本でなんとかなるもんじゃない」

自分の仮説を、自分で否定した。そして、考える。それなら、あのチカラはなんだ？

「水瀬マドカ……ただ者じゃないな……」

言いながら、目の前に浮かぶ青い電波体を見つめる。当のマリーン・ドルフィンはまだイルカたちのコントロールを続けていたが、やがて目を開いて呟いた。

「やっぱり、バラバラに攻撃しても大してダメージにはならないな……」

言って、前に突き出した両手を左右に広げた。

「一斉攻撃に切り替えるよ」

『分かりました！　行きますよ！！』

ドルフィンはマドカの命令に答え、マリーン・ドルフィンの頭上から胸の高さに降りた。それと同時に大陸に向かってロケットのように飛んでいたイルカたちがスピードを失い、ゆっくりと空中を旋回し始めた。海からイルカが飛び出しては空中のイルカの群れに参入していく。そして、いつしかその群れはムー大陸を上下左右前後、全ての方向を取り囲む巨大な膜のようになっていた。

「一斉攻撃って……まさか……！」

ハープ・ノートの声にマリーン・ドルフィンがうなずく。

「お察しの通り！　わたしのイルカたちによる、全方位一斉攻撃！！」

そのとき、ムー大陸に残っている電波塔という電波塔が一斉に光り始めた。一斉に光を塔の先に集中させチャージ音が重なり、耳をつ

んざくような音量となって聞こえて来る。

「……今更その子たちを撃ち落とそうったって……」

ためるように声を出しながら、マリーン・ドルフィンは左右に広げた両手を目の前の空間の1点に集中させるように突き出した。

「……遅い！！」

その腕の動きと声を合図にムーの周りを遊泳していたイルカの群れが一気に飛びかかった。

ムー大陸のあちこちでイルカが衝突した際の崩壊により粉塵が巻きあがる。

しかし、攻撃の1発1発が与えるダメージはやはり微々たるもので、表面が傷ついただけのようであった。

「……あれだけやっても、ダメなんだ……」

ハープ・ノートが絶句する。今の攻撃だってかなりの威力だったはずなのに、相手のダメージは浅い。はたして、どこまで攻撃しなければいけないのだろう。

ハープ・ノートがチェックメイトまでの果てしなく遠い道のりを感じていると、前からクスッと笑う声が聞こえてきた。その笑い声を上げた主は、マリーン・ドルフィンであった。

「今ので分かった……今度こそ本気の一撃、行くよ！」

そう言うと、マリーン・ドルフィンは高度を大きく上げた。大陸に対してマリーン・ドルフィンは米粒ほどの大きさでしかないはずだが、それでもちゃんと見えているようだ。今の全方位攻撃で電波塔

のほとんどが崩れ落ち、残った電波塔は数えるほどしかないが、それでもその残った全ての電波塔からレーザーを発し、マリーン・ドルフィンを撃ち落とそうとしてくる。彼女はそれを相変わらずの優雅な動きでひらりひらりとかわしていく。

「なるほど？　さっきの攻撃はこのためか……」

「……？」

アシッド・エースが納得したように声を出すが、ハープ・ノートはわけが分からない、と言わんばかりに首をかしげた。

「さっきの全方位攻撃は相手にダメージを与えることが目的じゃない……」

アシッド・エースが説明のために口を開いたが、それよりも早く声が聞こえてきた。声のした方を向くと、ブライがムー大陸を見上げたまま呟くように口を動かしていた。

「……全ての方向から攻撃し、その攻撃による損傷が最も大きい部分、つまり大陸で最も脆い部分を探しあて、そこに最大限の攻撃を集中砲火するため……」

言われて、ハープ・ノートもムー大陸に目を凝らす。大陸はどこも同じ程度の損傷のように見えたが、やがて見つけた。大陸の中央に位置する、例の巨大な電波塔のふもと、付け根の部分。他の部分より派手にえぐれ、吹き飛んでいる。

「……ッ！？」

ハープ・ノートは不意に顔を上げた。電波塔の付け根の損傷の大きさに気付いたときに、彼女の視界に何か大きなものが下から上へとうごめくのが見えたからだ。海水が持ちあがって水柱となり、まる竜のようにくねりながら天めがけて舞い上がったのだ。気がつくとその水柱はハープ・ノートの視界を遮った1本だけではなく、船の周りの海の、至るところから昇っていた。そんなことができる者は、1人しかいなかった。

水柱をたどって見上げた先には、先ほど飛び上がったマリーン・ドルフィンが空中にたたずみ、ムー大陸を睨みつけていた。彼女が左右に広げたその両腕は、海から持ちあがった水柱を集め、吸収していた。

「……これがわたしの水系最強の攻撃――――

マリーン・ドルフィンは両腕をムー大陸に向け、

「――――ハイドロブレイザー！！！」

攻撃を放った。彼女の両腕からは大量の水が激しい勢いで放出され、正確に電波塔の付け根に向けて飛んで行く。そして。

ズドォォン！！

凄まじい量と勢いで水が大陸にぶつかり、大陸は電波塔の付け根から粉砕され、瓦礫すらも水で吹き飛ばされ、破壊されていった。

52、海洋　VS　大陸（後書き）

この程度の内容で６４３９字・・・

っていうか、地の文の文章力、壊滅的っすね・・・。特に最後の辺りとか適当になっちゃった・・・。なにか迫力に欠けるというか、なんというか・・・・ｏｒｚ

技名の中にあった「スクール」は「学校」という意味のではなく、「群れ」という意味の単語です。綴りは同じ「ｓｃｈｏｏｌ」です

53、天空　VS　大陸（前書き）

この短い時間内に読んでくれてる人がますます増えてきてるみたいで、本当にうれしいです。もっと頑張らねばｗｗ

読み返すと、うわ、展開はやｗｗｗ

Ｌ？、

Ｓｋｙ　ＶＳ　Ｃｏｎｔｉｎｅｎｔ

53、天空　VS　大陸

激しい水流がだんだんと細くなり、そして消えた。マリーン・ドルフィンが見下ろすその先には、きれいに表面を削られて巨大なクレーターができた大陸が、まさに満身創痍の状態で宙に浮いていた。

「まだ浮いてる……大きさ通りのタフさだね」

悠長にマリーン・ドルフィンが呟く。そんな彼女を、ハープ・ノートは目を見開いて見つめていた。

（わたしと戦った時のマドカは……全然本気なんかじゃなかったんだ……）

改めて思い知らされた事実。彼女の攻撃の数々が強力すぎてあれがもう本気かと思っていたが、全く違ったのだ。本当にチカラを発揮した彼女に比べればあの時のマドカが生ぬるく感じられてくる。

「みんな、大丈夫？　流れ弾とか来なかった？」

考えにふけっていたハープ・ノートの耳に声が聞こえた。見上げれば、最初に彼女が助けに入った時と同じ高さの空間にマリーン・ドルフィンが浮いていた。上空からムーを攻撃したあと、任務のメンバーの安全確認のために降りて来たのだ。

「大丈夫だったよ！　やっぱりすごいや、マドカって！」

ハープ・ノートが（若干マリーン・ドルフィンとの距離があるため）声を張り上げた。褒められたマドカは恥ずかしそうに頬を少し紅く

した。

「そ、そんなこと……ッ！？」

急にマリーン・ドルフィンは顔をキッと険しくした。瞳を素早く後ろに向けると同時に、彼女の目の前に再び分厚くて青い半透明な壁が出来上がった。

ドンッ！！

それに間髪をいれずに音と衝撃が響く。見れば、壁にまたレーザーが激突していた。

「ホントにしつこいな……まだそんなの撃（レーザー）てるんだ……」

マドカがもどかしそうに呟く。レーザーを撃ってきたのは言うまでもなくムー大陸だ。もう数えるほどしかレーザーの放出口である電波塔がない上に、残った電波塔も今にも崩れ落ちそうなのに、それでも閃光で船を狙撃してくる。

「やっぱり、電波塔は全部壊しちゃった方が……いや、もうここまできたら本体ごと壊しちゃおう」

そんなことを呟く。大陸をさも当たり前のように「壊す」と言う辺り、電波化しているとはいえ、小学６年生の女の子とはとても思えないセリフだ。

「いくよ、ドルフィン！　今度こそ……ッッ……」

マドカの声が急に途切れ、彼女は顔を歪めた。

『マドカ……！？』

ドルフィンがマドカの右隣に現れて、彼女を血相を変えて見つめる。否、正確には「彼女を」ではない。「彼女の左腕を」だ。マドカは自身の作り出した水の壁を支えるように左腕を添えているが、その左の二の腕のあたりを右腕でギュッと掴んでいる。まるで負傷した腕をかばうかの如く。

『まさかマドカ、また……！？』

「……はは、ばれちゃった？」

マドカはドルフィンの方に振り向いてそう言い、冷や汗を掻きながら自嘲気味に笑みを浮かべた。ドルフィンはその顔を見て、目を見開いた。ドルフィンはマドカの右側から顔を覗き込んだため見えなかったが、彼女がまっすぐドルフィンに顔を向けたことで見えた。……見えてしまった。

……彼女の、人間かどうかも疑わしいくらいの、冷たく黄色い左目の瞳が。

右目は優しい暖かみを宿した、彼女らしい紫の瞳なのに、左目は驚くほど冷酷で、驚くほど冷たい、黄色い瞳。そのちぐはぐな色合いをした両目が、マドカの顔を不気味なものにしていた。

「……さっきのハイドロブレイザーで無理がかかって、ちょっと『傷口』が開いたみたい……」

『……、マドカ、「傷口」じゃ済まないくらい、もう表面化してますよ……！』

それを聞いたマドカはうなずいてなおさら自嘲気味に笑って言う。

「うん、やっぱり無理して大量の水を一度に扱ったのがまずかったみたい。もう左手とか、脈がヤバいのが自分でも分かる。それに――」

言って、右目をいっそう苦しそうに閉じ、右腕を左腕から離して胸に当てる。

「……こっちも……っ」

苦しそうな表情を浮かべて、右手で胸をわし掴みにする。

『マドカ、もうこれ以上闘うのは無理ですよ！　止めてください！』

人間だったら顔面蒼白だったであろう表情で、ドルフィンが叫ぶ。

しかし、マドカは軽く首を左右に振り、答えた。

「ううん、ダメ。ここまで来たら、やれるところまでやらなきゃ」

『マドカ、ダメです！　このままだと本当に……！！』

「いいの、それでも。それでみんなを守れるなら、どうなっても構わない……」

『……だって、わたしはＡＭ星を守る使命があるから！』

『……！！』

マドカの言葉がドルフィンの過去に聞いた言葉を呼び覚ます。ドルフィンはそれを聞くと、この状況下だというのに、クスッと笑った。

「……？　なにかおかしなこと言った、わたし？」

『……ホントに、あなたは似てますね、カシオペア様に』

マドカはそれを聞いて、苦しさで右目を閉じたまま、黄色い左の瞳でドルフィンを見つめる。

「……やだなぁ、わたしはＡＭ王女さんみたいなすごい人じゃない

よ」

ドルフィンはそのマドカの目を見つめる。その瞳は冷たい黄色だったが、戸惑っていた。その目は褒められて照れながらも戸惑う、ごく普通の心優しい少女のものでしかなかった。

『……そうですね、思い違いでした』

「ははは、がっかりさせてごめんねー！」

まだ腕や心臓が傷んで苦しいはずなのに、それでも笑顔で明るく言ったマドカは直後に顔を真剣な表情に戻し、満身創痍の巨大な浮遊要塞を見上げた。

「……と、余裕っぽく見せても、そろそろヤバいのも事実。一気に決めるよ！」

『もちろんですっ！』

マドカの声にドルフィンが威勢よく答えた。マリーン・ドルフィンは左腕を壁から離し、天に向けた。

「な、なにを……！？」

ハープ・ノートが呟く。対してアシッド・エースは、空を見つめていた。

「おいおい、冗談だろ……！？」

空を見つめて呟く。しかしやはりハープ・ノートには何が冗談だと

言いたいのか理解不能だった。

「な、なにがですか？」

「上空の雲……」

「雲？」

言われて見上げると、確かに黒い雲が立ち込めていた。と、そこでハープ・ノートが疑問を口にした。

「あれ？　さっきまで晴れてなかったっけ？」

戦いの最中で天気のことなど気にもかけていなかったが、少なくともロックマンが巨大なブラックエンドギャラクシーでウィザードたちを一掃したときは晴れていたのを覚えている。確か、ムーの電波体3体と戦っていた時も同じく晴れていた。自分の記憶が正しいとするのなら、ムーの大陸が現れてから雲が集まりだしたことになる。大陸が現れてから今の今までの時間で、あそこまで黒々とした濃厚な雲ができるものなのだろうか？

「……、オレとアシッドの解析結果が正しければ、あの雲もマドカの支配下にある」

ミソラが途端に眉をひそめた。

「え、どういうことですか！？」

『……そもそも雲とは、上空に浮かんだ水滴や氷の粒の塊なんです。おそらく、マリーン・ドルフィンは自身の水を操る能力で上

空の空気に含まれた水分を操作して、雲を作り出したんです』

「そ、そんなことまでできるんだ……。でも、雲なんて作ってどうするんですか？」

ハープ・ノートが相変わらずの腑に落ちない表情のまま問う。

『雲の中で氷の粒が互いに激しくぶつかり合って摩擦されたり砕けたりすることで、静電気が蓄積されます。そして、重い霰（あられ）は下に、軽い氷晶は上に行くことによって雲の上層には正の電荷が蓄積され、下層には負の電荷が蓄積されます。そうして上空と地面の間、または上空の雷雲内に電位差が生じると、放電が起きるのです』

「え？　え？　え？　えっと、何の話、アシッド？」

ミソラがおずおずとアシッドに聞く。正直、小学６年生の頭に今のアシッドの説明は難しすぎた。

「つまり、雲の中の氷の粒同士がぶつかり合うと静電気が起きて、雲に電気が溜まって雷雲となるんだ」

「へぇ～……って、ちょっと待ってください！」

ミソラはシドウの説明を受けて関心したように声を漏らしたが、急に何かに気がついて目を見開いた。

「今そんな説明をするってことは、もしかしてマドカがやろうとしてることって……！！」

「あぁ、いま上空の雲の中で氷晶……氷の粒が激しく動いて自らぶ

つかり合ってる。こんなの、自然的に起こることじゃない。誰かさんなら、氷を動かしてぶつかりあわせ、帯電させることぐらい、わけもないだろうなぁ！？」

アシッド・エースはわざと声を張り上げた。それが聞こえたのか、マリーン・ドルフィンは後ろを振り返り、右目で視線を送りながら笑みを浮かべた。そして前に向き直り、天を仰いだ。

「……海からの攻撃がダメなら、空から、ってね！　いくよ、●●●デカブツ！！」

マリーン・ドルフィンが言った瞬間、ビキィッ！！　と凄まじい音が響いた。黒雲の中で稲妻が走り、雲のあちこちが黄色く光っていた。

「……これがわたしの雷系最強の攻撃●●――――

言いながら、天に向けて突き上げた左手の拳に力を込める。すると、雲の中に巨大な電気の塊が出来始めた。バラバラだった稲妻が1か所に集まるように、ビキビキと耳やかましい音を立てながら渦巻いている。その塊は、空を覆い隠した黒雲のせいで暗くなっていたその海域の全てのものを白く照らし上げた。マリーン・ドルフィンは天に突き上げた拳を、足元を殴りつけるように一気に振り下ろした。

「――――サンダーフォールッ！！」

ドゴォォオオンッ！！

技名を言い終わるより早く、雲間から1か所に集まっていた雷の塊が、一気に稲妻となってムー大陸に迫った。その音と衝撃はもはや

爆発と言った方がいい。一瞬で視界は白で染まり、その明るさは目を焼き切りそうなほどであった。

「……はぁ、はぁ……こ、今度こそ……！」

マリーン・ドルフィンはあえぎあえぎ言う。明らかに今の落雷技を撃つ前より疲弊している。

それもそのはず、彼女の中での最強技であるこの「サンダーフォール」はその威力を代償に、彼女の持てるエネルギーをことごとく奪う技である。そもそも、エネルギーの使い方が、非常に効率の悪いものなのだ。空の水分など彼女から遠すぎるものを操って動かし、帯電させたら今度は落雷を起こす方向を調整しなければならないが、あいにく彼女には雷を操る能力はないので氷の粒を上手く誘導しなければならない。自然を媒介にして音速を超える速度で撃ち出すため、威力とスピードは一級品だが、それに使われる労力も一級品。使った後の彼女は諸刃の剣なのだ。

マリーン・ドルフィンは手の甲を使って顎に滴る汗を拭きながら、白に包まれた視界に目を凝らす。

「「……ッ！？」」

マリーン・ドルフィンだけではなく、その場の全員が目を見開いた。

確かに、大陸は技の威力に見合った損傷を負い、未だに宙に浮いてはいたが、いつ崩れ落ちてもおかしくない状態であった。……問題なのは、その損傷で露出した、ムー大陸の内部。

そこには、心臓があった。

「な、なに、これ……！？」

マドカが顔を青くして呟く。切り裂かれた大陸は切り口から青白く不気味に光る、人間のそれに違いない心臓を露呈し、その心臓はドクン、ドクンと脈打っていた。

「っぷ……っ」

そのグロテスクな光景を見て、ミソラもマドカも、気分を悪くして吐き気すら催し、片手で口をパチンと覆った。ソロとシドウはなんとか耐えていたが、それでも胸糞悪そうに顔を歪めた。

「と、とにかく、文字通りあれが大陸の心臓でしょ……！？あれさえ攻撃すればそれで終わり……っ！！」

マリーン・ドルフィンがそう言って左腕をその心臓に向ける。見るからにその心臓の外部を覆う膜は薄そうで、ちょっとの攻撃ですぐに破壊できそうだ。

ズキンッ！！

「くうっ！？」

急に激痛が走り、マドカはバイザーの上から左目を押さえた。一度

の痛みにとどまらず、まるで頭蓋にねじをぐりぐりとえぐり込ませられているような痛みがマドカを襲う。押さえていない右目も視界がぼやけて見える。

（き、来た……あ、あとちょっとなのに……ッ！！）

「マ、マドカ……！？」

ハープ・ノートがマリーン・ドルフィンの異常に気付き、声をかける。しかし、そんなミソラを気にかける余裕すら今のマドカにはない。やっぱりおかしい、とミソラがマドカに異常が起きてることを疑念から確信に変え、さらに言葉をかけようとした、そのときだった。

ムーの青い心臓がその不気味な輝きを一層強く増した。

「マドカ、前ッ！！！」

ミソラの絶叫にも似た叫び声が響き、やっとマドカにも届いた。

「え……」

マリーン・ドルフィンがなんとか顔を上げると、どうやったのか心臓から太いレーザーが彼女めがけて発射された。

「きゃ、あああぁぁぁぁぁあああああッ！！！」

もともと激痛に苛（さいな）まれていたマドカはこれを防ぐことも避けることもできず、直撃した。マリーン・ドルフィンはレーザーをもろに食らって押され、そのまま海の中へと消えた。

53、天空　VS　大陸（後書き）

実は、雷の発生原理はまだ確実な定義がないらしく、いろんな説があるらしいです。

特に考えずに切れがよかったからという理由で切ったので、次回は極端に短い気がしますw

54、「そんなの酷すぎるよ」（前書き）

ＰＶ１５０，０００アクセス超えました！　みなさんどうもです！

Ｌ？、

“Ｉｔ　ｉｓ　ｔｏｏ　ｃｒｕｅｌ”

（４７１９）

54、「そんなの酷すぎるよ」

ズドォォン！！

レーザーが海面を突き破る音が響き、直後に巨大な水柱が立ち上り、その衝撃で起きた波が任務のメンバーの乗る船を大きく揺らした。しかし、その船の揺れになど気にもかけず、ハープ・ノートは恐怖に目を見開き、顔をひきつらせていた。

「マ、マドカ……？」

レーザーに狙撃され海に沈んだ者の名を、ぽつりと呟く。しかし、返事など返ってくるはずもなく、その声は荒波の起こす音にかき消されていった。

「ちょ、そんな、やだよ？　冗談でしょ！？　マドカァッ！！！」

叫んでも同様に、むなしく轟音に声がかき消されてしまう。ミソラは徐々に頭を垂れて、うつむいた。それまでミソラの心にあった希望が一気にかき消され、再び絶望に満たされた。

「う……く……ぅっ……」

「……ミソラ、泣いてる暇があったら早くスバルを回復させてマドカを助けに行けるように――」

「やってるよ！！！」

シドウの言葉に、ミソラはガバッと顔を上げ、キッと睨みつけた。

「マドカが闘ってる時だって、戦闘を見ながら頑張って回復させようとしてた！　でも、出来ないんです！　何も、なにも……」

そう言うと、再びうつむいてしまった。アシッド・エースはそれを見てミソラのやつあたりを咎めることはせず、大陸に向き直った。マドカは撃墜されてしまったけど、それによって大陸もかなりのダメージを負い、今は大陸のコアとも呼べそうなものを露呈している。アシッド・エースはマドカの努力を無駄にしないためにも、マドカを安全に助けるためにも、そしてミソラを絶望から救うためにも、まずは大陸の心臓を破壊することが優先、と思い大陸に向き直る。

「さて、最後の仕上げだ。ブライ、やるぞ」

「……フ、あのイルカ女のことはそっちのけか。やってくれるな」

「アイツを助けるためにも、だよ。ほら、行くぞ」

アシッド・エースの言葉にブライは再び鼻を鳴らし、例の如く腕を後ろに引いた。それを見てアシッド・エースも攻撃の構えをとる。

その時だった。

「「……ッ！？」」

2人の表情が驚きで固まる。うつむいていたハープ・ノートは二人の異常に気付き、顔を上げ、そして2人と同様息を飲んだ。

3人の目の前で、ムー大陸が徐々にその破損個所を修復していた。先までの戦いで崩れ落ちた大陸の瓦礫が海からふわりと浮きあがり、まるでジグソーピースでもはめるかのようにくっつき、まるで何事もなかったかのように修復されていくのだ。その光景はさながらビデオの巻き戻し再生を見ているようなものであった。

「な、なに、それ……？」

ミソラが、まるで心が折れたかのように茫然とそれを見つめて呟いた。

「あれだけやって……みんな傷ついて……それでいまさら、そんなの……」

スバルの身を呈した行動も、マドカの必死の攻撃も、すべて何事もなかったかのように、大陸は回復していく。そして、最後の破片が本体にはまり、最初にこの海域に浮かび上がった時となんら変わらない、元通りの姿になった。

「……そんなの……酷すぎるよ……！！」

これほどまでに絶望的なことがあろうか。その場の全員がもう、体力にも限界が近づいている。そもそも体力がほぼ全快な状態でも太刀打ちできなかったのに、今何ができるのか？　それに、増援のマドカは撃墜されてしまった。この状況下で戦況が振り出しに戻るなんて、残酷にもほどがある。

そんなミソラの思いを嘲笑うかのように例の電波塔から毎度の如く、光が集中する。再び、あの大きな電波塔からレーザーが発射されようとしていた。しかし、あのレーザーを防ぐことができたのは、マ

リーン・ドルフィンのアクアウォールのみ。それでも最後の抵抗でアシッド・エースとブライが攻撃をくり出すが、もはや彼らの攻撃は大陸の電波塔を倒す威力すらなく、電波塔に当たって、それを壊すこともできずに消えた。

そんな目の前の2人の抗いを目の前に、ハープ・ノートは絶望しきった心で考える。自分に力があれば、こんなことにはならなかった、と。力があれば、スバルはいま自分の下に倒れていない。彼は、自分を何度も助けてくれたのに、自分はそれに対して一切答えられていない。そんな切なさと恐怖とで、全く動けずにその電波塔に集まる光を見つめるしか出来なかった。

ドォォオン！　と、何度聞いたか分からない砲撃の音が響き、彼らの乗る船に閃光が走る。目の前いっぱいに迫るその光を、彼らはただ見つめるしかなかった。

バチン！！

「「！？」」

そのレーザーが、急に目の前で爆発するかのように弾け、霧散した。霧散した後には、海水が持ち上がって造られた、１つの大きな壁があった。

「え……まさか！！」

ハープ・ノートが叫んだ刹那、船から見てムー大陸とは反対側の海面がザバン！　と音を立てながらつき破られて水柱が立ち上り、その柱の中から1人の青い人影が飛びだし、船の甲板に着地した。

「マドカ！！」

心からほっとしたようにミソラがその者を呼ぶ。マドカは、着地姿勢を解いて真っ直ぐに立ち、

ズシャッ、と音を立てその場に立ち膝をついた。

「……はぁ、はぁ、はぁ……」

マドカは苦しそうに息を漏らす。マドカはミソラには背を向けているため、ミソラに彼女の表情は見えなかったが、その吐息だけで彼女の疲労度は十分に見て取れた。

「マ、マドカ……！？」

「……み、みんな、大丈夫、だった……？」

呼吸も荒いまま、あえぎあえぎマドカは言った。結果的に彼女が一番疲労しているのに、それでも彼女は他のみんなのことを気にしていた。

「そ、それよりも、マドカ、あなたは大丈夫なの！？　……ううん、大丈夫じゃないよね！？」

「……ミソラちゃん、わたしの心配してくれるのは嬉しいけど、その想いはスバルくんに使ってあげて。今のわたしは多分、回復技も使えないから……」

「……う、……うん……」

ミソラが言われて再びスバルに向き合ったのを確認すると、マドカは苦しんだ険しい表情のまま、手のひらを見つめた。

（手足のヒレが……壊れちゃった……！）

悔しそうに心に呟き、見つめていた手のひらで拳を握る。

――「マリーン・ドルフィンは水を操る電波人間」という定義は、厳密に言えば間違いだ。

正確には「マリーン・ドルフィンはヒレを使って水を操る電波人間」である。

マリーン・ドルフィンそのものが水を操る能力を有するのではない。彼女の頭に3枚、腕に2枚、脚に2枚の計7枚あるヒレ、これに水を操る機能があり、ヒレがまるで水に指令を与えるアンテナのような役割を果たしているのだ。なんでこんな仕組みをしているのかといえば、それは役割分担のためである。

まず、脚の2枚は飛ぶ時に使われる飛行用。脚にそれを付けることで、効率よく上昇気流を発生させることができる。

腕の2枚は攻撃技を出す時に使われる攻撃用。「スイムドルフィン」や「エアロツイスト」などの技を操る際に腕の動きと技が連動していたのは、腕に攻撃用のヒレがついているためだ。

頭のヒレの内の左右の2枚は防御用。頭についているのは、体のどの方向にもすぐに出せるようにするためだ。

そして、頭から天に張り出すように突き出た最後の1枚はいわゆる

センサーである。大気中の水の流れを読むことができ、さらにはその流れを把握することで目の死角にいる敵の居場所も把握することができる。

このように、それぞれのヒレが役割分担することで飛行しながら防御も攻撃も同時に行えるわけだ。

マドカは、ミソラの声で顔を上げてレーザーに気付いたとき、とっさに腕と足を前に突き出して、つまりは空中で体育座りをするような体勢をとって防御した。その判断は、生物としての弱点である「頭」を守る、という意味では正解だったが、結果的に大失敗だった。そのせいで両腕両脚のヒレが破壊されてしまったのだから。それはつまり、今のマドカには空を飛ぶことも攻撃技を出すこともできないということ。防御用のヒレだけではそれこそ防戦一方になるしかない。だからこそ、マドカはミソラに、スバルの回復を急かしたのだ。

ハープ・ノートは、そんなマリーン・ドルフィンの事情は知る由もなかったが、それでも彼女の態度や行動で、彼女の状態は何となく理解できた。そもそも、あんなレーザーを真正面から食らえば誰だって無事では済まないだろう。むしろ、あそこまで動けるのが不思議なくらいだ。

それが分かるから、ハープ・ノートはロックマンの回復を急いでいるのだが、依然として技は発動してくれなかった。まるで、自分の中から技の存在そのものが溶けて消えてしまったかのように、その腕は何も成果を産まなかった。

「う……く……スバルくん……」

ポツリと、絞り出すように声を出す。

「こんなこと言うの、他人任せだってことは分かってるけど……もう一度、闘ってよ！　わたしなんかじゃなにも出来ないけど、スバルくんならきっとできる！　わたし、そのためなら何だってするから！　……だから……」

自分でも、それが無茶苦茶な言葉だってことは分かってる。何を言ったところで、再び自分が技を使えるようにならない限りどうにもならないことくらい、痛いほど分かってる。でも、言わずにはいられなかった。それは理性も理屈もかなぐり捨てた、感情むき出しの本能から出る、願いだった。

「……もう一度、一緒に闘ってよ……」

ドクンッ！！！

「！！？」

突然、銃で体を撃ち抜かれたような衝撃が体を駆け巡った。それが自分の鼓動だと気付くまでしばらくかかったほど、凄まじく大きな鼓動だった。

（まただ……さっきと同じ感覚……。　でも、さっきとは比べ物にならないほどに大きい……！）

もはや、ミソラには今、体の外がどんな状況なのか、分からなかった。任務も、ムー大陸も、船も空も海もソロもシドウもマドカも、全てのことが分からない。何も見えないし、何も聞こえない。感じるのは自分の中の鼓動のみ。

ドクン……

――いや、違う。もう１つ、別の鼓動も聞こえた。自分の中の鼓動と比べれば小さなものだったが、確実に聞こえた。

（……スバル、くん？）

その声が自分の口から出たものなのかも分からないが、声に出して呼んでみる。

ドクン……

その鼓動は、徐々にその間隔を短く、音を大きくしているようだった。

（……スバルくんなの？）

問いかけてもドクン、という音しか聞こえない。でも、もうミソラはそれがスバルのものだと確信していた。なぜそう分かるのかは分からないが、これは確実にスバルだ。

（……お願い……スバルくん！　みんなを助けてあげて！　わたしも一緒に闘うから！！　もう、スバルくん１人を犠牲になんてさせないから！！）

ドクン！

（わたしの希望、全部あげるから……！　だから……お願い、もう一回、）

リズムもタイミングも大きさも、すべてがバラバラだった２つの鼓動が１つに、

（――闘って！！！！！）

繋がった。

キィン！！

「「！！？」」

急に澄んだ音が聞こえてアシッド・エース、ブライ、マリーン・ドルフィンが振り向くと、それまでロックマンとハープ・ノートがいた場所が眩い光に包まれていた。

「な、なに!?」

彼らは腕で光をさえぎる。目を細めてそれを見つめていると、辺りから青とピンクの光が集まりだして、高速で渦巻きだした。まるで、ロックマンがファイナライズを使ったときのように光の渦がその眩い光を包み、隠した。そして――

ズドォン!

まるで爆発が起きたかのような轟音が響き、光の渦は辺り一面に衝撃波を撒き散らして霧散した。その衝撃波は、マドカが先の戦闘で造りあげた雲すらもすべて吹き飛ばしていた。

そして、その光が弾けた後には、

「……えっ!!?」

ロックマンをピンク色に塗ったような1人の電波人間が立っていた。

54、「そんなの酷すぎるよ」（後書き）

いやぁ、毎回思うけど、私ってキャラの戦闘への登場させ方、ベタですよねｗｗｗ　あと、今回の変身前の描写とか変身の仕方もベタだよな～ｗ

５５、２人の絆（前書き）

なんか、前半のテンポ悪っ！！　っていうか、とうとうやっちまったなぁ、私。あんまりこの変身、やらせたくなかったのに・・・

総合評価１００ｐｔ越え！　みなさんありがとです！

（７１６９）

→前話からの試み、文字数表記。あった方がいいですかね？

55、2人の絆

「な……あ、あれは……！？」

「……！！」

ＷＡＸＡ日本支部、技術部。その部屋にある大きなモニターを見上げながら、天地　守が呟いた。ヨイリー博士も、シドウのハンターを通して見える映像に、目を見開かせる。

現在、その部屋にはヨイリーや長官、ＷＡＸＡに残ったオフィシャルメンバー（ゴン太、ツカサ、ジャック、クインティア）、ルナ、キザマロの他に、ＷＡＸＡで働く研究員などが集まっていた。その場の全員が、モニターに映し出される映像に驚きを隠せないようだ。

「博士、これって……？」

博士の隣に立つハートレスが問いかける。このハートレスや天地は、ＷＡＸＡに直接務めるようになったわけではないが、今回の任務のために、とあるＷＡＸＡ内の組織の一員として一時的に集まったのだ。

「……分からない……分からない、けど……」

『――――思い当たる節が無いわけでもない、ですね？』

ヨイリーの言葉の続きを引き取って話す、声が聞こえた。声のした方をその場の全員が振り向くと、ヨイリーの目の前にエア・ディ

スプレイが出現し1人の女の子を表示していた。茶髪のロングヘアで、瞳は緑、ピンクと紫の中間辺りの色をした服を着ていて、顔の両サイドには蝶の形をした大きめの髪飾りをしている。

「そうよ。察しが良いわね」

『はい。あの、それで、わたしの出番かと思ってこうして出てきたのですが……』

ディスプレイの向こうで茶髪の女の子がヨイリーから目線をそらしながら、不安げに聞いた。ヨイリーは瞼を閉じて考えた末に、目を開いて言った。

「そう、ね。あんまり、新たにサテライトサーバーの管理者になったばかりのあなたを働かせたくはないのだけど……じゃあ頼まれてくれるかしら？

――アイリスちゃん？」

『は、はいっ！』

ディスプレイの中の女の子は嬉しそうににっこり笑って言う。

「それじゃ、２００年前のデータを探してもらおうかしら？　あな

たにとってもその年代のデータは一番なじみがあるでしょ？」

『はい、了解です！』

アイリスは返事をすると、眠るように目を閉じ、呟いた。

『サテライトサーバー、レベル３２……アクセス！』

途端にアイリスを表示していたエア・ディスプレイの右隣の空間にもう１つ同じ大きさにディスプレイが出現し、もの凄い勢いで数字とアルファベットの羅列を表示し始めた。常人にはチンプンカンプンなそのデータの羅列を、ヨイリー博士は真剣な目で追いながら周りのみんなに呼び掛けた。

「それじゃ、他のみんなはアイリスちゃんの補佐！　あれが何なのか、何が起こったのか、判明させるわよ！」

そう言いながら、ヨイリーは再びモニターに表示されたピンク色のロックマンを見つめた。彼らにとって、すでに出現しているものの正体を究明することは楽なはずだ。なにせ、彼らは無い技術（もの）を生み出すために創設された組織なのだから。そう、人工的な電波変換を実現するために併設された、ＷＡＸＡの組織――

「――Ｐｒｏｊｅｃｔ－ＴＣの名にかけて！！」

「『はい！！」』

天地、ハートレス、宇田海、アイリス、その他の研究員が同時に叫んだ。

「盛り上がっているところ悪いですが、あれについて、1つだけ分かっていることがありますよ」

全員が振り返ると、部屋の入口のところに体格のいい男が立っていた。

「……おじさま？」

ルナが呟くように男を呼び、ゴン太やキザマロ、ツカサ、ジャックといったスバルの友達たちがそれぞれ反応を示す。

「大吾さん……！！」

ヨイリーがその男を呼ぶ。対してその男は部屋を横切ってヨイリーの隣でモニターを眺めた。

「どう言うことなの？　なにか知ってるの？」

ヨイリーが大吾を見つめて問う。大吾はモニターを見上げたまま言った。

「知ってるもなにも、見れば分かりますよ。あれは……

スバルとミソラ、２人の絆、ですよ」

Ｌ？、
Ｔｗｏ　ｂｏｎｄｓ

「……な、なに……？」

マリーン・ドルフィンは後ろを振り返り、目を丸くしている。アシッド・エースとブライはマドカほど顔に出してはいないが、同様に何が起こったのか理解してないようであった。

「だ、誰なの……？」

その問いにも、目の前のロックマンは答えない。いや、もはや目の前の電波人間はロックマンと呼んで良いのかすら、分からない。
目の前のロックマンは、色が全身ピンクに塗り替わっただけではなかった。ハープ・ノートの頭についていた半球状のパーツと同様のモノがヘルメットに付いていたり、右腕の手首に白い腕輪を模したものが付いていたりと、細かい部分でも変化していた。スカーフにもマフラーにも見える白い布で口を覆い、余った部分を２本、背中に垂らして風になびかせていた。

>i206741396<

そのロックマンはゆっくりと歩を進め、マリーン・ドルフィンの隣まで来ると、立ち止まって完全修復を終えたムー大陸を見つめた。

「……あ、あの、あなた、……は……っ？」

急にマリーン・ドルフィンはぐらりと横に倒れかけて、なんとか姿勢を立てなおした。

「ぐ……うぅうっ！？」

急に体から力が抜け、同時に息苦しくなる。いくら息を吸っても肺がそれを取り込む感覚を得られず、はぁはぁと荒く息を吐くようになった。

「な、なに、これ……？」

一瞬、マドカは先ほど開いた体の「傷口」のせいだ、と思ったが違った。見回せば、アシッド・エースもブライも、マリーン・ドルフィン同様にその場に身を伏せ、ぜぇぜぇと息を荒くしていた。

『こ、これは……！？』

「ど、どうしたアシッド？」

シドウが何かを感知したアシッドに問いかけた。

『……そもそも電波体やウィザード、電波人間は、存在するだけで

微弱な電波やノイズを放出しているのですが……あの電波人間の放つその微弱な電波が、同様に電波の存在である我々を圧倒しているようで、それでこの私たちの異常は起きているようです……』

「……おい、それって俺たちがその微弱な電波に負けて威圧されてるってことか？」

『はい、もはや、あの電波体は存在が強すぎて、存在そのものに攻撃力を持つ……』

「……」

それを聞いていたマドカは、再びその電波人間を見上げた。すると、その電波人間は彼女が不安そうに見つめていることに気付き、マドカを見下ろして優しい眼差しで言った。

『大丈夫、心配しないで。……それと、ここまで闘ってくれてありがと、マドカ』

その電波人間から声が聞こえ、マドカは息を飲んだ。その声は、スバルとミソラが同時に同じ言葉を喋ったような、不思議な声だった。

その電波人間はマドカを見下ろしたまま、にっこりと笑いかけた。

『あとはまかせて！』

「……あ……」

マドカは、返事をしようとするも、声が出なかった。

『あ、でも1つだけ頼んでいい？　今のこのチカラはたぶんワタシ自身でも制御しきれないから、ワタシの技が船を巻き込んじゃうかもしれない。だから、キミの力でワタシから船を守ってくれないかな？』

「……」

マドカには、未だにスバルやミソラに何が起こったのかは分からない。なぜ目の前の電波人間が生まれたのか、なぜそばにいるだけで分かるほどの強大な力を持つのか。

でも、それでも、分かることはあった。

ミソラは自分の無力を呪い、自分のせいで倒れたスバルを想う。

スバルはそんな彼女をこれ以上悲しませたくないと、ミソラを想う。

そんな2人だからこそ、今の姿とチカラを手に入れられた、ということだけは。

マドカは頭(こうべ)を垂れて、うつむいた。

「……わかった。この船のことは任せて。絶対に、守り通してみせるから、」

マドカはなぜか心の奥底からこみ上げる安堵と興奮と嬉しさとで瞳を潤ませながら、頭を上げて笑顔で言った。

「――――頑張って！！　●●●●ふたりとも！！！」

そのロックマンはマドカの言葉に笑顔で答えてから真顔に戻り、口に巻いた白い布の下で軽くスゥッと息を吸った。

『行くよ……、ミソラちゃん！！』

ドゴンッ！！

突如、ムー大陸が巻き起こす嵐のような音を切り裂いて轟音が響き渡る。あとからバキバキという音とともに衝撃とヒビが広がり、瓦礫が大気中を舞った。

『ショックバスター！！』

声に反応して振り向くと、ロックマンがムー大陸の前に浮いてバスターの銃口を向け、すでにビルに匹敵しそうな太さのレーザーを発射しており、直後にドォン！　と着弾の音が鳴り響いた。

そこまで見て、マドカはようやく頭の処理が追いついた。彼女は船の甲板に痛々しく広がるヒビを見つめながら、その「ロックマンがいま何をしたのか」という考えを確信にかえた。確信は確かにしたものの、それでもマドカは納得した顔をせず唖然と目を丸くしている。あれほど派手でぶっ飛んだことをしたマドカにとっても、今のロックマンがしたことは並みの戦闘能力を逸脱していたのだ。

ロックマンはマドカの激励を受け、息を軽くスゥッと吸った後に何をしたのかと言えば、何のことは無い、ただ甲板を蹴ってジャンプし、空中に飛び出したのだ。その跳躍のために甲板を蹴る力が強すぎて甲板を蹴り割ってしまったまでのこと。攻撃行為ですらない、ただの移動行為で船をここまでの損傷を与えたのだ。

マドカは、ゴクッと生唾を飲み込んだ。先ほどのロックマンの、「自分の攻撃から船を守ってほしい」という言葉の意味がいま心から理解できた。技ですらない行動でここまで船を傷つけてしまう力を持つなら、本気で守らないと本当に彼らの戦闘の余波でこの船は

沈んでしまうかもしれない。

「ドルフィン、力を貸して。あと一息だから！　スバルくんもミソラちゃんも頑張ってるんだから、２人が十分に力を発揮できるように、わたしたちももう少し頑張ろう！」

『……』

マリーン・ドルフィンの隣に浮いているドルフィンはそれには答えず、唖然と空を見上げている。不審に思ってマドカもその視線を追って見上げ、息を飲んだ。

そこには、すでにボロボロの大陸が浮かび、それをまるで憐れむようにピンクのロックマンが見下ろしていた。大陸はほとんどの電波塔が折れ、壁は吹き飛んで内部が露呈し、ショートしたかのようにあちこちでバチバチと電流が走っていた。マドカが状況理解しているうちに、戦闘は一方的に進み、もう修復前と同じくらい著しく損傷していた。

『残念だったね、せっかく修復したのに、意味なくなっちゃって』

スバルとミソラを混ぜたような声で、ロックマンが呟く。たった一人で電波の要塞と戦ったのに、ダメージを食らった痕もなければ疲れた様子も全くない。

ドォン！　と音が響く。そんなロックマンに対し、ムー大陸は例の最も大きい電波塔に光を集束させ始め、即座にレーザーにして放った。そもそも巨大な機械の塊のような大陸にとって、内包するエネルギーを使えば、空気中の電波エネルギーをチャージする必要性はほとんどない。しかし、大陸はその内包しているエネルギーを本

来　宙に浮くために使っているため、使ってしまえば最悪の場合、そのままエネルギーを切らして墜落してしまう。だからこそ今まで使わなかったのだが、それを今になって使う辺り、大陸自身がなりふり構わなくなっているのが分かる。

　それに対してロックマンはおもむろに、ただ腕を前につきだすだけだった。直後にドンッ！　とレーザーが着弾する音が響く。ロックマンはただ右腕を前に突き出しているだけなのに、その腕に触れた瞬間レーザーは光の筋となって四方八方に霧散していく。電波要塞が攻撃のために自身も顧みずに放ったレーザー砲が、ロックマンが腕を前に突き出す程度の労力で無効化されていく。その時点でもう勝負は見えていた。どちらが上を行っているのかは、もはや明白な事実であった。

『……もうやめなよ、キミはワタシには勝てない』

　しかし、そんなロックマンの言葉が通じるはずもなく（言葉を『聞く』ことができるのかすら不明だが）、ムー大陸はロックマンにとっての「無駄な努力」を続ける。ロックマンはそんな大陸をまるで捨てられた子犬を見るような眼で見つめて、レーザーを受け止めていない左腕を天に突き上げ、

『……マシンガンストリング！！』

　振り下ろした。それと同時にロックマンに向けて放たれるレーザーが文字通り破竹の勢いで両断されていき、砲口ごと切り裂いた。電波塔の砲口が切り裂かれたときにどこかの配線も切れたのか、直後に爆発が起きた。それでも大陸は諦めず、残った電波塔にエネルギーを集める。しかし、それもロックマンが腕を縦に横に振り回すと全て切り裂かれた。

本来、マシンガンストリングは弦を飛ばして敵に巻き付け拘束し、身動きをとれなくするための技だが、今のロックマンにそんな小手先をする必要はなかった。弦の強度を極限まで上げて、細さと強度を両立できれば、その弦はどんな刃物よりも鋭く切れる刃に成り得る。今のロックマンはその強度のある弦を飛ばしてレーザーや電波塔を切り裂いているのだ。

ロックマンはそのまま一瞬で大陸に近づくと、その拳を思いっきり振り下ろし、ムー大陸に打ち込んだ。ムー大陸はその愚鈍で巨大な図体をされるがままに吹き飛ばされ、海に突っ込んだ。その大陸が海に突っ込む衝撃で津波が起き、数十メートルの波が波状に広がる。その波が広がった先にはもちろん任務の仲間が乗る船もあった。

「……ッ！！　ア、アクアウォールッ！！！」

マリーン・ドルフィンはその波を見てとっさに叫び、同時に三度（みたび）船の前に水の壁ができた。しかし今回はそれに留まらず、壁は上下に伸びて船をカプセル状に包み込んだ。その壁に津波が突っ込み、壁の中で船が突き上げるように振動したが、なんとか壊れずには済んだ。

『……終わりだよ』

ぽつりと、ロックマンが上空から大陸に向けて呟いた。海に突っ伏したムー大陸に、エネルギーを溜めこんで紫に輝くバスターの銃口を突き付けながら。

『シューティングパルス――』

ロックマンの声に呼応されてバスターの内部のエネルギーはその力を爆発的に上げ、その漏れ出すエネルギーはその海域のウェーブ

ロードですらも乱し、海水はまるでそれがロックマンから逃れようとしているような動きで吹き飛ばされていた。

『ブレイカーーー！！！！』

ズドォォン！　と音と衝撃が響く。上空のロックマンからムー大陸に紫色の光が降り注ぎ、荒れ狂う風圧が周囲を襲う。もはや、そのレーザーはムー大陸を破壊するだけではとどまり切らず、海底を数百メートルに渡ってえぐり取りながら突き進み、ようやくおさまった。

技の影響で海はしばらく荒波で覆い尽くされた。それはやはりサテラポリスの船も例外ではなく、荒波にもまれながらもなんとかマドカの作り出す水の壁の中で耐えていた。

「……ど、どうなったの……！？」

だいぶ船の揺れが収まって来てから、マドカは壁を消して顔を上げた。

『ありがと、マドカ。キミがいたおかげで、全力で戦えたよ』

顔を上げたその目の前に、ロックマンが立っていてマドカを見下ろしていた。ロックマンは未だにピンク色の謎の変身をした姿のままではあったが、特に怪我はなさそうだった。と、いうよりあれだ

けの戦闘をしたと言うのに、ロックマン自身には一切の傷が無い。その辺はもはやさすがと言うべきなのだろうか。

「……ム、ムー大陸は！？」

マドカはまだ状況が呑み込めず、乗り出して聞く。ロックマンはそれに答えるようにくいっと首を後ろに向ける仕草をとった。それに倣ってマドカがロックマンの背後を見ると、そこには海面のところどころに黒い瓦礫が浮いている光景があった。中には電波塔の端っこのようなものも見える。

『……ムー大陸、完全に沈黙しました……』

前方にいるシドウの隣のアシッドが呟いた。

「……、やったの？」

マリーン・ドルフィンの問いかけに、ピンク色のロックマンは笑顔で頷いた。

「そっ……か……終わったん……だね……」

目で見て分かるほど急に、マリーン・ドルフィンの全身から力が抜けたかと思うと、彼女の体を光が包み、元のマドカに戻るとその場にドサッと倒れ込んだ。

『ッ！？　マ、マドカ！？』

ロックマンがとっさに助け起こそうとマドカに近づいたが、マドカは左腕を上げてそれを制した。

「だ、大丈夫。あそこまで電波変換でパワーを出したの、本当に久しぶりだったからちょっと疲れただけ……」

マドカはよろよろと立ち上がりながら言う。そんなことより、とマドカは続けた。

「やったね、2人とも！　本当にすごかった！　やっぱ二人の絆は一級品だね！」

嬉しそうに微笑みながら、マドカは言った。

『う、うん……ワタシもあそこまで出来るなんて思いもしなかっ――――

キィン……

「ミソラちゃん、ボクから離れてッ！！！」

急に澄んだ音が響き渡り、同時に今までスバルとミソラの二人分の声を出してきたピンクのロックマンの口からスバルの叫び声だけが響いた。直後にロックマンを光が包み、パッと弾けると、元のロックマンとハープ・ノートに戻った。

「「え……！？」」

急な事態にハープ・ノートもマドカも唖然と声を出す。その目の前で、

ドスッと、どこからともなく飛んできた青い光がロックマンを背中から貫いた。

「が……はっ……」

ロックマンは貫かれた衝撃で肺から空気を全て吐き出し、そのままその場にうつ伏せに倒れ込んだ。

「な……か、……あ……」

ミソラは突然の事態に対する驚きとショックとで頭が真っ白になり、まともに声を出すことすらできない。

「……な、んで……？」

ようやく出すことができた言葉。しかし、頭は未だに状況を理解してくれない。

「やっと……やっと戦いが終わったのに……なんで最後にこんな……？」

ハープ・ノートは真っ白な頭でなんとかロックマンの元まで足を動かし、ロックマンを助け起こした。

「スバルくん……スバルくーーーん！！！」

ミソラの悲痛の叫びが、ようやく平和になった太平洋の青空に響いた。

55、2人の絆（後書き）

・・・戦いが終わっても、私の小説はシリアスなのであった・・・

いろいろイラスト描いてるわけだけど、実質2回目の挿絵ナリ☆

誰かセンスをくださいｗｗｗ

ムー大陸がまるで生き物であるかのような描写が多かったですが、これはちゃんと狙いがあってやってます。まぁ、ただ純粋にこうした方が書きやすいって言うのもありますけどｗｗ

ヨイリーの大吾の呼び方はほぼ唯一「さん」です。打ちミスではありません。

56、もうひとつの流星（前書き）

しかし・・・この小説の最初の展開読み返してみたんですがね・・・？

ベタすぎるだろ。

あと、下手すぎるだろ。

うん。今の私が考えてるこの先の構想だとミソラが転校してきた意味ないし、7～10話の4話に渡って説明臭い単調な話ばっかり続くし。8人VS8人の大人数同時対戦は、最初の私にしてはそこそこの珍しさはあった気もしますが・・・

そして、ついでに50話で暁さんがいいこと言ってる雰囲気のシーンがあるますけど、言ってること安い・・・orz

今も全く上手い展開や描写が出来てると言い難いですが、頑張りますので許してね（↑まとめ方まで下手なのであった）

L?、

another shooting star

（4655）

56、もうひとつの流星

「あ、カモメ！」

と、ピンクのパーカーの付いた服を羽織った赤紫の髪の少女が叫んだ。そして腕を伸ばすと、カモメはその少女の腕に留まった。

「見て見て、グレイ！　可愛いよ～？」

不意にピンクの少女が、隣に座る赤い服の少年に話しかける。するとその少年は膝の上に頬杖をついたまま、つまらなそうに細めた眼を女の子の方に向けた。

「……んなの、興味ねぇよ……」

「……そう？　こんなカワイイのに？」

「はぁ……ソプラお前、そんなの可愛がってどうすんだよ……」

「……可愛いからかわいがるのが、何か不思議なことなの？」

「まぁ、そうなんだけどよ……。っていうか……」

そう言ってグレイは背後を振り向く。現在、2人はウェーブロードの上に当然のように座っているのだが、その背後ではカモメの群れが縦横無尽に飛び交い、ピャアピャアと鳴き合っていた。

「ムー大陸も消えて……動物たちももどって来てるんだな……」

言われてソプラはカモメの群れから目を離して眼下に広がる海に目を凝らす。すると、その海中で魚が優雅に泳いでいるのが見えた。

「うん……じゃあ、この子も同じなのかな？」

腕に留まったままのカモメを膝に下ろしながらソプラが言った。

「そうなんだろ？　ホラ、帰るぞ」

グレイはそう言いながらウェーブロードの上に立ちあがった。ソプラは彼を見上げて残念そうに叫んだ。

「もう帰っちゃうの？」

「帰るさ。遊んでるわけにもいかねぇしな」

「でも、まだグレイの探し物っていうのが見つかってないじゃん……」

それを聞いて、グレイは眉をひそめながらソプラを見下ろした。

「いや、見つけたさ。スバルクンのお陰でな」

ソプラは目を見開いてグレイを見つめ返した。

「え、うそ？　いつの間に？」

「ま、そういうことだから帰――」

「でも、見つけたんならなんで今取りに行かないの？」

それでも食い下がらずに質問を飛ばすソプラ。グレイは再びため息をついた。

「取ろうと思えばいつでも取れる。それに、奴がこれからどうなっていくのか見てみたいしな」

「なにそれ？　わけがわからないよ」

「いいさ、分からなくて。ほら、行くぜ」

「むー……」

どことなくドライな態度をとるグレイに、ソプラは唇をとんがらせた。ソプラの膝の上で、カモメまでカチカチと怒ったようにくちばしを鳴らしている。

「じゃあ、もう1つ質問、いい？」

終わりの見えないソプラの質問攻めに、グレイは3回目のため息を吐いた。

「今度はなんだよ？」

「あのマリーン・ドルフィン、って子、人間名はマドカ、だっけ？　あの子のコピーはなんで造ってないの？　造ればかなりの戦力になるんじゃない？」

「い、いや、造ったんだけどよ……」

戸惑い気味に目をそむけながら答えたグレイに、ソプラがきらきらさせた瞳で乗り出した。

「え、造ってあったの？　会わせて！」

「あー、いや、造ったのはいいんだけどよ……」

言いながらグレイが指をパチン、と鳴らした。すると、彼の背後に円柱状の白い光が立ち昇り、その円柱の光が細くなって消えると、そこには青い髪をして水色のワンピースを着たマドカそっくりの女の子が目を閉じてたたずんでいた。

ほぼマドカと同じなのだが、唯一違うのは、本物が首から胸にいつも下げていた雫のペンダントが無いことだ。

その女の子はまるで深い眠りから覚めるようにゆっくりと瞼を開

き、本物と同じ紫の瞳でぼんやりと目の前を見つめて、目の前の男の存在を確認すると目を見開いて、

「グレイ～～～～！！　会いたかったよぉぉおおおおおっ！！！」

「ぎゃぁぁあああ！！？」

急にぎゅっとグレイに後ろから抱きついた。ソプラは想定外なその行動にパクパクと口を動かすだけだった。

「……と、とまぁこんな感じに性格が破たんしちまったわけｄ　ぐおぉぉおおおッ！？」

マドカのコピーに抱きしめられたまま、あえぎあえぎ声を出すグレイ。一体どのくらいの力で絞められているのか、グレイの体からミシミシという悲鳴が聞こえる気がする。気のせいだ。たぶん気のせいだ。気のせいだと願いたい。

（グレイ……それ、破たんしてるの性格だけじゃないと思うんだけど……）

ソプラは状況の理解に苦しむ頭でなんとかつっ込んだ。

心なしか、マドカのコピー体の胸がグレイの背中辺りに当たっている気もするのだが、そもそもそういうのに欲情するグレイではないし、どの道締め付けられる痛みでそんなことを気にしている場合ではなかった。

「もぉ～～、ず～～～～っと呼んでくれなくて、寂しかったんだぞぉ！？」

そう言いながらグレイに頬をすりすりさせるマドカコピー。彼女にとってはこれもただの愛情表現らしい。しかし、グレイにとっては、

「うぎゃぁぁあああ……！！」

……苦痛でしかなかった。

「マ、マリー、いい加減離せ……ッ！！　そ、そろっと、三途の川が見えそうだ……ぁぎゃぁぁぁあああ！！」

「……しょうがないなぁ……」

マリーという名前らしいそのマドカのコピーは、名残惜しそうに腕をぱっと腕を離した。そうして解放されたグレイは四つん這いになってゲホゲホとせき込んでいる。

「……で？　何して遊ぶ？」

「は、はぁ？　遊ぶ！？」

ソプラに背中をさすられながらなんとか気管の調子を整えたグレイは、四つん這いのままマリーを振り返って聞き返した。

「うんっ！　いままで私を放っておいたバツ！」

言いながら、ビシッ！！　と指をグレイに向ける。

「……ひ、人を半殺しにしておいて、良くそんなこと言えるな……」

「えぇ～？　この前は『三回回ってヒャッハー！』ってやってくれたのに！？」

「おぶっ！？　なんだそれ！？　やった覚えねぇし、そこはヒャッハーじゃねぇだろ！」

「いいからやってよ！」

「やらねぇよ！　っていうか記憶をねつ造すんな！」

「え～、やってくれないの～？」

「いいからお前もう帰れよ！　帰って寝てろ！」

「やだやだやだやだ！　だいたい、グレイったらいつもそうやっ――

――

グレイは不意に、マリーの額に人差し指の先で触れた。すると、その接触面が光り出して一気にマリーの全身に広がり、彼女を包むとパッと消えた。

「……あとで相手してやるからよ」

消えたマリーに向けてぽつりと呟くと、グレイは再びウェーブロードの上に腰かけた。

「……疲れた」

今までで一番大きいため息交じりに呟くグレイ。

「……わたしも」

見てるだけで疲れて来るマリーの性格に、さすがのソプラも圧倒されていた。

「……でも、なんであんな風になっちゃったの？　わたしは比較的ちゃんとできてるじゃん」

質問されたグレイは、少し間を取ってマリーの襲来によって乱された心を落ち着かせてから答えた。

「……オレの造るコピーは2タイプあって、1つはメテオGの中にあった記録（ログ）を使うタイプ、そしてもう1つが『マイナスの思念波』を使う場合だ。このマイナスの思念波で造ったのが、オレ自身とお前、そしてマリーなんだが……」

グレイは腕を後ろに伸ばしてウェーブロードに手を突き、自身の体の支えにしながら空を見つめた。

「オレという例外を除くお前（ソプラ）とマリーは本物のかつての思念、つまりは本物の昔の性格と同じになるわけだ。……つまり、水瀬（みずせ）マドカは元々、あぁいう性格だった、ってことだな」

「あぁ、なるほど、あぁいう……って……」

ソプラはたらたらと汗を掻きながらグレイを見つめた。

「マジですか？」

「あぁ、オレも信じがたいけど、それしかない。あれが現在のマド

カになる前のマドカだ」

グレイもソプラも、マドカとは直接話をしたことは無いが、それでも遠くから見てるだけで彼女の性格は知っている。少なくとも、さっきのマリーのようなハジけた性格ではない。むしろ真逆だ。

「なにがあったらあそこまで変わっちゃうの……？」

「さぁな。オレらには関係のない話だ。……オレらには、な……」

グレイは徐々に語気を弱めた。そんなグレイを見つめて、ソプラは悲しそうな顔で膝のカモメを見つめながら、切り出した。

「ねぇ、グレイ？　グレイは、その……やっぱりスバルくんたちとは争っちゃうの？」

「……質問の意図が分からねぇな。どういう意味だ？」

ソプラは頭を垂れて、悲しそうに眼を細め、弱々しい声を出した。

「グレイだって、傷ついてるんでしょ？　グレイだって、平和が好きなんでしょ？　元がスバルくんのグレイが、人を傷つけるのを好きでやるわけないもん。グレイのやろうとしてることは、どんなに頑張ったって最後にはキミが消えちゃうんだよ！？　そんなのわたしは嫌だ！！」

目に涙を浮かべて、噛みつくようにグレイに向けていうソプラ。対してグレイも目を細めた。

「そうか、マリーが元々のマドカの性格してるなら、お前もそうだ

よな。お前も、1人で泣いてたころのミソラと同じなんだよな……。そのせいで、お前を傷つきやすい性格にしちまった……。悪い……」

グレイらしからぬ細い声で、謝罪した。そんなグレイを見て、ソプラはなおさら声を張り上げる。

「わたしは自分のことじゃなくて、グレイのこと言ってるんだよ！？　絶対、スバルくんたちと分かりあう道だってあるはずだよ！　なにもこんな、親も子も傷つく方法じゃなくても……！！」

「……無理だ。オレとアイツじゃ、生きてる世界が違いすぎる。それに見ただろ？　さっきの2人の変身を。あれのせいでオレらとのリンクはほとんど完全にシャットアウトだ。あいつらはオレらと痛みを共有するチャンスを失っちまった。その時点でもう、真に分かりあうのなんて不可能になったんだよ」

「でも……でもっ……！！」

喉の奥から嗚咽を漏らしながら泣きじゃくるソプラの頭に、グレイは腕を伸ばして撫でた。

「スバルたちも、オレたちから完全に切り離された方が幸せなんだよ。これでいいんだ。そんな幸せに逃げたからこそ、オレはアイツが憎くもあるんだがな……！」

最後のセリフの語気を強めたグレイを、ソプラは泣いて真っ赤に腫れた目で見上げる。

「いくぜ、ソプラ。ここにもう用はねぇ」

「……ひぐっ……最後にひとつだけ聞かせて……」

嗚咽を漏らし立ち上がりながら聞いてきたソプラに、グレイは無言で振り返った。

「キミは……今の状況どう思ってるの？　嬉しいの？　悲しいの？　腹立たしいの？」

「オレは……

グレイは一度開いた口をつぐみ、言葉を選ぶように再びゆっくりと開いて続きを言う。

「オレは生まれついての怪物だぜ？　怪物に心なんてあるかよ」

「……」

ソプラはカモメを胸に抱え、無言で涙を手の甲で拭ってから言った。

「……ウソだね。そんな悲しそうな顔してる人に心が無いわけない」

「……」

今度はグレイが無言になる番だった。ソプラの言葉に対して何と返したら良いかすら分からない。

「……帰るぜ」

やっとそう言って、グレイは後ろを振り返った。ソプラはこくんとそれに頷いた。そして目に残った涙を指で拭いながら歩き出したが、ドスンとグレイの背中にぶつかりよろけた。ソプラは指で目を擦っていたせいで前が見えず、グレイが急に立ち止まっていたことに気がつかなかったのだ。

「な、なんで急に立ち止まるの？　どうしたの、グレイ？」

しかし、その問いかけに沈黙を守るグレイ。ソプラは不審に思い、グレイに視界を遮られて見えなかった彼の見つめる先を見た。そして、息を飲んだ。

グレイの目の前で、いちごミルク色の腰まで届く長い髪をした少女がウェーブロードの上に佇んでいた。

「ようやく会えましたね、グレイ・サリチュード……！！」

その少女が鋭い目つきでグレイを見つめながら、しかし穏やかな声で言う。グレイはまるで魂でも抜かれたように茫然とした顔をしていたが、急にニタァ、と不気味な笑みを顔全体に広げた。

「よォ、久しぶりだなぁ、

綾原　ヒカリさんよ！？」

56、もうひとつの流星（後書き）

綾原ヒカリは、22話と51話に出てきたピンク色の長髪の少女と同一人物です。

はい、そうです、マドカは幼少のころ、あんな性格でした。現在とのギャップをなるべく出すため、ミソラを超える元気なキャラ、ウザいくらいの元気なキャラを目指しています（笑）

ソプラのカモメは、そうです、あのカモメです。カモメ自体はミソラとの区別がつかずにすり寄ってる感じです（笑）

57、孤独の光（前書き）

L?、

Light of Solitude

（5477）

57、孤独の光

そのピンクの長い髪の少女は、グレイに呼ばれるとムッと口をとがらせて、一層眼力を鋭くした。

「……フルネームで呼ばれるのは好きじゃないと、何度言えば分かるんですか？　グレイ・サリチュード」

「それはお互い様だっての、何度言えば分かるんだ？　オレも自分の名前が嫌いなんだよ。っていうか、他人にはフルネームで呼ぶなって言っといて、自分は他人をフルネームで呼ぶとは、ずいぶんと自分に都合がいいですな、お嬢さんよ？」

グレイの言葉に鋭い目つきのまま、その少女……綾原（あやはら）ヒカリは眉をひそめたが、やがて肩を落とした。

「良いでしょう、私はあんまり他人（ひと）の名を、姓（せい）と名（めい）のどちらかだけで呼ぶのは慣れないのですが……グレイ、でどうでしょう？」

「はいよ。そんで、なんか用かよ？　世間話でもしに来たのかい？」

相変わらずの不気味な笑みでヒカリを見つめながら、声を上ずらせて言う。先ほどのソプラに見せたどこか寂しげなグレイは、今の彼の中のどこにもいなかった。

「……そうですね、端的にいえば、世間話（それ）です」

「はぁ！？」

グレイは思わず笑みを解いて驚きの表情に変える。冗談のつもりで言ったのだが、まさか本当にその通り、と来るとは思わなかった。

「先日の、ＷＡＸＡでの爆弾騒動と、今回のムー大陸復活の事件…
…この二つを『世間の出来事』とするのなら、ね」

言葉を重ねるように、ヒカリは言う。それを聞いたグレイは、再び顔に笑みを戻した。

「あぁ、なるほどねぇ？　しっかしまぁ、よくもやってくれたもんだよなぁ？　オレのクリムゾン一個、壊してくれちゃって。しかも、スバルたちの力量試しに使われたと来たもんだ」

それを聞いたヒカリは、それまでの鋭い目つきがまるで嘘だったように穏やかにクスッと笑った。

「そう言うあなたもあの騒動を起こした目的には、時間稼ぎという目的の他にあの子たちが『どこまでやれるか測る』という目的があったのでしょう？」

言われて、グレイはムッと口をとがらせる。それを見たヒカリはグレイを勘繰るように細めた眼で彼を見つめた。

「やはり、あなたは彼らのことを――」
「うるせぇっ！！　てめぇは何が言いたい！？」

突然大声でどなられてヒカリは驚いたように目を見開いた。彼女は常に穏やかな表情を浮かべているため、それはかなり珍しい一面だったのかもしれない。
ヒカリは一瞬浮かべた驚き顔を普段の表情に戻すと答えた。

「別に、何も？　そうですね、ただ１つ忠告しておくとすれば――

急に、スッとグレイの喉元にオレンジ色の刃が突きつけられ、グレイはゾクッと背筋が凍るのを感じた。ヒカリはグレイの数メートル先に立っていたのに、気がつけば目の前にいてその手にオレンジに光る刃を握り、それをグレイに突き付けていた。

彼女の持つその武器は、どちらかと言えば槍に近い。オレンジ色の光が、陸上競技の投てきで使われるような槍を形作っており、ヒカリはその槍の中央部を握って刀のように突き付けていた。

しかし、そんな謎の武器を突きつけられただけならグレイは何とも思わない。彼を圧倒したのは他でもない、ヒカリ自身だった。彼女は目測にしても小学6年生~中学2年生の女の子なのに、まるで幾多の死闘を潜り抜けてきた猛者のような凄まじい殺気を放っているのだ。先ほどの鋭い目つきですら可愛く思えて来るほどのその殺気に、さすがのグレイも威圧されて手が震えだす。

「――あの子たちに酷いことをしたら、私がそれを許しません……！！」

グレイは震える手で拳を握り、手が白く見えるまで力強く握りしめてようやく震えを止めた。

「ク……」

己の震えていた拳を見つめてうつむいていたせいで、グレイは顔が見えない。ヒカリは怪訝そうに再び眉をひそめた。

「……？　グレ――」

何かを呟いたヒカリの言葉を、金属と金属がぶつかり合う、ギィン！　という音が呑み込んだ。グレイがいつの間にかその手に握っていた青く輝く剣で、ヒカリのオレンジの槍を突き上げるように弾

いたのだ。

「クハハハハハッ！！　そいつは無理な相談だ！　状況が分かってねぇのか、え！？　綾原よぉ！！」

槍を弾かれて体勢を崩したヒカリは、そのままウェーブロードを蹴って後ろに跳び、体勢を整えた。地に両脚と片手をついたヒカリが顔を上げたその先に見たのは、背後の空間に大量に青白い剣を浮かべたグレイの姿だった。

「いつもお前はオレに攻撃すらしてこねぇ……。だが、お前にオレを殺す気が無くても、オレはお前を殺す！」

叫ぶのと同時に手に握った剣をヒカリに向けると、彼の背に浮かぶ剣の大群がまるでミサイルのように大気を切り裂きながら彼女に迫った。

ヒカリはそれを見ても尻ごみもせず逃げもせず、ただ握った槍を構え直し、目を閉じた。

途端に、ギギギギン！　と連続して堅い音が響く。ヒカリがそのオレンジの槍を、剣舞を想わせる動きで振り回し、グレイの飛ばして来る青い剣を撃ち落としていた。
目を閉じたままで。

「な……コイツ……ッ！！」
「目で見てしまえば、その目で見た情報にしか対応できなくなります」

見れば、ヒカリが剣を次々に避けつつ槍で叩き落としながら、口を動かしていた。相変わらず瞳は閉じたままだ。

「なら、目を閉じて光を感じ取ればいいだけのことです」

言葉の直後にウェーブロードの上にパラパラと破壊された剣の破片が落ちる。彼女は瞼を開き凛とした目で、グレイを睨むように見すえた。

「……く、は……相変わらずやるねぇ……。だけどな……？」

グレイが言いながら手に握った青い剣を頭上に掲げると、ヒカリの周りの空間の至るところがグニャリと歪み始めた。

「！！」

ヒカリが目を見開くその目の前で、歪んだ空間は瞬く間に青白い剣を形成し、彼女はその剣たちに球状に取り囲まれていた。

「全方位から一度に攻撃しちまえば対応しようがねぇよなぁッ！？」

間髪を容れずに、グレイが天高く掲げた剣を、目の前の見えない物を切り裂くように振り下ろすと、ヒカリの周りの刀は一斉に彼女に迫った。

ギィィィン！！　と刃が肉を切り裂いたには程遠い音が響く。直後にピシピシと音を立てて彼女を襲った剣にヒビが入っていき、パキン、と音を残して剣たちは崩れ去った。

崩れ去った剣の弾幕の向こうには、ヒカリを包みこむように球状のバリアが張ってあった。数える事を知らないほどの剣の弾幕を受けたというのに、そのバリアには傷1つ付いていない。

「……全方位からの攻撃など、全方位を守れば済む話です」

オレンジの球の中でヒカリは腕を左右に広げている。その腕でバリアを張っているのだろう。彼女の声は、バリアを通しているためくぐもって聞こえた。

……「全方位からの攻撃など、全方位を守れば済む」。理屈上はそうだ。しかし、過去に同じ技を使われたロックマンは、オーラを使って全方位を守ってもあっさりと破られてしまった。仮にも電波人間が、仮にもバトルカードを使っても防げなかったその攻撃を、目の前の少女は生身の身体で、何の力も借りずに自分のチカラだけでそれを防いでみせた。

この少女は、一体なぜこのような力を持つのか。グレイはそれを考えても答えが見つからない。

「……あなたなど、能力という玩具(おもちゃ)をもらってはしゃぐ子供にすぎません。そんな貰い物のチカラ、私には通用しませんよ」

ヒカリのチカラに考えがとらわれていたグレイは、それを聞いてハッと目を見開いた。

「てめぇ、気付いてたのか……！？」

「えぇ、あなた自身の正体も、あなたの力の正体も、あなたがこの先たどる運命も」

「くっそ、ますます　いけ好かねぇ奴だな……」

グレイは悔しそうに呟く。対してヒカリは冷静に淡々と話す。

「……もう一度言います。星河スバル、響ミソラといったこの世の平安を守る力を持った者たちを傷つけることは、この私が許しませんよ」

言われてグレイは怪訝そうにヒカリを見つめ返した。

「……は、はは、そう思うんなら、オレがそこまでする危険人物だって分かってんなら、今ここでオレを殺(や)ればいいじゃねぇかよ。そんだけの力があって、なぜ俺を殺さねぇ!?」

急に語気を強め、叫ぶように問いかけるグレイ。その言葉に、ヒカリは悲しむかのようにうつむいた。

「……それは禁止事項(タブー)なんです。未来を知る者は、世界の命運にかかわる者を殺してはいけないんです。それにかかわる者だと分かってその者を殺せば、未来は変わってしまいますから……」

それを聞いて、グレイは信じられない面持ちでヒカリを見つめた。

「……は？　てめぇ、まさか時を――」

「違います。私は時を超える力など持ち得ていませんよ」

「じゃあ、お前何者(なにもん)だよ!?」

「……」

突然、ヒカリは腰を低くして右手を軽く引くと、その右手の手のひらにオレンジ色の眩い光のエネルギーが溜まり始めた。その光は、始めはビー玉のような小さな球だったが、一気にその大きさをボウリングボウル大にまで引き上げた。

「あなたが知る必要などありません……！」

グレイはそのあからさまな攻撃態勢を見て、わずかに顔をひきつらせた。

「おや？　オレを殺せない、と言ったのは聞き間違いだったのかなぁ？」

「いえ、あなたを戦闘不能に追い込むだけなら問題はありません。私の忠告を聞けないというのならもうその意志から砕くしかありません」

グレイは自分を倒そうというその発言をまるで喜ぶかのようにニヤッと笑みを浮かべた。

「はん、やりゃあ出来んじゃねぇか！　お前は強いのに戦意のかけらも見えなくてムカムカしてたところだ！　これで全力で叩き潰せるってもんだ！」

喚きながら、グレイは右腕を銃のように前に掲げた。その手のひらにこちらは青白いエネルギーの光が溜まり、球の形を成していく。

それに対して、ヒカリはいつもの穏やかな表情でニコッと笑い、答えた。

「やってみなさい。キミにできるのならね」

グレイも一層ニタリと笑って、

「やってやるさ……！　いくぜぇっ！！」

ドゴン！！　とグレイの言葉の直後に轟音が響き、ヒカリからは

オレンジ、グレイからは青白い色の、極太のレーザーが発射された。
二つの光は真っ直ぐに数メートルの距離を進んで――――

バチン！！
と、相殺されて消えた。
――――ソプラの両腕によって。

「「！？」」

ヒカリ、グレイの両名が目を見開く。ソプラは両腕を左右に広げてそこに佇んでいる。二つのレーザーのぶつかり合う地点に割り込んでその腕で技を打ち消したのだ。ソプラもグレイほどではないが人外な能力を持ち得ているのである。

しかし。

「はぁ、はぁ……」

彼女の息は荒い。それに、よく見るとその手にはめたミソラと同じピンクのグローブはレーザーの勢いで吹き飛んでソプラ自身の手を露呈し、その手のひらも赤く焼けただれていた。
人外な能力は持っていてもそれはあくまでグレイに生み出された恩恵で手に入れただけで、言ってみればグレイのついでの能力。ヒカリやグレイといった真に人間離れした能力者の攻撃には耐えられないのだ。

「うぅ……っ！」

ソプラはズシャッと音を立ててその場に座り込んだ。焼けただれたその腕をかばうように背を丸めている。

「ソプラ、お前何やってんだ！？」

グレイは蒼白な顔で問う。ソプラは腕の痛みのせいか汗だくになった顔を上げて答えた。

「……こ、こんなところで、たたかっちゃダメだよ……。こんな無意味な戦いで、グレイが傷つくなんて、納得できない……」

「じゃあ、お前は傷ついていいのかよ！？」

グレイはソプラの赤黒い手のひらを痛々しそうに見つめながら言った。

「ご、ごめん……でも、闘うのはダメ。そんなのわたしは見たくない」

「……分かったよ。止めりゃいいんだろ、止めりゃ」

はぁ、と何回目か分からないため息を漏らし、グレイは言った。そしてヒカリに向き直る。

「綾原、悪いが今日はこの辺にしといてくれ」

「はい、その子に免じて今回はそうしておきましょう」

ヒカリはその感情の読めない表情で淡々とグレイに告げた。

「言っとくが、お前がこの先、どれだけさっきのと同じことを言お

うと、オレは今の計画を止める気はねぇからな。それだけは覚えとけ」

「……なら　あなたも、私はずっとあなた方を監視している、ということをお忘れなく」

グレイは答えの代りにチッと舌を鳴らし、背後の空間を裏拳ぎみに殴りつけると、まるで見えない壁が壊れたように空間がガラガラと音を立てて崩れ落ち、黒い穴が出来上がった。グレイは軽く後ろのヒカリを睨みつけてから、その穴に入っていき、姿が見えなくなった。

ソプラも両手をかばいながらぶるぶると立ち上がり、その黒い穴をくぐろうとした。

「待ってください、ソプラ・サリチュード」

ソプラはゆるゆると振り返った。

「なんですか？」

ヒカリは凛とした瞳でソプラを見つめて聞いた。

「あなたは、グレイと比べるとだいぶ落ち着いた性格のようですが、いつまであの子に追随（ついづい）していくつもりですか？　あなたのような人間があのような人間について行っても、傷つくばかりですよ？」

ソプラは痛みで細めた瞳をヒカリに向けて答える。

「それでも、グレイはわたしの親みたいな存在なんです。グレイがわたしを造ってくれましたから……。それに、わたしには、グレイのところしか居場所はないんです。だから……だから……」

ヒカリは相変わらずの凛とした目でソプラを見つめ、ソプラは依然として痛みに細めた目で見つめ返す。数秒の空白ののち、ソプラはぺこりと頭を下げた。

「……失礼します」

言ってソプラは黒い穴をくぐり、そして闇に溶けるように見えなくなった。そして、直後に穴は巨大な生物が口を閉じるように閉じ、あとには元の何もない空間があるだけだった。

「……ふぅ……、聞き分けのないコたちですね……」

1人　ウェーブロードに残されたヒカリは空を見上げながらぽつりと呟き、かき消すように消えた。

57、孤独の光（後書き）

バトルは今回は軽めに行きました。あの激しいバトルの後にまた頑張っちゃうと疲れるので。

グレイの作るコピー体の内、彼の言う「マイナスの思念波」を使って作られたのはグレイ、ソプラ、マリーの3体のみで他にはこの先も出てこない予定です。あ、でも・・・いや、なんでもない。

対して「メテオGの記録」から造るタイプは、この小説の1章に出てきたアイツらと同じタイプなわけですが、もうこちらもあんまり出てこないかなぁw

あ、それとマリーも他の2人と同様にフルネームは「マリー・サリチュード」です。

次回、今章　最終回！

58、帰還（前書き）

L?、

repatriation

（8413）

58、帰還

「……」

ミソラ、マドカの少女二人組はポカンと口を開け、茫然と立ち尽くしている。シドウは白い目をしていて、ソロは眉間にしわを寄せて睨んでいる。そんな4人が見つめる先には……

「いやー、びっくりしたびっくりした～！　ゴメンね、大事（おおごと）にしちゃったみたいで」

……スバルが後頭部を掻きながら笑顔で謝罪していた。さっきの青白い光をもろに食らったのにケロッとしている。特にどこにも怪我はなさそうだった。

「ミソラちゃんも怪我がなくてよかったよ。あの時変身を解除して正解だったよね！」

「……」

ミソラの目が、前髪の陰になって見えなくなっていく。

「！？」

何かを感じ取ったのかマドカが急にぎょっとして、隣に立つミソラから遠ざかるように身を引いた。心なしか、ミソラからは何か負のオーラが見える気がする。

「……、スバルくん」
「は、はい」

ミソラの割には低い、彼女の声が聞こえて、スバルは緊張した面持ちで答えた。

「『はい』じゃな～いっ！！」
「うわ、ちょっ！」

急にギュイーン！　とギターの音が響く。ミソラがギターを素早く構えてパルスソングを放ったのだ。そのまま技を乱れ撃ちしながらミソラは叫ぶ。

「ひどいひどいひどい！　わたし、ものッすごく心配したのに！　スバルくんが死んじゃうかもとか、そのぐらい心配したのに！　なんでそんなケロッとしてるの！？　ひどいひどいひど～い！！」
「ちょ、ミソラちゃん、ゴメンって！　許してぇ！！」
「ミ、ミソラちゃん落ち着いて！　そのままだとミソラちゃんがスバルくんにとどめ指しちゃう！」

スバルがミソラから逃げ回り、ミソラがスバルを狙撃しながら追いかけまわし、マドカはなぜか2人が自分の周りをグルグルと走り回るものだから、キョロキョロ、オドオドしながら2人をなんとかなだめようとする。どことなくシュールな光景だ。

ミソラも、もちろんスバルが無事で嬉しいのだが（むしろこの中では一番喜んでいるのかもしれない）、あまりにもスバルがピンピンしているので、心配したことが逆に恥ずかしくなってしまうのだ。

「……相変わらず、平和な奴らだな」
「まぁ、それが奴らのいい所なのかもな……」

シドウとソロは遠くから高みの見物をしている。ソロは、そう言ったシドウを睨むように見つめた。

「……ところで、さっきのロックマンを襲った光、あれは……」

シドウはキッと眉を狭め、ソロに目を合わせた。

「あぁ、アレは高濃度のエネルギー体だろう。あんなモノが飛んできて背中に当たれば普通は電波人間と言えどデリートは確実だ」

ソロは同意と言いたげに目を細め、口を開く。

「しかし、ロックマン（星河スバル）はデリートどころか、むしろこの中で一番元気だ」

「そう、それも謎だ。……今回の任務、謎が多すぎる。例えば――」

「奴らの妙な変身、とかな」

シドウの言葉をソロが引き取った。シドウはうなずいてハンターを取り出した。

「そうだ。なんであんなモノが発動したのか、そもそもあの変身はどういうものなのか、など分からないことは――」

『そのことだけど、シドウちゃん！』

急にエア・ディスプレイがシドウのハンターから飛びだしてシドウの頭の高さで展開されると、ヨイリー博士を映し出した。

「な、なんでさっきから、こんなに俺のセリフが遮られるんだ……」

『……？　何が？』

「な、なんでもないですよ……」

ソロに続きヨイリー博士にも言葉を言わせてもらえなかったシドウはちょっと不機嫌気味に返事を返した。

「そ、それよりどうしたんですか？　なにか分かったんですか？」

『そうなの！　あの変身だけど、調べてみたら２００年前のロックマンが似たような変身を遂げていたの！』

「２００年前……というと、擬似人格プログラム、ネットナビのロックマン・ＥＸＥですか？」

『そう、そのロックマンが、電脳の破壊神と恐れられたフォルテと融合（クロス）することで生まれた、フォルテクロスロックマン……。それと変身の仕組みが酷似してる。でも、それと同じ、ってだけじゃあの二人の場合は片付けられない……』

「……と言うと？」

ヨイリー博士が意味ありげに言い淀んだので、シドウは続きを急かした。

『身体の融合、ってだけなら高（たか）が知れてる、ってことよ。変身中の２人を見ていたでしょう？　２人同時に同じことを喋ったように声が出て、思考パターンまで完全に同化してた……』

「つまり、精神の同調（ユニゾン）も同時に行っていた、と？」

シドウがヨイリーを真剣な眼差しで見つめ、ヨイリーは彼を見つめ返す。

『そう。身体の融合（クロス）と精神の同調（ユニゾン）を同時にやってるの。さしずめ、「クロスユニゾン」、「ハープクロスロックマン」ってところかしら。そして、その融合と同調のどちらが欠けても変身は維持できな

くなる。そのくらい精密で繊細な状態変化ってことね。その証拠に、ミソラちゃんは変身を解く意志は持ってなかったのにスバルちゃんの変身を解く意志のみで、変身は解けてしまった。2人の見解の相違が生まれるとすぐ変身は解除されるってことね。それこそ、思考パターンまで同化させるなんて、あの2人の絆の深さがあったからこそできた芸当だろうけど』

「……グレイとの共鳴を防ぐ目的のキズナリョクの上昇がそこまで行きましたか。しかし、なぜ急にそんな力が生まれたんでしょうか……？」

『まず前提として、あの力はスバルちゃんに生まれたものだってことが言えるわ。だからこそ、その変身の姿もロックマンをベースにしてそこにハープ・ノートを上書きしたようなものになっていると考えられる。でも、それ以上の詳しいことはこの遠距離からだと断定できないわ。帰ってきてから2人を検査する必要がありそうね』

「そうですか。あいつらが検査をツマラナイとゴネなければいいですが……」

シドウが口角を上げて笑い、ヨイリーが笑い返す。そんな2人に、

「マ、マドカどうしたの!?」

という声が聞こえてきた。

「『……？」』

声のした方を見れば、マドカが顔を真っ青にして口を片手で押さえ四つん這いになり、そんな彼女にスバルとミソラが駆け寄っていた。

「……！」

マドカはブンブンと首を振り、片手を振り回している。何かのジェスチャーなのだろうが、全く伝わらない。

「『船酔いした』！？　早すぎじゃない？」

「なんで分かるの！？」

ミソラがマドカの通訳をして、スバルがつっ込む。まぁ、船の上で真っ青な顔をして口を押さえていればどう見ても船酔いにしか見えないだろうが。

「わ、ちょ、ど、どうしよう？　あ、暁さん、助けて！」

困った時の暁さん頼みときた。シドウはその一連の騒動を見て、ため息をつく。

『ほら、行ってあげなさいな』

「博士、人ごとだと思って……」

『人ごとですもの』

「……、博士も意外と鬼畜ですね……」

ヨイリーはそれにいたずらっぽく笑い、「じゃあ、早く帰ってくるのよ！」と言って通信を切った。シドウはハンターをしまうと、フッと少し鼻を鳴らしながら口角を上げた。慌てふためく少女少年の「事後処理」に向かった。

「ふぅ……」

ミソラが船の甲板の柵に組んだ腕を乗せてさらにその上に顎を乗せてため息をついた。

「どうしたの、ミソラちゃん？」

ため息に反応してスバルがミソラの隣から問いかけた。ミソラは目の前に広がる大海原を見つめたまま答える。

「……ちょっと疲れちゃった……」

「まぁ、ずっと戦ってたもんね、疲れもするよ……」

スバルも疲れているのか声のトーンを落としてミソラに答えた。

現在、スバルたちの船は進路を変え、元いた港へと進んでいる。ここからはスバルたちにできる事はほとんどなく、あとは安全に船が運航できるようになった海域から、ムー大陸の残骸を回収するだけだ。そしてそれは任務の戦闘に入る前に海域の外に待機させてあった黒船と、それに乗る従業員（クルー）の仕事であり、スバルたちの仕事ではない。と、いうわけで彼らも港に戻るまでの間、退屈な時を過ごしているのであった。

「……なんか、任務前の出来事とか遠い昔みたいに感じるね……」

今までの凄まじい戦闘が嘘のような、静かで平和な今の状況に少し居心地の悪さを感じるスバルは、気を紛らわすかのように思わず心に思ったことを口にする。

「……うん。あのときのカモメ、どこ行ったんだろうな……」

ミソラはまるでその大空を飛ぶ鳥をさがすように水平線の彼方を見つめたまま少し寂しそうに答える。

「そういえば、スバルくん、さっきのこと……」

ミソラがスバルに意味ありげに目配せする。

「あぁ、あのことね……」

それを見たスバルも少し戸惑い気味に顔を上げた。

――数分前のこと、シドウがソロやヨイリーと言葉を交わしているとき。

「ちょ、ミソラちゃん、ゴメンって！　許してぇ！！」

「ミ、ミソラちゃん落ち着いて！　そのままだとミソラちゃんがスバルくんにとどめ指しちゃう！」

スバルを追いかけていたミソラは腕を伸ばして彼の服の襟を後ろからむんずと掴み、引きよせた。実際には体重差が少しあってスバルの方が重いのでミソラの身体が引きよせられたのだが、ミソラはそうしてスバルとの距離を一気に詰めると、両手で肩をがっちりと掴んだ。

「ミ、ミソラちゃん、なにもそこまで怒らなくても……」

「マドカは黙ってて！！」

マドカが駆け寄って相変わらずのオドオドした調子で仲裁に入ったが、ミソラにピシャリと言われてビクッと肩を上げて沈黙した。

「ミ、ミソラ、ちゃん……？」

スバルがミソラに肩を掴まれながら、不安げに彼女を見つめ返す。そんなスバルをミソラはじっと見つめて、おもむろに口を開いた。

「……スバルくん、わたしがなんで怒ってるのか分かってないでしょ」

「ウッ……」

図星だ。確かに自分は周囲を不安にさせ心配かけて、迷惑はかけた。でも、そこまで怒られるほどのことではないと思ったから、ミソラの怒りの理由が分からない。そもそも、自分は攻撃されたくて攻撃されたわけではないのだ。

「……なにが……、」

ミソラが唇を噛んで、悔しそうに声を漏らす。

「なにが、『ミソラちゃんも怪我がなくてよかった』なの!?　なにが『あの時変身を解除して正解だった』なの!!?　わたしが無事なら、自分がどうなってもいいの!?」

「ッ!!」

スバルが目を見開く。ミソラは彼女にしては本当に珍しい憤りをスバルにぶつけ続ける。

「まだ、スバルくんその辺のこと分かってないよね！　たとえわた

しが無事でも、スバルくんが無事じゃなかったら意味ないの！！
たとえわたしが無事でも、それでスバルくんになにかあったら、わたしがそれをよしと思うとでも思ってるの！？」
「……あ、その……」
「そんなわけない！！　そんなの、自分が傷つくことよりずっと辛いよ！！　わたしのせいでスバルくんが傷ついて、そんなのどれだけ自分を責めても足りないよ！！」
スバルは、ミソラの言葉である言葉を思い出す。
お前は、他人のため、友達のためと言って戦いに飛び込み、やられて自分を大切に思ってるやつに迷惑をかけて死ぬのがオチだ。他人のために戦うやつに限って、早死にする。それが残された奴にとって、どれほど辛いかも知らずにだ！　そう言う奴をボクは嫌と言うほど知ってる！　お前らみたいなやつらが一番気にくわねぇ！
「……ごめん……」
スバルは長い沈黙ののち、やっとのことで声を絞り出した。それを聞いて、ミソラは少し目を細めた。
「わたしは、とうの昔に決めたんだから。スバルくんの力になるって。だから、そんな風に言われちゃったら怒らないわけにはいかないよね」
まだちょっとトゲのある笑顔をミソラはスバルに向けた。スバルは、気持ちの整理がつかないのか、言葉が出せないでいた。
「ウッ！？」

唐突に声が聞こえて、スバルとミソラが振り向くと、マドカが口を押さえてかがみこんでいた。

「マ、マドカどうしたの！？」

――――そして、マドカを落ち着かせるためにバタバタしてて、今に至る、というわけだ。

スバルは真剣な眼差しをミソラに向けた。

「……ごめん、ミソラちゃん。キミの言うとおりだ。……本当に、ゴメン」

ミソラは一回深く瞬きをして人差し指をスバルの額に突き付けた。

「……分かればよろしい♪　でも、またあんなこと言われちゃったらまた怒らなくちゃいけなくなっちゃうよっ？」

いたずらっぽい小悪魔のような笑みを浮かべてミソラは言う。スバルはフッと笑った。

「以後気を付けます……」

「……うむっ！　良きに計(はか)らいたまえ！」

冗談っぽく会話を交わした。スバルとミソラは自分たちで言っていておかしくなって、仕舞には声を出して笑いあってしまっていた。

そんなひと時も一段落したころ、甲板の柵によりかかって海を眺

めるという暇つぶし行為の真っ最中である2人の背後で、ぎぃ、と何かが軽くきしむような音が聞こえた。

「あ、暁さん！」

2人が振り返ると、シドウが疲れたような顔を浮かべて甲板に出てきたところだった。

「マ、マドカはどんな感じですか？」

ミソラがシドウの元に駆け寄って聞く。シドウはあぁ、と気さくに答えた。

「とりあえず、船室に寝かせてきた。安静にしてれば大丈夫だろ」
「よ、よかった……わたし、ちょっと見て来ま――――」
「い、いや、やめておけ、それしたらアイツの女としての何かが壊れそうだ」

シドウがジト目でミソラを思いとどまらせる。ミソラもウッと息を詰まらせてそれ以上詮索はしなかった。

「じゃ、じゃあ暇だし任務前の船内散策の続きでもしようよ、スバルくん！」
「……」

シドウが上へ連絡するから、と再びどこかへ行ってしまったので、ミソラがスバルを振り返って誘う。しかし、スバルは険しい顔をして眼下に広がる海を見下ろして、何か考え事をしていた。

――侵食ウィルス。それに身体も心も奪われたウィザードたち。ムーの電波体たちに聞かされた「継承者」のこと。かつて起こった、ムー大陸での内乱。グレイの能力と、自分の中に生まれつつあるもう1つの能力……

今回の任務で、分かったこと、知ったこと。感じたこと、起こったこと。いろいろありすぎて、スバルは頭が混乱していた。自分はいま、何を感じるべきなんだろう？　自分はいま、何を考えるべきなんだろう。

「……スバル、くん……」

そして、そんなスバルの気持ちを察したミソラは、憐れむように目を細める。ミソラにとっても、今回は悲しみも辛さも困惑も感じずには居られなかった。

でも。そんなミソラの中にも、1つの決意が生まれていた。自分で決めたこれだけは、何が何でも貫き通す。

わたしも一緒に闘うから!!　もう、スバルくん1人を犠牲になんてさせないから!!

「スバルくん!　もう、いつまでクヨクヨしてるの？」

「ミ、ミソラちゃん……」

ミソラが声をかけると、スバルはようやく、どこか不安そうな顔を上げた。ミソラは人差し指でスバルの頬をふにっと指しながらいたずらっぽく言葉を続ける。

「も〜、また1人で考え込んじゃって……。わたしもいるって言っ

たでしょ？　わたしで良ければ聞くよ？」
「……」

スバルは戸惑い気味にミソラを見つめ返している。ミソラの提案を飲むかどうか迷っているのだろう。そんな気持ちを察してか、ミソラはふぅ、と軽く息を吐いて指をスバルの頬から離し、真っ直ぐに自分の緑の瞳をスバルの眼にあわせた。

「……気持ちは分かるよ。いろんなことあったもんね。不安な気持ちになって当然だと思う……。でも、今は何も分からなくても頑張ればきっと見えて来るものがあるはず。だから、何も怖がることはないと思うよ」

スバルはミソラを戸惑い気味に黙って見つめていたが、やがてコクッと頷いた。

「……うん、ありがとう、ミソラちゃん……。頑張ってみるよ……」
「うんっ！　ほら、元気出そうよ？」

ミソラがスバルを、顔色を窺うように覗き込む。スバルはさっきより力強く頷いてみせた。

「うん、もう平気だよ。それじゃ、散策行こうか？」
「そう来なくっちゃ！　……あ、でも待って、その前に、さっきから気になってたんだけど……」

ミソラは急に何かを思い出し、悩むように目を伏せた。スバルはそれを見て眉をひそめて聞く。

「どうしたの、ミソラちゃん？」

「あ、あの、さっきスバルくん船の下の海を見下ろしてたけどさ……」

「高い所、怖いんじゃないの？」

「……」

スバルの顔が、カメレオンの擬態（ぎたい）のごとく肌色から青に鮮やかに変色した。考えに集中しすぎて気にならなかったのだが、一気に恐怖がよみがえる。そして、

「う～ん……」

そのまま目を回して倒れ込んだ。

「え、ちょっとスバルくん！？　お～い、しっかり～！！」

『思いだしただけで気絶とかどんだけだよ……』

『ミソラも言ってあげなきゃよかったのに……』

ミソラが焦ってスバルに駆け寄り、ウォーロックとハープはハンターからあきれた声を出す。どうやらスバルはこの先どうなるかを怖がる以前の問題のようだ。

船の中の部屋や廊下の天井はその船の規模にもよるが、大抵は身

長の高い人なら頭を擦ってしまいそうなくらい低い。しかし、豪華客船だったものを改造して作られたこの船は、普通の家屋程度の天井の高さはある。その船室の1つからは、物音が聞こえていた。その物音は……

「うっぷ……」

思いのほか汚いので自主規制。

その部屋では、マドカがベッドに腰掛けて、よくある水色のポリバケツに首を突っ込んでいた。マドカがなにをしているのかは彼女が先ほど船酔いした事実から察してもらうとして、その隣にはドルフィンがその光景に顔をしかめながら浮いていた。

『マドカ……まさか乗り物までダメだったとは……』

若干あきれ気味にドルフィンが声をかけた。マドカはバケツから顔を上げて口をティッシュで拭い、汚物の入ったバケツをベッドの傍らに置いて横になった。

「うん……昔は全然平気だったんだけど、飛行機事故に遭ってからは本当にダメなんだよね……」

マドカは横たわりながら、情けなさそうにしゅんとして答えた。まだ顔色が悪く、頬は青白く見えた。

『でも、ウェーブライナーは普通に乗ってましたよね？』

「ウ、ウェーブライナーはほら、ほとんど揺れないから……」

マドカは言い訳がましくそう言ってから喉の辺りを左手でさする。

「うぅ、横になっててもまだ気持ち悪い……」

ドルフィンは、心底気分の悪そうな表情のマドカを見つめていたが、やがて彼女が喉をさするのに使っている左手の甲を見て、悲しげに目を細めた。

『……で？　いつまでその口実をつき通すつもりですか？　その酔いは船だけのせいじゃないんでしょう？』

「！」

ドルフィンにそう言われたマドカはわずかに目を見開き、自身のウィザードを見つめた。そんなマドカの様子を見て、ドルフィンは細めた眼のまま彼女を見つめ返して続けた。

『……あなたの左手をみれば分かります』

言われたマドカは、バッと素早く左手を右手で持って見つめた。彼女の左手の甲にはくっきりと、痛々しいミミズ腫れが出来ていた。しかもその形がまるっきり異常で、Ｕの字を９０度反時計回りさせて、その描いている弧の間に一本線を入れてつっかえ棒にしたような形状をしている。見方によっては尋常じゃないほど弧がしなってカーブした弓のように見えなくもない。

マドカはそのミミズ腫れを右手の指でなぞりながら悲しそうな目をしてそれをみつめた。

「……あぁ、やっぱりこの傷、出ちゃってたか……。うん、きっとこれのせいで身体のいろんな機能が低下してたせいでもあると思う」

『やっぱり……。……それを、ミソラ様たちに言う勇気は、まだありませんか？』

ドルフィンの問いかけに、マドカはわずかに首を動かして頷く。

「ディーラーのことは言えても、これは言えない……。怖いの……」

『ミソラ様たちは、そんなことで軽蔑するような人間ではありませんよ……』

「分かってる……！　分かってるけど……！！」

マドカは右手で左手を包みこむようにして握り、その両手を額にコツンと付けた。目をぎゅっと閉じて声を震わせている。

「これまでディーラーのこと隠してて、まだ別に隠し事してるのがずるいってことも、分かってる……。でも、ダメなの……怖いの……これを知った人たちのわたしを見る目を思いだすと……怖いよ……」

ぽろぽろと、マドカの目じりから雫がこぼれる。思いだすだけで涙が流れるほどの恐怖が、彼女を包みこんでいた。マドカはボロボロの声で、呟く。

「わたしはヴィクタロイドでした、なんて言えないよ……」

消え入りそうな声で呟くマドカを、ドルフィンはただ憐れみの眼で見つめるしかなかった。

今までの一生で一番長かった1週間が、ようやく幕を閉じた。しかし、この1週間はまだ深い闇への入口でしかなかったと、彼らはのちに思い知ることになる。

さらに深い闇が、動き出そうとしていたのだ。そして、徐々に隠（ブ）された謎（ラックボックス）が紐解かれていくこととなる……。

4章　滅びた文明の逆襲

第1部　自分との戦い

終

58、帰還（後書き）

ようやく、この章終わった……
……思えばこの章、半年以上かかったｗｗｗ

かつてはスバルがミソラを説教したので、今回はその逆をやってみました。やっぱこの2人はただベタベタ、イチャイチャするだけの関係にはなって欲しくないものですね。

なんだか、マドカが女の子らしさをどんどん失っていく気がするのだが気のせいかｗｗ
ちなみに、マドカは左手が利き手です。

ちなみに、ここまで出てきたキャラの力の序列は現時点では、
ハープクロスR≧ヒカリ＞グレイ＞スバル　マドカ≧マリー＞ミソラ＝ソプラ
って感じですね。

さて、ここまでの話でグレイを語る話は一旦お休みとなります。いや、まだ出番も伏線もありますが、今までよりは少なくなると思います。そして、ここからはマドカを深く語る話に入っていきます。ようやく本筋に入るかな？　とか言ってみる。オリキャラもかなり増えていくし。

最近はこの小説にしては比較的早めの更新が出来ていたと思いますが、この先かなり更新ペースが遅くなることが予想されます。リアルの私がいよいよ忙しくなってくる感じなのでね・・・ｏｒｚ

オリジナルキャラクターファイル　グレイ・ソプラ・マリー

グレイ・サリチュード《Ｇｒａｙ・Ｓｏｌｉｔｕｄｅ》
身長：１４５ｃｍ
体重：３９ｋｇ
ウィザード：なし
性格：残忍、好戦的

スバルと同じ姿を持った、謎の少年。ほとんど見分けがつかないほどそっくりではあるものの、ビジライザーやペンダントをしていなかったり瞳が紅く輝いていたりと外見に相違点も多い。また常に不気味な笑顔を浮かべ、性格は絆を大切にしているスバルとは正反対で残忍で非道。

また、その能力もまた絶大であり、無数の刀を出現させて襲わせたり強固な壁を作ったりでき、その強さは現在のロックマンを超える。人間の姿のままでも能力をフルに使うことができ、そのままでウェーブロードに立つことも可能。一応電波変換もでき、ノイズチェンジやファイナライズまで使用可能という万能さ。その能力は貰い物でムー大陸の技術で作られたものらしいが……？

人間やウィザード、電波人間をコピーすることができ、その際に使われるモノによってメテオＧの記録（ログ）から造るタイプと「マイナスの思念波」から造られるタイプに大別できる。後者の例はグレイ本人とミソラのコピー「ソプラ」、マドカのコピー「マリー」の３体で、彼女たちと行動を共にしていることが多く、過保護気味な一面が垣間見える。

一連の騒動を通して何かを探しているらしい。

――――――――――

さて、マドカに続くオリジナルキャラクター紹介です。マドカよ

り早く出てきてるグレイさんですが、作者の不手際でこんなにも遅い紹介になってしもうたｗｗ

　このキャラは、役割としては悪役として生まれた……のは言うまでもありませんね。悪役は最初、複数の悪役にしようかとも思ったのですが、他の流星２次作品との差が欲しかったので、あんまりいない一匹狼のような感じの敵にしました。そしていつでもキャラを作れるようにして、使い捨てる感じで組織立った敵にはしないようにしました。

　名前は、実は最初「ネビュラグレイ」から取ったのが本当のところです。でも、「グレー」、つまり灰色、という意味もあります。後付けですがなにか？（↑開き直り）　サリチュードっていう苗字は結構最近命名しました。後付けですがなにか？（↑　ちなみに電波変換前も後も名前は同じグレイです。当初はコピーで作ったウォーロックがいてそいつと電波変換することでロックマンと同じ姿になっていましたが、それは文章の改訂と共に廃止となりました。今後はどんどん電波変換しなくなっていくと思います（笑）

　スバルという元のキャラがいるため、マドカのようなイメージカラーだのなんだのは考えずにほぼ即決で決まりました。一応私が初めて作ったオリキャラなんだけど、コイツは果たしてオリキャラと言い切って良いものなのかどうか……？

　あと、初登場シーン（６、忍び寄る影）を読めば分かりますが、徐々に口調が変わって行って今の口調になったのは気付いたでしょうか？　あれもちょっとした狙いがね……ｗ

ソプラ・サリチュード《Ｓｏｐｒａ・Ｓｏｌｉｔｕｄｅ》
身長：１４３ｃｍ
体重：＜ｃｅｎｓｏｒｅｄ＞
ウィザード：なし

性格：マイナス思考
　グレイによってマイナスの思念波を元に造られた、ミソラのコピー。ミソラと比べると物静かな性格で、涙腺が弱くちょっとしたことで泣きだしてしまう。かつての、母親を失って心を閉ざしていたころのミソラの性格を引き継いでいる。ミソラとは異なり、ギターは持ち歩いていない。

――――――――――――

　と、いうわけで続きまして、ミソラのコピー、ソプラです。名前の由来は以前の後書きに書いたとおり、「ソプラノ」から。当初の、母親の死を嘆いていたころのミソラの性格を引き継いでいる、と言う割には元気な性格になってしまっているというｏｒｚ
　この子は当初はグレイに常に追随しているだけの子で性格もグレイを女性化したような残忍な感じの性格だったのですが、設定の変更により現在の感じに相成りました。
　今は亡き「エンジェルの翼」の主人公に途中からなる予定でしたが、「エンジェルの翼」の展開は全部この「プレアデスの絆」本編に吸収させてしまいましたｗｗ　つまり、この小説内で彼女が主人公格になる時が……来るかも？
　ムー大陸編の最後でカモメを可愛がってるシーンがありましたが、あの後連れ帰ってそのまま飼ってしまってます（笑）

マリー・サリチュード《Ｍａｒｒｙ・Ｓｏｌｉｔｕｄｅ》
身長：１４３ｃｍ
体重：３３ｋｇ
ウィザード：なし
性格：おてんば、わがまま、わんぱく、天然

血液型：A型
誕生日：12月23日
　グレイによってマイナスの思念波を元に造られた、マドカのコピー。マドカとは対照的に元気で活発すぎる性格で、グレイやソプラに呆れられるほどである。マイナスの思念波から造るという特性上、かつてのマドカの性格を引き継いでいるらしい。なぜかもの凄い怪力の持ち主である。もの凄く遊びたがり。要はいろいろもの凄い。

――――――――――――――

　最近登場した、マドカのコピー、マリーさんです。彼女の一番の存在意義はオリキャラのコピーも造ることで、グレイやソプラといった既存キャラの容姿を使い回した感を緩和してもらうことにあります（汗）　でも、マドカの過去をチラつかせるのに一役買ってくれたかもｗ　名前は完全に適当で思いつき。その性格上、完全にネタキャラでありギャグキャラですが、この先意外な活躍をするかも？　っていうか、マドカ本人と会話したらどうなるんだろｗｗ

オリジナルキャラクターファイル　ヒカリ

綾原（あやはら）ヒカリ
身長：１４７ｃｍ
体重：３８ｋｇ
ウィザード：なし
性格：穏やか、冷静

神出鬼没の謎の少女。腰まで届く長いピンク色の髪に、濃いピンクのセーター生地の服を着て、白いスカートを履いている。身長は比較的高く、スバルと同年代（小学６年生）の女子なのにスバルより身長が高い。高い所と、自然と戯れる事が好き。

スバルやミソラとは一切面識はないが、彼らの言動を見ているようで、彼らの肩を持つような発言もする。グレイとは面識があった模様。

ただの人間なのに戦闘能力を持ち、その実力は電波人間を超える。なぜそのような能力を持ち得ているのかは不明。

自分で自分に使命を課している。その使命は、「この世の行く末に関わる者の力量の見定めと、監視、保護。及び『この世の行く末』を見守ること」

＞ｉ２２８３７―１３９６＜

――――――――――

はい、未だに謎多き少女、ヒカリさんのターンです↑

グレイがスバルと同じ容姿を持つ、ということを考慮に入れれば、初めて私が作った、完全オリジナルキャラ、と言えるでしょう。

当初はこのキャラは第２の主人公、というコンセプトのもと作ったキャラです。同時に第２のミソラ、という謎のコンセプトもあっ

て、見た目もミソラより髪の色が淡いピンクになった程度でほぼ同じだったんです。そこからいろいろ設定を加えてそれと同時に容姿も手を加えて、現在の形になりました。今のピンク色の髪はその名残ですね。その第２のミソラ、というどんだけミソラ好きなんだって言いたくなるコンセプトはソプラに引き継がれました。ちなみに彼女の髪の色のことをよく「いちごミルク色」って描写しますが、それは本当にあんな感じのピンク色なんです。独特な色の表現を使うことによって、「この色の髪の女の子が出てきたらその子はヒカリだ」みたいな感じで認識しやすくなるかな、と思ったので。

スバルやミソラと同じ小６です。えぇ、あんな身長高くても大人っぽさバリバリでも一応小６です。ウィザードも持っていません。ハンターＶＧは持ってますけど。

このキャラは、２２話、５１話に出てきた女の子と同一人物です。特に２２話の方では文章改訂に伴って彼女の生い立ちなどの描写をかなりの数入れました。文章改訂前しか読んでない人でヒカリの謎について考察したい人はぜひどうぞｗｗ

ギャラリー（前書き）

ここでは、この小説関連のイラストを載せて行きたいと思います。
この先私が趣味で描いた挿絵にはならないイラストや、私以外の方が描いて下さったイラストなどをここに掲載していく予定。

「イラストなんて興味ねぇＹＯ！」って人はこのページはスルーで構いません。

新しくイラスト描くたびに更新していくため、基本新着順です。

ギャラリー

＞ｉ２２８３７―１３９６＜
→綾原ヒカリ
　ヒカリさんのイラストです。何気にロングヘアのサラサラ感を出すのに苦労しました。
っていうか、バンプレの女オリキャラは「～さん」って呼ばれるキャラばっかりですねｗ

＞ｉ２２０４７―１３９６＜
→新章用扉絵
　新章ではマドカの秘密について掘り下げていくつもりなので、それになぞらえて今回はダークなイメージでマドカを描いてみました。今まで描いてきたマドカの中では個人的に一番気に入っています。

＞ｉ２０７２０―１５６７＜
→プレアデスの絆　新扉絵（？）　（ａｎｔｉｎｏｕｓさん）
　最初はハープクロス単体だったのがいろいろ加えていくうちにこうなったんだとかｗ　ロックマンにハープ・ノートに、マドカに背景の鏡に、オリジナルのロゴまで入っちゃって、私の小説の特徴が抑えられており、ここまで素晴らしく描けるａｎｔｉｎｏｕｓさんにはただただ尊敬するばかりですな・・・
　マドカだけ電波変換してないのも、この先の明かす予定の展開にはかなりマッチしてるな～と思ってみたり。

＞ｉ２０６７４―１３９６＜
→ハープクロスロックマン
　５５話新登場の変身。ロックマン自身の変身ではなく、ロックマンとハープ・ノートが同調・融合した姿。女の子が混ざってるとい

うことで、ボディラインも丸みを付けようと思ったけど、無理でしたw　本当にちょっとだけだけど、歩き方が内股になっているノデス。センスの無さと雲の描き方の下手さはご愛敬☆
　男＋女ということで、オカマかオナベか・・・おや、誰か来たようだ

＞ｉ１８５５８―１３９６＜
→ミソラ&マドカ
　ようやく描いた、ミソラとマドカの絵。それなりに二人の個性を出せたと思っていますw　だんだん、色の塗り方分かってきた気がする。

＞ｉ１８３９０―１５６７＜
→アクセス１００，０００件記念イラスト（ａｎｔｉｎｏｕｓさん）
　ａｎｔｉｎｏｕｓさんが描いてくださった、記念イラストです。本家よりもマドカが可愛いという、このすごさ。周りの文字もうれしいです。

＞ｉ１６７１５―１３９６＜
→小説扉絵
　ユニーク２０，０００人&ＰＶ１００，０００アクセス記念・手直し終了記念・５０話突破記念イラスト。ロックマンの周りに降ってるのは鏡の破片で、そこに各キャラが映っているイメージです。なんども言いますが、その周りのキャラが下手過ぎるｏｒｚ　ロックマンの瞳の色にも注目して欲しいです。

＞ｉ１８３７５―１５６７＜
→水瀬マドカ（ａｎｔｉｎｏｕｓさん）
　上の記念イラストのおまけとして描かれた、顔アイコン風イラスト。上目遣いがたまらないですねw

＞ｉ１２８０８―１３９６＜
→水瀬マドカ（パーティドレス）
　ｔｗｉｔｔｅｒの診断で出た課題に応えて描いたやつ。特にパーティドレスについて調べずに描いたので適当感満載ｗｗ

＞ｉ１１４５５―１３９６＜
→タイトルロゴ
　タイトルロゴ、作ってみたはいいけど下半分の「プレアデスの絆」がワードで作ったのがバレバレの、スバラシイ作品です（笑）

＞ｉ１８３７６―１５６７＜
→水瀬マドカ（ドット）　（ａｎｔｉｎｏｕｓさん）
　上のマドカの顔アイコン風イラストの顔アイコン（↑日本語崩壊）。　ちゃんと流星のゲームに使えるようになってるらしいですｗ
私も暇なときに打ち込んでみようと思ってますｗ

＞ｉ１１０６９―１５６７＜
→水瀬マドカ（ドット）　（ａｎｔｉｎｏｕｓさん）
　最初にａｎｔｉｎｏｕｓさんが描いてくださったマドカ。あとから本人が「完成度が低かった」と言っていますが、そんなことないと思うなぁ～（笑）　ちなみに、長い期間、ｔｗｉｔｔｅｒとみてみん、Ｓｋｙｐｅでの顔アイコンとして使わせていただいたので、このアイコンにはかなり思い入れがあります。

＞ｉ９３７７―１３９６＜
→水瀬マドカ＆ドルフィン
　上までの数あるマドカのイラストの原点となっているこの絵ですｗ　そういや、バイオリン弾きなんて設定あったなぁ・・・（↑おい）　感想の方で、マドカは皆さんに結構気に入ってもらえてるの

がうかがえますが、この絵を描かなかったらあそこまではなってなかっただろうな～。　ちなみに、ドルフィンのデザインはほとんど何も考えずにこうなりましたｗｗｗ　容姿の決定では一番早かったキャラかもｗｗｗ

＞ｉ９３７８―１３９６＜
→マリーン・ドルフィン
　略してマリドル（笑）　未だにこの絵が気にいらない・・・　なんだよこのセンス・・・

＞ｉ９３６１―１３９６＜
→スバル＆ミソラ
　実質、生涯で私が初めて描いて公開したイラスト、となるでしょうか。正直このイラストを挿絵とした場面は別に挿絵がある必要性が全く無かったりするｗｗｗ　最初に描いたせいか、タッチがだいぶ違いますねｗ

59、悪夢の始まり（前書き）

すみません、もうちょっとで1カ月空けるところでした・・・ｏｒｚ

今後は、更新する時は土曜１８時更新にします。これは執筆を怠けたいのではなく、オリジナル小説を書き始めるが故の処置です。

あと、どうでもいいかもしれないけど、この小説の略称は「バンプレ」でお願いします。英語名から取って、「バンド　オブ　プレアデス」を略してバンプレですｗ　感想などでもどうぞお使いください（笑）

そして、いよいよこの小説もＰＶ２００，０００アクセス達成しました！　これからもよろしくお願いします！

Ｌ?、

Ｓｔａｒｔ　ｏｆ　ｎｉｇｈｔｍａｒｅ

（２９７２）

59、悪夢の始まり

全てが崩壊した世界で、少女は泣いていた。

本来なら整然と並んでいるはずの座席は横倒しになったり背もたれが吹っ飛んでいたりして見る影もない。座席の上に設置された荷物入れも蓋が壊れて、中にしまってあった乗客のアタッシュケースが床に散乱している。その床は斜めになって歪み、ところ構わず人が倒れているその様は、さながら戦場のようであった。事故のせいで何かに引火したのか、その少女の背後ではメラメラと業火が揺らめいていた。

「う……うぅぅ……げほっ、ひくっ……」

少女はしゃがんで目をこすりながら、嗚咽を漏らしている。ときどき咳をしているのは、事故の2次災害で巻き起こった火災のせいで、その炎に酸素を奪われ、明らかに有害な煙が充満しているからだ。密閉空間と化したその場は、ほぼ唯一生き残った少女の命をいつ奪っても不思議ではない状況であった。少女はぼろぼろと涙を床に落としながら、何もすることもできずにその場で泣き崩れるしかなかった。

なんでこうなったんだろう、と彼女は泣きながら思う。数時間前、いや、つい数分前までは楽しげに語らい合っていた人たちが、今はまるで廃棄されたマネキン人形のように床に投げ出され、転がっていた。額を切って血を流している人もいれば、腕を切って血を流す人もいて、酷ければ重いアタッシュケースの下敷きにされて床に放射状に血を撒き散らして絶命している人までいる。小学1年生になったばかりの少女には刺激の強すぎる代物（しろもの）ばかりが、その空間には散乱していた。

早すぎる永遠の別れと、事故への恐怖、精神的に耐えられない光

景、そこに酸素不足と有毒煙が相まって、少女はただただ、泣く事しかできない。彼女も腕を所々切っており、手も顔も泥や煤で黒く汚れ、着ている水色のワンピースも同様に汚れてボロボロであった。でも、彼女の頭にそんなことを気にしている余裕などなく、恐怖と絶望の二つの感情のみが彼女を支配していた。

痛い、怖い、熱い、苦しい、暗い、辛い、寂しい。

ありとあらゆる苦痛で頭がぐちゃぐちゃになり、何をすれば自分は救われるのか、どうすればみんなを救えるのかも分からず、紅蓮と漆黒に塗りつぶされた世界で、その少女は泣きつぶれていた。

「う……こわいよ……助けて……ママ……」

泣いて泣いて泣きわめいて泣き崩れて、がらがらになった喉から声を絞り出す。やはりその喉から出る声も、か細く弱々しく、とても聞きとれるものではなかった。

「……ッ！？」

と、彼女は急に息を飲んだ。

（ママはどこに行ったんだろう！？）

彼女は目を見開いてがばっと顔を上げ、きょろきょろと辺りを見まわした。辺りは暗かったが、炎が発する光でそこそこ色が判別できる程度には明るい。周りに倒れている人たちの中に母親がいれば、その少女と同じ鮮やかな青い髪が目立ってすぐに見つかるはずだ。しかし、見回しても見当たるのは血を流して横たわる亡骸のみ。

少女は、立ち上がろうとしてバランスを崩して床にくずおれた。上体を起こして脚の方を見ると、左足が変な方向に曲がっている。幼い少女が見てもそれは骨折していると分かった。彼女が脚に痛み

を感じていないのはアドレナリンの恩恵に他ならない。
少女は横にあった酷くひん曲がった座席を両手で掴み、杖を使って立ち上がる要領でなんとか右脚のみで立ち上がった。そして、肉のみで繋がっている左足を引きずり、壁や座席に両手ですがりながら歩き始めた。途中、何度も転んで、何度もすりむいて、口の中が血の味しかしなくなって、それでも彼女は歩くのを止めようとはしなかった。
彼女を駆り立てるものはただ1つ、母親を見つけること。彼女の頭の中には今、それしかなかった。いろいろな苦痛で頭がごちゃごちゃにかき乱され、気が狂いそうなほどの闇に覆い尽くされていたのだから、少しでも見えた希望の光にすがりつくしかなかったのかもしれない。「辺りに死体が見つからないのなら、逆に言えばまだ生きているかもしれない」。そんな希望に少女は突き動かされ、きょろきょろと青い色を探し求めながらよろよろと歩き続けた。
いつまで歩いても母親は見つからず終わりも見えず、少女は無限回廊に閉じ込められたような孤独感と絶望感に襲われた。火災の熱で嫌な汗が肌から浮き出て流れ　傷口に染みるがそれも気にせず、ほぼ片足だけで歩き続けたせいで元々有毒ガスに奪われていた体力はさらに低下し　脚が震えているがそれすらも気にも留めず、酸素が奪われた状態でさらに動き回ったため息が上がって　はぁはぁと吐息を漏らし意識がもうろうとするがそれすらも無視して、彼女は探し続けた。

カタッ、とかすかな音が少女の耳に聞こえ、彼女は音のした方を振り向く。
少女が今現在寄りかかっているモノは座席でも壁でもなく、引き戸だった。赤と青の色をした男女が並んでいるマークが見えて、少女はそれがトイレの扉であることを察知した。もしかして、と思って彼女は扉を開けようとするが、動かなかった。扉が事故の影響で構造的に壊れているのだ。

「う……くぅっ……！！」

少女は片足で踏ん張り、全体重を引き戸に乗せる。全体重とは言っても小学1年生の女の子だ。力を精いっぱい振り絞っても扉は全く動かない。まして、その中に母親がいる保障もない。それでも、彼女は扉を押し続けた。少しでも母親がいる可能性がある場所なら、どこでも行く。絶対に見逃すわけにはいかなかった。

少しずつ引き戸がずれて隙間が産まれ、徐々に大きくなっていく。全体の3分の1程度開くと、少女は中に頭を突っ込んだ。まだ小さい彼女の身体はその程度の大きさの隙間で十分に入り込めた。

覗き込むと、そこには青い長髪の女性が頭から血を流して横たわっていた。彼女の着ている清楚な白い服には頭から流れ出た血が染みを作っている。

「ママッ！！」

しかし、確実にそれは少女が探し求めた母親であった。少女はトイレの中に入ると母親に駆け寄った。

「ママ！　ねぇ、ママッ！！」

一生懸命母親を揺さぶる少女であったが、母親は全く動く気配がない。それどころか、触れた腕が驚くほど冷たかった。少女は、顔面蒼白になって、その女性に訴えかける。

「ねぇ、起きてよ！　冗談でしょ！？　ママッ！！」

何度叫んでも、何度揺らしても、全く動かない。

「起きてよ……やだよ……ね……ぇ……っ」

だんだん声が小さくなり、同時に頭の中がジンジンと熱くなる。必死になることで止まっていたモノがぶり返し、身体の奥からこみ上げて来て目から溢れた。少女は徐々に頭を落とし、母親の手を握りしめて顔をうずめた。

「パパも……ルミカも死んじゃったのに……これでママまで死んじゃったら、わたし……っ……」

冷たい手をぎゅっと握りしめながら、彼女は泣き崩れる。泣いても泣いても、彼女の涙は枯れることは無かった。

２２０５年５月５日１２時３７分―
バミューダラビリンス―
大西洋沿岸に飛行機が墜落。乗員乗客１２４人中１２２人死亡、重軽傷２人の大惨事となった。この事故も、バミューダラビリンスの存在を世に知らしめる、数ある原因不明の事故の１つとして処理されることとなった。

出会いは偶然、別れは必然、と言うのなら。その少女の別れもまた、運命だったのだろうか。

水瀬円加（マドカ）の運命づけられた悪夢は、その事故を序章に始まったので

ある。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8719l/

流星のロックマン　プレアデスの絆

2011年8月30日11時34分発行